

上信越自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書 6

— 長野市内 その4 —

**松 原 遺 跡**

古代・中世

本 文 編

2 0 0 0

日 本 道 路 公 団  
長 野 県 教 育 委 員 会  
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

上信越自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書 6

——長野市内 その4 ——

**松 原 遺 跡**

古代・中世  
本文編

2 0 0 0

日 本 道 路 公 団  
長 野 県 教 育 委 員 会  
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー





1



2

松原1号墳出土金銅装大刀・銀装大刀



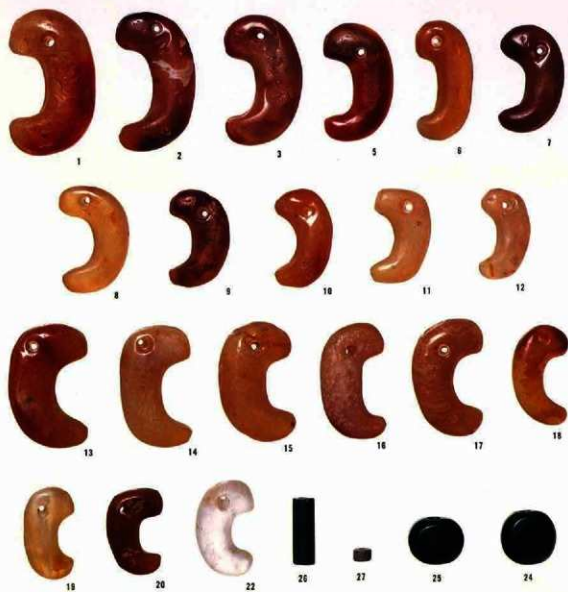
84

85

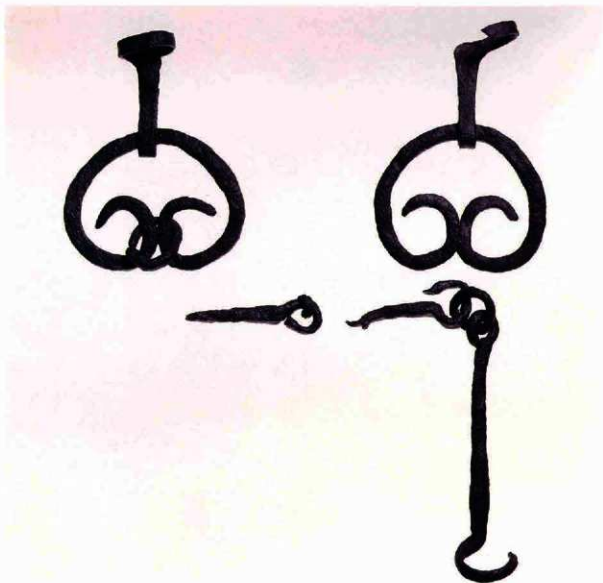
松原1号墳出土金銅製鞍金具



松原1号墳出土耳環



松原1号墳出土石製玉類



杏葉櫛



容鋳型



上：扉金具鋳型 下：鹿角製サイコロ



銅

# 序

本書は、上信越自動車道建設に伴って実施された松原遺跡の発掘調査報告書であります。松原遺跡は、縄文時代から中世に至る複合遺跡で、平成元年度から3年間発掘調査されましたが、本書はそのうち古墳時代から中世にかけての調査結果を収録致しました。

高速道路が長野盆地を横断するに至り、沖積低地の遺跡が本格的に調査されるようになり、何面にもわたって重層する生活面に、住居址を初めとする様々な生活の痕跡が密集する遺跡に遭遇することになりました。とりわけ、ここに報告する松原遺跡の古代の集落は、当センターにとって最大規模で最も苦勞した遺跡と言うことができましょう。

長野インターチェンジのすぐ東隣に位置する松原遺跡は、千曲川の沖積低地に立地する弥生時代～古代・中世の大規模遺跡として当初より注目されておりました。調査に着手してからは、予想に違わぬ古代遺構の密集ぶりに加えて、仏具である磬の鋳型を初めとする希少価値のある遺物が多出し、傑出した集落であることが判明しました。さらに、沖積低地の背後の山麓斜面には、横穴式石室をもつ古墳が構築され、中世に至り五輪塔を伴う墳墓群が形成されるなど、墓域としての空間が、時代を越えて意識されていたことが明らかとなりました。こうした生活の痕跡・墓制の在り方に加え、各時代の遺構から出土した多くの資料は目を見張るばかりで、早々の公表が待ち望まれておりましたが、新たな知見を得る分析ができ、今後の研究に大いに役立つ結果を提示できたと自負しております。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業・本書の刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただきました、日本道路公団名古屋建設局、同東京第二建設局、同長野工事事務所、長野県高速道局、同長野高速道事務所、長野市教育委員会など関係機関、対策委員会を初めとする地元の方々、発掘作業や整理作業にご尽力いただいたの方々、直接ご指導を賜った長野県教育委員会に心から感謝申し上げる次第であります。

平成12年3月30日

長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間鉄四郎

## 例 言

1. 本書は長野県長野市松代町東寺尾北堀ほかに所在する松原遺跡（BMA）の発掘調査報告書のうち古代・中世についての調査結果を収録したものである。
2. 本書は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6 長野市内その4 松原遺跡—古代・中世—』全2分冊のうち、第1分冊 本文編である。
3. 調査は、上信越自動車道建設工事に伴う事前の記録保存のための調査として、長野県教育委員会の委託を受け、県教育委員会の指導のもとに、財団法人長野県埋蔵文化財センター及び財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施したものである。
4. 発掘調査は平成元年度から平成3年度の3年次にわたり実施され、整理作業は平成4年度から11年度までの8年次にわたり実施された。
5. 本遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』6～15で報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、古代・中世に関してのものは、本書をもって最終的な報告とする。
6. 本書で使用した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、以下の地図を使用した。
  - ・建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000）：長野・須坂・信濃松代・菅平・信濃中条・稲荷山（平成5年発行）
  - ・長野市発行の長野市都市計画図（1：2,500）：長野E-13（Ⅷ-HD 83-4）  
長野F-13（Ⅷ-HD 83-3）
7. 写真図版掲載の空中写真は、国土地理院撮影の空中写真（CB-65-6X C10-11）を使用した。
8. 本書の執筆及び刊行に関する分担については、第1章第2節3に掲載した。
9. 引用・参考文献は一部を除いて巻末に一括掲載した。
10. 本書の編集は上田典男が行い、百瀬長秀が全体を校閲した。
11. 古代・中世に関わる発掘調査ならびに報告書作成にあたり、以下の各氏・各機関にご指導・ご意見をいただいた。お名前のみを記してお礼としたい。（五十音順・敬称略）

赤羽 貞幸	飯島 哲也	出河 裕典	小口 徹	風間 栄一	小山 丈夫
茂原 信生	白沢 勝彦	鈴木 三男	千々和 到	千野 浩	寺島 孝典
傳田 伊史	野村 一寿	花岡 弘	原 明芳	松村 恵司	三上 徹也
矢口 忠良	山田 昌久	長野市教育委員会			
12. 発掘調査は3年次にわたる分割調査となったため、他遺跡の発掘調査との平行による調査研究員の異動・重複が加わり、各調査区の担当者との検討が不十分で、記述の方針・方法に一貫しない部分が生じた。今後の反省としたい。
13. 本書で報告した遺跡の記録及び出土遺物は、報告書刊行後、長野県立歴史館に移管し保管する。

## 凡 例

1. 本書に掲載した実測図等の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1) 遺構実測図

竪穴住居址 1 : 60      カマド 1 : 40      墓址 1 : 30      井戸址 1 : 60

(2) 遺物実測図

土器 1 : 4      金属製品 1 : 3      骨角牙製品 1 : 2

2. 実測図中のスクリーントーンは、特に断りのある場合を除いて以下の事項を表している。

(1) 遺構実測図

- |              |                             |            |
|--------------|-----------------------------|------------|
| ①=被熱痕跡及び焼土堆積 | ②=焼土・炭化物の分布範囲               | ③=炭化物の分布範囲 |
| ④=灰の分布範囲     | ⑤=柱痕跡                       | ⑥=近世以降の暗渠  |
| ⑦=近代以降の暗渠    | ⑧=攪乱・トレンチ・後世の遺構などに破壊されている部分 |            |



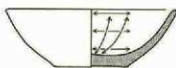
(2) 遺物実測図

古代土器

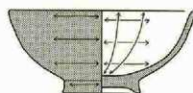
土師器



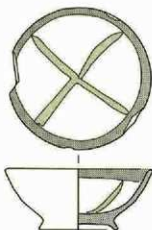
黒色土器A



黒色土器B



須恵器



灰軸陶器



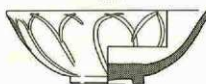
緑釉陶器



白磁



青磁



## 本文目次

巻頭写真 (古墳出土遺物・鉄製馬具・サイコロ・鋳型・鋸)

序

例言

凡例

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の体制と経過	2
第2節 調査の方法	9
1 発掘調査の方法	9
2 整理作業の方法	11
3 報告書作成の分担	14
第2章 位置と環境	16
第1節 遺跡の位置	16
第2節 地理的環境	16
第3節 歴史的環境	25
第3章 古墳の調査	31
第1節 松原古墳群の概観と調査経過	31
第2節 松原1号墳の調査	34
第3節 松原2号墳の調査	72
第4節 松原3号墳の調査	74
第4章 古代の調査	77
第1節 古代の遺構	77
1 竪穴住居址	77
2 掘立柱建物址	114
3 溝址	120
4 道路址	121
5 墓址	122
6 井戸址	126
7 土坑	133
8 河川址及び築状遺構	145
第2節 古代の遺物	157
1 土器	157
2 土製品	261
3 石器・石製品	266
4 金属製品	271
5 骨角牙製品	279
6 木製品・編物	285
7 鍛冶製造関連遺物	293
8 文字関係資料	300
第5章 中世以降の調査	315
第1節 平坦面に展開する遺構群	315



1	溝址	315
2	墓址	317
3	井戸址	326
4	土坑	335
第2節	斜面部に形成された墳墓群	343
1	概要	343
2	河川址右岸平坦面	343
3	山麓斜面部	347
第3節	中世以降の遺物	354
1	焼物・土製品	354
2	石器・石製品	358
3	石塔類	361
4	金属製品	369
5	木製品	372
第6章	松原遺跡出土の人骨・脊椎動物遺存体	375
第1節	人骨	375
第2節	脊椎動物遺存体	400
第7章	成果と課題	423
第1節	松原遺跡における古代土器の変容	423
第2節	松原遺跡出土の人骨・獣骨	437
第8章	結語	444
引用・参考文献一覧		446

写真図版

報告書 抄録

挿 図 目 次

第1図	松原遺跡調査区設定図	1
第2図	大々地区の設定と割付	10
第3図	保存処理カード・木製品整理カード	13
第4図	遺跡の位置	16
第5図	長野盆地の地形	16
第6図	遺跡周辺の地形区分図	18
第7図	基本層序	19
第8図	柱状断面図	20・21
第9図	柱状断面図	22・23
第10図	松代地区遺跡分布図	27
第11図	松原古墳群の位置	32
第12図	松原古墳群分布図	33
第13図	松原1号墳墳丘平面図	35
第14図	松原1号墳墳丘断面図	37
第15図	松原1号墳掘り方・土器出土状況	39
第16図	松原1号墳石室実測図	41
第17図	松原1号墳石室内遺物分布図	43
第18図	松原1号墳出土土器1	49
第19図	松原1号墳出土土器2	50
第20図	松原1号墳出土土器3	51
第21図	松原1号墳出土土器4	52
第22図	松原1号墳出土金属製品1	53
第23図	松原1号墳出土金属製品2	54
第24図	松原1号墳出土金属製品3	55
第25図	松原1号墳出土金属製品4	56
第26図	松原1号墳出土耳環・玉類1	57
第27図	松原1号墳出土玉類2	58
第28図	松原2・3号墳出土金属製品	72
第29図	松原2号墳調査区及び排水施設	73
第30図	松原3号墳石室実測図・周辺土	



	層断面図……………75	第79回	古代河川址遺物出土状況図4……………151
第31回	古代竪穴住居址遺構図1……………89	第80回	古代河川址遺物出土状況図5……………152
第32回	古代竪穴住居址遺構図2……………90	第81回	古代河川址遺物出土状況図6……………153
第33回	古代竪穴住居址遺構図3……………91	第82回	古代河川址内竈状遺構1……………154
第34回	古代竪穴住居址遺構図4……………92	第83回	古代河川址内竈状遺構2……………155
第35回	古代竪穴住居址遺構図5……………93	第84回	古代河川址内竈状遺構3……………156
第36回	古代竪穴住居址遺構図6……………94	第85回	食器形態器種分類図1……………161
第37回	古代竪穴住居址遺構図7……………95	第86回	食器形態器種分類図2……………162
第38回	古代竪穴住居址遺構図8……………96	第87回	煮炊形態器種分類図1……………163
第39回	古代竪穴住居址遺構図9……………97	第88回	煮炊形態器種分類図2……………164
第40回	古代竪穴住居址遺構図10……………98	第89回	煮炊形態器種分類図3・構成比と 底部調整比率の凡例……………165
第41回	古代竪穴住居址遺構図11……………99	第90回	SB2土師器杯A法量分布……………166
第42回	古代竪穴住居址遺構図12……………100	第91回	SB4法量分布と底部調整比率……………166
第43回	古代竪穴住居址遺構図13……………101	第92回	SB6法量分布と椀構成比……………167
第44回	古代竪穴住居址遺構図14……………102	第93回	SB7法量分布と杯A構成比……………167
第45回	古代竪穴住居址遺構図15……………103	第94回	SB16法量分布と杯A構成比……………169
第46回	古代竪穴住居址遺構図16……………104	第95回	SB17土師器杯A法量分布……………169
第47回	古代竪穴住居址遺構図17……………105	第96回	SB18法量分布と椀構成比……………169
第48回	古代竪穴住居址遺構図18……………106	第97回	SB22法量分布と杯A構成比……………170
第49回	古代竪穴住居址遺構図19……………107	第98回	SB29杯A法量分布……………171
第50回	古代竪穴住居址遺構図20……………108	第99回	SB34法量分布と底部調整比率……………172
第51回	古代竪穴住居址遺構図21……………109	第100回	SB35法量分布と杯A構成比・ 底部調整比率……………173
第52回	古代竪穴住居址遺構図22……………110	第101回	SB38法量分布と底部調整比率……………173
第53回	古代竪穴住居址遺構図23……………111	第102回	SB40法量分布と底部調整比率……………174
第54回	古代竪穴住居址遺構図24……………112	第103回	SB41土師器杯A法量分布……………174
第55回	古代竪穴住居址遺構図25……………113	第104回	SB48法量分布と杯A構成比……………176
第56回	古代掘立柱建物址遺構図1……………115	第105回	SB55法量分布と杯A構成比……………177
第57回	古代掘立柱建物址遺構図2……………116	第106回	SB56法量分布と杯A構成比・ 底部調整比率……………177
第58回	古代掘立柱建物址遺構図3……………117	第107回	SB58法量分布と底部調整比率……………178
第59回	古代掘立柱建物址遺構図4……………118	第108回	SB59法量分布と底部調整比率……………178
第60回	掘立柱建物址と溝址……………119	第109回	SB76土師器杯A法量分布……………180
第61回	古代墓址遺構図1……………124	第110回	SB87法量分布と杯A構成比・ 底部調整比率……………182
第62回	古代墓址遺構図2……………125	第111回	SB92椀及び土師器杯A法量分布……………183
第63回	古代井戸址遺構図1……………128	第112回	SB92椀構成比……………183
第64回	古代井戸址遺構図2……………129	第113回	SB97法量分布と底部調整比率……………185
第65回	古代井戸址遺構図3……………130	第114回	SB98法量分布と底部調整比率……………185
第66回	古代井戸址遺構図4……………131	第115回	SB100須恵器食器形態法量分布……………185
第67回	古代井戸址遺構図5……………132	第116回	SB101椀及び土師器杯A法量分布……………186
第68回	古代土坑遺構図1……………138	第117回	SB105法量分布と杯A構成比・ 底部調整比率……………187
第69回	古代土坑遺構図2……………139	第118回	SB111法量分布と杯A構成比・ 底部調整比率……………188
第70回	古代土坑遺構図3……………140	第119回	SB114法量分布と杯A・椀構成比……………189
第71回	古代土坑遺構図4……………141	第120回	SB116法量分布と杯A・椀構成比……………189
第72回	古代土坑遺構図5……………142	第121回	SB118法量分布と杯A構成比……………189
第73回	古代土坑遺構図6……………143		
第74回	古代土坑遺構図7……………144		
第75回	古代河川址割付図……………147		
第76回	古代河川址遺物出土状況図1……………148		
第77回	古代河川址遺物出土状況図2……………149		
第78回	古代河川址遺物出土状況図3……………150		

	底部調整比率……………190	第164図	SB421法量分布と椀構成比……………218
第122図	SB122法量分布と杯A・椀構成比…191	第165図	SB1002食器形態法量分布……………219
第123図	SB123法量分布と杯A構成比……………191	第166図	SB1003法量分布と杯A構成比……………220
第124図	SB124法量分布と椀構成比……………192	第167図	SB1005法量分布と杯A・椀構成比……………220
第125図	SB125法量分布と杯A構成比……………192		SB1006法量分布と底部調整比率……………221
第126図	SB145杯A法量分布……………194	第168図	SB1008法量分布と杯A構成比……………221
第127図	SB149法量分布と底部調整比率……………195	第169図	SB1010法量分布と底部調整比率……………222
第128図	SB168法量分布と底部調整比率……………197	第170図	SB1011法量分布と椀構成比・底部調整比率……………222
第129図	SB178法量分布と杯A構成比……………198	第171図	SB1012法量分布と杯A構成比……………223
第130図	SB183法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………199	第172図	SB1014法量分布と杯A構成比……………224
第131図	SB189法量分布と杯A構成比……………200	第173図	SB1017法量分布と杯A・椀構成比……………224
第132図	SB190法量分布と杯A構成比……………200		SB1020土師器杯A法量分布……………224
第133図	SB191法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………201	第176図	SB1024法量分布と杯A構成比……………225
第134図	SB192法量分布と杯A構成比……………201	第177図	SB1026法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………226
第135図	SB194法量分布と杯A・椀構成比……………202	第178図	SB1032法量分布と椀構成比……………227
第136図	SB195法量分布と杯A構成比……………202	第179図	SB1033黒色土器A杯A法量分布……………227
第137図	SB198椀構成比……………202	第180図	SB1038食器形態法量分布……………228
第138図	SB200法量分布と杯A構成比……………203	第181図	SB1039法量分布と杯A構成比……………229
第139図	SB210法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………203	第182図	SB1040法量分布と底部調整比率……………229
第140図	SB211法量分布と杯A構成比……………204	第183図	SB1045法量分布と椀構成比……………230
第141図	SB216法量分布と杯A構成比……………204	第184図	SB1046法量分布と椀構成比……………230
第142図	SB219法量分布と底部調整比率……………205	第185図	SB1051法量分布と杯A・椀構成比……………232
第143図	SB242法量分布と底部調整比率……………206	第186図	SB1052法量分布と杯A構成比……………232
第144図	SB248土師器杯A法量分布……………207	第187図	SB1058法量分布と底部調整比率……………234
第145図	SB255法量分布と杯A構成比……………208	第188図	SB1060法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………234
第146図	SB257法量分布と椀構成比……………208	第189図	SB1061土師器杯A法量分布……………234
第147図	SB327法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………209	第190図	SB1063法量分布と杯A構成比……………235
第148図	SB336法量分布と杯A構成比……………210	第191図	SB1065法量分布と杯A構成比……………236
第149図	SB338法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………210	第192図	SB1067法量分布と杯A構成比……………236
第150図	SB342法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………211	第193図	SB1070法量分布と杯A構成比……………237
第151図	SB347法量分布と底部調整比率……………212	第194図	SB1071法量分布と底部調整比率……………238
第152図	SB374法量分布と杯A構成比……………213	第195図	SB1074法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………238
第153図	SB375食器形態法量分布……………213	第196図	SB1076法量分布と椀構成比……………238
第154図	SB381法量分布と杯A構成比……………213	第197図	SB1080法量分布と底部調整比率……………240
第155図	SB382黒色土器A杯A法量分布……………214	第198図	SB1086土師器食器形態法量分布……………240
第156図	SB383法量分布と椀構成比……………214	第199図	SB1088黒色土器A杯A法量分布……………240
第157図	SB386土師器杯A法量分布……………215	第200図	SB1089土師器杯A法量分布……………240
第158図	SB388食器形態法量分布……………216	第201図	SB1090法量分布と椀構成比……………242
第159図	SB392食器形態法量分布……………216	第202図	SB1095法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………242
第160図	SB394黒色土器A杯A法量分布……………216	第203図	SB1098法量分布と杯A構成比・底部調整比率……………243
第161図	SB395黒色土器A杯A法量分布……………217		
第162図	SB408黒色土器A杯A法量分布……………217		
第163図	SB416須恵器食器形態法量分布……………217		

第204図	SB1194杯A法量分布	244	第237図	中世墓址遺構図1	319
第205図	SB1201法量分布と底部調整比率	244	第238図	中世墓址遺構図2	320
第206図	SB1208土師器杯A法量分布	246	第239図	中世墓址遺構図3	321
第207図	SB1209法量分布と椀構成比	246	第240図	中世墓址遺構図4	322
第208図	SB1210土師器杯A法量分布	247	第241図	中世墓址遺構図5及び遺構分布図	323
第209図	SB1211杯A法量分布	247	第242図	中世墓址遺構図6	324
第210図	SB1215法量分布と椀構成比	248	第243図	中世墓址遺構図7	325
第211図	SB1216法量分布と椀構成比	248	第244図	中世井戸址遺構図1	327
第212図	SB1217法量分布と杯A構成比	248	第245図	中世井戸址遺構図2	328
第213図	SB1218土師器杯A法量分布	249	第246図	中世井戸址遺構図3	329
第214図	SB1221杯A法量分布	249	第247図	中世井戸址遺構図4	330
第215図	SB1222法量分布と椀構成比	250	第248図	中世井戸址遺構図5	331
第216図	SB1223食器形態法量分布	250	第249図	中世井戸址遺構図6・井戸址分布図	332
第217図	SB1224食器形態法量分布	250	第250図	中世土坑遺構図1	336
第218図	SB1226食器形態法量分布	251	第251図	中世土坑遺構図2	337
第219図	SB1231法量分布と杯A構成比	252	第252図	中世土坑遺構図3	338
第220図	SB1236食器形態法量分布	253	第253図	中世土坑遺構図4	339
第221図	SB1246法量分布と椀構成比	255	第254図	中世土坑遺構図6	340
第222図	SB1312食器形態法量分布	255	第255図	斜面部遺構分布図	344
第223図	SB1401杯A法量分布	256	第256図	河川址右岸平坦面遺構図1	345
第224図	SB1402法量分布と椀構成比	256	第257図	河川址右岸平坦面遺構図2	346
第225図	SB1405法量分布と椀構成比	257	第258図	斜面部Aテラス整地跡実測図	348
第226図	土鉢の法量と類別の推移	263	第259図	斜面部Dテラス遺構図	349
第227図	杏葉槽	273	第260図	斜面部Uテラス遺構図	351
第228図	瓊実瀆図	280	第261図	斜面部個別遺構図	352
第229図	墨書が施される焼物の種類	303	第262図	食器形態の構成比	424
第230図	墨書が施される器種	303	第263図	杯Aの構成比	425
第231図	墨書が施される部位・墨書の向き	303	第264図	土師器杯Aの法量の変遷	426
第232図	文字関係資料出土住居址分布図	304・305	第265図	黒色土器A杯Aの法量の変遷	428
第233図	墨書が施される焼物と器種の推移	306	第266図	土師器杯Aの法量の変遷	429
第234図	墨書土器出土数と出土住居址数の推移	306	第267図	須恵器杯Bの法量分布	431
第235図	転用礫出土数と出土住居址数の推移	306	第268図	黒色土器A碗の法量の変遷	432
第236図	推定される獨立柱建物址の位置とその他の遺構分布図	316	第269図	土師器碗の法量の変遷	433
			第270図	盤Bの法量分布	434
			第271図	住居址出土の灰釉陶器窯式の構成	434
			第272図	長胴形甕・口縁部形態の変化	435

## 挿 表 目 次

第1表	松代地区古代遺跡の消長	28	第7表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(5)	64
第2表	松原1号墳出土石製玉類一覧表	59	第8表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(6)	65
第3表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(1)	60	第9表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(7)	66
第4表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(2)	61	第10表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(8)	67
第5表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(3)	62	第11表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(9)	68
第6表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(4)	63			

第12表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(10)……………	69	第58表	SB43出土土器の構成……………	175
第13表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(11)……………	70	第59表	SB44出土土器の構成……………	175
第14表	松原1号墳出土ガラス製玉類 一覧表(12)……………	71	第60表	SB45出土土器の構成……………	175
第15表	古代竪穴住居址一覧表(1)……………	82	第61表	SB47出土土器の構成……………	176
第16表	古代竪穴住居址一覧表(2)……………	83	第62表	SB48出土土器の構成……………	176
第17表	古代竪穴住居址一覧表(3)……………	84	第63表	SB51出土土器の構成……………	176
第18表	古代竪穴住居址一覧表(4)……………	85	第64表	SB52出土土器の構成……………	176
第19表	古代竪穴住居址一覧表(5)……………	86	第65表	SB54出土土器の構成……………	177
第20表	古代竪穴住居址一覧表(6)……………	87	第66表	SB55出土土器の構成……………	177
第21表	古代竪穴住居址一覧表(7)……………	88	第67表	SB56出土土器の構成……………	177
第22表	古代掘立柱建物址一覧表……………	114	第68表	SB58出土土器の構成……………	178
第23表	古代墓址一覧表……………	123	第69表	SB59出土土器の構成……………	178
第24表	古代井戸址一覧表……………	127	第70表	SB61出土土器の構成……………	179
第25表	古代土坑一覧表(1)……………	134	第71表	SB64出土土器の構成……………	179
第26表	古代土坑一覧表(2)……………	135	第72表	SB65出土土器の構成……………	179
第27表	古代土坑一覧表(3)……………	136	第73表	SB66出土土器の構成……………	179
第28表	古代土坑一覧表(4)……………	137	第74表	SB67出土土器の構成……………	179
第29表	SB1出土土器の構成……………	166	第75表	SB70出土土器の構成……………	180
第30表	SB2出土土器の構成……………	166	第76表	SB72出土土器の構成……………	180
第31表	SB4出土土器の構成……………	166	第77表	SB73出土土器の構成……………	180
第32表	SB6出土土器の構成……………	167	第78表	SB76出土土器の構成……………	180
第33表	SB7出土土器の構成……………	167	第79表	SB77出土土器の構成……………	181
第34表	SB11出土土器の構成……………	168	第80表	SB78出土土器の構成……………	181
第35表	SB12出土土器の構成……………	168	第81表	SB80出土土器の構成……………	181
第36表	SB13出土土器の構成……………	168	第82表	SB81出土土器の構成……………	181
第37表	SB16出土土器の構成……………	168	第83表	SB82出土土器の構成……………	182
第38表	SB17出土土器の構成……………	169	第84表	SB85出土土器の構成……………	182
第39表	SB18出土土器の構成……………	169	第85表	SB86出土土器の構成……………	182
第40表	SB20出土土器の構成……………	170	第86表	SB87出土土器の構成……………	182
第41表	SB21出土土器の構成……………	170	第87表	SB88出土土器の構成……………	183
第42表	SB22出土土器の構成……………	170	第88表	SB92出土土器の構成……………	183
第43表	SB23出土土器の構成……………	170	第89表	SB93出土土器の構成……………	183
第44表	SB25出土土器の構成……………	171	第90表	SB95出土土器の構成……………	184
第45表	SB26出土土器の構成……………	171	第91表	SB96出土土器の構成……………	185
第46表	SB28出土土器の構成……………	171	第92表	SB97出土土器の構成……………	185
第47表	SB29出土土器の構成……………	171	第93表	SB98出土土器の構成……………	185
第48表	SB31出土土器の構成……………	172	第94表	SB99出土土器の構成……………	185
第49表	SB33出土土器の構成……………	172	第95表	SB100出土土器の構成……………	185
第50表	SB34出土土器の構成……………	172	第96表	SB101出土土器の構成……………	186
第51表	SB35出土土器の構成……………	173	第97表	SB102出土土器の構成……………	186
第52表	SB37出土土器の構成……………	173	第98表	SB104出土土器の構成……………	187
第53表	SB38出土土器の構成……………	173	第99表	SB105出土土器の構成……………	187
第54表	SB39出土土器の構成……………	174	第100表	SB107出土土器の構成……………	187
第55表	SB40出土土器の構成……………	174	第101表	SB108出土土器の構成……………	188
第56表	SB41出土土器の構成……………	174	第102表	SB109出土土器の構成……………	188
第57表	SB42出土土器の構成……………	175	第103表	SB110出土土器の構成……………	188
			第104表	SB111出土土器の構成……………	188
			第105表	SB114出土土器の構成……………	189
			第106表	SB115出土土器の構成……………	189



第107表	SB116出土土器の構成	189
第108表	SB118出土土器の構成	190
第109表	SB119出土土器の構成	190
第110表	SB121出土土器の構成	191
第111表	SB122出土土器の構成	191
第112表	SB123出土土器の構成	191
第113表	SB124出土土器の構成	192
第114表	SB125出土土器の構成	192
第115表	SB126出土土器の構成	192
第116表	SB127出土土器の構成	193
第117表	SB129出土土器の構成	193
第118表	SB130出土土器の構成	193
第119表	SB136出土土器の構成	193
第120表	SB142出土土器の構成	193
第121表	SB143出土土器の構成	194
第122表	SB145出土土器の構成	194
第123表	SB146出土土器の構成	194
第124表	SB147出土土器の構成	194
第125表	SB148出土土器の構成	194
第126表	SB149出土土器の構成	195
第127表	SB150出土土器の構成	195
第128表	SB151出土土器の構成	195
第129表	SB155出土土器の構成	195
第130表	SB162出土土器の構成	195
第131表	SB163出土土器の構成	196
第132表	SB165出土土器の構成	196
第133表	SB166出土土器の構成	197
第134表	SB168出土土器の構成	197
第135表	SB170出土土器の構成	197
第136表	SB173出土土器の構成	197
第137表	SB174出土土器の構成	198
第138表	SB175出土土器の構成	198
第139表	SB178出土土器の構成	198
第140表	SB179出土土器の構成	198
第141表	SB180出土土器の構成	199
第142表	SB181出土土器の構成	199
第143表	SB183出土土器の構成	199
第144表	SB189出土土器の構成	200
第145表	SB190出土土器の構成	200
第146表	SB191出土土器の構成	200
第147表	SB192出土土器の構成	201
第148表	SB193出土土器の構成	201
第149表	SB194出土土器の構成	201
第150表	SB195出土土器の構成	202
第151表	SB196出土土器の構成	202
第152表	SB198出土土器の構成	202
第153表	SB200出土土器の構成	203
第154表	SB207出土土器の構成	203
第155表	SB208出土土器の構成	203

第156表	SB209出土土器の構成	203
第157表	SB210出土土器の構成	203
第158表	SB211出土土器の構成	204
第159表	SB216出土土器の構成	204
第160表	SB217出土土器の構成	204
第161表	SB219出土土器の構成	205
第162表	SB220出土土器の構成	205
第163表	SB227出土土器の構成	205
第164表	SB230出土土器の構成	205
第165表	SB233出土土器の構成	205
第166表	SB236出土土器の構成	206
第167表	SB237出土土器の構成	206
第168表	SB241出土土器の構成	206
第169表	SB242出土土器の構成	206
第170表	SB248出土土器の構成	207
第171表	SB249出土土器の構成	207
第172表	SB252出土土器の構成	207
第173表	SB253出土土器の構成	207
第174表	SB255出土土器の構成	207
第175表	SB256出土土器の構成	208
第176表	SB257出土土器の構成	208
第177表	SB270出土土器の構成	209
第178表	SB327出土土器の構成	209
第179表	SB334出土土器の構成	209
第180表	SB335出土土器の構成	209
第181表	SB336出土土器の構成	210
第182表	SB337出土土器の構成	210
第183表	SB338出土土器の構成	210
第184表	SB340出土土器の構成	211
第185表	SB341出土土器の構成	211
第186表	SB342出土土器の構成	211
第187表	SB343出土土器の構成	211
第188表	SB347出土土器の構成	212
第189表	SB357出土土器の構成	212
第190表	SB365出土土器の構成	212
第191表	SB371出土土器の構成	212
第192表	SB374出土土器の構成	213
第193表	SB375出土土器の構成	213
第194表	SB381出土土器の構成	214
第195表	SB382出土土器の構成	214
第196表	SB383出土土器の構成	214
第197表	SB386出土土器の構成	215
第198表	SB388出土土器の構成	216
第199表	SB392出土土器の構成	216
第200表	SB394出土土器の構成	216
第201表	SB395出土土器の構成	217
第202表	SB408出土土器の構成	217
第203表	SB416出土土器の構成	217
第204表	SB417出土土器の構成	218



第303表	SB1210出土土器の構成	247	第352表	SK231出土土器の構成	259
第304表	SB1211出土土器の構成	247	第353表	SK1028出土土器の構成	259
第305表	SB1212出土土器の構成	247	第354表	SK1659出土土器の構成	259
第306表	SB1214出土土器の構成	247	第355表	SK84出土土器の構成	260
第307表	SB1215出土土器の構成	248	第356表	SK502出土土器の構成	260
第308表	SB1216出土土器の構成	248	第357表	SK1034出土土器の構成	260
第309表	SB1217出土土器の構成	248	第358表	SC1出土土器の構成	260
第310表	SB1218出土土器の構成	249	第359表	SD102出土土器の構成	260
第311表	SB1219出土土器の構成	249	第360表	土鍾一覽表	263
第312表	SB1221出土土器の構成	249	第361表	古代磁石一覽表(1)	268
第313表	SB1222出土土器の構成	249	第362表	古代磁石一覽表(2)	269
第314表	SB1223出土土器の構成	250	第363表	皇朝十二錢計測表	278
第315表	SB1224出土土器の構成	250	第364表	古代木製品観察表	289~292
第316表	SB1225出土土器の構成	251	第365表	椀型淨觀察表	294
第317表	SB1226出土土器の構成	251	第366表	遺構別鉾淨出土内容	297
第318表	SB1227出土土器の構成	251	第367表	墨書土器一覽表	308~311
第319表	SB1228出土土器の構成	251	第368表	匱書土器一覽表	311
第320表	SB1229出土土器の構成	252	第369表	刻書・刻印土器一覽表	311
第321表	SB1230出土土器の構成	252	第370表	陶硯・転用硯一覽表	312~314
第322表	SB1231出土土器の構成	252	第371表	中世墓址一覽表	318
第323表	SB1235出土土器の構成	252	第372表	中世井戸址一覽表(1)	333
第324表	SB1236出土土器の構成	253	第373表	中世井戸址一覽表(2)	334
第325表	SB1237出土土器の構成	253	第374表	中世土坑一覽表(1)	341
第326表	SB1238出土土器の構成	253	第375表	中世土坑一覽表(2)	342
第327表	SB1239出土土器の構成	254	第376表	五輪塔空風輪一覽表(1)	364
第328表	SB1240出土土器の構成	254	第377表	五輪塔空風輪一覽表(2)	365
第329表	SB1241出土土器の構成	254	第378表	五輪塔火輪一覽表	366
第330表	SB1242出土土器の構成	254	第379表	五輪塔土輪一覽表	367
第331表	SB1245出土土器の構成	254	第380表	五輪塔地輪一覽表	368
第332表	SB1246出土土器の構成	255	第381表	錢貨一覽表(1)	370
第333表	SB1270出土土器の構成	255	第382表	錢貨一覽表(2)	371
第334表	SB1312出土土器の構成	255	第383表	中世木製品観察表	374
第335表	SB1401出土土器の構成	255	第384表	松原遺跡出土の古代・中世・近世 以降の人骨の概要(1)	396
第336表	SB1402出土土器の構成	256	第385表	松原遺跡出土の古代・中世・近世 以降の人骨の概要(2)	397
第337表	SB1405出土土器の構成	257	第386表	松原遺跡出土人骨の上顎歯の計測 値と比較資料	398
第338表	SD3出土土器の構成	257	第387表	松原遺跡出土人骨の下顎歯の計測 値と比較資料	398
第339表	SD1021出土土器の構成	257	第388表	松原遺跡出土人骨の頭蓋骨の計測 値と比較資料	399
第340表	SD45出土土器の構成	257	第389表	松原遺跡出土人骨の上肢骨の計測 値と比較資料	399
第341表	SD58出土土器の構成	257	第390表	松原遺跡出土人骨の下肢骨の計測 値と比較資料	400
第342表	SD2出土土器の構成	258	第391表	松原遺跡出土脊椎動物骨の時代別 の出土点数	405
第343表	SD46出土土器の構成	258	第392表	松原遺跡出土の獣骨(1)	406
第344表	SD1001出土土器の構成	258			
第345表	SD1009出土土器の構成	258			
第346表	SK1733出土土器の構成	258			
第347表	SK1040出土土器の構成	258			
第348表	SK51出土土器の構成	259			
第349表	SK94出土土器の構成	259			
第350表	SK113出土土器の構成	259			
第351表	SK123出土土器の構成	259			

第393表	松原遺跡出土の獣骨(2)	407	第402表	松原遺跡出土の獣骨(11)	416
第394表	松原遺跡出土の獣骨(3)	408	第403表	松原遺跡出土の獣骨(12)	417
第395表	松原遺跡出土の獣骨(4)	409	第404表	松原遺跡出土の獣骨(13)	418
第396表	松原遺跡出土の獣骨(5)	410	第405表	松原遺跡出土の獣骨(14)	419
第397表	松原遺跡出土の獣骨(6)	411	第406表	松原遺跡出土の獣骨(15)	420
第398表	松原遺跡出土の獣骨(7)	412	第407表	松原遺跡出土の獣骨(16)	421
第399表	松原遺跡出土の獣骨(8)	413	第408表	松原遺跡出土の獣骨(17)	422
第400表	松原遺跡出土の獣骨(9)	414	第409表	松原遺跡出土脊椎動物骨の出土 点数	440
第401表	松原遺跡出土の獣骨(10)	415			

#### 写真図版目次

PL 1	松原遺跡SK1226-1出土の人骨	PL 6	松原遺跡出土のウマ
PL 2	松原遺跡SK1008出土の人骨	PL 7	松原遺跡出土のウシ
PL 3	松原遺跡SK1160・550出土の人骨	PL 8	松原遺跡出土の哺乳動物骨
PL 4	松原遺跡SK1544出土の人骨	PL 9	松原遺跡出土の哺乳動物骨
PL 5	松原遺跡出土のウマ		



# 第1章 調査の経過と方法

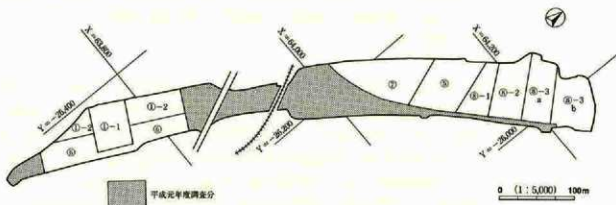
## 第1節 調査の経過

### 1 調査に至る経緯

当財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）は、その設立主旨から国及び県の機関（文化財保護法施行令（昭和50年令第267号）第1条に定める法人を含む。）により実施される公共開発事業において、事業の実施に先駆け調査を済ませる義務をおう者（以下「事業者」）の委託を受けて、埋蔵文化財の調査を行うほか、埋蔵文化財の保護のための必要な事業及び研究を行う。この時、県埋文センターが委託を受けて行う調査（以下「受託調査」という。）は、それに先立ち長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が、行政上の調整を済ませた上で県埋文センターにおいて受託して行うことが適当であると認めたものについて実施される。

松原遺跡は、弥生時代中期後半、古墳時代後期、平安時代の遺跡と周知されていた遺跡である。平成元年度に調査が開始されると、それらが一面ではなく、それぞれ間層をともなって文化層として確認されるに至った。このことは、当初予想されなかったことで、調査計画は変更を余儀なくされ、異例ともいえる1月から2月にかけての厳冬期間の発掘調査を行うこととなった。なお、この時点で確認された文化層は弥生時代中期後半、同後期、古代・中世の3枚であった。

翌平成2年4月、③-1地区で弥生時代中期後半の調査が終了し、中世の井戸址の断面図を作成して調査完了という段階まで調査が進行した。ところが、井戸址を重機（バックホー）で半割し、断面観察をしたところ、所謂地山の部分に、炭化物を多量に含んだ黒味を帯びた土層が、地表下約4mのところを確認された。土壌化した土層であることには間違いなく、その広がりや遺物の有無などの確認のためトレンチを入れたところ、加曽利E式と思われる土器片と打製石斧がその層位から検出され、その土層自体も水平堆積していることが確認された。ここに、松原遺跡での縄文時代文化層の発見があり、このことは、善光寺平における縄文時代の遺跡の捉え方に対し、重要な問題を投げかける発端となることになる。一方、同年



第1図 松原遺跡調査区設定図

8月には、⑧-3地区の斜面末端部で五輪塔を伴う墓址が検出され、さらに上方の金井山山麓斜面部（高速道東寺尾トンネル坑口部）では、多量の五輪塔が桑畑の石垣として利用されていたことが確認された。また、古墳の石室に関連することが予想される石組みや巨石、加えて微弱な地表面の高まり等も確認され、この傾斜地に古墳群及び大規模な中世墳墓群が展開していたことを想定するに十分な所見を得ることとなった。これまで、平坦部において重層的に確認された大規模な集落址に主眼を置いてきた調査に、新たな課題が課せられるに至った。

以下、年度を追って調査経過を概観する。なお、松原遺跡は上記したごとく、時代ごとに間層をもち、それぞれ独立した形で捉えられることから、報告書も時代ごとに分冊で刊行していくという編集方針である。したがって、本書は松原遺跡の報告書の中で、古代・中世編であるので、古代・中世の調査と直接関わりが無い部分については割愛する。

## 2 調査の体制と経過

### (1) 発掘調査（平成元年度～3年度）

【平成元年度調査体制】長野調査事務所長 塚原隆明

同 庶務部長 半田順計

同 庶務部長補佐 松本忠巳

同 調査部長 笹沢 浩

同 調査課長 白田武正

調査研究員 原 明芳 青木一男 小林清人 岡沢康夫 中沢道彦 町田勝則  
三上徹也 山崎博也 田中 正 宮脇正美 伴 信夫 上田典男  
山崎光顕 越 修一 下島章裕 三石俊司 小平恵一 綿田弘実  
飯島明孝

【調査経過】年度当初、調査研究員4名の1班体制で調査を開始したが、調査の進行に伴って検出された遺構は膨大な数に上り、なおかつ、試掘トレンチ調査により、古代面の下部にそれぞれ間層を伴い弥生後期・中期の文化層が確認されるに至った。これにより急速、8月に調査研究員を2名増加、さらに、8月下旬から、調査研究員8名（2班）を増加し、対応することとなった。以後、段階的に調査研究員数を増強することとなる。また、工事工程との関係から、カルバートボックス等の構造物部分を先行調査せざるを得なく、集落遺跡を分割調査することとなった。さらに、調査量と工事工程の兼ね合いから、異例とも言える厳冬の調査を敢行せざるを得ない状況が生じることとなった。また、調査範囲は県道（現国道403号線）・長野電鉄河東線をほぼ中央にはさんでおり、調査の進行上、不都合な面も多々あったため、長野電鉄河東線を境に東西に大きく二分し、便宜的に「松原西」・「松原東」と称し調査を進めることとなった。以下、二分した調査区ごとに記載する。

#### 松原西

年度当初から調査に着手した地区で、調査研究員4名、作業員約60名という体制で、4月12日より本格的な発掘調査を始動した。調査は順調に進み、4月末の時点で、20軒余の竪穴住居址、土坑・溝・人骨の遺存する墓などが検出・調査された。5月18日には、トレンチ調査により旧河道（SD100）が確認され、弥生時代中期後半の土器片が大量に採取された。本遺跡に関する既存資料や分布調査の結果から、本遺跡が弥生時代から平安時代におたる集落遺跡であることは予測されていたが、4月1、25日のトレンチ調査ならびに、これまでの調査状況から、間層を挟んで堆積する古代・弥生時代後期・弥生時代中期の各文化層は、それぞれ密度の高い遺構分布を持つ集落址であることが明らかとなった。なおかつ弥生時代におい

ては、木製品に代表される脆弱遺物が遺存している可能性の高い旧河道が調査範囲内で確認され、さらに、弥生時代中期の文化層は現地地下2mという深さからくる排土処理という物理的な問題も加わり、現状の調査体制及び調査期間の大幅な見直しが迫られた。これを受け7月11日には、I K区においていち早く弥生時代後期の調査を開始した。8月1日には、調査研究員2名が増員され、現場プレハブ設置場所を除いた松原西のほぼ全域に調査の手が入ることとなり、古代面、弥生時代後期面、旧河道と内容の異なった調査が、地点を違えてモザイク的に進行する。10月25日には弥生時代中期面の調査が開始され、錯綜の度合いを深めていった。こうした調査工程は、高速道に関わる構造物を先行する工事工程に対応させるために生じたものである。その結果、調査の安全対策に関わる法面の設置、掘削、排土処理など、区画されたすべての調査区で調査面ごとに配慮が必要となった。加えて、隣接する調査区との連携が重要で、それが十分でない調査区境に設定した法面の下部は調査不能という事態が生じてしまう。事実、今回の調査においてもそうした場面が幾つか生じた。10月27日には県道と河東線に挟まれた地区で古代面の調査が終了し、11月16日には現場プレハブ設置場所を除く松原西の古代面の調査が終了した。調査は、弥生後期・中期とさらに継続して進められた。11月後半には佐久調査事務所から調査研究員2名を応援体制として仰ぎ、同時に作業員も常時100名体制と大幅に増員し、翌年の2月15日まで調査は実施された。なお、この間、8月6日に古代面の現地説明会を、12月10日に弥生中期面の現地説明会を実施した。

#### 松原東

前述の調査計画の見直しを受けて、調査研究員8名、作業員約50名という体制で、8月17日より調査を開始した。先行する松原西の調査成果から、住居址の重複が多い点、床面が堅緻な住居が多い点などを考慮し、また、調査の進行を早める為に、遺構検出にあたってはサブトレンチを多用し、断面による遺構検出に重点を置いた。その結果、9月末の時点で、40軒余の竪穴住居址、多数の土坑・溝址、人骨の遺存する墓などが検出・調査された。10月31日には、工事用道路部分の遺構検出に着手し、松原東の調査区全面にわたって調査の手が及ぶこととなった。この工事用道路部分については、本遺跡全体に関わる工事工程の関係で本年度引き渡しという契約となり、古代面が終了すると同時に下部の調査面へと随時移行していくこととなる。また、松原東全体を貫いているため、この部分が大きな意味でのトレンチとなり、その後の調査計画に見直しを与える結果となった。11月6日には、調査研究員2名が増員され、作業員も実働70名規模となった。同時に工事用道路部分の弥生時代後期面の調査が開始された。11月27日からは、弥生時代中期面の調査が並行して実施され、11月30日には弥生時代中期の竪穴住居址が検出された。その後も、弥生時代後期面の調査が継続して実施されたが、遺構・遺物は一切検出されず、松原東においては弥生時代後期の文化層が無いものと判断するに至った。一方古代面の調査は、11月末の時点で、竪穴住居址の検出数が100軒にのぼるなど、厳しい調査状況を継続しつつ、12月7日をもって古代面の調査を終了した。また、11月22日には、山際の工事用道路部分で旧河道が古代面にて検出され、次年度以降の調査課題として重要な位置を占めることとなった。なお、工事用道路部分の調査は翌年1月12日まで継続し、弥生中期面の調査を終了させた。この間、12月10日に古代面の現地説明会を松原西とともに開催した。

【平成2年度調査体制】長野調査事務所長 峯村忠司

同 庶務部長 塚田次夫

同 庶務部長補佐 松本忠巳

同 調査部長 小林秀夫

同 調査課長 宮下健司

調査研究員 原 明芳 青木一男 岡沢康夫 小林清人 中沢道彦 西 香子

三上徹也 白沢勝彦 田中 正 宮脇正美 上田典男 伊藤克己  
 山崎光顯 夏目大助 町田勝則 出河裕典 甲田圭吾 松岡忠一郎  
 寺内隆夫 木内英一 中平智昭 下島浩伸

【調査経過】全体で調査研究員20名、作業員220名という体制で年度当初から調査に入る。具体的には、前年度の調査結果を受け、新たに細かい地区割をし工事工程に対応することとなった(第1図)。この内古代に関わる調査は⑤～⑧区で、①・③区は弥生中期面からの継続調査である。継続調査については、前年度の3月5日より実施されており、ことのほか順調に調査は進行していた。が、4月17日、③-1区において縄文時代の文化層が確認された。「高速道開通に暗雲」とまで新聞に評されてしまうほどで、実際に今後の調査に及ぼしたものは計り知れないものがあった。また、年度当初、⑧-3斜面部において、五輪塔が数多く検出され、中世墳墓群の存在が想定されるなど、本遺跡の調査担当班のみでは解決されない問題が相次いで浮上してきた。年度途中で採用された2名の調査研究員がそのまま本遺跡に配属されるなどの対処の他、工事エリア・工程及び調査期間等についての協議が、調査の進行に合わせ、県文化課・道路公団・本線工事業者・当センターの間で再三実施された。以下、調査区ごとに調査経過の概略を記す。

#### 松原西

調査研究員5名、作業員100名という体制で、4月5日より調査に臨む。4月17日に③-1区で縄文時代の文化層が確認され、関係機関による協議の結果、松原東全域の面的調査が実施されることとなり、それに伴い、松原東に設定されていた県道と河東線をまたぐ高架橋の工事エリアが、新たに松原西に設定された。その結果、調査期間が大幅に短縮されることになり、未だ調査の手が及んでいない⑥区の調査工程に多大な影響を及ぼした。

#### ①-1, 2区

弥生中期面の継続調査を実施。調査終了後、古代及び中世の井戸址の断ち割り調査をする。前年度の3月5日より調査を開始し、①-1区は4月27日、①-2区については7月15日にそれぞれ調査を終了する。

#### ④区

5月10日より調査を開始。①-1区に接する部分から着手し、その部分を中心に西側、東側に調査範囲を広げていった。6月4日には、松原東から調査研究員4名を投入し、調査のスピード化を図る。7月20日に古代面の調査を終了する。古代面の調査が終了した調査ブロックごとに、漸次、弥生後期面の調査に入る。8月17日にはすべての調査を終了する。

#### 松原東

調査研究員15名、作業員120名という体制で、4月5日より調査に臨む。8月17日には松原西の調査を終えた調査班が合流し、新たに採用された調査研究員2名も加わり、当センターでも最大規模の体制となる。調査は小班に分れ、それぞれ時代・内容・性格の異なった調査を実施しており、それらは調査面を速え、標高差として具現化している。そしてそのすぐ隣では高速道の工事が進行しているという状況は、さながら当センターが抱えている多くの課題の縮図ともいえる。

#### ①-1, 2区

弥生中期面の継続調査を実施。調査終了後、古代及び中世の井戸址の断ち割り調査をする。③-1区については前年度の3月5日より調査を開始し、4月17日の井戸址の断ち割り調査の結果、縄文時代の文化層を確認する。本地区における縄文時代の調査を試掘調査と位置付け、5月21日に調査を終える。③-2区については、4月5日より継続調査を開始し、③-1区の調査結果を受け、7月10日から縄文面の調査に入り、翌年2月15日に調査を終了する。

#### ③区



調査区を横断する市道により東・西地区に分ける。4月16日より、市道の迂回路設定部（⑤区東）から調査を開始する。隣接する⑦区の排土搬出状況を見ながら、4月23日から⑥区西の調査を開始する。6月1日には市道部分を除いて⑤区東・西とも古代面の調査を終了する。以後、弥生中期面、縄文面の調査を引き続き実施し、11月7日に調査を終了する。市道の下部調査については、11月16日より開始するが、この部分のみが島（台）状に残っているため、既調査範囲との連続性が捉えづらく、調査は難渋する。12月11日には古代面の調査を終了し、続く弥生中期面についても12月15日に調査を終了する。

#### ⑦区

4月5日より調査を開始する。5月15日の古代面調査終了と同時に、この地区の調査は一時中断する。調査の再開は、松原西の調査を終了させた調査班が松原東に合流することで始まり、8月17日から弥生中期面、10月26日から縄文面の調査が実施された。調査は翌年2月8日まで継続し、縄文後期面の調査を終了した段階で一時中断する。

#### ⑧-1, 2区

工事用道路部分で検出・調査されていた河川址の継続調査を4月5日から23日まで実施。4月23日をもって松原東の工事用道路部分の調査を終了する。その後調査は一時中断し、⑧-1区の表土剥ぎを5月22日より開始することで調査は再開された。5月25日より遺構検出を始めるが、遺構の分布は希薄で、6月1日には古代面の調査は終了し、弥生中期面の調査に移行した。⑧-2区については、⑧-1区の調査と並行して5月29日より遺構検出を開始した。⑧-2区も遺構の分布は希薄で、6月6日には河川址の調査を残し、古代面の調査を終了する。河川址の調査は、弥生中期面及び縄文面の遺構調査と並行して実施された。河川址は断面調査の結果、縄文時代から古代・中世に至るまで河川として存続していたことが明らかとなった。その内、古代に相当する層からは、人形や曲物などの木製遺物の他、築状遺構が検出された。調査は、築状遺構の木組みを残して8月17日に終了するが、築状遺構の木組みについては、調査期間等の問題もあり、ウレタンフォームを用いて現場から切り取り、別途調査を実施することとした。その後、弥生中期面・縄文面の調査を実施し、10月29日に本地区の調査を終了する。

#### ⑧-3区

年度当初に実施した本年度調査区の事前踏査の際に、斜面部で数段にわたる石垣と五輪塔の一部が確認された。五輪塔については、前年度から平坦部でも幾つか検出されており、そのことも勘案し、斜面部に中世墳墓群が展開することを想定して調査をすることとした。調査は8月22日より斜面の整備、道作りから開始された。この時点で、五輪塔の各部位が表採、または石垣中に見出すことができ、相当数の五輪塔が存在していたことが予想された。8月30日、石垣にトレンチを入れると、焼骨（火葬骨）がまとまって検出され、土坑等の掘り込みも検出された。断面観察からは、石垣の造成時期が現代に近いことが把握され、同時に五輪塔の各部位を石垣並びに裏込石として利用していることが明らかとなった。その後、石垣を取りはずし、狭小なテラスを調査するというを繰り返し、11月2日には梵字が墨書された地輪が検出される。11月27日、千々和到東京大学助教授（当時）を招聘し、中世墳墓についての指導を仰ぐ。調査工程の関係で、11月25日より測量を開始し、12月11日に調査を一時中断する。

【平成3年度調査体制】 長野調査事務所長 峯村忠司

同 庶務部長 塚田次夫

同 庶務部長補佐 山岸今朝寛

同 調査部長 小林秀夫

同 調査課長 百瀬長秀 原 明芳（整理課長代理）

調査研究員 原 明芳 上田典男 百瀬忠幸 伊藤克己 大和龍一 田中貴美子  
夏目大助 出河裕典 西 香子 岡沢康夫 小林清人 田中正治郎

【調査経過】発掘調査の最終年度となる。調査研究員12名、作業員120名という体制で、⑦区の縄文時代前期末葉～中期初頭と⑧-3区の調査を実施。調査の進行状況に合わせ、7月1日より調査研究員7名、作業員70名、9月1日より調査研究員6名、作業員70名と規模を縮小していく。

#### ⑧-3区

狭い範囲ながら、河川址、集落址、斜面部に立地する墓域という性格の異なる三者が併存する地区で、調査工程の関係から平行して調査を進めることとなった。

河川址(⑧-3a区)：4月1日より表土剥ぎを開始し、本年度の発掘調査が本格的に開始する4月4日にはトレンチ調査を実施する。4月15日より流路の掘り下げを開始する。多数の大小の礫と木製遺物等が検出される。4月22日より実測・測量を始め、5月7日には古代に相当する流路及び層準の調査を終了する。河川址の調査は継続して、6月4日をもって調査を終了する。

集落址(⑧-3a区)：4月5日より遺構検出を開始し、4月8日には中世の火葬施設が検出される。4月22日には古代の竪穴住居址等が検出されはじめ、山裾に営まれた集落址が浮き彫りとなってくる。5月31日に古代面の調査は終了するが、その後、弥生面・縄文面の調査が継続して行われる。天候が不安定だったこともあり、調査日程はずれこむ傾向にあったが、10月11日をもって縄文時代の調査を終了するとともに、本遺跡のすべての発掘調査が終了となる。

斜面部(⑧-3b区)：前年度の継続で、4月8日より遺構検出を開始する。4月10日に火葬墓が2基検出されるが、その後、他の調査区との関係から断続的な遺構検出作業が実施される。また、前年度から人為的か自然的所産か、解釈の定まらなかった集石部分にトレンチを設定し、断面調査をしたところ、5月1日に版築と思われる互層堆積、石室を形成したであろう巨石、耳環の出土と相次いで検出され、この部分が横穴式石室の古墳であることが明らかとなった。以後、中世火葬墓と古墳の調査が並行して実施される。5月9日には、道路公団立会のもと遺跡及び調査範囲の確認が行われた。5月17日には古墳より標高で言って下位に当たる部分の中世遺構の調査を終了する。5月20日から古墳より上位の中世遺構の調査に入り、5月24日には、並行して古墳と同じ標高の中世遺構の調査とともに、古墳の墳丘範囲を確認する調査を開始する。6月14日に墳丘の空中測量・撮影。6月17日から墳丘整地面までの掘り下げ及び石室上面の精査を開始。中世火葬墓が石室内で確認される。7月8日より石室調査を開始する。耳環・勾玉や鉄刀・鉄鏃などの副葬品の他、複数の頭骨が検出される。7月24日の石室空中測量を経て、石室の断ち割り、8月7日から袖石の露出作業に入る。8月19日より石室障床面下の配石(配水溝)の調査を開始するとともに、石室内の埋土の水洗選別作業を実施する。この水洗選別作業によって、無数のガラス小玉等が得られた。10月3日に墳丘整地面、石室掘り方等のレベルングをし、最後に検出された中世火葬施設の調査を終えて、本地区の調査を終了する。

#### (2) 整理作業(平成4年度～11年度)

前半の平成4～6年度は、松原遺跡全体の基礎整理作業として位置付けられる。調査期間等の関係で、冬期整理作業の実施が十分でなかったこと、年度を越えた分割調査と大量の調査研究員の動員、さらには想像を絶する膨大な遺構数・遺物量を抱えていたために、基礎的な整理に3年間を要した。後半の5年弱については、遺物が保持する時代の特殊性ゆえ、整理計画の破綻が幾つかの場面で生じ、計画変更等が余儀なくされた。以下、順を追って概略を記す。なお、平成10年度には、長野県の行政改革に伴い、当センターは財団法人長野県文化振興事業団に吸収合併される。

【平成4年度整理体制】長野調査事務所長 岡田正彦  
 同 庶務課長 山崎今朝寛  
 同 整理課長 原 明芳  
 調査研究員 上田典男

本格的な松原遺跡の整理作業に着手した年度であるが、本年度は弥生時代中期～中世の図面整理と人骨・獣骨、金属製品、植物遺存体、昆虫等の分析・鑑定・保存処理を要する遺物の整理に終始する。

【平成5年度整理体制】長野調査事務所長 岡田正彦  
 同 庶務課長 羽生田博行  
 同 整理課長 原 明芳  
 調査研究員 上田典男 調査員 山極 充

前年度からの作業を継続しつつ、本遺跡出土のすべての土器・石器等の遺物洗浄・遺物台帳作成・注記作業を中心とした整理作業を実施。一部、縄文時代の図面整理・土器接合作業に着手する。

【平成6年度整理体制】長野調査事務所長 岡田正彦  
 同 庶務課長 羽生田博行  
 同 整理課長 原 明芳  
 調査研究員 上田典男 増村香子 調査員 山極 充 西嶋洋子

前年度同様の作業内容を継続するが、縄文土器の接合作業を本格的に開始し、器形復元・接合関係図等に着手する。

【平成7年度整理体制】長野調査事務所長 小林秀夫  
 同 庶務課長 外谷 功  
 同 調査課長 百瀬長秀  
 調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 増村香子  
 調査員 西嶋洋子

時代別に担当者を置き、「縄文編」と「古代中世編」、「弥生編」と「古墳前期編」とに整理体制を2分して本格的に整理作業に取り組むこととなる。以下、前者のみの整理経過を記す。本年度は「縄文編」の整理作業に重点を置いたため、「古代中世編」に関わる整理作業は一時中断する。ただし、木製品に関しては、保存処理作業の関係があるので、実測・写真撮影等の作業を進めた。なお、木製品の实測作業については、写真実測（シン技術コンサル）を導入し、作業の効率化を図った。

【平成8年度整理体制】長野調査事務所長 小林秀夫  
 同 庶務課長 外谷 功  
 同 調査1課長 百瀬長秀  
 調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 藤森俊彦 増村香子  
 調査員 西嶋洋子

昨年度に引き続き「縄文編」の整理作業が中心となるが、古代住居址の属性分析・住居址出土土器の接合作業を並行して実施した。

[平成9年度整体制] 長野調査事務所長 小林秀夫  
同 庶務課長 外谷 功  
同 調査1課長 百瀬長秀  
調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 町田勝則  
調査員 西嶋洋子

昨年度に引き続き「縄文編」の整理作業が中心となるが、古代の土器接合・実測等を並行して実施。

[平成10年度整体制] 所 長 佐久間鉄四郎  
管理部長 山崎悦雄  
調査部長 小林秀夫  
調査1課長 百瀬長秀  
調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 賛田 明 町田勝則  
調査員 西嶋洋子

住居址出土の古代土器実測を中心に、金属製品・石器・石製品・骨角牙製品・鍛冶関係資料・文字関係資料等の実測・計測・写真撮影を実施する。また、木製品を手始めにトレース・製版作業を開始する。

[平成11年度整体制] 所 長 佐久間鉄四郎  
管理部長 山崎悦雄  
調査部長 小林秀夫  
調査1課長 百瀬長秀  
調査研究員 上田典男 青木一男 市川桂子 賛田 明 町田勝則  
調査員 西嶋洋子

古代土器及び中近世の土器・陶磁器の実測とともに、各種遺構・遺物図版のトレース・製版作業、写真撮影、原稿執筆などを経て編集作業を実施し、3月30日に本報告書を刊行する。並行して、縄文時代・古代・中世に関わる遺物、図面・写真・記録類の収納作業を実施する。



## 第2節 調査の方法

### 1 発掘調査の方法

はじめに遺跡の名称・記号について触れておく。遺跡の名称は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に掲載された「松原遺跡」とした。なお、文化庁に登録されている長野県埋蔵文化財包蔵地番号「6177松原遺跡」に相当する。遺跡を表す記号は、当センターではアルファベット3文字で表記することを原則としている。本遺跡の場合、頭文字に長野県を9地区に分割した長野市に該当する「B」を用い、次の2文字は「MATUBARA」の「MA」を付加して「BMA」とした。この遺跡記号使用の目的は、発掘調査段階での便宜を図ることはもとより、今後の情報処理システムにおけるデータベース化に対応するためのものでもある。したがって、少なくとも当センターが用いる遺跡記号については、3文字の構成に重複はない。なお、遺物への注記、遺構・遺物の実測図についても「BMA」の略号を用いて表記してある。

#### (1) 遺構検出

試掘調査の段階で文化層と捉えた層序の上面まで、重機（バックホー）により掘削した。次に手作業による遺構検出等を行い、その後遺構等の精査を実施した。ただし、遺構と遺構外との土質の違いが明確でないため、平面からのプラン確認とサブトレンチによる断面での確認とを併用している。また、工事工程の関係から、分割調査を余儀なくされており、その都度調査範囲の確保、安全確保に努めた。しかし、各調査区との連携、調整が不十分な場合もあり、調査区を越えて分布する遺構については、十分な調査ができなかった場面もあった。反省点として、今後に生かしていきたい。

#### (2) 主な遺構の調査方法

掘り込みを伴う遺構（竪穴住居址、土坑等）については、先行トレンチを入れて土層の状況を確認した後、層位を追って面的に掘り下げるといった一般的な方法をとった。

井戸址については、古代遺構調査面において、断面調査を含めて最大限の調査を実施し、その地区の最下面の調査が終了後、重機を用いて断り割り、断面調査を実施した。したがって、同じ井戸址の中でも底面まで断面調査ができなかったものや、途中断面図が欠落するものなどあり、総体として不十分な調査となってしまった。

掘り込みは明確でないものの遺物の分布が視覚的にまとまりとして捉えられたもの、掘り込みは確認できるもののプランが不明瞭なもの、または極端な不整形プランを呈するものについては、SXの遺構記号を冠し、遺構として取り扱い、同様の調査を行った。

また、遺物の出土量が豊富で、なおかつその範囲が広い場合（SD102, SD1019, 中世墳墓群）などは、空中測量を実施した。

なお、遺構についても遺跡記号と同様の観点から、その性格により分類化した記号を用いた。本遺跡で使用した記号は以下のとおりである。

SB……竪穴住居址	SC……道路址	SD……溝状遺構	SF……焼土址
SK……土坑	SM……墓址（古墳を含む）	ST……獨立柱建物址	SX……性格不明遺構

ただし、遺構記号は、遺構検出時に付しているため、調査を進めていく段階で、あるいは整理作業を進めていく中で、記号が表す遺構の性格と実際の遺構の性格とが合致しなくなる場合もあり得る。特に、SKに

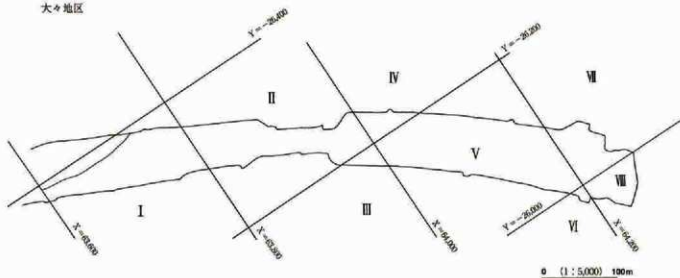
は井戸址やほとんどの墓址、鍛冶炉などが含まれている。また、古墳についても古墳調査の対象となったのが1基だけだったこともあり、調査時は1号墳と称してSMは用いていない。SMを用いたのは、整理作業の段階になってである。

また、遺構記号の後に付加した番号は、前節で記したように並行して調査が進められていた松原西と松原東とでの番号の重複を避けるため、松原西は1から、松原東は1001から用いた。例外として、河川址について100番台を使用した。なお、松原東の斜面部については、縄文時代の調査（遺構番号は3000番台を使用）と並行していたため5000番台を用いた。

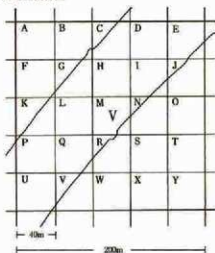
### (3) 測量の方法

グリッドの設定は、国土座標のメッシュに従うことを原則とした。測量基準点は国土地理院の平面直角座標系の原点 ( $X=0.0000$   $Y=0.0000$  長野県第八系) を基点に200倍の数値を選んで調査範囲内のX軸・Y軸を測量基準線とした。これをもとに200×200mのグリッド(大々地区)を設定し、さらにこれを40×40mの区画(大地区)に分割した。大々地区は南西から北東方向へⅠ～Ⅶと記号を与え、大々地区の中に25区画入る大地区については、北西から南東方向へ順次A～Yの記号を与えた。大地区をさらに、8×8mごと(中地区)、2×2mごと(小地区)に分割した(第2図)。このうち中地区は、割付平面図(縮尺1:20)

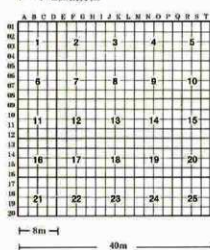
大々地区



大地区割付図



中・小地区割付図



第2図 大々地区の設定と割付

を作成する基準となり、調査を進めていく上でも一つの単位とした。こうして設定したグリッドを基準に、簡易遺り方測量で遺構の実測等に当たった。なお、調査面が深くかつ複数に渡るため、実際の基準杭の設定並びに絶対高の算出は測量業者に委託した。

#### (4) 遺物の取り上げ方

遺構内から出土した遺物については、個々の遺構の状況にもよるが、原則として3次元ドット測量または図化して取り上げた。遺物出土が極端に少ない場合や、遺構の時期、あるいは性格を反映していないと判断された場合には、一括して層位ごとに取り上げた。遺構外出土の遺物については、8×8mの中地区で一括して取り上げた。

また、植物遺存体や鍛造刺片、またはガラス小玉など微細な遺物が確認された場合など、随時、遺構に対して任意に3次元を設定して土ごとに取り上げ、後に水洗選別を実施した。

#### (5) 写真撮影

遺跡・遺構・出土遺物等の写真撮影には、マミヤRB6×7とニコンFM2(35mm)を併用し、ともにモノクロプリント(フジネオパン)とカラーリバーサル(フジクローム)で撮影した。ただし、6×7カメラは、遺構の状況や性格により必要に応じての使用を原則とした。

写真撮影は調査研究員が行い、現像及び焼き付けについては業者に委託した。また、航空写真についても業者に委託した。なお、報告書掲載の遺物写真の焼き付けは、当センターの写真セクションが中心となり実施し、一部業者に委託した。

## 2 整理作業の方法

### (1) 発掘記録の整理

#### ア 図面類

検索の利便性を図るために、割付平面図・断面図・微細図の3種に分類し、それぞれ通し番号をふり、図面内容を明記した一覧表を作成した。

#### イ 台帳類

発掘調査中に作成した各種の台帳については、「現場台帳」と位置付け、それらを基に項目の変更や補充等を行い、新たに各種台帳を作成した。

#### ウ 写真類

写真の整理については、発掘調査と並行して実施していたため、年度別調査区ごとにアルバム・台帳が作成された。整理作業に至り、検索の利便性を図るために、モノクロ写真のネガアルバムについては年度順に通し番号をふり、リバーサルフィルムについては遺構ごと・撮影項目ごとに並べ替えて新たにスライドファイルを作成した。そして、モノクロ・リバーサルとも管理台帳・遺構別写真台帳を作成した。

### (2) 遺物の整理

#### ア 土器

土器についての整理作業は、洗浄→遺物台帳作成→注記→接合→分類→選別→実測→統計処理→復元・写真撮影という一連の作業工程で実施した。「洗浄」～「注記」までを、前節で記したように基礎整理作業期間に実施し、住居址出土土器について、当センターで調査した塩尻市吉田川西遺跡(原1989)、松本市の各遺跡(小平1990)の調査成果に則して、大雑把な時期分けをして次段階の接合作業及びその後の展開に

備えた。「接合」以降の作業については、時代別の担当者が置かれてからの作業とした。

「接合」は、基本的に遺構ごと、遺構外は中地区ごとに行い、重複関係にある遺構群の出土土器及び独特な器形・胎土を有するものについては、例外的に遺構間、遺構とその遺構が位置する中地区で接合作業を実施した。また、並行して「接合補強」(徳永1995)を実施している。

「分類・選別」は、遺構ごとまたは中地区ごとに出土したすべての土器を土師器・黒色土器A・黒色土器B・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器等に分類し、さらにそれぞれを煮炊形態・食器形態・貯蔵形態の3種に分類することから始まる。次に、口縁部あるいは底部が1/12以上残存するものを1個体とし、個体数を算出する基準とするとともに、計測を実施した。さらに、その中から実測対象土器を選別した。器種分類については、当初長野市篠ノ井遺跡群の調査成果(西山1997a)を参考に実施したが、実測作業が進行していくにつれて本遺跡の特色等が明らかとなり、当初の枠組みでは網羅し切れない部分が多々見られ、器種分類の見直しが余儀なくされた。しかしながら、遺跡全体の遺物量は膨大で、次の「実測」の対象となった土器群については、見直しが可能であったが、その他のものについては徹底できていないのが現状である。今後の反省とするとともに、再整理の必要性を記しておきたい。

「実測」は、住居址出土土器に関しては、基礎整理の段階で時期区分した時期ごとに、実測対象土器を中心に土器の組成・器種の組成等を見直し、合わせて時期区分の見直しも実施した。そうした中で、一定の時期の特徴を物語るに足りる資料を擁している住居址を選別し、土器実測を実施した。したがって、実測対象土器と選別されながら実測されていない土器が多数存在することとなった。住居址以外の遺構については、遺構の機能・用途が特定できる遺構や時期判断が可能な土器自体または土器組成を持つ遺構等を対象に土器実測を実施した。遺構外出土の土器については、完形土器を中心に、住居址以外の遺構の取り扱いに準じて土器実測を行った。

「統計処理」では、「分類・選別」の際に作成した計測データ、「実測」で得られたデータを基に、遺構出土土器の組成、食器・煮炊具・貯蔵具の構成比、食器の構成比、各種土器の食器の器種組成、各種土器の杯Aの法量分布等々を作成し、本遺跡の段階区分を検討する上での資料とした。

「復元・写真撮影」は、別セクションに依頼したが、その選別に際しては、実測された土器を対象に、復元で器形を補う部分が比較的少ないもの、復元しなければ器形全体が不明確なもの等を考慮した。したがって、実測された完形土器を含めて、復元された土器はすべて写真撮影されている。

なお、灰釉陶器の窯式同定に当たっては原明芳氏、中世以降の土器等については市川隆之氏の指導を仰いだ。

## イ 石器

土器の整理作業と同様に、洗浄→遺物台帳作成→注記までの作業を基礎整理の段階で実施。その後、器種ごとに一覧表を作成し、要実測・要計測等の選別を行った。実測に際して、調整痕・使用痕については、表現方法の一つとして拓本や写真を活用した。なお、石材の鑑定は、市川桂子による。また、出土地点及び出土層位からは時期を古代に特定できるものの、弥生時代中期に一般的に見られる剝片石器・磨石類等が多量に出土している。これらについては、器種名のみを報告するに留めた。

## ウ 金属製品

基礎整理の段階で、本遺跡から出土したすべての金属製品を鉄製品・青銅製品に二大別し、それぞれ一覧表化して、保存処理を施すため保存処理セクションへ遺物を委託した。保存処理セクションでは、以下のような工程で金属製品の保存処理にあっている。

処理前記録(保存処理カードの作成)→写真撮影→X線写真撮影→錆取り→有機溶剤による洗浄→脱塩処理(青銅製品の場合はベンゾトリアゾール処理)→樹脂含浸→強制乾燥→錆取り・接着→欠損部





### 3 報告書作成の分担

#### (1) 執筆分担

本書は調査第1課長百瀬長秀の指導と助言のもとに、調査研究員上田典男が編集・校正を行った。各文章の執筆分担は下記のとおりである。

第2章第1・2節	市川桂子
第3章第2節1・2, 第3節1・2, 第4節1・2,	
第4章第2節7 (2)ウ,エ,オを除く)	青木一男
第4章第2節6, 第5章第3節5	費田明
第4章第2節8	西嶋洋子
上記以外	上田典男

また、本書には、茂原信生氏(京都大学霊長類研究所教授)より玉稿を賜わり、第6章及び第7章第2節として掲載した。記して謝意を表する。

#### (2) 作業分担

基礎 作業：上田典男・山極 充・西嶋洋子

青木明美・鎌田美和子・北沢節子・北村久美子・近藤朋子・立岩洋子・田中由美・塚田祐子・西村はるみ・半田訓子・半田純子・待井明美・朝倉妙子・飯田和子・市川佳代子・今井美枝子・岩田あさ江・梅原祝・大沢映子・大沢豊・太田豊子・大塚利枝・大西啓子・大山久子・岡野みさ子・奥幸子・奥田真弓・尾嶋平一・笠井純子・片桐はまよ・片桐ゆかり・金子実子・熊木澄江・雲井博子・倉島恵子・小坂井定子・小須田優子・小林尚子・小山千恵子・西東千佳子・佐々木勲美・佐藤弘子・椎塚フサ江・清水まゆみ・菅沼かよ子・鈴木洋子・摺田伸子・竹内幸子・田島富子・土屋京子・土屋由美子・戸谷栄子・中村紀子・西沢英子・西村ウメノ・橋詰定子・原内美和子・広瀬礼子・藤木正枝・前野よしえ・増沢ふさえ・松井礼子・丸山すみ子・丸山裕子・丸山公子・三井美津子・三石恵子・峯村恵子・宮川千栄子・宮川美津枝・宮崎鶴井・宮島珠子・宮原豊子・母袋欽哉・母袋満喜子・柳沢尚美・山崎恭一・山村容子・吉池浜子

土器 接合：西嶋洋子

荒井かち・石井ゆみ子・内山恵美子・内山佳代子・岡村のり子・鎌田美和子・岸田初枝・倉島由美子・穴戸静江・関玲子・高山徳子・竹内富美子・立岩洋子・寺沢恵子・丸山和子・丸山りう子・山下千幸

土器・土製品実測：西嶋洋子

石井ゆみ子・岡村のり子・鎌田美和子・倉島由美子・竹内富美子・寺沢恵子・山下千幸・横谷洋子

土器統計処理：上田典男

半田訓子・半田純子

土器 復元：徳永哲秀

安東武子・内山美砂・小林タイ・西沢米子・松林節子・宮入さち・山岸隆男

石器 実測：上田典男

赤羽啓子・浅井とし子・今井せつ子・岡田皖子・笠井すみ子・近藤朋子・鳥羽徳子・

半田訓子・半田純子・三上義子

金属製品実測：上田典男・増村香子

赤羽啓子・宇賀村節子・近藤朋子・横谷洋子

骨角牙製品実測：上田典男

半田訓子・半田純子

木製品実測：増村香子・賛田明

宇賀村節子・臼田知子・佐藤進・寺沢光子・保坂豊子・町田君子・峯村恵子・宮原ゆき子・八代聖子・横谷洋子・淀畝代・渡辺恵美子

遺 構：上田典男

赤羽啓子・近藤朋子・半田訓子・西村はるみ

トレース・製版：上田典男・西嶋洋子

浅井とし子・石井ゆみ子・今井せつ子・岡田暁子・岡村のり子・笠井すみ子・鎌田美和子・倉島由美子・黒岩美枝・竹内富美子・鳥羽徳子・西村はるみ・半田純子・三上義子・山下千幸・横谷洋子

写真撮影・焼付：西嶋 力

北島康子

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

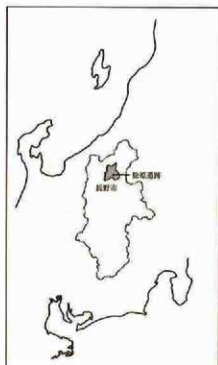
松原遺跡は、長野盆地南東部の長野市松代町東寺尾に位置する。北側を金井山、南側を愛宕山で囲まれた千曲川右岸の松原自然堤防上（寺尾自然堤防とも呼ばれていた）に立地し、西側は蛭川によって削られている。調査地は、自然堤防上の最も幅広い部分に位置し、鳥打峠の南西の山麓から蛭川に向かって北東-南西方向に約800m延びている。途中を道路等で分断されているが、便宜的に長野電鉄河東線より北東側を松原東、南西側を松原西と呼んだ。

### 第2節 地理的環境

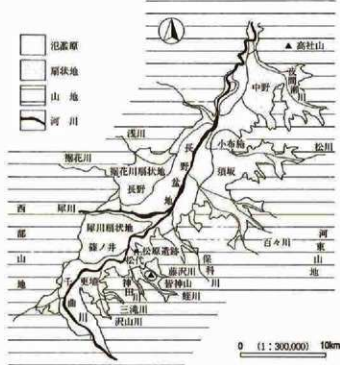
#### 1 長野盆地の地形

長野盆地は、南北長さ40km、東西幅8～10km、標高330～400mの紡錘形をした盆地である。西側は西部山地、東側は河東山地に明瞭に区分される。盆地の周辺は、流入する中小河川の扇状地で埋められている。盆地の中心部となる長野市街地は堰花扇状地上に発達し、盆地南部は犀川扇状地からなる。盆地の中央部を南西-北東に流れる千曲川は、それらの扇状地の発達に影響され自由蛇行している（第5図）。

千曲川氾濫原上には、自然堤防や旧河道の砂堆・中洲などの微高地と旧河道・後背湿地などの微低地が



第4図 遺跡の位置



第5図 長野盆地の地形（「中部地方Ⅰ」赤羽 花岡1988に加筆）



あり、それらが合わさって微地形を形成している。千曲川は、更埴市稲荷山・八幡付近で河床勾配を1:1000mと緩め、北西から北東方向へ流れの向きを変え、蛇行を始める。千曲川の左岸側には、八幡、稲荷山、塩崎、平久保、旧篠ノ井(東篠ノ井、横田)、東福寺にかけて大規模な自然堤防が発達し、その西側には後背湿地が発達する。右岸側も雨宮・清野・松代・牧島の自然堤防とその東側に後背湿地となる溝入低地が形成されている。

## 2 遺跡周辺の地形

長野盆地東側の河東山地は、壮年期の侵食地形を示す。河東山地から延びる主な尾根は北西-南東方向に延び、さらに枝状に小さな尾根が広がる。山麓線は入り組んでおり、千曲川氾濫原と山地との境界線はリアス式海岸線のようなものである。松代付近の河東山地山麓部にはかなり急傾斜の扇状地が発達する。これらには崖錐性の堆積物の供給が多く、扇状地堆積物とともに崖錐扇状地を形成する。松代城下町は、地蔵峠より流れ出る蛭川(関屋川)・神田川によって形成された扇状地の末端部に発達した。清野や東条、西条付近の山地において、崖錐性の堆積物が押し出し地形を作る。松代町南東に位置する皆神山は、標高659m、比高250mの、更新世中期の溶岩円頂丘である。

千曲川右岸は氾濫原であり、清野、松代、牧島には道島・猫島・柳島・牧島など島のつく地名が多い。この氾濫原は、やや高い自然堤防Ⅰ群とやや低い自然堤防Ⅱ群、後背湿地、旧河道に区分される(第6図)。

清野は妻女山から難山の間位置し、山脚は半円状の円弧を描く。ここには、山沿いに後背湿地、その北側に大規模な自然堤防が見られる。後背湿地は、かつて排水不良の溼田で、蓮田であった。自然堤防は、明瞭な旧河道を境にⅠ群とⅡ群に区分できる。Ⅱ群は、千曲川に近い地域に発達する。Ⅰ群とⅡ群の比高は、最大約1.5mである。自然堤防Ⅱ群の中の旧河道部分は砂質の土壌からなり、畑として利用されている。松代町岩野は、薬師山の北側の山陰に洪水を避けて立地する中洲集落である。

松代付近の低地は、ほぼ長野野鉄河東線より千曲川寄りに位置する。松代と東寺尾を結ぶ線より東に旧河道はなく、千曲川の東側への溝入はこの辺りまでであった。海津城はかつて千曲川に臨んでおり、江戸時代に大がかりな人力による流路変更が行われた。旧河道は百間堀と呼ばれ、現在まで残る。また、神田川沿いの水田地も旧河道にあたる。神田川は、平成6年に蛭川を経ず直接千曲川へ流れ込むような直線的河川に改修された。

松原遺跡の立地する金井山や愛宕山の西側低地は、蛭川の東側の自然堤防Ⅰ群と西側の自然堤防Ⅱ群に区分される。Ⅰ群とⅡ群の比高は、最大約1.5mである。現地表面での帯状の凹凸や等高線の様子は、縄文時代以来の地形形成を反映していることがわかってきた。例えば、現在山沿いに用水が流れて帯状に低くなっている部分は、古代までここに流路があった場所である。蛭川と直交する帯状の凹地の一部は、地表下面下1mに礫が分布し、少なくとも古代に河道であったことが確認された(長野市教育委員会1993)。また、弥生時代中期の蛇行する河川の跡は、等高線と一致しているように見える。現地形がで上がったのは中世の頃である。自然堤防上は桑畑、長芋栽培が行われており、近年果樹園も増加している。西寺尾集落は自然堤防Ⅱ群の中洲上、標高351m前後の場所に立地する。蛭川は、東寺尾で藤沢川を合流し、その下流で自然堤防を大きく侵食しながら千曲川に流れ込む。合流地点より上流では天井川が発達し、周囲に低湿地を形成する。

更埴橋と関崎橋南方の牧島付近の低地は、小島田・牧島・大室の集落を取り巻くように湾曲している。この低地は、少なくとも2本の旧河道が明瞭に認められる。旧河道は水田として利用されていたが、近年になって畑へ転換されることが多くなってきている。金井池も旧河道の跡で、千曲川の水位が上がれば水が噴き出すと言われている。旧関東枝街道(旧前橋街道)は湾曲した自然堤防上を通らず、松代-鳥打峠-



大室の直線的なルートであったが、大正5年に山麓を通じる道につけかえられた。明治以前には、千曲川の流路を反映するように、東寺尾・柴は埴科郡、牧島・小島田は更級郡、大室は高井郡に属していた。

松代町柴は、千曲川に向かって突き出した金井山の突端にある標高349m前後の場所に立地する紡錘形をした中洲集落である。水田が無く、大部分が蔬菜地で、金井池の水を灌漑に利用していた。微高地ではあるが、対岸の小島田・花立集落よりは2m程度低いので、堤防ができる以前は、洪水の際には集落背後の旧河道の微凹地に溢水した。集落の立地としては、川が直接ぶつかりそうな場所は避ける場合が多いが、柴集落を取り囲むように千曲川は曲がりながら流れている。松代藩祖真田信之の隠居所が柴にあった。

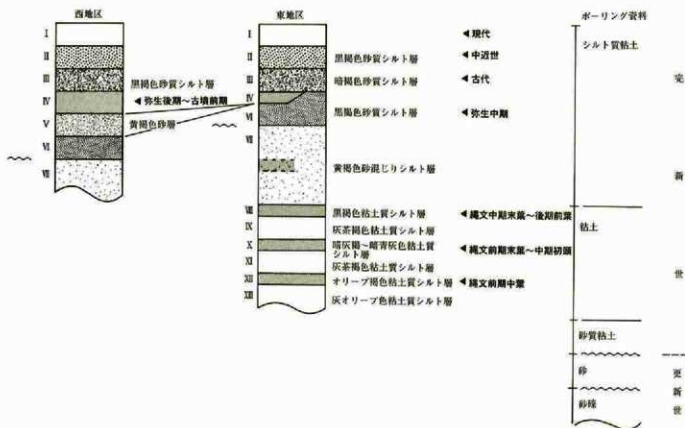
松代町小島田・牧島は、更埴橋下流の千曲川の水衝部に面した中洲上標高348mの場所に立地する集落で、集落域の長軸が千曲川の流れの方向と一致する楕円形である。南には半円を描いて旧河道の低地があり、水田が開かれている。集落中央部の神社の辺りが最も標高が高い。集落の耕地の大半は畑である。旧河道の低地では陸稲を作っていたが、昭和30年代になって井戸を幾つも掘って水田化するようになった。

松代町大室は、小規模な自然堤防I群上に立地する。標高は346.5mで、自然堤防II群との比高は最大約1.5mである。洪水に備え家屋は80cm程度の石積みをしたり、味噌蔵は1.8m程の間知を築いてあり、水辺の集落景観を残している。

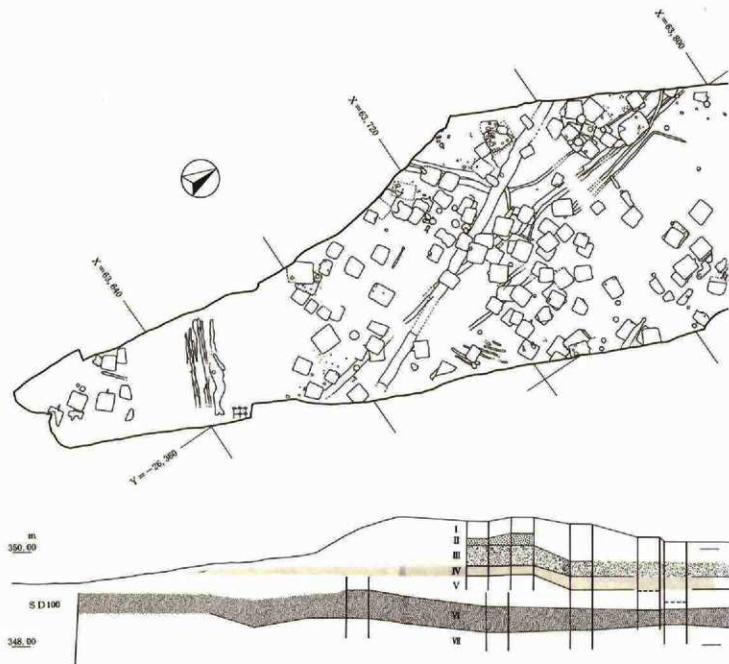
### 3 遺跡の基本層序

#### (1) 調査地の層序

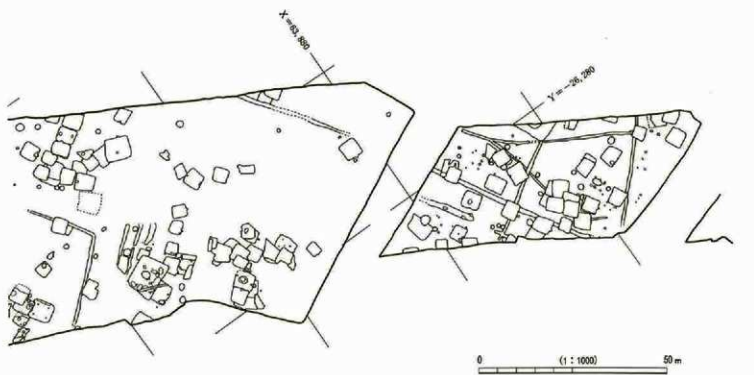
発掘調査地の堆積物は粒度の違いにより上部層と下部層の二つに分けられる。これらをさらに色調、粒度、遺物包含の有無によってI層からⅫ層に細分した。上部層はI層からⅥ層、下部層はⅦ層からⅫ層である。上部層は全体的に砂質であり、下部層は粘土質である。なお、I層からⅦ層までは調査中に基本層



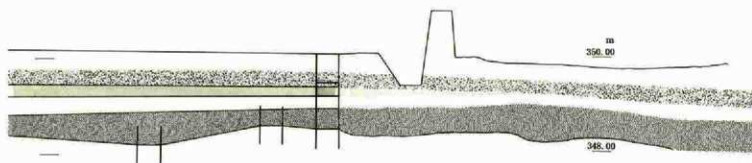
第7図 基本層序



第8図 柱状断面図(1)

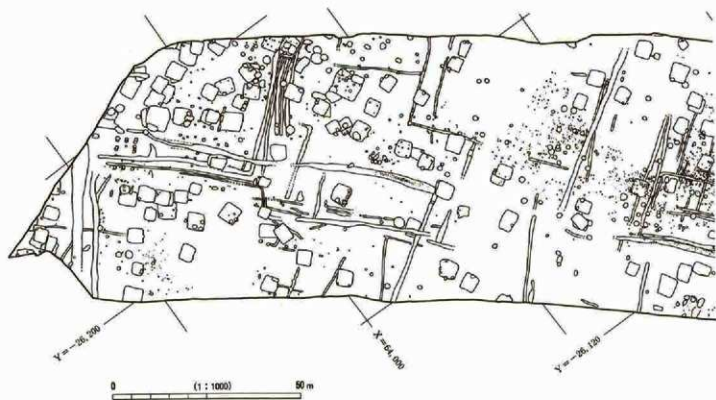


- I 現存作土
- II 中近世遺物包含層
- III 古代遺物包含層
- IV 弥生時代後期～古墳時代前期遺物包含層
- V 砂層
- VI 弥生時代中期遺物包含層
- VII シルト層

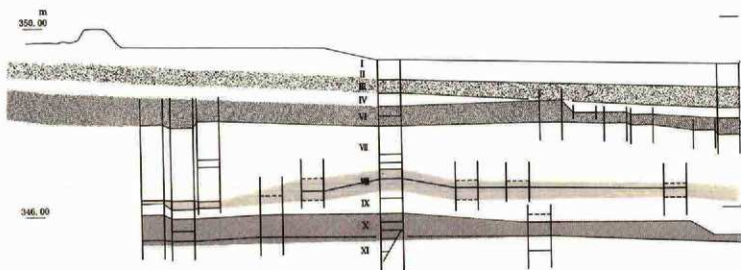


第8圖 柱状断面図(2)

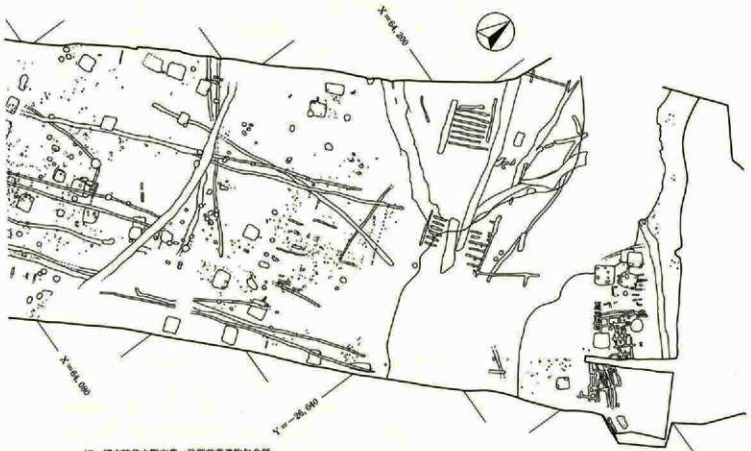




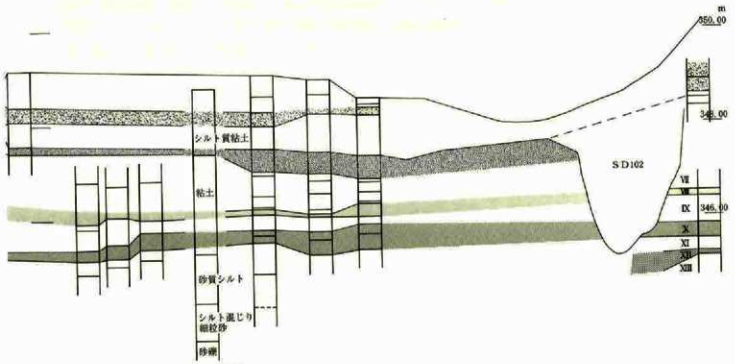
- I 現晴作土
- II 中近世遺物包含層
- III 古代遺物包含層
- IV 弥生時代後期～古墳時代前期遺物包含層
- V 砂層
- VI 弥生時代中期遺物包含層
- VII シルト層



第8図 柱状断面図(3)



- III 縄文時代中期末葉～後期前葉遺物包含層
- IX シルト層
- X 縄文時代前期末葉～中期初葉遺物包含層
- XI シルト層
- XII 縄文時代前期中葉遺物包含層
- XIII シルト層



ボーリング資料  
B1-42

第9図 柱状断面図(4)

序として確定されたものであり、VIII層より下位は整理作業中に区分したものである（第7図）。

I層は層厚20～30cmの茶褐色砂質シルト層で現耕作土である。II層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で、中・近世の遺物を包含する。III層は層厚20～40cmの暗褐色砂質シルト層で古代の遺物包含層である。IV層は層厚20cmの黒褐色砂質シルト層で古墳・弥生時代後期の遺物包含層である。V層は層厚20～60cmの黄褐色砂層で無遺物層である。松原東地区にはIV層の一部とV層は欠如している。VI層は層厚20～60cmの黒褐色砂質シルト層で弥生時代中期の遺物包含層である。VII層は層厚80～140cmの黄褐色砂混じりシルト層で、無遺物層である。淡褐色のバンドを一部で挟むこともあるが層準として認められないのでVII層で一括した。

松原西地区では記録が無いためVIII層以下に相当する地層については不明である。VIII層は層厚10～40cmの黒褐色粘土質シルト層で縄文時代中期末葉から後期前葉の遺物包含層である。IX層は層厚20～50cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。X層は層厚40～50cmの暗灰褐色から暗青灰色の粘土質シルト層で縄文時代前期末葉から中期初頭の遺物包含層である。XI層は層厚40cmの灰茶褐色粘土質シルト層である。VII層は層厚20～30cmのオリブ褐色粘土質シルト層で縄文時代前期中葉の遺物包含層である。VIII層は層厚20cm+の灰オリブ色粘土質シルト層である。青色やオリブ色味を帯びるのは地下水の影響と考えられる。

## (2) ボーリングコアの層序

昭和59年の道路公団によるボーリング調査の第一次土質調査報告書によると、松原遺跡内ではB1-41、B1-42、Ss1-3の3本の機械ボーリングが行われている。ボーリング位置は、B1-41はおおよそIII-25グリッド付近、B1-42はVH-16グリッド付近、Ss1-3はVII Y-25グリッド付近である。B1-41は深度37.25mのコアで、深度5.4mまでは上位より砂質粘土、シルト質粘土、砂混じり粘土からなる。深度5.4～6.5mはシルト質の砂層からなり、深度6.5m以下は礫層からなる。深度16.35m以下では再びシルト質粘土からなり、腐植物を混入する層準もある。深度26.5m以下では砂層、深度28.7m以下で砂礫層となる。B1-42は深度10.45mのコアで、深度7.4mまでは上位よりシルト質粘土、粘土、砂質シルト、シルト混じり細粒砂からなる。深度7.4m以下では砂礫層からなる。Ss1-3は詳しい記載は無い。

2本のボーリングとも上部はシルト・粘土などの細粒物質からなり、深度6～7m以下は砂礫などの粗粒物質からなる。また、B1-41では再び細粒物質と粗粒物質の堆積が繰り返されることが分かった。急激な岩相の変化は堆積環境の変化を表している。細粒物質は小規模な洪水の堆積物、粗粒物質は大規模な洪水の堆積物として捉えることができる。このボーリング調査ではC14年代測定や年代の指標となる火山灰層の検出などが行われていないので明確なことは言えないが、更新世と完新世の境界付近で海岸に接する沖積低地では同じ時期に粗粒物質から細粒物質への岩相変化がみられること（井関1962, 1983）、内陸盆地では諏訪湖の湖底堆積物に認められる岩相変化（安間他1990）や長野盆地北部の延徳低地のボーリングコアに認められる岩相変化（赤羽1995）が報告されている。このことから深度6～7mの急激な岩相変化が見られる層準がほぼ更新世と完新世の境ではないかと考えられる。

### 第3節 歴史的環境

ここでは、本書で報告する古墳時代後期から中世に該当する本遺跡周辺の遺跡分布等をもとに、各時期の様相を概観してみたい。

#### 1 古墳時代後期の様相

本遺跡が所在する松代地区は、長野県下でも後期古墳の分布が濃密なことで知られる地域の一つである。全国的にも著名な大室古墳群（19～23）で代表されるように、積石塚古墳や合掌形石室といった独特の構造を有する古墳が多いのがその特徴である。大室古墳群が体系的・計画的な調査が実施されているのに対して、本遺跡が立地する埴川流域の古墳群は、十分な調査の手が及んでいないものが多く、その内容についても不明な部分が多いと言わざるを得ない。しかしながら、北信地方最大の積石塚古墳である菅間王塚古墳（29・県史跡指定）や横穴式石室系の合掌形石室をもつ桑根井空塚古墳（33・県史跡指定）・竹原笹塚古墳（28・市史跡指定）が分布・現状保存されている地域でもあり、大室古墳群同様、古代史解明に重要な位置を占めることは明らかである。

埴川流域における古墳の築造は、既存の資料からすると、5世紀前半の舞鶴山1号墳（38・市史跡指定）に始まる。その後、5世紀後半もしくは6世紀初頭に舞鶴山2号墳（38・市史跡指定）、長礼山2号墳（26）が築造され、小丸山古墳（30）もほぼ同時期の築造と想定されている。これまで挙げた古墳は、いずれも山頂部もしくは尾根上に立地し、舞鶴山2号墳（前方後円墳）を除いて円墳である。この内、舞鶴山1・2号墳は、岩崎卓也氏により、「二世代にわたる首長墓」で、「長野市の川柳地区や、更埴市などの古墳に遅れて出現するとともに、初出のそれが円墳である、という差異を認め」、「善光寺平の古墳時代前半期における権力構造を考える上で、重要な問題を提起する古墳」と位置付けられている（岩崎1982）。また、長礼山古墳群は、3基の円墳が山腹小尾根上に立地し、調査された2号墳は最下方に位置している。長礼山2号墳は、組合式箱形石棺を内部主体に持ち、石棺内からは2点の金製銅、葺石間から家形埴輪、人形・動物形・水鳥形土製品などが出土している。これら古墳時代中期までの古墳の分布を見ると、所謂松代沖積面の縁辺部の高所に築造されたことが指摘される。それに対して、古墳時代後期になると埴川の氾濫源や内奥に古墳群が形成されるようになる。加えて、横穴式石室さらには積石塚・合掌形石室と単に構造上の問題ではなく、政治・文化事象の反映として新たな要素が導入される。興味深いことに、埴川流域では石室の構造からいって二系統の古墳群が築造されている。一つは横穴式石室系の合掌形石室を持つ系統で、一つは定形化した両袖の横穴式石室を持つ系統である。前者には、盟主墳の風格を持つ大規模円墳の菅間王塚古墳、竹原笹塚古墳、桑根井空塚古墳に代表される麓塚古墳群（34）、牧内古墳群（35）などがある。後者には、本遺跡で検出された松原古墳群の他、南大平古墳（31）、天王山古墳（27）などがある。両者の差異が年代差に起因するのか、まさに系統差によるものなのか速断し難いが、一定地域での社会構造、あるいはその変遷過程を理解する上で好材料を提供していると言えよう。

こうした古墳群に対して、同時期に営まれていたと考えられる集落遺跡・生産遺跡は極めて少ないのが実状である。埴川流域で発掘調査がなされたのは本遺跡の他、屋地遺跡（2）・中条遺跡（11）のみという現状である。したがって、社会構成という面からのアプローチには自ずと限界が指摘されるのは否めないが、フィールドワークとして取り組み、様々な情報を加味しながら研究の前進を図ることに期待したい。

## 2 古代の様相

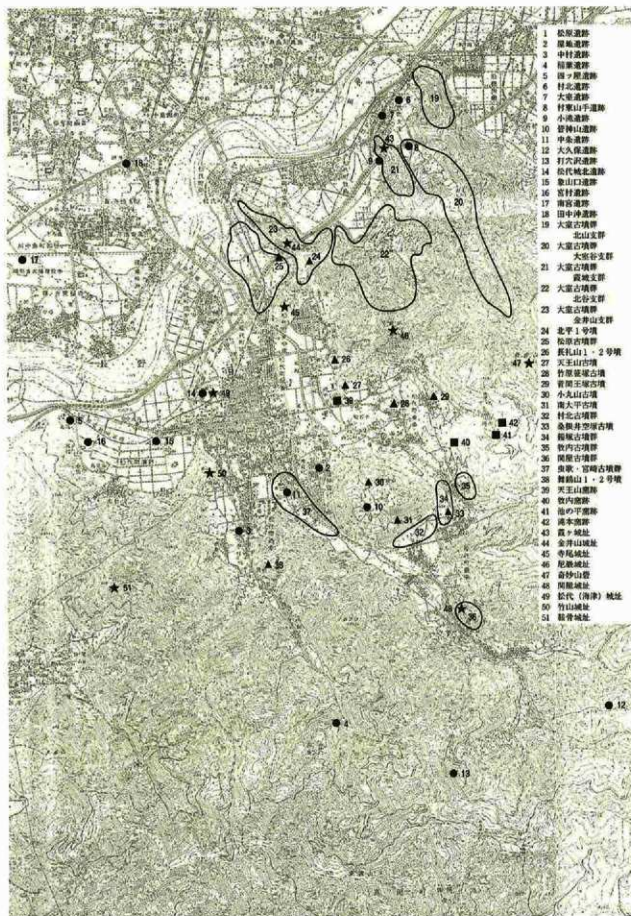
古代社会の長野盆地は、更級、埴科、水内、高井郡に分かれている。ゆえに、松原遺跡が所在する松代地区の古代を考える上では、文献史料上に現れる「埴科郡英多郷」の存在を無視することはできない。『和名類聚抄』によると「埴科郡」の郷は、倉科、磯部、船山、大穴、屋代、英多、坂城の7郷で、この内「英多郷」が松代地区に比定されている。また、最近の研究動向から、「埴科郡内は自然地形、灌漑水系および歴史的背景によって、屋代郷など4郷（倉科郷を含めれば5郷）と、英多郷と、坂城郷という大きく3つの小地域に分けることができる」という見解が提示されている（傅田 1997）。したがって、ここでは、実態が明らかになっているとは言い難い「英多郷」との関連を探るべく、松代地区の古代遺跡について概観する。なお、「埴科郡」に比定されている松代地区以外の遺跡の概要については、当センターですでに報告しているので参照されたい（鳥羽他 1999）。

松代地区の古代の集落遺跡には本遺跡の他、屋地遺跡、中条遺跡、四ツ屋遺跡（5）、村東山手遺跡（8）、村北遺跡（6）、稲葉遺跡（4）がある。この内、稲葉遺跡を除いた各遺跡は、いずれも沖積地に立地する。また、窯業遺跡として、尼巖山や奇妙山の山麓斜面に、天王山窯跡（39）、牧内窯跡（40）、滝本窯跡（42）、池の平窯跡（41）があり、発掘調査はなされていないものの松代古窯址群と捉えられている。その他、標高1,000mを越える地蔵峠や保基谷岳の山稜部に打穴沢遺跡（13）、大久保遺跡（12）といった遺跡の存在が知られている。両遺跡とも未調査のため、その実態は不明と言わざるを得ないが、単なる集落遺跡とは考えられない遺跡である。

一方、こうした遺跡の他に、延喜式内社の玉依比賣命神社、また、西条の清水寺には10世紀代に造像された仏像が安置されている。後者については対象が動産とも言える仏像なので、地域の様相に直接反映させることは躊躇されるが、本遺跡でも仏具の銚型が12世紀代の遺構から出土していることや実態が不鮮明ではあるものの道島廃寺の存在など、仏教という側面では、あながち無視できない情報である。また、松代地区は「象山の東麓から東へ六町（約654メートル）幅の南北の地域が西条地区、またそこから六町幅の地域が中条地区、さらにそれから尼巖山西麓まで六町幅の地域が東条地区となって、六町幅の条里プランにのっていたことがわかる。この区画線は、西隣の清野地区まで及び、八町の距離をもつ」（井原 1989）とあるように「条里的遺構」の存在が指摘されている。この「条里的遺構」が律令制下における条里制の反映と捉えるかどうかは判断し兼ねる。発掘調査においても、水田・畠といった生産遺構は今のところ検出されていない。古代の文化層と現在の地表面との比高差が少ない場合、特にそれが水田に即すると、継続的に畦畔・水田面が形成され、両者の区別がつきにくい状況となるのが一般的である。加えて、長野市篠ノ井遺跡群や更埴市屋代遺跡群などで確認された9世紀後半に比定されている大規模な洪水砂層が、松代地区の各遺跡の発掘調査では確認されていないことから、条里制の存否について全面的に否定することはできないだろう。

松代地区の各遺跡の概要をまとめたものが第1表である。この内、四ツ屋遺跡からは、「家口」と読める墨書土器、「松井」と刻書された須恵器杯片が出土している。「家口」の読み方及び字句の解釈は早急に結論づけられないが、遺跡の占有率が高い特定字句と捉えられ、人名などの固有名詞を表す場合が多いとされる複数字句である点、注目される。「松井」の刻書については、戸隠神社蔵の「妙法蓮華経版木」末書に「英多庄松井住藤原正長 元享元年西三月十八日」とあり、両者を結びつける見解が一般的なようである。また、基壇状の整地地面と礎石から建物址が想定されており、周囲の堅穴状遺構・井戸址・土坑を建物址に関連する施設としている。これらの範囲からは、前述の「家口」という墨書土器が主体的に出土する他、古瓦が出土している。これらのことから、道島廃寺に関連する施設と捉えられている。また、小泉郡





第10図 松代地区遺跡分布図

鑑定される実年代	8c		9c		10c				11c		12c		特記遺物等
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
松原	—————												
黒地	—————				—————				—————				青銅製丸剣、鉄鏝、皇朝十二銭「富貴神宝」 「神」「宮」「足立女」墨書土器出土
中条	—————						—————						緑軸陶器出土
四ツ屋			—————		—————								帯金具、「家口」墨書土器、 「松井」刺書土器出土、礎石建物址
村東山手					—————		—————						

第1表 松代地区古代遺跡の消長

との郡域に位置する打穴沢・大久保遺跡の存在は、小県郡とのダイレクトな交流の痕跡ともみてとれる。本遺跡などから出土する土師器の變は、北陸・越後の影響下で製作されていたことが知られるが、それらと併用して、関東地方で主体的に用いられていた武蔵形甕やその影響を強く受けた薄手のケズリ甕が使用されていた。また、群馬県域に出土例が比較的多くみられる独特の形態をした大形の甕の存在など、東信地区、その先の群馬県との密接な地域間交流を物語るものとしてあげられる。こうした交流の背景として、小県郡とのダイレクトなルートの存在を想定しても許されはしないだろうか。

これまで見てきたように、調査された遺跡の遺構配置または遺構そのものに遺跡間の格差は見出し難いが、鉄器の保有状況、皇朝十二銭や腰帯具の出土、海老錠・サイコロといった地方官衙遺跡等に出土する場合が多い遺物の出土などから差異は見出せそうである。このことが直ちに「小地域」内の政治的・経済的支配関係を表しているとは言えないまでも、重層構造の一端を表しているとは言えまいか。松代地区には、式内社及び仏教に関わる要素があり、窯業生産・農業生産体制が完備し、先に挙げた遺物の他、緑軸陶器・灰軸陶器・須恵器などの商品流通及び土器製作に関わる情報網からもはずれることなく、「小地域」内で取東可能な独自の地域圏を形成していたと言えそうである。しかもその交流範囲は、「埴科郡」の郡域をはるかに越えた範囲を保持している。推測の域を出ないことは言うまでもないが、松代地区が総体として「英多郷」を形成していたと考えておきたい。なお、平安時代でも11世紀代になると「英多荘」という荘園が成立する。「英多郷」がそっくりそのまま「英多荘」に移行したのか、「旧松代町を中心とする北埴の東条・豊条・西条が英多庄に属していた」（米山一政 1978）とあるように、「英多郷」の一部が「英多荘」として寄進されたのか定かではない。むしろ、ここで注目すべきは、一定地域を寄進することが可能な権力、支配構造が11世紀代に「英多郷」内部に成立していた点である。この評価をもって、「英多郷」の独自性がより鮮明なものとなってくると言えよう。

### 3 中世以降の様相

考古学的資料から松代地区の様相を明らかにすることは困難で、文献史料の研究結果を援用したとしても、限定された地域の具体的な様相を描写することは不可能に近い。ここでは、歴史の表舞台（文献史料上）に登場する幾つかのキーワードを基に、考古学的資料を絡ませながら、松代地区の様相を概観する。

鎌倉時代～室町時代の初期は、古代末期に成立した「英多荘」が荘園領主を替えながら存続している。文献史料には、1236年桑井屋敷を所領していた平林四郎が豊後国（大分県）の地頭職に任ぜられ、1321年には英多庄松井に住む藤原正長が戸隠山中院に妙法蓮華経巻一の版木を寄進したことが記されている。また、1253年には「英多荘」が地頭請所となるなど、武士の台頭が見受けられる。同時にこれらの史料から

は、年貢を松代から九州大分の地へ運搬するという遠隔地への物資輸送や、戸隠信仰の存在などが読み取れる。

この頃に相当する遺構として、本遺跡の井戸址・溝址・土坑等があげられる。検出された遺構群から居住域と判断されるが、縄文時代から古代を通して伝統的な居住形態であった竪穴住居址が検出されておらず、中世に至って居住形態の変化が生じたことが窺える。なお、本遺跡以外では、当該期の遺構の検出は見られず、屋地・四ツ屋遺跡で遺物が出土するのみという状況である。

戦国時代初期の1480年頃には、寺尾氏・東条氏・西条氏・清野氏が文献上に登場してくる。寺尾氏・東条氏は坂木中之条の代官を務めており、村上氏の支配下にあったことが窺える。西条氏・清野氏については不明であるが、清野氏については、現在の清野という地名が表すように、村上氏の勢力圏内に含まれていたと考えられている。当時、松代地区を含めた川中島一帯は、現在の坂城町を中心に勢力を誇っていた村上氏と現在の須坂市を中心に勢力を維持していた井上氏とが対峙する境界線上の地域でもあり、大勢力の緩衝地帯となっていた。ここで注目しておきたいのは、松代地区が、村上氏の傘下になりながら、先に挙げた4氏などの所謂「小国人武士」の所領として、分割統治されていたことである。その後、川中島一帯は村上氏と高梨氏、村上氏と武田氏、武田氏と上杉（長尾）氏といった勢力争いの最前線地帯へとなっていくわけであるが、支配者が戦乱の末変わっても、在地の領主（「小国人武士」）の旧領を安堵し、在地領主を介しての間接的な支配体制をとっていたため、在地領主と領民との関係にはいささかも変動がなかったと見てよいだろう。

この頃というように時期を限定することは難しいが、本遺跡の他、屋地遺跡・四ツ屋遺跡で墓址が検出されている。土坑墓が主体で、遺体の姿勢は屈葬姿勢を取っている。この内、四ツ屋遺跡では土坑墓周囲から五輪塔が出土しており、両者の関連が指摘されている。本遺跡で検出された墓址は、墓址の形態・立地、葬法の異同も含め多彩であり、金井山山麓の斜面部からは五輪塔を伴う火葬墓群が検出されている。これら墓址の時期決定及び四ツ屋遺跡も含めた五輪塔の時期に関わることについては、後章で検討することとして、一応、戦国時代以降、墓址の検出数は増大する傾向にある。本遺跡で見られるような多岐にわたる墓址の形態は、葬制・墓制に様々な要素が反映した結果であり、このような要素の出現こそが戦国時代以降の様相と把握される。墓址以外では、16世紀前半と位置付けられる溝址が2条、本遺跡で検出されている（長野市教委調査分）。これらの溝には大塚期前半と考えられる瀬戸美濃系陶器とともに大量のカワラケ・内耳鍋が廃棄されており、周辺に屋敷地が想定できるのではなかろうか。今回報告する地点でも直角に折れる大形の溝や井戸址などが検出されている。

松代地区では、山頂部や尾根上などに多くの城址が分布している。これらのほとんどは天文年間（1532～1554年）以降に繰り広げられた戦乱の中、文献上に登場してくる。1550年、寺尾城（45）は武田氏の属城で、村上氏の属将だった清野氏が武田方に付き、寺尾城が村上・高梨連合軍に攻められていることを武田方に報告している。世に言う「戸石崩れ」の1週間前のことである。1556年、長尾氏（上杉氏）の属城だった東条雨筋城・一尾城址（46）は、武田方の真田幸隆に攻め落とされている。海津城（49）は、武田氏の川中島一帯の支配の拠点として、また上杉氏の侵攻に備えるため、1560年頃までに完成したものと考えられている。武田氏は、合わせて城下町の建設、支城整備に着手している。また、武田氏特有の情報通信網として狼煙台があるが、西条のノロシ山もこれに相当するものと考えられよう。翌1561年、川中島八幡原の激戦に際して、海津城は武田信玄の本陣となる。対する上杉謙信は妻女山に本陣を構え、両者の最終決戦が繰り広げられたことは、つとに有名である。海津城は武田氏滅亡後も戦略上の拠点となり、真田氏と徳川氏、上杉氏と織田氏、上杉氏と豊臣氏というように戦乱の度に目まぐるしく城主が交代している。そうした中で、織田氏・豊臣氏による支配体制はこれまでの間接的なものとは異なり、それぞれ腹心の部

下を配置し、直接的な支配体制および兵農分離政策を遂行した。とはいえ、豊臣秀吉の信濃支配に関わる上杉氏移封に際しても、上杉氏の家臣が松代地区の領主であった訳ではなく、領主（武士）と領民（農民）がそれぞれ在地に根ざしているという関係は、猿ヶ馬場城（更埴市）城主だった清野氏を除いて、ほとんど変化がなかったのである。その後、江戸時代に至り、幕藩体制の中、松代地区は海津城改め松代城とその城下町を中心に松代藩となり、幕末を迎えることとなる。

これまで述べてきたように、松代地区は、古墳時代後期から中近世に至るまで、北信地区の歴史的な要所の一つであったといえよう。本遺跡が所在する東寺尾はその北端部にあたり、蛭川と千曲川の合流点に面した松代地区の中でも最も水害の影響が少ない地点でもある。したがって、政治的力が及ばない限り、最も居住に適した地域と言える。古墳時代後期から古代末期へと連続と続く集落は、このことを物語るとともに、古代末期に成立した「英多荘」の範囲から逸脱している可能性をも示唆しているのではなかろうか。16世紀後半の海津城築城に伴う城下町建設が、この地域に対する最初で最後の政治的圧力になったものと考えられ、16世紀後半以降の出土遺物の激減がそれを物語る。斜面部に展開する五輪塔を伴う墓址群や平坦部の墓域が、仮に16世紀後半以降の所産だとしても、それ以前の居住域とは異なった性格が、この地域に政治力を介して与えられたと考えておきたい。



## 第3章 古墳の調査

### 第1節 松原古墳群の概観と調査経過

#### 1 概観

今回の調査で検出された古墳群は、未周知の古墳群で、調査区の東端、標高351.0～380.0mの金井山山麓斜面部に位置する(第11図)。4基のうち1基は、調査区外のさらに斜面部上方に確認された。微地形の高まりと天井石と推測される巨岩をもって推定している。地目は荒地地となっていたが、石垣を利用して棚田状の桑畑として利用されていたことが窺える。これらの複数のテラスは、今回の調査によって明らかとなった中世墓址群が基礎となって形成されたことが推測される。

調査された3基の古墳は、出土遺物などから7世紀後半の終末期古墳である。いずれも、後世の削平及び崩落による流失が著しく、最も保存状態の良かった1号墳から類推すれば径12m前後の山寄せの円墳で、横穴式石室床面下に暗渠状の排水施設を伴うなど類似した構造を有する古墳群と言えよう。

また、金井山の尾根上には、著名な大室古墳群の金井山支群が分布している。この金井山支群は、大室古墳群の外郭線をなすと認識されており、今回報告する古墳群はその外側に位置することとなる。ただし、金井山支群と把握されている古墳群の中にも斜面部に位置する一群があり、それら一群と今回報告する一群とは尾根を挟んで対称的な位置に分布しており、単純に弁別することには若干の躊躇を覚える。しかしながら、今後、検討を深めていく上においても、今回は松原古墳群という別名称で報告しておきたい。なお、金井山とは反対方向に伸びる、鳥打峠から北平を経て寺尾城跡が位置する通称愛宕山へと続く支脈には、尾根上・斜面部とも古墳は確認されていない。

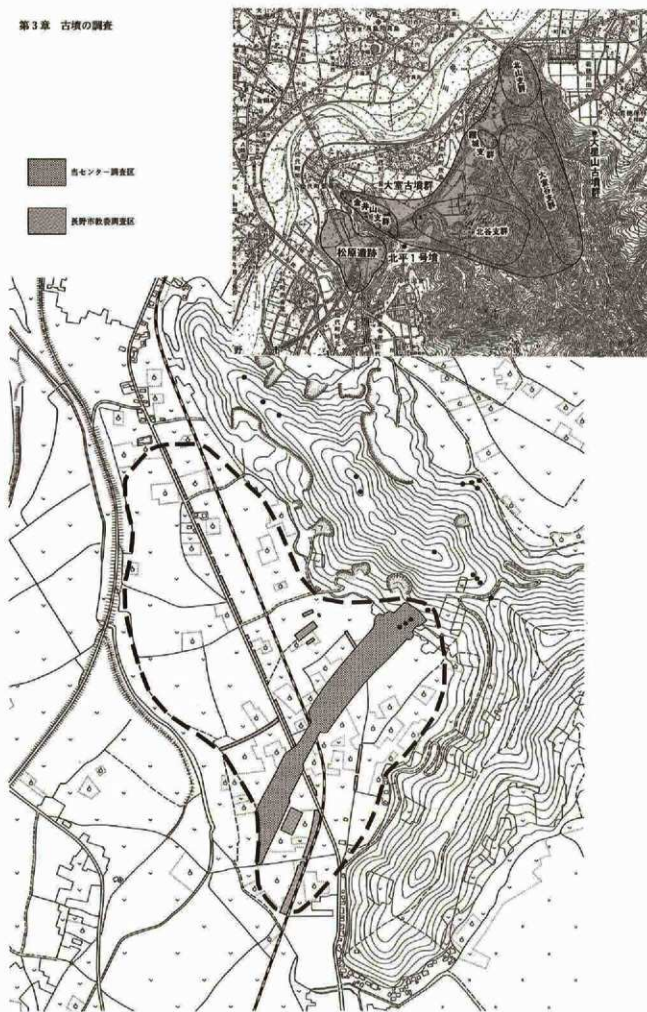
一方、松原古墳群と時期を相前後する時期の竪穴住居址が本遺跡の集落域から検出されている。長野市教育委員会の調査・報告分(長野市教育委員会 1993a)を含めても数軒程度ではあるが、俯瞰・仰視の関係にあることから、両者の連関について注意を払う必要がある。

#### 2 調査経過

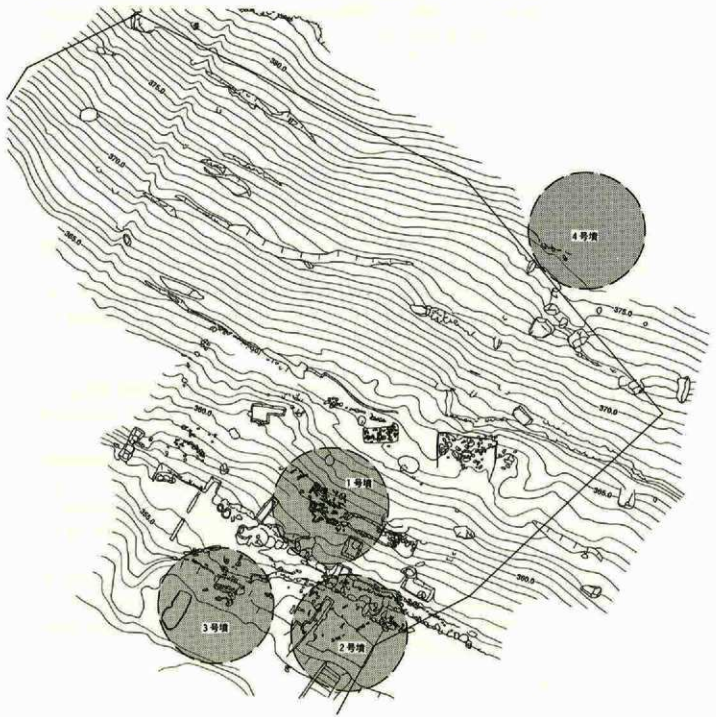
調査された3基の古墳は、中世墓址群の調査中にその存在が確認されたもので、中世墓を営む上で様々な形で利用されている。また、削平及び崩落による流失が著しく、2・3号墳については古墳の残骸として確認された。2号墳は石室床面下の排水施設のみで、3号墳は玄室の奥壁と制壁の一部が残存し、この部分は、中世墓が営まれた時期に周囲を基壇状に整地し「堂」の中心施設として利用されていた可能性も考えられる。一方、1号墳については、石室等が火葬墓として利用されているものの、保存状態が比較的良好で、辛うじて古墳調査の手続きを踏んで調査することが可能であった。以下、1号墳の調査経過ならびに調査方法について記していく。

古墳群が位置する⑧-3b地区は、平成2・3年度の2年次にわたり調査が実施された。このうち平成2年度は、中世墓址群の調査が中心となり、調査を進めていく中で2・3号墳が確認されていった。なお、この時点では、これらについて古墳という認識が曖昧であったため、広義の配石遺構として把握していた





第11図 松原古墳群の位置



第12図 松原古墳群分布図

が、次年度の1号墳の調査結果から、あらためて古墳として認識するに至った。1号墳については、一定範囲に広がる多数の隙の状況から、斜面上の集石あるいは積み石の崩れといった人為的所産によるものか、自然営力によるものか判断がつかない状態で、遺構番号が付されることなく調査を終了せざるを得なかった。平成3年度に至り、集石部中央に斜面の傾斜方向と直交するトレンチを設定し、地山と考えられる黄褐色土層まで掘り下げた。その結果、版築と思われる土層の互層堆積が観察され、石室を形成すると考えられる巨石、耳環が出土したことから、古墳であることが確認された。

## 第2節 松原1号墳の調査

### 1 立地と概要

#### (1) 立地

松原1号墳は、金井山山麓と沖積低地の境界部にあたる崖麓末端部に位置し、沖積低地が南西側前面に広がる緩斜面に占地している。沖積低地に集落が展開する松原遺跡の北東側山麓にあたる。

本墳の石室および墳丘裾部の標高は、石室床面が358.50mに、墳丘が355.0m～361.0mに位置する。沖積低地部との比高差はおよそ10mあり、松原遺跡および千曲川が遠望できる。ただし、後期古墳群が密集する松代扇状地面に視界はきかない。

#### (2) 概要 (第13図：PL.3)

本墳は、崖麓斜面に構築されたいわゆる山寄せの円形墳で、石室は傾斜に対して垂直方向に構築され、南西向きに開口している(第13図：PL.3-1)。埴川水系で同様な構造をもつ古墳としては、長野市松代町豊栄・平林の南大平古墳をあげることができる(第10図-31)。

調査前の地形測量では、古墳の存在を知り得る地形変換点を認めることはできなかった。周囲は昭和40年まで続けられていた桑畑が雑木林となっていたが、開墾によるテラス面は墳丘を大きく破壊していた。調査の進展によって、桑畑開墾時代以前にも中世墓域により大きな改変が行われていることが明らかとなった。中世墓域では火葬施設として石室が利用され(第5章2節)、天井石はこの段階に失われたと考えられるが、玄室床面の遺物出土状況から推察すると、玄室部の破壊と埋没は中世以前に遡る可能性もある。

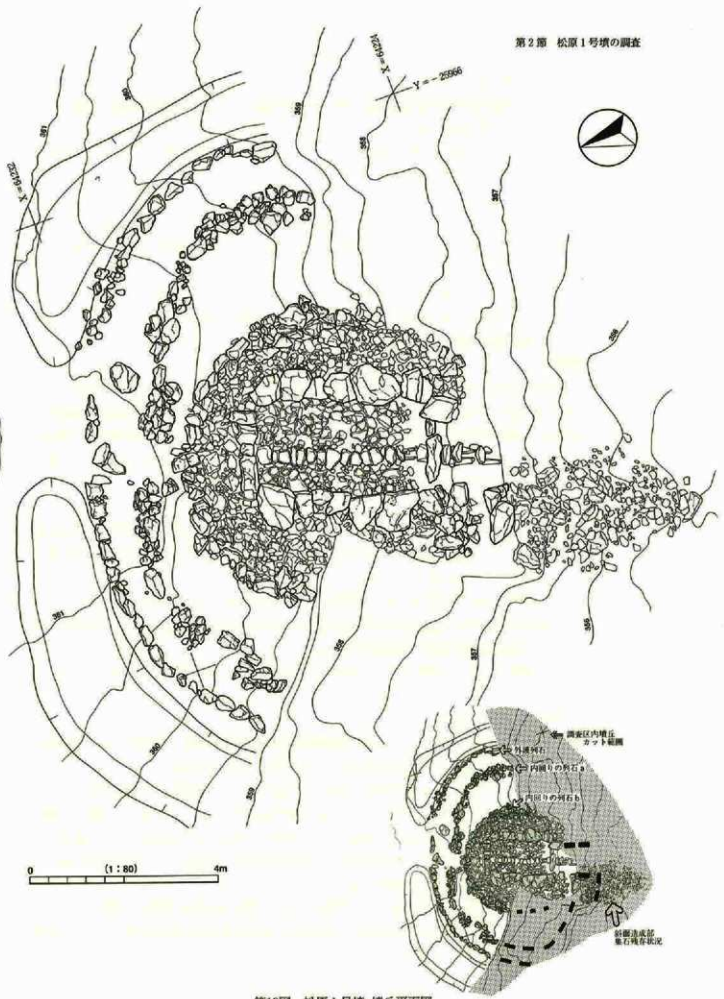
最低2時期に及ぶ墳丘の破壊により、斜面に造成した墳丘はもちろんのこと、石室後部、前底部、玄室上部構造は失われ、斜面上部の外護列石および、墳丘内に埋め込まれている内回りの列石がかろうじて残存することになり、古墳の規模が明らかとなった。また、玄室は斜面に掘り込まれた掘り方に築かれていたが、掘り方に収まった部分のみ保存されていた。

### 2 墳丘構造

#### (1) 墳丘 (第13図：PL.3, 5)

墳丘はその大半が失われていたが、山寄り側に残存した外護列石の根石列から構造を想定する。

墳形は円墳で、その規模は主軸と直交する方向で12.6mを測り、主軸方向は羨道部および斜面を造成した範囲が流出しているため明らかでない(第13図：PL.3)。外護列石は、正円を描くことはなく、主軸と直交する方向に楕円形にのびた形状を呈する(第13図：PL.5)。墳丘は斜面に構築されているため、石室の床面が標高358.50mに、墳丘背面の山側外護列石が一番高い場所で361.3mに位置している。墳丘前面の推定掘りラインは標高355.0m付近と想定され、その比高差は6mほどあり、墳丘が見かけ高く見える構造となる。



第13図 松原1号墳 墳丘平面図



(2) 外護列石 (第13図：PL.5)

墳丘裾の一部からは外護列石の基底部が検出された。石列が残存したのは墳丘の山側上位の範囲で、下方については既に開墾等で失われていた。

外護列石の内側墳丘部には二重の石垣列が確認された。この列石を「内回りの列石」と呼び、外側から内回り列石a、内回り列石bとする(第13図：PL.5-17~21)。

ア 外護列石

基底部の石列が一段分検出された。30~40cm大の角礫を横にならべ基底石としている。横積みすることによって石垣を形成したと思われるが、基底石の据え方から、直に立ち上がりず墳丘に対して内傾していたと考えられる。

外護列石基底部の標高は、墳丘裾のレベルを表している。列石は地形に沿う形で斜面に設定され、墳丘背面の最も高いレベルで標高361.3mを測り、墳丘東側の最も低い位置に残存するレベルは358.9mである(PL5-18)。その比高差は2.4mとなる。

イ 内回りの列石a

外護列石から墳丘内側に約1m離れて構築されている。残りの良い地点で2~3段の石垣が確認された。石の大きさ、積み方に関しても差はなく、角礫を横積みする(PL5-19, 20)。列石は外護列石と同様に地形に沿って設定され、弧の描き方も外護列石とほぼ同様である。その基底部の標高は墳丘背面では外護列石と同レベルであるが、側面ではやや高い位置に巡っている。外護列石側の外面を揃えて内傾させており、内側の墳丘盛土に対する外護を意図している様子が窺える。

ウ 内回りの列石b

内回りの列石aから約1~2m離れた墳丘内側に構築されている。平面的には、石室構築裏込め襟線の外周に径約6mの弧を描いている。礫の大きさ、配置方法は内回り列石aと同様で、30~40cm大の角礫を横にならべ基底石とし、横積みをして石垣とする(PL.5-21)。

列石の基底レベルは墳丘背面で標高360.0m、東側側面で359.1mを測る。このレベルは石室側壁の中位レベルにあたり、石室構築工程で、上位側壁および天井部設定にかかわり構築されていることが理解できる。内回り列石bは石室上部の構築と関連する構造物である。

内回り列石aとの関係であるが、墳丘背面では80cmほど下位レベルに、東側側面では20cmほど上位レベルに設定されている。

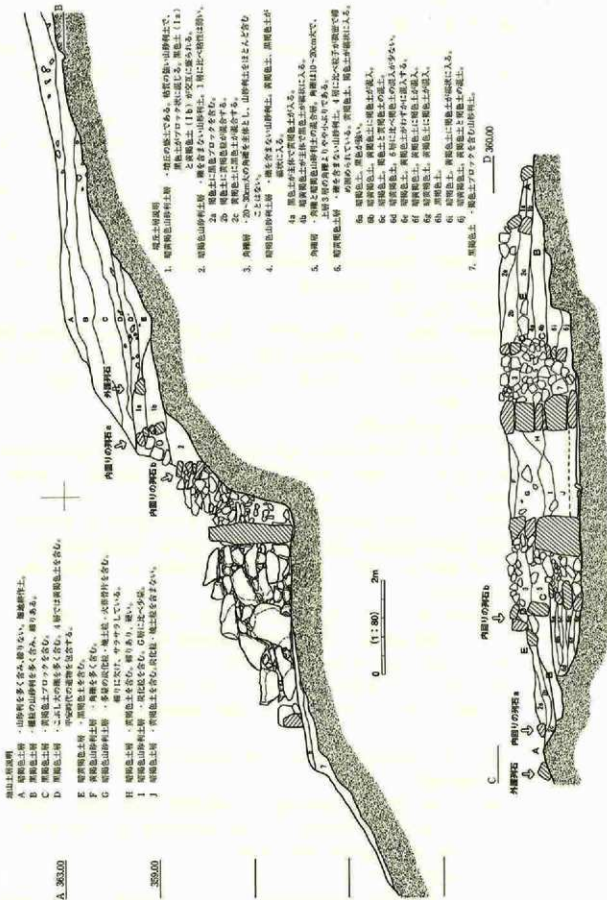
エ 「内回りの列石」に関する復元

松原1号墳は、その列石の大半を失っているが、更埴市清水製鉄遺跡内の古墳、更埴市大穴1号墳等の発掘成果、および長野市南大平古墳の外護列石を参考に列石配置の復元を試みる。

内回りの列石bはその弧の描き方から玄門部につながると想定される。玄門部にまぐさ石が設定されていたとするならば、内回りの列石bはまぐさ石レベル付近から積みあげていると考えたい。内回りの列石bは玄室内上部構造および墳丘中核部の造築と関連しよう。内回りの列石aは外護列石とともに羨道入口あるいは前庭部につながると想定される。主に墳丘盛土の崩壊を防止する機能をもつ。構築の順位は内回りの列石b→内回りの列石a→外護列石となろうか。

内回りの列石a, bは、その大部分が封土によって隠れており、墳丘の築造に関連して機能したものであろう。しかしながら、墳丘前面では外面に露出し、外護列石と同様に外装的な機能をはたしていた可能性も考えられる。





- 墳丘土層説明
- A. 黒褐色土層 - 山砂利を多く含む、層厚約10cm、層下有り。
  - B. 黒褐色土層 - 層下の山砂利を多く含む、層下有り。
  - C. 黒褐色土層 - 黒褐色土層にアロップを含む。
  - D. 黒褐色土層 - こぶし状の層を多く含む、4層では黒褐色土を含む。
  - E. 黒褐色土層 - 黒褐色土を含む。
  - F. 黒褐色土層 - 黒褐色土を含む。
  - G. 黒褐色土層 - 多数の炭化粒、粘土質、一次骨片を含む。
  - H. 黒褐色土層 - 黒褐色土を含む、層下有り。
  - I. 黒褐色土層 - 黒褐色土を含む、炭化粒を含む。6層に比べ少量。
  - J. 黒褐色土層 - 黒褐色土を含む、炭化粒、粘土質を含む。

- 現在土層説明
- 1. 黒褐色土層 - 墳丘の底土である。結核の多い山砂利土で、黒褐色土層がアロップ状に混入し、黒褐色土層(1a)と黒褐色土層(1b)が交互に重なる。
  - 2a. 黒褐色土層 - 層を多量にアロップを含む。
  - 2b. 黒褐色土層 - 層を多量にアロップを含む。
  - 3. 黒褐色土層 - こぶし状の層を多量に含む。
  - 4. 黒褐色土層 - 層を多量に含む山砂利土、黒褐色土、黒褐色土が混入する。
  - 4a. 黒褐色土層 - 黒褐色土が主体で黒褐色土が混入する。
  - 4b. 黒褐色土層 - 黒褐色土が主体で黒褐色土が混入する。
  - 5. 黒褐色土層 - 黒褐色土層と黒褐色土層の混合層、層厚は10-20cmで、上層3層の向裡よりやや小ぶりである。
  - 6. 黒褐色土層 - 層を多量に含む山砂利土、4層に比べ粒子が粗大で層の厚さが増している。黒褐色土、黒褐色土が混入する。
  - 7. 黒褐色土層 - 黒褐色土が混入する。

第14図 松原1号墳 墳丘断面図

## (3) 墳丘断面と築造方法の復元

## ア 墳丘断面の検討 (第14図: PL.5)

墳丘の構造については、主軸に直交するラインで断面の観察を行った。主軸直交ラインはおおよそ玄室中央付近であるが、調査の関係上、墳丘西側と東側が直線ラインとなっていない。墳丘構造が理解しやすいように合成して提示する(第14図: PL.5-15, 16)。

墳丘は礫塊と山砂利土によって築造される。墳丘盛土を築造の順位とは逆に1~7層に大別する。1, 2, 4, 6層は粘質土を含む山砂利を主体とする層で、礫塊の混入が少なく、主に墳丘盛土を構成する層である。4, 6層は、暗褐色系山砂利土と黄褐色系粘質土が交互に盛られており、西側の6層では5~10cmほどの厚さで何枚にも重ねられていた。1, 2層は黄褐色系の山砂利が主体となる。3, 5, 7層は礫塊を主体とする層で、礫塊のみで構成される部分と礫塊と山砂利土によって構成される部分とがある。3, 7層が礫塊のみで構成されるのに対し、その中層にあたる5層は礫塊と粘質土が混合する。これらの層はいわゆる裏込め層で、石室構築と密接にかかわる。墳丘盛土は墳丘中核部では礫塊を多用し、墳丘は礫を含む山砂利土により築造されていることが指摘される。

## イ 墳丘築造工程の復元 (第14, 15図)

緩斜面に築造された松原1号墳は、カマボコ状の平面プランを呈する掘り方を掘削し、その前面に造成面を築造することによって平坦面を作り、石室の基底部を設定している(第15図)。玄室は掘削した掘り方内にほぼ取り、羨道は造成面に構築されたと想定される。墳丘の築造の工程を石室構築と関連させて墳丘断面(第14図)によって検討する。

## &lt;第1段階: 掘り方の掘削、墳丘前面の造成&gt;

墳丘断面(第14図)A, A'ラインは掘り方である。掘り方は2段掘りとなっており、外側がゆるやかに掘削され、B, B'点で直に落ち込む。玄室およびその裏込めとしての3, 5, 7層の平面プランは内回りの列石bの内側に位置するが、これらはB, B'ライン内の掘り方平坦面に取まっている。

この掘り方掘削作業に伴って、斜面下方の造成作業が行われている。墳丘推定範囲にあたる南西側の下方斜面では、調査段階に角礫の集石が地上上に明らかとなり、図化されている(第13図 集石範囲)。この礫群は、造成に関する礫と想定することができ、羨道下部の盛土には礫が多用されていた可能性が高い。

## &lt;第2段階: 石室基底部の構築&gt;

掘り方内背面に玄室の奥壁を設定し、続いて側壁を構築する(第15図)。玄室基底部は、土層断面A-A'ライン(標高359.0m付近)まで側壁を積みあげ、裏込めおよび背面の地固めを行う(PL.4-11, 12)。

この段階は、工程をさらに細分することができ、側壁背後を礫塊によって裏込めを行う段階(7層)と、その背後を粘性の強い山砂利土(6層)を互層に盛ることによって固め、墳丘基底部を造築する段階とに別れる。その上部は、同様な工程で、5, 6層を盛りあげる。礫塊と山砂利層の境界点BとCは上位ほど外側に広がっている。

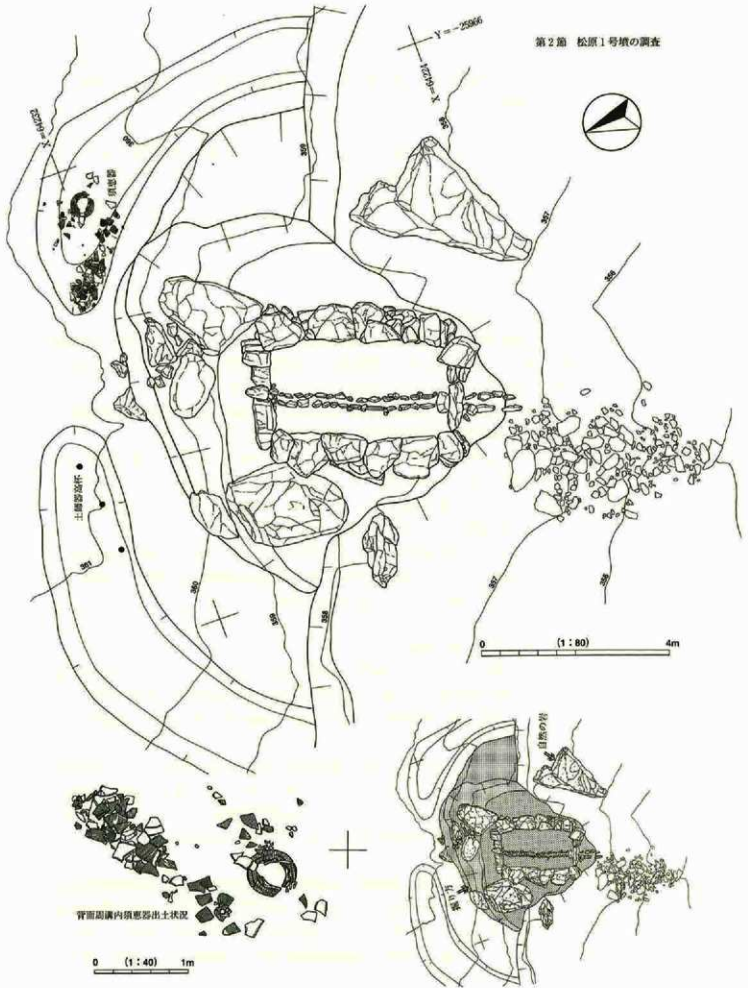
第2段階では、掘削した掘り方はほぼ埋まり、石室および墳丘の基底部に関する造成が終了する。

## &lt;第3段階: 玄室上部構築の構築&gt;

玄室側壁の上部を構築しながら、内回りの列石bを設定し、その間に礫塊(3層)を充填して裏込めとする。3層は礫塊のみによって構成され、同部上位のフラット面に天井石が架けられたと想定される。内回りの列石bは、天井部を乗せる基壇保護の列石と考えても良い。

## &lt;第4段階: 羨道部と墳丘の構築&gt;

内回りの列石aを配置し、内回りの列石bとの間(断面A, Eライン)に山砂利を充填して墳丘を構築する。この充填山砂利土には礫塊がほとんど混入しない。



第15図 松原1号墳 墓墳・土器出土状況

この工程によって、内回りの列石bは墳丘内に埋め込まれる。内回りの列石aはこの段階で羨道部入口まで配置され、羨道部が構築される。

#### <第5段階：墳丘構築の仕上げ>

第4段階までの工程で墳丘および石室の構築はほぼ終了している。第5段階は、墳丘断面に現れていない失った部分が多く、想定域を出ない。墳丘断面では1層にあたり、内回り列石aと外護列石の間に山砂利土を充填し、外護列石で保護しながら墳丘の最終造成を行う段階である。この工程によって内回りの列石aはその主たる部分が墳丘内に埋め込まれたと思われる。外護列石は一定の高さまでは石垣を形成し、墳丘盛土の保護を行っていたと考えたい。

### 3 石室構造

#### (1) プランと奥壁・側壁 (第16図：PL. 3, 4)

石室は両袖式の横穴式石室である。羨道部の大半および天井部を失っているため全容は明らかでないが、玄室長3.9m、同幅(奥壁)1.8m、(玄門)1.8m(最大幅)2.2mで、やや胴張りのプランをなし、現存する側壁の高さは奥壁付近で床面から1.6mである。羨道は玄門幅1.4mである。

奥壁は2枚の大形平石を並列して立て壁面とするが、不整形な平石のため隙間があり、角礫を横積みして充填する。平石の上部には横積みの壁面が想定される(PL. 4-10)。

側壁は、周辺山麓に産する安山岩の割石を、隙間に小礫をかませながら横積みにする(PL. 4-6, 8)。側壁面は石室構築整地より約0.8m上位の標高359.0m付近を境に積み方が異なっており、下位では水平方向に2〜3段横積みを行うが、上位では奥壁側から玄門方向に下がるような形で斜位に積みあげられている。石室および墳丘構築と関連することは前述した。

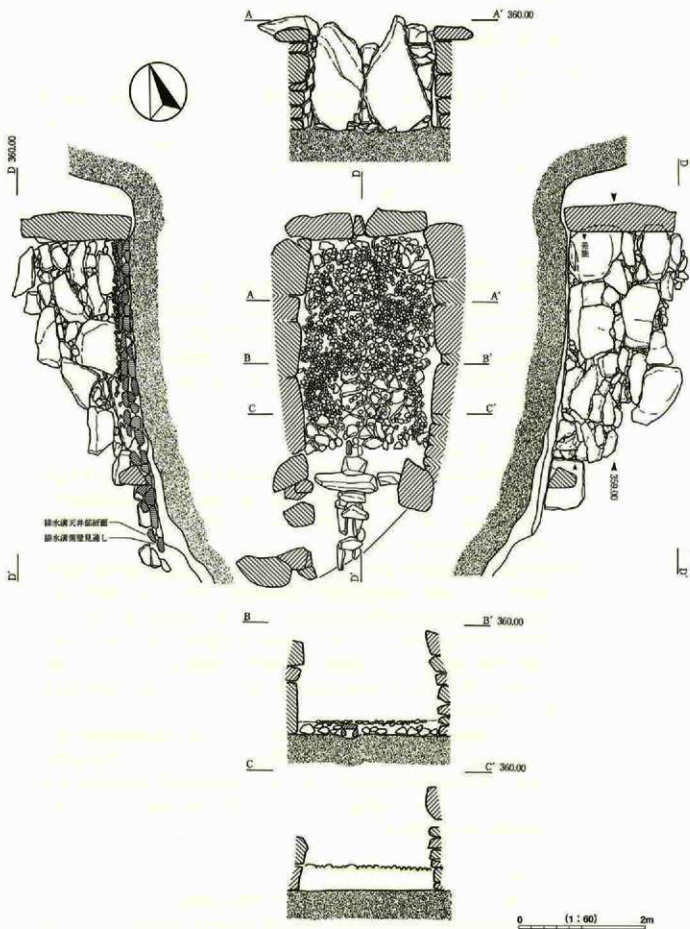
羨道部は既に失われているが、玄門部の側壁基礎石と框石が残存する(PL. 3-4, 5)。玄門部は袖石が玄室に対して40cmほど内側に張り出しており、横積みで想定される基礎石の状況から立柱石をもつ構造ではないと考える。両袖形式の玄門部床面には長さ1m程の框石が設定されている。

#### (2) 床面および排水施設 (第13, 15, 16図：PL. 3)

框石および玄室内の床面が残っていたが、羨道部床面は既に流出して明らかなでない。玄室内床面は石室構築整地面に側壁基礎部の設定を行った後、中央に排水施設を、周囲に裸敷きの床面を構築している(PL. 3-3)。整地面から床面直上までの裸敷の厚さは約25cmで、側壁の第1段目の基礎石は床面下部に隠れることになる。

床面整地面には石組の排水溝がある。石室内中央部に1本玄室から羨道部にかけて延びている。その構造は素掘の溝に板石を左右に立石し(PL. 3-5)、蓋石をのせた(PL. 3-3)もので、框石はその上位に据えられている。玄室内の排水溝は、玄門方向にやや下位に傾くものの水平構造をなしている。羨道部では地表の傾斜に添って下方に傾いて設定され、羨道部床面よりかなり深く埋め込まれ暗渠の機能をはたしている。

玄室内の裸敷きは2層構造となる(第16図)。整地面上には20〜30cm前後の大ぶりな平石を排水施設の蓋石と同レベルで敷きつめる(PL. 3-3)。その上位には5cm程の小ぶりの角礫を下部裸敷きおよび排水施設が床面に露出しない程度に敷きつめている(PL. 3-2)。この床面の高さは框石の頭とほぼ同レベルである。遺物および人骨が出土したレベルはこの床面で、遺物は床面に集中する傾向にあり、床面は1枚であった可能性が高い。



第16図 松原1号墳 石室実測図



## 4 埋葬人骨と遺物の出土状況

## (1) 埋葬人骨(第17図)

玄室内からは7体分の頭骨等が検出された。頭骨は玄室中央で検出された1例を除き、玄室左側面に列をなすかのように分布している。埋葬姿勢については不明と冒わざるを得ないが、玄室の幅が1.8mを測ることから、追葬の際に玄室の長軸と直交する方向で、順次奥へと安置されたことが推測されよう。

埋葬人骨はいずれも遺存状況が脆弱なため、被葬者の性別・年齢については良好な鑑定結果を得られなかったが、1例についてのみ、第3大臼歯歯冠の磨耗状況から性別不明・18歳未満という鑑定結果を得ることができた。また、玄室覆土中から検出された焼かれていない土について、10歳前後の女性という鑑定結果が得られているが、玄室覆土中には中世の火葬墓が構築されており、先の鑑定結果を被葬者の一人として認知することが可能かどうか判断に躊躇するところである。

なお、玄室床面付近から木質部が付随した状態で鉄釘が3点(第25図76~78)出土しており、木棺の存在が推測される。ただし、頭骨の出土状況からして、すべての遺体に対して木棺が用いられていたとは考え難い。仮に、すべての遺体が木棺に収容されていたとすれば、追葬の際に遺体を木棺から出して奥へ送ったか、木棺を積み重ねていったかのどちらかを想定しなければならない。解釈論となろうが、追葬の順番・方法や骨の遺存状況が脆弱なことから葬られた人数や副葬品の在り方等も含め、類例などを参照し、検討していく必要があるだろう。

## (2) 玄室内遺物出土状況(第17図)

中世の段階で墳墓群構築のため本墳を含めた斜面部一帯の地形が改変されたことや、近現代に至り農地として利用されていたことなどから、古墳としての景観が消失したため、結果として本墳は盗掘を免れることができたと言って良いだろう。このことにより、玄室内から出土した副葬品は質・量とも北信地域で屈指の古墳として位置付けることが可能となった。

玄室内での遺物分布を見ると、奥壁寄りに集中する傾向が窺え、さらに頭骨が分布する左半部に遺物量がより多いことが指摘できよう。これは、遺体の追葬に伴う室内の移動により生じたものと判断される。

素材別に見ると、武器である鉄鎌が奥壁左半部の集中区に密に分布しており、装飾品である耳環・勾玉・ガラス玉類等は比較的散漫に玄室内に分布している。また、直刀は左右の壁際から1本ずつ出土しており、馬具は単品もしくは破片の状態で出土している。垂直分布では、頭骨にも高低差があり、ほとんどの遺物は頭骨の出土位置より低位の位置に分布する。土器は完形品が全く出土しておらず、破片の状態で頭骨出土位置より高位に集中する傾向が窺える。

追葬があるため、すべての遺物が原位置を保っているとは言えないものの、直刀が比較的原位置を保っていることが予想され、鉄鎌がまとめて副葬されていたことが指摘できよう。したがって、直刀・鉄鎌については埋葬された遺体それぞれの副葬品とは捉え難い。それに対し、装飾品の類は、数量が豊富で玄室内で偏在することなく出土していることから、着装品であったにせよ、埋葬された遺体のそれぞれに対する副葬品であった可能性が強いと言えるだろう。

## (3) 羨道部遺物出土状況

羨道部から出土した遺物については一括して取り上げたため、出土地点は明確になっていない。出土した遺物は勾玉1点と素環鏡板付轡である。同じ馬具でも、鞍の一部である鞍金具(第24図64・65)が玄室内から出土し、轡が2点(第24図61・62)羨道部から出土している点、葬送儀礼を考える上でも興味深い。



なお、轡の欠損品と思われるもの（第24図63）は玄室内からの出土である。

#### (4) 墳丘内遺物出土状況

墳丘内から出土した遺物についても羨道部と同様に一括して取り上げたため、出土地点は明確になっていない。出土した遺物は土器片が主体で、鉄鏃が1点（第23図30）墳頂部から出土している。

#### (5) 墳丘外遺物出土状況

墳丘背面の周溝内から須恵器大甕・黒色土器A高杯がそれぞれ対称的な位置関係を保って出土している（第15図）。須恵器大甕の残存率は口縁部95%、胴部75%、底部90%で、出土状況からしても完形の大甕が1個体周溝内に配置されていたことが予想される。一方、高杯は3個体が等間隔に配列されていたと考えられる。

### 5 遺物

#### (1) 土器（第18～21図，PL7・8）

1は口縁部の小破片で裏表面とも摩滅が著しいため判然としないが、土師器鉢と把握した。墳丘西半部からの出土である。

2～13は黒色土器Aの高杯で、13については杯部が消失しているため土師器との区別ができないが、調整技法・胎土・色調・焼成とも他の高杯と近似することから黒色土器Aと判断した。これらの内、2・4・5が墳丘背面の周溝内に配列されていた高杯である。13は玄室内出土で、その他の高杯はいずれも墳丘中からの出土である。杯部は口縁部が直立気味で腰の強く張った碗形のものや口縁部が緩やかに内彎するものがあり、脚部についても柱状で長脚のものや低脚で裾広がりのものであるというように、土器論として形態差あるいは系統差を考慮する必要が生じる。古墳出土土器という性格上、こうした問題については保留せざるを得ず、杯部と脚部の接合状況なども踏まえれば、長野市榎田遺跡で提示された土器編年（広田1999）のV期新相、7世紀第3四半期～7世紀末葉に相当するとし、今後の土器研究に期待しておきたい。

14～16は須恵器杯蓋である。14・15は内面に返りがつく蓋で、14の天井部はナデ調整、15の天井部はヘラ削り調整である。15は玄室内から、14・16は墳丘中からいずれも破片の状態出土した。

17～20は須恵器杯Bで、いずれも破片の状態で墳丘中から出土した。17・18の底部は回転ヘラ削りであり、底面が高台部よりも低く湾曲して接地面となっている。

21は小破片のため器種が不明瞭であるが、透かしを有しているため須恵器高杯の脚部と想定される。透かしの形状や単位等については不明である。墳丘崩落土と思われる部分から出土した。

22～35は須恵器の貯蔵形態である。27のプラスチック瓶は玄室内、28の大甕は周溝内からの出土で、他はいずれも墳丘中からの出土である。28は前述のように周溝内に設置されていた大甕で、口頸部に沈線で横帯区画し、それぞれ斜位の単沈線を充填するという特徴的な文様が施されている。また、底部にはハケにより同心円文が施されている。他の器形復元された大甕については、口頸部の形状や文様等から類型化が可能であるが、ほぼ同様な器形、法量を呈している。

#### (2) 金属製品（第22～26図，PL9・10）

##### A 直刀・刀装具（1～8）

1・2は遺存状況が完全ではないため形式が確定できないものの裝飾付大刀として一括される直刀で、古墳被葬者の階層を推測する属性の一つとして注目される資料である。いずれも玄室内から出土した。

1は金銅装大刀で、刀身と鞘口金具、木質の鞘が部分的に遺存し、茎部を欠損する。現時点では材質鑑定に至っていないが、青銅製の鞘口金具の一部が金色に発色していることから金銅装大刀とした。平造で、現存長68.95cm、刀身最大幅2.8cm、刀身最大厚0.8cmを測る。

2は銀装小大刀で、刀身と鞘口金具、密に巻かれた径0.2cm程の銀線が遺存し、切先と茎部を一部欠損する。残存する茎部には径0.4cmの目釘孔が穿たれている。1と同様に材質鑑定に至っていないが、鞘口金具が銀色に発色していることから銀装小大刀とした。平造で、現存長44.2cm、刀身最大幅2.5cm、刀身最大厚0.8cmを測る。

3は鉄製の鐔で、3.4cmという茎孔の長径から、1に装着されていた可能性が考えられる。ただし、玄室内での出土地点は、両者に隔たりが認められる(第17図)。なお、X線写真においても象嵌や透かし等の痕跡は見出せなかった。

4・5は真金具、6～8は鞘金具と思われる鉄製金具である。いずれも玄室内から出土した。

#### イ 鉄鑑 (第23図9～54)

本墳から出土した鉄鑑は、欠損しているものも数多く見られるが、柳葉鑑と把握される54を除いたほとんどのものが同一形式の範疇で捉えられる長頸鑑である。これらの長頸鑑は、9・22のような台形銜をもつもの、10・11のように関のないもの、23・33のように棘状関のものが見られ、関部の形態により細分が可能である。墳頂部出土の30を除いて、いずれも玄室内の出土である。

本遺跡の整理作業では、鉄鑑に限らず鉄製品はすべてX線写真をもとに銷取り工程を実施している。その際のX線写真は、時間的な制約から多方向からの撮影を実施していないため、微妙な部分については個人の技術に頼っているのが実状である。したがって、鉄鑑鑑身部の断面形については総合的な判断をせざるを得ず、本墳の長頸鑑鑑身部の断面形については、片丸であった可能性が強いと指摘するに留めざるを得ない。なお、棒状鉄製品とした中でも鉄鑑の欠損品が数多く含まれていることが予想される。

#### ウ 両頭金具 (第23図55～60)

鉄製で、6点すべて玄室内から出土した。両頭部の大きさについては遺存状況によってばらつきが見られ、長さについても55・56・58・59の4点が2.9cm、60が3.1cm、57が3.8cmとミリ単位で差が見られる。一方、胴部径についてはいずれも4.5cmと共通している。これらの両頭金具については、福島県いわき市小中田横穴群の北第18号横穴から弓本体の木質部に装着された状態で出土した両頭金具(櫻村他1988)と大きさ・形態ともほぼ同様であることから、弓飾り金具として把握される。

#### エ 馬具 (第24図61～65)

61・62は鉄製の素環鏡板付轡で、いずれも羨道部から出土した。なお、轡についての名称及び分類等については、花谷氏の論著「素環鏡板付轡の編年とその性格」(花谷1986)に基づき記述を進める。

61は鉸具造り立開素環鏡板付轡で、引手・鉸具輪金・刺金の一部を欠損する。鏡板の全体形状は、立開となる鉸具輪金と鏡板環体が接しているため「8」字形を呈する。立開(鉸具輪金)は楕円形を呈し、一方に棒状の刺金を遺存する。引手は引手軸が一本で、一方の端環を外反させ、壺とする。銜は二連式で、同一の長さの素材を有し、それぞれの端環は90°の角度を持つ。鏡板・銜・引手の三者の連結方法は、銜の端環に鏡板と引手を同時に摺めている。鉸具造りb2類轡に相当する。

62は長方形立開素環鏡板付轡で、立開・引手の一部を欠損する。長方形を呈する立開を備えた鏡板で、立開孔が鏡板環体から離れている。引手は引手軸全体に一方の握りが増えられ、一方の端環を外反させ、壺としている。銜は二連式であるが、異なった長さの素材を用い、それぞれの端環は90°の角度を持つ。鏡板・銜・引手の三者の連結方法は、銜の端環に鏡板と引手を同時に摺めている。長方形立開b類轡に相当する。

63は環部が軸に対して外反することから、轡の引手と考えられ、環部は引手壺に相当しよう。玄室内から出土した。

64・65は玄室内から出土した金銅製の鞍金具である。両者の環の大きさ・形態は同一で、同じ鞍に用いられていたことが想定できよう。64は座金具を消失し、鋺脚を欠損する。65は円形の座金具が遺存し、鋺脚を欠損する。座金具は上部径13mm、下部径29mm、高さ6mmを測り、中実ではなく、厚さ2mm強を測る。

#### オ 飾り金具 (第25図66~73)

66~73は玄室内から出土した金銅製の飾り金具である。この内、68~73はいずれも中空の半球形で大きさ等も同様なことから、同一の対象物を装飾した飾り金具と想定される。

66は鋺と座が装着された状態で出土したもので、単なる飾り金具ではなく何等かの座金具であった可能性も考えられる。67についても中央部に孔があった可能性があり、68と同様な機能を持っていたことが予測される。

#### カ 止め金具 (第25図74・75)

74・75は玄室内から出土した鉄製の止め金具と考えられる。74は薄板状の鉄板に鋺が2点並列して打ち込まれている。鋺の脚部は欠損する。鉄板を木質部に固定したものか、複数の鉄板を連結したものかの判断は困難である。

75は断面形の異なる二つの素材が直角に組み合わせられており、図中、水平の素材は丸棒状の素材との接点近くで、断面形を方形から長方形に転じている。これは両者を直角に固定するため蔽れたことによるものと考えられる。むしろ、鋺具の一部と考えたほうが的確かと思われる。

#### キ 鉄釘 (第25図76~79)

76~78は玄室内、79は羨道部からの出土である。いずれも破損品で、木目が軸と直角に交わる方向で木質部が遺存する。断面形は方形を基調とするが、厚さの面で多様性が見られる。鉄釘の存在から、木棺の存在を推測することが可能であるが、鉄釘自体の法量を比較検討する必要があり、早急な結論は下せないのが現状であろう。

#### ク 棒状鉄製品 (第25図80~103)

80~103はすべて玄室内からの出土である。棒状鉄製品のほとんどは、鉄鍔や釘等の破損品である可能性が十分考えられる。そうした中、細身の96や握り加えられた細身の98・100、折れ曲がる101~103が上記の範囲では捉えきれないものとして挙げられよう。それらの用途等については不明と言わざるを得ないが、102・103は単に土圧等により変形したとは考え難く、鋸の可能性も指摘されよう。

#### ケ 板状鉄製品 (第25図104~110)

104は羨道部、他はいずれも玄室内からの出土である。107を除いて、みな薄板状で武器・農具・容器のいずれかの断片であろう。107は端部に孔があり、これが穿孔によるものか破損・銹化によるものかの判断は困難であるが、どちらにしても他の板状鉄製品とは一線を画するものである。

### (3) 装身具 (第26・27図, PL11・12)

#### ア 耳環 (第26図111~121)

金銅製の耳環が7点(111~117)、銀製の耳環が4点(118~121)いずれも玄室内から出土した。部分的に表面に鍔が浮き出ているものも見られるが、遺存状況は良好で、金、銀色の発色は一目でそれと理解される。なお、現時点では化学分析等は実施していない。

出土状況から対の関係を導き出すことは困難であるが、大きさ・形態等の属性から対の関係を以下のよう



111と112：最大径2.6cm、環体断面における最大幅0.8cm・最大厚0.5cm

113と114：最大径2.7cm、環体断面における最大幅0.7～0.8cm・最大厚0.5cm

115と116：最大径2.3cm、環体断面における最大幅0.6cm・最大厚0.45cm

118と119：最大径2.05～2.1cm、環体断面における最大幅0.7cm・最大厚0.4～0.45cm

120と121：最大径1.6～1.7cm、環体断面における最大幅0.4cm・最大厚0.3～0.35cm

最大径の計測値から、耳環の大きさを2.5cmを越える大形、2.0～2.3cmの中形、2.0cm未満の小形に分類することが可能である。これにより、金環は大中小、銀環は中小という体系が生じ、素材における格差としての認識も可能となる。なお、対となる耳環が現存しない（見出せない）117の最大径は1.7cm、環体断面における最大幅は0.6cm、最大厚は0.3cmであり、小形の金環と言える。

また、115の挟り部には錆化に伴って、ガラス小玉が癒着している。

#### イ 鉄釧（第26図122～124）

3点とも玄室内からの出土である。122と123は同一地点からの出土で同一個体の可能性が高い。いずれも薄板状で、幅や湾曲の度合いから積極的に鉄釧の欠損品と判断した。

#### ウ 石製玉類（第26図1～22、第27図23～27、第2表）

勾玉22点（1～22）、丸玉1点（23）、平玉2点（24・25）、管玉2点（26・27）があり、17を除いていずれも玄室内からの出土である。とはいえ、石製玉類はガラス製玉類と同様に、玄室内覆土の水洗選別によって得られたものも含まれる。

勾玉の石質にはメノウ（1～20）と水晶（21・22）の二者がある。穿孔は表裏から施されるが、主・従の関係が見られ、実測図では主要穿孔面を表面として図示した。一部に製作時の剝離痕が残るものも見られるが、全体的に研磨が行き届いており、平滑で光沢を帯びた状態に仕上がっている。大きさは最大長30mmを境に大小2大別される。色調は石質の差により大別される。色調を基調とするメノウの中でも、濃色のもの（2～5・7・9・13・16・20）と比較的透明感のある淡色のもの（1・6・8・10～12・14・15・17～19）に2大別される。水晶は透明感のある良質なものをを用いている。

丸玉はヒスイ製であるが、白濁色の部分が大半を占め、深緑色の部分が点在する。大きさはガラス製玉類の大形品と同様である。

平玉2点は石質不明ではあるが、同一の石材が用いられたことは明白である。扁平で、稜線が面取りされるといふ特徴を持つ。両者とも、穿孔は一方から施され、全体的に研磨が行き届いており、平滑で光沢を帯びた状態に仕上がっている。24は面取り後に生じた稜線さえも丸みを帯びている。平玉は出土事例が少なく、北信地域においては現段階で唯一の事例となる。

管玉2点の内、27は白玉とも言い得る厚さのものである。平玉同様石質は不明であるが、平玉と同系色であり、同一の石材が用いられていた可能性が強いと思われる。上下端・側面とも研磨が行き届いており、平滑で光沢を帯びた状態に仕上がっている。

#### エ ガラス製玉類（第27図、第3～14表）

耳環挟り部に癒着している1点を加えると、本墳から出土したガラス製玉類は総計1,070点に上る。この内、確実に玄室内から出土したもの（表中A1～A4）は797点（74%）で、羨道部から出土したもの（表中B・C）は24点（2%）を占める。玄室内から出土したものについては、玄室内覆土の水洗選別により検出されたものも含まれる（表中A2・A3・A4）。水洗選別にあたっては、玄室内（A2）・磯床上20cmまで（A4）・磯床直上（A3）とに土壌サンプルを分け、それぞれ364点（59%）・91点（15%）・164点（26%）のガラス製玉類を検出し得た。

計測可能な1,036点のガラス製玉類を対象に、長径と短径をグラフ化し、以下の四つのまとまりを捉える

ことができた。I・IIを丸玉、III・IVを小玉として把握する。

I : 長径 10.1mm以上	1点 (0%)
II : 長径 8 ~ 10mm	14点 (1%)
III : 長径 4.7 ~ 8mm	21点 (2%)
IV : 長径 2.75 ~ 4.65mm	1,000点 (97%)

色調については、カラーチャート（『大辞泉』小学館刊）に基づき以下のように分類した。なお、色調は大きさとの間に相関関係が認められ、ガラス丸玉は紺色系、ガラス小玉は空色系が主体を占める。

1 : 紺青	11点 (1%)
2 : 紺瑠璃	34点 (3%)
3 : サックスブルー	1,016点 (95%)
4 : 浅葱	4点 (0%)
5 : 深緑	3点 (0%)
6 : 薄緑	1点 (0%)

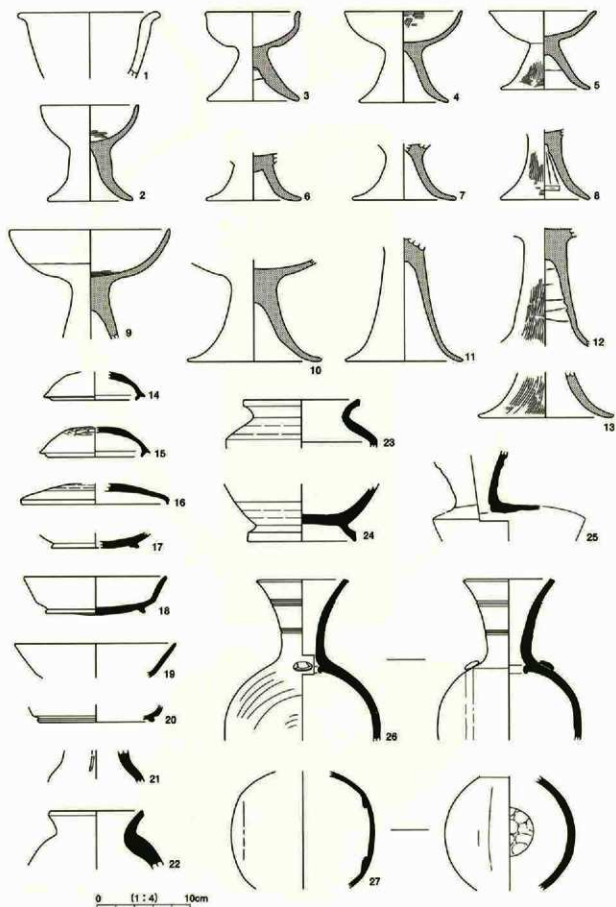
I — 1 (紺青) : 1点 (100%)

II — 1 (紺青)	: 10点 (71%)
2 (紺瑠璃)	: 2点 (14%)
4 (浅葱)	: 1点 (7%)
5 (深緑)	: 1点 (7%)

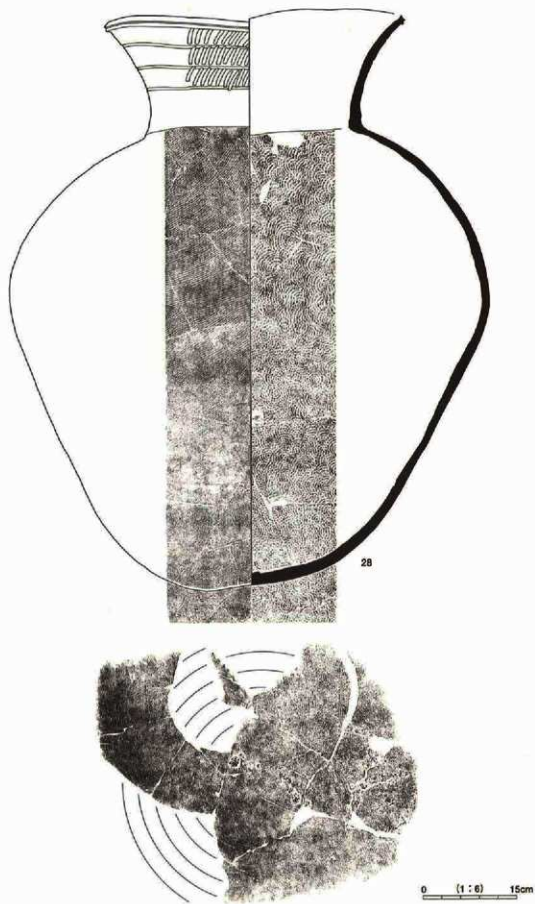
III — 2 (紺瑠璃)	: 6点 (29%)
3 (サックスブルー)	: 14点 (67%)
4 (浅葱)	: 1点 (5%)

IV — 2 (紺瑠璃)	: 24点 (2%)
3 (サックスブルー)	: 975点 (98%)
5 (深緑)	: 1点 (0%)

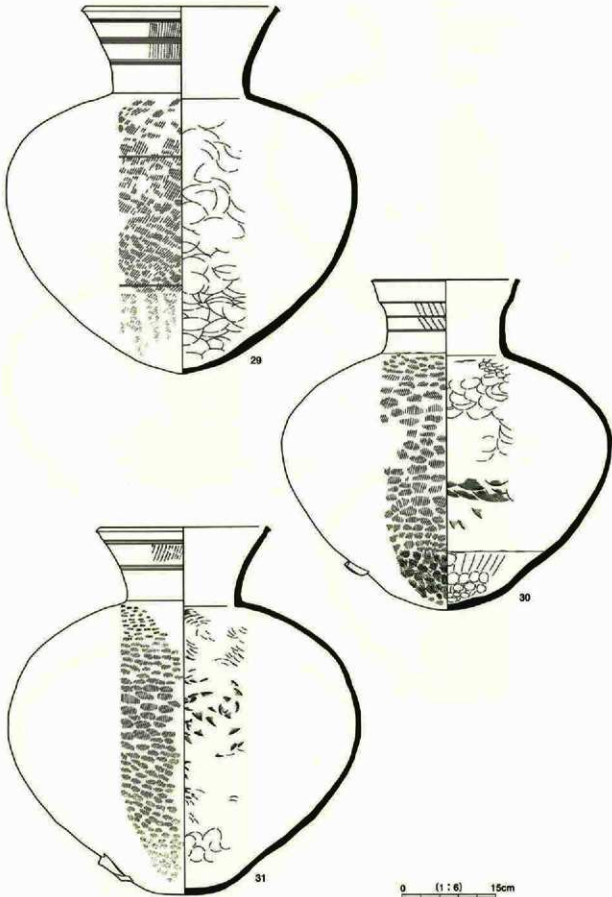
断面形は、大きさに関わらずいずれも上下端部が水平で側面部が弧状に膨らむ形態を取る。また、穿孔中に赤色顔料が付着しているものが154点 (14%) あり、遺体埋葬あるいは副葬に際して、木棺内または玄室内に何等かの形で赤色顔料が奉ぜられていたことが想定される。このことは、本墳の被葬者の階層を推測する一つの属性となろう。



第18図 松原1号墳出土土器1

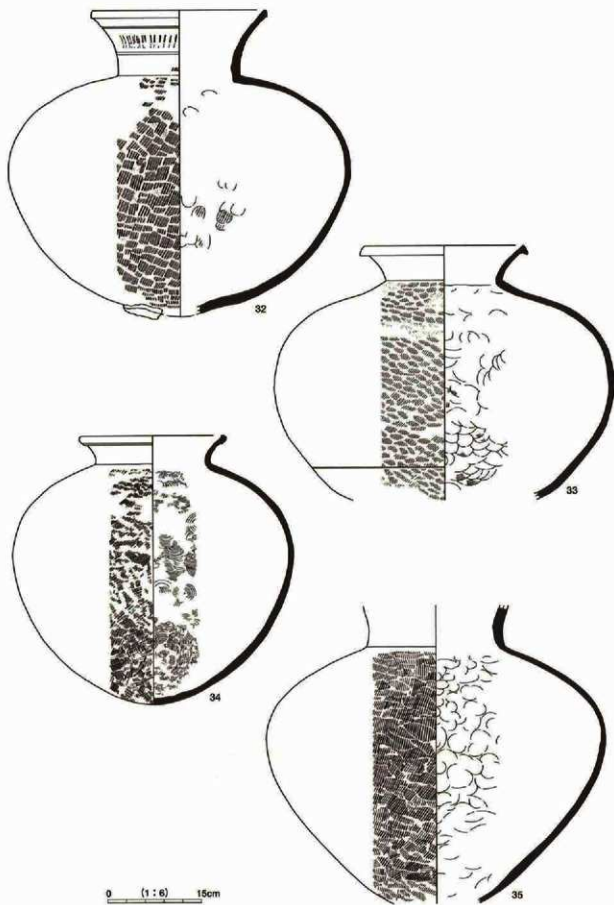


第19図 松原1号墳出土土器2

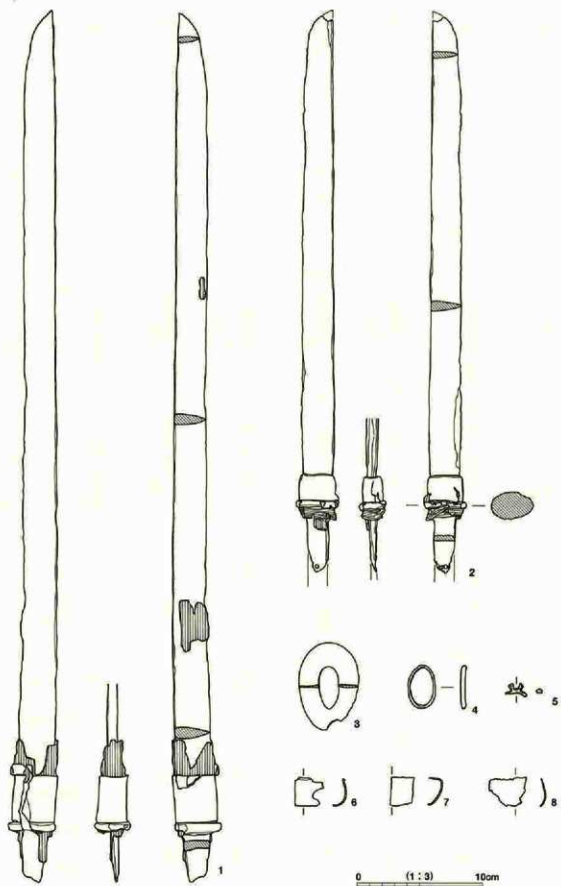


第20図 松原1号墳出土土器3

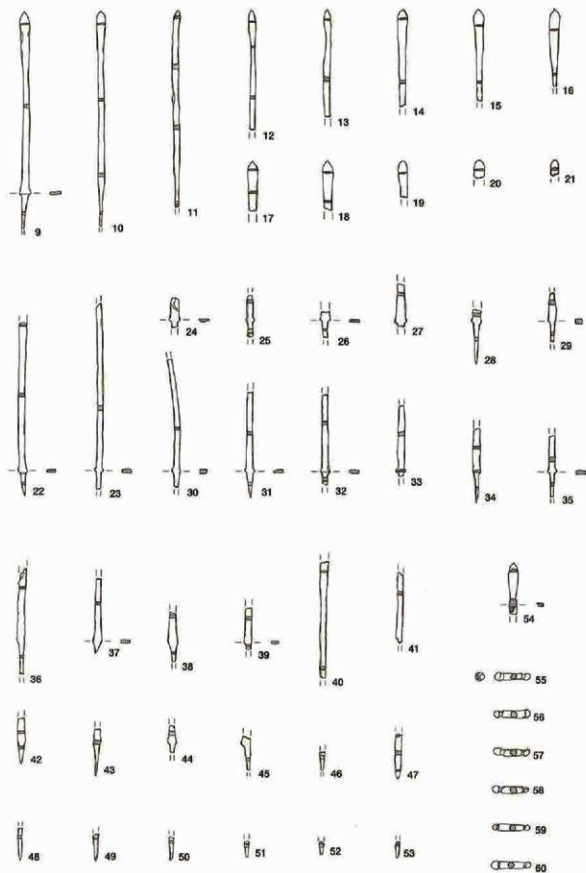




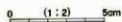
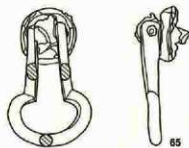
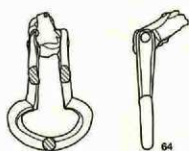
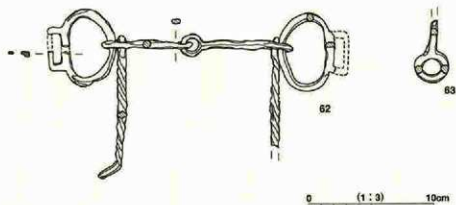
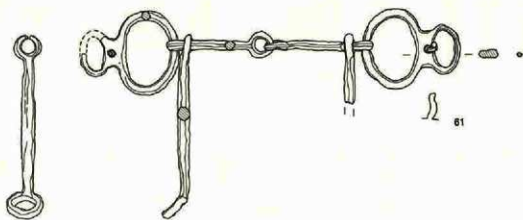
第21图 松原1号墳出土土器4



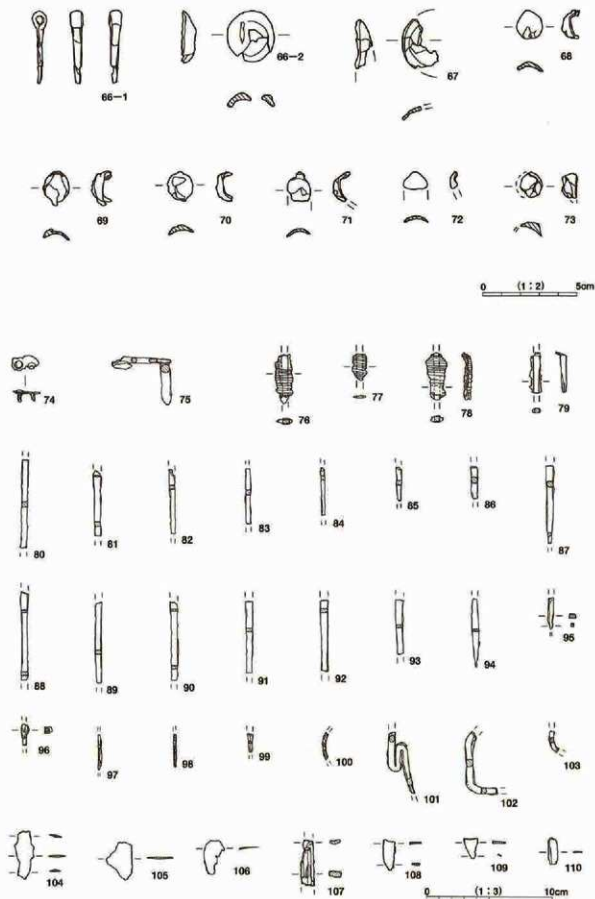
第22図 松原1号墳出土金属製品1



第23図 松原1号墳出土金属製品2

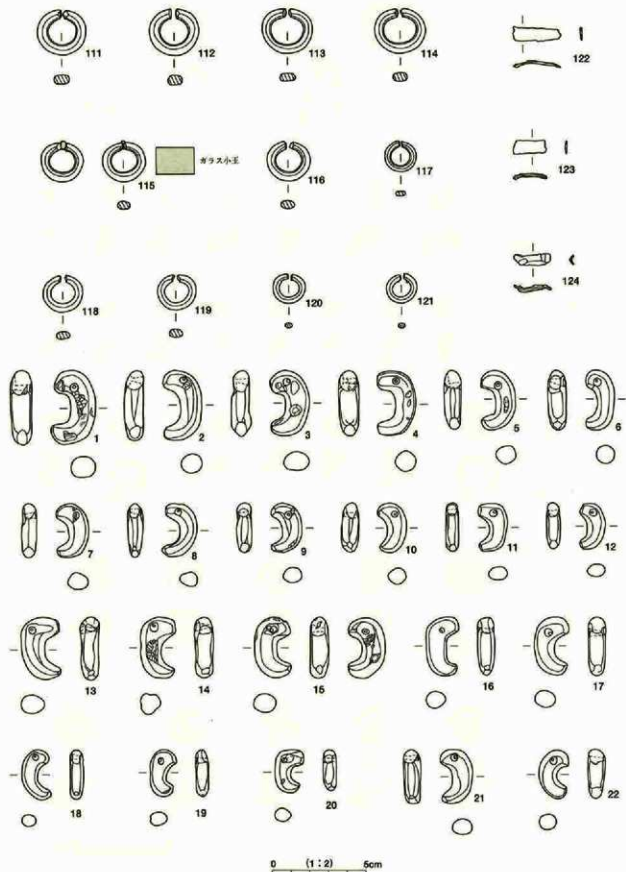


第24図 松原1号墳出土金属製品3

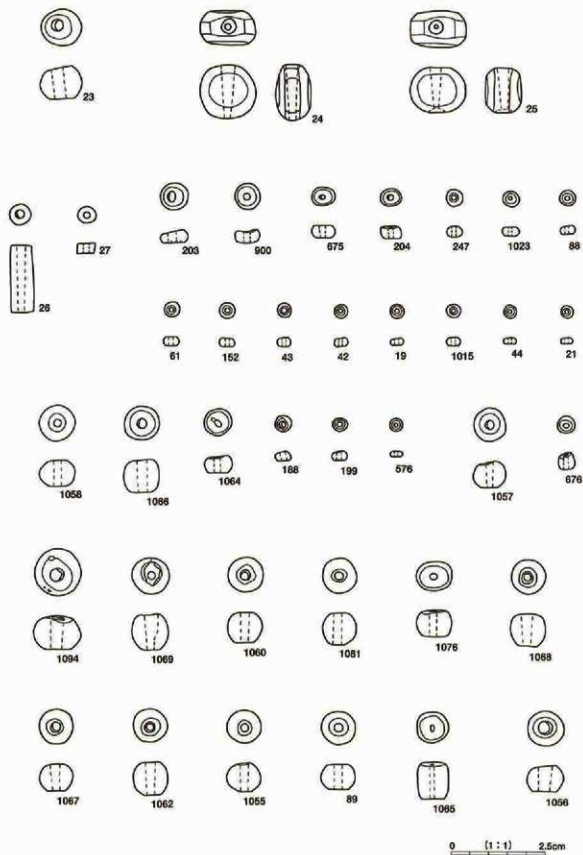


第25図 松原1号墳出土金属製品4





第26図 松原1号墳出土耳環・玉類1

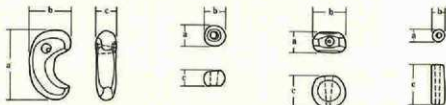


第27図 松原1号墳出土玉類2

No.	出土地点	群種	最大径 (mm)			重量 (g)	孔徑 (mm)		材質	色
			a	b	c		上	下		
1	玄室床面上	勾玉	39	24	11	12.285	上 2.35 下 1.65	メノウ	キヤメル	
2	玄室床面上	勾玉	37	21	10	8.455	上 2.00 下 1.30	メノウ	茶褐色	
3	玄室床面上	勾玉	34	21	10	8.108	上 2.95 下 1.50	メノウ	肉紅色	
4	玄室床面上	勾玉	34	26	11	8.660	上 3.35 下 1.50	メノウ	褐色	
5	玄室床面上	勾玉	31	19	9	5.750	上 3.15 下 1.40	メノウ	黄褐色	
6	玄室床面上	勾玉	32	18	10	6.076	上 2.50 下 1.20	メノウ	琥珀色	
7	玄室床面上	勾玉	29	17	8	4.632	上 2.60 下 1.20	メノウ	黄褐色	
8	玄室床面上	勾玉	28	19	8	4.962	上 3.30 下 1.25	メノウ	ハフ	
9	玄室床面上	勾玉	28	16	8	3.996	上 3.35 下 1.25	メノウ	ヒシブ	
10	玄室出土水洗層別	勾玉	26	18	10	4.151	上 3.50 下 1.25	メノウ	琥珀色	
11	玄室床面上	勾玉	25	16	7	3.664	上 3.50 下 1.40	メノウ	ハフ	
12	玄室出土水洗層別	勾玉	24	14	7	2.033	上 3.60 下 1.40	メノウ	ハフ	
13	玄室床面上	勾玉	33	21	10	8.705	上 3.15 下 1.40	メノウ	褐色	
14	玄室床面上	勾玉	32	19	10	7.073	上 3.60 下 1.30	メノウ	キヤメル	
15	玄室床面上	勾玉	32	20	10	8.328	上 2.10 下 1.35	メノウ	コルク色	
16	玄室床面上	勾玉	31	17	9	5.842	上 2.65 下 1.10	メノウ	黄褐色	
17	陪葬石付近	勾玉	31	19	9	6.553	上 3.60 下 1.25	メノウ	コルク色	
18	玄室出土水洗層別	勾玉	26	15	7	3.476	上 2.60 下 1.10	メノウ	琥珀色	
19	玄室床面上	勾玉	25	14	7	2.981	上 3.60 下 1.25	メノウ	ハフ	
20	玄室出土水洗層別	勾玉	23	15	7	2.991	上 2.25 下 1.40	メノウ	琥珀色	
21	玄室床面上	勾玉	28	17	10	3.100	上 3.60 下 1.40	水晶	無色	
22	玄室出土水洗層別	勾玉	26	15	9	4.413	上 3.30 下 1.25	水晶	無色	
23	玄室出土水洗層別	丸玉	10	11	9	1.267	1.70	ヒスイ	緑味	
24	玄室床面上	平玉	9	15	14	3.039	上 3.30 下 1.60	不明	褐色	
25	玄室床面上	平玉	10	15	12	2.756	上 3.10 下 1.25	不明	褐色	
26	玄室出土水洗層別	管玉	6	5	18	0.995	上 2.15 下 1.75	不明	褐色	
27	玄室出土水洗層別	管玉	5	4	3	0.131	上 1.60 下 1.45	不明	褐色	

※ 遺物の計測点は以下に掲載した模式図に従う

※※ 色については、カラーチャート（『大辞泉』小学館）に基づく



第2表 松原1号墳出土石製玉類一覧表

No.	長さ[m]	幅[m]	厚さ[m]	乳鉢	重量[g]	出土地点	大きさ	色	備考	
1	—	—	—	—	—	A1	IV	3		
2	—	—	2.45	0.80	0.055	A1	IV	3	褐色原料	
3	—	—	2.45	0.80	0.055	A1	IV	3	褐色原料	
4	3.80	4.25	2.60	0.85	0.068	A1	IV	3		
5	3.60	3.75	2.60	0.95	0.051	A1	IV	3		
6	3.65	3.65	2.00	1.00	0.041	A1	IV	3		
7	3.85	3.85	1.95	0.95	0.044	A1	IV	3		
8	3.80	3.80	2.10	0.95	0.049	A1	IV	3		
9	3.95	3.90	2.10	1.10	0.045	A1	IV	3		
10	3.80	3.75	1.90	0.85	0.041	A1	IV	3		
11	3.90	3.90	1.95	1.05	0.045	A1	IV	3		
12	3.80	3.75	1.90	0.75	0.043	A1	IV	3		
13	3.90	3.85	1.90	—	0.045	A1	IV	3		
14	3.80	3.75	1.80	1.00	0.040	A1	IV	3		
15	3.50	3.45	1.40	0.85	0.029	A1	IV	3		
16	3.75	3.70	1.80	1.05	0.039	A1	IV	3	褐色原料	
17	5.60	4.65	2.30	1.25	0.107	A1	Ⅲ	3		
18	3.85	3.80	1.90	0.95	0.045	A1	IV	3		
19	3.80	3.75	1.70	1.10	0.038	A1	IV	3		
20	3.50	3.40	1.60	0.90	0.031	A1	IV	3		
21	3.50	3.40	1.70	0.80	0.031	A1	IV	3		
22	3.65	3.60	1.60	0.85	0.036	A1	IV	3		
23	3.65	3.60	1.60	0.85	0.030	A1	IV	3		
24	3.65	3.60	1.80	0.85	0.038	A1	IV	3		
25	3.65	3.60	1.95	1.05	0.036	A1	IV	3		
26	4.05	4.00	2.10	0.80	0.064	A1	IV	3		
27	4.10	4.05	2.20	1.25	0.054	A1	IV	3		
28	3.80	3.80	2.40	0.95	0.051	A1	IV	3		
29	3.75	3.55	2.10	0.85	0.043	A1	IV	3	褐色原料	
30	3.90	3.85	1.95	0.95	0.045	A1	IV	3	褐色原料	
31	3.60	3.60	2.30	1.05	0.047	A1	IV	3	褐色原料	
32	3.75	3.75	2.15	0.80	0.048	A1	IV	3	褐色原料	
33	4.10	4.05	2.75	0.95	0.068	A1	IV	3		
34	3.75	3.70	2.50	0.85	0.054	A1	IV	3		
35	3.40	3.25	1.70	0.85	0.030	A1	IV	3		
36	3.60	3.50	1.90	1.05	0.039	A1	IV	3		
37	3.55	3.50	1.95	1.05	0.037	A1	IV	3		
38	4.00	3.85	2.15	0.95	0.049	A1	IV	3		
39	3.85	3.75	2.05	1.05	0.048	A1	IV	3		
40	3.85	3.80	1.85	0.95	0.040	A1	IV	3	褐色原料	
41	3.55	3.50	2.00	0.90	0.038	A1	IV	3	褐色原料	
42	3.80	3.70	1.90	1.05	0.044	A1	IV	3		
43	3.60	3.75	2.25	0.90	0.048	A1	IV	3		
44	3.55	3.45	1.70	0.85	0.034	A1	IV	3		
45	3.40	3.40	1.75	0.90	0.029	A1	IV	3		
46	3.60	3.40	1.90	0.95	0.035	A1	IV	3		
47	—	—	—	—	—	A1	IV	3		
48	3.75	3.65	2.20	0.85	0.046	A1	IV	3		
49	3.75	3.70	2.20	1.05	0.046	A1	IV	3		
50	3.95	3.90	1.65	1.30	0.040	A1	IV	3		
51	3.60	3.50	2.75	1.05	0.059	A1	IV	3		
52	3.60	3.55	2.00	0.95	0.038	A1	IV	3		
53	3.65	3.60	2.05	1.05	0.044	A1	IV	3		
54	4.05	4.05	2.35	1.15	0.054	A1	IV	3		
55	3.70	3.70	3.05	2.35	0.062	A1	IV	3		
56	3.65	3.60	3.45	1.90	0.05	0.031	A1	IV	3	
57	3.60	3.50	3.45	1.65	0.03	A1	IV	3		
58	3.50	3.45	1.50	1.50	0.029	A1	IV	3		
59	3.60	3.50	3.45	1.70	0.05	0.032	A1	IV	3	
60	3.60	3.50	3.30	1.30	0.052	A1	IV	3		
61	3.70	3.60	3.20	1.30	0.035	A1	IV	3		
62	3.70	3.60	3.20	1.30	0.035	A1	IV	3		
63	3.70	3.60	3.45	1.65	0.03	A1	IV	3		
64	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
65	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
66	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
67	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
68	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
69	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
70	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
71	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
72	3.60	3.50	3.45	1.50	0.03	A1	IV	3		
73	—	—	—	—	—	A1	—	—		
74	4.00	3.65	2.70	0.95	0.057	A1	IV	3		
75	3.80	3.75	2.20	0.95	0.046	A1	IV	3		
76	4.10	4.05	2.60	1.25	0.065	A1	IV	3		
77	4.00	4.00	2.45	1.05	0.057	A1	IV	3		
78	3.95	3.90	2.20	1.05	0.052	A1	IV	3		
79	4.20	4.15	2.45	1.05	0.063	A1	IV	3		
80	3.65	3.60	1.95	1.10	0.037	A1	IV	3		
81	4.10	4.00	2.20	1.10	0.050	A1	IV	3		
82	3.70	3.60	2.10	1.05	0.042	A1	IV	3		
83	4.00	3.95	2.85	1.00	0.059	A1	IV	3		
84	3.65	3.60	1.80	0.95	0.037	A1	IV	3		
85	3.75	3.75	1.95	0.95	0.044	A1	IV	3	褐色原料	
86	3.55	3.50	1.65	0.85	0.037	A1	—	—		
87	—	—	—	—	—	A1	—	—		
88	4.20	4.00	2.15	1.05	0.054	A1	IV	3		
89	9.05	8.85	6.55	1.60	0.761	A1	Ⅱ	1		
90	4.10	4.05	1.90	1.15	0.053	A1	IV	3		
91	3.70	3.65	1.90	1.05	0.041	A1	IV	3		
92	3.95	3.90	1.95	1.05	0.047	A1	IV	3		

第3表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覧表(1)

No.	片持径	縦径	厚径	原寸	孔径	重量	出土地点	大きさ	色	備考						
93	4.10	4.85	2.15	1.25	0.651	1.530	3.95	3.90	2.15	1.05	0.649	A1	IV	3		
94	3.65	3.80	2.50	0.95	0.653	140	4.00	3.95	2.10	0.95	0.650	A1	IV	3		
95	3.90	3.85	2.50	0.95	0.652	141	4.00	3.90	2.40	0.95	0.650	A1	IV	3		
96	3.90	3.85	2.60	0.95	0.652	142	4.00	3.95	2.05	0.95	0.650	A1	IV	3		
97	4.00	3.85	1.95	1.05	0.644	143	3.90	3.70	1.70	0.95	0.637	A1	IV	3		
98	3.95	3.80	2.60	1.05	0.643	144	3.90	3.70	1.60	0.80	0.642	A1	IV	3		
99	3.95	3.95	2.25	1.05	0.652	146	4.05	3.95	2.15	1.05	0.650	A1	IV	3		
100	3.95	3.90	1.85	1.05	0.643	147	3.85	3.75	2.20	0.95	0.642	A1	IV	3		
102	3.90	3.70	1.95	0.90	0.644	148	3.85	3.85	3.70	1.90	0.95	0.643	A1	IV	3	
103	3.90	3.80	2.00	0.95	0.646	149	3.90	3.80	2.20	1.00	0.650	A1	IV	3		
104	3.95	3.80	2.00	1.05	0.649	151	4.05	3.95	2.00	1.05	0.652	A1	IV	3	赤色原料	
106	4.00	3.85	1.95	1.25	0.644	152	4.00	4.00	2.00	1.05	0.652	A1	IV	3		
107	3.90	3.80	2.10	0.95	0.646	153	3.90	3.75	2.05	0.95	0.647	A1	IV	3	赤色原料	
108	3.85	3.75	1.80	0.95	0.639	154	4.00	3.80	1.95	1.00	0.643	A1	IV	3		
109	4.00	3.90	2.00	1.05	0.646	155	4.25	3.80	3.70	2.00	1.05	0.642	A1	IV	3	赤色原料
110	3.95	3.85	2.10	0.95	0.648	156	3.80	3.70	2.00	1.00	0.648	A1	IV	3		
111	4.00	3.95	2.35	1.05	0.653	158	3.90	3.75	1.95	1.00	0.641	A1	IV	3		
112	3.95	3.85	2.10	1.05	0.650	159	3.70	3.85	1.75	1.00	0.637	A1	IV	3	赤色原料	
113	3.90	3.85	1.95	1.00	0.626	160	4.00	3.95	2.20	0.95	0.653	A1	IV	3		
114	3.90	3.80	2.00	0.95	0.644	161	3.95	3.85	2.10	1.05	0.651	A1	IV	3		
115	3.95	3.85	2.10	1.05	0.648	162	3.90	3.85	1.95	1.05	0.646	A1	IV	3		
116	3.85	3.75	1.90	0.95	0.643	163	3.80	3.75	1.85	0.95	0.644	A1	IV	3	赤色原料	
117	3.80	3.75	1.90	1.25	0.643	164	3.85	3.75	2.10	0.85	0.649	A1	IV	3		
118	3.95	3.95	1.80	1.25	0.643	165	3.95	3.70	1.75	1.15	0.643	A1	IV	3		
119	3.90	3.75	1.90	1.10	0.643	167	4.15	3.95	2.00	1.10	0.653	A1	IV	3	赤色原料	
120	3.90	3.80	2.00	1.00	0.642	169	4.10	4.05	2.20	1.00	0.653	A1	IV	3	赤色原料	
121	3.85	3.60	1.75	1.00	0.642	169	4.10	4.05	1.90	0.95	0.651	A1	IV	3		
122	3.80	3.75	1.95	0.95	0.643	170	3.85	3.75	1.80	1.00	0.640	A1	IV	3		
123	3.75	3.55	1.95	0.95	0.637	171	3.95	3.85	1.85	1.00	0.642	A1	IV	3		
124	3.95	3.90	2.00	1.05	0.648	172	5.95	6.55	2.75	1.25	0.673	A2	III	3		
125	4.05	4.00	2.10	0.85	0.653	173	4.30	4.20	2.55	1.05	0.673	A3	IV	2		
126	3.90	3.85	2.05	1.05	0.648	174	3.95	3.85	1.95	0.95	0.647	A3	IV	3		
127	3.90	3.80	2.00	0.95	0.646	175	3.80	3.80	2.20	0.85	0.642	A3	IV	3	赤色原料	
128	3.90	3.75	2.00	1.05	0.644	176	3.45	3.35	1.50	0.95	0.629	A3	IV	3		
129	3.70	3.65	2.05	1.05	0.643	177	3.75	3.75	1.65	0.95	0.654	A3	IV	3	赤色原料	
130	3.90	3.85	2.00	1.05	0.645	178	3.65	3.75	1.65	0.95	0.654	A3	IV	3	赤色原料	
131	3.65	3.75	1.95	0.95	0.642	179	3.45	3.55	1.60	0.80	0.653	A3	IV	3	赤色原料	
132	3.65	3.85	2.00	0.75	0.647	180	3.70	3.85	1.85	1.05	0.645	A3	IV	3	赤色原料	
133	3.85	3.75	1.75	1.05	0.640	181	3.70	3.70	2.00	0.95	0.646	A3	IV	3	赤色原料	
134	4.05	3.75	1.95	0.95	0.645	181	3.65	3.75	2.00	0.85	0.648	A3	IV	3		
135	4.00	3.90	1.95	1.05	0.645	182	3.30	3.20	1.45	0.95	0.625	A3	IV	3		
136	4.00	3.80	2.00	1.05	0.647	183	4.00	3.85	2.00	1.05	0.649	A3	IV	3		
137	3.70	3.65	2.20	1.05	0.641	184	4.25	4.10	1.95	1.05	0.653	A3	IV	3		
138	3.65	3.75	1.70	1.05	0.637	184	4.25	4.10	1.95	1.05	0.653	A3	IV	3		

第4表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覧表(2)



№	長径	短径	周長	墓室	出土地蔵	大さき	色	備考	№	長径	短径	周長	墓室	出土地蔵	大さき	色	備考
185	3.60	3.60	1.95	1.00	0.045	A3	IV	3	231	3.65	3.70	2.00	1.00	0.045	A3	IV	3
186	3.95	3.85	2.10	0.95	0.046	A3	IV	3	232	3.60	3.75	1.90	0.95	0.039	A3	IV	3
187	4.05	4.00	2.10	0.95	0.051	A3	IV	3	233	3.65	3.55	2.35	0.95	0.045	A3	IV	3
188	4.35	4.20	2.55	1.05	0.072	A3	IV	2	234	3.40	3.30	1.45	1.00	0.024	A3	IV	3
189	3.45	3.40	1.85	0.95	0.034	A3	IV	3	235	3.60	3.75	1.80	1.05	0.040	A3	IV	3
190	3.90	3.80	2.10	0.85	0.047	A3	IV	3	236	3.80	3.75	2.05	0.85	0.043	A3	IV	3
191	3.55	3.45	1.75	1.05	0.031	A3	IV	3	237	4.25	4.15	2.70	0.85	0.069	A3	IV	3
192	3.35	3.20	1.60	0.95	0.031	A3	IV	3	238	4.20	4.05	2.75	0.85	0.068	A3	IV	3
193	4.40	4.15	2.45	0.95	0.068	A3	IV	3	239	3.70	3.65	1.70	1.05	0.035	A3	IV	3
194	3.70	3.70	2.25	1.05	0.048	A3	IV	3	240	3.75	3.65	1.65	0.90	0.038	A3	IV	3
195	3.90	3.75	2.00	0.95	0.059	A3	IV	3	241	3.55	3.55	1.75	0.85	0.032	A3	IV	3
196	4.05	3.75	2.35	0.90	0.049	A3	IV	3	242	3.75	3.85	2.15	1.05	0.042	A3	IV	3
197	3.95	3.85	1.85	1.25	0.044	A3	IV	3	243	3.70	3.55	1.60	1.05	0.033	A3	IV	3
198	3.95	3.75	1.95	0.75	0.048	A3	IV	3	244	3.80	3.50	1.90	0.85	0.041	A3	IV	3
199	4.05	3.60	2.20	1.25	0.065	A3	IV	2	245	3.85	3.70	2.65	1.05	0.055	A3	IV	3
200	3.90	3.80	1.85	0.85	0.042	A3	IV	3	246	4.10	3.85	2.85	0.95	0.065	A3	IV	3
201	3.75	3.65	2.05	0.95	0.040	A3	IV	3	247	4.30	4.25	2.75	1.05	0.068	A3	IV	3
202	3.60	3.75	2.65	0.95	0.051	A3	IV	3	248	3.30	3.20	1.65	0.95	0.033	A3	IV	3
203	7.20	7.05	2.75	1.50	0.240	A3	Ⅲ	3	249	3.85	3.75	2.55	0.95	0.049	A3	IV	3
204	6.40	4.80	3.05	1.40	0.135	A3	Ⅲ	3	250	3.50	3.45	1.95	0.95	0.039	A3	IV	3
205	3.95	3.90	2.25	0.95	0.053	A3	IV	3	251	3.95	3.80	2.05	0.85	0.048	A3	IV	3
206	3.60	1.65	1.65	1.10	0.031	A3	IV	3	252	4.10	3.95	1.90	0.95	0.050	A3	IV	3
207	4.10	3.95	2.90	1.05	0.067	A3	IV	3	253	3.85	3.75	1.80	1.05	0.039	A3	IV	3
208	3.90	3.80	2.05	0.95	0.048	A3	IV	3	254	3.95	3.85	2.05	0.85	0.046	A3	IV	3
209	4.25	4.10	2.05	0.95	0.055	A3	IV	3	255	3.90	3.65	2.25	0.95	0.047	A3	IV	3
210	3.85	3.75	1.80	0.95	0.044	A3	IV	3	256	4.10	3.65	1.50	1.10	0.046	A3	IV	3
211	3.25	3.15	1.60	0.95	0.025	A3	IV	3	257	3.85	3.80	2.52	1.05	0.052	A3	IV	3
212	3.60	3.40	1.80	0.95	0.033	A3	IV	3	258	4.00	3.95	1.52	1.05	0.043	A3	IV	3
213	6.00	5.85	2.82	1.40	0.157	A3	Ⅲ	3	259	3.90	3.85	2.75	1.10	0.051	A3	IV	3
214	5.20	4.05	2.32	1.35	0.081	A3	Ⅲ	3	260	3.55	3.45	1.60	1.10	0.025	A3	IV	3
215	3.65	3.65	1.60	1.05	0.031	A3	IV	3	261	3.95	3.85	2.00	0.80	0.043	A3	IV	3
216	3.90	3.85	2.15	0.95	0.043	A3	IV	3	262	4.05	3.90	2.13	1.05	0.049	A3	IV	3
217	3.60	3.45	1.60	0.95	0.036	A3	IV	3	263	3.85	3.60	1.65	0.95	0.028	A3	IV	3
218	3.65	3.65	2.15	0.75	0.047	A3	IV	3	264	3.65	3.65	2.55	0.95	0.053	A3	IV	3
219	3.60	3.45	1.85	0.95	0.034	A3	IV	3	265	3.90	3.70	2.30	1.05	0.048	A3	IV	3
220	3.85	3.75	1.65	0.95	0.043	A3	IV	3	266	3.85	3.75	1.90	0.95	0.042	A3	IV	3
221	3.55	3.55	2.35	0.95	0.045	A3	IV	3	267	4.00	3.85	2.05	1.05	0.049	A3	IV	3
222	3.50	3.45	1.60	0.85	0.034	A3	IV	3	268	3.55	3.50	1.60	0.85	0.032	A3	IV	3
223	3.90	3.75	2.05	0.95	0.045	A3	IV	3	269	3.45	3.35	1.40	1.05	0.027	A3	IV	3
224	3.95	3.85	1.80	1.05	0.046	A3	IV	3	270	4.00	4.00	1.95	1.05	0.051	A3	IV	3
225	4.00	3.95	2.50	1.10	0.048	A3	IV	3	271	3.95	3.85	2.20	0.90	0.051	A3	IV	3
226	3.35	3.15	1.55	0.95	0.025	A3	IV	3	272	3.85	3.85	1.90	0.95	0.041	A3	IV	3
227	4.00	3.85	2.45	0.95	0.056	A3	IV	3	273	3.65	3.75	1.95	0.95	0.044	A3	IV	3
228	3.55	3.45	2.25	0.85	0.046	A3	IV	3	274	3.75	3.55	1.85	1.25	0.026	A3	IV	3
229	3.75	3.65	1.80	1.05	0.038	A3	IV	3	275	4.15	4.05	2.85	1.05	0.066	A3	IV	3
230	3.95	3.85	2.05	1.05	0.046	A3	IV	3	276	3.95	3.85	1.90	0.95	0.045	A3	IV	3

第5表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覧表(3)



No.	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	乳眼(mm)	重量(g)	出土地点	大きさ	色	備考	%	長径(mm)	短径(mm)	厚さ(mm)	乳眼(mm)	重量(g)	出土地点	大きさ	色	備考	
369	3.65	3.40	0.96	0.037	A4	IV	3	茶色原料	415	3.95	3.50	1.65	1.40	0.058	D	IV	3			
370	3.95	3.90	1.10	0.047	A4	IV	3		416	3.90	3.80	2.10	1.00	0.050	D	IV	3			
371	—	—	—	—	A4	—	3		417	3.75	3.55	2.05	0.95	0.042	D	IV	3			
372	3.85	3.70	1.90	0.042	A4	IV	3		418	3.90	3.80	1.80	1.25	0.038	D	IV	3			
373	3.45	3.40	1.50	0.95	0.030	A4	IV	3	419	3.60	3.55	2.15	1.25	0.065	D	IV	3			
374	3.65	3.65	2.20	1.00	0.041	A4	IV	3	420	4.25	4.05	2.75	1.25	0.065	D	IV	3			
375	4.05	3.85	1.70	1.05	0.040	A4	IV	3	421	3.85	3.75	2.50	1.05	0.052	D	IV	3			
376	3.85	3.75	1.95	0.95	0.042	A4	IV	3	422	3.90	3.75	2.20	1.05	0.048	D	IV	3			
377	4.60	4.40	2.55	0.95	0.075	A4	IV	3	423	4.15	3.95	2.40	0.95	0.053	D	IV	3			
378	3.80	3.70	2.55	0.95	0.051	A4	IV	3	424	3.90	3.80	2.00	1.40	0.039	D	IV	3			
379	3.95	3.90	2.00	0.95	0.045	A4	IV	3	425	4.25	4.05	2.10	0.95	0.059	D	IV	3		茶色原料	
380	4.10	4.00	2.00	1.00	0.050	A4	IV	3	426	3.95	3.75	1.70	1.05	0.040	D	IV	3			
381	3.80	3.60	1.80	0.95	0.035	A4	IV	3	427	3.75	3.65	2.15	0.90	0.043	D	IV	3			
382	3.60	3.45	1.45	0.95	0.032	A4	IV	3	428	3.90	3.85	1.95	0.95	0.043	D	IV	3			
383	3.60	3.50	1.65	1.25	0.030	A4	IV	3	429	4.20	4.10	2.30	1.15	0.056	D	IV	3			
384	3.95	3.90	2.20	0.95	0.050	A4	IV	3	430	4.10	4.00	1.85	1.25	0.048	D	IV	3			
385	3.60	3.70	1.65	1.05	0.036	A4	IV	3	431	4.25	4.10	2.20	1.15	0.057	D	IV	3			
386	4.00	3.90	1.85	0.95	0.044	A4	IV	3	432	3.40	3.35	3.50	1.90	1.15	0.033	D	IV	3		
387	4.00	4.00	2.25	1.05	0.045	A4	IV	3	433	3.55	3.50	1.75	1.10	0.033	D	IV	3			
388	4.15	4.00	1.85	1.05	0.045	A4	IV	3	434	3.85	3.65	2.00	0.95	0.041	D	IV	3		茶色原料	
389	3.85	3.60	2.20	1.05	0.046	A4	IV	3	435	3.50	3.45	1.85	1.05	0.033	D	IV	3			
390	3.85	3.75	2.25	0.95	0.051	A4	IV	3	436	3.95	3.85	1.40	0.95	0.048	D	IV	3		茶色原料	
391	4.05	4.00	2.25	1.10	0.051	A4	IV	3	437	3.85	3.65	2.35	1.15	0.046	D	IV	3		茶色原料	
392	3.50	3.40	2.25	0.85	0.038	A4	IV	3	438	3.95	3.75	2.60	0.95	0.054	D	IV	3		茶色原料	
393	3.65	3.55	1.25	1.05	0.023	A4	IV	3	439	3.85	3.65	2.05	0.85	0.039	D	IV	3		茶色原料	
394	4.00	3.95	2.05	1.10	0.047	A4	IV	3	440	3.60	3.55	1.80	0.95	0.044	D	IV	3		茶色原料	
395	3.80	3.60	2.45	0.75	0.050	A4	IV	3	442	3.60	3.55	1.90	1.10	0.021	D	IV	3		茶色原料	
396	3.85	3.60	1.85	1.05	0.041	A4	IV	3	443	3.90	3.75	1.70	1.25	0.030	D	IV	3		茶色原料	
397	3.75	3.70	2.20	1.10	0.051	A4	IV	3	444	3.65	3.55	2.00	0.85	0.039	D	IV	3		茶色原料	
398	4.15	3.90	2.20	1.10	0.051	A4	IV	3	445	3.95	3.85	1.50	1.85	0.029	D	IV	3		茶色原料	
399	4.00	3.95	2.15	1.05	0.049	A4	IV	3	446	3.80	3.75	1.85	0.95	0.040	D	IV	3		茶色原料	
400	3.90	3.85	2.00	1.05	0.061	A4	IV	3	447	4.00	3.90	2.00	1.00	0.046	D	IV	3		茶色原料	
401	3.98	3.80	2.00	1.00	0.045	A4	IV	3	448	4.00	3.85	1.75	0.95	0.039	D	IV	3		茶色原料	
402	3.95	3.90	1.95	0.95	0.045	A4	IV	3	449	4.00	3.85	1.95	0.95	0.044	D	IV	3		茶色原料	
403	4.05	3.95	2.15	1.25	0.053	A4	IV	3	450	4.05	3.95	3.30	1.00	0.072	D	IV	2			
404	3.65	3.75	1.70	0.75	0.038	A4	IV	3	451	4.25	4.15	1.55	1.05	0.053	D	IV	3			
405	3.75	3.55	1.75	1.25	0.033	A4	IV	3	452	3.70	3.65	1.55	1.05	0.030	D	IV	3		茶色原料	
406	3.75	3.70	2.15	1.00	0.040	A4	IV	3	453	3.70	3.65	1.55	0.95	0.034	D	IV	3		茶色原料	
407	3.65	3.60	1.95	0.95	0.037	A4	IV	3	454	4.15	4.05	2.15	0.95	0.069	D	IV	3		茶色原料	
408	3.90	3.75	2.00	0.95	0.040	A4	IV	3	455	4.15	4.15	2.20	0.95	0.060	D	IV	3		茶色原料	
409	—	—	—	—	—	A4	—	3	456	4.00	3.95	2.05	0.95	0.050	D	IV	3		茶色原料	
410	3.95	3.85	2.85	0.85	0.054	A4	IV	3	457	3.75	3.65	1.70	0.95	0.040	D	IV	3		茶色原料	
411	3.75	3.70	—	—	—	A4	IV	3	458	3.90	3.85	1.45	1.25	0.036	D	IV	3		茶色原料	
412	4.35	4.25	—	—	—	A4	IV	3	459	3.70	3.55	2.10	1.05	0.043	D	IV	3		茶色原料	
413	—	—	—	—	—	A4	—	4	460	3.70	3.55	2.25	0.96	0.048	D	IV	3			
414	—	—	—	—	—	A4	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

第7表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覧表(5)

No.	長径	短径	口径	重量	出土地点	大さき	色	備考	
461	3.90	3.75	1.90	0.95	0.949	D	IV	3	
462	3.10	3.00	1.65	0.75	0.925	D	IV	3	
463	4.15	4.15	2.30	1.00	0.960	D	IV	3	
464	3.85	3.80	2.05	0.80	0.947	D	IV	3	
465	4.05	4.00	2.00	1.05	0.948	D	IV	3	
466	3.70	3.55	1.35	1.25	0.927	D	IV	3	
467	3.95	3.85	2.15	1.00	0.948	D	IV	3	
468	3.85	3.85	2.25	1.00	0.943	D	IV	3	
469	4.10	3.95	2.80	1.25	0.907	D	IV	3	
470	3.65	3.55	2.35	0.90	0.949	D	IV	3	
471	3.75	3.70	2.00	0.95	0.943	D	IV	3	
472	3.50	3.40	1.65	1.05	0.931	D	IV	3	
473	3.85	3.80	2.50	0.95	0.953	D	IV	3	
474	3.70	3.60	1.95	1.05	0.942	D	IV	3	
475	3.90	3.70	2.15	1.00	0.946	D	IV	3	
476	3.70	3.60	1.60	1.05	0.931	D	IV	3	
477	3.40	3.30	1.60	0.95	0.920	D	IV	3	
478	3.60	3.50	2.30	0.95	0.948	D	IV	3	
479	3.95	3.85	1.45	0.95	0.953	D	IV	3	
480	3.70	3.65	2.15	0.95	0.944	D	IV	3	
481	3.70	3.65	1.75	1.20	0.935	D	IV	3	
482	3.60	3.55	1.75	0.85	0.936	D	IV	3	
483	3.90	3.75	1.80	0.85	0.943	D	IV	3	
484	3.80	3.70	1.90	1.05	0.933	D	IV	3	
485	3.85	3.80	1.90	0.95	0.945	D	IV	3	
486	3.85	3.75	2.45	0.85	0.950	D	IV	3	
487	3.65	3.50	2.05	0.85	0.942	D	IV	3	
488	4.15	4.00	2.05	0.85	0.954	D	IV	3	
489	3.70	3.60	1.95	1.05	0.937	D	IV	3	
490	4.00	3.95	2.50	0.95	0.959	D	IV	3	
491	3.25	3.15	1.60	0.90	0.927	D	IV	3	
492	4.05	4.00	2.10	1.05	0.951	D	IV	3	
493	3.78	3.75	1.25	1.25	0.926	D	IV	3	
494	3.65	3.45	1.60	0.95	0.932	D	IV	3	
495	3.65	3.60	1.80	0.95	0.936	D	IV	3	
496	3.95	3.90	2.10	0.90	0.949	D	IV	3	
497	3.95	3.85	2.20	0.90	0.953	D	IV	3	
498	3.35	3.05	2.00	1.00	0.928	D	IV	3	
499	3.75	3.65	1.75	0.95	0.940	D	IV	3	
500	3.40	3.15	1.15	1.05	0.922	D	IV	3	
501	3.95	3.90	1.80	0.95	0.944	D	IV	3	
502	4.05	4.00	2.55	0.95	0.962	D	IV	3	
503	3.75	3.60	1.75	1.05	0.933	D	IV	3	
504	3.80	3.80	2.10	0.85	0.948	D	IV	3	
505	3.60	3.55	1.65	1.25	0.934	D	IV	3	
506	3.95	3.60	2.30	1.10	0.953	D	IV	3	
507	4.10	3.95	2.60	1.05	0.957	D	IV	3	
508	4.10	4.05	3.90	1.95	1.40	0.939	D	IV	3
509	3.80	3.75	2.20	1.05	0.963	D	IV	3	
510	3.75	3.65	3.05	1.90	0.948	D	IV	3	
511	4.05	4.00	2.05	0.96	0.951	D	IV	3	
512	3.85	3.85	2.10	1.10	0.943	D	IV	3	
513	3.85	3.80	1.55	1.05	0.935	D	IV	3	
514	4.15	3.75	1.95	1.10	0.950	D	IV	3	
515	3.90	3.80	2.05	0.95	0.942	D	IV	3	
516	4.00	3.80	2.05	0.95	0.946	D	IV	3	
517	3.75	3.65	1.65	1.25	0.931	D	IV	3	
518	4.05	3.95	1.95	1.05	0.946	D	IV	3	
519	3.70	3.65	1.70	2.25	0.934	D	IV	3	
520	3.80	3.75	2.25	0.85	0.948	D	IV	3	
521	3.50	3.35	1.70	1.05	0.931	D	IV	3	
522	4.15	4.15	2.15	1.05	0.946	D	IV	3	
523	3.70	3.60	2.55	1.25	0.930	D	IV	3	
524	2.55	2.50	2.40	1.25	0.966	D	IV	3	
525	3.80	3.70	2.05	0.85	0.942	D	IV	3	
526	3.95	3.85	2.35	0.85	0.956	D	IV	3	
527	3.60	3.40	1.90	0.95	0.935	D	IV	3	
528	4.10	4.05	2.45	1.25	0.962	D	IV	3	
529	4.30	4.20	2.15	1.05	0.960	D	IV	3	
530	3.85	3.80	2.00	1.00	0.944	D	IV	3	
531	4.10	3.95	2.95	0.95	0.966	D	IV	3	
532	3.95	3.90	2.25	1.05	0.951	D	IV	3	
533	3.95	3.90	2.25	1.15	0.955	D	IV	3	
534	3.95	3.90	2.25	0.95	0.950	D	IV	3	
535	4.00	3.95	2.10	1.20	0.948	D	IV	3	
536	4.15	4.10	2.20	1.30	0.952	D	IV	3	
537	4.05	3.70	2.50	1.05	0.957	D	IV	3	
538	3.95	3.90	1.95	1.40	0.939	D	IV	3	
539	4.15	4.10	2.45	0.95	0.963	D	IV	3	
540	3.55	3.50	1.80	0.95	0.934	D	IV	3	
541	4.05	4.00	2.35	0.90	0.948	D	IV	3	
542	3.90	3.85	2.30	1.00	0.955	D	IV	3	
543	3.60	3.55	1.60	1.10	0.932	D	IV	3	
544	3.75	3.60	1.60	1.10	0.933	D	IV	3	
545	4.15	4.05	2.60	0.95	0.971	D	IV	3	
546	3.85	3.75	2.20	0.90	0.953	D	IV	3	
547	3.75	3.65	2.00	0.76	0.945	D	IV	3	
548	3.70	3.60	1.70	1.05	0.938	D	IV	3	
549	3.80	3.70	1.65	1.25	0.932	D	IV	3	
550	7.70	6.70	4.40	1.25	0.886	D	重	2	
551	4.00	3.65	1.95	0.90	0.944	D	IV	3	
552	3.70	3.65	1.40	1.25	0.931	D	IV	3	

第8表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覽表(6)



No.	長さ	幅	厚さ	乳鉢	重量	出土地点	大きさ	色	備考
553	4.30	4.20	2.30	1.00	0.063	D	IV	3	
554	4.25	4.10	1.80	0.85	0.053	D	IV	3	
555	3.70	3.60	2.05	0.95	0.041	D	IV	3	
556	3.75	3.70	2.20	0.95	0.046	D	IV	3	
557	4.10	4.05	2.45	1.00	0.061	D	IV	3	
558	3.95	3.85	2.25	1.15	0.049	D	IV	3	赤色原料
559	3.85	3.80	2.35	0.95	0.048	D	IV	3	赤色原料
560	4.10	4.00	1.90	1.25	0.049	D	IV	3	
561	3.90	3.85	1.90	1.25	0.039	D	IV	3	
562	3.85	3.80	2.80	0.95	0.058	D	IV	3	
563	3.80	3.70	1.90	1.05	0.041	D	IV	3	
564	3.85	3.80	1.95	1.00	0.046	D	IV	3	赤色原料
565	3.70	3.65	1.80	0.85	0.041	D	IV	3	
566	3.70	3.60	1.85	1.15	0.037	D	IV	3	
567	3.55	3.50	2.05	0.75	0.036	D	IV	3	
568	3.55	3.55	2.10	1.00	0.038	D	IV	3	
569	3.65	3.60	2.15	0.85	0.043	D	IV	3	
570	3.75	3.70	1.95	1.0	0.035	D	IV	3	
571	3.65	3.65	1.95	0.85	0.044	D	IV	3	
572	3.85	3.85	1.85	0.85	0.042	D	IV	3	
573	3.55	3.45	1.70	0.95	0.034	D	IV	3	
574	3.75	3.70	2.30	1.00	0.044	D	IV	3	
575	3.65	3.65	2.30	0.95	0.046	D	IV	3	
576	3.60	3.60	1.65	1.00	0.033	D	IV	3	
577	3.60	3.50	1.55	1.05	0.033	D	IV	3	
578	4.80	4.75	1.85	1.25	0.039	D	III	3	
579	4.15	4.10	1.85	1.00	0.053	D	IV	3	赤色原料
580	3.85	3.75	1.70	1.25	0.038	D	IV	3	
581	4.25	4.10	2.20	0.95	0.060	D	IV	3	
582	3.50	3.40	1.45	1.05	0.025	D	IV	3	
583	3.80	3.75	2.05	0.95	0.045	D	IV	3	
584	3.85	3.75	1.75	1.05	0.039	D	IV	3	
585	3.75	3.70	2.00	0.95	0.043	D	IV	3	
586	3.65	3.60	2.25	1.00	0.043	D	IV	3	
587	4.15	4.05	2.30	1.25	0.066	D	IV	3	
588	3.95	3.80	2.60	1.25	0.060	D	IV	3	
589	3.95	3.90	1.95	1.25	0.042	D	IV	3	
590	3.80	3.70	1.95	1.00	0.041	D	IV	3	
591	3.70	3.65	1.85	0.95	0.037	D	IV	3	
592	3.90	3.85	2.05	0.95	0.046	D	IV	3	
593	3.95	3.90	2.30	0.95	0.054	D	IV	3	赤色原料
594	3.95	3.85	1.95	1.05	0.043	D	IV	3	
595	4.15	3.90	2.10	1.10	0.048	D	IV	3	
596	4.45	4.20	2.55	1.10	0.071	D	IV	3	
597	4.10	4.05	2.35	0.95	0.058	D	IV	3	赤色原料
598	3.90	3.85	1.95	1.00	0.046	D	IV	3	
599	4.15	4.10	2.00	2.00	0.052	D	IV	3	
600	3.95	3.85	2.45	1.00	0.054	D	IV	3	
601	3.70	3.55	1.60	0.95	0.033	D	IV	3	
602	3.60	3.55	1.75	1.10	0.033	D	IV	3	
603	3.55	3.45	1.75	0.95	0.035	D	IV	3	
604	3.85	3.80	2.00	1.00	0.043	D	IV	3	
605	3.85	3.80	2.10	1.05	0.046	D	IV	3	
606	3.55	3.55	2.20	1.00	0.044	D	IV	3	
607	3.70	3.55	2.40	0.95	0.051	D	IV	3	
608	4.05	4.00	2.50	1.00	0.052	D	IV	3	
609	2.75	2.70	1.50	0.85	0.018	D	IV	3	
610	3.65	3.55	2.20	0.95	0.046	D	IV	3	
611	3.50	3.45	1.60	0.95	0.034	D	IV	3	
612	3.45	3.40	1.75	1.00	0.032	D	IV	3	
613	4.10	4.00	2.50	1.00	0.058	D	IV	3	
614	3.70	3.60	1.85	0.95	0.040	D	IV	3	
615	4.10	4.00	2.25	0.95	0.056	D	IV	3	
616	4.10	4.05	2.55	0.95	0.060	D	IV	3	
617	3.75	3.65	2.50	0.90	0.043	D	IV	3	
618	3.70	3.65	2.05	1.00	0.040	D	IV	3	
619	3.85	3.80	2.20	0.95	0.049	D	IV	3	
620	2.75	2.70	1.60	1.00	0.040	D	IV	3	
621	4.15	4.05	1.90	1.00	0.048	D	IV	3	
622	3.90	3.80	1.90	0.90	0.054	D	IV	3	
623	4.00	3.90	2.25	0.95	0.054	D	IV	3	
624	4.00	3.90	1.85	1.05	0.041	D	IV	3	
625	4.10	4.05	2.00	0.95	0.054	D	IV	3	
626	4.30	4.20	2.50	1.05	0.070	D	IV	3	赤色原料
627	3.70	3.65	2.15	1.25	0.044	D	IV	3	
628	3.50	3.35	1.70	0.85	0.034	D	IV	3	
629	3.75	3.35	2.05	0.85	0.041	D	IV	3	
630	3.55	3.55	1.85	1.00	0.036	D	IV	3	
631	4.20	3.85	1.85	0.95	0.050	D	IV	3	
632	3.95	3.80	1.95	1.05	0.045	D	IV	3	
633	3.65	3.55	1.75	1.00	0.035	D	IV	3	
634	3.75	3.65	1.85	1.00	0.039	D	IV	3	
635	3.55	3.45	1.95	1.10	0.036	D	IV	3	
636	3.85	3.80	2.00	0.95	0.040	D	IV	3	
637	3.80	3.70	2.05	1.00	0.044	D	IV	3	
638	4.10	4.05	2.45	1.00	0.064	D	IV	3	
639	3.95	3.85	2.30	0.90	0.058	D	IV	3	
640	3.80	3.70	1.90	1.05	0.040	D	IV	3	
641	3.85	3.75	1.70	1.00	0.040	D	IV	3	
642	3.75	3.65	1.55	1.05	0.034	D	IV	3	
643	3.60	3.50	1.70	0.95	0.035	D	IV	3	赤色原料
644	3.10	3.05	1.50	1.05	0.023	D	IV	3	

第9表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覧表(7)



№	長径	短径	乳眼	重量	出土地点	大きさ	色	備考	%	長径	短径	乳眼	重量	出土地点	大きさ	色	備考	
643	3.85	3.50	1.70	1.25	0.039	D	IV	3	691	3.30	3.10	1.90	0.95	0.024	A2	IV	3	
646	3.65	3.45	1.75	1.25	0.028	D	IV	3	692	3.80	3.75	1.50	1.40	0.039	A2	IV	3	
647	3.55	3.40	1.75	1.15	0.033	D	IV	3	693	4.00	3.80	2.30	0.95	0.052	A2	IV	3	
648	3.30	3.25	1.40	0.70	0.026	D	IV	3	694	3.90	3.85	2.05	0.90	0.047	A2	IV	3	
649	4.10	4.05	2.15	1.00	0.064	D	IV	3	695	3.85	3.70	2.60	1.00	0.061	A2	IV	3	
650	3.85	3.75	1.65	1.00	0.039	D	IV	3	696	3.75	3.65	1.00	0.067	A2	IV	3		
651	3.85	3.55	1.85	1.00	0.037	D	IV	3	697	5.05	4.05	3.25	1.25	0.114	A2	III	2	赤色原料
652	3.95	3.90	2.35	0.96	0.060	D	IV	3	698	4.15	4.00	2.85	0.95	0.072	A2	IV	3	
653	3.80	3.75	2.15	0.85	0.044	D	IV	3	699	3.85	3.80	2.50	1.05	0.054	A2	IV	3	
654	3.85	3.80	1.85	0.85	0.041	D	IV	3	700	3.60	3.55	2.10	0.85	0.041	A2	IV	3	
655	3.85	3.80	1.90	0.95	0.045	D	IV	3	701	4.10	4.35	2.45	1.05	0.069	A2	IV	3	
656	—	—	—	—	0.036	D	—	—	702	4.40	3.85	1.85	0.95	0.045	A2	IV	3	
657	—	—	—	—	0.028	D	—	—	703	4.00	3.95	2.30	1.00	0.056	A2	IV	3	
658	—	—	—	—	0.039	D	—	—	704	3.90	3.75	2.00	1.00	0.047	A2	IV	3	
659	—	—	—	—	0.024	D	—	—	705	5.55	3.45	2.30	1.00	0.040	A2	IV	3	
660	—	—	—	—	0.044	D	—	—	706	3.60	3.55	1.75	1.05	0.038	A2	IV	3	
661	—	—	—	—	0.024	D	—	—	707	2.80	2.75	1.30	0.85	0.013	A2	IV	3	
662	—	—	—	—	0.016	D	—	—	708	3.55	3.45	1.95	0.95	0.033	A2	IV	3	
663	4.15	3.95	2.05	0.648	A3	IV	3	709	3.75	3.65	1.60	0.90	0.033	A2	IV	3		
664	4.15	4.10	2.65	0.75	0.053	A3	IV	3	710	3.45	3.35	1.60	0.90	0.030	A2	IV	3	
665	4.10	3.85	2.75	0.85	0.053	A3	IV	3	711	5.55	3.45	1.85	0.95	0.033	A2	IV	2	赤色原料
666	4.00	3.90	1.90	0.95	0.033	A3	IV	3	712	3.90	3.80	2.05	0.95	0.044	A2	IV	2	赤色原料
667	—	—	—	—	0.478	A3	—	—	713	4.35	3.82	2.05	1.05	0.052	A2	IV	2	赤色原料
668	—	—	—	—	0.642	A3	—	—	714	4.50	3.85	1.85	1.05	0.043	A2	IV	2	赤色原料
669	—	—	—	—	0.022	A3	—	—	715	5.50	3.50	2.25	1.00	0.037	A2	IV	3	赤色原料
670	—	—	—	—	0.030	A3	—	—	716	3.45	3.35	1.20	1.05	0.020	A2	IV	3	赤色原料
671	—	—	—	—	0.021	A3	—	—	717	3.90	3.70	2.15	1.05	0.044	A2	IV	3	赤色原料
672	—	—	—	—	0.023	A3	—	—	718	3.90	3.85	1.80	1.00	0.047	A2	IV	3	赤色原料
673	—	—	—	—	0.010	A3	—	—	719	3.95	3.75	2.45	0.95	0.059	A2	IV	3	赤色原料
674	—	—	—	—	0.028	A3	—	—	720	3.90	3.45	1.65	0.95	0.032	A2	IV	3	赤色原料
675	6.20	6.80	3.10	1.25	0.183	A2	III	—	721	4.00	3.95	1.85	1.25	0.044	A2	IV	3	
676	4.70	4.60	3.45	1.05	0.113	C	III	—	722	4.05	3.85	2.00	1.25	0.050	A2	IV	3	
677	3.85	3.65	2.05	1.05	0.043	A2	IV	3	723	3.90	3.70	1.80	1.00	0.043	A2	IV	3	
678	4.55	4.10	2.20	1.05	0.074	A2	IV	2	724	3.95	3.85	2.05	1.10	0.048	A2	IV	3	
679	3.65	3.55	2.20	1.00	0.050	A2	IV	2	725	4.05	3.75	2.45	0.95	0.048	A2	IV	3	
680	3.85	3.75	2.15	0.95	0.050	A2	IV	3	726	3.70	3.65	1.50	1.30	0.038	A2	IV	3	
681	3.90	3.85	2.45	0.95	0.056	A2	IV	3	727	3.55	3.40	1.95	1.05	0.035	A2	IV	3	
682	3.70	3.55	2.05	1.00	0.040	A2	IV	3	728	3.70	3.65	2.55	0.95	0.052	A2	IV	3	
683	4.00	3.95	2.00	0.95	0.050	A2	IV	3	729	4.30	4.15	2.20	1.05	0.099	A2	IV	3	
684	3.80	3.60	2.05	0.95	0.051	A2	IV	3	730	6.45	6.05	2.90	1.10	0.196	A2	III	3	
685	3.75	3.55	2.05	0.95	0.041	A2	IV	3	731	4.55	4.40	2.45	0.95	0.078	A2	IV	3	
686	3.70	3.40	1.45	0.95	0.031	A2	IV	2	732	3.20	3.15	2.65	1.25	0.066	A2	IV	3	
687	4.10	4.00	2.05	1.25	0.055	A2	IV	2	733	3.95	3.80	1.90	1.10	0.045	A2	IV	3	
688	4.10	4.00	1.95	1.00	0.053	A2	IV	3	734	4.20	4.05	1.95	1.00	0.052	A2	IV	3	
689	4.00	3.95	1.90	1.05	0.049	A2	IV	3	735	3.55	3.50	2.00	0.95	0.037	A2	IV	3	
690	3.55	3.45	1.75	0.85	0.034	A2	IV	3	736	2.75	2.70	1.90	1.25	0.035	A2	IV	3	

第10表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覽表(8)

No.	長径	短径	原高	礼拝間	重葺	出土地点	大さ	色	備考
737	3.90	3.60	2.05	1.05	0.948	A2	IV	3	
738	4.15	4.05	1.70	1.15	0.947	A2	IV	3	
739	3.85	3.80	2.70	1.05	0.966	A2	IV	3	
740	3.95	3.95	1.50	1.25	0.941	A2	IV	3	
741	4.05	3.95	2.40	1.00	0.961	A2	IV	3	
742	4.15	4.00	1.90	1.05	0.950	A2	IV	3	
743	4.05	3.95	2.05	0.95	0.954	A2	IV	3	
744	3.70	3.70	1.95	0.95	0.941	A2	IV	3	
745	3.75	3.65	2.65	0.95	0.954	A2	IV	3	
746	3.90	3.80	2.55	1.00	0.928	A2	IV	3	
747	3.60	3.55	2.10	1.00	0.942	A2	IV	3	
748	3.60	3.55	1.65	0.95	0.930	A2	IV	3	
749	4.05	3.95	2.40	0.95	0.935	A2	IV	3	
750	3.95	3.90	2.20	1.05	0.942	A2	IV	3	
751	3.85	3.80	1.60	1.25	0.931	A2	IV	3	
752	3.90	3.85	2.25	0.90	0.944	A2	IV	3	
753	3.60	3.55	1.60	1.10	0.931	A2	IV	3	
754	3.70	3.65	2.05	1.00	0.942	A2	IV	3	
755	3.90	3.75	2.85	1.00	0.959	A2	IV	3	
756	3.85	3.85	1.95	0.95	0.941	A2	IV	3	
757	4.15	4.05	1.80	1.25	0.941	A2	IV	3	
758	---	---	---	---	---	A2	---	---	
759	4.05	3.75	2.25	0.95	0.946	A3	---	---	
760	3.85	3.75	2.55	0.95	0.951	A2	IV	2	
761	3.65	3.45	2.15	0.90	0.942	A2	IV	2	
762	3.75	3.70	2.05	1.00	0.942	A2	IV	3	
763	4.00	3.85	2.10	0.90	0.949	A2	IV	3	
764	4.25	4.20	2.30	0.95	0.957	A2	IV	3	
765	3.65	3.60	2.10	0.95	0.940	A2	IV	3	
766	4.25	4.20	2.20	1.10	0.959	A2	IV	3	
767	4.45	4.35	2.60	1.05	0.974	A2	IV	3	
768	3.75	3.55	1.70	1.00	0.952	A2	IV	3	
769	4.15	4.05	2.15	1.05	0.952	A2	IV	3	
770	4.10	3.85	2.30	1.10	0.953	A2	IV	3	
771	3.65	3.55	1.95	1.25	0.936	A2	IV	3	
772	3.95	3.95	2.15	1.00	0.949	A2	IV	3	
773	4.00	3.90	1.60	1.30	0.940	A2	IV	3	
774	4.35	4.25	2.35	1.05	0.958	A2	IV	3	
775	3.85	3.75	1.80	1.35	0.940	A2	IV	3	
776	4.65	4.55	2.25	1.20	0.951	A2	IV	3	
777	4.05	3.95	2.10	1.05	0.950	A2	IV	3	
778	4.20	4.15	2.45	1.00	0.954	A2	IV	3	
779	3.95	3.90	2.10	1.05	0.943	A2	IV	3	
780	4.35	4.30	2.10	1.05	0.959	A2	IV	3	
781	3.70	3.60	2.85	1.10	0.951	A2	IV	3	
782	3.80	3.75	2.00	1.05	0.944	A2	IV	3	
783	3.90	3.85	1.50	1.26	0.938	A2	IV	3	
784	3.90	3.75	2.10	1.05	0.948	A2	IV	3	
785	4.10	3.95	1.85	1.55	0.939	A2	IV	3	
786	3.75	3.65	1.85	1.55	0.934	A2	IV	3	
787	3.60	3.55	1.90	1.05	0.938	A2	IV	3	
788	4.00	3.75	2.75	1.05	0.963	A2	IV	3	
789	3.95	3.95	1.65	1.25	0.933	A2	IV	3	
790	4.10	4.05	2.55	1.00	0.960	A2	IV	3	
791	3.90	3.70	2.20	0.95	0.948	A2	IV	2	
792	6.80	6.40	3.60	1.85	0.945	A2	IV	2	
793	3.85	3.85	2.00	1.00	0.968	A2	IV	3	
794	4.15	4.05	2.00	1.05	0.966	A2	IV	3	
795	3.50	3.45	2.05	0.95	0.932	A2	IV	3	
796	3.65	3.65	3.45	0.95	0.953	A2	IV	3	
797	3.50	3.45	1.10	0.95	0.933	A2	IV	3	
798	3.60	3.45	1.70	0.95	0.936	A2	IV	3	
799	3.85	3.85	2.10	0.95	0.948	A2	IV	3	
800	4.05	3.95	2.10	0.95	0.951	A2	IV	3	
801	4.00	3.90	2.05	1.05	0.946	A2	IV	3	
802	3.80	3.70	2.55	0.95	0.956	A2	IV	3	
803	3.25	3.25	1.45	1.10	0.923	A2	IV	3	
804	3.65	3.65	1.95	0.90	0.940	A2	IV	3	
805	3.75	3.70	2.45	1.05	0.946	A2	IV	3	
806	4.10	3.95	1.65	1.05	0.942	A2	IV	3	
807	4.00	3.85	2.00	0.95	0.947	A2	IV	3	
808	4.00	3.85	2.10	1.05	0.949	A2	IV	3	
809	3.75	3.65	2.10	0.95	0.940	A2	IV	3	
810	3.85	3.80	2.00	1.00	0.941	A2	IV	3	
811	3.75	3.55	1.55	1.00	0.931	A2	IV	3	
812	3.90	3.80	2.05	1.05	0.947	A2	IV	3	
813	3.90	3.80	2.20	1.05	0.946	A2	IV	3	
814	5.85	5.85	2.95	1.25	0.183	A2	IV	3	
815	4.00	3.85	1.55	1.05	0.943	A2	IV	3	
816	4.10	3.90	1.95	1.25	0.943	A2	IV	3	
817	4.05	3.95	2.45	1.00	0.957	A2	IV	3	
818	4.00	3.90	2.15	1.05	0.949	A2	IV	3	
819	4.00	3.95	2.05	1.05	0.949	A2	IV	3	
820	3.85	3.80	2.00	1.00	0.945	A2	IV	3	
821	4.25	3.95	1.95	1.05	0.950	A2	IV	3	
822	3.90	3.85	1.90	0.85	0.943	A2	IV	3	
823	6.60	6.95	2.85	1.25	0.193	A2	IV	3	
824	3.85	3.80	3.75	1.05	0.948	A2	IV	2	
825	5.40	5.05	3.75	1.05	0.166	A2	IV	2	
826	3.50	3.45	1.75	0.85	0.934	A2	IV	3	
827	3.75	3.65	1.95	1.05	0.941	A2	IV	3	
828	4.05	4.05	1.65	1.10	0.943	A2	IV	3	

第11表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覽表(9)



No.	本層	副葬品	原高	乳高	香高	出土地点	大きさ	色	備考	No.	本層	副葬品	原高	乳高	香高	出土地点	大きさ	色	備考
921	3.75	3.70	2.30	1.05	0.648	A2	IV	3	赤色顔料	967	4.00	3.85	2.50	1.00	0.615	A2	IV	3	赤色顔料
922	3.95	3.90	2.25	1.00	0.651	A2	IV	3	赤色顔料	968	3.90	3.75	2.45	1.25	0.630	A2	IV	3	赤色顔料
923	3.30	4.00	1.10	1.00	0.650	A2	IV	3	赤色顔料	969	3.65	3.55	1.50	1.10	0.630	A2	IV	3	赤色顔料
924	3.85	3.85	2.00	1.25	0.644	A2	IV	3	赤色顔料	970	3.90	3.85	2.10	1.85	0.660	A2	IV	3	赤色顔料
925	3.65	3.50	1.85	1.05	0.644	A2	IV	3	赤色顔料	971	4.05	3.85	1.75	1.05	0.641	A2	IV	3	赤色顔料
926	3.95	4.15	2.10	1.05	0.650	A2	IV	3	赤色顔料	972	4.15	4.00	1.80	1.60	0.645	A2	IV	3	赤色顔料
927	3.85	3.75	1.95	0.85	0.647	A2	IV	3	赤色顔料	973	6.70	6.45	2.85	1.55	0.203	A2	IV	3	赤色顔料
928	3.55	3.50	1.90	0.95	0.640	A2	IV	3	赤色顔料	974	3.80	3.65	2.35	1.00	0.650	A2	IV	3	赤色顔料
929	3.80	3.70	1.90	0.85	0.641	A2	IV	3	赤色顔料	975	3.55	3.45	1.85	1.05	0.634	A2	IV	3	赤色顔料
930	3.95	3.90	1.90	1.00	0.647	A2	IV	3	赤色顔料	976	4.05	3.75	2.00	0.95	0.638	A2	IV	3	赤色顔料
931	3.75	3.70	1.70	0.95	0.633	A2	IV	3	赤色顔料	977	3.90	3.70	1.70	1.05	0.636	A2	IV	3	赤色顔料
932	4.15	3.85	2.10	1.00	0.650	A2	IV	3	赤色顔料	978	3.55	3.45	1.80	1.00	0.633	A2	IV	3	赤色顔料
933	4.35	4.25	2.20	1.00	0.653	A2	IV	3	赤色顔料	979	3.70	3.55	2.25	1.05	0.643	A2	IV	3	赤色顔料
934	4.35	4.25	2.20	1.00	0.653	A2	IV	3	赤色顔料	980	3.60	3.35	2.05	0.85	0.640	A2	IV	3	赤色顔料
935	3.85	3.75	1.95	1.00	0.643	A2	IV	3	赤色顔料	981	4.05	3.90	2.40	1.05	0.654	A2	IV	3	赤色顔料
936	4.15	4.00	2.35	0.95	0.656	A2	IV	3	赤色顔料	982	3.20	3.00	1.60	1.05	0.623	A2	IV	3	赤色顔料
937	3.75	3.60	1.50	1.00	0.632	A2	IV	3	赤色顔料	983	4.00	3.90	1.95	0.95	0.647	A2	IV	3	赤色顔料
938	3.55	3.40	2.00	1.05	0.632	A2	IV	3	赤色顔料	984	3.90	3.70	1.80	0.85	0.639	A2	IV	3	赤色顔料
939	4.05	4.00	2.30	1.15	0.654	A2	IV	3	赤色顔料	985	3.80	3.65	2.10	1.05	0.643	A2	IV	3	赤色顔料
940	3.95	3.85	2.35	1.05	0.655	A2	IV	3	赤色顔料	986	3.70	3.60	2.05	0.95	0.643	A2	IV	3	赤色顔料
941	4.00	3.90	2.30	1.05	0.652	A2	IV	3	赤色顔料	987	3.85	3.75	1.95	0.85	0.645	A2	IV	3	赤色顔料
942	3.55	3.45	1.80	1.20	0.640	A2	IV	3	赤色顔料	988	3.80	3.70	1.80	1.05	0.639	A2	IV	3	赤色顔料
943	3.50	3.45	2.15	0.95	0.639	A2	IV	3	赤色顔料	989	3.65	3.50	2.00	1.05	0.640	A2	IV	3	赤色顔料
944	3.90	3.85	2.05	0.95	0.646	A2	IV	3	赤色顔料	990	4.20	4.05	1.95	0.80	0.654	A2	IV	3	赤色顔料
945	3.80	3.70	2.65	1.05	0.649	A2	IV	3	赤色顔料	991	3.95	3.90	2.30	1.05	0.652	A2	IV	3	赤色顔料
946	3.95	3.85	2.00	0.95	0.647	A2	IV	3	赤色顔料	992	3.95	3.90	2.20	0.95	0.652	A2	IV	3	赤色顔料
947	4.05	3.90	2.25	0.85	0.656	A2	IV	3	赤色顔料	993	4.05	3.95	2.15	1.05	0.650	A2	IV	3	赤色顔料
948	3.90	3.85	1.85	1.05	0.644	A2	IV	3	赤色顔料	994	3.75	3.70	2.10	1.05	0.643	A2	IV	3	赤色顔料
949	4.20	4.15	2.15	1.00	0.657	A2	IV	3	赤色顔料	995	4.10	4.10	2.30	1.05	0.657	A2	IV	3	赤色顔料
950	3.85	3.80	2.10	0.75	0.649	A2	IV	3	赤色顔料	996	3.95	3.85	1.90	1.00	0.647	A2	IV	3	赤色顔料
951	4.15	4.10	2.10	1.00	0.657	A2	IV	3	赤色顔料	997	3.75	3.65	1.75	1.10	0.632	A2	IV	3	赤色顔料
952	4.10	3.55	1.75	1.10	0.645	A2	IV	3	赤色顔料	998	3.90	3.85	2.05	0.95	0.639	A2	IV	3	赤色顔料
953	3.60	3.55	2.00	1.00	0.626	A2	IV	3	赤色顔料	999	3.90	3.85	2.15	0.80	0.646	A2	IV	3	赤色顔料
954	3.75	3.65	2.50	1.05	0.650	A2	IV	3	赤色顔料	1000	3.50	3.35	2.00	0.85	0.641	A2	IV	3	赤色顔料
955	3.65	3.62	2.05	1.00	0.643	A2	IV	3	赤色顔料	1001	4.15	4.00	2.00	1.60	0.653	A2	IV	3	赤色顔料
956	3.90	3.70	2.60	0.85	0.656	A2	IV	3	赤色顔料	1002	3.80	3.70	2.05	0.85	0.649	A2	IV	3	赤色顔料
957	4.20	4.10	1.90	1.00	0.650	A2	IV	3	赤色顔料	1003	3.85	3.80	2.25	1.60	0.639	A2	IV	3	赤色顔料
958	3.90	3.85	1.95	1.05	0.640	A2	IV	3	赤色顔料	1004	3.85	3.65	2.35	0.95	0.639	A2	IV	3	赤色顔料
959	6.40	6.35	3.05	1.40	0.196	A2	Ⅲ	3	赤色顔料	1005	3.75	3.65	1.35	1.40	0.327	A2	IV	3	赤色顔料
960	3.95	3.85	1.85	1.05	0.640	A2	IV	3	赤色顔料	1006	3.60	3.55	2.05	0.90	0.639	A2	IV	3	赤色顔料
961	3.75	3.75	2.55	1.30	0.661	A2	IV	3	赤色顔料	1007	3.90	3.80	1.95	1.00	0.640	A2	IV	3	赤色顔料
962	4.05	3.90	2.30	1.00	0.654	A2	IV	3	赤色顔料	1008	4.25	4.25	2.00	1.00	0.659	A2	IV	3	赤色顔料
963	3.90	3.85	1.70	0.95	0.638	A2	IV	3	赤色顔料	1009	4.05	3.95	2.15	1.00	0.652	A2	IV	3	赤色顔料
964	4.25	4.05	1.95	1.05	0.650	A2	IV	3	赤色顔料	1010	4.05	3.95	2.05	0.85	0.648	A2	IV	3	赤色顔料
965	3.55	3.45	1.70	0.95	0.631	A2	IV	3	赤色顔料	1011	3.70	3.50	1.85	1.05	0.635	A2	IV	3	赤色顔料
966	3.85	3.75	1.85	1.05	0.642	A2	IV	3	赤色顔料	1012	4.05	3.85	2.23	1.00	0.655	A2	IV	3	赤色顔料

第13表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覧表 (1)



№	長さmm	幅/mm	厚さmm	孔径mm	重量g	出土地点	大きさ	色	備考
1013	3.80	3.95	1.40	0.033	A2	IV	3	赤色顔料	
1014	3.75	3.55	1.90	1.00	0.039	A2	IV	3	赤色顔料
1015	3.75	3.85	2.15	0.85	0.044	A2	IV	3	赤色顔料
1016	4.20	4.15	1.95	1.15	0.055	A2	IV	3	赤色顔料
1017	4.00	3.85	2.10	1.00	0.051	A2	IV	3	赤色顔料
1018	4.10	3.95	2.35	1.00	0.058	A2	IV	3	赤色顔料
1019	3.85	3.75	1.95	1.40	0.039	A2	IV	3	赤色顔料
1020	4.10	4.05	2.60	1.05	0.057	A2	IV	3	赤色顔料
1021	3.75	3.55	1.95	1.05	0.039	A2	IV	3	赤色顔料
1022	3.90	3.90	1.95	0.85	0.047	A2	IV	3	赤色顔料
1023	4.20	4.05	2.05	0.90	0.059	A2	IV	3	赤色顔料
1024	4.30	4.15	2.00	1.40	0.051	A2	IV	3	赤色顔料
1025	3.95	3.70	2.70	1.05	0.058	A2	IV	3	赤色顔料
1026	3.80	3.70	2.75	0.95	0.056	A2	IV	3	赤色顔料
1027	4.05	3.95	2.00	1.00	0.049	A2	IV	3	赤色顔料
1028	3.90	3.70	2.45	0.95	0.050	A2	IV	3	赤色顔料
1029	4.30	3.95	2.10	1.00	0.053	A2	IV	3	赤色顔料
1030	3.80	3.60	1.90	1.05	0.040	A2	IV	3	赤色顔料
1031	3.80	3.75	2.20	0.95	0.045	A2	IV	3	赤色顔料
1032	3.60	3.55	2.70	0.95	0.040	B	IV	3	赤色顔料
1033	3.90	3.80	2.05	1.05	0.048	B	IV	3	赤色顔料
1034	3.70	3.65	1.95	1.05	0.042	B	IV	3	赤色顔料
1035	3.90	3.85	1.80	1.05	0.044	B	IV	3	赤色顔料
1036	3.60	3.55	1.60	0.95	0.031	B	IV	3	赤色顔料
1037	3.65	3.60	2.85	0.90	0.055	B	IV	3	赤色顔料
1038	—	—	2.60	—	0.032	B	—	3	赤色顔料
1039	3.30	3.25	1.65	0.95	0.022	B	—	3	赤色顔料
1040	—	—	—	—	0.053	B	—	3	赤色顔料
1041	3.80	3.75	2.45	0.95	0.051	B	—	3	赤色顔料
1042	3.60	3.65	2.40	0.85	0.050	B	—	3	赤色顔料
1043	3.50	3.45	1.85	1.00	0.058	B	—	3	赤色顔料
1044	4.10	4.05	1.85	1.20	0.049	B	—	3	赤色顔料
1045	3.95	3.90	2.15	0.85	0.057	B	—	3	赤色顔料
1046	3.70	3.55	2.05	0.90	0.043	B	—	3	赤色顔料
1047	4.00	4.00	2.35	0.95	0.059	B	—	3	赤色顔料
1048	3.85	3.80	1.65	1.25	0.059	B	—	3	赤色顔料
1049	3.95	3.95	2.20	1.25	0.053	B	—	3	赤色顔料
1050	3.85	3.85	2.15	1.06	0.045	B	—	3	赤色顔料
1051	—	—	2.05	—	0.024	B	—	3	赤色顔料
1052	—	—	2.35	—	0.033	B	—	4	赤色顔料
1053	—	—	—	—	0.012	B	—	3	赤色顔料
1054	—	—	1.70	—	0.015	B	—	3	赤色顔料
1055	9.05	8.95	6.70	1.65	0.784	A1	II	1	赤色顔料
1056	9.75	9.35	6.30	2.50	1.545	A1	II	5	赤色顔料
1057	8.85	8.75	6.20	1.70	0.719	A1	II	1	赤色顔料
1058	9.75	9.45	6.80	1.65	0.882	A1	II	2	赤色顔料

※ 表中の記号等は以下の事項を表す。

出土地点 A 1 : 玄室内出土

A 2 : 玄室内覆土水洗選別

A 3 : 玄室内副床土水洗選別

A 4 : 玄室内副床土0~20cm水洗選別

大きさ I : 長さ10.1mm以上

II : 長さ8.7~10mm

III : 長さ4.7~8mm

IV : 長さ2.75~4.56mm

色……カラーチャート(『大塚集』小学館)に基づく

1 : 紺青

2 : 紺黒

3 : サフラスブルー

4 : 淡紫

5 : 緑

6 : 薄緑

第14表 松原1号墳出土ガラス製玉類一覧表 (2)



## 第3節 松原2号墳の調査

## 1 概要

松原2号墳は、崖錐斜面に構築された古墳で、松原1号墳から南側下方の緩斜面に占地する(第29図)。石室は傾斜に対して垂直方向に構築され、南西向きに開口している。床面は標高354.20m付近に位置していたであろう。

墳丘および石室は、床面下の排水溝を除き、桑畑の開墾によって完全に消滅していた。本墳は、中世墓域に関連した調査で地表40~50cm下より排水溝が明らかになっていたが、調査段階では古墳という認識はなかった。整理段階で1号墳の排水溝と同様な施設が注意されるに及び、古墳という認識に至った。よって、排水施設以外のデータは記録化されていない。

## 2 排水施設

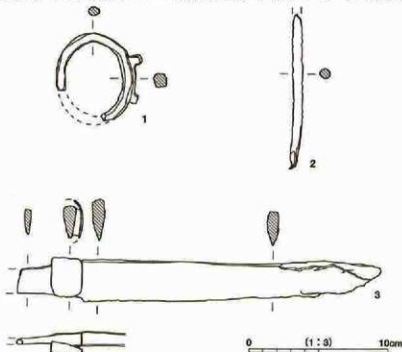
松原2号墳の存在を明らかにしたのは石組の排水溝のみである。その構造は、素掘りの溝に板石を左右に立石し、蓋石を乗せたものである。内部は礫を充填することはなく空洞となる。

排水溝は中間が失われているが、長さ4.5mに渡って確認された。石室床面に敷かれていた障敷きは既に失われ確認されなかった。

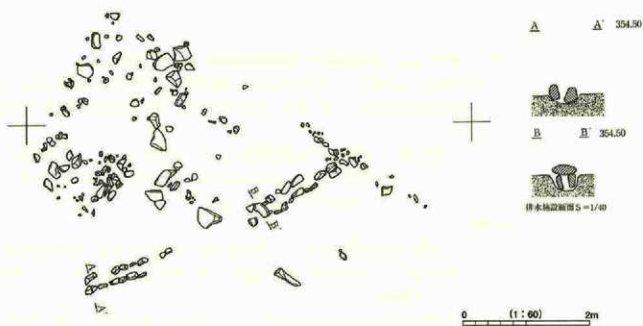
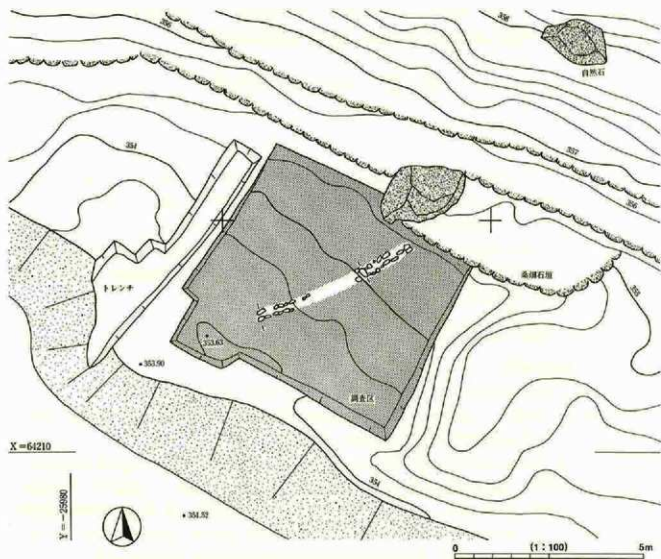
## 3 遺物及び出土状況

鉄製品が2点出土した(第28図1・2)。1は長方形素環鏡板付轡の破損品で、花谷氏の分類によるところの長方形立間り類轡に相当する鏡板と立間の一部である。2は棒状鉄製品に分類されるが、長さ及び太さから轡の引手破損品である可能性が指摘されよう。

遺物は古代から近現代にわたる焼物やガラス製品及び鉄鏃(図版331-2)等が乱雑に出土しており、こ



第28図 松原2・3号墳出土金属製品



第29図 松原2号墳調査区及び排水施設

れらに混じって、上記の1・2が出土した。したがって、本墳に確実に伴うものかどうかの判断は困難であるが、形状から古墳時代に属する遺物と判断し、本墳の出土遺物と把握した。

## 第4節 松原3号墳の調査

### 1 概要

本墳は崖斜面に構築された古墳で、松原1号墳から南西下方の緩斜面に占地する。石室は傾斜に対して垂直方向に構築され、南西向きに開口している。床面は標高352.4m付近に位置する(第30図)。

墳丘および石室は、中世墓域および近代以降の開墾により、奥壁付近を除き消滅していた。発掘調査段階では2号墳と同様に古墳の石室という認識はなく、中世墓域に伴う石柵施設として認識され、調査が進められた。それは奥壁側で幅1.1mというあまりにも小さな規模であったことも関連する。松原1号墳調査後、古墳として認識された。

### 2 墳丘および石室

#### (1) 土層断面の検討

墳丘構造を理解するために、石室主軸ラインに設定された斜面の土層断面を検討する。

土層断面A～B間、C～D間の地表面は桑畑に利用されていた上段テラス面と、下段テラス面である。B、C間は近代以降の桑畑の盛行期に掘削されたものだろう。

松原3号墳の周辺からは多数の五輪塔が出土し、火葬骨の埋納が確認された。石室裏込め上位部分および古墳の墳丘範囲にも認められたことから、松原1号墳と同様に、中世墓域によって破壊されている様子が窺える。五輪塔は2層より出土し、火葬墓は3層上層から3層内に掘り込まれている。3層上層付近が中世墓域の地表面にあたり、この段階の松原3号墳は石室の天井石が除かれ、墳丘自体も残存していない。墳丘構築面は5層上層と想定され、石室の掘り方内に石室の一部がかるうじて残存していた。

#### (2) 石室

##### ア 石室構造

石室の構造は横穴式石室である。斜面掘削掘り方内の奥壁付近の一部が残存する。

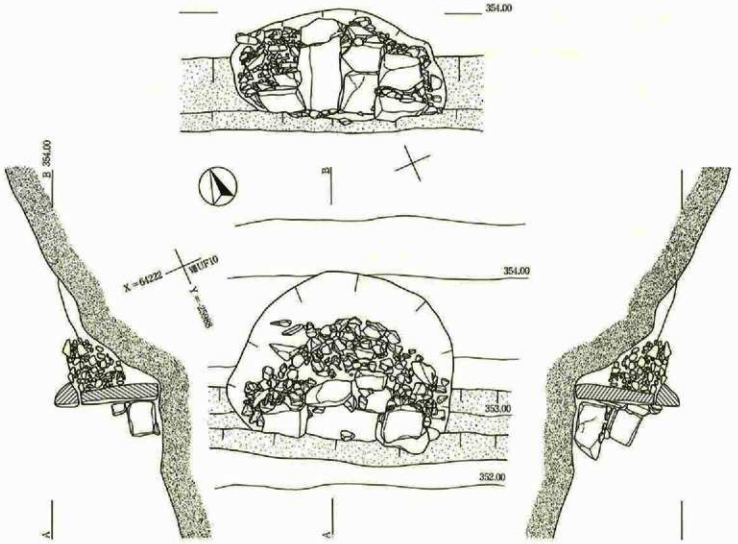
平面プランは奥壁部分が幅1.1mを測る。その高さは1.6mまで確認できる。奥壁面は2組の石積みが並列して壁面となるが、左側は大形平石を立て、その上位に角礫を横積み、右側は大形の角礫を2段横積みを行っている。

側壁は長方形を呈する角礫を用い、短辺の小口部が側壁面となるように積んでいる。この積み方は1号墳の横積みとは異なる。ただし、側壁は奥壁コーナー部分の基底石とその上位2段が残るのみなので、3号墳の側壁の積み方としてとらえられるかは不明と言わざるを得ない。

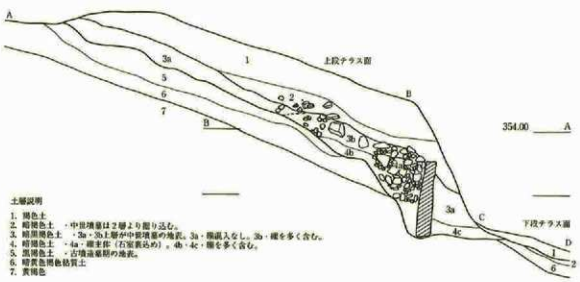
##### イ 掘り方と石室構造

石室は斜面をカットした掘り方内に構築されている。残存する掘り方部分はカマボコ状の平面形を呈し、横幅は3.3mを測り、石室構築面まで1.4mほど掘り込んで掘り方テラス面を形成する。排土は、その前面に盛り上げて造成したであろうが残存しない。

奥壁は、掘り方テラス面の中央部でも山寄り側に設定している。側壁は、奥壁を掘えた後、玄室のやや内側に設定することによって奥壁を支えながら構築している。奥壁および側壁は掘り方内に充填された角



0 (1:60) 2m



- 土層説明
1. 褐色土
  2. 暗褐色土 ・ 中見墳墓はさまり入り込む。
  3. 暗黒褐色土 ・ 3a・3b上層が中見墳墓の地肌。3a・微塵入なし。3b・礫を多く含む。
  4. 暗褐色土 ・ 4a・礫主伴(石室裏込め)。4b・4c・礫を多く含む。
  5. 黒褐色土 ・ 石垣築造時の地肌。
  6. 暗褐色暗黒粘質土
  7. 黄褐色

第30図 松原3号墳石室実測図・周辺土層断面図

障で支持されている。

### 3 遺物及び出土状況

鉄製大刀が1点出土した(第28図3)。完存品ではないが、刀身・茎部・把縁金具が遺存する。平造で、現存長25.9cm、刀身最大幅2.9cm、刀身最大厚0.85cmを測る。把縁金具は厚さ0.1cmの鉄板を木質部の上から断面卵形に丸めている。一部に緑青が付着しており、化学的な材質鑑定が望まれる。

鉄製大刀は、本墳で最も遺存状況が良好な玄室奥壁の北隅から出土した(PL 6-32)。玄室奥壁の隅に鉄刀剣を立てかけた事例は各地で報告され、そうした行為は鬼門に対する除魔の備えであると把握されている(大塚 1990)。1号墳において大刀が両側壁際から出土している(第17図)のに対して、本墳の場合は奥壁隅である。追葬に伴う副葬品の移動とも考えられようが、本墳においても鬼門に対する備えがしつらえていた可能性も考えられ、だとすれば、中国の陰陽五行説に基づく鬼門の觀念が、北信地域においても流布していたこととなり、今後の類例に注意を払いたい。



## 第4章 古代の調査

### 第1節 古代の遺構

#### 1 竪穴住居址

##### (1) 概要

本遺跡で検出された竪穴住居址は408軒で、住居址相互で重複することもなく比較的散漫に分布する区域と、住居址相互の重複が顕著で密な分布を示す区域があるが、両者に規則性等は見出せない(図版1)。とはいえ、住居址群と言うような幾つかのまとまりを認識することは可能で、それらと、空間を規制すると考えられる溝址との関係は不明瞭であることから、雑然と多数の住居址が分布する感が否めない。

時期的には、出土した土器群の様相から、1段階から13段階まで増減はあるもの間断無く認められる。6・7段階に相当する住居址が最も多く、前後の時期と比較すると住居址数は格段の差があり、自然発生的な要因のみでは理解されない部分がある背景として推察される。しかし、後述するように、土器様相の変遷は系統的で、一貫性が認められることから、大局的な視点に基づいた土地利用の変化の中で考えていく必要があるだろう。

いずれの住居址もⅢ層で検出されたが、住居址が重複する部分で確認されたように(図版109・110等)4段階を境に、それ以前の住居址と以後のそれとは検出面あるいは掘り込み面(地表面)の深さが異なる傾向が窺える。遺跡内に微地形が認められるため、住居址床面標高での単なる比較はできないが、留意しておきたい事象の一つである。

なお、住居址個々の属性については一覧表を参照されたい。このことは、後述するその他の遺構についても同様である。

##### (2) 竪穴住居址の規模

一覧表中に記載されている床面積は、遺構実測図(S=1/20)を基に作成した遺構図(S=1/40)をプランニメーターで計測した値である。( )付の数値は、遺構の重複や調査区外に及ぶなど、床面の全形が不明な場合の計測値または推定値である。

床面積で言うと、10㎡未満、10～15㎡、15～20㎡、20～30㎡、30㎡以上という5種に分類が可能で、15㎡を境に、便宜的にそれぞれ小型1、小型2、中型1、中型2とし、30㎡以上を大型とする。本遺跡で検出された住居址のほとんどは20㎡以下で、小型1～中型1に相当するが、後述するように主軸と直交軸の割合に偏位が認められるため、竪穴住居址の構造を考慮する上では、住居址の平面形と合わせて検討する必要がある。特に、本遺跡の大型住居址の場合、どちらか一辺が長いことが通例で、住居址プランまたは上屋を含めた建物の相似形という関係が住居址規模にも反映することが推測され、それは同時期の集落景観に関連すると考えられるからである。また、大型と括った住居址についても、SB383のように超大型ともいべき住居址があり、時期ごとの変遷や組成について明らかにしていくことが、集落構成を検討する上で重要であることはいうまでもない。今回は数値データのみを提示するに留めたが、今後、長野市政

育委員会調査分の竪穴住居址のみならず周辺遺跡についても合わせて資料操作したいと考える。

### (3) 竪穴住居址の平面形

本遺跡で検出された住居址は、基本的に方形または長方形プランを呈し、僅かに台形あるいは不整形プランを呈するものがある。一覧表では、カマドを上にした時の長短軸の割合により、方形、横長、縦長の3種に分類した(縦長 $<0.9$ 方形 $1.1<$ 横長)。カマドの無い住居址については、長軸方向を縦にとり、方形、縦長の2種に分類した。分類された3種は、構成比率の変動はあるものの、時期を問わず併存している。したがって、3種それぞれに機能や性格といった面を付加させることが可能かもしれない。カマドを持つ住居址について言えば、60%以上が長方形プランを呈し、横長がその半数以上を占めている。カマドが構築される位置にもよりますが、屋内の空間利用という点から一つの特徴として捉えることができよう。また、上屋構造の関係からか、大型住居址はいずれも長方形で、SB383・SB1046を除いて縦長である。このように、住居址の平面形は、住居の構築段階から利用に至るまで、集落が住居に対して保持する伝統、あるいは嗜好やクセといった側面が反映する属性の一つとして位置付けられると考える。さらに、他の属性と組み合わせ、集落構成及び構造を解明する手がかりとしたい。

### (4) カマドについて

本遺跡では408軒の住居址の内、303軒の住居址でカマドが検出された。カマドが検出されなかった住居址についても遺構の重複のため消失していることや住居址が調査区外まで及ぶ場合もあるため、本来カマドが構築されていた住居址が相当数含まれているものと考えられる。とはいえ、住居址の四辺が調査区内で検出され、カマドを伴わない住居址が存在することも事実である。これらの住居址については、住居跡絶時に伴うカマドの破壊行為などにより、その痕跡が確認されない住居址と本来カマドが構築されない住居址とに大別が可能である。調査時点では、これらについて明確な分別をすることができなかった。調査上の問題点の一つであり、反省し、今後の調査に生かしたいと考える。

#### ア 位置

カマドの構築位置については、ほとんどの住居址の主軸が南北方向または東西方向とずれているため、北カマド・東カマドといったような把握はできない。一覧表では住居址壁のどの位置に構築されているかを示した。ほとんどの住居址が中央(122軒)か中央からどちらかに寄った位置(134軒)にカマドが構築されている。端部(4軒)・隅(13軒)にカマドが構築されるものは僅かで、時間的に言えば、8段階以降に限定され、住居址の平面形は一部(SB1402・I405)を除いて長方形である。

#### イ 袖構築材

カマド袖構築材については、「地山掘り残し」・「粘土」・「石芯」・「石組」・「円筒形土製品」があり、これらが単独または組み合わせられた状態で検出されている。カマドが住居跡絶に伴って破壊されることは多くの報告事例によって知られるところであるが、本遺跡においてもその例に漏れることはなく、カマド構築材が不明な住居址は166軒に上る。これはカマドが検出された住居址の55%に相当する。したがって、袖構築材についても、本来、複数の素材の組み合わせで構成されていたことが推測される。

袖構築材の中でも、「地山掘り残し」は、竪穴掘削の段階からカマドの位置を規定するもので、長野盆地特有の手法として注目される。19例が確認されている。掘り残した地山のみでは、袖として、おそらく機能し得ないと考えられ、検出事例でも、先に挙げたすべての構築材との組み合わせが確認されている。時間的には、断絶はあるものの1段階から13段階までの住居址に認められ、全時期を通して用いられた手法であると見てよいだろう。

「粘土」は単独で袖を形成し得る素材の一つでもあるが、「石芯」や「石組」を覆う事例も多く、その判断が困難である。一覧表中に「粘土」とあるものについても、袖基部のみの検出例がほとんどであり、これらをすべて「粘土カマド」と捉えることには躊躇する。

「石芯」については「粘土」と組み合わせられない限り、袖として成り立たないものとする。したがって、「石芯」のみの検出であっても、そこに「粘土」が介在していたと考え、「石芯粘土カマド」として捉えておきたい。なお、「石組」との差異は、片袖に石を単独で敷設するか、複数の石を敷設するかで、「石芯」は前者に相当する。破壊されたカマドの検出に際しても、「石組」の場合は敷設痕（石抜き取り痕）等が検出されるため、両者の差異は明確である。22例が確認され、時期的には4段階から10段階の住居址に認められ、4～7段階の事例が多い傾向にある。

「石組」は単独で袖を形成し得る素材の一つでもあるが、「地山掘り残し」や「粘土」と組み合わせる事例も多く検出されている。また、SB101などに見られるように土器片を貼り付けた事例も検出されている（PL15）。本来的に言えば、「石組」単独の「石組カマド」か「石組」を芯材とした「粘土カマド」かの区別を行う必要があるが、遺存状況に差があるため、両者の認識は困難である。したがって、ここでは「石組」を有するものすべてを「石組カマド」と一括することとする。82例が検出され、時期的には4段階の住居址が1例（SB1404）あるのみで、6～13段階の住居址に認められる。検出事例も多く、6段階以降においては主体を占めるカマドと見ることができよう。

「円筒形土製品」は、4段階のSB100で検出された1例のみである。古墳時代においては土師器長胴壺や円筒形土製品を袖構築材とする例はよく知られるが、古代の同様な事例として、また、袖構築材専用なのか転用なのかといった遺物の機能的側面についても注目しておきたい。なお、本遺跡で検出された円筒形土製品は、いずれも3～4段階の住居址から出土しており、合わせて注目される遺物群の一つである。

#### ウ 燃焼部・煙道部

燃焼部については、住居址壁への掘り込みの有無及びその形状を一覧表に記載した。袖構築材が不明な住居址についても、こうした燃焼部の形状は確認されることから、カマドを分類する判断基準として有効かと思われたが、確認されている袖構築材との相関関係が明確に捉えられなかったこともあり、さらなる条件付けが必要と考えられる。

煙道部は、燃焼部内の煙道口の高さ・住居壁からの長さ・立ち上がりの角度について数値のみを記載したが、遺構検出面との関連で資料数が少ない感が否めない。

燃焼部・煙道部については、燃焼効率といった視点が不可欠であり、支脚の位置や燃焼部と煙道との高低差等を関連付けた分析が必要となってくるが、本遺跡の場合、それらを満たす資料が少ないこともまた事実である。したがって、今後に残された課題は大きいと言わざるを得ない。

#### (5) その他の施設について

##### ア 柱穴

柱穴状の掘り込みを伴う住居址は数多く検出されたが、掘り込みの深さ・断面形状・床面での位置関係などの視点から、40軒の住居址について柱穴を伴うと判断した。住居址によって、柱穴と認定した本数に差が見られるが、基本的には方形または長方形に配されていたと考えている。ただし、SB1010のような2本の柱穴が棟持柱のような配置を示す事例もあり、一概に言えない部分もある。また、壁外柱穴の存在は確認されていない。柱間隔は1.0～4.9mまであり、測定位置の問題もあるが尺の存在などを示す統一感は見出し難い。

## イ 鍛冶炉

本遺跡では、床面に被熱痕跡や焼土堆積が認められる住居址が数多く検出されている。それらの内、著しい被熱痕跡を伴う掘り込みについて、鍛冶炉と認識し、特記事項に記載した。鍛冶炉については後述するが、床面中央に敷設されていることが多く、床面隅に配置されているSB6（第31図）は異例とも言えよう。

## ウ その他

灰溜め用と考えられるピットや貯蔵穴と想定されるピットが検出されているが、それらの機能を断定することは困難で、一覧表には記載しなかった。今後、統計的な処理も含めて、屋内空間の機能的な分割といった視点からの分析が必要であろう。

また、出入り口部についての痕跡や情報量については欠落しており、今後の検討課題の一つである。

### (6) 特記遺物について

住居址から出土した遺物の内、土器以外を中心に特記遺物欄に記載した。（ ）付きで記載されている石器の器種名については、弥生時代に特徴的な石器であり、混入の可能性が高いと考えている。逆に、住居址に伴う古代の遺物とすれば、大きな発見であり、重要な意義を持つことは確実とも言えよう。記載されている個々の遺物や墨書土器については後述する。

### (7) 特記事項について

住居址本来の居住機能とは区別される属性を中心に特記事項欄に記載した。それらの中から幾つかについてここで触れる。

## ア 鍛冶鑄造関連遺構

床面に鍛冶炉と考えられる被熱痕跡が著しい掘り込みを持つ住居址が11軒確認されている。時期的には2・3・10・12・13段階の住居址である。その内、SB27とSB80の2軒はカマドを持たない、あるいは検出されていない住居址である。SB27については、鉾や羽口等の遺物が一切出土しておらず、床面中央の掘り込みについて鍛冶炉とする根拠に乏しい。SB80については、後述するように鋳型や炉壁等が出土しており、被熱痕跡の度合いも極めて著しいことから、鑄造に関わる遺構として捉えられる。その際、カマドが検出されていないことから工房址と判断できるかどうかの問題となるが、被熱痕跡の範囲からいっても起居と作業の併存は困難と考えられ、工房址と捉えておきたい。近接するSB76についても、平面形が住居址としては例外的で、豊富な鹿角の破片資料や鹿角製サイコロ、砥石などを伴うことから工房址と推定され、先のSB80を含めた一定の空間が工房の機能を有した建物で形成されていると考えたい。なお、鉾等の出土遺物との関連で、鍛冶鑄造が行われていたことが確実視される住居址にSB6・SB54・SB81・SB192・SB1216があるが、これらについては遺物の項にて後述する。

その他に、床面に被熱痕跡及び焼土堆積が確認されている住居址が11軒検出されており、碗型滓を伴う事例が多いことから注意しておきたい。

## イ 住居址の掘り方について

SB1241（7段階）において堅穴の掘り方が確認されている（第54図）他、土坑として調査したSK94（7段階）についても堅穴住居址の掘り方として把握されよう（第70図）。本遺跡で検出された堅穴の掘り方は僅か2例に過ぎない。貼り床が確認されている住居址についても、何等かの掘り方があったことが推測されるが、調査所見に基づけば、本遺跡の場合、堅穴掘削の段階から床面を意識した掘削方法・手順というものが用意されていたと想定される。カマド袖について掘り残した地山を利用する事例が確認されること



からも、周到的な計画性が指摘できよう。

SB1241に見られる掘り方は、中央部を四角く台状に残し、周囲を周溝状に掘りくぼめた掘り方で、SK94では、カマド設置部と推定される壁面部を掘り残し、他の部分については統一性が認められない。円形の深い部分は柱穴部に相当するものであろうか。ほぼ同時期の所産と考えられる住居址であることから、こうした掘り方の差異については注目しておく必要があるだろう。なお、SK94の平面形だけを見ると、SB76の平面形に類似していることが指摘される。興味深い現象である。

また、SB357(3段階)においては、カマド煙道部の掘り方と考えられる溝状の掘り込みが確認されている。唯一の事例であり、注目しておきたい。

#### ウ 住居の建て替えについて

本遺跡では住居址の重複関係は至るところで見られるが、拡張を伴う住居の建て替えが確認される例は1例も認められない。しかし、居住空間あるいは屋内空間の変更という意味で、カマドの作り替えや床面の張り替え等が幾つかの住居址で確認されている。両者が認められるものにSB1211・SB1213例が、前者のみはSB1216、SB1224、SB1228、SB1402の4例、後者のみがSB383で認められる。

SB1211・SB1213については、当初カマドは住居壁の中央に構築されていたが、床面を高くするとともにカマドを中央から東方より新たに構築している。カマドの構築位置という点では同一壁面での移動として捉えることができる。そうした視点で見ると、SB1216では同一箇所でもカマドを作り替え(第54図)、SB1224・SB1402では反対側の住居壁へカマドを移動し(図版86・106)、SB1228では直交する壁面へと移動している(図版97)。カマド煙道部については住居の上屋構造、特に棟方向等に規制されることが推測され、SB1228については上屋構造の変更があったことが想像されよう。いずれにしても、ごく僅かな事例であり、カマド位置の移動について規則性等は見出し難く、また、そのことに至った経緯についても不明と言わざるを得ない。しかしながら、こうした側面は集落が持つ特徴の一つとして認識され、注意したい。

#### エ 焼失住居について

SB1207(7段階)が焼失住居と判断される(第52図)。多量の炭化した板材、焼土・炭化物層が覆土中で確認されており、その量及び出土状況から焼失住居と考えた。炭化材には鉄釘が打ち込まれた状態で検出されており、建築金物としての位置付けが可能となり、上屋構造の点で板壁の存在を推定させる良好な資料として注目されよう。土器等の日常生活用品については、目立った出土を見せず、生活時の火災ではなく、住居廃絶時に火をかけたことが推測される。炭化材等が覆土中に集中する点から見ても首肯されよう。このことは、SB1207が厳密な意味での焼失住居ではなく、住居廃絶に伴う何等かの祭祀的な行為の所産と位置付けられようか。なお、SB1207が廃絶されて何等かの祭祀行為を経た後、竪穴が平坦化し、次段階の8段階にはSB1206が構築されている。したがって、住居廃絶に伴う行為の内容によっては、SB1207に居住した者とSB1206に居住した者との関係に、極端な親近性あるいは隔絶性のいずれかが類推され、興味深い。いずれにしても、こうした出土状況を示す事例は本遺跡で唯一であり、注目しておきたい。

以上記してきたように、竪穴住居址1軒1軒について説明を加えることなく進めてきたが、資料提示という面では、最低限の記載を報告し得たと考える。提示したそれぞれの属性は、それ自体多くの内容及び背景を備えており、無限の組み合わせをも推測させる。これらを総合化していくことが報告者の責務であるが、資料は膨大で作業仮説すら提示することができなかった。今後、今回提示した幾つかの問題点を整理し、長野市教育委員会の調査分も合わせて、機会を改めて取り組みたいと考える。

















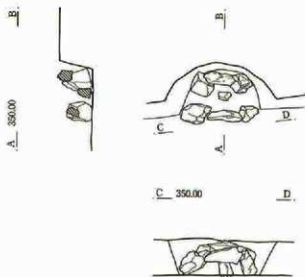




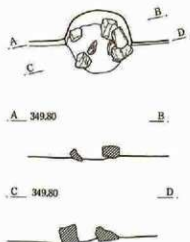


第4章 古代の調査

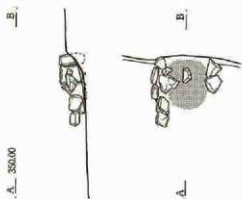
SB52 カマド



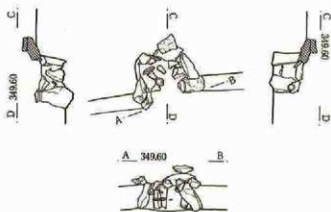
SB55 カマド



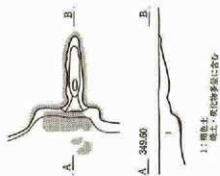
SB78 カマド



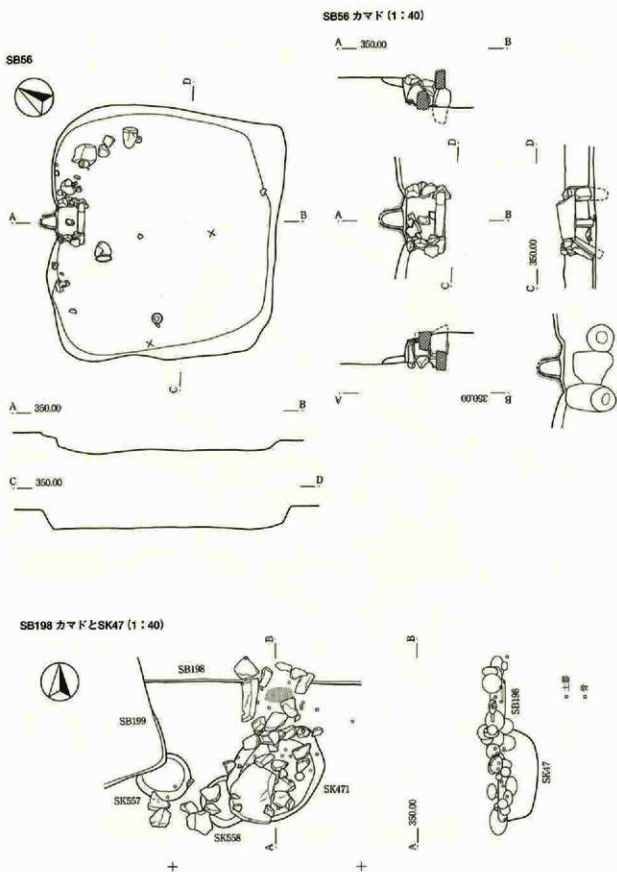
SB120 カマド



SB107 カマド

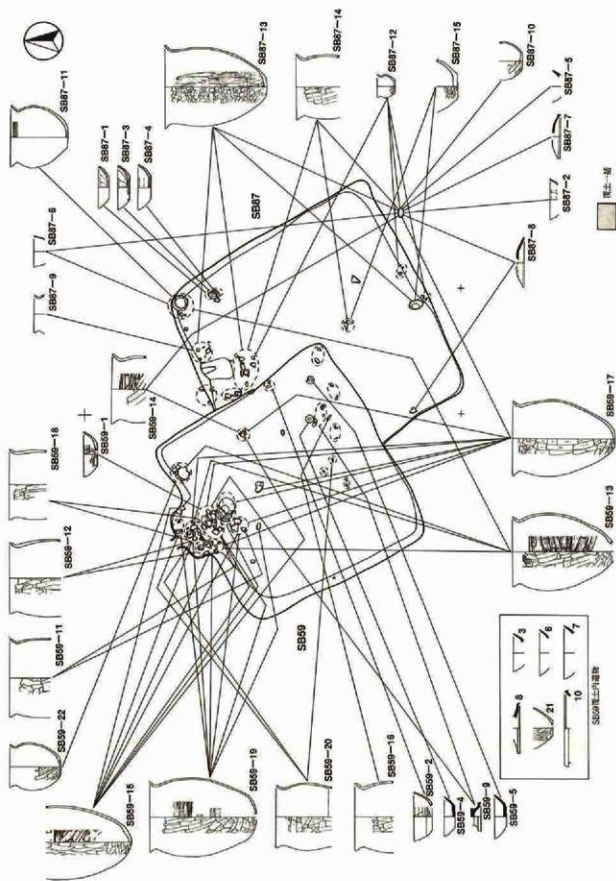


第32図 古代竪穴住居址遺構図2 (1:40)



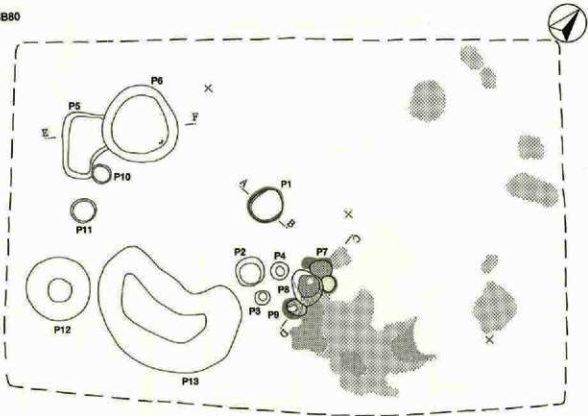
第33図 古代竪穴住居址遺構図3 (1:60)





第34図 古代竪穴住居址遺構図4 (1:60)

SB80

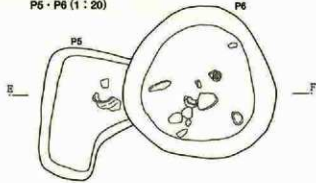


P1 (1:20)

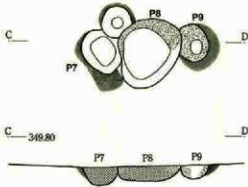


- |  |                           |  |                           |
|--|---------------------------|--|---------------------------|
|  | 赤褐色土<br>焼熱により還元・赤色化した部分   |  | 赤褐色土<br>焼土ブロック・焼土粒子で構成される |
|  | 暗赤褐色土<br>焼熱により地山が暗赤色化した部分 |  | 暗緑灰色土<br>焼土ブロックを若干含む      |
|  | 明赤褐色土<br>焼熱により地山が明赤色化した部分 |  | 灰白色土<br>灰礫、灰化物を含む         |

P5・P6 (1:20)



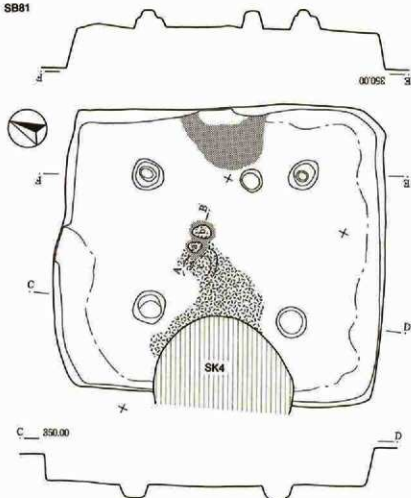
P7~P9 (1:20)



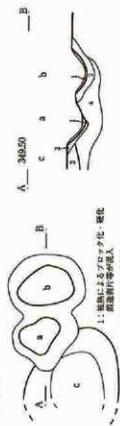
● 焼土片  
+ 土器

第35図 古代竪穴住居址遺構図5 (1:40)

SB81



SB81 原塚跡遺構 (1:20)



1:

2:

3:

4:

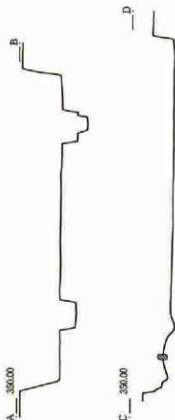
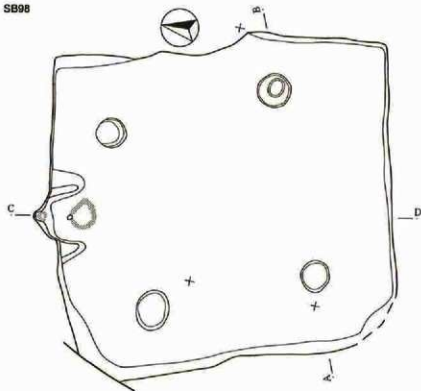
1: 遺構によるアウタケ・堀化  
遺構跡の形状

2: 断面による築地

3: 築土跡子・アウタケ遺構、築地等の遺入

4: 掘り方・築地の遺構であるのにおもひ製土  
築地物の遺入

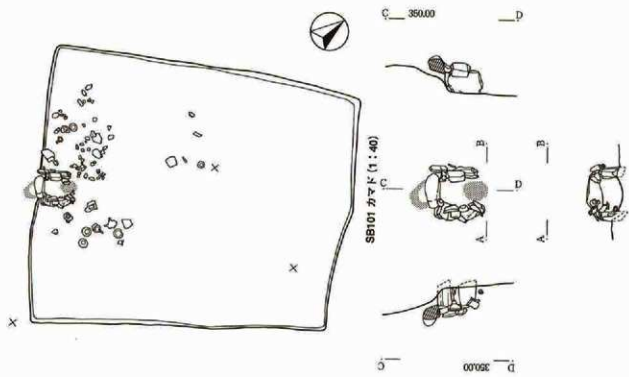
SB98



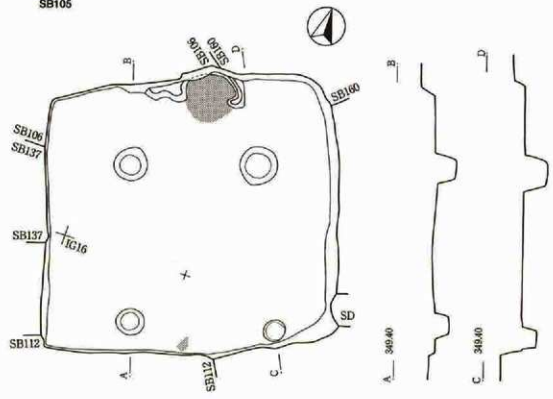
第36図 古代竪穴住居址遺構図6 (1:60)



SB101



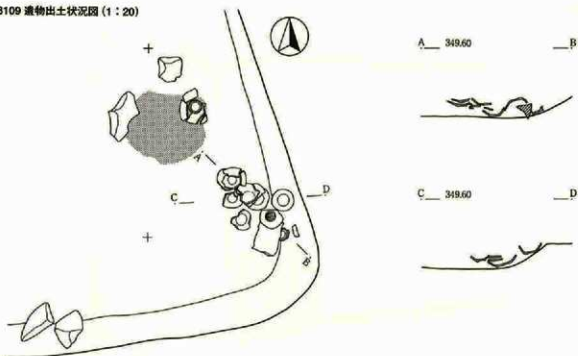
SB105



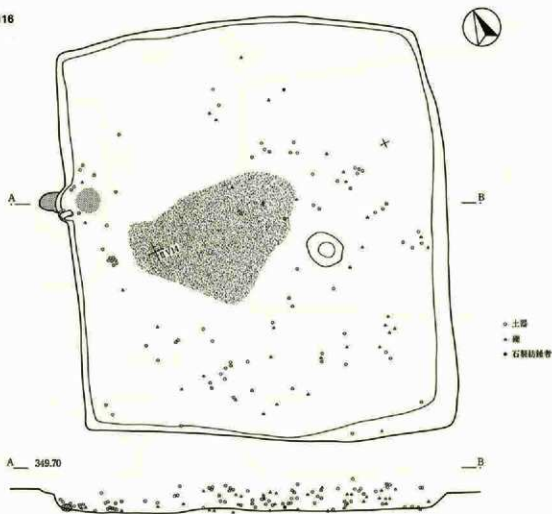
第38図 古代竪穴住居址遺構図 8 (1:60)



SB109 遺物出土状況図 (1:20)

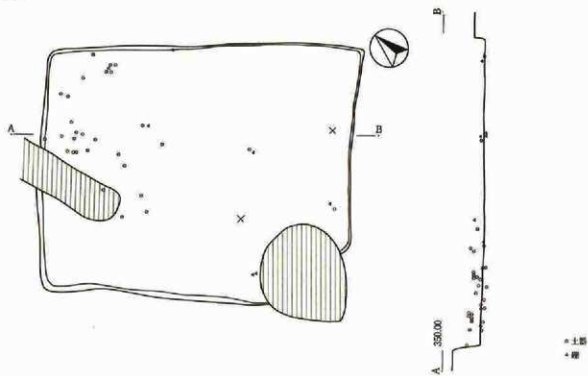


SB116

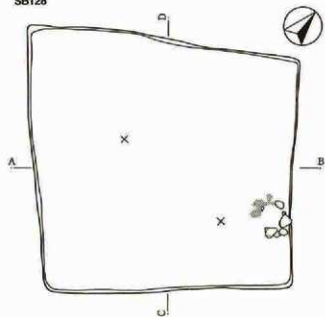


第39図 古代竪穴住居址遺構図9 (1:60)

SB121



SB128



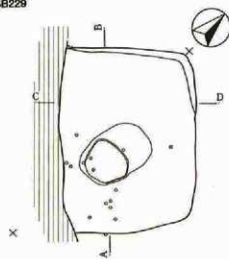
A 349.50 — B



C 349.50 — D



SB229



A 349.50 — B

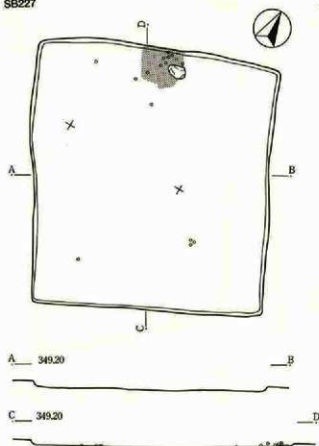


C 349.50 — D



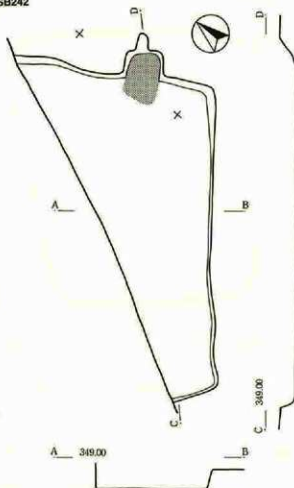
第40図 古代竪穴住居址遺構図10 (1 : 60)

SB227

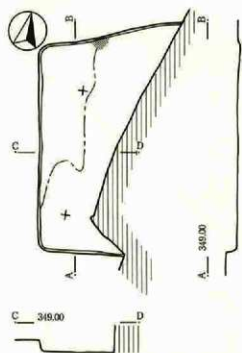


○土層

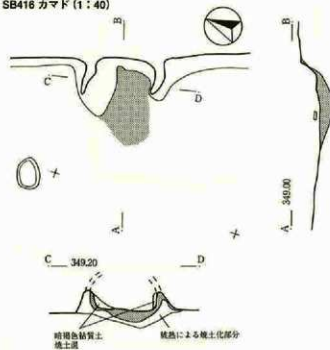
SB242



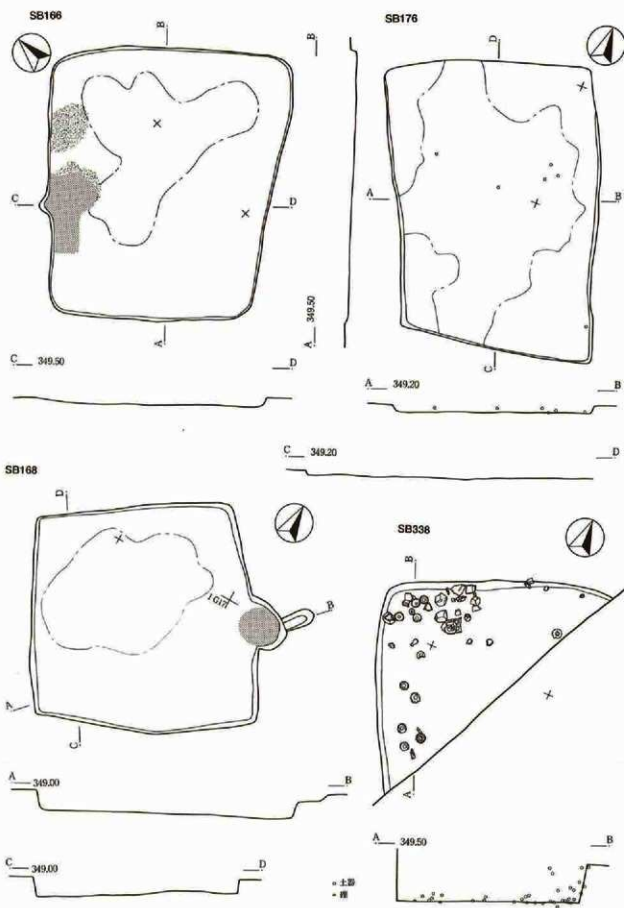
SB397



SB416 カマド (1:40)

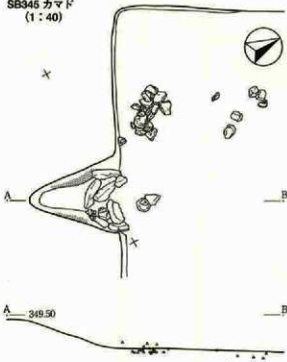


第41図 古代竪穴住居址遺構図11 (1:60)

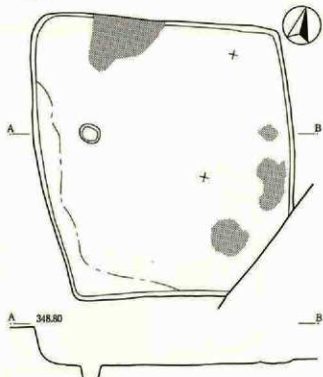


第42図 古代竪穴住居址遺構図12 (1 : 60)

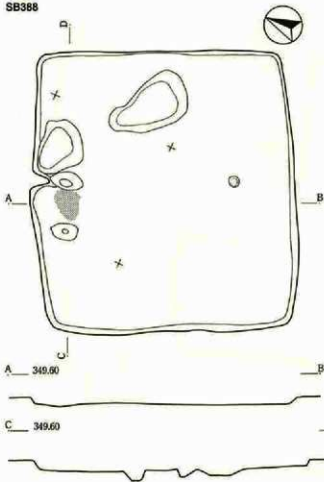
SB345 カマド  
(1:40)



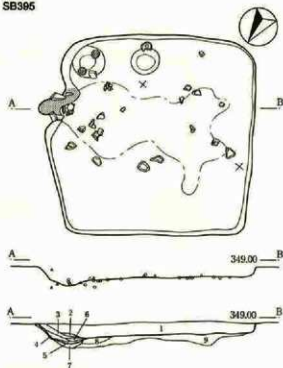
SB365



SB388



SB395



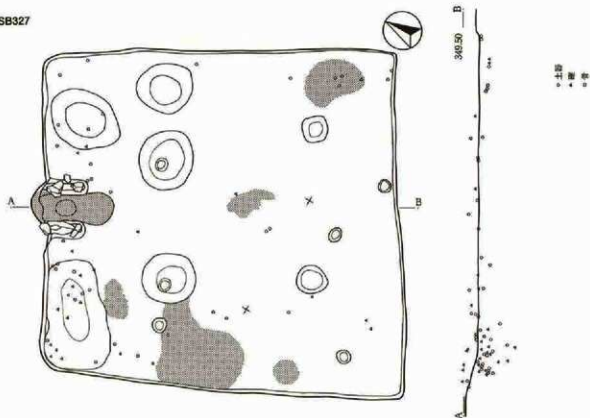
- 1: 暗褐色土 黄褐色土ブロック混入
- 2: 黄褐色土
- 3: 赤褐色土 焼土混、灰化物少量
- 4: 黒色土 灰化物多量に混入
- 5: 赤褐色土 焼土層(火床部)
- 6: 灰褐色土 灰層?
- 7: 赤褐色土 焼土粒子多量に混入
- 8: 黒色土 灰化物多量に混入
- 9: 暗褐色土

○土器  
△竈

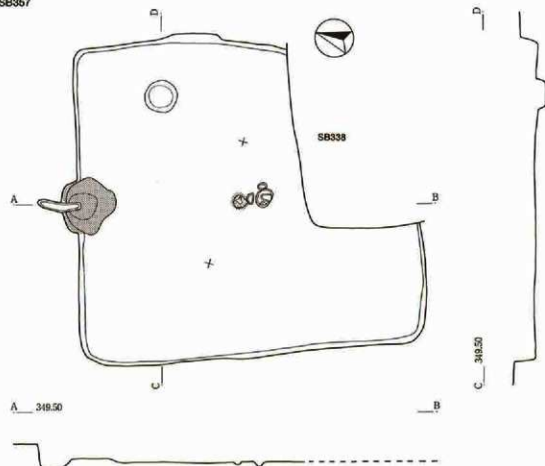
第43図 古代竪穴住居址遺構図13 (1:60)



SB327

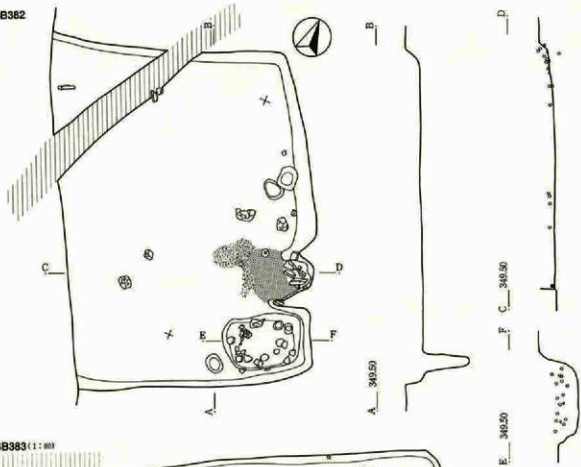


SB357

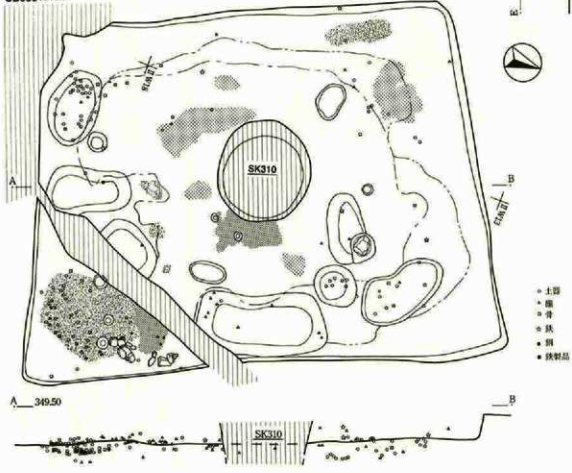


第44図 古代竪穴住居址遺構図14 (1 : 60)

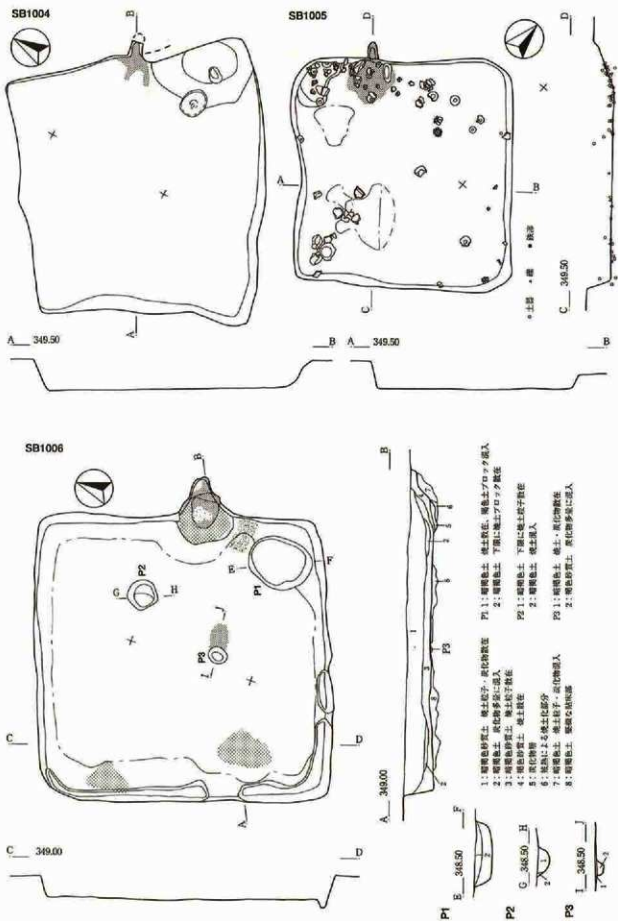
SB382



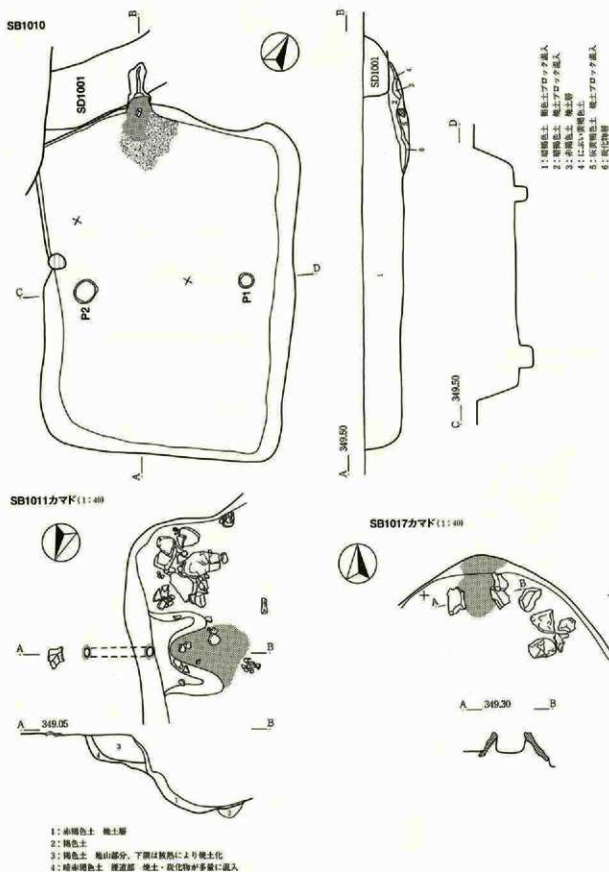
SB383 (1:80)



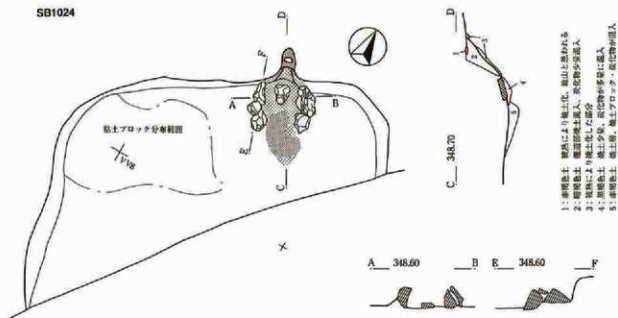
第45図 古代壑穴住居址遺構図15 (1:60)



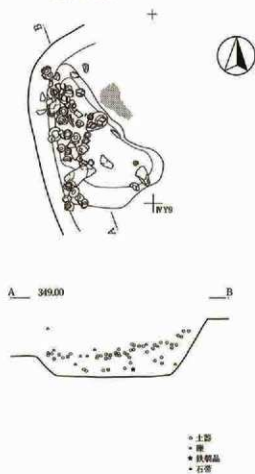
第46図 古代竪穴住居址遺構図16 (1:60)



第47図 古代竪穴住居址遺構17 (1:60)



SB1046 カマド左側ピット  
遺物出土状況

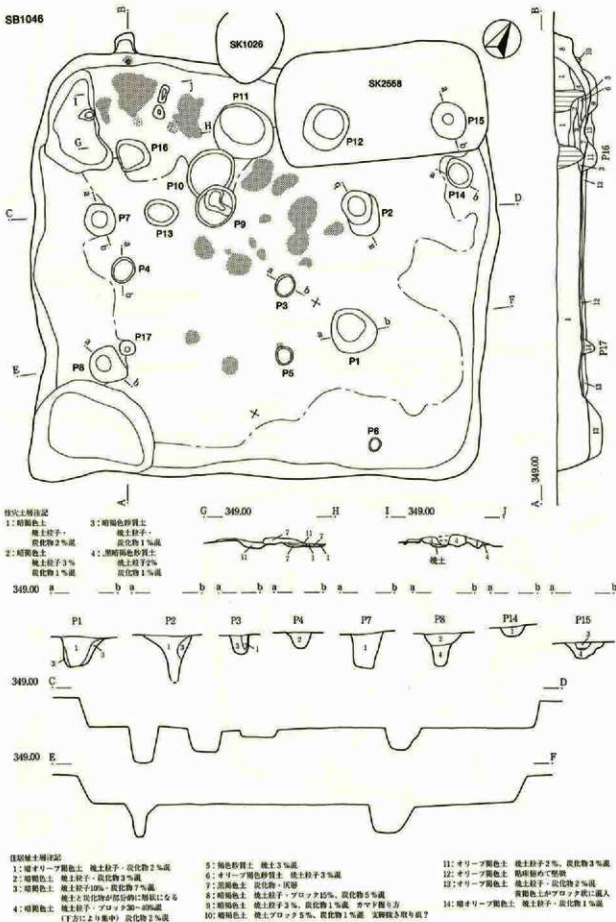


SB1046 北東壁際遺物出土状況



第48図 古代竪穴住居遺構図18 (1:40)

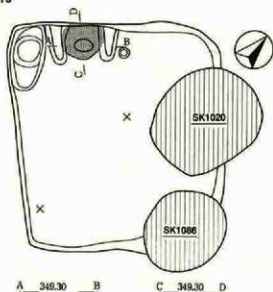




第49図 古代竪穴住居址遺構図19 (1:60)

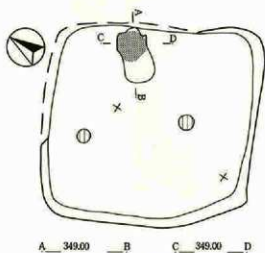


SB1079



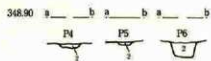
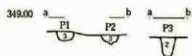
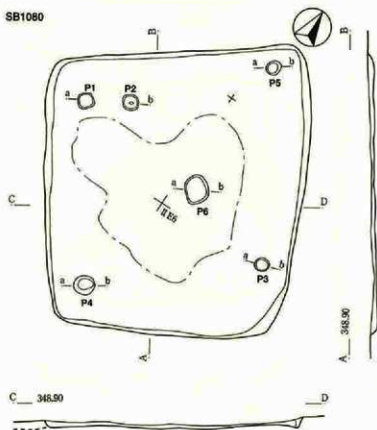
- 1: 灰褐色土 灰層・焼土粒子混入
- 2: 暗赤褐色土 火成部
- 3: 褐色粘質土 輪部
- 4: に深い黄褐色土 部分的に灰熱による赤色化あり

SB1087



- 1: に深い黄褐色砂質土 焼土粒子・炭化物混
- 2: に深い黄褐色砂質土 焼土粒子・炭化物・黄褐色土のプロット混
- 3: 暗赤褐色土 火成部

SB1080



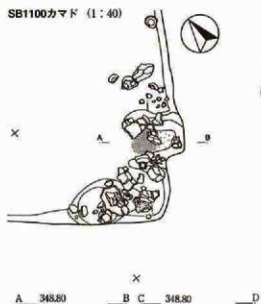
- 1: 暗褐色土
- 2: 細灰色土
- 3: 黄褐色土

\*P1・P2は裏腹する住居址の柱穴である可能性が高い  
 P1→SB1038  
 P2→SB1055

第51図 古代竪穴住居址遺構図21 (1:60)

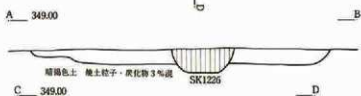
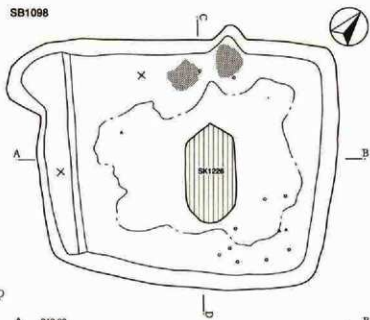
第4章 古代の調査

SB1100カマド (1:40)



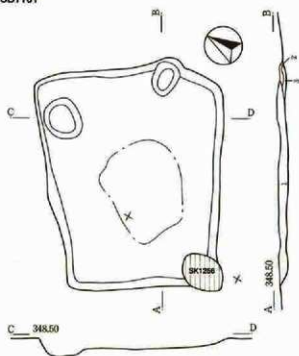
- 1: 黄褐色土
- 2: 灰色・黄褐色土・焼土ブロック・炭化物混
- 3: 黒褐色土 灰層・炭化物少量混
- 4: 明赤褐色土 灰床部
- 5: 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物混
- 6: 赤褐色土 焼土塊積

SB1098



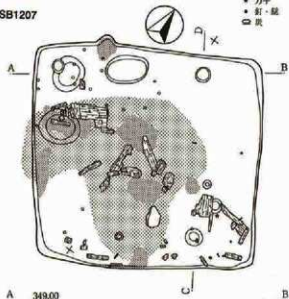
- 土器
- 網
- 刀子
- 釘・紐
- 灰

SB1101



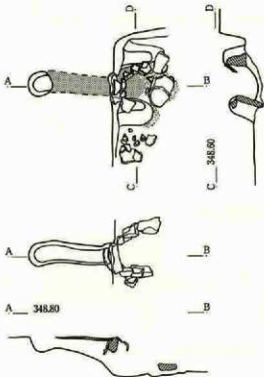
- 1: 暗褐色砂質土 焼土粒子2%・炭化物3%・黄褐色土がブロック状に混
- 2: 暗褐色土 焼土粒子・炭化物3%混
- 3: 暗褐色土 焼土粒子・ブロック10%・炭化物5%混

SB1207

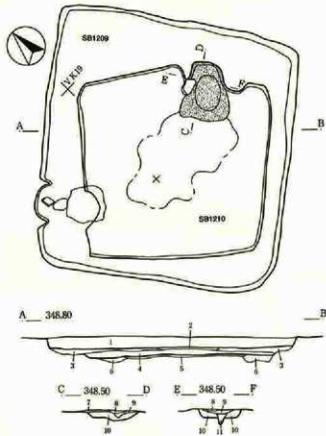


第52図 古代竪穴住居址遺構図22 (1:60)

SB1206カマド (1:40)



SB1209・SB1210



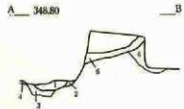
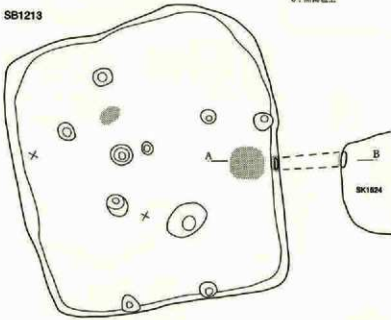
SB1209

- 1: 暗褐色砂質土 炭化物少量
- 2: にぶい黄褐色土 黒褐色土・黄褐色ブロック底
- 3: 黒褐色土
- 4: 暗褐色砂質土 炭化物微量
- 5: 暗褐色土
- 6: 黒褐色土

SB1210カマド

- 7: 黒色土 炭化物微量
- 8: 暗赤褐色土 焼土粒子混
- 9: 暗褐色土 炭化物混
- 10: 暗褐色土 炭化物少量
- 11: 暗赤褐色土 焼土粒子多量

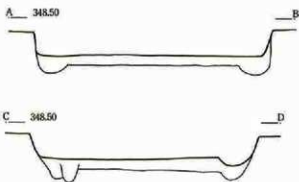
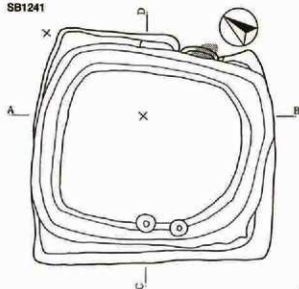
SB1213



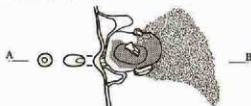
- 1: 赤褐色土 穴床部
- 2: にぶい黄褐色土 焼土粒子混・炭化物少量
- 3: にぶい黄褐色土 焼土粒子・炭化物混
- 4: にぶい黄褐色土
- 5: 暗褐色土 焼土粒子・ブロック底
- 6: 暗褐色土 焼土粒子・焼土は焼熱のための赤色化
- 7: 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物混

第53図 古代竪穴住居址遺構図23 (1:60)

SB1241



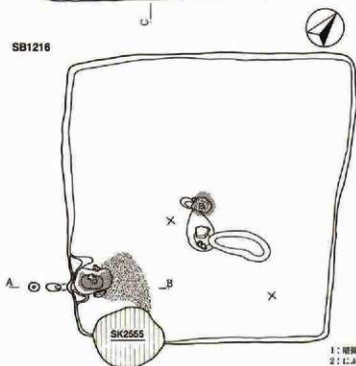
SB1216カマド (1:40)



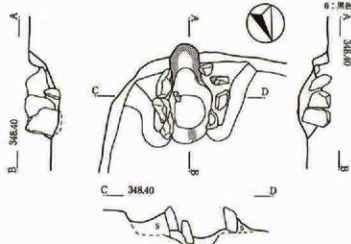
SB1216旧カマド (1:40)



SB1216



SB1402カマド (1:40)



- 1: 暗褐色土 炭化物少量
- 2: に多い黄褐色土 黄褐色粒子多量
- 3: 黒褐色土 焼土粒子絶多・炭化物多
- 4: 黒褐色土 焼土粒子絶・炭化物多量
- 5: 赤褐色土 灰床部
- 6: 黒色土 炭化物多
- 7: に多い黄褐色土
- 8: 灰・焼土・炭化物が互層となる
- 9: 黒色土 炭化物多
- 10: 赤褐色土 旧カマド灰床部
- 11: 暗褐色土 旧カマド煙道部
- 12: 結晶性土 焼土粒子・炭化物少

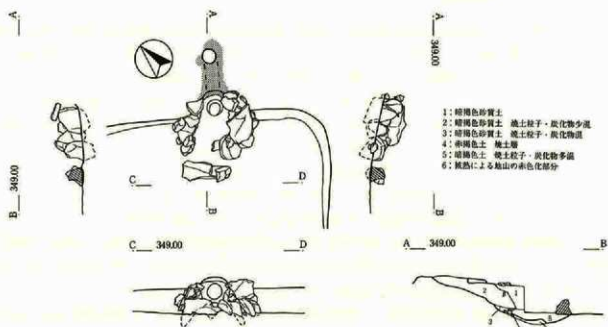


- 1: 赤褐色土 黄褐色土少量
- 2: 赤褐色土 焼土粒子少量・炭化物多量
- 3: 赤褐色土 焼土粒子絶多・炭化物少量
- 4: 明赤褐色土 炭化物絶
- 5: 黄褐色土 灰部

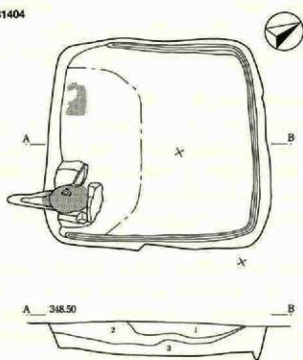
第54図 古代竪穴住居址遺構図24 (1:60)



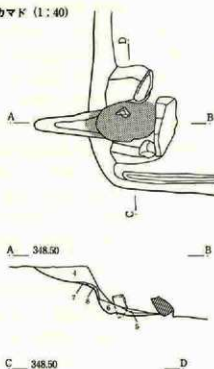
SB1401カマド (1:40)



SB1404



カマド (1:40)



- 1: 暗褐色土 SB1404の掘り方の可能性大
- 2: 暗褐色土 赤穴の黄砂ブロック混
- 3: 暗褐色土 黄砂混雑
- 4: 暗褐色砂質土 黄砂ブロック混 天井部(地山)の崩落土
- 5: 暗褐色土 焼土粒子・炭化物混
- 6: 暗赤褐色土 焼土ブロック・炭化物多混
- 7: 暗赤褐色土 焼土粒子・炭化物多混
- 8: 赤褐色土 焼土粒子・炭化物多混

第55図 古代竪穴住居址遺構図25 (1:60)

## 2 掘立柱建物址

本遺跡で検出された掘立柱建物址は6棟で、内訳は、総柱建物址と想定されるものが1棟、2間×1間1棟、3間×2間4棟である(第22表)。竪穴住居址に対する割合は、住居址408軒に対して6棟、15%以下で、一般的な古代集落の様相に比べて、掘立柱建物址が極端に少ない集落址と捉えることができる。

掘立柱建物址の分布は、限定された区域に単独で分布すると把握される。隣接する農協集荷場地点(長野市教育委員会1991)では5棟の掘立柱建物址がまとまりをもって検出されており、掘立柱建物址が構築される区域について集落内での何等かの規制が存在していたと考えられる。

総柱建物址と想定されるST1は、調査区南端部に位置する(図版1)。推定される面積は10㎡前後で、比較的小規模な建物址である。構築時期については出土遺物が皆無いため不明と言わざるを得ない。

ST2とした建物址は、整理作業の段階で土坑の分布状況から2間×1間の建物址と想定したもので、掘り方に重複関係が認められることから、建て替えがあった可能性が指摘される。面積は7㎡弱の小規模な建物址である。構築時期については出土遺物が皆無いため不明と言わざるを得ないが、SD1及びそれに直交するSD16の走向と本址の軸が同一方向であることから関連が推察される(図版8)。

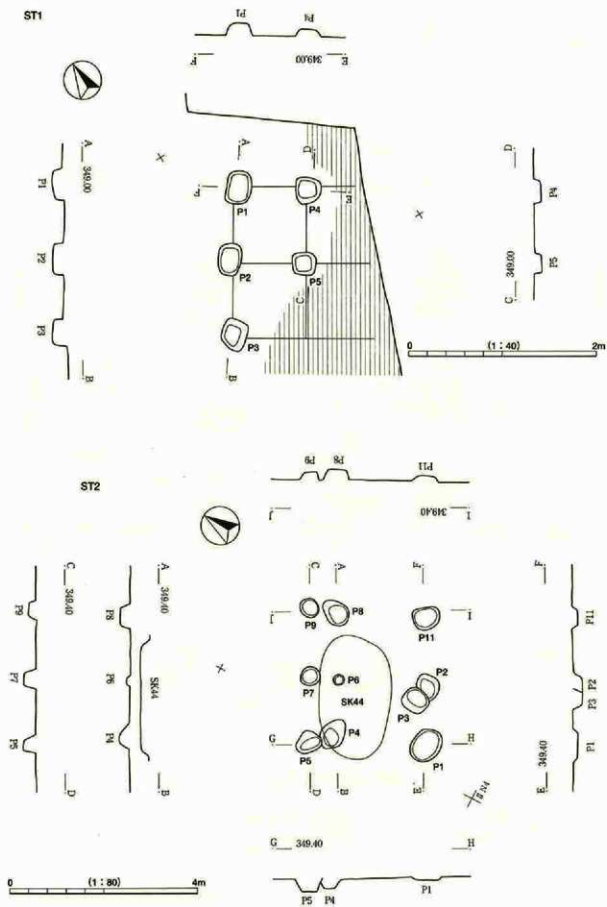
ST1001・1002は3間×2間の建物址で、調査区のほぼ中央に位置する(図版1)。両者は建て替え(拡張)の関係にある。面積はいずれも30㎡以上で、南西側の梁方向に、あるいは周囲に小ピットが検出されており、庇付きの建物址であった可能性が指摘される(第57図)。また、SD1009及びSD1011とそれに直交するSD1026、垂直方向に走向するSD1001と建物の軸が同一方向を示していることから、これらの溝で区画された空間内に構築された集落内でも中核的存在の建物であった可能性が指摘できよう(第60図)。したがって、構築時期については不明な部分が多いが、SD1009最下層出土の土器が2段階前後の土器様相を示すと想定され、上限は2段階前後と把握される。

ST1003・1004は3間×2間の建物址で、調査区のほぼ中央に位置する(図版1)。ST1004については整理作業の段階で柱痕跡を伴う土坑の分布状況から建物址と想定したもので、全容が明らかではないが、推定される建物面積もST1003とほぼ同様な値を示し、建物の主軸方向も同様なことから、両者は建て替え(拡張)の関係にあると把握しておきたい。面積はいずれも30㎡弱である。SD1006・1014と建物の軸方向が同一であることから、ST1001・1002と同様に溝で区画された空間内に構築された集落内でも中核的存在の建物であった可能性が指摘できよう(第60図)。構築時期については不明な部分が多いが、6段階の竪穴住居址に切られていることから、下限を6段階以前とすることができよう。

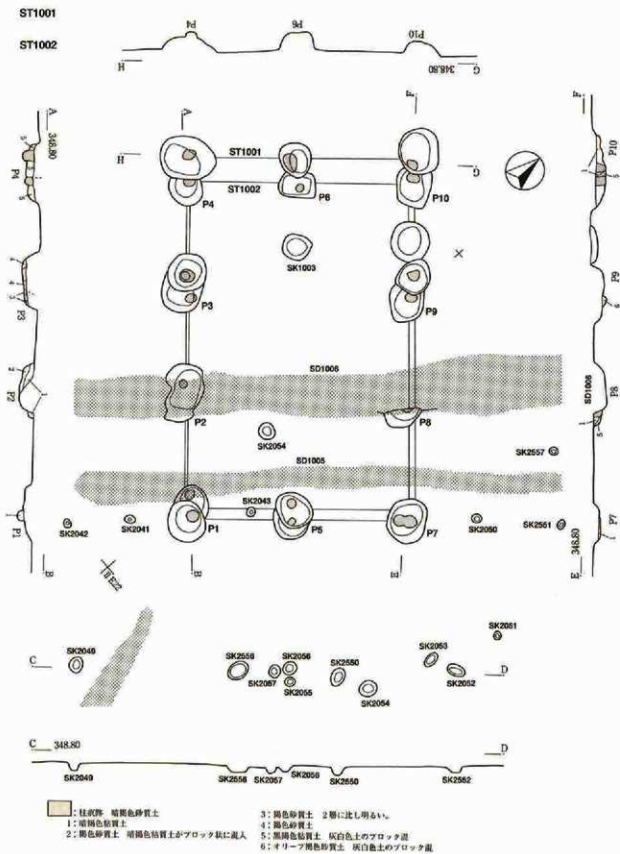
ST1001・1002とST1003・1004については、棟方向、若干の面積格差、推定される庇の存在の有無など、差異は認められるものの、建物の軸方向が近似し、両者とも溝で区画された空間内に立地することが想定されることから極めて関連性が強く、また同様な機能・性格を有していた建物址であったことが理解される。そして、それは区画溝と柱穴掘り方との重複関係からST1001・1002→ST1003・1004という新旧関係で表現され、集落内における2段階前後～5段階に至る中核的存在の消長・変遷として把握されよう。

STNo.	グラッド	棟方向	風		柱		柱間間隔		柱穴掘り方		備考	図版No.
			新行×梁行	新方向×梁方向	面積	新行	梁行	形	深			
			cm	cm	㎡	cm	cm	cm	cm	cm		
	I 011.18											
	I P15.20	N 56° W	2×1間	220	150	4.8	160	150	方	48~70	2×2間の掘立柱建物址の可能性大	17
	II 118.19	N 63° W	2×1間	260	240	6.72	136~144	240	円	40~58	建て替え	56
	II										ST1002の建て替え(拡張)	
	1001 05.7.11.12	N 47° W	3×2間	770	480	36.96	230~250	210~260	円	70~142	庇付建物の可能性大	36
	1002 10.7.11.12	N 47° W	3×2間	700	480	33.6	230~250	220~240	円	76~84	庇付建物の可能性大	36
	1003 10.17.21.22	N 47° E	3×2間	650	450	29.25	170~240	210~230	円	50~80	ST1004の建て替えか?	61
	II 2.3											
	1004 10.22.23	N 47° E	3×1間	620	470	29.14	180~230	450~470	円	50~90	3×2間の建物址の可能性大	61

第22表 古代掘立柱建物址一覧表

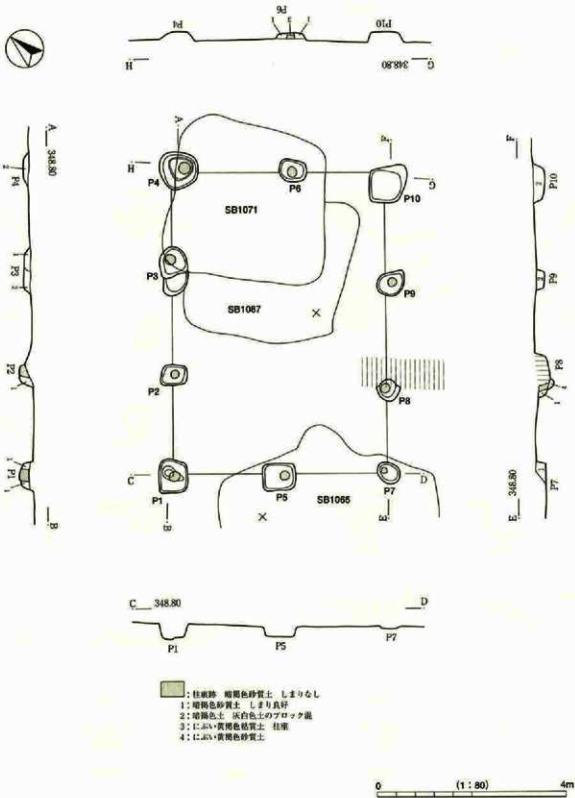


第56図 古代掘立柱建物址遺構図1



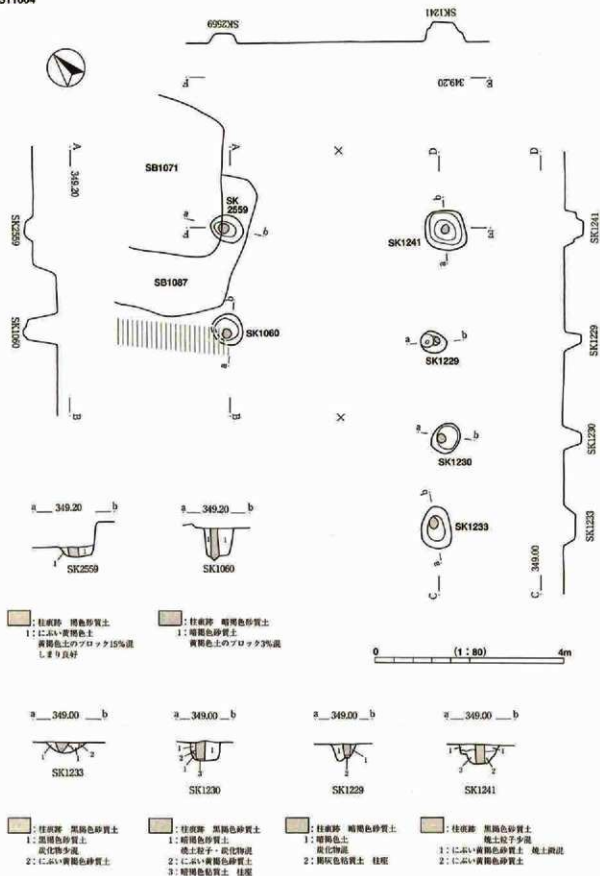
第57図 古代掘立柱建物址遺構図2

ST1003



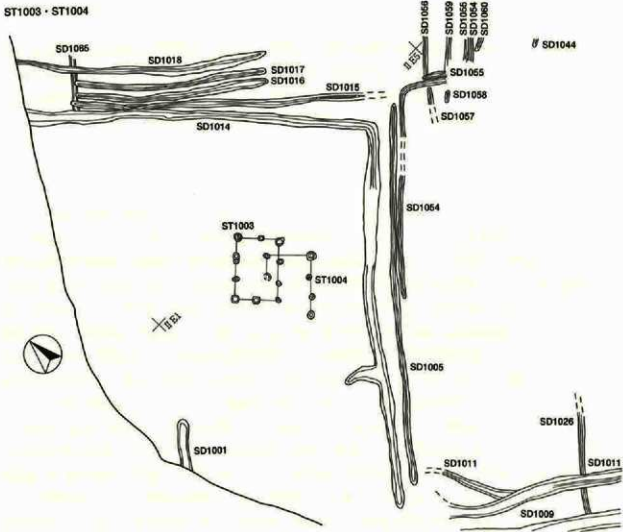
第58図 古代掘立柱建物址遺構図3

ST1004

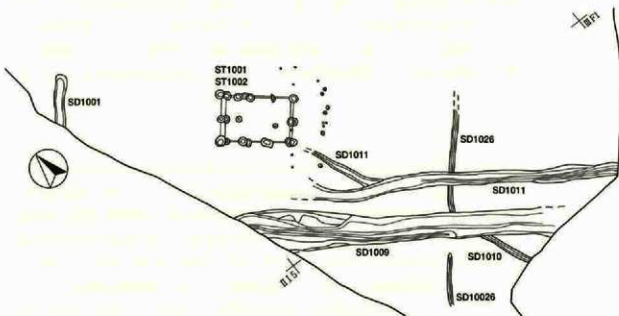


第59図 古代掘立柱建物址遺構図4





ST1001・ST1002



第60図 掘立柱建物址と溝址 (1:400)

## 3 溝址

本遺跡では、直線的に伸びる溝址やL字状に屈曲する溝址の他に、一定範囲内に井桁状に重複し合う溝址群が検出されている。前二者は、一定の方向性を持っていたり、L字状に屈曲することから集落内を区画する機能を有していたことが推測される。また、併走する溝址は道の存在をも推定させる。後者の溝址群については、分布範囲が限られることもあり、農地等を予測させる。ここでは、こうした溝址について調査区ごとに、その概要を記すこととする。

## (1) 西地区の溝址

西地区で最も古く、幅・深さとも規模の大きい溝址としてSD2・SD7がある。両者が埋没を終了した後、多くの住居址が構築されていることから、集落の初期段階に構築された溝址であることが理解される。また、両者はSD7→SD2という新旧関係を有しており、それぞれに同一方向または直交方向に走る溝址との関連が深いことが予想される。SD7に対してはSD9・11・501・506（いずれも併走）であり、SD2に対してはSD41・58・503（併走）、SD3・4・53～57・504（直交方向）である。SD7については時期を特定できるような出土遺物が無いため明らかでないが、SD2については1～3段階の土器様相を示す土器群が豊富に出土している。該期の住居址は検出数が少なく、集落景観を復元することは困難であるが、近接するSB185（1段階）やSB81・97・98・136（2段階）などの住居址が、SD2の方向とほぼ同様の軸方向を示していることから、集落を形成する上で、SD2の存在が基軸となっていたことが理解されよう。

また、L字状に屈曲する溝址が2条検出されており（SD10・52）、両者はコ字状に空間を区画するかのよう配置をしている。これらの溝址についても同一方向に走る溝址が検出されており、相互の関連が深いことが予想される。北西―南東方向に走る溝址にはSD16・45・46・51があり、北東―南西方向に走る溝址にはSD1・19・507がある。これらの溝址から出土した遺物は少なく、時期を特定することは困難であるが、SD1から非クロコ調整の黒色土器A杯Dが、SD10から須恵器プラスチック瓶が出土しており、1段階前後の構築時期が推測されよう。なお、前記したSD7とは確実に方向を異にしており、時期差として把握することができそうである。

いずれにしても、集落形成の初期段階から、西地区ではこのような長大な溝址が構築されていたことは事実であり、それによって住居址の配置も規制されていたことがある程度予測されるなど、自然発生的な集落とは考えられない状況が把握されよう。加えて、西地区北端部に位置するSD13を除いて、東地区では西地区で検出された溝址と同様な方向に走る溝址が確認されていない点、集落構成を検討する上でも、非常に興味深いことである。

## (2) 東地区の溝址

前項で記したように、掘立柱建物址が構築される空間を区画する溝址が東地区南端部に位置している。SD1001・1009・1026とSD1006・1014がそれで、これらを中心に他の溝址を見ていくと、同一方向に走行する溝址が多数見出せる。北西―南東方向に走る溝址には、西地区北端のSD13の他、SD1014に隣接して併走するSD1015～1018やSD1002・1028・1033・1156・1160・1182・1196などがあり、それらの分布は東地区北部にまで及んでいる。北東―南西方向に走る溝址には、SD1005・1032・1050・1161などがある。これらの溝址からは時期を特定できるような遺物は出土しておらず、軸方向の一致を以て同時期と仮定すると、2段階前後～5段階という時期において、西地区北端部から東地区北部まで、距離にしておよそ250mの間、掘立柱建物址を中心とした区画が成立していたことが想定される。さらに、掘立柱建物址の北東側を区画

する溝址には3条の溝址が併走し、北西側を区画する溝址はその幅と深さを以て、周囲との隔絶性を高めていることが推測される。周辺に分布する住居址との関係については検討を経ていないが、西地区とはまた違った集落の様相が指摘されるのではなからうか。

また、東地区では、上記した溝址が有する方向とは異なった方向を持つ溝址も検出されている。掘立柱建物址こそ検出されていないが、クランク状もしくは凸状の区画と考えられる溝址を中心として、それと同一方向に走る溝址が多数検出されている。中心となる分布を示す溝址はSD1065・1154・1155・1157・1159とSD1028・1029・1038であり、両者は対称的な位置に対峙するかのような配置となっている。なお、前者についてはいずれも底面に掘削痕が観察されている。これらの溝址に対して、先と同じように軸方向の一致を以て同時期と仮定すると、SD1065とSD1014～1018との重複関係から、掘立柱建物址を中心とした区画成立以前の時期を当てることができよう。こうした溝址と同一方向に走行する溝址には、北西-南東方向でSD1008・1021・1047・1152・1162・1163・1171・1175など、北東-南西方向でSD1049・1167・1173・1191・1193・1507などがある。これらの内、SD1173からは「貞観永寶」が出土し、SD1021では9～10段階の土器様相を示す土器群が出土し、SD1191からは1段階前後と考えられる土師器鉢形甕が出土している。先の仮定を遂行する上で、こうした出土遺物を混入品として捉えるのか、一連の溝址から消去して考えるのか大きな検討課題の一つであるが、SD1191の出土遺物を以て、東地区北端部の河川址にまで、距離にしておよそ230mの間、一連の区画が及んでいたと考えておきたい。したがって、掘立柱建物址を中心とした広範な区画が成立する以前に、その基盤となる区画が軸方向を若干違えながらも存在していたことが想定されよう。

以上記してきたことは、あくまでも作業仮説の一つであり、十分な検討がなされたわけではない。今後、各遺構・遺物の分析や分布論を踏まえた上で集落論を組み立てていきたいと考える。

### (3) 溝址群

東地区の北端部で、金井山山麓部の河川址右岸平坦面に位置する。数軒の住居址群とともに、視覚的に三つのまとまりを持って検出された。松本市下神遺跡で検出された溝址群に状況が類似する。溝址群1～3はそれぞれ、重複関係、走行方向の相違を内包する。溝址群個々の溝は、幅・深さとも小規模で、断面形はU字状を呈し、十字・T字に交差する場合の重複関係は不明瞭という特徴を持つ。これらの機能については不明と言わざるを得ないが、走行方向などに単位性が窺えること、集合体で機能したであろうことなどから、畝地などの耕地として利用されていたのではなからうか。時期的には、溝址群3が1段階のSB1403に切られており、溝址群すべてが同時存在と仮定すれば、古代以前の遺構と把握される。また、直接の重複関係は見られないが、溝址群2の溝空白部分が古墳時代前期に相当するSB1406が構築されており、両者の共存も考えられよう。

## 4 道路址

本遺跡では、古代において1本、中世において1本の道路址が検出された。その他、溝址の配列等から道を推定させる部分は数か所あり、集落構成・景観といった面で重要な位置を占めることが予想される。

古代に相当するSC1(図版17)は、調査区南端部に位置し、北西-南東方向に延びる。溝状の掘り込み総体の幅は9m前後を測る。灰白色を呈する堅緻な部分が一定範囲にわたって検出されたため、トレンチを設定し、土層の堆積状況を観察したところ、数条の溝状の掘り込みが確認され、その覆土は灰白色の粘質土と灰白色粘質土がブロック状に混入する暗褐色粘質土が互層堆積していることが確認された。分層された覆土はいずれの土層も堅緻であることから、版築行為が想定され、掘り込み及びその総体の平面形状から道路址と判断した。

構築時期については、出土した土器群には2～6段階の土器様相が混在しているため、明確な時期決定ができないものの、遺構の性格状、上限を6段階としておきたい。なお、出土した底部穿孔を有する土師器小形甕（図版232-16）は完形に近い個体で、口縁部内面から外面の胴下半に至る器面に吹きこぼれの痕跡や顔料の可能性が高い橙色の付着物が確認されている（PL82）。吹きこぼれの痕跡は一過性の高いものとされ（小林1999）、煮炊に用いた土器を穿孔していることが明らかな資料である。したがって、出土状況が不明瞭なため断定はできないが、この土器の存在は、顔料で彩られた器を用いて何等かの煮炊行為をし、その後、底部を穿孔し、その土器を埋納するといった祭祀的な行為が行われたことを想像させる。

## 5 墓址

本遺跡は全時代を通じて骨等の遺存状況が良好であり、したがって、人骨の遺存する土坑を墓址と把握し、墓址としての属性を備えるものの人骨が出土しないものについては土坑と判断した。

古代の墓址は7基で、いずれも土葬墓である。埋葬姿勢には伸展葬と屈葬の二者があり、屈葬で3体合葬の墓址が1基検出されている。その他、ウマの埋葬施設が2基検出されている。

伸展葬の土葬墓は3基検出され、その内SK1035・SK1094については、人骨の遺存状況が悪いため、鑑定・分析を実施できなかった。両者とも完形に近い食器形態の土器が1点出土しており、副葬品と想定した。SK1117については、被葬者が壮年の女性と鑑定されている。副葬品は検出されなかった。

これら3基の土葬墓は、集落構成上、基軸となり得る直線的ないしはL字に屈曲する溝址に近接して単独で造墓されており、所謂屋敷墓といったものとの関連を考慮する上で注目される。

屈葬の土葬墓は、3体合葬墓を含めて4基検出された。SK556以外は東地区に位置する。SK556の被葬者は年齢・性別とも不明であるが、頭蓋骨脇から3個体の土器が副葬品として伴出してきている。食器形態の土器の様相から11段階と想定され、重複する住居址（SB31-6段階）とは隔絶の感があり、単独で造墓されたものと判断される。SK1687・SK1769は、東地区の住居址分布が比較的希薄な区域にそれぞれ単独で造墓されている。SK1687は住居址（SB1241-7段階）覆土中に位置するが、竪穴の埋没完了後に造墓されたものと考えられる。被葬者は、3～4歳程度の幼児と鑑定されている。SK1769は住居址（SB1095-6段階）に隣接するが、SK1769はSB1095床面の絶対高よりも低い面で検出されている。墓墳の深度という面からしても、両者の同時併存は考え難い。被葬者は、性別不明で比較的高齢と鑑定されている。

SK1226は3体の合葬墓で、住居址（SB1098-5段階）調査中に検出された。この区域は住居址の分布が密で、SB1098も6軒の住居址と重複関係にあり、SB1045が11段階で最も新しい住居址である（図版117）。SK1226は6個体の土師器杯AⅡが副葬品として伴出しており、それらの法量は、SB1045よりも新しい土器様相を示している。3体の人骨は、妊娠経験のある10代後半の女性と7歳前後の幼児、3歳程度の幼児とそれぞれ鑑定されており（第6章参照）、母子合葬墓であることが想定されよう。墓墳の形状や人骨の出土レベル、先の立地状況からして、時期を経た追葬は考え難く、3体同時に埋葬されたものとする。出土状況からは、母親を中心として、子供は二人並んで母親の背後に追葬し、あたかも母子で散歩しているかのような姿勢が窺える。副葬品は母親の足下に、6個体の土師器杯AⅡが2枚ずつ重ねられ、並べられていたことが想定される。3体の骨及び歯の履歴から、母親は骨膜炎を患った経験があり、長子は3歳前後と5歳前後の2時期にわたって栄養不良や病気などのストレスを経験している（第6章参照）。母親の死亡年齢からしても、若くして逝ってしまった不遇の親子、という被葬者像が浮上する。しかしながら、所謂遺棄葬ではなく、副葬品を伴う埋葬墓で、厚葬の部類に含まれると考えられることから、安易な憶測は控えるべきである。単に不遇なだけならば、墓に埋葬されることはなかったと考えられるからである。いづれにしても、本事例は、古代の墓制を研究する上で、様々な要件を備える事例として評価され、今後、

注目を集める資料として特筆される。

ウマの埋葬施設と考えられるものは2例(SK1115・SK1715) 検出されている。いずれも穏やかに眠るような姿勢を保っており、窮屈さや乱雑さは感じられない。また、ウマの年齢についても規制めいたものは無く、墓塚を掘り込んでいることから、ウマの墓と判断したい。

以上のように、古代の墓址については、それぞれ異なった内容・背景を持つことが明らかである。加えて、長野市教育委員会調査分の地区からも、古代の墓址が遺存状況の良い人骨を伴って検出されている。いずれも土葬墓であるが、伸展葬と屈葬の二者があり、本遺跡の墓址を分析するにとどまらず、北信地域の古代墓址を研究する上で、格好の材料が揃っている遺跡の一つとして位置付けが可能である。したがって、墓址個々が持つ多様性に富む問題の一つ一つ解決し、それらを集落内あるいは古代という時代性へと昇華させていくことが今後に残された大きな課題である。

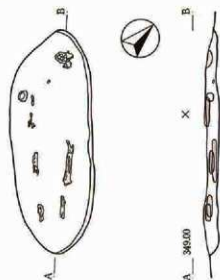
墳 No.	位置	主軸	一辺長 (cm)		形 状		埋土の状況	埋葬姿勢	方位方向	副葬品	備考	図 No.	
			長軸	短軸	長さ	幅							面積
556	I F 22-23	N 75° E	172	113	—	長方形	—	—	屈葬	東方、南向き 土師器片4点、黒色土師片4点	年代・埋葬時期	23	
1035	Ⅱ E 17	N 45° E	177	85	27	長方形	屈状	第一層	伸展葬	北向き	土師器片1点		56
1034	Ⅱ Y 7	N 25° E	240	125	42	楕円形	屈成状	上下2層	伸展葬	南向	黒色土師片1点		27
1112	Ⅱ J 4	N 2° E	165	83	37	長方形	屈状	上下2層	—	—	—	—	55
1117	Ⅱ E 5	N 120° E	195	81	42	長方形	屈成状	上下2層	伸展葬	南東方、北向き	—	—	62
1204	Ⅱ E 6	N 35° E	187	81	27	長方形	屈状	第一層	屈葬・3層分	北向き、南向き	土師器片4点	19世紀末・全期 3層分・後期 4点・後期	57
1667	V 5 6	N 28° E	81	55	16	楕円形	屈状	第一層	屈葬	北向き、南向き	—	—	72
1713	Ⅳ Y 20	N 39° E	149	80	28	長方形	屈状	南向	—	—	—	—	58
1702	V 6 9	N 35° E	116	79	—	長方形	—	—	屈葬	北向き、南向き	—	—	59

第23表 古代墓址一覧表

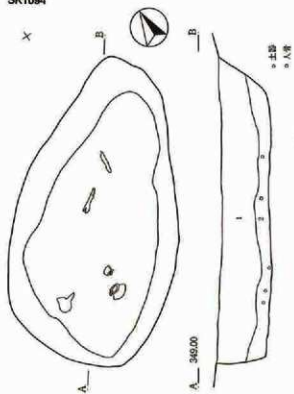
SK556



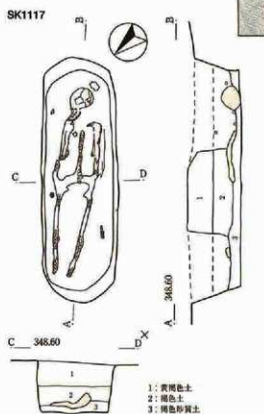
SK1035



SK1094



SK1117



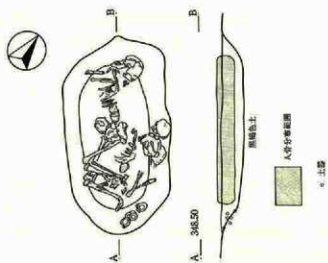
- 1: 黄褐色砂質土 粘土粒子間隙  
 炭化物・骨片混  
 2: 黄褐色砂質土  
 炭化物・骨片混  
 褐色土のブロック混

- 1: 黄褐色土  
 2: 褐色土  
 3: 褐色砂質土

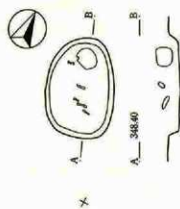
第61図 古代墓址遺構図1 (1:30)



SK1226

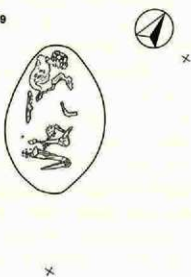


SK1687

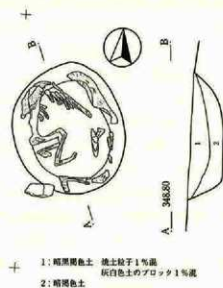


X

SK1789



SK1115



SK1715



第62図 古代基址遺構図2 (1:30)

## 6 井戸址

井戸址から出土する遺物は極めて少ない、または全く無いという資料的な制約があって、時期判定は極めて困難な状況にある。数少ない遺物が出土した井戸址をもとに、覆土の質及び堆積状況や位置関係などから井戸址の時期を判定した。したがって、今回判定した時期について、全く問題が無いわけではない。そうした経緯を踏まえて古代の井戸址と判断した遺構は86基あり、その内2基が水溜めを目的にしたと想定される円形の大形土坑であり、これらを除く84基が素掘りの井戸である。

本遺跡の調査は複数の集落面を対象に実施され、さらに調査区の分割調査という問題が加わり、井戸址のように深い遺構については、一貫した調査をすることが困難であった。したがって、井戸址の調査で最も重要な断面観察及び底面の調査が欠落してしまった遺構も多数に及んでしまい、統計的な処理についても十分な検討ができなかった。そうした中、SK1039では底面及びそれ以下の断面でグライ化土壌・酸化鉄の集積が観察され(第65図)、地下水が湧出していた痕跡が明確な事例として注目される。これ以外でも覆土最下層にグライ化した粘質土が観察される井戸址が数基認められる。

素掘りの井戸は、規模や平面形・断面形から幾つかの形態分類が可能である。また、覆土の堆積状況や覆土内の障の在り方にも特徴が認められ、廃棄・鹿絶に関わる幾つかのパターンが予測される。加えて、出土遺物の種類や内容及び出土状況も重要な属性であり、SK504・SK2511では底面からほぼ完形の土器が正位に据えられており、祭祀的側面からも注目される。また、SK1024では掘り方の存在が推定され、壁面崩落防止のための何等かの措置が講じられていた可能性や井戸掘削方法の相違が考えられる。これらを総合化した分析が必要であることは言うまでもない。ここでは、資料提示に留めざるを得ないが、今後、集落構成等を分析していく上で重要な位置を占めることとなるだろう。

SK511・SK518(第64図)については、互層堆積の覆土中にグライ化土壌を含んでおり、SK518では最下層がグライ化した砂層で、底面及びそれ以下はグライ化が認められない。これらのことから、水溜め目的の貯水施設と想定し、機能的に井戸と類似することが予想されるので、井戸址の範疇に位置付けた。

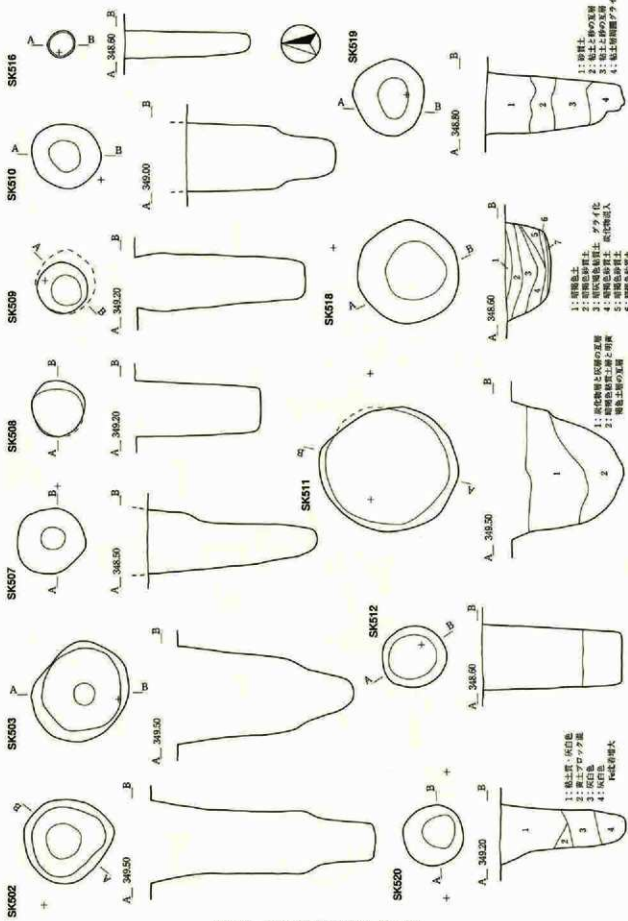
上記した井戸址の分布状況を見ると、2～3基単位で散在する井戸址群と一定間隔を保った直線的な配列が認められる井戸址群という2種類の分布パターンが捉えられる(第67図)。群在化する中世以降の井戸址群の分布パターンとは大きく異なり興味深い。こうした分布状況の差異は、井戸構築に至る占地や計画性、掘削方法などの相違に深く関わるものと考えられ、古代と中世では、集落構成及び社会構造に大きな変革があったことが推測される。

以上、井戸址個々について十分な検討を加えることができなかったが、今後、個々の井戸址の属性分析を踏まえた上で、グループ相互の比較や他遺構との関連を追究し、さらには古代と中世の井戸址の比較検討を試みていきたいと考える。

SK No	位 置	坑 道 (cm)			最大深度 最大深さ	平面形	備 考	区画 No.
		基軸 c m	掘削 c m	底さ c m				
20	I F 24, 25	214	206	(180)	(317, 90)	円形		24
21	I F 24	139	138	(149)	(317, 21)	円形		24
24	I K 4	82	78	(83)	(318, 40)	楕円形	骨(馬)	
72	I G 17	110	88	(60)	(317, 16)	楕円形		27
73	I G 18	76	74	(71)	(317, 17)	円形		27
74	I G 3	95	94	(92)	(316, 71)	不整形		28
75	I F 20	184	140	(88)	(315, 40)	楕円形		28
76	I F 25	222	210	(50)	(318, 60)	円形		29
77	I F 26	132	114	(56)	(318, 64)	楕円形		29
79	II N 18	194	174	—	(318, 77)	楕円形		31
83	II N 24	118	108	(80)	(318, 62)	楕円形		31
84	II N 3, 4	149	134	(32)	(315, 28)	不整形	刀子, 機軸製鋼品, 鉄塊	39
85	II N 4	142	140	(33)	(315, 55)	円形		39
87	II N 14, 14	172	154	—	(318, 79)	不整形		39
88	II N 18	92	90	—	(318, 98)	不整形		48
89	II N 18	106	90	(50)	(318, 42)	楕円形		48
90	II N 13, 18	104	104	—	(318, 98)	不整形		48
98	II N 2	98	94	(25)	(315, 90)	円形		48
99	II N 8	118	100	—	(318, 96)	楕円形		50
102	II N 18	122	110	—	(318, 90)	円形		47
104	II N 27	128	112	—	(318, 61)	楕円形		47
109	II N 6, 7	148	128	(20)	(314, 52)	円形		49
111	II R 3, 4	78	75	(25)	(316, 11)	円形		49
128	II N 6, 7	190	159	(24)	(315, 40)	楕円形		49
146	II R 11	95	87	(22)	(316, 10)	楕円形	大塚遺跡中	48
167	II M 18, 23	99	95	(105)	(317, 32)	円形		46
305	I G 20	104	92	(50)	(318, 68)	楕円形		27
311	II M 11, 19	130	120	(31)	(316, 69)	不整形		37
317	I B 9	132	120	(111)	(318, 61)	円形		27
502	II V 17	142	130	(57)	(315, 63)	楕円形		36
503	I B 1	182	151	(29)	(316, 41)	楕円形		36
504	I A 10	(90)	(92)	(132)	(316, 79)	楕円形	底部から遺物(鉄槌, 磁器)	36
505	I A 10	(84)	(82)	—	(318, 11)	円形		36
506	I B 6	(76)	(72)	(20)	(317, 81)	円形		34
507	I B 6, 11	(108)	(103)	(29)	(316, 31)	円形		34
509	II B 9	(80)	(84)	(20)	(316, 57)	円形		34
509	II V 24	88	78	(22)	(316, 26)	円形		39
510	II V 18	(111)	(102)	(19)	(316, 05)	円形		39
511	II V 21	(22)	(20)	(17)	(317, 22)	楕円形	水漏れ?	36
512	II V 20	(102)	(98)	(22)	(316, 30)	円形		36
513	II V 23	(86)	(71)	—	(318, 47)	円形		39
514	II V 24	(96)	(84)	—	(318, 50)	不整形		39
515	I B 1	(92)	(92)	(20)	(318, 60)	円形		29
516	I B 2	(44)	(42)	(20)	(316, 46)	円形		37
518	II Q 24	(184)	(160)	(7)	(317, 75)	円形	水漏れ?	44
519	I B 10 I C 6	(122)	(114)	(20)	(316, 18)	楕円形		37
520	I C 22	86	96	(19)	(317, 00)	円形		33
521	I C 22	(184)	(76)	(12)	(317, 04)	円形		33
522	I A 20	(96)	(88)	—	(318, 38)	円形		31
524	II N 18	(98)	(92)	(18)	(315, 39)	円形		47
525	II 1 13	(112)	(90)	(14)	(318, 94)	楕円形		48
526	II N 11	82	58	(19)	(316, 30)	円形		48
527	II V 22	(84)	(60)	(18)	(317, 72)	楕円形		39
529	I L 21	(22)	(26)	—	(318, 36)	不整形		20
530	I L 22	140	120	(82)	(318, 22)	楕円形		20
531	I G 5	(84)	(84)	(44)	(318, 94)	円形		33
532	I F 8, 13	(180)	(130)	—	(317, 82)	楕円形		37
1024	II E 17	286	242	(84)	(317, 35)	不整形	掘り方	56
1024	IV Y 19	216	204	(270)	(316, 14)	不整形	掘削, 製鋼品, 骨(牛, 猪, 鹿)	56
1029	II D 15	256	204	(306)	(316, 16)	楕円形	骨角製道具(石, 骨)遺物中 骨角製道具(石, 骨)遺物中 骨角製道具(石, 骨)遺物中	58
1108	II J 4	82	84	(72)	(317, 97)	円形		55
1109	II J 3	126	122	(130)	(317, 40)	円形		55
1122	V U 20	146	126	(95)	(317, 95)	円形		61
1127	II J 4	140	144	(148)	(317, 28)	円形		55
1187	IV Y 23	118	118	(224)	(316, 96)	円形	角製道具	52
1286	IV T 12	88	84	(44)	(318, 05)	円形		66
1380	IV T 13	168	166	(202)	(316, 44)	不整形		66
1506	IV T 10	80	79	(46)	(315, 14)	楕円形		74
1506	IV T 19	90	88	(218)	(316, 40)	円形		74
1508	IV T 20	125	98	(144)	(318, 13)	楕円形		77
1509	V P 11	120	116	(280)	(316, 20)	円形		75
1522	V P 4	156	156	(254)	(316, 40)	円形		74
1523	V P 4	162	150	(254)	(316, 40)	円形		78
1531	IV T 24, 25V Y 4	100	104	86	(317, 94)	円形		74
1548	IV Y 3	168	186	214	(316, 06)	円形	遺物中	74
1582	V C 8	160	186	238	(315, 92)	楕円形		102
1676	V M 21	90	88	(247)	(315, 37)	円形		83
1782	V U 11, 14	280	260	(162)	(315, 66)	楕円形		57
1779	II T 18, 23, 24	102	96	(78)	(315, 89)	円形		74
1813	V B 9	(132)	(120)	(170)	(315, 86)	不整形		56
2061	V P 11	(82)	(82)	(147)	(316, 30)	楕円形		75
2502	V P 11, 12	(116)	(104)	(180)	(316, 20)	楕円形		78
2510	V K 10, 18V L 6, 11	(160)	(142)	(180)	(315, 87)	楕円形		89
2511	V K 10	(124)	(117)	(175)	(315, 70)	円形	底部に黒色土層AF A B	85
2519	V C 13, 14	170	160	(307)	(314, 42)	不整形	底部に遺物中	109
2522	V L 3	(160)	(184)	(28)	(317, 48)	円形		99

第24表 古代井戸址一覧表



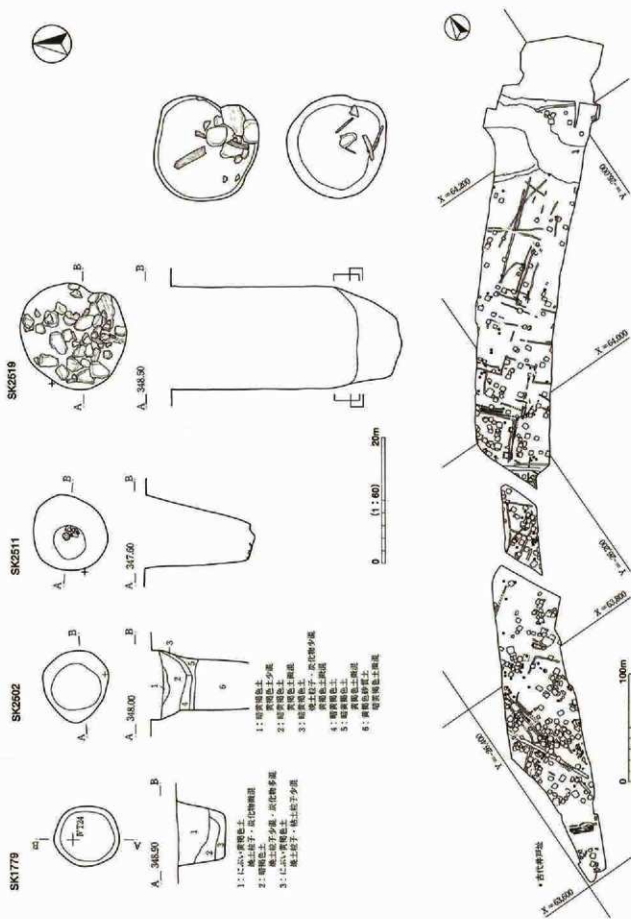


第64図 古代井戸遺構図2 (1:60)









第67図 古代井戸址遺構図 5 古代井戸址分布図

## 7 土坑

本遺跡では数多くのSK（土坑）を検出・調査した。その内、調査の結果、基址や井戸址のように機能・用途が明確になったものを除いて、不明確なものを土坑として一括した。古代に相当すると判断された土坑は342基に上る。ここでは、特徴的なものを幾つか抽出し、説明を加えることとする。

SK19は杏葉甕を出土した土坑として注目される。底面に焼土ブロックを混入する土坑で、同様な覆土を有するSK18が隣接する（第68図）。SK18には壁面に焼土堆積が観察されるが、両者とも坑内で火が使用された痕跡は認められない。両者は、単一土層でありながら底面及び壁面に焼土が含まれることなどから、短時間のうちに人為的に埋め戻されたことが推測される。したがって、両者は開口状態ではなく埋没状態を保つこと、あるいは埋め戻す行為そのものために機能していた可能性が強いと考える。杏葉甕は埋置・埋納の対象物として把握されよう。なお、SK18からはそうした遺物が出土しておらず、その解釈は困難であるが、SK19に付随する施設として捉えておきたい。SK19から出土した土器群は4段階の土器様相を示している。同様に、単一土層で底面等に焼土が確認される土坑にSK1019・1029がある（第72図）。

SK47はSB198（13段階）の石組カマドと接する位置に構築されている土坑で、上面に集石を伴っている（第33図）。集石を構成する際は、SB198の石組よりも若干低い位置に集中しており、礫の分布状況からも差異が認められる。ただし、SK47からも13段階の土器様相を示す土器群が出土しており、両者の先後関係あるいは共存関係については断定できない状況である。仮に共存とした場合、カマド煙道部に属する何等かの施設として認識できるのであろうか。また、SK51は小規模ながら土器片を中心とした多数の遺物が充満していた土坑である（PL21）。狭小な空間に遺物の持つ本来の機能を停止した破片類が詰め込まれることをどのように解釈するべきか。いずれも、今後の検討課題である。

SK123は完形及び完形に近い土器が多数出土した土坑である（第71図）。SB257（11段階）の下面に位置し、SK123からも11段階の様相を示す土器群が出土していることから、あるいはSB257に伴う施設の可能性が考えられる。機能については不明と言わざるを得ないが、同様に完形及び完形に近い土器が出土した土坑としてSK95・113・130があり（第70・71図）、その内SK113はSK123と近接しており、出土した土器群も同様な様相を示すことから、機能もまた同様ではなかったかと考えられる。

SK1017は坑内で火が使用された土坑として注目される（第71図）。他に、SK1026などがこの種の土坑として挙げられる。

SK1021は長軸が173cmと比較的規模が大きく、平坦な底面と鍋底状の断面形を有する竪穴状の土坑である（第72図）。完形に近い大形の土器破片が出土し、それらは7段階の土器様相を呈している。構築された位置が特徴的で、住居址（SB1040 - 6段階）のカマドが構築される壁面上の位置に構築されている（図版60）。同様の分布状況はSK2558とSB1046（9段階）との関係にも見受けられる（第49図）。住居址と土坑の時期的な関係を見ると、前者は土器様相に段階差が認められ、後者の場合は段階差が認められない。前者でも段階差は1段階で、竪穴の埋没が終了し平坦化する以前の段階にこれらの土坑が構築された可能性も考えられよう。そうしなければならぬ何等かの背景を想像したい。また、位置関係は異なるがSK1021・2558と同様に竪穴状遺構と称すべき大形の土坑に、SK44・349・1028・1120・1501・1636・1733がある（第69・71～74図）。これらも完形及び完形に近い大形の土器破片が出土し、SK349・1733では鉄塊・碗型滓が出土しており、鍛冶に関わる施設の可能性も考えられよう。

以上、ここで取り上げなかった土坑についても、様々な属性から機能や性格等を類推することが可能なものがあり、遺構配置や土坑の形態分類を加味した分析が今後必要であり、それによって集落内の空間利用を補完する資料として、また、集落形成の一翼を担う資料としての位置付けが可能となることだろう。

306	数量	規模(m)		形	穴	層土の状況	特記遺物	備考	図録No.
		長	幅						
3	1 F 14	404	117	20	不整形	層状	刀子, 陶製埴	底面に凹み	26
10	1 F 14	126	70	40	楕円形	均整状			26
18	1 S 12	115	114	22	不整形	均整状	第一層, 焼土粒子 炭化物		16
19	1 S 12	89	92	16	不整形	均整状	第一層, 焼土ブロック		16
25	R N7	52	52	25	楕円形	均整状			49
27	R N7	26	23	12	楕円形	均整状			49
28	R N7	25	23	17	楕円形	均整状			49
29	R N7	26	24	16	楕円形	均整状			49
29	1 K 4	162	111	23	不整形	均整状	第一層, 上部に炭化物	底面に凹み	24
31	1 K 8	301	201	25	不整形	均整状	第一層, 炭化物	底面に凹み	22
32	1 K 8	86	83	26	不整形	均整状			22
33	1 K 8	66	66	23	円形	均整状			21
35	1 K 4	42	32	26	楕円形	均整状	第一層, 炭化物		24
38	1 F 15	85	85	12	正方形	均整状	河原町土製品, 磁石	遺物は周囲から出土	26
37	1 F 23	69	46	29	楕円形	均整状	上丁土層, 炭化物		23
38	1 K 4	194	86	21	不整形	均整状			24
39	1 K 4	209	94	29	楕円形	均整状			24
41	R N7	123	92	29	楕円形	すり鉢状		張り出し, 磁石	24
44	R 1 23-24	259	135	22	楕円形	均整状			45
46	R N4	54	54	6	楕円形	均整状			46
47	R N11	113	82	26	楕円形	均整状	上丁土層	釜蓋(厚さ12~13cm)	48
50	R 1 19	79	69	43	不整形	均整状			26
51	R 1	43	41	23	不整形	均整状			26
52	R 2	82	50	17	楕円形	均整状	地質図, 土層片多数	遺物は深さ7~8cm層 1~4cm層	26
58	1 F 17	58	50	47	楕円形	均整状			23
59	1 F 17	92	50	56	不整形	均整状			23
60	1 F 17	79	60	12	不整形	均整状			23
61	1 F 17	82	40	45	不整形	均整状			23
63	1 F 17	88	66	51	不整形	均整状			23
64	1 F 17	142	112	24	不整形	均整状		張り出し, 磁石	23
81	R 1 23	158	138	21	楕円形	均整状	第一層		45
86	R 2 9	154	92	52	楕円形	均整状			46
91	R W4	29	80	19	円形	均整状			43
92	R W4	118	117	26	正方形	均整状			43
93	R W4	116	116	6	円形	均整状			43
94	R 2 24-25, R W4	482	390	23	不整形	均整状			48
95	R W4	164	139	18	不整形	均整状			43
96	R W4-5	227	112	18	不整形	均整状			43
97	R N4	119	74	44	楕円形	均整状(一段様)			43
162	R N7	120	90	12	正方形	均整状			48
167	R M19	109	85	22	楕円形	均整状			48
110	R N17	82	70	23	楕円形	均整状			48
112	R 2 22	48	44	20	楕円形	均整状			47
113	R W5-9	220	192	42	不整形	均整状(一段様)			43
123	R W10, R W6	279	161	29	不整形	均整状			43
124	R W4-5	265	160	19	不整形	均整状			43
126	R W5	147	104	24	不整形	均整状			43
128	R 2 22	58	54	22	楕円形	すり鉢状			47
231	1 C 8	102	72	52	楕円形	すり鉢状			28
232	R W14-19	172	152	26	楕円形	均整状			28
233	R W14	164	146	46	不整形	すり鉢状			28
266	1 G 15, 1 H 11	118	108	26	楕円形	均整状	第一層, 焼土粒子・炭化物		27
215	R W21	129	92	23	楕円形	均整状			27
222	1 C 11	89	60	44	不整形	均整状			35
229	1 C 10	86	49	24	楕円形	均整状(一段様)			23
236	1 C 16	56	50	37	不整形	均整状			23
231	1 C 16	76	52	37	楕円形	均整状			25
232	1 C 16	82	46	12	楕円形	均整状			25
233	1 C 11	106	80	29	楕円形	均整状	第一層, 焼土粒子・炭化物		25
246	R W12-17	126	90	29	楕円形	均整状	第一層		40
247	R W17	209	130	47	不整形	均整状	第一層, 炭化物	陶製埴, シカ角, シカ角 211~12段	40
248	R W16	124	85	19	不整形	均整状			40
249	R W17-18	232	172	56	不整形	均整状			40
528	1 G 22	82	80	23	楕円形	均整状	第一層		49
525	R N6	26	20	12	円形	均整状			49
526	R N6	22	24	16	楕円形	均整状			49
527	R N6	49	20	12	楕円形	均整状			49
528	R N6	24	24	20	楕円形	均整状			49
545	R W9	112	96	19	不整形	均整状	炭化物		43
546	R 1 7-14	86	62	19	不整形	均整状			43
547	1 H 11	81	80	19	正方形	均整状(一段様)	第一層, 焼土粒子		42
547	R N11	56	50	22	楕円形	均整状			42
588	R N11	54	48	9	楕円形	均整状			43
609	R W4	192	103	49	不整形	均整状(一段様)			43
666	1 R 2	47	40	19	楕円形	均整状			23
1081	R 1 17	74	64	27	楕円形	均整状	河原町土製品・炭化物	長形河原町土製品片	43層?
1082	R D15	202	190	56	楕円形	均整状	第一層		46
1085	R D9-10	38	20	22	楕円形	すり鉢状	第一層		48
1817	R V15	118	78	19	楕円形	均整状	第一層, 焼土粒子・炭化物	下部に焼土ブロック集約に分類	46
1818	R V11-16	26	17	14	正方形	均整状	河原町土製品・骨片		64
1821	高森	172	131	48	正方形	均整状	第一層, 焼土粒子・炭化物	[百層]	40
1822	R V10, V16	122	74	42	不整形	均整状	河原町土製品・炭化物	河原町土製品集約/7段階	67
1825	R 1 6	82	50	9	楕円形	均整状	河原町土製品		53
1826	R V4	128	108	18	楕円形	均整状	河原町土製品・炭化物	河原町土製品集約	69

第25表 古代土坑一覧表(1)

50%	位 置	層高(m)		形 状		層土の状況	特記遺物	備 考	図面No.	
		基盤	埋積	掘込	平面形					断面形
1009	IV-7-8-12-13	41	21	20	長方形	第六段	埋積、炭化物流		9段階	59
1020	IV-11	95	98	17	長方形	埋込状	埋積、焼土粒子・炭化物流			54
1020	Ⅱ-1	111	98	10	埋込状	埋込状	第一層、炭化物流			54
1045	ⅡE-24、ⅡE-4	220	193	24	正方形	基状	上下2層、上層に焼土粒子・炭化物流	墨石状石製品	3段階	55
1049	IV-11	112	101	20	長方形	埋込状	第一層、焼土粒子・炭化物流			58
1049	ⅡE-2	75	84	57	埋込状	埋込状	埋積	柱礎、IT004を埋積		51
1064	V-17	112	90	17	長方形	埋込状	埋込状			52
1069	IV-11	111	84	20	円形	基状	第一層、炭化物流	埋積層	大溝溝	55
1076	ⅡE-6	48	80	27	円形	すり鉢状				53
1077	ⅡE-13	120	126	30	円形	埋込状				55
1085	IV-12	120	118	21	円形	すり鉢状	第一層			58
1092	IV-2	85	87	83	埋込状	埋込状	上下2層、上層に焼土粒子・炭化物流 下層に炭化物流			59
1097	ⅡE-25	74	65	12	埋込状	埋込状	第一層			55
1098	ⅡE-25	88	88	38	円形	埋込状	第一層			59
1101	ⅡE-9	104	95	—	長方形	—				59
1103	ⅡE-9	98	72	—	長方形	—				59
1104	ⅡE-14	74	60	—	埋込状	—	第一層			57
1120	IV-21-21-14	208	195	40	正方形	埋込状	第一層、焼土粒子・炭化物流			59
1123	V-17-24	90	76	21	埋込状	埋込状	第一層			64
1124	V-17-24	60	55	30	埋込状	埋込状	第一層			64
1125	V-17-19	42	35	18	埋込状	埋込状	第一層			67
1126	V-17-20	88	50	20	円形	埋込状	第一層			64
1129	V-17-18	84	74	9	埋込状	埋込状	第一層			63
1132	V-17-12	88	72	11	不規則形	基状	第一層			67
1141	V-17-9	40	36	12	埋込状	すり鉢状				67
1142	V-19	28	26	10	埋込状	基状				67
1143	V-19-13	38	34	17	埋込状	埋込状				67
1144	V-19	26	22	10	埋込状	すり鉢状				68
1146	V-21	20	20	20	円形	柱状	第一層			71
1147	V-1	120	100	23	長方形	埋込状	第一層、炭化物流			71
1149	V-16	30	24	17	埋込状	柱状	第一層			54
1150	V-16	32	24	21	埋込状	柱状	第一層			54
1151	V-Q19-15	80	66	87	埋込状	埋込状				73
1152	V-19	32	30	11	埋込状	基状				70
1153	ⅡE-25	32	26	40	埋込状	埋込状				54
1154	V-17-25	34	24	6	埋込状	基状				54
1155	ⅡE-19	36	33	12	不規則形	基状				54
1156	ⅡE-19	94	69	24	不規則形	基状				56
1157	ⅡE-29	154	146	38	長方形	埋込状				52
1162	ⅡE-8	55	29	11	長方形	埋込状				52
1162	ⅡE-8	24	22	9	不規則形	埋込状				52
1164	ⅡE-5	10	7	6	埋込状	柱状				59
1165	ⅡA-1	48	44	14	不規則形	基状				60
1166	ⅡA-1、V-17-1	64	52	15	埋込状	基状				60
1167	ⅡA-1	47	33	22	埋込状	基状				60
1168	ⅡA-2	20	18	15	円形	埋込状				60
1169	ⅡA-2	20	20	12	円形	埋込状				60
1170	ⅡA-2	22	11	12	円形	埋込状				60
1171	ⅡA-2	90	65	29	埋込状	基状	第一層			60
1172	ⅡA-2	28	20	6	円形	埋込状				64
1173	ⅡA-2	49	35	24	埋込状	埋込状				60
1174	ⅡA-2	24	20	12	埋込状	埋込状				60
1175	ⅡA-1-12	124	42	12	長方形	基状				60
1176	ⅡA-5	22	20	19	埋込状	埋込状				60
1177	ⅡA-12	18	18	7	不規則形	埋込状				60
1178	ⅡA-12	24	14	17	埋込状	埋込状				60
1181	ⅡA-13	96	47	17	長方形	埋込状	第一層			60
1182	ⅡA-13	118	24	14	長方形	埋込状				60
1185	V-17-1	262	193	14	不規則形	第六段	第一層			63
1187	V-17-1	82	23	20	円形	埋込状	第一層			63
1189	V-17-2	26	18	13	長方形	埋込状	第一層			63
1189	V-17-2	18	18	14	方形	埋込状				63
1190	V-17-3	26	12	16	長方形	埋込状				63
1191	V-17-3	32	28	11	埋込状	埋込状				63
1192	V-17-3	26	18	5	埋込状	埋込状				62
1192	V-17-3	30	24	24	埋込状	埋込状				64
1194	V-17-3	40	30	5	埋込状	埋込状				64
1195	ⅡE-3	53	72	14	埋込状	埋込状	第一層			
1196	ⅡE-3	120	89	7	埋込状	埋込状	第一層			59
1198	ⅡE-5、IV-21	92	88	8	長方形	埋込状	第一層			52
1199	IV-18	70	62	10	不規則形	埋込状	第一層			58
1200	IV-12	94	49	20	埋込状	埋込状	第一層			52
1201	IV-11-12-16-17	72	62	30	埋込状	埋込状	埋積層			52
1206	IV-21	40	40	9	円形	基状	第一層			51
1207	IV-21	32	32	7	円形	基状	第一層			51
1208	IV-21	20	18	16	埋込状	埋込状				51
1209	IV-21	45	28	14	円形	埋込状	埋積			51
1210	ⅡE-1	40	40	12	不規則形	基状	埋積、1層に焼土粒子・炭化物流			51
1211	ⅡE-1	12	12	33	円形	埋込状	上下2層			51
1212	ⅡE-1	21	31	21	円形	埋込状	埋積			51
1213	ⅡE-1	45	36	12	不規則形	埋込状	埋積			61
1214	ⅡE-1	38	20	12	埋込状	埋込状	埋積			61
1215	ⅡE-1	24	24	6	円形	基状	埋積、2層に炭化物流			61
1216	ⅡE-1	65	60	19	埋込状	基状	埋積、1層に焼土粒子・炭化物流			61
1217	ⅡE-1	100	70	28	長方形	埋込状(二段階)	埋積、1層に炭化物流			58

第26表 古代土坑一覽表(2)



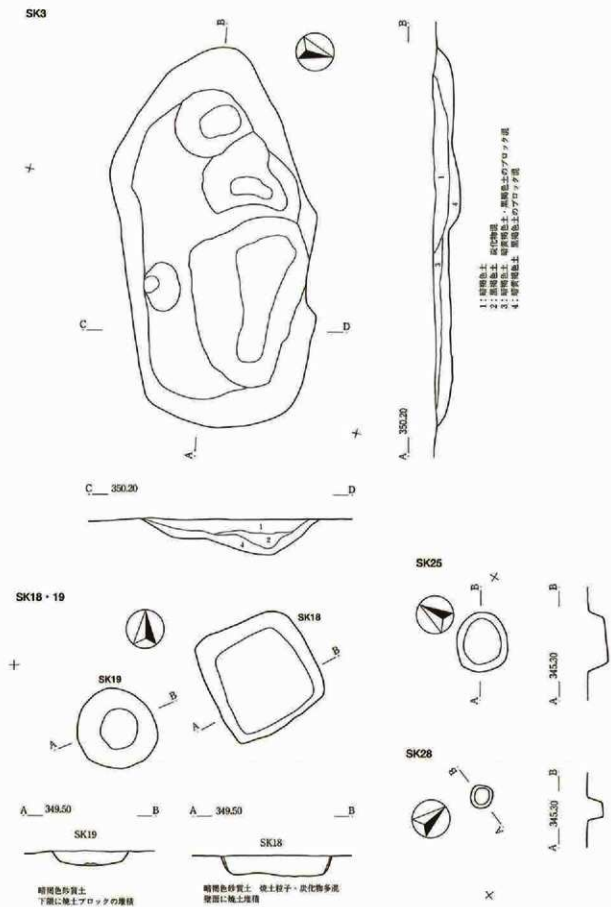
No.	位置	規模(㎡)		形式		掘土の状況	特記述	備考	図面No.
		縦軸	横軸	平面形	断面形				
1219	IVY19	77	71	隅形	柱穴状	埋没、1層に炭化物、2層に粘土板子遺			66
1219	IVY19	33	33	円形	柱穴状	埋没、1層に炭化物、2層に粘土板子遺			66
1220	IVY19	65	41	隅形	柱穴状	埋没、1層に炭化物、2層に粘土板子遺			66
1222	ⅡE8	72	69	不整形	丁字状				66
1222	ⅡE7	54	44	隅形	柱穴状	埋没、1層に炭化物遺			61
1226	ⅡE7	56	56	隅形	柱穴状	埋没、1層に粘土板子・炭化物遺			61
1231	IVY22	24	22	隅形	柱穴状	第一層、粘土板子・炭化物遺			61
1232	ⅡE7	66	66	隅形	瓦状	第一層			61
1233	ⅡE7	65	64	隅形	柱穴状	埋没、1層に炭化物遺			61
1234	IVY22	40	24	隅形	瓦状	第一層			61
1235	ⅡE7	27	25	隅形	柱穴状	第一層、粘土板子・炭化物遺			61
1236	IVX20-25	48	25	隅形	瓦状	第一層			65
1237	ⅡE2	44	25	長方形	瓦状	第一層			59
1238	ⅡE3	72	64	隅形	網盛状	第一層			59
1239	ⅡE2	65	48	隅形	瓦状	第一層			59
1240	IVX20	88	71	隅形	網盛状	埋没、炭化物遺			65
1241	ⅡE2	65	64	不整形	柱穴状	埋没、粘土板子遺			61
1242	IVX20	52	42	隅形	瓦状	第一層			59
1243	IVX20	20	17	隅形	柱穴状	第一層			59
1244	ⅡE8	51	39	長方形	瓦状	第一層、粘土板子遺			59
1245	ⅡE8	65	27	長方形	十字状	第一層			59
1246	ⅡE8	72	67	隅形	瓦状	第一層、粘土板子遺			59
1247	ⅡE8	28	24	不整形	瓦状	第一層、粘土板子遺			59
1248	ⅡE8	77	55	隅形	瓦状	第一層			59
1249	ⅡE6	46	44	隅形	瓦状	第一層、粘土板子・炭化物遺			59
1250	IVY19	18	18	円形	瓦状	第一層			59
1251	IVY11	33	27	隅形	網盛状	第一層、粘土板子遺			59
1252	IVY11	56	52	隅形	瓦状	第一層			59
1256	IVY2	72	58	隅形	瓦状	第一層、粘土板子・炭化物遺			70
1257	IVY1	30	24	長方形	柱穴状	第一層、粘土板子・炭化物遺			70
1258	IVY1	42	24	長方形	柱穴状	埋没、粘土板子・炭化物遺			70
1259	IVY1	22	24	長方形	柱穴状	埋没、粘土板子・炭化物遺			70
1261	IVY6	26	26	円形	柱穴状	第一層			69
1262	IVY6	20	20	円形	瓦状	第一層			69
1263	IVY6	63	45	隅形	瓦状	第一層			67
1264	IVY7	28	28	隅形	柱穴状	埋没、粘土板子・炭化物遺			70
1265	IVY7	24	24	隅形	柱穴状	埋没、粘土板子・炭化物遺			70
1266	IVY8	26	26	長方形	柱穴状	埋没、1・3層に粘土板子・炭化物遺			70
1267	IVY8	65	14	隅形	柱穴状	第一層、粘土板子遺			70
1268	IVY2	34	28	隅形	柱穴状	第一層、粘土板子遺			70
1270	IVY2	20	20	隅形	柱穴状	埋没、粘土板子・炭化物遺			70
1271	IVY10-15	124	122	隅形	瓦状	第一層、粘土板子遺			69
1272	IVY15	26	26	隅形	柱穴状	第一層、粘土板子・炭化物遺			68
1273	IVY2	24	24	隅形	柱穴状	第一層			70
1274	IVY2	28	18	隅形	柱穴状	第一層、粘土板子遺			70
1275	IVY11	40	40	隅形	瓦状	第一層、炭化物遺			65
1277	IVY11	26	24	隅形	瓦状	第一層			65
1278	IVY11	24	24	隅形	瓦状	第一層			65
1279	IVY11	26	22	隅形	柱穴状	埋没、炭化物遺			65
1281	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1282	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1283	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1284	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1285	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1286	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1287	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1288	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1289	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1290	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1291	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1292	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1293	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1294	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1295	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1296	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1297	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1298	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1299	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1300	IVY11	26	26	隅形	柱穴状	埋没			65
1301	IVY8-7	40	38	隅形	柱穴状	第一層			71
1302	IVY7	20	22	隅形	柱穴状	第一層			71
1303	IVY7	20	17	隅形	柱穴状	第一層			71
1305	IVY7	26	26	隅形	瓦状	第一層			69
1306	IVY7	21	25	隅形	瓦状	第一層			69
1307	IVY9	63	47	不整形	瓦状	第一層			66
1312	IVY8	26	26	隅形	柱穴状	第一層			69
1343	V 117	66	66	隅形	瓦状				95
1344	V 117	64	58	隅形	瓦状				95
1351	NT2	160	98	隅形	網盛状	第一層、粘土ブロック遺			74
1353	NT4	32	32	隅形	柱穴状	第一層			74
1354	NT28	72	62	隅形	網盛状	第一層			74
1357	NT18-20	162	85	不整形	網盛状	埋没			75
1324	V K11	160	152	長方形	網盛状				85
1325	V K20、V 16	116	95	隅形	瓦状				82
1347	IVY4	104	70	隅形	瓦状				69
1350	V Q2	118	84	隅形	網盛状				79
1366	V Q16	88	58	隅形	瓦状				76
1369	V C18	178	132	不整形	瓦状				100
1391	V Q2	88	72	隅形	網盛状				79
1392	V C13	54	48	隅形	網盛状				103

第27表 古代土坑一覧表(3)

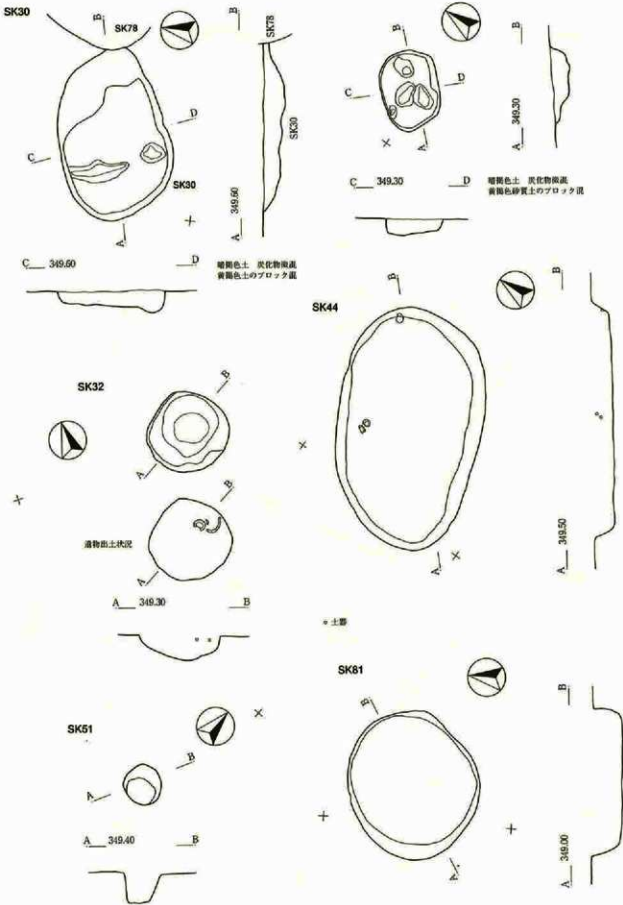


5826	位置	標高(m)		形		土質	土の状況	特記遺物	備考	図例
		表輪	裏輪	平面形	断面形					
1629	V C13	49	44	20	横四角	横溝状				62
1630	V L1-2	429	170	9	不整形	横溝状	第一層、焼土粒子、炭化物遺	7段階		87
1641	V L2	119	119	20	円形	溝状	第一層、焼土粒子			81
1651	V H24	129	95	19	横四角	溝状				91
1659	V H11	168	92	23	横四角	溝状				93
1661	V H19	148	112	30	横四角	横溝状				94
1665	V H19	116	110	42	方形	横溝状(仁溝状)				94
1666	V H20	64	62	18	円形	横溝状				95
1667	V H20	66	66	14	横四角	横溝状				95
1669	V L11	164	150	10	不整形	溝状	粘土塊			95
1669	V L11	197	74	11	不整形	横溝状	塊石、焼土粒子、炭化物遺			95
1720	V L5-10	160	84	20	不整形	横溝状(仁溝状)	第一層			87
1721	V M7	120	126	42	不整形	横溝状(仁溝状)	第一層、焼土粒子、炭化物遺	鉄線、陶製物、ウツ骨		88
1777	V Y2	47	42	24	円形	柱穴状				69
1778	V Y2	134	124	23	横四角	横溝状				74
1780	V T19	126	128	51	円形	横溝状	第一層、焼土粒子			74
1781	V T29	65	66	24	横四角	横溝状	溝渠			74
1782	V Y2	46	32	24	横四角	柱穴状	第一層			69
1789	V T29	46	26	20	横四角	柱穴状	第一層			74
1867	V K17	24	22	16	横四角	柱穴状	第一層、焼土粒子			81
1868	V K18	53	34	11	横四角	溝状	第一層			88
1871	V P1	20	26	16	横四角	柱穴状	上下2層			81
1888	V Q5	154	77	35	横四角	横溝状				89
1889	V K9	116	80	32	不整形四角	溝状				89
1928	V M12	53	62	—	横四角	—				88
2024	R J7	24	20	8	横四角	柱穴状				55
2026	R J7	20	26	8	円形	柱穴状				55
2027	R J7	20	16	4	円形	柱穴状				55
2028	R J9	19	19	12	円形	柱穴状				55
2029	R J9	20	20	12	横四角	柱穴状				53
2030	R J3	20	22	—	横四角	—				55
2031	R J3	14	12	16	円形	柱穴状				55
2032	R J3	24	22	16	円形	柱穴状				55
2033	R J3	49	28	26	横四角	柱穴状				55
2034	R J3	20	24	8	横四角	柱穴状				55
2035	R J1-3	20	20	18	円形	柱穴状				55
2036	R E23	24	24	24	円形	柱穴状	第一層、焼土粒子			59
2037	R E22	24	27	18	横四角	柱穴状				55
2038	R J2	20	27	21	横四角	柱穴状				55
2040	R E22	20	16	12	横四角	柱穴状				55
2041	R E16	20	20	16	円形	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2041	R E16	16	16	16	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2043	R E17	27	11	12	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2044	R E17	20	20	16	横四角	柱穴状	第一層			56
2046	R J2	24	31	12	円形	柱穴状				55
2047	R J3	20	19	7	円形	柱穴状				55
2048	R J4	20	24	6	横四角	柱穴状				55
2049	R E22	20	20	20	横四角	柱穴状	第一層			56
2050	R E17	24	18	6	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2051	R E17	16	10	10	円形	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2052	R E17	40	24	12	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2053	R E17	24	18	14	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2054	R E17	40	20	12	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2055	R E17	20	20	16	円形	柱穴状	第一層	ST101階段		56
2056	R E17	20	20	12	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		57
2057	R E17	20	24	14	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		57
2058	R E4	20	22	—	横四角	柱穴状				59
2059	R E4	20	22	—	横四角	柱穴状				59
2059	R E4	20	22	—	横四角	柱穴状				59
2060	R E3-4	40	28	—	横四角	—				59
2061	R E2	27	24	—	横四角	柱穴状				59
2062	R E4	23	24	—	横四角	柱穴状				59
2063	V Y18	46	24	—	横四角	柱穴状				65
2064	V Y18	40	30	—	横四角	柱穴状				65
2065	V Y17	26	20	—	横四角	柱穴状				65
2067	V Y17	26	24	—	横四角	—				65
2069	V Y12	63	62	—	横四角	—				65
2069	V Y12	55	64	—	横四角	柱穴状				65
2070	V Y12	20	22	—	横四角	柱穴状				65
2071	V Y11	41	20	—	横四角	柱穴状				65
2072	V Y11	31	26	—	横四角	柱穴状				65
2073	V Y11	20	18	—	円形	—				65
2074	V Y11	20	22	—	横四角	柱穴状				65
2075	V Y11	24	20	—	横四角	横溝状				65
2108	V Y19	123	70	58	長横四角	十字溝状	溝渠			106
2109	V Y19	46	40	21	横四角	十字溝状				106
2110	V Y19	105	82	12	横四角	横溝状	第一層			106
2120	V T23-24	174	152	12	横四角	横溝状	第一層、焼土粒子			74
2147	V C24、V H4	102	90	—	横四角	—				88
2225	R E17	40	20	12	横四角	柱穴状	第一層			57
2231	R E17	24	16	20	横四角	柱穴状	第一層			56
2250	V K15	116	92	68	横四角	横溝状				86
2256	R E17	50	20	16	横四角	柱穴状	第一層	ST101階段		57
2257	R E12	19	19	8	円形	柱穴状				86
2338	R Y4	242	121	61	長方形	壁穴状				69
2359	R E2	70	55	12	横四角	柱穴状				69
2360	R Y2	158	51	62	長方形	横溝状	上下2層、炭化物遺、土層に焼土粒子			69

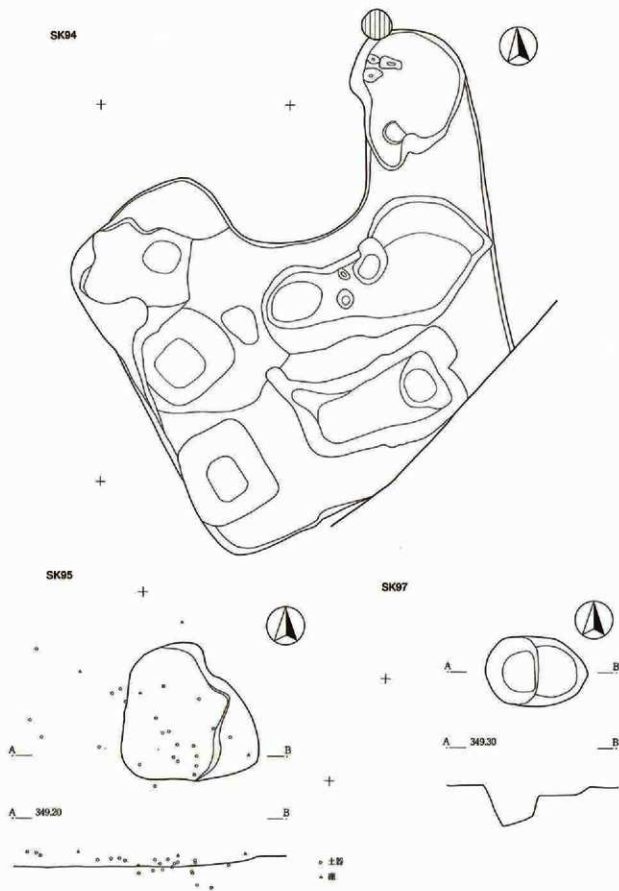
第28表 古代土坑一覽表(4)



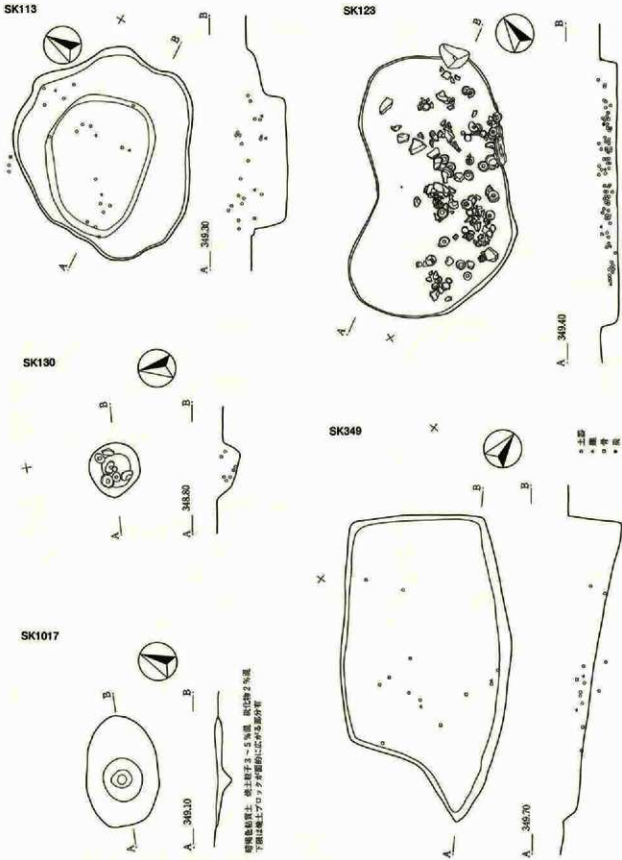
第68図 古代土坑遺構図1 (1:40)



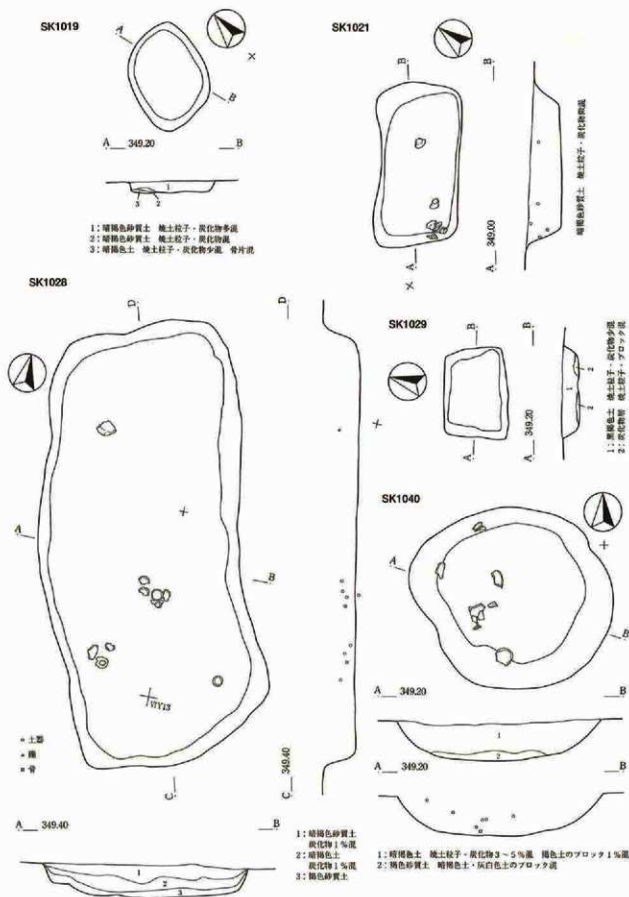
第69図 古代土坑遺構図2 (1:40)



第70図 古代土坑遺構図3 (1:40)



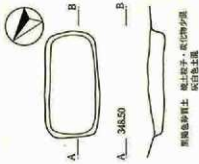
第71図 古代土坑遺構図4 (1:40)



第72図 古代土坑遺構図5 (1:40)



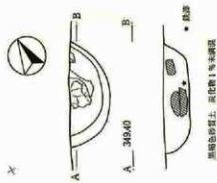
SK1059



黒褐色砂質土 焼土粒子・灰化物少量  
灰白色土層

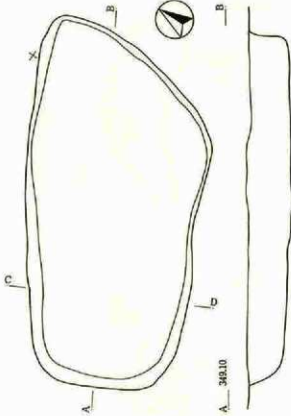
X

SK1069



黒褐色砂質土 灰化物・焼土少量

SK1120

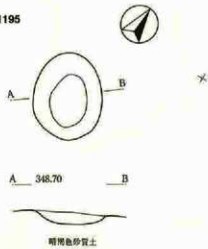


C 349.10



黒褐色砂質土 焼土粒子・灰化物多量

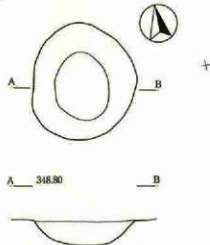
SK1195



A 348.70 B

暗褐色砂質土

SK1271

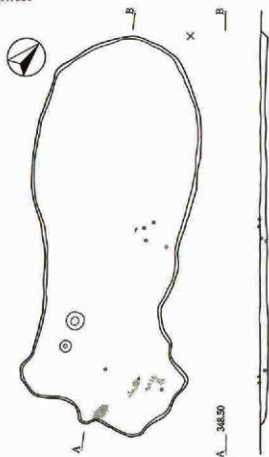


A 348.80 B

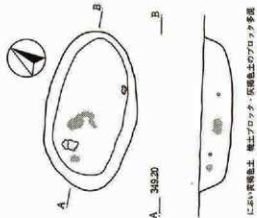
暗褐色砂質土 焼土粒子混

第73図 古代土坑遺構図6 (1:40)

SK1636



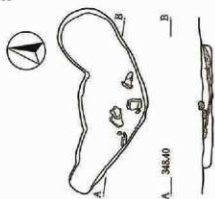
SK150



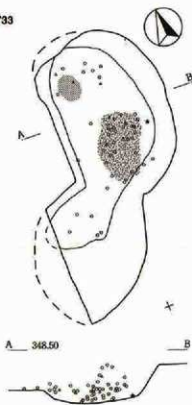
に深い黄褐色土・灰褐色土のプロット等混

厚褐色土 雑土粘土少量 灰化物質

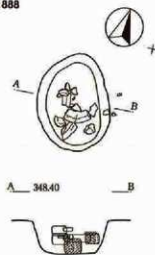
SK1669



SK1733



SK1888



- 土層
- 溝
- 穴
- 瓦片

第74図 古代土坑遺構図7 (1:40)

## 8 河川址及び築状遺構

調査区北端部の山裾(⑧区)で河川址が検出された。西地区でも弥生時代の河川址(SD100・101)を調査しており、古代面の調査でも同様にSD102という遺構番号を付し、調査を進めた。その結果、SD102は縄文時代後期頃から古代・中世に至るまで、南東方向から北西方向に向けて脈々と流れていた河川址であることが明らかとなった。また、SD102から分流するSD1161の存在や、近世以降に暗渠が築かれていたことなども調査を進めていく上で明らかとなってきた。なお、当時からの水流の痕跡として、本遺跡北西方向の金井山山麓には、金井池が現在でも残り、当地域のオアシス的な存在として親しまれている。

SD102の調査は工程上、3次にわたって実施された。以下、各調査ごとに概要を記すこととする。

## (1) 平成元年度調査区(工事用道路部分)

第81図及び第80図に示した部分が最初に調査された地点で、多量の流木とともに古代に属する土器片や鉄斧(図版267-134)が出土した。また、河床より1段高まったテラス状の平坦部には人頭大の角礫が集中しており、人為的な遺構(施設)の存在を推測させた。しかし、狭い範囲での調査だったこともあり、調査面が深く、豊富な湧水や安全面での配慮等から、十分な調査が実施できなかった。

## (2) 平成2年度調査区(⑧-2区)

第78図～第80図及び第82・83図に示した部分が相当する。ここでは多量の流木とともに古代の土器片や金属製品、曲物・人形などの木製品の他、獣骨や種実・木の葉などの植物遺体、昆虫遺体、貝などの所謂自然遺物が多量に出土した。この内、自然遺物については、いずれも偶然の発見であり、目的意識を持った計画的なサンプリング等は実施できなかった。一部を専門家に同定・鑑定依頼し、その成果については別に報告した(本遺跡報告弥生・総論8)。

遺物の取り上げに際しては、層位ごとと3次元ドットを併用した。しかし、基本土層の設定を調査区北端部のみでしかできなかったこと、細分化された基本土層であったことなどから、基本土層との対比が曖昧なものとなってしまい、十分な成果を挙げるのができなかった。加えて、主たる遺物が保存処理を要するものであったため、遺物番号及び遺物台帳が複数介在し、遺物出土状況の把握の困難さに一層の拍車をかける結果となってしまった。また、河川址という性格上、層界部出土の遺物についてはどちらの時代に帰属するかを十分検討する間もなく遺物の取り上げがなされたため、特に木製品については、錯綜してしまった。調査上の問題点として記すとともに、大いに反省するところである。

こうした出土遺物の他に、この部分で最も注目されるのは築状遺構の検出である(第82～84図)。これについては後述するが、流路の中央部で、木組みに近接して重畳する網代が検出され、その上流部で流水を遮る方向に打ち込まれた杭列が検出されたことから、築と想定した。

また、重機で移動するほかないような巨岩が出土しており(第79図)、その周辺、特に川岸に近い部分に7～8段階に相当する食器形態の土器片が集中出土しており、何等かの祭祀行為が行われた可能性が考えられる。河川址内からは斎串・人形が出土しており、関連する可能性も指摘されよう。

なお、前回の調査で検出された集石部は今回の調査区では検出されず、結局、集石部の性格及び機能について明らかにすることはできなかった。

## (3) 平成3年度調査区(⑧-3区)

第76・77図に示した部分が相当する。大小の礫が多数出土したことが特徴的で、合わせて多量の流木・

古代の土器片・木製品・金属製品が出土している。前年度調査区との境界部からは網代の断片が出土しており、築状遺構廃絶後も流水していたことを明確化する資料となっている。とはいえ、河床から出土した大量の大小の礫の存在は、これまで調査してきた地区の河床と著しく異なっており、同一の河川とは考えられない程である。この地区は、山麓斜面部に平行する位置で流路があり、最も斜面部に近づく部分でもある。したがって、これらの礫については、斜面部からの転石として把握しておきたい。

また、この地区では弥生時代から古代に至る間に、河床の位置が北東方向に移動していることが明らかとなっており、流速・水量等に変化があったことが想定されよう。

#### (4) 築状遺構について

木組みは、二又に組んだ交差部の下側に横木を渡すという手法で組まれていたと考えられ(第83図)、こうした組み方は近畿地方の遺跡で検出・報告されている護岸目的の木組みと類似する。しかし、今回検出された木組みは流路の中央部に位置するため、流水の堰き止め、または緩和が目的であったことを示していると考えられる。また、民俗例ではあるが、福島・新潟県にまたがる只見川上流域の鱒池に伴う「カリヤス」(佐々木1997)の木組みと本例は酷似しており、当然のことながら、木組みの手法だけでその機能を判断することはできないだろう。

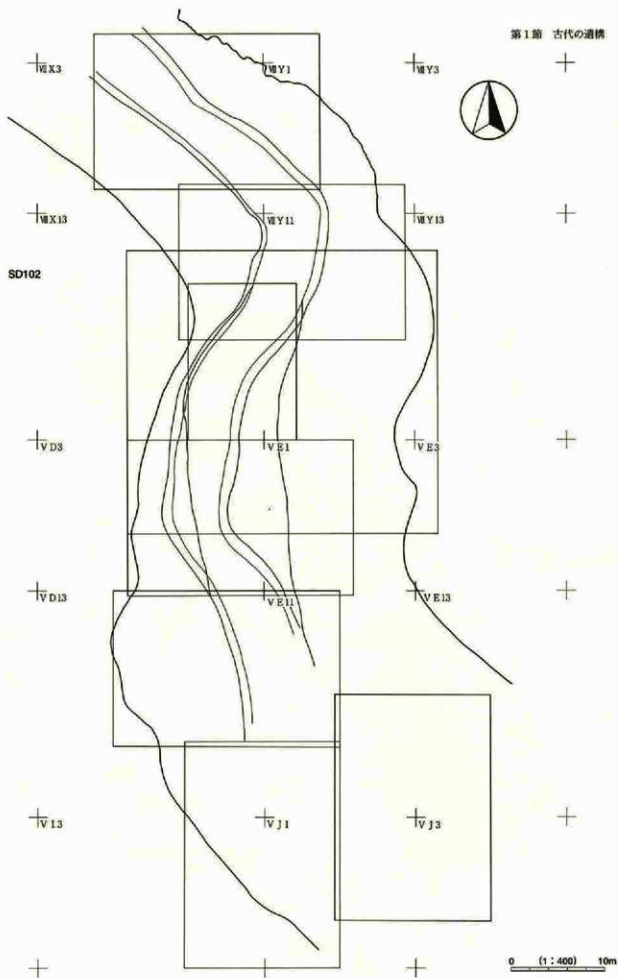
網代は4枚重なっており、それぞれの間に骨組みとも言うべき木が渡されていた(第84図)。したがって、4枚一組で、比較的強度を保った状態で使用されていたことが想定される。木組みの前面(上流側)に位置しており、川魚捕獲の場として、網代最下部の木とともに木組み上に、ある程度傾斜を持って流路中に設置されていたことが想像される。なお、網代については部分的にウレタンフォームで固定した後、流路から切り離し、別途、調査を進めた。したがって、第84図で示した網代から、網代の面積等を復原することはできず、網代の全体像の復原という点では、調査に不手際があったことは否めない。

杭列はおおよそ5mの範囲にわたって打ち込まれており、遺存状況の良好な部分では、割り竹状の細く薄い部材を杭頭で交互に挟むことで連結している様子が窺え(第82図)、流路変更を意図した施設であったことが想定される。杭列と先の木組みとは約16m離れており、この距離が適正なのかどうかは判断しかねるが、河川の流速や水量との関係から選択された位置と捉えておきたい。

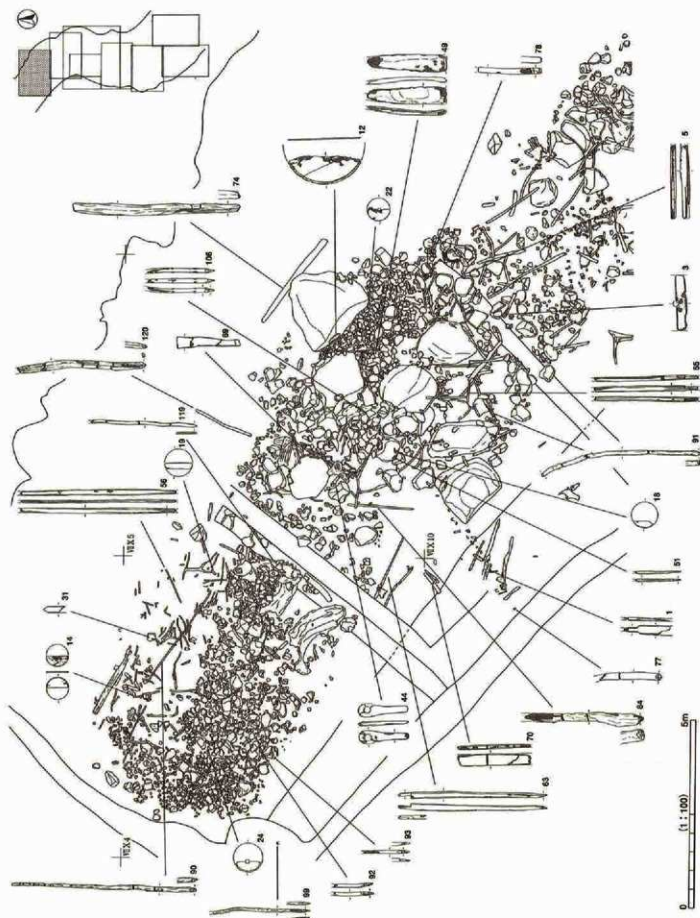
また、土壌の珪藻分析から、SD102は弱アルカリ性を呈した比較的流速の速い流水の河川であったことが推測されており、水の汚濁状況(水質)についても比較的清浄な河川であったことが示されている。古代の住居址からは漁網に用いられたと考えられている土錮が出土しており、SB76(13段階)からは魚の椎骨が出土するなど、漁業が生業の中に位置づいていたことが理解される。そうした意味で、SD102は格好の生産域であり、築を設置する好適の場として選択された、または築池に適した流水環境の河川であったことが想定されよう。

なお、木組み内から出土した土器から1段階前後の土器様相が把握されている。したがって、本址の時期については、1段階前後を上限とすることができ、施設の性格状、使用期間についてもその時期を大きく逸脱することはないものと考えられる。

以上、木組み・網代・杭列の三者に有機的な関連があったものとみなし、三者を総体として築と把握したい。ただし、今回築状遺構として報告するのは、三者の関連を確証付けることができないこと、漁法として本施設が築に相当するかどうかの判断材料に欠けることによる。今後、類似の増加を期待することはもちろんのこと、民俗例等との比較検討も含め、さらに資料を積み上げていきたい。

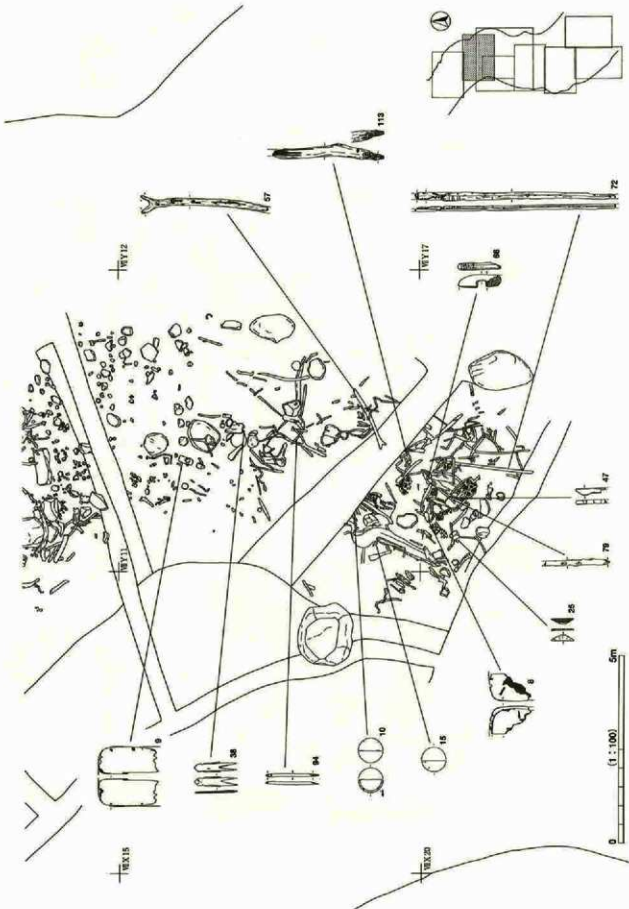


第75図 古代河川址割付図

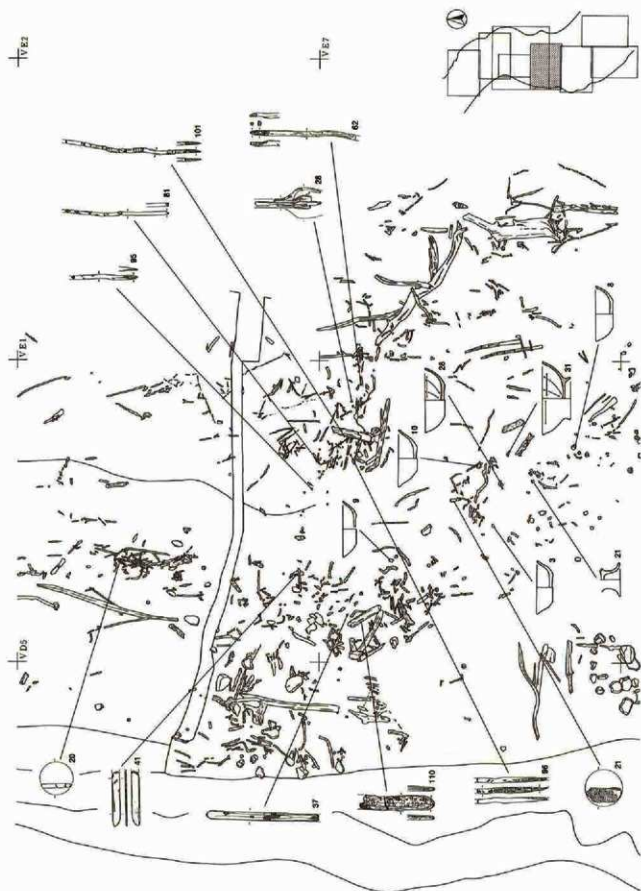


第76図 古代河川址遺物出土状況図1



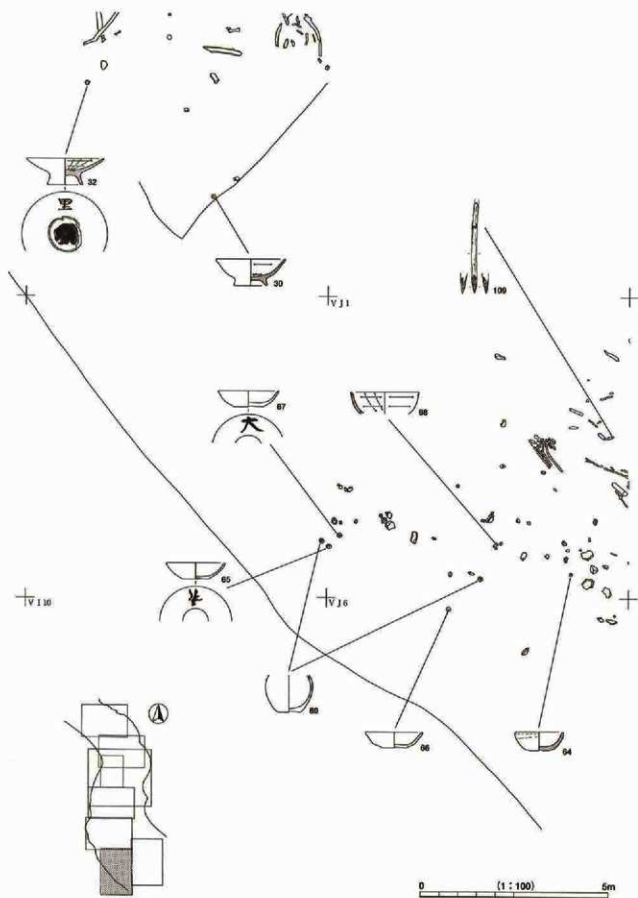


第77図 古代河川址遺物出土状況図2

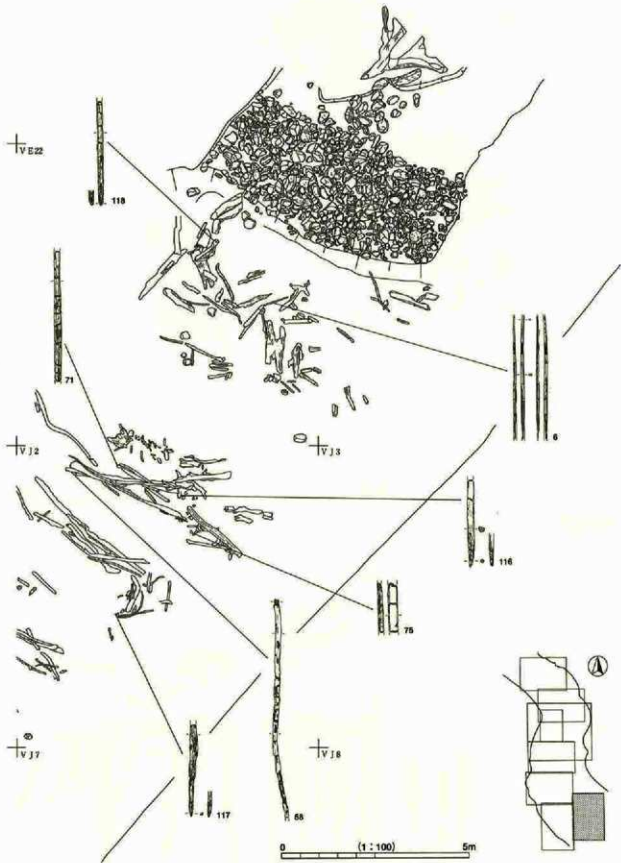


第78図 古代河川址遺物出土状況図3

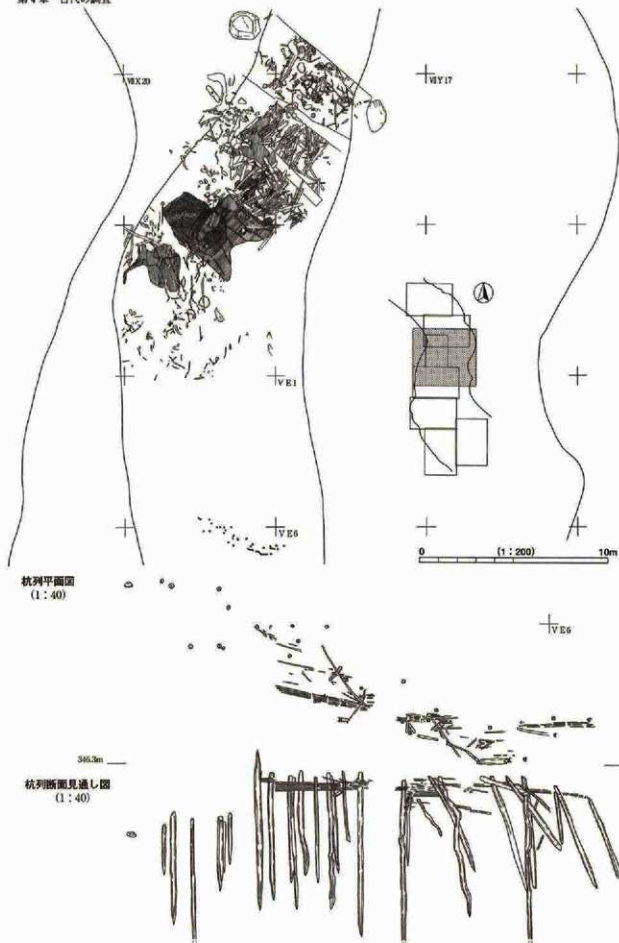




第80图 古代河川址遺物出土状況図 5

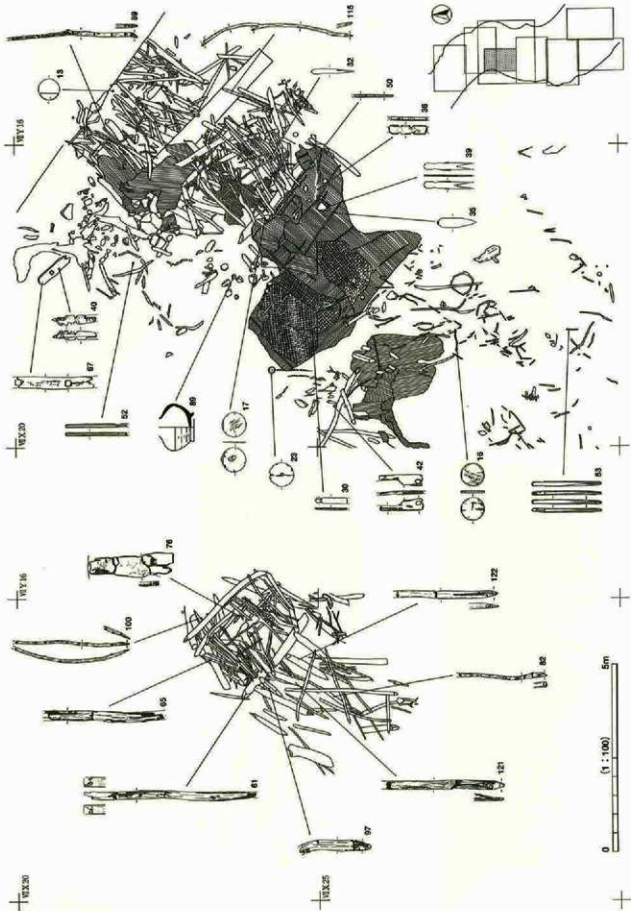


第81圖 古代河川址遺物出土状況図6



第82図 古代河川址内築状遺構1





第83図 古代河川址内築状遺構 2

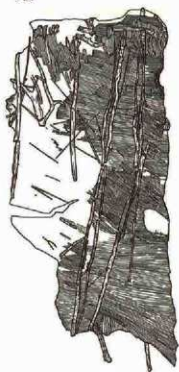
1面



2面



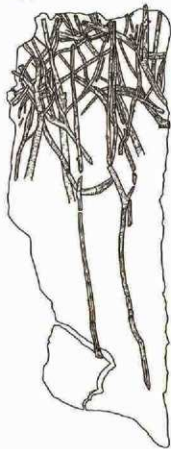
3面



4面



5面



0 (1:20) 1m

第84図 古代河川址内築状遺構 3

## 第2節 古代の遺物

### 1 土器

#### (1) 概観

##### ア 土器の事実記載について

本遺跡では、400軒にのぼる竪穴住居址を初めとして、溝址・井戸址などといった古代遺構が数多く検出され、当然のことながら土器の出土量も膨大で、加えて河川址、遺構外の包含層などから出土した古代の土器を合わせると天文学的な数字がはじき出される結果となった。遺物点箱数にして数千箱という、当センターでもこれまで例を見ない出土量であった。こうした膨大な量の土器の資料提示を、限られた紙幅及び整理期間のなかで行うために、整理段階から資料の選択を余儀なくされた(第1章第2節)。そうした事情を踏まえた上で、実測図と文章記載、遺構ごとの出土土器構成表の三者で、本遺跡出土の古代土器の資料提示を行うこととした。

実測図では土器の種類・法量・調整などを示し、文章記載及び出土土器構成表で実測図に示せなかった情報を中心に必要最小限の記述を行った。なお、出土土器構成表では、土器分類の細別にしたがって、器種それぞれの推定個体数と個体数の構成比率、実測図番号等を示した。また、出土量が豊富で特徴的な遺構の食器については、法量分布や特定の器種の構成比率等を示した。

##### イ 土器の分類

これまで蓄積された古代土器の研究結果を踏まえた上で、その素材・製作技法から以下のように分類し、「土器の種類」と称する。さらに、器形から以下のように分類し、「器種」と称した。また、土器の用途から、食器形態・煮炊形態・貯蔵形態の三者に分類した。

###### 〈土器の種類〉

土師器 : 酸化焙焼による軟質赤焼土器。非ロクロ調整とロクロ調整がある。

黒色土器A : ロクロ調整及び非ロクロ調整の土師器の一種。内面あるいは内外面にヘラ磨きが施され、内面のみ黒色処理されるもの。

黒色土器B : ロクロ調整の土師器の一種。内外面にヘラ磨きが施され、内外面とも黒色処理されるもの。

須恵器 : 還元焙焼による硬質灰色土器。酸化焙焼によるものや灰白色軟質の焼き上がりを呈するものもある。いずれも、ロクロ調整と窯による焼成によっている。

灰釉陶器 : 灰釉を施す硬質の陶器。

山茶碗 : 灰釉陶器と同一の焼成であるが、無釉の陶器。

緑釉陶器 : 鉛釉を施す硬・軟質の陶器。

輸入陶磁器 : 中国製の青磁・白磁など。

土師器と黒色土器Aに関しては、内面のヘラ磨きと黒色処理の関連で分離に曖昧な部分が生じてしまった。それは、黒色処理はされるがヘラ磨きが施されない土器があり、ヘラ磨きは施されるが黒色処理はされていない土器の存在である。後者については、二次焼成の結果、黒色部が酸化・消失してしまう可能性も考えられる。また、これらの土器が時期的に限定される傾向も窺える。したがって、種類を新たに設けることも検討したが、周囲の遺跡の状況などを考慮に入れた上で今後の検討課題としておきたい。なお、

今回の報告では黒色処理を優先的条件として分別をしている。

また、須恵器の内、軟質須恵器については、更埴市屋代遺跡群の報告において検討がなされているが、本遺跡の場合、焼成・色調とも漸移的に軟質化・白色化する傾向が窺え、どこに基準を置かずか判断ができない状況である。加えて、完形品または大形破片の出土も少ないという資料的な制約もあり、極端に言えば軟質須恵器のメルクマールは黒斑のみということになってしまう状況である。したがって、今回の報告では明確なものについてのみ個別に扱う場合もあるが、出土土器構成表などの基本的な資料提示に際しては一括して須恵器として扱うこととする。

#### 〈器種〉(第85～89図)

土器の器種については、土器の種類ごとの分類であったり、用途別種類ごとの分類であったりと研究者によって異なっているのが実情と言えよう。そうした煩雑さを免れるために、当初、基本に立ち返って器形を用いて網羅的に分類を試みようとした。しかし、土師器の甕と須恵器の甕、あるいは須恵器の甕と壺のように、用途や器形という概念を飛び越えてその呼称は一般化している。これらを再編することは、かえって混乱を招くことが必定である。したがって、今回の報告では以下のように、土器の用途別に器形を基に分類することとした。

#### 食器形態

杯A：ロクロ調整の杯で、体部が直線的に開く。分量により、I・IIに分けられる。IIは時期によりさらに細分・分化する。底部の調整には、①ヘラ切り未調整、②手持ちヘラ削り、③静止糸切り未調整、④回転糸切り未調整などがある。

杯B：箱形の体部に高台を付した形態の杯。分量により、I・II・III・IV・Vに分けられる。

杯D：非ロクロ調整の丸底の杯。

杯E：非ロクロ調整の浅い盤状の杯。口径は杯Dに比べ大きい。

杯F：非ロクロ調整の杯で、体部下半に稜を持つ。

杯蓋A：内面に返りがつき、天井部に扁平な宝珠形のつまみがつくもの。

杯蓋B：口縁端部を折り曲げ、天井部に扁平な宝珠形のつまみがつくもの。

杯蓋C：口縁端部を面取りし、天井部は環状のつまみがつくもの。

椀：ロクロ調整の有台の椀。体部が直線的に開くものと内湾するもの、腰が強く張るものなどがある。時期により大小の分量が認められる。

皿A：ロクロ調整で体部が直線的に開く扁平な皿で、高台をつけないもの。

皿B：皿Aに高台がつくもの。

皿C：杯Aを上から押しつぶしたような扁平な皿。高台はつかない。

耳皿：皿Aの口縁部をつまみあげたもの。有台と無台のものがある。

段皿：内面に明瞭な段がつけられる、いわゆる段皿。

折縁皿：口縁端部を折り曲げる、いわゆる折縁皿。

盤A：ロクロ調整で口径が25cm以上ある大形の器で、高い脚台がつく。

盤B：長く外傾する高台がつき、上部は身の浅い椀状もしくは皿状の器。時期により大小の分量が認められる。

盤C：浅い体部で、口縁部が短く折り返されたように立ち上がる。やや高めの高台が付される。

高杯A：非ロクロ調整で、杯Dや杯Eに脚台がついたもの。

高杯B：ロクロ調整で、浅めの杯部に脚台がついたもの。

鉢：ロクロ調整で、口径が18cm以上の大形の器で、高台はつかない。杯Aと相似形のものや口縁部

が「く」字状に折り返されるものなどの形態がある。

#### 煮炊形態

**長胴形甕**：口径より器高の方が大きい甕で、輪積み成形のもの・ロクロ調整が見られるものを一括する。器面の調整はハケ目・ヘラ削り・ナデ・タタキがあり、またそれらが組み合わさるものもある。

**浅鉢形甕**：口径より器高の方が小さい甕で、ロクロ調整を行う。器面の調整は長胴形甕に準ずる。

**球胴形甕**：形態の全容を知るものはないが、口径と器高の大きさが同じかやや器高の方が大きく、最大径が胴部にある球形胴の甕。器面の調整は長胴形甕に準ずるが、ヘラ磨き手法を持つ点、特徴的である。

**武蔵甕**：体部及び底部外面をヘラ削りして薄手に仕上げた甕で、関東地方に分布の主体を持つ武蔵型甕である。

**小形甕**：体部内面をロクロ調整する小形の甕。非ロクロ調整の長胴形甕との対比で非ロクロ調整の小形の甕も含む。体部及び底部外面の調整は長胴形甕に準ずる。

**羽釜A**：体部上半部に鐮状の突帯を付したもので、胎土が粗く厚手。平底・丸底の両者がある。体部の調整にはナデ・ヘラ削り・タタキがある。

**羽釜B**：体部上半部の鐮状の突帯は全周せず、単位性をもって付されるもの。胎土が粗く厚手で、器面の調整は羽釜Aに準ずる。

**足釜**：体部上半に獸脚状の脚部が3本付されるもので、脚部と体部の接合面より上位に鐮状の突帯が付されるものと付されないものがある。

**羽釜形甕**：形態は羽釜Aの底部を抜いたもので、胎土が均一な点、羽釜Aと区別される。

**牛出形甕**：底部開口部が甕の口縁部のように「く」字状の形態を呈する甕。体部上半に瘤状の把手が付されるものや、体部下半の括れ部に穿孔があるものがある。胎土は均一で精選されている。当センターで報告した中野市牛出遺跡から出土した甕と同様な器形を持つことから便宜的にこの名称を用いた。

#### 貯蔵形態

**長頸甕**：体部から細い頸部が直立気味に長く伸びる甕。体部の形態や口縁部形態などにより細別が可能である。

**短頸甕**：体部から短い頸部が直立気味に伸びる甕。体部の形態や高台の有無・口縁部形態などにより細別が可能である。

**突帯付四耳甕**：平底の大形の甕で胴部に突帯を回し、耳状の突起を4単位付すもの。

**查蓋**：口縁端部が直立し、天井部に宝珠形のつまみがつくもの。

**フラスコ瓶**：球状の体部を形作った後、向きを変えて頸部を取り付けて製作した甕。

**平瓶**：扁平な体部で、口縁部を天井の一方の端に付すもの。一般的呼称に従う。

**横瓶**：横に長い俵形の体部の横腹に短い口頸部を付するもの。一般的呼称に従う。

**広口瓶**：一般的呼称に従う。

**小瓶**：一般的呼称に従う。

**甕**：卵形の体部に直立または外反する口頸部を付するもの。口頸部の形状や長さ、貼付される把手や突起などの要素により細分が可能である。

**鉢**：小さめの底部から体部は直線的に開く。頸部で緩やかに締まって口縁部で外反する。ロクロナデ調整で薄手である。



## ウ 土器の段階区分

住居址の切り合い関係を重視することは言うまでもないが、住居址出土の土器、特に杯Aの種類や構成比率及び法量等に注目し、段階区分を以下に行った。なお、詳細については後述する。

1段階：食器形態の中では、非クロコ調整の土師器・黒色土器Aの杯D・Fが主体の段階。

2段階：杯Aは須恵器が主体で、その底部調整は回転ヘラ切り・手持ちヘラ削りの段階。

3段階：杯Aは須恵器が主体で、その底部調整は回転ヘラ切り・回転糸切り未調整が併存する段階。

4段階：杯Aは須恵器が主体で、その底部調整は回転糸切り未調整がほとんどを占める段階。

5段階：杯Aは黒色土器Aと須恵器で構成され、黒色土器Aが30～60%を占める段階。

黒色土器A杯Aの底部調整は75%以上が手持ちヘラ削りで、口径と器高の比率が3：1以下に集中する。

6段階：杯Aは黒色土器Aが主体で、その底部調整は回転糸切り未調整が60%以上を占める段階。

黒色土器Aの杯Aは、口径と器高の比率がほぼ3：1を示し、見掛け上深い印象を与える。

土師器の盤Aが出現し、黒色土器Aの碗が定着する。灰軸陶器を伴う。

7段階：杯Aは土師器・黒色土器A・須恵器で構成され、土師器が40～70%を占める段階。

黒色土器A杯Aの底部調整は回転糸切り未調整が90%以上を占め、口径と器高の比率が3：1以下に集中する。土師器碗が出現し、黒色土器A碗は大小2法量に分化する。灰軸陶器を伴う。

8段階：杯Aは土師器と黒色土器Aで構成され、土師器が70～80%を占める段階。

土師器の杯Aは、口径が11.5cmと14cmに集中し、杯A IIに法量分化の傾向が窺える。

土師器の盤Bが出現し、灰軸陶器を伴う。

9段階：杯Aは土師器が主体で、口径が11cmと14cmに集中し、杯A IIに法量分化の傾向が窺える段階。

土師器・黒色土器Bの碗は大小2法量に分化する。灰軸陶器を伴う。

10段階：杯Aは土師器が主体で、口径が10.5cmと13cmに集中し、杯A IIに法量分化が認められる段階。

黒色土器A碗は、意匠化した暗文風のヘラ磨きが顕著。灰軸陶器を伴う。

11段階：杯Aは土師器が主体で、口径が10cmと13cmに集中し、杯A IIに法量分化が認められる段階。

黒色土器A碗は、腰の強く張る深碗が出現し、土師器盤Bは大小2法量に分化する。灰軸陶器を伴う。

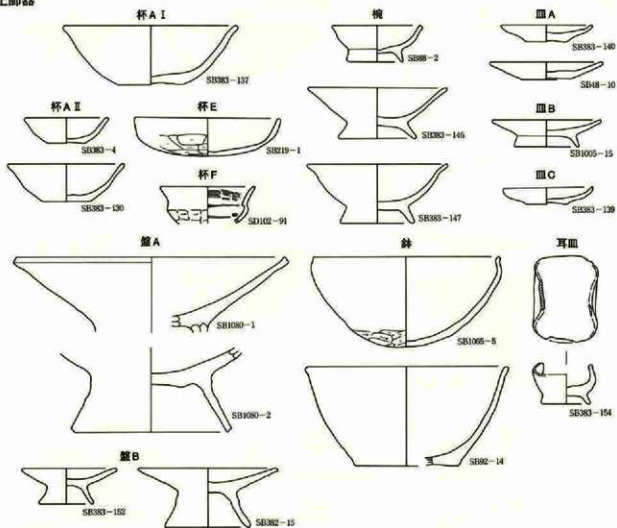
12段階：杯Aは土師器が主体で、口径が9.5cmと12cmに集中し、杯A IIに法量分化が認められる段階。黒色土器A・黒色土器Bの盤Bが出現し、黒色土器A盤Bには大小2法量がある。灰軸陶器を伴う。

13段階：杯Aは土師器が主体で、口径が8.5cmと13～14cmもしくは15cm以上に集中し、杯Aの法量分化が確実視され、杯A I・IIという分類基準に新たな枠組みが必要とされる段階。

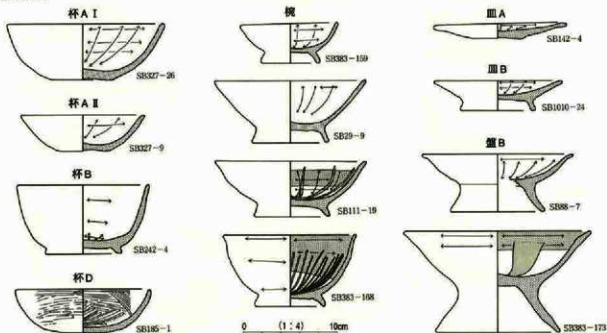
各段階の設定については、出土量豊富で、種類・器種とも多彩な住居址を選別し、類別を繰返し導き出したものである。また、各段階は漸移的に変遷しており、実際に住居址出土資料に当たる際には画期をどこに求めるのか定まりがつかないこともしばしば見られた。古代の土器については、土器1個体で時代時期を判断することが難しく、土器組成や法量分布といった総合的な判断が必要とされている。したがって、住居址出土土器の出土量や組成内容に大きく左右されてしまうのが現状と言える。唯一、窯式という固有名詞が付く灰軸陶器にしても、住居址伴出遺物か混入遺物かの判断が本遺跡の場合難しく、灰軸陶器の窯式のみで時期を判断することはできない。当センターで報告した塩尻市吉田川西遺跡や松本平の遺跡群で実践された方法論を踏襲し、問題解決に当たることとした。なお、吉田川西編年・松本平編年との時期的な相互関係については後述するが、土器様相の変化の方向性は一致している。



土師器

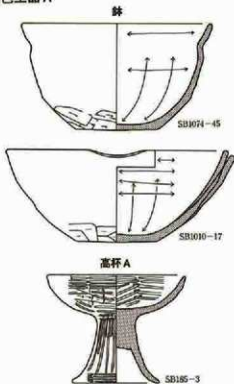


黒色土器 A

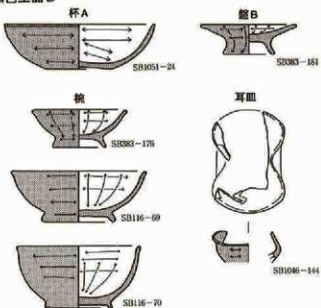


第85図 食器形態器種分類図1

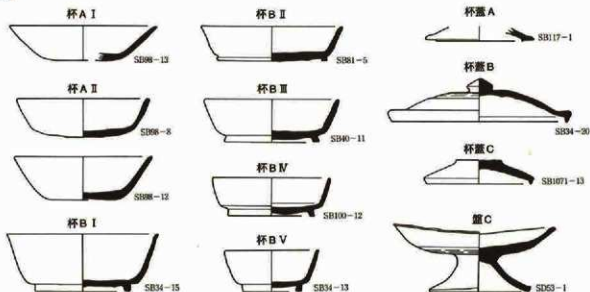
黒色土器 A



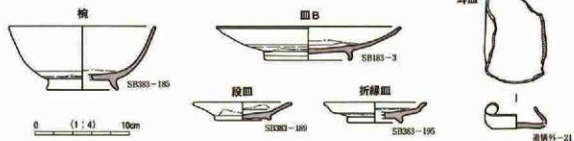
黒色土器 B



須恵器

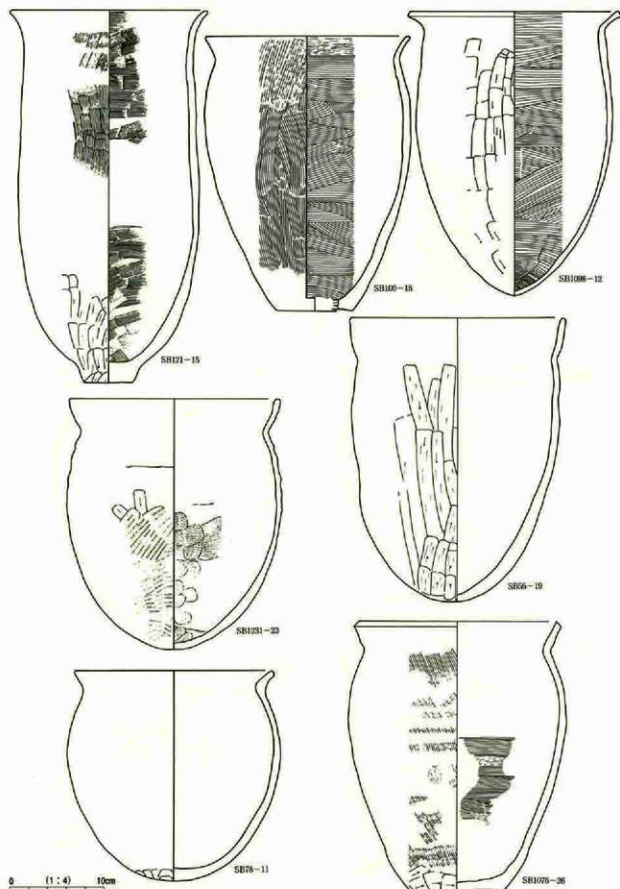


灰釉陶器



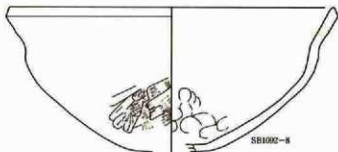
第86図 食器形態器種分類図 2

長胴形甕

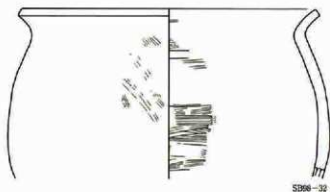
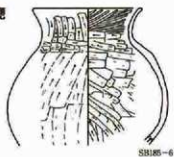


第87図 煮炊形態器種分類図1

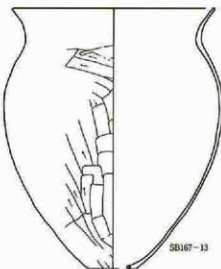
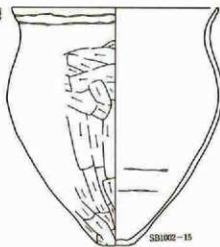
浅鉢形甕



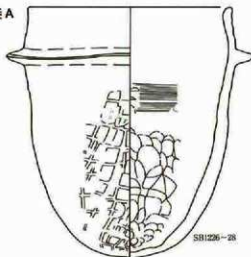
球胴形甕



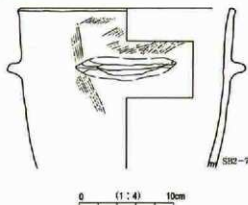
武藏甕



羽釜 A



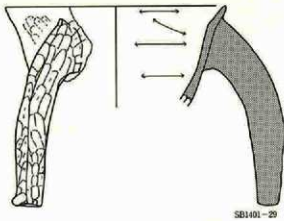
羽釜 B



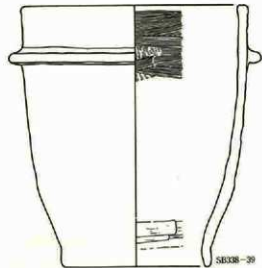
0 (1:4) 10cm

第88図 煮炊形態器種分類図 2

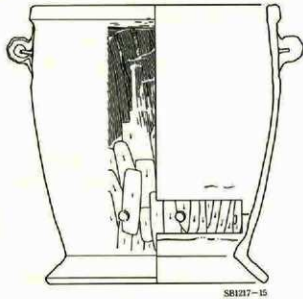
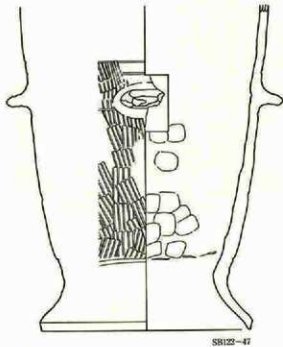
足釜



羽釜形甑



牛出形甑



0 (1:4) 10cm

構成比グラフの凡例



底部調整比率グラフの凡例



第89図 煮炊形態器種分類図3・構成比と底部調整比率の凡例

(2) 遺構出土の土器

ア 竪穴住居址

SB1 (第29表)

試掘調査の際に土層断面で確認された住居址で、一  
括性に疑問が残る資料である。土師器碗が出土してい  
ること、黒色土器A杯AIIの底部調整が回転糸切りで  
あることから、7段階の様相と考えられる。

なお、灰軸陶器碗の窯式は不明である。

表29						
種類	器種	器体数	数量別器体数	数量別器体数比	数量別器体数比	器体中比
土師器	碗	1	3	30%	90%	1-8
	土師	2				
	小形碗	1				
黒色土器A	杯A	1	2	23%	90%	1-2
	杯AII	1				
	杯	1				
灰軸陶器	杯	1	3	33%	90%	1-8
	杯蓋	1				
	杯蓋	1				
灰軸陶器	碗	1	1	11%		
器体						
土師器	長形杯蓋	5	6	100%	6%	1-8
	小形碗	1				

第29表 SB1出土土器構成表

SB2 (図版118, PL24, 第30表, 第90図)

土師器杯A I・IIは13段階を設定した資料の一つで  
ある。両者は相似形で、杯AIIは小型化が進み、皿Aと  
の区別が曖昧となる。図示できなかったが、黒色土器  
A盤Bの破片が出土している。羽釜Bは部分的にハケ  
目調整を残すが、ナデ調整で仕上げられている。■は  
器高が低く、鍋形の器形を呈する羽釜と考えられる。  
●は内面上半部と外面にヘラ磨きが施されている。端  
部が消失しているものの、均一な胎土から概と判断し  
た。

SB3

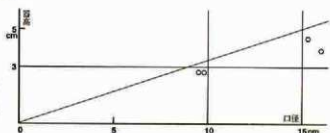
いずれも破片資料で、土師器杯1と器種不明3、長  
胴形甕4、小形甕1、羽釜1の10個体分と遺物量は少  
ない。

SB4 (第31表, 第91図)

食器形態須恵器の器種が豊富で、杯Aの底部調  
整では回転糸切りが優位を占めること、黒色土器

表30						
種類	器種	器体数	数量別器体数	数量別器体数比	数量別器体数比	器体中比
土師器	杯A	7	103	71%	90%	1-8
	杯AII	13				
	杯A	14				
	杯	7				
	杯	1				
	杯	2				
黒色土器A	杯A	2	26	19%	90%	1-2
	杯AII	2				
	杯	1				
	杯	1				
	杯	1				
	杯	1				
黒色土器B	杯A	2	2	1%	90%	1-8
	杯	1				
	杯	1				
須恵器	杯	1	11	7%	90%	1-8
	杯蓋	2				
	杯	2				
灰軸陶器	碗	2	4	3%		
器体						
土師器	小形甕	1	14	100%	9%	7-8
	羽釜	2				
	甕	2				
	甕	2				
	未知	3				
須恵器	杯	1	1	100%	1%	

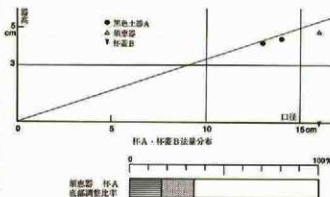
第30表 SB2出土土器構成表



第90図 SB2土師器杯A法量分布

表31						
種類	器種	器体数	数量別器体数	数量別器体数比	数量別器体数比	器体中比
土師器	杯A	4	14	33%	33%	50%
	杯	1				
	小形	3				
黒色土器A	杯A I	1	10	23%	23%	50%
	杯A II	5				
	杯	4				
	杯	1				
	杯	4				
	杯	1				
須恵器	杯蓋	1	16	37%	37%	50%
	杯蓋	2				
	杯	1				
	杯蓋	2				
	小形	1				
灰軸陶器	不明	2	2	7%		
器体						
土師器	長形杯蓋	30	42	100%	49%	1-8
	小形甕	4				
須恵器	甕	1	1	100%	1%	

第31表 SB4出土土器構成表



第91図 SB4法量分布と底部調整比率



A杯Aの底部調整が手持ちヘラ削りで、口径と器高の比率が3:1以下であることから、4段階の様相を示している。

## SB 5

SB 1 同様、試掘調査の土層断面で確認された住居址で、土器を含め遺物は一切検出されなかった。

## SB 6 (図版118, PL24, 第32表, 第92図)

土師器杯A I・IIは13段階を設定した資料の一つである。両者は相似形で、杯A IIは小型化が進み、皿Aとの区別が曖昧となる。土師器盤Bは肉厚で(9)、高台は柱状高台を呈する(10)。灰軸陶器碗は大原10号窯式が主体を占める(16・17)。18は削り出し高台の緑軸陶器碗である。19・20の小形甕は、底部・面ともヘラ削りが施されており、13段階の様相からははずれる。22は胎土が均一で、内外面にヘラ磨きが施されていることから、破片資料ではあるが甕と判断した。

## SB 7 (図版119, PL24, 第33表, 第93図)

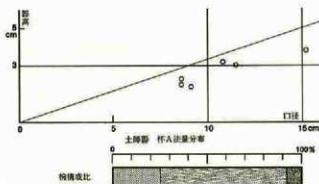
土師器杯A IIは、口径11cmを前後する1群(1~6)と13cmを前後する1群(7~11)に分離することが可能である。杯Aの構成比では60%を土師器が占める。土師器皿A(16・17)、黒色土器B杯A・皿B(27)がある。段階を特定することは困難であるが、完形及び完形に近い1・2が床面直上から出土していることから、10段階と捉えておく。

土器	段階	検出数	種類別検出数	種類別検出率	用途別検出数	用途別検出率
土師器	杯A I	2		93	92%	11~11, 12
	杯A II	23				
	皿A	5				
	皿B	2				
	不明	21				
	不明	2				
黒色土器	杯A	2		44	30%	19~21
	皿A	2				
	皿B	4				
	不明	17				
黒色土器	杯A	1		9	8%	27
	皿A	2				
	皿B	1				
	不明	5				
調査器	杯A	1	1	1%		28
土師器	長形小甕	3		5	100%	3%
	小形甕	1				
	不明	1				

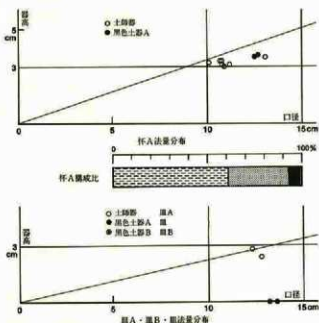
第33表 SB 7 出土土器構成表

土器	段階	検出数	種類別検出数	種類別検出率	用途別検出数	用途別検出率
土師器	杯A I	1		102	97%	7%
	杯A II	6				
	皿A	1				
	皿B	3				
	不明	88				
	不明	1				
黒色土器	杯A	2		62	30%	79%
	皿A	1				
	不明	57				
調査器	杯A	1	2	1%		14
	皿A	1				16-17
	不明	8				18
灰軸陶器	杯A	1		12	6%	19
	皿A	1				
	不明	2				
緑軸陶器	皿A	1	1	1%		22
土師器	長形小甕	32		45	100%	20%
	小形甕	11				
	不明	1				
調査器	杯A	1	1	32%		23
	灰軸陶器	不明	2	67%		

第32表 SB 6 出土土器構成表



第92図 SB 6 法量分布と杯A構成比



第93図 SB 7 法量分布と杯A構成比

## SB 9

床面のみ検出された住居址で、遺物の出土はない。

## SB11 (第34表)

13段階のSB2に切られている住居址で、土器様相は把握し難いが、食器形態を構成する須恵器が極端に少ないことから、6ないし7段階以降と13段階以前と捉えておく。なお、灰胎陶器皿の窯式は不明である。

## SB12 (図版119, 第35表)

1は西坂1号窯式平行の山茶碗である。それ以外のものについては、器形復元が可能な個体が少なく、段階を特定することは困難である。

## SB13 (第36表)

法量を計測できる資料が土師器杯A1点のみのため段階を特定することは困難であるが、杯Aの構成比で土師器が50%を占め、黒色土器A杯Aの底部調整が回転系切りのみであることなどから、7段階と想定した。

## SB14

遺物量は少なく、器形を復元し得る資料は無い。食器形態では、器種の特定できない土師器2・黒色土器A3の他、須恵器杯Aが1、杯が3の9個体である。煮炊形態では長胴形甕3、小形甕2の5個体である。

## SB15

遺物量は少なく、器形を復元し得る資料は無い。黒色土器A杯AⅠが2、杯AⅡが1、器種不明が2、須恵器杯蓋Bが2、長胴形甕1の8個体である。

## SB16 (図版119, PL25, 第37表, 第94図)

土師器の杯AⅡは8段階を設定した資料の一つで、径11.5cmに集中する。9・10は器高不明ながら口径13.4cmで、杯AⅡの法量分化傾向が窺える。黒色土器A椀(13・15・16)は大小2形態ある内の口径13.5cm以下の小形に属する。17~24については、8段階の土器様相とは認め難く、特に須恵器の杯類や長頸蓋は4段階以前の様相を呈している。小形甕については判然としな

表34						
種類	器種	個体数	復元別個体数	復元別個体数	法量別個体数	法量中比
土師器	杯AⅠ	2				
	杯AⅡ	10				
	杯	9	32	715		
	不明	24				
黒色土器A	杯AⅠ	1				
	杯AⅡ	2	19	205		95%
	杯	12				
	不明	1	1	15		
須恵器	杯	1	1	15		
	杯	1	1	15		
	蓋	1	1	15		
窯式						
土師器	長胴形甕	2	3	100%	4%	
土師器	小形甕	1	1	100%	1%	
計測						
灰胎陶器	長頸蓋	1	1	100%	1%	

第34表 SB11出土土器構成表

表35						
種類	器種	個体数	復元別個体数	復元別個体数	法量別個体数	法量中比
土師器	杯	1				
	杯	1	15	475		
	不明	13				
	不明	1				
黒色土器A	杯AⅠ	1				
	杯AⅡ	1	8	225		88%
	杯	2				
	不明	2				
須恵器	杯	6	6	115		
	蓋	1	1	15		
灰胎陶器	皿	1	2	55		
	不明	1	1	15		
窯式						
土師器	長胴形甕	4	4	100%	11%	
土師器	小形甕	1	1	100%	3%	
計測						
灰胎陶器	皿	1	1	100%	3%	

第35表 SB12出土土器構成表

表36						
種類	器種	個体数	復元別個体数	復元別個体数	法量別個体数	法量中比
土師器	杯AⅠ	2				
	杯AⅡ	1				
	杯	2	17	48%		
	不明	1				
黒色土器A	杯AⅠ	1				
	杯AⅡ	1	12	48%		92%
	杯	2				
	不明	5				
須恵器	杯	1	1	4%		
	不明	1	1	4%		
窯式						
土師器	小形甕	1	1	100%	4%	
計測						
須恵器	蓋	1	1	100%	4%	

第36表 SB13出土土器構成表

表37						
種類	器種	個体数	復元別個体数	復元別個体数	法量別個体数	法量中比
土師器	杯AⅠ	9				
	杯AⅡ	6	60	795		1~7・9・10
	杯	4				8
	不明	21				11~12
黒色土器A	杯AⅠ	1				14
	杯AⅡ	1	10	145		13~15・16
	杯	2				17
	不明	5				18
須恵器	杯AⅠ	1				17
	杯AⅡ	1	3	55		18
	杯	1				19
窯式						
土師器	長胴形甕	2	7	100%	18%	20
土師器	小形甕	2	2	100%	2%	21~23
計測						
須恵器	長頸蓋	1	1	50%	2%	24
灰胎陶器	皿	1	1	50%		

第37表 SB16出土土器構成表



## SB20 (第40表)

法量を計測できる資料が土師器杯A 1点のみのため段階を特定することは困難であるが、食器形態の構成比で土師器が60%以上を占めることから7段階と想定した。

器種	器種	器種数	権柄別器種数	権柄別器種数比	用途別器種数比	段階中心
土師器	杯A	2	34	64%	82%	
	杯A	2				
	杯	4				
	不明	26				
黒色土師A	杯	1	16	30%		
	不明	15				
須恵器	杯	3	3	6%		
単位						
土師器	自然形量	8	10	100%	15%	
	小形量	1				
段階						
須恵器	量	1	1	50%	25	
灰釉陶器	羽釜	1	1	50%		

第40表 SB20出土土器構成表

## SB21 (第41表)

土師器杯AIIは口径10cmを中心とする一群と13cmを中心とする一群で構成され、羽釜も出土していることから11段階の土器様相と捉えた。なお、灰釉陶器碗の窯式は光ヶ丘1号窯式である。

器種	器種	器種数	権柄別器種数	権柄別器種数比	用途別器種数比	段階中心
土師器	杯A	8	49	52%	89%	
	杯A	2				
	杯	2				
	不明	37				
黒色土師A	杯A	4	39	42%	60%	
	杯	4				
黒色土師	不明	31	1	1%		
	不明	1				
須恵器	杯A	1	4	4%		
須恵器	杯	3	4	4%		
灰釉陶器	碗	1	1	1%		
単位						
土師器	自然形量	4	11	100%	10%	
	小形量	1				
段階						
須恵器	量	1	1	50%		
灰釉陶器	羽釜	1	1	50%	25	

第41表 SB21出土土器構成表

## SB22 (図版120, PL25, 第42表, 第97図)

土師器杯AIIは口径12cmを中心としており、7段階を設定した資料の一つである。杯Aの構成比では土師器が80%以上を占め、8段階への移行期とも捉えられる。9・10は内面にヘラ磨きが施されるが、黒色処理が確認されなかったため土師器碗として扱った。11の灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。12・13の小形甕は底面回転糸切りである。14は端部が確認されないものの均一な胎土からハケ目調整の甕と判断した。

器種	器種	器種数	権柄別器種数	権柄別器種数比	用途別器種数比	段階中心
土師器	杯A	12	46	62%	89%	1~7
	杯A	4				
	杯	3				
	不明	20				
黒色土師A	杯A	3	23	31%	30%	
	杯	2				
須恵器	杯	2	4	4%		
	不明	12				
須恵器	杯	4	4	6%		
灰釉陶器	碗	1	1	1%		11
単位						
土師器	自然形量	8	9	100%	11%	12-12
	小形量	2				
須恵器	量	1	1	100%		14
	羽釜	1				

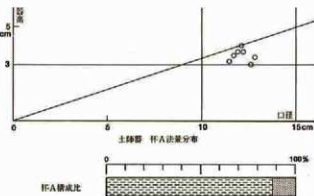
第42表 SB22出土土器構成表

## SB24

遺物は少なく、器形を復元し得る資料は無い。土師器杯Aが3、器種不明が12、黒色土師Aの器種不明が2、須恵器杯が2、長胴形甕・小形甕・羽釜が各1の22個体である。

器種	器種	器種数	権柄別器種数	権柄別器種数比	用途別器種数比	段階中心
黒色土師A	杯A	3	10	9%	63%	
	杯A	2				
	不明	3				
須恵器	杯A	1	5	33%		
	杯	2				
	不明	2				
単位						
土師器	自然形量	8	9	100%	37%	
	小形量	1				

第43表 SB23出土土器構成表



第97図 SB22法量分布と杯A構成比

## SB25 (図版120, 第44表)

複数の段階の土器様相が混在している。2は土師器杯AⅡとしたが皿Aとの区別は曖昧である。9は外面へら削り、内面ハケ目調整の浅鉢形である。底面はナデ調整で仕上げられている。灰軸陶器碗の窯式は不明である。

## SB26 (第45表)

法量を計測できる資料が須恵器杯AⅡ1点のみのため、段階を特定することは困難であるが、黒色土器Aが無いこと、須恵器杯はいずれも底面回転糸切りであることから、4段階以前と想定される。

## SB27

遺物量は極めて少なく、黒色土器Aの杯Aが1、碗が1点の2個体のみである。

## SB28 (第46表)

法量を計測できる資料が少ないものの、土師器杯AⅡは口径9cmを中心とするものと口径13cmを中心とするものがあり、前者には器高1.5cmの皿Aとの区別が曖昧なものも含まれる。羽釜が6個体あることから12段階もしくは次段階への移行期と把握される。

## SB29 (図版121, PL26, 第47表, 第98図)

土師器杯AⅡ、黒色土器A杯AⅠ・Ⅱは7段階を設定した資料の一つである。杯Aの構成比では黒色土器Aが60%弱を占め、法量分化も確認される。11・12は須恵器杯Aで、底面の調整は回転へら削り後手持ちへら削りである。13は特異な形状の土師器鉢で、外面回転ナデ調整、内面ハケ目調整後放射状にへら磨きが施されている。底面は静止糸切り後手持ちへら削りされている。長胴形碗の口縁部は長く、外反度が弱まる。口縁部から胴上半部を回転ナデ調整し、以下をへら削り(18)、タダキ後ハケ目調整後へら削り(19)などの調整が加わる。小形鉢は外面回転ナデ調整は共通するが、底部へら削り(14)、底面ナデ調整(14)・静止糸切り(17)と多様である。14は内面ハケ目調整が施され、特異である。20は羽釜Aで、鋳以下は摩滅しているがへら削りの痕跡が観察される。

種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	黒色土器A	区別中心
土師器	杯AⅡ	1				2
	杯AⅠ	2				4
	皿A	1	7	24%		1
	不詳	2				3
	杯A	2				5
黒色土器A	皿	2	17	59%	81%	6-7
	杯	1				8
	不詳	11				9
須恵器	杯	1	2	7%		10
	不詳	1				11
灰軸陶器	碗	1	1	3%		12
合計		6	7	100%	19%	
土師器	長胴形碗 小形鉢	1	7	100%	19%	9

第44表 SB25出土土器構成表

種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	黒色土器A	区別中心
土師器	不詳	1	1	25%		
	杯AⅡ	1				29%
須恵器	杯	1	2	73%		
	不詳	1				
合計		3	10	100%	71%	
土師器	長胴形碗 小形鉢	2	10	100%	71%	

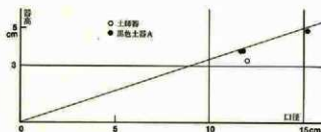
第45表 SB26出土土器構成表

種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	黒色土器A	区別中心
土師器	杯AⅡ	3				
	杯AⅠ	4				
	皿	2	20	64%		
	不詳	1				
	杯A	12				80%
黒色土器A	皿	2	14	32%		
	杯	3				
	不詳	3				
須恵器	杯	2	2	5%		
合計		6	6	100%	13%	
土師器	羽釜	6	6	100%	13%	

第46表 SB28出土土器構成表

種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	黒色土器A	区別中心
土師器	杯AⅡ	1				
	杯AⅠ	2				1
	杯A	2	14	41%		
	皿	1				12
	不詳	7				6
	杯AⅠ	1				7%
	杯AⅡ	2				2-4-5
黒色土器A	杯A	4	16	47%		3-7-9
	皿	4				
	不詳	2				
須恵器	杯	2	4	12%		11-12
	杯蓋	1				10
合計		3	9	100%	21%	10-12-17
土師器	長胴形碗 小形鉢	2	9	100%	21%	10-12-17
須恵器	杯	1	1			20

第47表 SB29出土土器構成表



第98図 SB29杯A法量分布



## SB31 (図版121・122, 第48表)

法量を計測できる杯AⅡは土師器のみであるが、構成比は土師器・黒色土器A・須恵器とも同率であり、6ないし7段階の土器様相と把握される。灰軸陶器の内、14は光ヶ丘1号窯式の椀で、15は虎漢山1号窯式の段皿である。長胴形甕の口縁部は長く、外反度が極めて弱いという特徴を持つ。22は口縁部から胴上半部を回転ナデ調整し、以下をヘラ削りする。内面はハケ目調整後ナデ消している。23はカキ目調整後回転ナデ調整を施し、一部にカキ目痕が残る。21は下半部が消失しているものの浅鉢形甕と捉えられ、外面にハケ目調整が僅かに観察される。19は武蔵甕で、緩やかな「コ」字状口縁を呈する。小形甕は、他の甕と同様に全貌が明らかな個体はないが、底面の調整が手持ちヘラ削り(17)・回転糸切り(18)、外面カキ目痕(16)と多様である。

土器	器種	個体数	検出別個体数	検出別個体数(%)	検出別個体数(%)	図版中央
土師器	杯AⅡ	2	6	24%	63%	1-2
	杯AⅠ	1				
	不明	2				
黒色土器A	杯A	1	10	40%		3-4
	杯B	1				5
	不明	2				6-7
須恵器	杯A	1	6	24%		8
	杯B	1				9
	不明	2				10-14
灰軸陶器	杯	2	3	12%		15-18
	段皿	1				15
家炊						
土師器	長胴形甕	9	14	100%	30%	20-22・23
	浅鉢形甕	1				24
	小形甕	2				19
計						
須恵器	杯	1	1	100%	2%	12

第48表 SB31出土土器構成表

土器	器種	個体数	検出別個体数	検出別個体数(%)	検出別個体数(%)	図版中央
土師器	杯AⅡ	4	8	21%	63%	
	杯AⅠ	2				
	不明	7				
黒色土器A	杯A	5	14	50%		
	杯B	1				
	不明	7				
須恵器	杯	2	2	6%		
	段皿	3	3	12%		
家炊						
土師器	長胴形甕	8	14	100%	37%	
	小形甕	8				

第49表 SB33出土土器構成表

## SB33 (第49表)

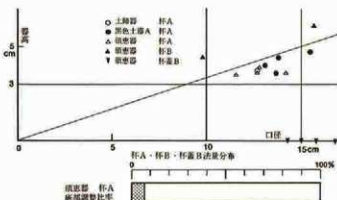
法量を計測できる杯Aは土師器のみであるが、構成比は黒色土器Aが5割強を占めることから、6ないし7段階の土器様相と把握される。灰軸陶器椀は3個体とも光ヶ丘1号窯式である。

土器	器種	個体数	検出別個体数	検出別個体数(%)	検出別個体数(%)	図版中央
土師器	杯AⅡ	1	5	8%	72%	1
	杯AⅠ	1				
	不明	3				
黒色土器A	杯A	5	19	30%		2-5
	杯B	2				7
	不明	2				8
須恵器	杯A	2	9	62%		9-12
	杯B	1				13
	不明	1				14
灰軸陶器	杯AⅡ	1	9	62%		15
	杯AⅠ	1				16
	不明	13				17-20
家炊						
土師器	長胴形甕	12	17	100%	20%	22-27・31
	小形甕	5				21-25・30
計						
須恵器	長胴甕	1				22
	段	1	8	100%	8%	25-29
	杯	1				24

第50表 SB34出土土器構成表

## SB34 (図版122・123, PL26, 第50表, 第99図)

食器の構成比で須恵器の占める割合が高く、須恵器杯A・B、または黒色土器Aの様相から4段階を設定した資料の一つである。須恵器杯Aの底部調整比は回転糸切りが圧倒的に多く、杯BはI・IV・Vに法量分化している。杯蓋Bは口径14cm以上の中・大形のものに限られる。黒色土器A杯Aの底部調整は手持ちヘラ削り(4~6)が主体で、静止糸切り(3)が僅かに含まれる。口径と器高の比率が3:1以下という点も特徴の一つである。1は内面にヘラ磨きが観察されるが、黒色処理が明確でないので土師器杯Aとした。長胴形甕の口縁部は短く、外反度が高いという特徴を持つ。口縁部から胴上半部に回転ナデ調整を残し、それ以下をヘラ削りにより整形する甕が主体で、タキ目を残すもの(27)もある。小形甕も長胴形甕と同様に外面ヘラ削りが主体である。ただし、底面は回転糸切りである(25・26)。貯蔵形態はいずれも須恵器で、壺・大小の甕・鉢と器種は比較的豊富である。



第99図 SB34法量分布と底部調整比



## SB35 (図版123・124, PL27, 第51表, 第100図)

6段階を設定した資料の一つ。杯Aの主体は黒色土器Aで、大小2法量あり、底面調整も手持ちヘラ削りが4割近くを占める。口径と器高の比率も3:1に集中し、深い印象を与える。8の底面は回転糸切りである。11は片口の鉢で、体部下半から底面までヘラ削りを施す。14は有台の耳皿である。長胴形甕の口縁部は、外反度が弱くやや内湾する特徴を持つ。口縁部から胴上半部に回転ナゲ調整を施し、それ以下をヘラ削りにより整形する甕が主体である。内面はいずれもハケ目調整される。23の底面もヘラ削り調整である。小形甕も同様に外面ヘラ削り、内面ハケ目調整+回転ナゲが主体である。底面もヘラ削りが主体(20~21)で、回転糸切りもある(19)。26は口頸部が無いものの、小瓶とした。

## SB36

器形を復元し得る資料は無い。黒色土器Aの杯Aが7、碗が1、器種不明が4、須恵器杯Aが1、長胴形甕が1の20個体である。

## SB37 (図版124, 第52表)

唯一法量が計測できた黒色土器A杯AⅡは、口径と器高の比率が3:1以上で、底面調整は手持ちヘラ削りである。1は光ヶ丘1号窯式の短頸甕である。

## SB38 (図版124, PL26, 第53表, 第101図)

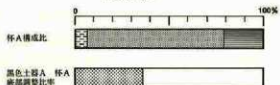
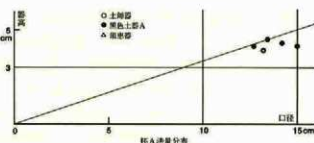
4段階を設定した資料の一つで、食器形態の中で須恵器が80%弱を占める。須恵器の杯AⅡの底面調整は回転糸切りが87.5%を占める(8~11)。杯B・杯蓋B

器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A	1	9	43%	81%	1
黒色土器A	杯AⅡ	1	6	28%		2
	杯AⅢ	1				3
	杯AⅣ	1				2
須恵器	杯AⅡ	1	5	24%		8~11
	杯AⅢ	1				12~13
	杯AⅣ	1				2~5
	杯AⅤ	1				14
須恵器	杯AⅡ	1	1	5%		7~8
単位	土師器	1	3	100%		11%
計	黒色土器A	3	3	50%	8%	
計	須恵器	1	1	50%	1	

第52表 SB37出土土器構成表

器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A	1	10	7%	81%	1
黒色土器A	杯AⅡ	1	110	90%		2
	杯AⅢ	1				3
	杯AⅣ	1				7
	杯AⅤ	1				11
	杯AⅥ	1				12
須恵器	杯AⅡ	1	16	12%		14
	杯AⅢ	1				7~8
	杯AⅣ	1				21~22
単位	土師器	1	28	100%		17%
計	黒色土器A	1	4	100%	2%	
計	須恵器	1	1	100%	27~29	

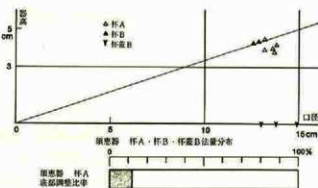
第51表 SB35出土土器構成表



第100図 SB35法量分布と杯A構成比・底部調整比率

器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A	1	1	8%	71%	1
黒色土器A	杯AⅡ	1	5	17%		2
	杯AⅢ	1				3
	杯AⅣ	1				11
須恵器	杯AⅡ	1	23	70%		12~13
	杯AⅢ	1				2~5
	杯AⅣ	1				17~19
	杯AⅤ	1				14~16
単位	土師器	1	12	100%		29%
計	黒色土器A	3	3	50%		17
計	須恵器	4	4	100%	18~19	

第53表 SB38出土土器構成表



第101図 SB38法量分布と底部調整比率

とも同法量で、セット関係が想定される。18・19は緩やかな「コ」字状口縁の武蔵甕である。小形甕は外面回転ナデ調整のみのもの(14・15)と底部にヘラ削りが施されるもの(16・17)があるが、底面の調整はナデ調整(14・17)と回転糸切り(15・16)で、両者に相関関係は認められない。

## SB39 (図版125, 第54表)

4・5とも回転ナデ調整後横位のヘラ削りが胴下半に施されている。底面調整は、両者とも手持ちヘラ削りである。

## SB40 (図版125, PL27, 第55表, 第102図)

4段階を設定した資料の一つで、食器形態の中でも、また杯Aの構成比でも須恵器が主体を占める。須恵器杯AⅡの底面調整は回転糸切りが60%を占める(6・7)。4は口径から杯BⅣ(9・10)に適合する。1は内外面及び底面にヘラ磨きが施される杯Aと相似形の土師器杯である。長胴形甕の口縁部は短く、外反度が高いという特徴を持つ。口縁部から胴上半部に回転ナデ調整を残し、それ以下をハケによる調整・整形をする甕(14・16)が主体である。15は長胴形甕と同様な調整・整形を有する浅鉢形甕である。

## SB41 (図版126, PL28, 第56表, 第103図)

土師器杯Aは13段階を設定した資料の一つである。口径が8.6cmと小型化した杯AⅡ(1)は、皿Aとの区別が曖昧である。一方、2・3は口径から杯AⅡに分類されるが、前段階までの同様な口径を持つ杯AⅡとは器形・器厚といった面から異なり、1と相似形をなす。なお、1は口縁部に煤痕があり、灯明皿として用いられた可能性が高い。羽釜Bには、外面ナデ調整(4)とハケ目調整(5)とがある。

## SB42 (第57表)

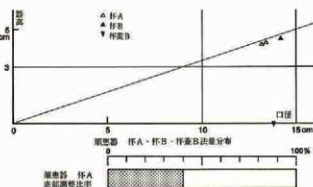
法量を計測できる資料は無く、段階を特定することは困難であるが、杯Aに土師器・黒色土器A・須恵器の三者があり、黒色土器A杯Aの底面調整で手持ちヘラ削りが25%を占めることから、6もしくは7段階と想定される。

全量	器種	調整	調整段階	調整段階割合	調整段階割合合計	底面調整割合合計	調整率
土師器	杯A	不明	0	0	40%		
黒色土器A	不明	1	0	40%		60%	1
須恵器	羽釜Ⅳ	1	1	8%			2
量次	長胴形甕	3					6
土師器	小形甕	2	5	100%		20%	4・8
調整	調整						
調整率	調整	1	1	100%	0%		3

第54表 SB39出土土器構成表

全量	器種	調整	調整段階	調整段階割合	調整段階割合合計	底面調整割合合計	調整率
土師器	杯A	1	1	4%			1
黒色土器A	杯AⅡ	2	3	12%			2
	杯AⅢ	0					5・8
	杯AⅣ	2					11
須恵器	杯AⅡ	1					9・10
	杯BⅣ	2	20	63%			
	杯BⅤ	1					
	杯BⅥ	0					
	杯BⅦ	1					4
量次	長胴形甕	17					14・16
土師器	浅鉢形甕	1	18	100%		40%	15
	式部甕	1					11
	小形甕	4					12
調整	調整						
調整率	調整	2	3	100%	7%		17・18
	調整	1					17

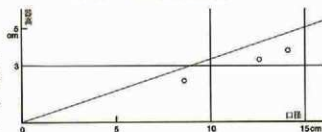
第55表 SB40出土土器構成表



第102図 SB40法量分布と底部調整比率

全量	器種	調整	調整段階	調整段階割合	調整段階割合合計	底面調整割合合計	調整率
土師器	杯AⅡ	3					1・3
	杯AⅢ	3	11	34%			
	不明	0					
黒色土器A	不明	2	10	32%			8%
	杯A	2					
須恵器	杯A	2					
	杯B	1	11	34%			
	不明	1					
量次	長胴形甕	1					
土師器	羽釜Ⅱ	2	4	100%		11%	4・5
	羽釜Ⅲ	1					

第56表 SB41出土土器構成表



第103図 SB41土師器杯A法量分布

## SB43 (図版126, PL28, 第58表)

土師器杯Aは13段階を設定した資料の一つである。とはいえ、杯AⅡ(1~3)は口径8.5cmを中心とし、口径と器高の比率が4.5:1以下で、皿Aとした方が適するか。灰釉陶器碗の窠式は不明である。羽釜はAとBがあり、前者はナデ(8・9)、後者はヘラ削りナデ(7)とハケ目(8)で整形・調整されている。8は底部欠損後、端部を調整して甔として使用されている。外面には煤が横帯螺旋状に付着し、縞模様を形成している。9は内面に輪積み痕が観察される。10は羽釜の底部でヘラ削りが施され、底面はナデ調整が施される。

食器								
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	周法別個体数比	図版中%		
土師器	杯A	3	15	31%	79%			
	杯AⅡ	12						
	杯AⅢ	1						
黒色土器	杯A	3	14	39%				
	杯AⅡ	9						
	杯AⅢ	1						
	皿	1						
須恵器	杯	2	20	41%				
	甔	1						
	杯蓋	3						
	小形甔	2						
重注								
土師器	長柄形甔	3	9	100%			13%	
	小形甔	1						
打磨								
灰釉陶器	圧口瓶	1	4	100%	6%			
	甔	1						
	小甔	2						

第57表 SB42出土土器構成表

## SB44 (第59表)

複数の段階の土器様相がそれぞれまとまった形で存在しており、オリジナルが見出し難い。土師器杯AⅡは口径9cm前後を中心とし、羽釜とのセット関係が窺え、13段階の様相を呈する。完形で底部手持ちヘラ削りの黒色土器A杯AⅠや皿Bは、須恵器・長胴形甔と合わせて6段階の様相を呈する。なお、灰釉陶器碗の窠式は不明である。

食器							
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	周法別個体数比	図版中%	
土師器	杯AⅠ	2	26	43%	91%	1~3	
	杯AⅡ	4					
	杯AⅢ	1					
	小甔	13					
黒色土器	杯	4	25	41%			
	皿	2					
	小甔	19					
	甔	1					
須恵器	杯	1	9	18%			
	甔	5					
	杯蓋	2					
灰釉陶器	瓶	1	1	1%			
	甔	1					
重注							
土師器	長柄形甔	3	14	100%	18%	小甔 小甔 小甔 小甔	
	小形甔	2					
	杯蓋	2					
	甔	2					
打磨							
灰釉陶器	甔	1	1	100%	1%		

第58表 SB43出土土器構成表

## SB45 (図版126, 第60表)

法量が計測できる資料が黒色土器A杯AⅡ1点のみで、段階を特定することは困難である。杯Aの構成比では黒色土器Aが88%を占め、底面調整の90%を回転糸切りが占める。灰釉陶器(1~3)はいずれも光ヶ丘1号窠式である。長胴形甔にはナデにより整形・調整されるものがある。これらのことから、6ないし7段階の土器様相と把握する。

食器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	周法別個体数比	図版中%
土師器	杯AⅡ	1	28	40%	97%	
	杯AⅢ	1				
	小甔	23				
黒色土器	杯AⅠ	1	25	41%		
	杯AⅡ	1				
	杯AⅢ	3				
	皿	1				
	甔	1				
	小甔	18				
須恵器	杯A	1	5	8%		
	杯蓋A	1				
	杯蓋B	1				
灰釉陶器	甔	1	3	5%		
	甔	2				
重注						
土師器	長柄形甔	7	9	100%	13%	
	甔	2				

第59表 SB44出土土器構成表

## SB46

器形を復元し得る資料は無い。長胴形甔1、武蔵甔1、須恵器の長頸甔が1の3個体である。

## SB47 (第61表)

食器形態の構成比で黒色土器Aが70%を占め、杯AⅡの口径と器高の比率が3:1に集中することから、6段階の土器様相と判断した。ただし、杯Aの構成比では土師器が38%を占めること、黒色土器A杯Aの底面調整は回転糸切りが92%を占めることなどから、7段

食器								
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	周法別個体数比	図版中%		
土師器	杯A	1	4	9%	97%			
	杯AⅡ	3						
	杯AⅢ	1						
黒色土器	杯AⅠ	4	29	32%				
	杯AⅡ	1						
	杯AⅢ	3						
	皿	1						
須恵器	小甔	21	1	2%				
	杯	1						
灰釉陶器	甔	1	3	6%			1 2-3	
	甔	2						
重注								
土師器	長柄形甔	6	7	100%			13%	
	小形甔	1						

第60表 SB45出土土器構成表

階に近い様相と捉えられよう。灰陶陶器碗は、いずれも光ヶ丘1号窯式である。

## SB48 (図版126・127, PL27, 第62表, 第104図)

7段階を設定した資料の一つ。土師器杯Aは口径12cmを中心とし、杯Aの構成比でも76%を占める。土師器皿A(10~12)は、いずれも底面回転糸切りで、口径12cm前後、器高2cm前後と法量が揃っている。21は外面回転ナデ調整のみの小形甕で、底面は回転糸切りである。

器種	器形	個体数	重量割合(%)	構成割合(%)	用途割合(%)	段階中数
土師器	杯A	6	10	76%	90%	
	杯A	7				
	不明	2				
	杯A	1				
黒色土器A	杯A	9	54	70%		
	杯A	12				
	皿	3				
	皿	3				
須恵器	杯	20	1	1%		
須恵器	杯	1	1	1%		
灰陶陶器	皿	4	5	7%		
灰陶陶器	不明	1				
合計		9	9	100%	10%	

第61表 SB47出土土器構成表

## SB49 (図版127, PL28)

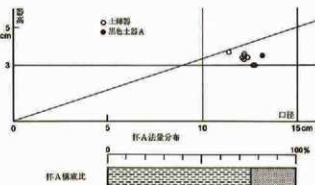
遺物は極めて少なく、図示した以外に土師器杯1、長胴形甕1、須恵器甕1の5個体である。1・2は非ロクロ調整で、1は外面ハケ目、内面へら削り、底面には木葉痕が残る片口状の形態で、小形甕とした。2は外面にへら磨きが施される球胴形甕で、内面はハケ目調整が残る。底面は調整が不鮮明で、へら削りと思われる。

器種	器形	個体数	重量割合(%)	構成割合(%)	用途割合(%)	段階中数
土師器	杯A	11	30	71%	90%	1~2
	杯A	2				
	皿	3				
	不明	64				
黒色土器A	杯A	3	31	28%		10~12
	杯A	1				
	皿	4				
	不明	22				
須恵器	不明	1	1	1%		
合計		9	9	100%	10%	

第62表 SB48出土土器構成表

## SB50

器形を復元し得る資料は無い。土師器の杯A1、器種不明が1、小形甕が1の3個体である。



第104図 SB48法量分布と杯A構成比

## SB51 (第63表)

遺物量が少なく、いずれも破片資料であるため、段階を特定することは困難である。5~7段階。

## SB52 (第64表)

器形を復元し得る資料は無い。土師器碗、須恵器杯A・B、武蔵甕があることから、6段階の可能性が高い。なお、灰陶陶器皿は光ヶ丘1号窯式である。

器種	器形	個体数	重量割合(%)	構成割合(%)	用途割合(%)	段階中数
土師器	不明	2	2	20%	44%	
	杯A	1	1	20%		
黒色土器A	杯A	1	1	20%		
	杯A	1	1	20%		
須恵器	杯A	1	1	42%		
	杯A	1	1	42%		
合計		5	5	100%	50%	

第63表 SB51出土土器構成表

器種	器形	個体数	重量割合(%)	構成割合(%)	用途割合(%)	段階中数
土師器	杯A	2	12	48%	71%	
	杯A	2				
	不明	4				
	高杯A	1				
黒色土器A	杯A	1	6	24%		
	杯A	1				
	不明	2				
	杯A	2				
須恵器	杯A	1	6	24%		
	杯A	1				
灰陶陶器	不明	1	1	4%		
	不明	1				
合計		5	5	100%	23%	

第64表 SB52出土土器構成表

## SB53

須恵器の壺が2個体(破片資料)出土した。

## SB54 (図版127, 第65表)

法量を計測できる資料は、図示した1(口径10.3cm)・2(口径12.9cm)のみのため、明確ではないものの11段階と把握しておく。4は白磁碗Ⅶ類である。

## SB55 (第66表, 第105図)

土師器杯AⅡは、口径12cm前後を中心とし、杯Aの構成比では土師器が68%を占めることから、7段階の土器様相と把握される。

## SB56 (図版127・128, PL28, 第67表, 第106図)

6段階を設定した資料の一つ。杯Aの構成比では黒色土器Aが92%を占め、杯AⅠ・Ⅱに法量分化している。口径と器高の比率が3:1、もしくはそれ以上の比率に集中する。9は黒色処理が明確に確認されなため土師器鉢とした。灰釉陶器碗はいずれも光ヶ丘1号窯式で、14は内面を転用碗として用い、底面には墨書が施されている(文字関係資料12)。15は底部・底面がヘラ削りされるが、16は回転ナデ調整のみで、底面は回転糸切りである。17は全貌が明らかで無いものの均一な胎土から甌と判断した。長胴形壺は、6段階に特徴的な器高が高く直立気味の長い口縁部を持つもの(19)の他、前段階までの外反度の高い口縁部を持つもの(18)や次段階以降に特徴的な器高の低い丸みを帯びた器形のもの(21)がある。19は口縁部に回転ナデ調整を残し、胴部から底面までをヘラ削りする。21は口縁部から胴上半部に回転ナデ調整を残し、底面までハケ目調整され、それぞれの調整の境界部にヘラ削りが施される。内面にはタキ痕が観察される。

種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合中%	
土師器	杯AⅡ	1	2	95	1	1	
	鉢	1					9
	壺	2					7・8
黒色土器A	杯AⅠ	2	17	75	67	67	
	杯AⅡ	6					7・8
	杯AⅢ	2					10
	壺	3					11・13
	壺	1					11
	壺	1					11
	壺	2					14
灰釉陶器	碗	3	145				
要注							
土師器	長胴形壺	9	11	100%	32%	18-21	
	小形壺	2					15-16
	壺	1					17

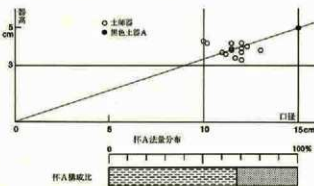
第67表 SB56出土土器構成表

種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合中%
土師器	杯AⅡ	2	45	76%	1	1・2
	杯AⅢ	3				
	壺	2				
	壺	2				
	壺	1				
黒色土器A	杯AⅠ	1	11	18%	78%	
	壺	1				
	壺	9				
黒色土器B	杯AⅠ	1	1	2%		
	壺	1				
	壺	1				
灰釉陶器	白磁碗	1	1	2%		4
	壺	1				
要注						
土師器	長胴形壺	9	9	100%	12%	
要注						
灰釉陶器	壺	2	7	90%	10%	
	壺	5				
灰釉陶器	壺	1	1	12%		

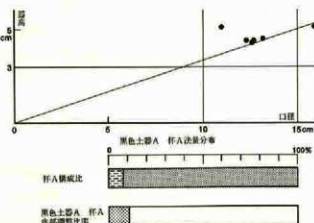
第65表 SB54出土土器構成表

種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合中%
土師器	杯AⅡ	20	55	68%	1	1
	杯AⅢ	1				
	壺	2				
	壺	3				
	壺	1				
黒色土器A	杯AⅠ	2	25	31%	90%	
	杯AⅡ	2				
	杯AⅢ	2				
	壺	2				
	壺	12				
灰釉陶器	白磁碗	1	1	1%		
要注						
土師器	小形壺	2	2	100%	10%	

第66表 SB55出土土器構成表



第105図 SB55法量分布と杯A構成比



第106図 SB56法量分布と杯A構成比・底部調整比率







## SB62

遺物量は極めて少なく、器種不明の黒色土器Aが1、黒色土器Bが1、長胴形甕2の4個体である。

## SB63

土器は一切出土していない。

## SB64 (図版129, 第71表)

器形を復元し得る資料は無い。杯Aは土師器・黒色土器A・須恵器で構成されること、土師器碗があることから、7段階の可能性が高い。なお、灰釉陶器碗・瓶類(1)の窯式は不明である。

## SB65 (図版129・130, PL29, 第72表)

杯Aは黒色土器Aと須恵器で構成されること、杯Bの法量分化が認められること、武蔵窯があることなどから4段階の土器様相と把握される。2・3の底面は手持ちヘラ削り、4・5は回転糸切りである。10は「コ」字状口縁の武蔵窯で、11は10と胎土が異なり、武蔵窯の技法・器形等を模倣した在地の長胴形甕である。12・13は法量・調整の部位は異なるが、横位のヘラ削り・底面手持ちヘラ削りを施した小形甕である。

## SB66 (第73表)

食器形態及び杯Aの構成比で須恵器が約70%を占めることから、4段階の土器様相と把握される。

## SB67 (第74表)

法量を計測できる資料は少ないが、土師器杯Aは口径9.5cmと15cmが各1点あり、羽釜もあることから12段

器種		段階	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合(%)
土師器	杯A	杯A	6					
		杯A	4					
		不明	11		22	54%		
黒色土器A	杯	杯	7		15	36%		96%
		不明	8					
黒色土器B	杯	杯	1		2	5%		
		不明	1					
須恵器	杯	杯	1		2	5%		
		不明	1					
窯式		長胴形甕	1	1	100%	2%		
段階		須恵器	1	1	100%	2%		
区別		須恵器	1	1	100%	2%		

第70表 SB61出土土器構成表

器種		段階	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合(%)
土師器	杯A	杯A	4					
		杯A	1		15	42%		
		不明	18					
黒色土器A	杯	杯	1		14	39%		84%
		不明	7					
須恵器	杯	杯	9		8	19%		
		不明	4					
区別	須恵器	須恵器	1	1	3%			
		不明	1					
窯式		長胴形甕	5	5	100%	17%		
段階		須恵器	1	1	50%	5%		
区別		須恵器	1	1	50%	5%		1

第71表 SB64出土土器構成表

器種		段階	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合(%)
土師器	不明	不明	1	1	3%			
		不明	1					
黒色土器A	杯A	杯A	2		10	40%		1-2
		不明	7					3
須恵器	杯A	杯A	1		14	36%		4
		不明	2					5
須恵器	杯B	杯B	2		6	14%		6-7
		不明	2					8-9
区別	武蔵窯	武蔵窯	1	10	100%	27%		11
		不明	2					12-13
窯式		長胴形甕	8	8	100%	27%		11
段階		武蔵窯	1	10	100%	27%		11
区別		武蔵窯	1	10	100%	27%		11
区別		不明	2	2	100%	5%		12-13

第72表 SB65出土土器構成表

器種		段階	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合(%)
土師器	杯A	杯A	1					
		杯A	2		8	57%		
		不明	2					
		不明	2					
黒色土器A	杯A	杯A	1		3	22%		41%
		不明	2					
黒色土器B	不明	不明	1		1	7%		
		不明	1		2	14%		
窯式		長胴形甕	12					
段階		長胴形甕	2	19	100%	96%		
区別		須恵器	1	1	100%	3%		

第74表 SB67出土土器構成表

器種		段階	個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	種類別個体数	割合(%)
土師器	不明	不明	1	1	3%			
		不明	1					
黒色土器A	杯A	杯A	1		4	19%		
		不明	2					
黒色土器B	杯	杯	1		1	3%		
		不明	1					
須恵器	杯A	杯A	1		11	71%		78%
		不明	1					
須恵器	杯B	杯B	1		5	11%		
		不明	2					
窯式	長胴形甕	長胴形甕	4	5	100%	18%		
		不明	1					
段階		須恵器	1	1	100%	4%		
区別		須恵器	1	1	100%	4%		

第73表 SB66出土土器構成表

階の土器様相と把握される。

SB66

遺物は少なく、土師器の杯AⅡが1、杯AⅠ、椀1、器種不明1、小形甕1の6個体である。

SB70 (図版130, 第75表)

複数の段階の土器様相が混在するが、土師器杯AⅡ(1)と白磁碗Ⅳ類(9)に注目し、13段階と想定した。

SB72 (図版130, 第76表)

黒色土器A杯Aの底面調整がいずれも回転糸切りであること、黒色土器B椀があることから7段階と想定した。1を含め灰軸陶器椀はいずれも光ヶ丘1号窯式である。

SB73 (第77表)

杯Aの構成比から7段階の土器様相と把握される。なお、灰軸陶器椀の窯式は不明である。

SB75

土器は一切出土していない。

SB76 (図版130, 第78表, 第109図)

13段階を設定した資料の一つ。土師器杯Aの法量分化は明瞭である。杯AⅡは小型化が進み、口径と器高の比率が4.5:1以下のものもあり、皿Aとの区別が曖昧となる。12は羽釜Bに分類されるが、口径に対して器高が低く、鍋形の羽釜と言えよう。なお、11は光ヶ丘1号窯式の皿である。

分類	種類	数量	構成比	構成比(器高)	構成比(口径)	器高/口径
土師器	杯AⅡ	1	37	45%	80%	1.7
	杯AⅠ	1				
	椀	3				
	器	1				
	不明	24				
黒色土器	杯AⅡ	3	42	32%	80%	2.7
	杯AⅠ	3				
	椀	4				
	不明	20				
灰軸陶器	杯AⅡ	1	2	2%	25%	2.5
	器	1				
灰軸陶器	杯AⅡ	1	1	1%	15%	1.5
	器	1				
要次						
土師器	長形形盤	0	12	100%	43%	1.2
	小形甕	1				
計量						
灰軸陶器	不明	1	1	100%	1%	1.5

第77表 SB73出土土器構成表

分類	種類	数量	構成比	構成比(器高)	構成比(口径)	器高/口径
土師器	杯AⅡ	1	12	40%	80%	1.7
	杯AⅠ	1				
	不明	1				
黒色土器	杯AⅡ	1	6	22%	80%	2.7
	杯AⅠ	1				
	椀	1				
	不明	3				
灰軸陶器	杯AⅡ	1	7	17%	25%	2.5
	器	1				
輸入海産品	白磁碗	1	1	4%	15%	1.5
	器	1				
要次						
土師器	長形形盤	12	12	100%	30%	1.2
	小形甕	1				
計量						
灰軸陶器	不明	1	1	100%	1%	1.5

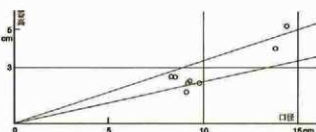
第75表 SB70出土土器構成表

分類	種類	数量	構成比	構成比(器高)	構成比(口径)	器高/口径
土師器	杯AⅡ	1	6	10%	80%	2.7
	杯AⅠ	2				
	不明	3				
黒色土器	杯AⅡ	12	49	28%	88%	2.7
	杯AⅠ	1				
	椀	1				
	不明	23				
黒色土器	杯AⅡ	1	2	3%	25%	2.5
	不明	1				
灰軸陶器	杯AⅡ	4	4	6%	15%	1.5
	器	2				
緑釉陶器	杯AⅡ	2	2	3%	3%	1.0
	器	2				
要次						
土師器	長形形盤	0	6	100%	8%	1.0
	小形甕	1				
計量						
灰軸陶器	不明	2	3	100%	4%	2.3
灰軸陶器	不明	1	1	6%	8%	1.0
	不明	1				

第76表 SB72出土土器構成表

分類	種類	数量	構成比	構成比(器高)	構成比(口径)	器高/口径
土師器	杯AⅡ	4	23%	80%	80%	2.7
	杯AⅠ	20				
	杯AⅡ	12				
	椀	1				
	器	1				
	不明	277				
黒色土器	杯AⅡ	4	39	19%	96%	2.7
	不明	32				
黒色土器	杯AⅡ	2	7	2%	25%	2.5
	不明	2				
灰軸陶器	杯AⅡ	2	2	1%	1%	1.0
	器	2				
灰軸陶器	杯AⅡ	1	6	2%	2%	1.0
	不明	2				
要次						
土師器	長形形盤	12	13	190%	2%	1.2
	小形甕	1				
計量						
灰軸陶器	不明	1	1	22%	1%	1.5
灰軸陶器	杯AⅡ	1	2	67%	1%	1.5
	不明	1				

第78表 SB76出土土器構成表



第109図 SB76土師器杯A法量分布

## SB77 (図版130, PL30, 第79表)

食器形態のみ11個体の出土であるが、13段階を設定した資料の一つである。1・2は口径8.6cmを測り、4は土師器皿Cである。

器種	器名	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	用途別個体数比	注目号
土師器	杯A	2	9	82%	100%	1-2
	杯A	1				
	皿C	1				
	皿B	2				
	不明	2				
黒色土器	杯A	2	2	18%	100%	5
	不明	1				

第79表 SB77出土土器構成表

## SB78 (図版131, PL29, 第80表)

杯Aの構成比などから7段階の土器様相と把握される。9は外反度の強い口縁部を持つ甕で、胴下半部にタキ裏・当て具痕が観察される。11はナデ調整の甕で、底部にヘラ削りが施される。

器種	器名	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	用途別個体数比	注目号	
土師器	杯A	2	5	46%	72%	1-2	
	不明	1					
	不明	1					
黒色土器A	杯A	3	4	36%	100%	5-6	
	不明	1					
灰釉器	杯A	2	2	18%	100%	7-8	
	不明	1					
部位		鼻部削り	3	4	100%	27%	9-11
土師器		小形甕	1				

第80表 SB78出土土器構成表

## SB79

遺物量は少なく、土師器の杯A Iが1、器種不明が4、黒色土器Aの器種不明が1、須恵器杯が1、小形甕が1の8個体である。

器種	器名	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	用途別個体数比	注目号		
土師器	杯A I	4	36	60%	59%	1-2		
	杯A	2						
	皿	2						
	不明	1						
	皿	2						
	不明	16						
	杯A	3						
黒色土器A	皿	11	20	33%	100%	3		
	不明	6						
黒色土器B	皿	1	1	2%	100%	4		
	杯B	1						
灰釉器	杯A	1	2	3%	100%	5		
	杯B	1						
灰釉器	不明	1	1	2%	100%	6		
	不明	1						
部位		鼻部削り	7					
土師器		小形甕	3	14	100%	19%		
		杯A	3					
		皿	1					
貯蔵		灰釉器	瓶口瓶	1	1	100%	3%	9

第81表 SB80出土土器構成表

## SB81 (図版131, PL31, 第82表)

2段階を設定した資料の一つ。1は杯A Iとしたが、口縁は内彎し、体部はヘラ削りされる。2は底部回転ヘラ削りの杯A IIで、5は高台と底部の差がほとんど無い杯Bである。杯Bはいずれも浅い盤状の器形が想定され、分量は未分化と考えられる。長胴形甕はロクロ(回転)調整を用いず、16・19の底面には木炭痕が残る。外面の調整にはヘラ削りとハケ目があり、19の内面には輪積み痕が観察される。球胴形甕(15)は輪積み痕が観察され、内外面とも丹念なヘラ磨きが施されている。小形甕には丸底(14)、平底(17)があり、両者とも底面はナデ調整である。13は口縁部の内外面が回転ナデ調整される。外面の調整については剥落が著しく不明である。貯蔵形態では壺蓋(9~11)があり、分量の差が明確で注目される。

器種	器名	個体数	種類別個体数	種類別個体数比	用途別個体数比	注目号	
土師器	杯A I	1	7	24%	54%	1	
	杯A II	1					
	杯B	2					
	不明	2					
黒色土器A	杯A I	1	9	29%	100%	1	
	杯A	2					
	不明	2					
須恵器	杯A	3	14	48%	100%	2-4	
	杯B	1					
	杯B	2					
	杯B	5					
	不明	1					
部位		鼻部削り	12				
土師器		壺蓋	9	20	100%	37%	10-10-10
		小形甕	6				11-11-12
貯蔵		壺蓋	3				9-11
須恵器		皿	1	5	100%	9%	12
		杯	1				

第82表 SB81出土土器構成表

## SB82 (第83表)

遺物量は少なく、羽釜の出土はあるものの、食器形態の中で黒色土器Aの占める割合が圧倒的であること

から6段階と想定される。

SB83 (図版132)

食器形態では、図示した以外に土師器の杯Aが1、器種不明が2、黒色土器Aの器種不明が4個体あるが、回転糸切りの須恵器杯A(2)や高杯B(3)、ハケ目十割りの小形甕(4)の存在から4段階と想定した。その他、長胴形甕が3、須恵器甕が2個体ある。

SB84

羽釜が1個体出土したのみである。

SB85 (図版132, 第84表)

土師器杯AⅡは口径9.5cm、器高2cmと皿Aとの区別が曖昧な法量を示すが、主体となる黒色土器A杯AⅡは口径13cmを中心に、口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階の土器様相と把握した。また、黒色土器A杯Aの底部調整は、回転糸切りが82%を占めている。1をはじめ灰釉陶器柄はいずれも光ヶ丘1号窯式である。2の窯式については不明である。

SB86 (第85表)

複数の段階の土器様相が混在しており、しかも法量を計測できる資料が無いため、段階を特定することは困難である。なお、灰釉陶器皿Bはいずれも光ヶ丘1号窯式である。

SB87 (図版132, PL30, 第86表, 第110図)

5段階を設定した資料の一つ。杯Aは黒色土器Aと須恵器で構成され、前者が83%を占める。黒色土器A

食器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体比率	用法別個体数	個体中%
土師器	杯	1	1	5%		
	杯AⅡ	1				
	杯AⅢ	2				1・2・4
黒色土器A	杯A	1	11	92%		84%
	杯	1				
	不明	5				
	杯A	1				
	杯Ⅴ	1				
須恵器	杯	4	9	43%		
	杯A	1				
	杯Ⅴ	1				
	杯Ⅵ	2				
甕	小形甕	7	11	100%	33%	12-15
	大形甕	4				9-12
家炊						
土師器	長胴形甕	7	11	100%	33%	12-15
土師器	小形甕	4				9-12
軒窓						
須恵器	皿	1	1	100%	3%	

第86表 SB87出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体比率	用法別個体数	個体中%
土師器	不明	1	1	9%		
	杯AⅡ	2				
黒色土器A	杯A	1	9	82%		69%
	杯	1				
	不明	2				
須恵器	杯A	1	1	3%		
家炊						
土師器	長胴形甕	7	11	100%	33%	
土師器	小形甕	4				
土師器	大形甕	1				

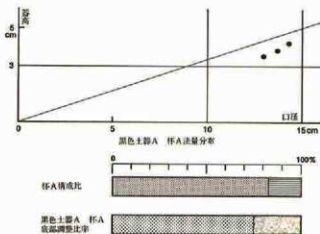
第83表 SB82出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体比率	用法別個体数	個体中%
土師器	不明	2	10	12%		
	杯AⅡ	9				
黒色土器A	杯A	6	60	76%		76%
	不明	60				
黒色土器B	杯	1	1	1%		
須恵器	杯	1	2	2%		
	不明	1				
灰釉陶器	皿	5	8	9%		1
	不明	2				
家炊						
土師器	長胴形甕	15	17	180%	19%	
	小形甕	1				
土師器	大形甕	1				
軒窓						
須恵器	長胴形甕	1	3	37%		7%
	不明	1				
灰釉陶器	杯	1				2
	皿	2	5	63%		
	不明	2				

第84表 SB85出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別個体比率	用法別個体数	個体中%
土師器	杯AⅡ	1				
	皿	2	6	17%		
	不明	2				
黒色土器A	杯A	2	20	59%		83%
	不明	16				
	杯	1	3	9%		
須恵器	杯	2				
	杯Ⅴ	2				
灰釉陶器	皿	1	6	16%		
	杯	4				
家炊						
土師器	長胴形甕	4	7	100%	17%	
	小形甕	1				
土師器	大形甕	2				

第85表 SB86出土土器構成表



第110図 SB87法量分布と杯A構成比・底部調整比率

杯Aの底面調整は、すべて手持ちへら削りで、口径と器高の比率が3:1以下である。長胴形甕は短く外反度の強い口縁部が特徴で、口縁部に回転ナデ調整を残すが、外面の調整はへら削りのみである。底面についてもへら削りである(13・15)。小形甕は胴下半及び底面にへら削りが施されるもの(10・12)と回転ナデ調整のみのもの(11)がある。11は底面ナデ調整である。

## SB88 (図版132, PL31, 第87表)

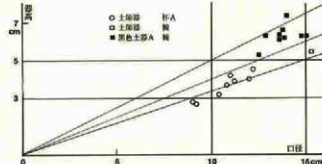
土師器杯A II (1)が口径8.9cm、口径10cm以下の碗(5は10.1cm)があること、黒色土器A盤B(7)があることなどから12段階の土器様相と把握される。4は本来碗であったが、高台剥落後ナデ調整し使用されている。8は光ヶ丘1号窯式の碗である。9は胴上半にカキ目を残し、他は回転ナデ調整の小形甕である。底部は回転糸切りである。10は端部が確認されないものの均一な胎土から甕とした。口縁部に瘤状の貼付が見られる。11は一部へら削りが残る羽釜で、12はタタキ調整の羽釜の底部である。

## SB91 (図版133, PL31)

遺物量が少なく、図示した以外には須恵器杯が2個体だけである。段階を特定することは困難であるが、3(土師器杯A I)が底部手持ちへら削りで、口径と器高の比率がほぼ3:1であることから6段階を想定した。4・5は相似形で、技法もほぼ同様な小形甕と長胴形甕である。

## SB92 (図版133, PL32, 第88表, 第111・112図)

土師器杯A IIの口径が10cm前後に集中することから11段階と把握される。1は口径9.2cmと小振りで、口縁が受け口状を呈するなど、13段階の様相を予想させ



第111図 SB92碗及び土師器杯A法量分布

土器	種類	階級	階級数	種類別階級数	種類別階級比率	階級別器体比率	器体中心
土師器	杯A II	1	1				
		2	1				
		3	2	23	47%		1-3
		4	2				
		5	4				
		6	9			84%	
黒色土器A	盤B	7	23	47%		4-6	
		8	1				
		9	1			7	
須恵器	杯	10	2	4%			
		11	1	2%		8	
要次							
土師器	杯	1	1				
		2	1				
		3	9	100%	100%		9
		4	1				10
		5	1				11

第87表 SB88出土土器構成表

土器	種類	階級	階級数	種類別階級数	種類別階級比率	階級別器体比率	器体中心
土師器	杯A II	1	22				2-10
		2	14				
		3	6	102	43%		11
		4	1				
		5	2				12
		6	1				
		7	2				13
		8	2				
		9	2				
		10	2				
黒色土器A	盤B	11	17	104	44%	90%	15
		12	11				16-25
		13	29				
		14	45				
須恵器	杯	15	5	25	11%		22
		16	2				
		17	10				23
		18	1				28-29
須恵器	杯	19	3	4	2%		26
		20	1				
須恵器	杯	21	3				
		22	1				26
要次							
土師器	杯	1	25				
		2	5	33	100%	12%	32-34
		3	2				32-35
		4	1				35
須恵器	杯	5	4	4	80%		
		6	1	1	20%	2%	31

第88表 SB92出土土器構成表

土器	種類	階級	階級数	種類別階級数	種類別階級比率	階級別器体比率	器体中心
土師器	杯A II	1	4				
		2	4				
		3	2	31	52%		
		4	1				
		5	2				
		6	18				
黒色土器A	盤B	7	6	21	36%	80%	
		8	18				
		9	2				
須恵器	杯	10	2	6	10%		
		11	2				
須恵器	杯	12	1	1	2%		1
		13	1				
要次							
土師器	杯	1	4				
		2	1	14	100%	19%	
		3	8				
		4	1				
須恵器	杯	5	1	1	100%	1%	
		6	1				

第89表 SB93出土土器構成表



第112図 SB92碗構成比



る。土師器碗(11)は盤Bとの区別が曖昧となり、黒色土器A碗には口径と器高の比率が2:1の深碗(17・21・22)がある。14は底部回転糸切りの鉢である。羽釜はいずれもヘラ削り調整で、32は羽釜Aの底部欠損後、端部を調整し皿として用いられている。36は端部が確認されないものの均一な胎土から甕と捉えた。タタキ調整後ナデ調整が施されている。なお、27は回転糸切りの杯で、31は胴下半及び底部ヘラ削り、33は内面ハケ目調整、34は底部回転糸切りの小形甕である。また、灰釉陶器の窯式はすべて不明である。

## SB93 (図版133, 第89表)

器形を復元できる資料が少ないため、段階を特定することは困難であるが、法量の計測できる土師器杯AIIの口径が9cmを中心とすること、黒色土器Aの杯が無いことなどから12段階を想定した。なお、1は虎浜山1号窯式の段皿(輪花皿)である。

## SB94

遺物の出土は無い。

## SB95 (図版133, 第90表)

土師器杯AIIの口径が10cmを中心とし、口径10cm以下の黒色土器A碗があり、黒色土器Aの盤Bがあることなどから12段階と把握した。なお、1は光ヶ丘1号窯式の碗である。

## SB96 (第91表)

土師器杯AIIの口径がいずれも10cmであることから11段階と把握される。

## SB97 (図版134, PL31, 第92表, 第113図)

2段階を設定した資料の一つ。須恵器杯Aの底部調整は、回転糸切りが確認されず、回転ヘラ削り(4・6)と手持ちヘラ削り(5・7~9)である。11は全貌は不明ながら、回転ナデ調整を頸部に残し、タタキ・ヘラ削りが施される長胴形甕である。小形甕は器形が二分されるが、ヘラ削りを基調とする。底面についてもヘラ削り調整である(13)。

## SB98 (図版134・135, PL32, 第93表, 第114図)

2段階を設定した資料の一つ。須恵器杯Aの底部調整は回転糸切りが確認されず、回転ヘラ削り(9~12)と手持ちヘラ削り(8・13)である。3は杯AIIとしたが、口縁は内彎し、体部はヘラ磨きされる。長胴形甕は短く外反度の強い口縁部と口径に比して器高が高いという特徴を持ち、28を除き口縁部のみ回転ナデ調整が施される。外面の調整はハケ目・削り・両者の併存があり、底面はヘラ削りである(26・27・29)。16には木葉痕が観察される。32は内外面ともハケ目調整後ナデ調整が加えられる浅鉢形甕である。小形甕には回転ナデ調整が観察されず、底部・底面ヘラ削り(18)とハケ目調整(19)のものがある。19の底面には木葉痕がある。

青銅		種類	数	確認割合	確認割合比較	確認割合比較	確認割合比較	不明
土師器	杯AII	18	73	63%				
	作込皿	13						
	皿	3						
	不明	49						
黒色土器A	杯A	4	23	29%				90%
	盤B	1						
	不明	18						
黒色土器B	不明	1	1	1%				
	杯	2						
	皿	3						
須恵器	杯	3	17	18%				
	杯	1						
	不明	6						
近畿陶器	杯	1	1	1%				1
黄銅		種類	数	確認割合 <td>確認割合比較 <td>確認割合比較 <td>確認割合比較 <td>不明</td> </td></td></td>	確認割合比較 <td>確認割合比較 <td>確認割合比較 <td>不明</td> </td></td>	確認割合比較 <td>確認割合比較 <td>不明</td> </td>	確認割合比較 <td>不明</td>	不明
土師器	長胴形甕	5	11	100%				9%
	小形甕	1						
	皿	1						
行徳	不明	1	1	100%			1%	

第90表 SB95出土土器構成表

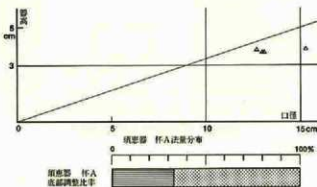


種類	器種	器体数	重量別器体数	体積別器体数	重量別器体数比	体積中%
土師器	杯A	4	18	67%	90%	
	杯B	7				
	不明	10				
黒色土師器	杯A	2	7	20%		
	杯B	5				
	不明	2				
須恵器	杯A	1	2	7%		
	杯B	1				
合計						
土師器	杯類	1	1	100%	4%	

第91表 SB96出土土器構成表

種類	器種	器体数	重量別器体数	体積別器体数	重量別器体数比	体積中%
土師器	杯A	2	11	42%	62%	1
	杯B	2				
	不明	3				
	不明	4				
黒色土師器	杯A	2	4	10%		3
	杯B	1				
	不明	1				
須恵器	杯A	1	11	42%		7
	杯B	4				
	杯A	2				
	杯B	2				
合計						
土師器	長柄形器	2	14	100%	30%	11
土師器	小形器	3				12~16
行旅						
須恵器	長柄器	1	1	100%	2%	10

第92表 SB97出土土器構成表



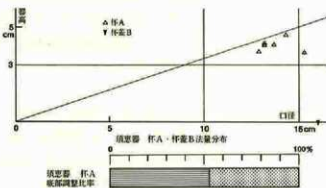
第113図 SB97法量分布と底部調整比率

種類	器種	器体数	重量別器体数	体積別器体数	重量別器体数比	体積中%
土師器	杯A	1	185	64%	88%	4
	杯B	2				
	不明	23				
	不明	76				
黒色土師器	杯A	11	56	31%		9~11
	杯B	3				
	不明	1				
須恵器	杯A	1	2	1%		9~10
	杯B	1				
須恵器	杯A	1	3	2%		12
	杯B	2				
須恵器	杯A	2	3	2%		12
	杯B	2				
合計						
土師器	長柄形器	14				19
土師器	長柄形器	1				15
土師器	小形器	3	21	100%	11%	12~18
須恵器	長柄器	1				11
須恵器	杯	2				14
行旅						
須恵器	長柄器	1	1	100%	1%	16

第94表 SB99出土土器構成表

種類	器種	器体数	重量別器体数	体積別器体数	重量別器体数比	体積中%
土師器	杯A	2	11	22%	59%	1
	杯B	1				
	不明	1				
	不明	2				
	不明	5				
黒色土師器	杯A	2	14	27%		2
	杯B	2				
	不明	3				
	不明	3				
	不明	3				
須恵器	杯A	1	26	51%		13
	杯B	7				
	杯A	3				
	杯B	1				
	杯B	6				
	杯B	2				
合計						
土師器	長柄形器	23				16~21~31
土師器	長柄形器	1	34	100%	40%	22
土師器	小形器	2				17
土師器	小形器	4				16~19
行旅						
須恵器	長柄器	1	1	100%	1%	15

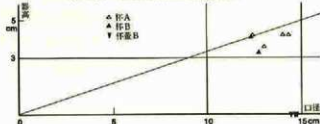
第93表 SB98出土土器構成表



第114図 SB98法量分布と底部調整比率

種類	器種	器体数	重量別器体数	体積別器体数	重量別器体数比	体積中%
土師器	杯	1	1	2%		1
黒色土師器	杯A	2	5	9%		2~8
	杯B	1				
	不明	1				
	不明	8				
須恵器	杯A	6	49	89%	72%	11~13
	杯B	2				
	杯B	3				
	杯B	21				
	杯B	3				
	杯B	1				
合計						
土師器	長柄形器	9				17~19~20
土師器	長柄器	2	16	100%	21%	19
土師器	小形器	3				14~15
行旅						
須恵器	杯	1				22
須恵器	杯	3	5	100%	7%	21~22
須恵器	杯	1				24

第95表 SB100出土土器構成表



第115図 SB100須恵器器器形法量分布

## SB99 (図版135, PL33, 第94表)

杯Aの構成比で土師器が63%を占めることから7段階と把握した。11は杯AⅡとしたが、口径と器高の比率が4.5:1以下であり、皿Aとすべきか。灰軸陶器碗の窯式は不明であるが、14は光ヶ丘1号窯式の皿Bである。19は回転ナデ調整の長胴形で、一部にヘラ削りが残る。15は口縁部がやや不明確であるが、底部にヘラ削りを残す回転ナデ調整の浅鉢形である。18は底部回転糸切りの小形甕である。16は東海地方の窯で製作された須恵器長頸壺である。

## SB100 (図版136, PL33, 第95表, 第115図)

4段階を設定した資料の一つ。食器形態は須恵器が主体を占め、須恵器杯Aの底部調整は回転糸切り未調整のみであり、杯Bには法量分化が窺える。長胴形甕は短く外反度の強い口縁部と口径に比して器高が高いという特徴を持ち、17を除き口縁部から胴上半まで回転ナデ調整が施される。18の底面の調整はナデである。19は緩やかな「コ」字状口縁の武蔵甕である。

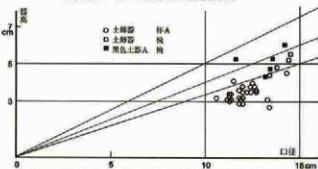
14・15は回転ナデ調整で、16は回転ナデ調整は用いられず、ハケ目・ヘラ削り(胴下半部)後、ナデ調整が加えられる小形甕である。14の底部は静止糸切り未調整で、15・16はナデ調整である。

## SB101 (図版136・137, PL34, 第96表, 第116図)

8段階を設定した資料の一つ。土師器杯AⅡは口径11.5cmと14cm前後に集中する。碗は土師器・黒色土器Aとも口径と器高の比率が2.5:1より小さいものが大半を占め、黒色土器A碗は大小2法量に分かれる。また、外面の口縁部のみ横へら磨きされるものが多い。14は底部に径2.2cmの穿孔があり、穿孔部はナデ調整により面取り加工されている。28は碗の可能性ある。32・33は明確な黒色処理が確認されないため土師器とした。底部は回転糸切りである。41は光ヶ丘1号窯式の折縁皿である。長胴形甕は胴部最大径付近まで回転ナデ調整を残し、以下をタタキ(49)・ヘラ削り(50)する。48の底面はヘラ削り調整である。小形甕は底部回転糸切りで、全面回転ナデ調整である。

器種	法量	器高数	口径調整法	口径調整法数	口径調整法割合	図版中%
土師器	杯AⅠ	11				1~27
	杯AⅡ	58				
	杯A	29				28~31
	皿	7	199	795		32
	碗	1				33
	甕	1				
	鉢	2				32-33
黒色土器A	皿	59				
	杯AⅠ	1				34
	杯AⅡ	1				
	杯A	2	60	225		35~39
	皿	19				40
	碗	1				
	不調	45				
須恵器	杯A	2	4	15		
	杯B	1				
	折縁皿	1	1	15		41
法量	高径比	口径	口径調整法	口径調整法割合	口径調整法割合	口径調整法割合
土師器	杯AⅠ	2	11	1995	45	41~50
土師器	杯AⅡ	3				51~54
須恵器	杯A	2	2	100%	15	55

第96表 SB101出土土器構成表



第116図 SB101碗及び土師器杯A法量分布

## SB102 (図版138, PL34, 第97表)

西坂1号窯式平期期の山茶碗(5)、羽釜B(6)があることから13段階と把握される。2は輪横み痕が観察されるナデ調整の土師器杯である。3は外面へら削り、内面横へら磨き、底面ナデ調整の土師器鉢である。

## SB103

遺物は少なく、黒色土器Aの器種不明が2、須恵

器種	法量	器高数	口径調整法	口径調整法数	口径調整法割合	図版中%
土師器	杯A	1				1
	杯B	1	5	50%		2
	鉢	1				3
	不調	2				4
黒色土器A	杯AⅠ	1	3	30%		
	杯AⅡ	2				
須恵器	杯	1	1	10%		
山梨陶	杯	1	1	10%		5
法量	高径比	口径	口径調整法	口径調整法割合	口径調整法割合	口径調整法割合
土師器	杯AⅠ	2	7	100%	30%	6
土師器	杯AⅡ	1				
須恵器	杯A	2				
須恵器	杯B	1	1	100%	10%	

第97表 SB102出土土器構成表

器杯2、小形甕が1、須恵器甕が1の6個体である。

### SB104 (図版138, 第98表)

食器形態で須恵器が過半数を占め、杯Bは法量分化が認められることから4段階と把握した。2は底面ナデ調整の杯Aである。3は須恵器杯BIVの可能性がある。14は短く外反度の強い口縁部が特徴的で、口縁部に回転ナデ調整を残し、ハケ目調整される。底面はナデ調整である。10は底部回転糸切りの小形甕である。長頸壺12・13は同一個体の可能性が高い。

表98						
分類	器種	器体数	種類別器体数	種類別器体数比	器体別器体数比	器体中%
土師器	杯A	1	3	17%		
	杯B	2				
	杯A	1				
	杯B	1				
	杯A	1				
黒色土器A	杯A	1	5	30%		62%
	杯B	2				
	杯A	1				
	杯B	1				
	杯A	1				
須恵器	杯A	1	9	53%		
	杯B	1				
	杯B	2				
量状						
土師器	長頸形壺	3	9	100%	30%	11-14
	武蔵甕	1				
	小形甕	3				
須恵器	長頸壺	2	2	100%	7%	12-12

第98表 SB104出土土器構成表

### SB105 (図版138・139, PL34, 第99表, 第117図)

4段階を設定した資料の一つ。食器形態の須恵器の占める割合は61%で、杯Aの構成比では黒色土器Aと須恵器が同率である。黒色土器A杯Aは法量分化しており、底面調整は手持ちヘラ削りが83%を占め(2・4~6)、口径と器高の比率が3:1以下である。須恵器杯Aの底部調整は回転糸切り未調整が40%と少ないものの(7:回転糸切り未調整, 8:回転糸切り後手持ちヘラ削り, 9:静止糸切り未調整)、杯Bは法量分化しており、杯蓋Bが対応する。長胴形甕は短く外反度の強い口縁部を持ち、口縁部及び胴上半部に回転ナデ調整を残し、ヘラ削り(24~26・28~30)・ハケ目(32・33)調整される。27は「コ」字状口縁の武蔵甕である。22は底部回転糸切りの小形甕である。

表99						
分類	器種	器体数	種類別器体数	種類別器体数比	器体別器体数比	器体中%
土師器	杯A	1	4	8%		
	杯B	2				
	杯A	2				
黒色土器A	杯A	6	16	31%		64%
	杯B	3				
	杯A	5				
	杯A	1				
	杯A	2				
須恵器	杯A	1	31	61%		7~9・13
	杯B	2				
	杯A	2				
	杯B	1				
	杯A	4				
	杯B	2				
	杯B	2				
量状						
土師器	長胴形甕	29	26	100%	32%	18~20・24
	武蔵甕	1				
	小形甕	3				
須恵器	長頸壺	1	3	100%	4%	13
	甕	2	2	100%	4%	23

第99表 SB105出土土器構成表

### SB106

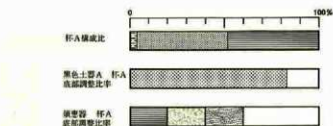
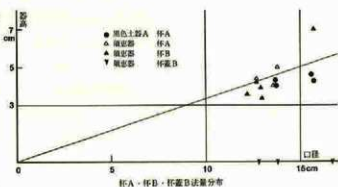
遺物量は極めて少なく、長胴形甕2個体である。

### SB107 (第100表)

法量を計測できる資料はないが、食器形態及び杯A

表100						
分類	器種	器体数	種類別器体数	種類別器体数比	器体別器体数比	器体中%
土師器	杯A	1	1	3%		
	杯B	1				
	杯A	1				
	杯B	1				
	杯A	1				
黒色土器A	杯A	1	4	34%		72%
	杯B	1				
	杯A	1				
	杯B	1				
	杯A	1				
須恵器	杯A	1	3	7%		
	杯B	1				
	杯A	1				
長胴形甕	杯A	1	1	3%		
量状						
土師器	長胴形甕	10	15	100%	28%	
	小形甕	5				

第100表 SB107出土土器構成表



第117図 SB105法量分布と杯A構成比・底部調整比率

のほとんどが黒色土器Aであることから6段階と把握した。

## SB108 (図版139, 第101表)

黒色土器A杯Aの口径と器高の比率が3:1以下に取まり、底部調整もみな回転糸切り未調整であることから7段階と把握した。1は大原2号窯式の灰軸陶器碗である。他の灰軸陶器の窯式は不明である。

器種	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)
土師器	杯A	1						
	土師	5	8		14%			
黒色土器A	杯A	5						
	杯	2	33		77%			
	土師	1						96%
黒色土器B	杯	1	1		25%			
	土師	1	2		75%			
灰軸陶器	碗	1						1
合計	底面調整	1						
土師器	底面調整	7	7		100%			14%

第101表 SB108出土土器構成表

## SB109 (第102表)

食器形態の65%を黒色土器Aが占め、杯Aの構成比でも73%を黒色土器Aが、20%を土師器が占める。黒色土器A杯Aの口径と器高の比率が3:1以下に取まり、底部調整も91%を回転糸切り未調整が占める。これらのことから、7段階の土器様相と把握される。

器種	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)
土師器	杯A	3						
	碗	2	24		32%			
黒色土器A	杯A	12						
	杯	9						
	杯A	1	48		60%			94%
	杯	7						
	杯	4						
	土師	20						
	杯A	1	2		35%			
合計	底面調整	1						
土師器	底面調整	1	5		100%			65%

第102表 SB109出土土器構成表

## SB110 (第103表)

土師器杯AIIの口径が10cmを中心とすることや羽釜の存在などから、11段階の土器様相と把握した。

器種	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)
土師器	杯A	11						
	杯A	4						
	杯	2	35		56%			
	杯	1						
	杯	1						
	小形	12						
黒色土器A	杯A	1	21		38%			88%
	杯	8						
黒色土器B	小形	12						
	小形	6	6		9%			
灰軸陶器	杯A	1						
	杯	4	8		44%			
	杯	1						
	小形	1						
合計	底面調整	3						
土師器	底面調整	3	10		100%			12%

第103表 SB110出土土器構成表

## SB111 (図版139, 第104表, 第118図)

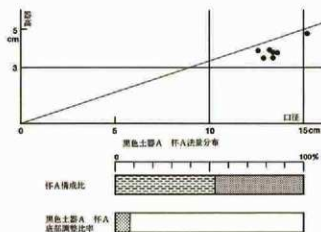
7段階を設定した資料の一つ。杯Aの47%を占める黒色土器Aは、I・IIの法量分化とともに口径と器高の比率が3:1以下で、底部回転糸切り未調整が92%を占めている。8は底面手持ちへら削りである。10の暗文風のへら磨きは口縁から底部中央に向かって施され、その意匠は渦を描くように曲線放射状を呈する。20は黒色土器Bの碗である。図化できる長胴形甕はなく、5は底部静止糸切り未調整の小形甕である。

## SB112

土器の出土は一切無い。

器種	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)	口径/器高(%)
土師器	杯A	3						
	杯	13						
	杯	1	31		30%			
	土師	4						4
黒色土器A	杯A	30						
	杯	8						
	杯	15	92		82%			97%
	土師	63						6~12
黒色土器B	杯	1	5		25%			12~19
	土師	4						30
合計	底面調整	3						
土師器	底面調整	3	4		100%			35%

第104表 SB111出土土器構成表



第118図 SB111法量分布と杯A構成比・底部調整比率

SB114 (図版140, PL35, 第105表, 第119図)

8段階を設定した資料の一つ。土師器杯AⅡは口径11.5~12cmを中心とする。土師器・黒色土器Aとも杯AⅡの口径と器高の比率は3:1よりさらに小さく、浅い印象を受ける。23は口径19cmと特大の杯AⅠである。土師器碗は体部が直線的に開くタイプのみで、法量分化もしていない。碗の構成比では黒色土器Aと同率を占め、土師器碗の製作・使用が本格的に軌道に乗ってきたと言えよう。24は暗文風のヘラ磨きが施され、単位性を帯びた意匠となっている。22はおそらく盤Aであろう。煮炊形態では堯類の占める割合が高く、長胴形碗の口縁部は長く、外反度が強くなる。胴部最大径以下にタタキ(34・35)・ヘラ削り(40)調整が施される。38は底部静止糸切り未調整の小形甕で、ヘラ削りが施される。41は鈎部以下をヘラ削り調整する羽釜A

表部					
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数比	口径中%
土師器	杯AⅠ	4	15	60%	8%
	杯AⅡ	112			
	碗	202			
	平皿	32			
黒色土器A	杯	4	7	28%	3%
	平皿	2			
	碗	4			
	甕	2			
黒色土器B	碗	2	2	8%	
須恵器	杯AⅠ	1	1	4%	
家炊					
土師器	長胴形甕	1	2	100%	7%
須恵器	甕	1			

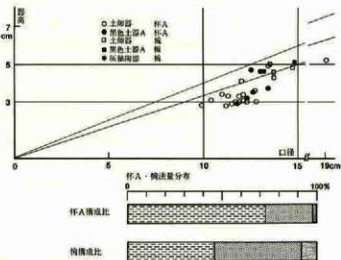
第106表 SB115出土土器構成表

表部					
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数比	口径中%
土師器	杯AⅠ	4	1356	72%	1~23
	杯AⅡ	112			
	杯	202			
	碗	32			
	平皿	4			
	甕	2			
	盤	11			
黒色土器A	杯	7	480	25%	48~57
	杯AⅠ	5			
	杯AⅡ	7			
	杯	44			
	碗	132			
	平皿	1			
	盤	1			
黒色土器B	平皿	5	36	3%	66~79
	平皿	11			
	杯A	10			
須恵器	杯	1	3	2%	85~87
	杯	3			
	平皿	1			
灰緑陶器	甕	19	21	1%	71~79
	甕	2			
家炊					
土師器	長胴形甕	27	31	100%	82
土師器	小形甕	12			
須恵器	甕	2			
須恵器	甕	2			
行量	甕	2	3	60%	1%
	甕	1			
	甕	1			
灰緑陶器	不明	2	2	40%	

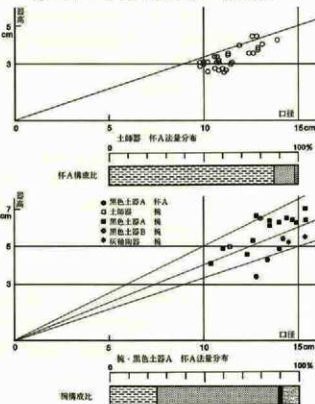
第107表 SB116出土土器構成表

表部					
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数比	口径中%
土師器	杯AⅠ	4	57	64%	37
	杯AⅡ	29			
	杯	11			
	碗	3			
	平皿	7			
黒色土器A	杯AⅠ	6	30	34%	8%
	杯	9			
	平皿	10			
	碗	5			
須恵器	杯AⅠ	1	1	1%	3%
灰緑陶器	甕	2	1	1%	2%
家炊					
土師器	長胴形甕	2	15	100%	34~39
土師器	小形甕	12			
須恵器	甕	2			
須恵器	甕	1			

第105表 SB114出土土器構成表



第119図 SB114法量分布と杯A・碗構成比



第120図 SB116法量分布と杯A・碗構成比



である。内面に輪積み痕が観察される。42は内外面とも回転ナデ調整のみの甌で、鈿等の剥落痕は一切見られない。

## SB115 (第106表)

法量を計測できる資料は無く、段階を特定することは困難であるが、食器形態の60%を土師器が占めることから7段階と想定される。

## SB116 (図版141・142, PL35・36, 第107表, 第120図)

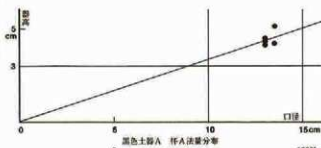
10段階を設定した資料の一つ。土師器杯AⅡは口径10.5cmと13cmの二極に集中する。碗はいずれも大小2法量あり、黒色土器Aが64%を占める。土師器碗は、大量量に体部が直線的に開くタイプを欠落する。黒色土器A碗は、単位・対称性を意識した暗文風のヘラ磨きが施されるものが顕著である。黒色土器B碗には腰が強く張る深碗がある(70)。灰釉陶器碗及び皿は、71を除きいずれも虎渓山1号窯式である。煮炊形態では個体数の上からは長胴形甕が多くを占めるが、主体となるのは羽釜Aと考えられる。羽釜Aにはヘラ削り(85・87)とタタキ調整(86)があり、底部は平底(85)とやや尖った丸底(87)がある。長胴形甕は、長く外反度の強い口縁部を持ち、胴下半はタタキ調整される(82)。小形甕は、底部ヘラ削り(83)の他、短く直立気味の口縁部を持つ法量の小さいもの(84)がある。

器種	段階	法量数	種類別法量数	種類別個体数	種類別個体数/総個体数	段階中率
土師器	杯A	2	3	14%	81%	
	杯B	2				
	杯AⅡ	7				
黒色土器A	杯A	1	16	72%		
	杯B	1				
	杯C	7				
須恵器	杯A	1				
	杯B	1	3	14%		
	杯C	1				
煮炊	羽釜形甕	2				
土師器	小形甕	2	5	100%	19%	
	小形甕	2				

## SB117 (図版143)

1段階を設定した資料の一つ。遺物は少なく、図示した以外に土師器の器種不明1、黒色土器Aの器種不明3、須恵器の器種不明2、長胴形甕2の10個体である。1は須恵器杯蓋Aで、2は須恵器壺蓋である。共に残存率20%以下の破片資料からの推定復元で、内外面に回転ナデ調整が観察される。

第108表 SB118出土土器構成表



## SB118 (第108表, 第121図)

食器形態・杯Aともに黒色土器Aが70%以上を占める。杯Aの口径と器高の比率は3:1に集中し、底部・底面調整では手持ちヘラ削りが50%を占めることから、6段階の土器様相と把握される。

第121図 SB118法量分布と杯A構成比・底部調整比率

## SB119 (第109表)

複数の段階の土器様相が混在しており、段階の特定は困難である。ただ、4段階の住居址(SB83)に切られており、ヘラ磨きが施される球胴形甕の存在に注目すれば、2段階以前と言えようか。

器種	段階	法量数	種類別法量数	種類別個体数	種類別個体数/総個体数	段階中率
土師器	杯AⅠ	1	2	29%	84%	
	杯AⅡ	1				
	杯AⅢ	1	1	14%		
須恵器	杯A	2	4	97%		
	杯B	2				
煮炊	球胴形甕	1				
	小形甕	1	4	100%		31%
	小形甕	1				
須恵器	杯	1	2	100%		10%
	杯	1				

第109表 SB119出土土器構成表



## SB120

土師器杯A・椀・盤、羽釜、甕が各1点出土した。

## SB121 (図版143, PL37, 第110表)

2段階を設定した資料の一つ。4は非ロクロ調整の杯Dで外面は横へら削りが施される。長胴形甕はいずれも非ロクロ調整で、輪積み痕が観察される。外面へら削りが主体で、底部調整についても手持ちへら削りが施される(13・15)。また、ハケ目が併用されるものがある(15)。16は球形形甕で、内外面ともへら磨きが施されている。

## SB122 (図版143・144, PL37, 第111表, 第122図)

8段階を設定した資料の一つ。杯Aの95%を土師器が占め、杯A IIの口径は11.5cmが中心となり、14cmも1点確認される(24)。土師器椀は1法量、黒色土器A椀は大小2法量認められる。灰釉陶器椀の窯式は光ヶ丘1号窯式(39)・大原2号窯式(40)があり、41の窯式は不明である。緑釉陶器椀の口縁部片が出土(PL92)。47は牛出形甕で、頸部及び括れ部以下に回転ナデ調整を残し、胴部はタタキ調整後、沈線施文、把手の貼付が施される。

## SB123 (図版145, PL38, 第112表, 第123図)

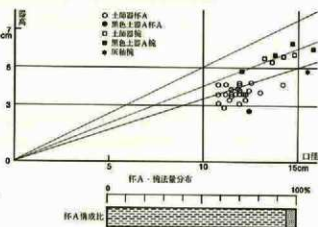
7段階を設定した資料の一つ。杯Aの67%を土師器が占め、杯A IIの口径は土師器・黒色土器Aとも12cmを中心とする。29は口径14.9cmであるが杯A Iとした。黒色土器A杯Aの底部調整は、いずれも回転ネ切り未

種類	器種	個体数	輪積み調整あり	輪積み調整なし	非ロクロ調整あり	非ロクロ調整なし	口径中心
土師器	杯A II	2	7	90%			1
	杯A	3					2・3
	不明	2					
	杯D	1					
黒色土器A	椀	2	5	30%	80%		4
	不明	3					5・6
	不明	3					
須恵器	杯A II	1	2	14%			5
杯B	1	7					
窯式							
土師器	長胴形甕	9	11	100%	44%		9-10-11
	球形形甕	1					16
	小形甕	1					11

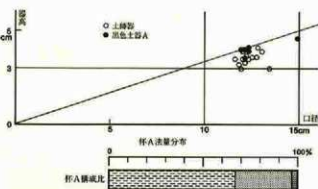
第110表 SB121出土土器構成表

種類	器種	個体数	輪積み調整あり	輪積み調整なし	非ロクロ調整あり	非ロクロ調整なし	口径中心
土師器	杯A II	24	529	67%			1~24
	杯A	96					25~29
	椀	9					
	皿	1					
	鉢	1					
	不明	408					
黒色土器A	杯A II	1	69	11%	98%		21
	杯A	5					23
	椀	8					32~38
	不明	50					
灰釉陶器	椀	8	10	1%			39-40
	付録器	1					41
	耳瓶	1					
緑釉陶器	椀	1	1	1%			
窯式							
土師器	長胴形甕	7	13	100%	1%		42~45
	小形甕	5					47
	半出形甕	1					
貯蔵							
灰釉陶器	大口瓶	1	1	100%	1%		

第111表 SB122出土土器構成表



第122図 SB122法量分布と杯A・椀構成比



第123図 SB123法量分布と杯A構成比

種類	器種	個体数	輪積み調整あり	輪積み調整なし	非ロクロ調整あり	非ロクロ調整なし	口径中心
土師器	杯A I	1	98	65%			1~12
	杯A II	23					17
	椀	5					14-15
	皿A	2					16
	皿B	1					
	不明	3					
黒色土器A	杯A I	1	45	30%	94%		20
	杯A II	9					18~23
	椀	9					25-29-30
	不明	19					31
須恵器	杯A	2	6	4%			
	杯B	2					
灰釉陶器	不明	2	2	1%			
窯式							
土師器	長胴形甕	4	8	100%	5%		23~25
	小形甕	4					
緑釉陶器	突帯西耳甕	1	1	100%	1%		23

第112表 SB123出土土器構成表

調整である。土師器皿Aは口径12cmを測る。灰軸陶器碗はいずれも破片資料で、窯式についても不明である。小形甕34の底部調整は回転糸切り未調整、35は手持ちへら削り後ナデ調整である。

SB124 (図版145, 第113表, 第124図)

杯Aの95%を土師器が占め、杯A IIの口径も11~12cmを測ることから8段階以降の土器様相と把握され、虎渓山1号窯式の段皿(1)、皿Bがあることから9段階の可能性も考えられる。緑軸陶器碗(2)を伴う。

SB125 (図版145・146, 第114表, 第125図)

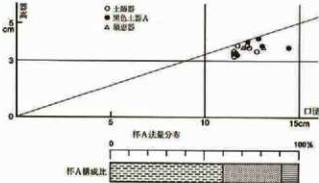
7段階を設定した資料の一つ。杯Aには土師器・黒色土器A・須恵器の三者があり、土師器が59%を占める。杯A IIの口径は12cm前後を中心とする。黒色土器A杯Aの底部調整は89%が回転糸切り未調整で、11は底部回転糸切りで、外周を手持ちへら削りする。土師器碗、黒色土器A鉢、緑軸陶器碗(PL92)がある。小形甕21の底部調整は回転糸切り未調整。突起部の形態が異なる突帯付四耳壺があり、28の縦孔は貫通する。25の窯式は不明である。

SB126 (第115表)

杯Aに土師器・黒色土器A・須恵器の三者が認められ、土師器杯A IIの口径が12cm前後を測ることから、7段階の土器様相と把握される。

SB127 (第116表)

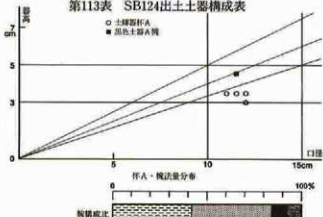
法量を計測できる資料が無いものの、杯Aに土師器・黒色土器A・須恵器の三者が認められ、土師器碗があることから7段階の土器様相と把握される。灰軸



第125図 SB125法量分布と杯A構成比

食器						
種類	器種	器口径	標準口径(器口径)	標準口径(器口径)	器口径(器口径)	器口径(中心)
土師器	杯A I	2	67	715	955	
	杯A II	14				
	皿A	5				
	皿	1				
	不明	40				
黒色土器A	杯A	1	32	245		
	碗	5				
	不明	10				
黒色土器B	碗	1	1	15		
	須恵器	作	1	15		
須恵器	鉢	1	2	25		1
	緑軸陶器	碗	1	1	15	2
常式						
土師器	長柄川俵	2	3	100%	35	
	小形甕	1				
行儀						
灰軸陶器	碗	2	2	100%	25	

第113表 SB124出土土器構成表



第124図 SB124法量分布と碗構成比

食器						
種類	器種	器口径	標準口径(器口径)	標準口径(器口径)	器口径(器口径)	器口径(中心)
土師器	杯A I	2	67	625	955	9
	杯A II	13				
	皿A	4				
	皿	5				
	不明	41				
黒色土器A	杯A I	2	31	295	955	11~13
	杯A II	6				
	碗	2				
	鉢	1				
黒色土器B	不明	18				17
	不明	1	1	15		16
須恵器	杯A II	2				18~19
	杯A	1	8	75		
須恵器	作	5				
	緑軸陶器	碗	1	1	15	
常式						
土師器	長柄川俵	11				20
	小形甕	3	15	100%	125	21~22~24
	皿	1				22
行儀						
須恵器	長柄川俵	1	3	75%	35	26
	突帯付四耳壺	2				27~28
灰軸陶器	長柄川俵	1	1	20%	25	25

第114表 SB125出土土器構成表

食器						
種類	器種	器口径	標準口径(器口径)	標準口径(器口径)	器口径(器口径)	器口径(中心)
土師器	杯A II	4	18	625	915	
	皿A	3				
	不明	11				
	不明	1				
黒色土器A	杯A	1	9	315		
	碗	5				
須恵器	不明	3				
	杯A II	2	2	75		
常式						
土師器	長柄川俵	3	3	100%	95	

第115表 SB126出土土器構成表

陶器碗の窯式は不明。緑釉陶器碗(PL92)がある。

## SB128

資料数は少なく、土師器の杯AⅡが1、器種不明5、黒色土器Aの碗が2、器種不明3の11個体である。

## SB129 (第117表)

器形を復元し得る資料が少なく、複数の段階の土器様相が混在していると考えられるが、土師器杯AⅡが口径9.8cm、器高2.4cmを測り、羽釜A・Bが出土していることから11段階以降の土器様相と推測される。灰釉陶器の碗・長頸瓶とも窯式は不明である。

## SB130 (図版146, 第118表)

杯Aに土師器・黒色土器A・須恵器の三者が認められ、土師器杯AⅡの口径が12cm前後、黒色土器A杯AⅡが12~14cmを測ることから、7段階の土器様相と把握される。1は光ヶ丘1号窯式の碗で、他の灰釉陶器については窯式不明である。

## SB136 (図版146, 第119表)

食器形態は須恵器が主体で、須恵器杯Aの底部調整が手持ちへら削り(1・3)であること、内外面にへら磨きが施される球形形変(4)があることなどから2段階の土器様相と把握される。

## SB137

資料数は極めて少なく、須恵器の杯が1、長胴形変が2の3個体である。長胴形変はハケ目調整である。

## SB142 (図版146・147, PL38, 第120表)

7段階を設定した資料の一つ。黒色土器A杯Aは口径と器高の比率が3:1以下で、底部調整はすべて回転糸切り未調整である。口径13cm大の黒色土器AⅢAが

食器						
種類	器種	器体数	焼成段階別数	焼成段階別比率	焼成段階別口径	口径中位
黒色土器A	鉢	1	1	14%		
	杯AⅡ	3				1~2
	杯A	1	6	86%		3
須恵器	杯	2				
	合計					
窯式						
土師器	灰釉形変	1	1	100%	11%	4
計						
須恵器	鉢	1	1	100%	11%	3

第119表 SB136出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	焼成段階別数	焼成段階別比率	焼成段階別口径	口径中位
土師器	杯AⅡ	4				
	杯A	2	23	46%		
	不明	1				
黒色土器A	杯A	1	21	45%		8%
	碗	5				
	不明	14				
須恵器	杯AⅡ	2	3	6%		
	杯A	1				
灰釉陶器	碗	1	1	2%		
	鉢	1	1	2%		
窯式						
土師器	長胴形変	5	7	100%	13%	
	小形変	2				

第116表 SB127出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	焼成段階別数	焼成段階別比率	焼成段階別口径	口径中位
土師器	杯AⅡ	5				
	杯A	5	23	45%		
	不明	12				
黒色土器A	杯AⅡ	1				
	杯AⅢ	3				
	杯A	5	24	47%		7%
	碗	5				
	鉢	1				
	不明	11				
須恵器	杯A	1	3	6%		
	杯	2				
灰釉陶器	碗	1	1	2%		
	鉢	1	1	2%		
窯式						
土師器	長胴形変	4				
	小形変	1	12	100%	18%	
	羽釜A	1				
	羽釜B	1				
須恵器	長頸瓶	1	1	50%		3%
	長頸瓶	1	1	50%		

第117表 SB129出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	焼成段階別数	焼成段階別比率	焼成段階別口径	口径中位
土師器	杯AⅡ	1				
	杯A	10	43	51%		
	鉢	1				
	不明	31				
	杯AⅠ	1				
黒色土器A	杯AⅡ	5				
	杯A	8	26	42%		8%
	碗	5				
	鉢	1				
	不明	16				
須恵器	杯	1	1	1%		
	碗	1				1
灰釉陶器	鉢	1	4	8%		2
	不明	2				
窯式						
土師器	長胴形変	2	8	100%	9%	
	不明	6				
計						
須恵器	球形形変	1	2	100%	2%	
須恵器	鉢	1				

第118表 SB130出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	焼成段階別数	焼成段階別比率	焼成段階別口径	口径中位
土師器	杯A	1	3	10%		1
	鉢	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯AⅡ	3				5~7
	杯A	3	23	80%		
	碗	2				8~9
	皿A	3				2~4
須恵器	不明	12				
	杯AⅡ(取皿)	2	3	10%		10~12
窯式						
土師器	長胴形変	6	8	100%	12%	13~18
	小形変	2				19~20

第120表 SB142出土土器構成表

あり、須恵器杯Aは所謂炊飯須恵器に相当する。長胴形壺は緩やかに外反する長い口縁部で、タキ調整を主体とする。底部はナデ調整である(14・16)。

SB143 (第121表)

杯Aの95%を土師器が占め、杯A IIの口径が11.5cmを中心に分布し、黒色土器A碗も大小2法量存在することから8段階の土器様相を示している。

食器						
種類	器種	個体数	種類別法量数	種類別法量%	種類別法量%	法相中%
土師器	杯A I	2	62	83%	90%	
	杯A II	27				
	碗	12				
	壺	3				
	不明	18				
	杯A II	2				
黒色土器A	碗	4	13	17%		
	壺	1				
	不明	1				
	不明	5				
家法						
土師器	長胴形壺	5	8	100%	10%	
	小形壺	3				
	壺	1				
貯蔵						
灰釉陶器	壺	1	1	100%	1%	1

第121表 SB143出土土器構成表

SB144

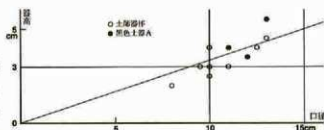
法量を計測できる資料が無く、黒色土器Aの杯A IIが4、杯A I、器種不明1、須恵器杯蓋Bが1、長胴形壺が1の8個体と遺物量も少ない。

食器						
種類	器種	個体数	種類別法量数	種類別法量%	種類別法量%	法相中%
土師器	杯A II	23	41	62%	90%	
	杯A I	5				
	壺	1				
	不明	6				
	不明	2				
	杯A II	2				
黒色土器A	碗	2	29	30%		
	壺	1				
	不明	3				
黒色土器B	壺	2	2	2%		
須恵器	杯	1	1	2%		
灰釉陶器	壺	1	1	2%	1	
家法						
土師器	小形壺	1	2	100%	3%	
	羽釜	1				
貯蔵						
灰釉陶器	壺	1	1	100%	1%	2

第122表 SB145出土土器構成表

SB145 (図版147, 第122表, 第126図)

土師器杯A IIの口径が10cmと12.5~13cmを中心に分布し、煮炊形態が羽釜と小形壺で構成されることから、混在は認められるものの、II段階の土器様相を示している。灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。



第126図 SB145杯A法量分布

SB146 (図版147, 第123表)

杯Aの93%を土師器が占めるものの、杯A IIの口径は12cmを中心とし、黒色土器Aにも杯A Iがあることから、混在は認められるものの、7段階の土器様相を示すものとして捉えたい。灰釉陶器は2が大原2号窯ないしは虎渓山1号窯式であり、他は窯式不明である。

SB147 (図版147, 第124表)

食器形態に法量を計測できる資料は無く、段階につ

食器						
種類	器種	個体数	種類別法量数	種類別法量%	種類別法量%	法相中%
土師器	杯A I	2	138	78%	90%	
	杯A II	42				
	碗	25				
	壺	5				
	壺	1				
	不明	61				
黒色土器A	杯A I	2	36	20%		
	杯A II	1				
	碗	17				
	不明	14				
灰釉陶器	壺	3	4	2%	1	
	段蓋	1			2	
家法						
土師器	長胴形壺	1	12	100%	6%	
	小形壺	9				
	羽釜	6				
貯蔵						
灰釉陶器	壺	1	1	50%	1%	3
灰釉陶器	壺	1	1	50%	1%	3

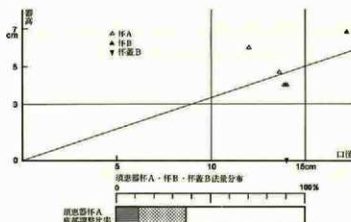
第123表 SB146出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	種類別法量数	種類別法量%	種類別法量%	法相中%
土師器	杯A I	1	19	60%	88%	
	杯A II	2				
	不明	11				
	不明	5				
黒色土器A	不明	2	2	7%		
	杯A II	2				
須恵器	杯	5	5	26%		
家法						
土師器	長胴形壺	2	4	100%	12%	
	羽釜	1				
	壺	1				

第124表 SB147出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	種類別法量数	種類別法量%	種類別法量%	法相中%
土師器	杯A II	3	16	59%	84%	
	杯A I	1				
	不明	11				
	不明	1				
黒色土器A	杯A II	2	7	20%		
	碗	2				
	不明	3				
須恵器	杯	3	3	11%		
灰釉陶器	壺	1	1	4%	1	
家法						
土師器	長胴形壺	5	5	100%	10%	
	壺	1				

第125表 SB148出土土器構成表



第127図 SBI149法量分布と底部調整比率

いは判然としな。1はヘラ削り調整で、銜端部を面取りする羽差Aであり、11段階に見られる手法である。なお、底部はSB150からの接合である。

#### SB148 (図版147, 第125表)

杯Aの67%を土師器が占め、杯A IIの口径も12cmを中心とすることから7段階の土器様相と把握される。灰釉陶器碗(1)は光ヶ丘1号窯式である。

#### SB149 (図版147・148, PL38, 第126表, 第127図)

4段階を設定した資料の一つ。食器形態の半数以上を須恵器が占め、須恵器杯A IIの63%が底部部回転糸切り未調整である(1は回転ヘラ切り)。長胴形甕は強く外反する短い口縁部を持ち、ハケ目調整主体とヘラ削りの併用がある。武蔵甕は緩やかなコ字状口縁を呈する。小形甕の底部(13)は、長胴形甕(14・15)と同様にヘラ削りされる。

#### SB150 (第127表)

杯Aに土師器・黒色土器A・須恵器の三者が認められ、土師器杯A IIの口径が12cm前後を測ることから、7段階の土器様相を示している。

#### SB151 (第128表)

法量の計測できる資料が土師器杯A IIのみで、口径が10cmを中心としていることから、混在は認められるものの、11段階と捉えておきたい。灰釉陶器碗の窯式は不明である。

食器						
種類	器種	器数	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%
土師器	不明	2	2	55		
	杯A I	2				
	杯A II	1				
	不明	7				
黒色土器A	不明	2	12	30%		
	不明	7				
須恵器	杯A II	4			60%	1~3
	杯A	5				5
	杯A I	1				6
	杯B	9	26	60%		6
	杯C	1				4
	不明	2				7
表状						
土師器	長胴形甕	14				8-11-14
	甕	2	20	100%	33%	13-10
	武蔵甕	2				9-10
	小形甕	2				12-13
計量						
須恵器	甕	1	1	100%	2%	

第126表 SBI49出土土器構成表

食器						
種類	器種	器数	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%
土師器	杯A II	2				
	杯A	3				
	不明	1	22	60%		
	不明	10				
黒色土器A	不明	2			80%	
	不明	5	12	32%		
須恵器	杯A	2				
	杯B	1	3	8%		
表状						
土師器	長胴形甕	6	6	100%	14%	

第127表 SBI50出土土器構成表

食器						
種類	器種	器数	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%
土師器	杯A II	2				
	杯A	3				
	不明	6	12	57%		
	不明	6				
黒色土器A	不明	2	2	10%		
	不明	1			100%	
須恵器	杯A II	1				
	杯A I	1				
	杯B	1	5	23%		
	杯C	1				
灰釉陶器	杯A	1				
	不明	1				
灰釉陶器	不明	2	2	10%		
	不明	2				
表状						
土師器	長胴形甕	8	8	100%	22%	

第128表 SBI51出土土器構成表

食器						
種類	器種	器数	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%
土師器	高杯A	1	1	6%		
	杯A I	1				
	杯A II	4				
	不明	4	12	70%		
黒色土器A	杯A	1			60%	
	不明	2				
須恵器	杯A	1	1	6%		
	杯B	1	2	12%		
灰釉陶器	不明	1	1	6%		
	不明	1				
表状						
土師器	長胴形甕	8	8	100%	22%	

第129表 SBI55出土土器構成表

食器						
種類	器種	器数	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%
土師器	杯A	2				
	杯A	1	4	31%		
	不明	1				
	不明	2				
黒色土器A	杯A II	1			72%	
	杯A	1	7	94%		
	不明	1				
	不明	2				
須恵器	杯A II	2	2	18%		
	不明	2				
表状						
土師器	長胴形甕	3	5	100%	38%	
	小形甕	2				

第130表 SBI62出土土器構成表



## SB155 (第129表)

法量を計測できる資料が少ないものの、食器形態の70%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率も3:1に近く、底部回転糸切り未調整が83%を占めることから6段階の土器様相と把握される。

## SB156

土師器碗が1個体出土したのみである。

## SB159

資料数は少なく、黒色土器Aの杯A I、杯A II、須恵器の杯BIV 1、杯B、杯蓋、長胴形甕、小形甕が各1個体出土している。

## SB160 (図版148, PL39)

図示した以外に甕が1個体出土した。1は口縁部に回転ナデ調整を残し、球形になる可能性がある。2は非クロク調整で、短い口縁部を持ち一部ヘラ削りが観察される長胴形甕である。底部調整は不明。

## SB161

資料数は極めて少なく、須恵器の杯A、杯B、長胴形甕が各1個体出土している。

## SB162 (第130表)

杯Aに土師器・黒色土器A・須恵器の三者が認められ、法量を計測できる資料が少ないものの、黒色土器A杯A IIの口径が12.5~13cmを測ることから、7段階の土器様相を示している。

## SB163 (図版148, PL39, 第131表)

土師器杯A IIの口径が12cm前後であるが、杯Aの80%を土師器が占め、土師器碗は個体数も多く、体部が直線的に開く器形のみであることから8段階の土器様相と捉えておきたい。灰釉陶器碗は、両者とも光ヶ丘1号窯式である。14の底部は回転糸切り後ヘラ削りが施されている。

全器						
種類	器種	個体数	検出回数	検出回数/検出数	検出回数/検出数	段階中%
土師器	杯A	6	118	82%	97%	1~5
	杯A	2				6~7
	碗	5				8
	不明	105				
黒色土器	杯A	1	23	10%	9%	9~11
	杯A	1				
	碗	1				
	不明	14				
灰釉陶器	碗	2	2	5%		12~13
窯式						
土師器	長胴形甕	2	3	100%	3%	
	小形甕	1				14
行藏						
調査数	鉢	1	1	100%	1%	

第131表 SB163出土土器構成表

## SB164

資料数は極めて少なく、長胴形甕2、小形甕1の3個体である。

全器						
種類	器種	個体数	検出回数	検出回数/検出数	検出回数/検出数	段階中%
土師器	杯A	1	6	33%	66%	
	不明	5				
黒色土器	杯A	4	8	45%	6%	
	不明	2				
須恵器	杯	1	2	11%	1%	
	杯蓋	1				
灰釉陶器	甕	1	2	11%		1
	碗	1				
窯式						
土師器	長胴形甕	2				
	小形甕	1	7	100%	27%	
	行藏	1				
行藏						
灰釉陶器	小甕	1	1	100%	4%	2

第132表 SB165出土土器構成表

## SB165 (図版149, 第132表)

複数の段階の様相が混在するが、法量の計測できる黒色土器A杯A IIの口径が12~13cmで、口径と器高の比率も3:1以下であることから7段階の土器様相と捉えておきたい。輪花手法の灰釉陶器皿B(1)は光ヶ丘1号窯式で、他については不明である。



## SB166 (第133表)

法量を計測できる資料が少ないものの、杯Aが黒色土器Aと須恵器で構成され、長胴形甕は短い口縁部が強く外反する器壁の薄いヘラ削り調整の甕が主体であることなどから4段階の土器様相と把握される。

土器	器種	器体数	焼成温度区分	焼成温度区分別比率	焼成温度区分別比率	口縁中径
黒色土器A	杯A I	1	6	50%	44%	
	杯A II	1				
	本器	4				
	杯B	2				
須恵器	杯	3	5	40%		
	杯	2				
要次						
土師器	長胴形甕	11	14	100%	96%	
	小形甕	3				

第133表 SB166出土土器構成表

## SB167 (図版149)

資料数が少なく、土師器の杯A IIが1、碗1、器種不明2、灰軸陶器碗1、長胴形甕2の7個体である。土師器杯A IIは口径12cm、灰軸陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

土器	器種	器体数	焼成温度区分	焼成温度区分別比率	焼成温度区分別比率	口縁中径
黒色土器A	不明	1	2	14%	61%	
	杯A II	2				
	杯B	3				
	不明	1				
須恵器	杯A IV	1	12	86%	39%	5
	杯	2				
	杯蓋	2				
	杯蓋	1				
	杯蓋	1				
要次						
土師器	長胴形甕	3	8	100%	35%	12
	灰軸陶器	1				
	武蔵窯	1				
	小形甕	3				
要次						
須恵器	短形甕	1	1	100%	2%	9

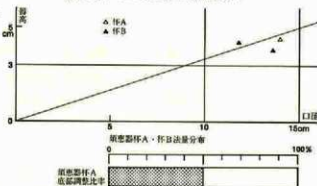
第134表 SB168出土土器構成表

## SB168 (図版149, PL39, 第134表, 第128図)

3段階を設定した資料の一つ。食器形態の中で須恵器の占める割合が圧倒的に多く、杯Aの底部調整は手持ちヘラ削り(2・3)と回転糸切り未調整(4)が共存し、杯Bには法量分化が窺える。武蔵窯は緩やかなコ字状口縁を呈し、浅鉢形甕はハケ目調整される。

土器	器種	器体数	焼成温度区分	焼成温度区分別比率	焼成温度区分別比率	口縁中径
土師器	長胴形甕	3	8	100%	35%	12
	灰軸陶器	1				
	武蔵窯	1				
	小形甕	3				
要次						
須恵器	短形甕	1	1	100%	2%	9

第134表 SB168出土土器構成表



第128図 SB168法量分布と底部調整比率

## SB169

土器の出土は一切無い。

## SB170 (第135表)

複数の段階の様相が混在するが、法量の計測できる須恵器杯A IIは口径13cm、器高3.1cmを測り、底部調整は回転ヘラ削り後手持ちヘラ削りであることから、3段階の土器様相と捉えておきたい。

土器	器種	器体数	焼成温度区分	焼成温度区分別比率	焼成温度区分別比率	口縁中径
土師器	杯A	1	8	53%	80%	
	不明	6				
	不明	2				
黒色土器A	不明	2	4	27%		
	不明	2				
黒色土器B	不明	1	1	7%		
須恵器	杯A II	1	2	12%		
	杯B	1				
要次						
土師器	長胴形甕	1	1	100%	5%	
	不明					
須恵器	甕	1	1	100%	5%	

第135表 SB170出土土器構成表

## SB171 (第136表)

複数の段階の様相が混在するが、法量の計測できる土師器杯A IIは口径が10cmと12.5・12.8cmを測ることから11段階の土器様相と捉えておきたい。灰軸陶器碗はいずれも窯式不明である。

土器	器種	器体数	焼成温度区分	焼成温度区分別比率	焼成温度区分別比率	口縁中径
土師器	杯A II	3	11	25%	94%	
	不明	8				
	杯A II	1				
	杯A	3				
黒色土器A	不明	4	26	58%		
	不明	18				
	杯A	2				
	不明	1				
須恵器	杯A	1	6	12%		
	杯B	1				
灰軸陶器	碗	2	2	4%		
	碗	2				
要次						
土師器	長胴形甕	2	2	100%	4%	
	不明					
灰軸陶器	碗	1	1	100%	2%	

第136表 SB171出土土器構成表

## SB174 (第137表)

複数の段階の様相が混在する。法量の計測できるものには口径10~11.5cmを測る土師器杯A II、口径11.8cmと14cmを測る黒色土器A杯A IIがあり、大形の黒色土器Aは口径と器高の比率が3:1に集中する。灰軸陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

SB175 (第138表)

杯Aに土師器・黒色土器A・須恵器の三者が認められ、黒色土器A杯A IIの口径が12.5cm前後を測り、杯Aは底部回転糸切り未調整が88%を示すことから、7段階の土器様相と把握される。灰軸陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

SB176

資料数は少なく、土師器の鉢・器種不明各1、黒色土器Aの杯A IIが2、杯A・器種不明各1、須恵器の杯A II・杯B各1、杯2、長胴形甕4の12個体である。

SB177

資料数は少なく、土師器の器種不明が1、黒色土器Aの碗が1、器種不明2、小形甕1の5個体である。

SB178 (第139表, 第129図)

杯Aの67%を土師器が占め、黒色土器Aとも口径12cmを中心に分布することから、7段階の土器様相と把握される。灰軸陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

SB179 (第140表)

法量を計測できた土師器杯A IIは、口径10cmと12~13cmを測ること、羽釜が2個体出土していることから11段階の土器様相と把握した。

SB180 (第141表)

複数の段階の様相が混在する。法量の計測できるものには口径9cmを測る土師器杯A II、口径13・13.3cmを測る須恵器杯A IIがあり、須恵器はいずれも底部回転糸切り未調整である。

表1					
器種	器種	器体数	口径測定済	口径測定済	口径測定済
土師器	杯A II	3	27	55%	86%
	杯A	1			
	碗	1			
	不明	22			
	不明	1			
黒色土器A	杯A I	1	22	43%	86%
	杯A II	1			
	碗	1			
	不明	1			
	不明	15			
家次					
土師器	長胴形甕	4	7	100%	12%
	小形甕	1			
	羽釜	2			
計量					
須恵器	甕	1	1	100%	2%

第140表 SB179出土土器構成表

表2					
器種	器種	器体数	口径測定済	口径測定済	口径測定済
土師器	杯A II	4	20	37%	90%
	杯A	5			
	碗	1			
	不明	10			
	不明	5			
黒色土器A	杯A II	2	31	37%	90%
	碗	4			
	不明	20			
須恵器	甕	1	2	4%	
	不明	1			
灰軸陶器	碗	1	1	2%	
家次					
土師器	長胴形甕	4	9	100%	10%
	灰軸甕	1			
	小形甕	1			

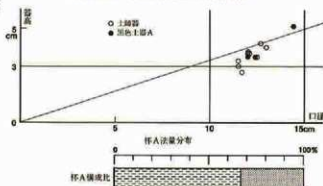
第137表 SB174出土土器構成表

表3					
器種	器種	器体数	口径測定済	口径測定済	口径測定済
土師器	杯A II	9	39	50%	90%
	杯A	10			
	碗	1			
	不明	1			
	不明	17			
	不明	2			
	不明	2			
黒色土器A	杯A I	2	36	40%	90%
	杯A II	2			
	碗	7			
	不明	14			
須恵器	杯A	1	2	3%	
	甕	1			
灰軸陶器	碗	1	1	1%	
家次					
土師器	長胴形甕	11	13	100%	14%
	灰軸甕	1			
	不明	1			
計量					
灰軸陶器	不明	1	1	100%	1%

第138表 SB175出土土器構成表

表4					
器種	器種	器体数	口径測定済	口径測定済	口径測定済
土師器	杯A II	19	64	76%	79%
	碗	8			
	甕	1			
	不明	45			
	不明	1			
黒色土器A	杯A II	3	27	29%	79%
	杯A	2			
	不明	19			
灰軸陶器	碗	1	1	1%	
家次					
土師器	長胴形甕	18	22	180%	19%
	小形甕	4			
須恵器	羽釜	1	2	100%	2%
	甕	1			

第139表 SB178出土土器構成表



第129図 SB178法量分布と杯A構成比

## SB181 (第142表)

資料数は少ないが、杯Aは黒色土器A・須恵器で構成され、黒色土器A杯Aの底部調整が手持ちへら削り・回転糸切り後手持ちへら削りであることから、5段階の土器様相と把握される。

## SB183 (図版149, 第143表, 第130図)

杯Aの75%を占める黒色土器Aは、底部回転糸切り未調整が57%で、6段階に近い様相を示す。しかし、土師器杯Aが16%と椀とともに定着を見せ、黒色土器A杯Aの口径と器高の比率も3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。図示した灰釉陶器の内、1・4が光ヶ丘1号窯式、2・3が黒笹90号窯式である。他については窯式不明である。

## SB184

資料数は極めて少なく、土師器杯A IIが2、窯式不明の灰釉陶器椀が1の3個体である。

## SB185 (図版149, PL39)

1段階を設定した資料の一つ。1・2は非クロ調整の黒色土器Aの杯Dで、内外面とも横へら磨きが施される。大小2法量が確認される。3は黒色土器Aの高杯Aで、杯部は杯Dと同様の器形を呈し、脚部は中夾である。へら削り後、杯部は内外面とも横へら磨きが施され、脚部は縦へら磨き後、端部を横へら磨きする。脚部内面はナデ調整される。4は須恵器杯Aで、底部調整等については不明である。5は長胴形甕で、外面にへら削りが施される。6は球胴形甕で、内外面ともへら削りが施されるが、口縁部内面は横へら磨きが施される。図示した以外に土器の出土は無い。

## SB186

土器の出土は一切無い。

## SB187 (図版149)

資料数は少なく、図示した虎渓山1号窯式の灰釉陶器椀(1)の他に、土師器の杯A IIが3、器種不明が1、長胴形甕が1の6個体である。なお、土師器杯A IIは口径12~12.5cmを測り、7段階の土器様相を示す。

種類	器種	器位数	焼成調整率(%)	焼成調整率(%)	焼成調整率(%)	調整中%
土師器	杯A II	1	28	50%		
	杯A	10				
	不明	17				
黒色土器A	杯	5	16	32%	82%	
	不明	11				
	杯A II	3				
須恵器	杯	2	6	12%		
	不明	1				
窯次						
土師器	長胴形甕	7	9	100%	13%	
	灰釉陶器	2				
行儀						
須恵器	椀	1	1	50%	3%	
灰釉陶器	椀	1	1	50%		

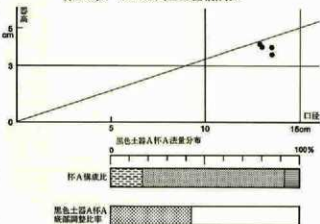
第141表 SB180出土土器構成表

種類	器種	器位数	焼成調整率(%)	焼成調整率(%)	焼成調整率(%)	調整中%
黒色土器A	杯A II	3	9	32%	72%	
	杯	1				
	不明	3				
須恵器	杯A II	3	19	60%		
	杯A	2				
	杯	2				
	杯	11				
	杯蓋	1				
窯次						
土師器	長胴形甕	6	9	100%	23%	
	灰釉陶器	1				
	小形甕	2				
行儀						
須恵器	椀	1	1	50%	5%	
灰釉陶器	椀	1	1	50%		

第142表 SB181出土土器構成表

種類	器種	器位数	焼成調整率(%)	焼成調整率(%)	焼成調整率(%)	調整中%
土師器	杯A II	2	22	20%		
	杯A	2				
	椀	2				
	盤	3				
	不明	13				
黒色土器A	杯A II	7	37	60%	89%	
	杯A	11				
	杯	2				
	盤	1				
	不明	36				
須恵器	杯A	2	2	2%		
灰釉陶器	椀	2	7	8%		4
	盤	3				
	不明	2				
窯次						
土師器	長胴形甕	5	7	100%	7%	
	小形甕	2				
行儀						
須恵器	椀	1	1	20%	4%	
灰釉陶器	椀	3	3	75%	6	

第143表 SB183出土土器構成表



第130図 SB183法量分布と杯A構成比・底部調整比率

SB189 (図版150, PL40, 第144表, 第131図)

7段階を設定した資料の一つ。杯Aの65%を土師器が占め、土師器杯AⅡの口径は12cmを、黒色土器A杯AⅡは12.5cmを中心とする。椀は、土師器が1法量で、黒色土器Aが大小2法量である。土師器皿Aは口径11.3~12.4cmを測る。28は土師器耳皿で、中央部に穿孔を有する。灰釉陶器椀はすべて光ヶ丘1号窯式である。瓶については窯式不明である。小形甕の底部調整はいずれも回転糸切り未調整である。

SB190 (第145表, 第132図)

杯Aの73%を土師器が占め、土師器杯AⅡの口径は12cmを、黒色土器A杯AⅡは13cmを中心とすることから7段階の土器様相と把握される。

SB191 (図版150・151, 第146表, 第133図)

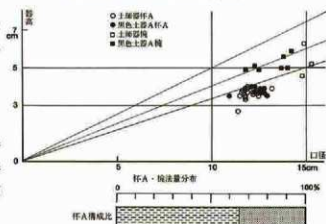
7段階を設定した資料の一つ。杯Aの42%を土師器が占め、杯AⅡの口径は12cmを中心とする。黒色土器A杯AⅡの口径は11.4~13.4cmを測り、杯Aの底部調整は98%が回転糸切り未調整で、口径と器高の比率も3:1以下である。土師器皿Aは口径12.7cmを測る。7は脚部に長方形の透かしを有する土師器盤Aである。17は光ヶ丘1号窯または大原2号窯式で、18・20は大原2号窯式、21と図示し得なかった椀1個体は光ヶ丘1号窯式である。19を含め他については窯式不明であ

数量						
種類	器種	器体数	重量(法量)	重量割合(%)	口径(法量)	器高(法量)
土師器	杯AⅠ	5	230	40%	97%	1~3
	杯AⅡ	44				
	杯A	35				
	椀	3				
	皿A	2				
	皿	4				
	盤	1				
黒色土器A	杯AⅠ	21	250	90%	8~15	
	杯AⅡ	50				
	杯A	44				
	椀	7				
	皿	2				
	皿	1				
	不明	130				
黒色土器B	杯AⅡ	1	11	2%	20	
	不明	10				
土師器	椀	1	1	15%	20~21	
灰釉陶器	椀	6	10	2%		
窯式						
土師器	長胴形甕	8	12	100%	2%	25
	小形甕	3				
	石罎	1				
計量						
灰釉陶器	椀	1	1	100%	1%	

第146表 SB191出土土器構成表

数量						
種類	器種	器体数	重量(法量)	重量割合(%)	口径(法量)	器高(法量)
土師器	杯AⅠ	24	375	57%	97%	1~20
	杯A	4				
	椀	5				
	皿A	7				
	皿	2				
	皿	1				
	不明	332				
黒色土器A	杯AⅠ	14	201	42%	32~41	
	杯A	1				
	椀	18				
	皿	5				
不明	243					
灰釉陶器	椀	5	5	1%		51
窯式						
土師器	長胴形甕	11	19	100%	2%	32~38
	小形甕	8				
	石罎	1				
計量						
灰釉陶器	椀	1	1	100%	1%	

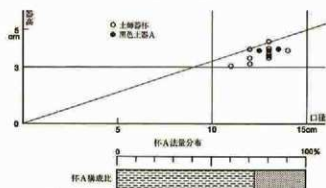
第144表 SB189出土土器構成表



第131図 SB189法量分布と杯A構成比

数量						
種類	器種	器体数	重量(法量)	重量割合(%)	口径(法量)	器高(法量)
土師器	杯AⅠ	1	70	64%	92%	1~10
	杯AⅡ	15				
	杯A	11				
	椀	5				
	皿	4				
	不明	34				
	不明	1				
黒色土器A	杯AⅠ	1	49	36%	8~15	
	杯AⅡ	3				
	杯A	6				
	椀	3				
	皿B	1				
不明	20					
窯式						
土師器	長胴形甕	2	8	100%	7%	25
	小形甕	5				
	石罎	1				
計量						
灰釉陶器	椀	1	1	100%	1%	

第145表 SB190出土土器構成表



第132図 SB190法量分布と杯A構成比

る。長胴形甕は外反度の弱く長い口縁部を持ち(25)、小形甕(24)の底部は回転糸切り未調整である。

### SB192 (図版151, PL41, 第147表, 第134図)

10段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIは、口径10.5cmを中心に分布し、口径12.6cmの7とは格差が見られる。口径と器高の比率が3:1を上回る深めの杯A IIがある。灰軸陶器碗はいずれも光ヶ丘1号窯式で、17は虎渓山1号窯式、18は大原2号窯式である。18は口縁端部に黒色の付着物が観察され、灯明皿として用いられていた可能性がある。小形甕は口縁部が短くなり(19)、羽釜Aはヘラ削り(20)・タタキ調整(21)が施される。

### SB193 (第148表)

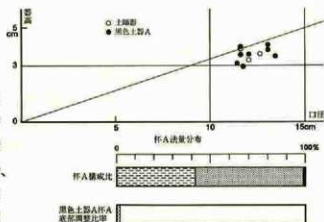
法量を計測できる資料が少ないため判然としないが、土師器杯A IIの口径が10.5cmを中心に分布することから10段階の土器様相と捉えておきたい。灰軸陶器の皿Bは光ヶ丘1号窯式、段皿は窯式不明である。

### SB194 (第149表, 第135図)

杯Aの41%を土師器が占め、土師器・黒色土器Aとも杯A IIの口径が12~13cmであることから7段階の土器様相と把握される。灰軸陶器の碗は、いずれも光ヶ丘1号窯式である。

### SB195 (第150表, 第136図)

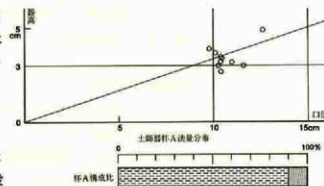
杯Aの45%を土師器が占め、土師器・黒色土器Aとも杯A IIの口径が13cmを中心に分布することから7段階



第133図 SB191法量分布と杯A構成比・底部調整比率

器種	器種	器体数	口径10.5cm以下	口径10.5cm以上	口径10.5cm以上	口径平均
土師器	杯A II	25	127	725	905	1~10
	杯A	15				
	碗	3				
	不明	81				
黒色土器A	杯A II	1	42	245	905	
	杯A	4				
	碗	8				
	不明	29				
黒色土器B	碗	2	2	15		13-14
	碗	4	6	35		15-16 17-18
要訳						
土師器	長胴形甕	2	7	100%	45	
	小形甕	2				
	羽釜A	1				
	羽釜	2				
要訳						
土師器	長胴形甕	4	10	100%	15	
	小形甕	6				
要訳						
灰軸陶器	碗	5	1	100%	15	

第147表 SB192出土土器構成表



第134図 SB192法量分布と杯A構成比

器種	器種	器体数	口径10.5cm以下	口径10.5cm以上	口径平均
土師器	杯A II	29	298	595	905
	杯A	43			
	碗	4			
	不明	7			
黒色土器A	杯A I	6	243	44%	905
	杯A II	58			
	杯A	26			
	碗	24			
黒色土器B	碗	1			
	碗	1			
灰軸陶器	不明	127			
	碗	2	7	1%	
要訳					
土師器	長胴形甕	4	10	100%	15
	小形甕	6			
要訳					
灰軸陶器	碗	5	1	100%	15

第149表 SB194出土土器構成表

器種	器種	器体数	口径10.5cm以下	口径10.5cm以上	口径平均
土師器	杯A I	1	27	80%	905
	杯A II	6			
	杯A	3			
	不明	17			
黒色土器A	杯A	1	16	30%	905
	碗	5			
黒色土器B	碗	1	1	2%	
	不明	10			
灰軸陶器	羽釜	1	2	4%	
	段皿	1			
要訳					
土師器	長胴形甕	1	3	100%	65
	小形甕	1			
	羽釜	1			
要訳					

第148表 SB193出土土器構成表



階の土器様相と把握される。

SB196 (図版151, 第151表)

法量を計測できる資料が土師器杯A 1点(1)のみで、段階を特定することは困難であるが、食器形態の90%を土師器が占めることから8段階以降と捉えておきたい。1は内面に赤色塗彩が施されている。灰釉陶器の窯式は不明である。

SB198 (図版151・152, PL41, 第152表, 第137図)

13段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は8.4~9.4cm、器高2.5~2.7cmを測り、口径10cm以下の黒色土器A碗、口径10.2cmの黒色土器B盤Bがある。灰釉陶器碗は虎渓山1号窯式である。羽釜Aは口縁部から胴部に至るまでタタキ調整が施されるもの(8)と胴部以下をヘラ削りするもの(9)がある。10については均一な胎土からヘラ削り調整の羽釜形甕と判断した。

SB199

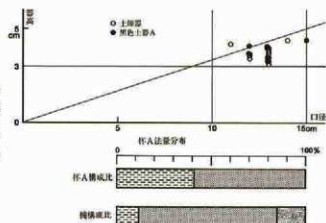
資料が少なく、土師器の杯A IIが2、碗1、器種不明2、黒色土器Aの碗が2、器種不明1、須恵器杯・長胴形甕・灰釉陶器瓶が各1の11個体である。

SB200 (図版152, 第153表, 第138図)

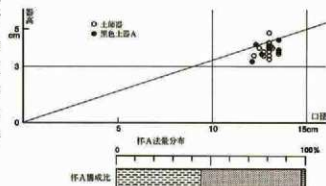
杯Aの39%を土師器が占め、土師器杯A IIの口径は12cmを、黒色土器A杯A IIは12.5cmを中心とすることから7段階の土器様相と把握される。灰釉陶器碗は2が光ヶ丘1号窯式であり、他は窯式不明である。

表群	器種	器高	器径	口径	口径中心	器底中心	器底中心	器底中心	器底中心
土師器	杯A I	2							
	杯B	33							
	杯A	18							
	盤	9	113						
	碗	1							
	杯	2							
	不明	48							
	杯A I	9							
	杯A II	32							
	杯A	21	109						
黒色土器A	碗	8							
	盤	2							
	不明	37							
須恵器	杯A II		2						
	杯A	1							
窯式									
土師器	長胴形甕	9	18	100%					
	小形甕	6							
計量									
灰釉陶器	長胴形甕	1	1	100%					

第150表 SB195出土土器構成表



第135図 SB194法量分布と杯A・碗構成比



第136図 SB195法量分布と杯A構成比

表群	器種	器高	器径	口径	口径中心	器底中心	器底中心	器底中心	器底中心
土師器	杯A I	1							
	杯A II	2							
	杯A	2	10						
	不明	13							
	不明	1							
黒色土器A	碗	1	1						
	灰釉陶器	碗	1	1					
窯式									
土師器	小形甕	1	1	100%					

第151表 SB196出土土器構成表

表群	器種	器高	器径	口径	口径中心	器底中心	器底中心	器底中心	器底中心
土師器	杯A II	3							
	杯A	3							
	杯A	2	10						
	盤	1							
	不明	9							
黒色土器A	杯	1	9						
	不明	1							
黒色土器B	碗	1	2						
	盤B	1	1						
須恵器	長胴形甕	1							
	小形甕	2							
	羽釜A	2	9						
	羽釜B	3							
灰釉陶器	碗	1	1						
	不明	1							
計量									
土師器	灰釉陶器	1	2	100%					
灰釉陶器	不明	1							

第152表 SB198出土土器構成表



第137図 SB198碗構成比



## SB207 (第154表)

杯Aの土師器が占める割合が30%とやや少ないものの、黒色土器A杯Aの口径と器高の比率が3:1以下で、すべて底部回転糸切り未調整であることなどから、7段階の土器様相と把握される。

## SB208 (第155表)

法量が計測できる土師器杯A IIの口径は11.5cmを中心とし、黒色土器Aに杯Aが見られないことなどから8段階の土器様相を示すものとして捉えたい。灰軸陶器の窯式の窯式は不明である。

## SB209 (第156表)

資料が少なく、土師器の器種不明が7、黒色土器Aの杯A IIが4、器種不明2、須恵器杯Bが1、灰軸陶器の器種不明1、小形埴土の17個体である。

## SB210 (図版152, 第157表, 第139図)

7段階を設定した資料の一つ。杯Aの52%を土師器が占め、土師器・黒色土器Aとも杯A IIの口径が12.5cmを中心に分布する。土師器皿Aは口径11.8cmを測り、異なった器形の盤Aがある。黒色土器A杯A IIはすべて底部回転糸切り未調整で、杯A I (15)が底部回転へ

表						
器種	器種	器位	器位	器位	器位	器位
土師器	杯A	3	12	37%	97%	
	不明	9				
	杯A II	6				
黒色土器A	杯A	2	20	63%		
	皿	1				
	不明	12				
表						
土師器	長形形埴土	1	1	100%	2%	

第154表 SB207出土土器構成表

表						
器種	器種	器位	器位	器位	器位	器位
土師器	杯A II	3	15	71%	90%	
	杯A	2				
	不明	10				
黒色土器A	皿	1	8	24%		
	不明	4				
灰軸陶器	皿	1	1	35		
表						
土師器	形埴土	1	1	100%	8%	

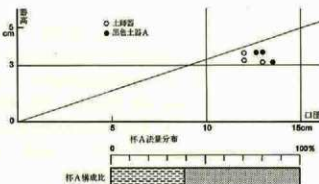
第155表 SB208出土土器構成表

表						
器種	器種	器位	器位	器位	器位	器位
土師器	不明	7	7	46%	95%	
	杯A II	4	6	40%		
	不明	3	1	7%		
須恵器	杯B	1	1	7%		
	不明	1	1	7%		
灰軸陶器	不明	1	1	7%		
表						
土師器	小形埴土	2	2	100%	12%	

第156表 SB209出土土器構成表

表						
器種	器種	器位	器位	器位	器位	器位
土師器	杯A II	3	46	30%	91%	
	杯A	10				
	皿	1				
	皿A	1				
	不明	29				
	不明	4				
黒色土器A	杯A	16	70	50%		
	皿	4				
	皿	1				
	不明	45				
灰軸陶器	皿	4	4	3%	1-2	
表						
土師器	長形形埴土	9	10	100%	8%	
	小形埴土	1				
表						
須恵器	杯	1	1	100%	1%	

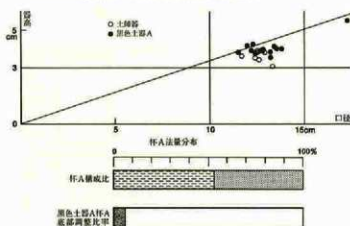
第153表 SB200出土土器構成表



第138図 SB200法量分布と杯A構成比

表						
器種	器種	器位	器位	器位	器位	器位
土師器	杯A	14	100	41%	97%	1-5
	杯A II	15				
	皿	1				
	皿A	1				
	皿	3				
	不明	2				
黒色土器A	杯A I	1	144	50%		
	杯A II	23				
	杯A	2				
	皿	1				
	皿	2				
	不明	106				
灰軸陶器	皿	2	3	1%	30	
表						
土師器	長形形埴土	6	7	100%	3%	41
	小形埴土	1				40

第157表 SB210出土土器構成表



第139図 SB210法量分布と杯A構成比・底部調整比率

ラ削りである。椀は体部が直線的に開く器形と内彎する器形がある。灰釉陶器の椀は大原2号窯式、皿Bは窯式不明である。

SB211 (第158表, 第140図)

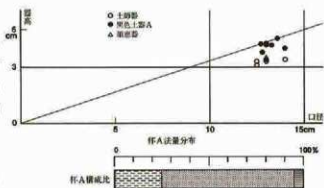
杯Aの土師器が占める割合が25%とやや少ないものの、土師器・黒色土器Aとも杯A IIの口径が13cmを中心に分布し、黒色土器Aでは口径と器高の比率が3:1以下になり、すべてが底部回転糸切り未調整であることから7段階の土器様相と把握される。

全群						
種類	器種	個体数	重量(約)g	重量(約)kg	口径(約)cm	器高(約)cm
土師器	杯A II	5	11	305	9.45	
	皿	1				
	不明	5				
	杯A I	1				
黒色土器A	杯A II	10	43	785	9.45	
	杯A	3				
	皿	2				
	器	1				
	皿	2				
	不明	23				
灰釉陶器	杯A II	1	1	25		
家状						
土師器	長脚形椀	1	2	100%	3%	
	小形椀	1				
計量						
重量	量	1	1	50%		
灰釉陶器	量	1	1	50%	2%	

第158表 SB211出土土器構成表

SB216 (図版153, PL41, 第159表, 第141図)

7段階を設定した資料の一つ。杯Aの40%を土師器が占め、黒色土器A杯A IIの口径は13cmを中心に分布する。すべて底部回転糸切り未調整、口径と器高の比率は3:1以下である。土師器皿Aは口径13.6cmを測る。小形甕は胴部下半をヘラ削りするものがあり(18・20)、そうでないものは底部回転糸切りである(17・19)。22は短い口縁部の長脚形甕で、胴上半まで回転ナデを残す。異形のため牛出形甕となる可能性もある。23はヘラ削り調整の浅鉢形甕である。



第140図 SB211法量分布と杯A構成比

SB217 (第160表)

法量を計測できる資料が土師器杯A IIのみで、口径が9cmを測り、黒色土器Aの杯Aが無いことなどから12段階と捉えておきたい。灰釉陶器椀の内、一つは光ヶ丘1号窯式で、他については不明である。

全群						
種類	器種	個体数	重量(約)g	重量(約)kg	口径(約)cm	器高(約)cm
土師器	杯A II	10	29	395	9.95	
	杯A	7				
	皿	3				
	皿A	1				
	不明	8				
黒色土器A	杯A I	2	46	615	9.95	14・15
	杯A II	20				
	杯A	3				
	皿	1				
	皿	2				
不明	19					
家状						
土師器	長脚形椀	4	10	100%	12%	21・22
	浅鉢形甕	1				
	小形甕	5				
計量						
重量	量	1	1	100%	2%	

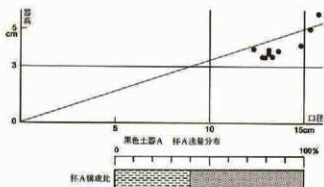
第159表 SB216出土土器構成表

SB218 (図版153)

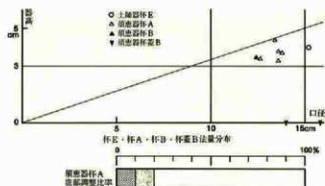
土師器の杯A IIが2、器種不明1、須恵器杯1、大原2号窯式の灰釉陶器椀が1の5個体である。

全群						
種類	器種	個体数	重量(約)g	重量(約)kg	口径(約)cm	器高(約)cm
土師器	杯A I	1	24	67%	9.95	
	杯A II	2				
	杯A	3				
	不明	11				
黒色土器A	皿	4	10	28%	9.95	
	不明	6				
灰釉陶器	皿	2	2	25		
家状						
土師器	長脚形椀	2	8	100%	18%	
	小形甕	1				
	皿	4				
計量						
重量	量	1	1	100%	2%	

第160表 SB217出土土器構成表



第141図 SB216法量分布と杯A構成比



第142図 SB219重量分布と底部調整比率

## SB219 (図版153, PL41, 第161表, 第142図)

3段階を設定した資料の一つ。食器形態は須恵器が主体で、杯Aの底部調整は回転糸切り未調整(4~6)が80%を占め、回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り(2)、回転糸切り後手持ちヘラ削り(3)がある。1は非クロク調整の土師器杯Eであり、体部から底部までヘラ削りが施される。4は高台接地面より底部が下にはみ出す器形を呈する須恵器杯BIVである。10は外面ハケ目調整が施される横椀で、平形の被蓋部内面には指押さえ痕が顕著である。灰軸陶器碗の内、一つは虎渓山1号窯式で、他は窯式不明である。

## SB220 (第162表)

杯Aはすべて土師器で構成され、杯A IIの量も口径が10cm前後と13cm前後に分布し、羽釜もあることから11段階と捉えておきたい。灰軸陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

## SB224 (図版154)

資料が極めて少なく、図示した長胴形甕以外に小形甕が1個体出土しただけである。1は外反度が強く短い口縁部をもつヘラ削り調整の長胴形甕である。

## SB225

ハケ目調整の長胴形甕片のみが出土している。

## SB226

土器の出土は一切無い。

## SB227 (図版154, PL42, 第163表)

4段階を設定した資料の一つ。食器形態は須恵器が

食器					
種類	器種	個体数	重量(調整率)	重量調整率(%)	調整率
土師器	杯E	1			925
	杯A	7	9	105	
	不明	7			
	杯A	3			
黒色土師A	杯	2	9	105	2-3-6-8
	不明	4			
黒色土師B	不明	3	3	95	4
	杯A II	7			
須恵器	杯A	3			34
	杯B IV	1			
	杯E	3			
	杯	13			
	杯蓋	2			
	杯蓋	3			
	不明	2			
灰軸陶器	碗	2	2	95	5
表次					
土師器	小形甕	3	3	100%	95
須恵器	甕	1	2	100%	95
須恵器	杯	1	2	100%	95

第161表 SB219出土土器構成表

食器					
種類	器種	個体数	重量(調整率)	重量調整率(%)	調整率
土師器	杯A II	5			905
	杯A	2			
	杯E	1	16	67%	
	杯	4			
	不明	4			
黒色土師A	杯	3	6	255	45
	不明	2			
須恵器	杯蓋	1	1	45	45
灰軸陶器	碗	1	1	45	45
表次					
土師器	羽釜	1	1	100%	45

第162表 SB220出土土器構成表

食器					
種類	器種	個体数	重量(調整率)	重量調整率(%)	調整率
土師器	杯A II	1	1	145	1
黒色土師A	杯A II	1	1	145	2
須恵器	杯A II	2			64%
	杯A	1	5	72%	
須恵器	杯	1			3
表次					
土師器	長胴形甕	1	2	100%	18%
須恵器	小形甕	1	2	100%	18%
須恵器	甕	1	2	100%	18%
須恵器	碗	1	2	100%	18%

第163表 SB227出土土器構成表

食器					
種類	器種	個体数	重量(調整率)	重量調整率(%)	調整率
土師器	杯A II	1	4	40%	91%
	杯A	2			
	不明	1			
黒色土師A	杯A II	1			90%
	杯A	1	5	90%	
	不明	2			
灰軸陶器	碗	1	1	10%	10%
表次					
土師器	長胴形甕	1	1	100%	9%

第164表 SB230出土土器構成表

食器					
種類	器種	個体数	重量(調整率)	重量調整率(%)	調整率
土師器	杯A II	10			92%
	杯A	10			
	杯	2	43	92%	
	不明	2			
	不明	18			
黒色土師A	杯A I	2			98%
	杯A II	9	26	37%	
	杯A	4			
須恵器	不明	11			15
灰軸陶器	碗	1	1	15	15
表次					
土師器	小形甕	1	1	100%	15%
須恵器	甕	1	1	100%	15%

第165表 SB233出土土器構成表

主体で、杯Aの底部調整はいずれも回転糸切り未調整である。2は底部手持ちヘラ削りの黒色土器A杯A IIである。7は外反度が強く短い口縁部をもつヘラ削り調整の長胴形甕で、8は底部回転糸切りの小形甕である。10は外面タタキ調整の横瓶で、平形の被蓋部内部には指押さえ痕が認められる。

表165						
種類	器種	器体数	底調整済器体数	底調整済器体率	底調整済器体率	底調整済器体率
土師器	杯A I	1			19	68%
	杯A	3				
	甕	2				
	瓶	1				
	不明	12				
黒色土器A	杯A II	2			9	32%
	杯A	1				
	甕	1				
	瓶	5				
合計						
土師器	長胴形甕	1			3	100%
土師器	小形甕	1				
土師器	横瓶	1				

## SB229

土器の出土は一切無い。

第166表 SB236出土土器構成表

表166						
種類	器種	器体数	底調整済器体数	底調整済器体率	底調整済器体率	底調整済器体率
土師器	杯A II	3			25	36%
	杯	7				
	甕	2				
	瓶A	1				
	不明	12				
黒色土器A	杯A II	11			40	60%
	杯A	6				
	甕	2				
	不明	21				
灰釉陶器	甕	1	1	25%		
合計						
土師器	長胴形甕	1			2	100%
土師器	小形甕	1				

## SB230 (第164表)

法量を計測できる資料が少ないものの、杯Aはほぼ同数の土師器・黒色土器Aで構成されることから7段階と捉えておきたい。灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式。

第167表 SB237出土土器構成表

表167						
種類	器種	器体数	底調整済器体数	底調整済器体率	底調整済器体率	底調整済器体率
土師器	杯A II	8			20	36%
	杯A	2				
	甕	2				
	不明	8				
	杯A I	3				
黒色土器A	杯A II	17			36	64%
	杯A	2				
	甕	2				
	不明	12				
合計						
土師器	長胴形甕	1			6	100%
土師器	小形甕	4				
土師器	甕	1				

## SB233 (第165表)

杯Aの57%を土師器が占め、土師器・黒色土器Aとも杯A IIの口径が12cmを中心に分布し、黒色土器Aでは口径と器高の比率が3:1以下になり、すべてが底部回転糸切り未調整であることから7段階の土器様相と把握される。灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

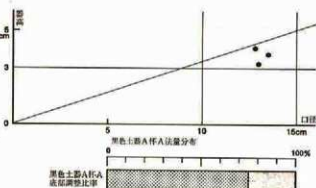
第168表 SB241出土土器構成表

表168						
種類	器種	器体数	底調整済器体数	底調整済器体率	底調整済器体率	底調整済器体率
土師器	甕	1	1	12%	7	88%
	杯A II	3				
	杯A	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A II	1			7	80%
	甕	1				
	甕	1				
合計						
土師器	長胴形甕	2	2	100%	2	20%
土師器	不明	2				

## SB236 (第166表)

杯Aはほぼ同数の土師器・黒色土器Aで構成され、杯A IIの口径はいずれも12.5cmを中心とすることから7段階の土器様相と捉えておきたい。

第169表 SB242出土土器構成表



## SB237 (第167表)

杯Aの土師器が占める割合が37%とやや少ないものの、黒色土器A杯A IIの口径は12.5cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1以下で、すべて底部回転糸切り未調整であることなどから、7段階の土器様相と把握される。灰釉陶器碗の窯式は不明である。

第143図 SB242法量分布と底部調整比率

## SB238

土師器杯A IIが1、黒色土器A甕3、黒色土器Bの器種不明1、大原2号窯式の段皿が1の6個体である。

## SB241 (第168表)

杯Aの土師器が占める割合が31%とやや少ないもの

食器						
種類	器種	個体数	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	区別中心
土師器	杯A II	5				94%
	杯A	1	7	70%		
	不明	1				
黒色土器A	杯A	2	3	30%		
	杯	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	1	1	100%	8%	
野原						
灰釉陶器	甕	1	1	100%	8%	

第170表 SB248出土土器構成表

の、土師器・黒色土器Aとも杯A IIの口径が13cmを中心に分布し、黒色土器Aでは口径と器高の比率が3:1以下になり、すべてが底部回転糸切り未調整であることから7段階の土器様相と把握される。

## SB242 (図版154, PL42, 第169表, 第143図)

5段階を設定した資料の一つ。食器形態に須恵器は認められないが、黒色土器A杯A IIの底部調整が回転糸切り後手持ちへら削りと手持ちへら削り(2・5・6)で、口径と器高の比率も3:1以下に集中する。4は須恵器杯Bの器形を模倣した黒色土器Aである。7は口径縁部が短く、底径の小さい底部回転糸切り未調整の鉢である。8は外反度が強く短い口径縁部をもつへら削り調整の長胴形甕である。

## SB248 (第170表, 第144図)

資料数は少ないものの、土師器杯A IIの法量分布から12段階と把握される。

## SB249 (図版155, 第171表)

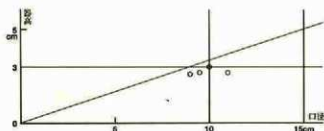
複数の段階が混在するが、土師器杯A IIの口径が10cmと13cmを中心に分布することから11段階と把握される。1は大原2号窯式の皿Bである。

## SB252 (第172表)

法量を計測できる資料は少ないが、土師器・黒色土器Aとも、杯A IIの口径が13cmを測ることから、7段階と捉えておきたい。

## SB253 (第173表)

杯Aの85%を土師器が占め、杯A IIの口径も11.5cmを中心に分布することから8段階と把握される。灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。



第144図 SB248土師器杯A法量分布

食器						
種類	器種	個体数	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	区別中心
土師器	杯A II	8				90%
	杯A	2	13	52%		
	杯	1				
	不明	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A II	6				44%
	杯A	1	11			
	杯	2				
灰釉陶器	碗B	1	1	4%		1
家炊						
土師器	小形甕	1	1	100%	4%	

第171表 SB249出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	区別中心
土師器	杯A II	2	4	31%		53%
	不明	2				
	不明	2				
黒色土器A	杯A	2	9	89%		
	杯A	7				
野原						
灰釉陶器	瓶	1	1	100%	7%	

第172表 SB252出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	区別中心
土師器	杯A I	4				91%
	杯A II	13				
	杯A	6	41	77%		
	杯	5				
	皿	1				
	不明	2				
	不明	19				
黒色土器A	杯A II	1				21%
	杯A	3	11			
	杯	6				
	不明	1				
灰釉陶器	瓶	1	1	2%		
家炊						
土師器	長胴形甕	2				7%
	小形甕	2	4	100%		
	野原	1				
野原						
灰釉陶器	広口瓶	1	1	100%	2%	

第173表 SB253出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	区別中心
土師器	杯A II	20				96%
	杯A	15	12%	66%		
	杯	3				
	不明	85				
	不明	85				
黒色土器A	杯A II	9				31%
	杯A	6	50			
	杯	7				
	器B	1				
	杯	2				
灰釉陶器	不明	32				2%
	瓶	4	8	2%		
	不明	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	2	3	100%	2%	34
	小形甕	1				

第174表 SB255出土土器構成表

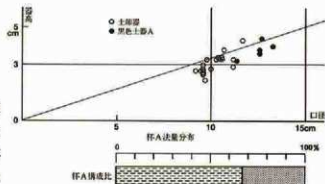


## SB254

土器の出土は一切無い。

## SB255 (図版155, PL42, 第174表, 第145図)

11段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は10cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1を上回る深めのものが見られる(9・16・19)。黒色土器A杯A IIが一定量ある。31は黒色土器Aの盤Bである。33はSB257と接合した黒笹90号窯式の椀で、他の灰軸陶器の窯式は不明である。



第145図 SB255法量分布と杯A構成比

## SB256 (第175表)

土師器杯A IIの口径が10cmと13cmを中心に分布することから11段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率が3:1を上回る深めのものが見られ、黒色土器A杯Aが一定量ある。灰軸陶器の窯式は不明である。

土器	器種	器高	口径	口径器高比率	口径器高比率	口径器高比率	口径器高比率
土師器	杯A II	5			126	905	905
	杯A I	31					
	皿	2					
	不明	99					
黒色土器A	杯A II	1		15	115	905	
	杯A I	4					
	鉢	1					
	不明	9					
灰軸陶器	皿	1		2	15		
	不明	1					
窯次							
土師器	長頸明燗	4	4	100%	2%		
行概							
灰軸陶器	皿	1	1	100%	1%		

第175表 SB256出土土器構成表

## SB257 (図版155, 第176表, 第146図)

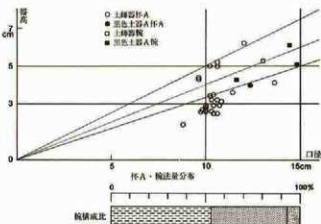
土師器杯A IIの口径が10cmと13cmを中心に分布することから11段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率が3:1を上回る深めのものが見られ、黒色土器A杯Aが一定量ある。椀の構成比では土師器が高率を占めている。灰軸陶器椀は黒笹90号窯式の可能性が、皿は虎渡山1号窯式の可能性がある。長頸瓶(1)は光ヶ丘1号窯式である。

土器	器種	器高	口径	口径器高比率	口径器高比率	口径器高比率	口径器高比率
土師器	杯A II	2		622	905	976	976
	杯A I	69					
	杯A II	27					
	皿	5					
	皿	4					
	皿	1					
	不明	513					
黒色土器A	杯A II	1		146	19%		
	杯A I	31					
	皿	0					
	不明	107					
灰軸陶器	皿	1		4	1%		
	皿	3					
窯次							
土師器	長頸明燗	17	17	100%	2%		
行概							
灰軸陶器	長頸瓶	4	4	100%	1%		

第176表 SB257出土土器構成表

## SB270 (図版155, 第177表)

杯Aの46%を土師器が占め、杯A IIの口径は、土師器・黒色土器Aとも12.5cmを中心に分布することから7段階の土器様相と把握される。1は灰軸陶器長頸瓶の口頸部で、それも含め灰軸陶器の窯式は不明である。



第146図 SB257法量分布と椀構成比

## SB327 (図版155・156, PL43, 第178表, 第147図)

6段階を設定した資料の一つ。杯Aの94%を黒色土器Aが占め、口径と器高の比率は3:1に集中し、93%が底部回転糸切り未調整である。土師器に椀が無く、黒色土器Aに口径12.5cmを測る皿Bがあり、口径22~26cmを測る鉢がある。鉢は体部下半から底部まで手持ちへら削りされる。30・31は黒色土器Bの無台・有台の耳皿である。34~38は、36を除き光ヶ丘1号窯式の



灰軸陶器である。緑釉陶器(PL92)も出土している。長胴形甕は、直立気味で長い口縁部を持つヘラ削り調整の甕(40)が主体で、浅鉢形甕も同様にヘラ削り調整が施されている(41)。42は横瓶で、外面は、タタキ調整、平形の被蓋部内面には工具による押さえ痕が観察される。灰軸陶器瓶類(43・44)の窯式は不明である。

## SB334 (第179表)

複数の土器様相が混在しており、段階を特定することは困難である。法量の計測できる土師器杯A IIは口径13cm、器高4.3cmを測り、山茶碗は丸石2号窯式に平行する時期のものと考えられる。

## SB335 (第180表)

複数の土器様相が混在しており、段階を特定することは困難である。法量の計測できる土師器杯A IIは口径8.5cm、器高2.3cmと口径15cm、器高4.3cmを測る。食器形態の器種から見て、6もしくは7段階か。灰軸陶器柄は光ヶ丘1号窯式である。

表題						
種類	器種	個体数	検出回数(年代)	検出回数(年代)	検出回数(年代)	法長中比
土師器	杯A II	1	3	21%	81%	
	瓶	1				
	不明	1				
	不明	1				
黒色土師A	杯A	1	3	21%	81%	
	不明	2				
	杯A II	1				
須恵器	杯A	2	7	50%	81%	
	杯蓋	2				
	不明	1				
山岳形	瓶	1	1	9%		
法長						
土師器	長胴形甕	5	6	100%	20%	
	小形甕	1				
評鑑						
須恵器	甕	1	2	57%	13%	
	甕	1				
灰軸陶器	瓶	1	1	33%		

第179表 SB334出土土器構成表

表題						
種類	器種	個体数	検出回数(年代)	検出回数(年代)	検出回数(年代)	法長中比
土師器	杯A I	1	12	40%	58%	
	杯A II	2				
	杯A	3				
	甕	1				
	不明	3				
黒色土師A	杯A	1	3	12%	58%	
	瓶	2				
須恵器	杯A	5	10	38%	58%	
	杯蓋	2				
	杯蓋	3				
灰軸陶器	瓶	1	1	8%		
法長						
土師器	長胴形甕	7	12	100%	27%	
	小形甕	3				
	甕	2				
評鑑						
須恵器	甕	3	6	80%	15%	
	甕	2				
	甕	1				
灰軸陶器	不明	1	1	14%		

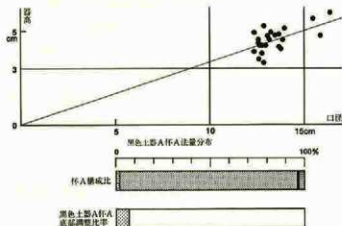
第180表 SB335出土土器構成表

表題						
種類	器種	個体数	検出回数(年代)	検出回数(年代)	検出回数(年代)	法長中比
土師器	杯A II	15	150	43%	88%	
	杯A	22				
	甕	5				
	杯A	7				
	杯A	1				
	甕	1				
	不明	104				
	不明	1				
	杯A I	1				
	杯A II	14				
黒色土師A	杯A	28	194	54%	88%	
	瓶	11				
	杯A	1				
	甕	1				
黒色土師B	不明	138	1	1%		
	不明	1				
須恵器	杯蓋	1	3	1%		
	不明	2				
灰軸陶器	瓶	1	3	1%		
	不明	2				
法長						
土師器	長胴形甕	27	48	100%	11%	
	小形甕	11				
評鑑						
須恵器	甕	1	1	50%	1%	
	長胴形	1				
灰軸陶器	長胴形	1	1	50%	1%	1

第177表 SB270出土土器構成表

表題											
種類	器種	個体数	検出回数(年代)	検出回数(年代)	検出回数(年代)	法長中比					
土師器	杯A II	3	18	25%	93%	1					
	杯A	2									
	杯	10									
	不明	3									
	杯A I	24									
	杯A II	120									
	杯A	92									
	黒色土師A	瓶					13	897	91%	93%	23-26 24-24
		杯A					2				
		甕					19				
杯		2									
黒色土師B	不明	255	5	1%	93%	29 27-28					
	杯A I	1									
	杯蓋	2									
須恵器	杯A	8	13	23%	93%	30-31					
	不明	2									
	不明	2									
灰軸陶器	瓶	12	13	2%	93%	34-37					
	杯A	1									
灰軸陶器	瓶	1	1	1%		38					
法長											
土師器	長胴形甕	43	45	100%	6%	40					
	小形甕	1									
評鑑											
須恵器	甕	3	5	90%	1%	42					
	甕	1									
灰軸陶器	長胴形	1	5	50%	1%	41					
	瓶	4									

第178表 SB327出土土器構成表



第147図 SB327法量分布と杯A構成比・底部調整比率

表						
種類	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
土師器	杯A II	10			27	45%
	杯A	6				
	杯	3				
	不明	2				
黒色土器A	杯A II	4			30	51%
	杯	16				
	杯	1				
	不明	9				
須恵器	杯A	1	1		2%	
灰被陶器	皿B	1	1		2%	
変状						
土師器	長胴形壺	1				
	瓶	1	3		9%	
	羽釜形甕	1				1%

第181表 SB336出土土器構成表

SB336 (図版156・157, PL43, 第181表, 第148図)

7段階を設定した資料の一つ。杯Aの76%を土師器が占め、杯A IIの口径は、土師器が12cm、黒色土器Aが12.5cmを中心に分布する。黒色土器A杯Aはすべて底部回転糸切り未調整で、口径と器高の比率も3:1以下に集中する。黒色土器Aの碗は大小2法量認められる。18は光ヶ丘1号窯式の皿Bである。17・18はいずれもヘラ削り調整の皿で、18は口縁部及び端部に回転ナゲ調整を残す、鐙が全周する羽釜形甕である。

SB337 (第182表)

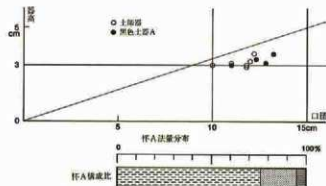
法量を計測できる資料が無いので、段階を特定することは困難である。土師器・黒色土器Aに杯A IIがあり、土師器に碗があることから7もしくは8段階か。

SB338 (図版157・158, PL44, 第183表, 第149図)

6段階を設定した資料の一つ。杯Aの75%を黒色土器Aが占め、口径と器高の比率は3:1に集中し、86%が底部回転糸切り未調整である。土師器に碗が無く、黒色土器Aに口径13.4~13.7cmを測る皿Bがあり、口縁部が外反する鉢がある。鉢は体部下半から底部まで手持ちヘラ削りされる。長胴形壺は、37を除いてほとんどのものが、直立気味で長い口縁部を持つヘラ削り調整の甕である。小形甕には大小2法量が認められ、体部下半にヘラ削り調整が施されるものが主体を占める。底部については、28の回転糸切りを除き、手持ちヘラ削りである。43・44は光ヶ丘1号窯式である。

SB339

資料数が少なく、土師器杯Aが1、黒色土器A杯Aが2、須恵器杯が1、羽釜が1の5個体である。



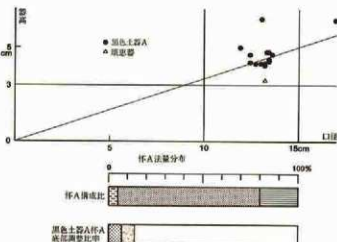
第148図 SB336法量分布と杯A構成比

表						
種類	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
土師器	杯A II	1			8	67%
	杯A	3				
	杯	1				
	不明	3				
黒色土器A	杯A	1			4	33%
	碗	1				
変状						
土師器	長胴形壺	1				
	瓶	1	3		100%	20%
	羽釜	1				

第182表 SB337出土土器構成表

表						
種類	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
土師器	杯A II	1			1	
	杯	1	2		7%	
	不明	1				
黒色土器A	杯A II	1				
	杯A	14			22	70%
	皿B	3				52%
	不明	3				
須恵器	杯A II	3				
	杯A	1	5		17%	
	杯A II	1				2%
変状						
土師器	長胴形壺	7				34~38
	羽釜	8	16		100%	31%
	羽釜形甕	1				37~39
須恵器	瓶	1	3		80%	42
	甕	2				40~41
	長胴形壺	1				42
灰被陶器	小瓶	1	3		80%	44
	瓶	1				

第183表 SB338出土土器構成表



第149図 SB338法量分布と杯A構成比・底部調整比率

## SB340 (第184表)

杯Aは黒色土器Aと須恵器で構成され、黒色土器Aの口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階と把握される。灰軸陶器の窯式は不明である。

## SB341 (第185表)

杯Aは土師器と黒色土器Aと須恵器の三者で構成されるが、黒色土器Aの口径と器高の比率が3:1を上回ることから6段階と把握される。なお、土師器杯A IIは口径13cm、器高4.5cmと口径13.3cm、器高3.3cmを測る。灰軸陶器椀は光ヶ丘1号窯式で、皿Bの窯式は不明である。

## SB342 (第186表, 第150図)

杯Aの40%を土師器が占め、杯A IIは土師器・黒色土器Aとも口径が12.5cmを中心に分布することから、7段階の土器様相と把握される。黒色土器Aの杯Aは口径と器高の比率が3:1以下に集中し、底部については、回転糸切り未調整が70%で、手持ちヘラ削りが30%を占める。

## SB343 (図版158, 第187表)

土師器杯A IIの口径が9.5cmと13cmを中心に分布することから12段階の土器様相と把握される。口径15cm、器高5cmを測る黒色土器A整Bがある。1・2は丸石2号窯式の段皿で、椀は光ヶ丘1号窯式である。

## SB344

土器の出土は一切無い。

表187 SB343出土土器構成表						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A II	4	13	30%	80%	
	杯A	1				
	不明	5				
	不明	5				
黒色土器A	杯A II	1	19	21%	82%	
	杯A	4				
	椀	10				
	整B	2				
黒色土器B	不明	0	1	1%		
	不明	1				
灰軸陶器	椀	1	4	9%		
	段皿	2				
	不明	1				
窯式						
土師器	長柄形椀	0	10	100%	18%	
	小形椀	1				
	皿	2				
須恵器	椀	1				
	不明	1	1	100%	2%	
計						
土師器		10	100%	18%		
須恵器		1	1	100%	2%	

第187表 SB343出土土器構成表

表184 SB340出土土器構成表						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	不明	1	4	7%	64%	
	杯A II	2				
黒色土器A	整B	1	19	20%	82%	
	不明	1				
	杯A	4				
	杯A II	4				
須恵器	杯A	4	9	60%		
	杯A II	1				
灰軸陶器	椀	1	1	7%		
窯式						
土師器	長柄形椀	8	12	100%	43%	
	小形椀	4				
計						
土師器		12	100%	43%		
須恵器		1	1	100%	3%	

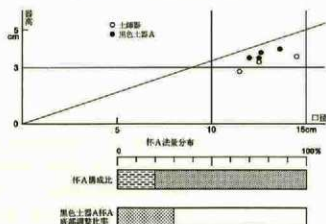
第184表 SB340出土土器構成表

表185表 SB341出土土器構成表						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A II	4	19	21%	82%	
	杯A	1				
	不明	12				
	不明	12				
黒色土器A	杯A II	3	18	60%	82%	
	杯A	0				
	椀	2				
	整	2				
黒色土器B	不明	0	1	1%		
	不明	1				
須恵器	杯A	1	6	7%		
	杯A II	1				
	杯A II	1				
灰軸陶器	椀	2	4	5%		
	段皿	2				
窯式						
土師器	長柄形椀	8	17	100%	19%	
	小形椀	9				
計						
土師器		17	100%	19%		
須恵器		1	2	100%	2%	

第185表 SB341出土土器構成表

表186表 SB342出土土器構成表						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A II	4	9	18%	90%	
	不明	4				
	不明	4				
黒色土器A	杯A II	10	37	82%	90%	
	杯A	6				
	椀	7				
	不明	14				
窯式						
土師器	長柄形椀	2	10	100%	18%	
	小形椀	2				
計						
土師器		10	100%	18%		
須恵器		1	1	100%	2%	

第186表 SB342出土土器構成表



第150図 SB342口径分布と杯A構成比・底部調整比率

## SB345 (図版158)

資料数は少なく、土師器の盤Bが2、盤が1、緑釉陶器の椀が1、羽釜が1の5個体である。1は削り出し高台で、胎土が灰緑色を呈する緑釉陶器椀である。

食器						
種類	器種	個体数	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率
黒色土器A	杯A I	1				
	杯A II	0				
	杯A	4	19	90%	90%	
	盤	3				
	椀	1				
須恵器	杯A II (緑釉)	1	1	5%		
状況						
土師器	盤	1	1	100%	95%	

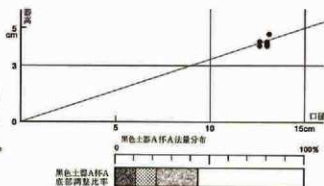
第188表 SB345出土土器構成表

## SB346

土器の出土は一切無い。

## SB347 (第188表, 第151図)

黒色土器Aが食器形態の主体を占め、杯Aの口径と器高の比率も3:1に集中することから6段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの56%が底部回転糸切り未調整である。灰釉陶器瓶の窯式は不明である。



第151図 SB347法量分布と底部調整比率

## SB350

土師器の小形甕が1個体出土したのみである。

## SB357 (図版159, 第189表)

須恵器が食器形態の主体を占め、杯Aの底部調整が手持ちヘラ削りと回転糸切り未調整(2)が共存すること、黒色土器杯A I (1)の底部調整が手持ちヘラ削りで、杯Eの器形に類似すること、外反度が強く短い口縁部を持つハケ目調整の長胴形甕(6)があることから3段階の土器様相と把握される。

食器						
種類	器種	個体数	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率
黒色土器A	杯A I	1	1	12%		1
	杯A II	2				2-2
	杯A	2	7	87%	82%	
須恵器	杯E	1				4-3
	杯	1				
状況						
土師器	長胴形甕	3	5	100%	38%	6
土師器	小形甕	2				

第189表 SB357出土土器構成表

## SB365 (第190表)

黒色土器Aが食器形態の主体を占め、杯Aの口径と器高の比率も3:1に集中することから6段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aはすべて底部回転糸切り未調整である。

食器						
種類	器種	個体数	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率
土師器	杯A I	1				
	盤	1	4	12%		
	不明	2				
	杯A I	1				
黒色土器A	杯A I	1				
	杯A II	2				
	杯A	7	24	73%		
	盤	5				
	杯	1				
須恵器	不明	8				
	杯A II	1				
	杯A	1				
	杯E	1	5	15%		
	杯	1				
状況						
土師器	長胴形甕	12	15	100%	31%	
土師器	小形甕	3				
須恵器						
須恵器	長胴形甕	1	2	100%	4%	
須恵器	杯	1				

第190表 SB365出土土器構成表

## SB367

土器の出土は一切無い。

## SB371 (第191表)

土師器が食器形態の主体を占める。法量を計測できる資料が土師器杯A IIのみで、その口径は10.5cmを中心に分布すること、黒色土器Aの杯Aが無いこと、煮炊形態は羽釜と小形甕で構成されることなどから10段階と捉えておきたい。

食器						
種類	器種	個体数	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率	底面調整比率
土師器	杯A II	9				
	杯A	7	24	99%		
	盤	2				
	不明	10				
黒色土器A	杯	1	4	11%		
	不明	3				
状況						
土師器	小形甕	1	2	100%	3%	
土師器	羽釜	1				

第191表 SB371出土土器構成表

## SB372

土師器の長胴形甕が2個体出土したのみである。

## SB374 (図版159, PL45, 第192表, 第152図)

3段階を設定した資料の一つ。須恵器杯Aの底部調整は、回転ヘラ切り後ナデ調整(5・6)と、回転糸切り未調整(7)が同率で共存する。1は口縁部付近までヘラ削りが及ぶ黒色土器A杯A IIで、2は底部手持ちヘラ削り、3は底部回転糸切り未調整である。長胴形甕(10)は外反度の強い短い口縁部で、口縁部に回転ナデ調整を残し、胴上半はハケ目調整が施され、下半から底部にはナデ調整が施される。小形甕には、底部回転糸切りで全面回転ナデ調整の8と、胴上半からヘラ削りが施される9がある。

## SB375 (図版159, 第193表, 第153図)

4段階を設定した資料の一つ。黒色土器A・須恵器とも杯A IIの口径と器高の比率が3:1に集中し、法量ではそれぞれ大小のまとまりとして抑えられる。須恵器の底部調整は、回転ヘラ切りが1個体(5)、回転糸切りが2個体(6)である。2は底部手持ちヘラ削り、3は底部回転糸切りである。

## SB376

資料数は少なく、黒色土器Aの椀が1、長胴形甕・武蔵壺・小形甕が各1の4個体である。

## SB378 (図版159)

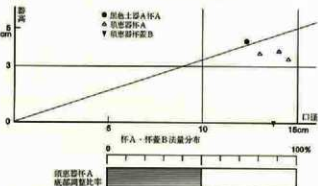
資料数は少なく、土師器の杯A IIが1、杯A・器種不明が各3、黒色土器A椀・須恵器杯・灰陶器椀・長胴形甕が各1の11個体である。1は大原2号窯式の灰陶器椀である。

## SB381 (図版159, 第194表, 第154図)

杯Aの46%を土師器が占め、黒色土器A杯A IIは口径13cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1以下に集中し、底部回転糸切り未調整が92%を占めることから7段階の土器様相と把握される。灰陶器皿Bの内、1は光ヶ丘1号窯、あるいは大原2号窯式で、2の窯式は不明である。

食器	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
黒色土器A	杯A II	11				1-2
	杯A	4	25	78%		2
	不明	10				5-7
須恵器	杯A II	3			80%	
	杯A	1	7	22%		
	杯	2				4
土師器	杯A II	1				
小形甕	1					
長胴形甕	1					
武蔵壺	1					
小形甕	1					
灰陶器	1					

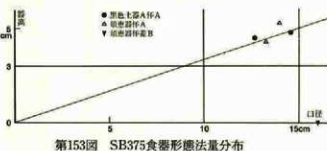
第192表 SB374出土土器構成表



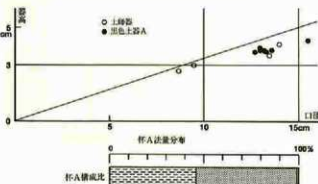
第152図 SB374法量分布と杯A構成比

食器	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
土師器	杯A II	1	1	10%		
	杯A	2	3	30%		2-3
黒色土器A	不明	1				
	杯A II	2			50%	5-6
	杯A	1	6	60%		
須恵器	杯	1				
	杯	1				
	杯	1				4
土師器	長胴形甕	2				
武蔵壺	1					
小形甕	1	5	100%	20%		
灰陶器	1					
須恵器	1					
武蔵壺	1					
小形甕	1					
灰陶器	1					

第193表 SB375出土土器構成表



第153図 SB375食器形態法量分布



第154図 SB381法量分布と杯A構成比



第4章 古代の調査

食器						
種類	器種	個体数	重量(個体平均)	体積(個体平均)	高さ(個体平均)	口徑(中心)
土師器	杯A目	7	92	35%	90%	
	杯A	24				
	皿A	1				
	皿	3				
	皿A	1				
	不明	26				
黒色土師器	杯A目	1	167	61%	90%	
	杯A	17				
	皿	4				
	不明	97				
黒色土師器	皿	1	1	15%		
渡来器	杯A	1	2	1%		
	杯	1				
灰釉陶器	皿B	2	3	2%	1.2	
	不明	1				
家炊						
土師器	長柄煎鍋	10	15	100%	7%	
	壺	1				
	小形壺	4				
貯蔵						
渡来器	壺	2	2	14%		
灰釉陶器	瓶	10	12	60%	7%	
	不明	2				

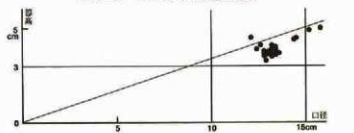
第194表 SB381出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	重量(個体平均)	体積(個体平均)	高さ(個体平均)	口徑(中心)
土師器	杯A目	29	4550	90%	90%	137-139
	杯A	1093				1-136
	杯A	1123				142-149
	皿	41				139-141
	皿A	3				154
	皿C	3				150-153
	皿	26				
	牙籠	1				
	皿B	5				
	皿	13				
	鉢	4				
不明	2168					
黒色土師器	杯A目	68	853	10%	90%	150-156
	杯A	160				15-100-110
	杯A	46				170-174
	皿	150				157
	皿	4				
	皿B	5				
	皿	11				
	鉢	1				
	不明	418				
	不明	78				
渡来器	杯A	4	1	1%		
灰釉陶器	杯A	1	1	15%		
	皿	27				
灰釉陶器	皿	1	52	1%	15%	189-194
	杯蓋	7				193
	阿波皿	1				
	不明	16				
灰釉陶器	皿	2	2	1%	190	
家炊						
土師器	長柄煎鍋	21	38	100%	1%	198-199
	小形壺	3				197-200
	打蓋壺	2				
	煎鍋	2				
貯蔵						
渡来器	壺	1	12	27%	1%	200-200-11
	壺	8				210
	横瓶	1				
	小形壺	2				
灰釉陶器	長柄煎鍋	4	32	73%	1%	201-202
	瓶口瓶	15				203-207
	瓶	13				

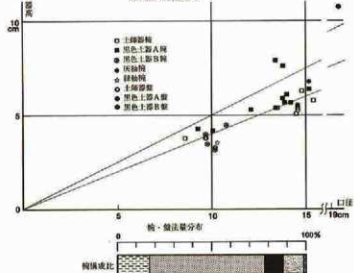
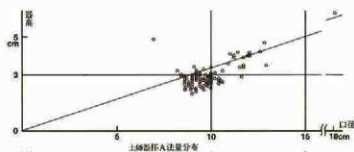
第196表 SB383出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	重量(個体平均)	体積(個体平均)	高さ(個体平均)	口徑(中心)
土師器	杯A目	2	120	42%	93%	7
	杯A	29				1-6
	杯A	31				6
	皿A	2				12-13
	皿C	2				9-10
	皿	3				11
	皿A	1				15
	皿B	2				14-15
	不明	48				
	杯A目	3				41-42
	杯A	59				17-49
黒色土師器	杯A	13	158	50%	93%	44
	皿	9				45-49
	鉢	2				42
	不明	72				
黒色土師器	不明	1	1	1%		
灰釉陶器	瓶	6	6	2%	59	
家炊						
土師器	長柄煎鍋	14	17	100%	9%	54-56
	小形壺	3				51-53
貯蔵						
灰釉陶器	赤須瓶	3	6	100%	2%	
	瓶	3				

第195表 SB382出土土器構成表



第155図 SB382黒色土器A杯A法量分布



第156図 SB383法量分布と碗構成比



## SB382 (図版159~161, PL45・46, 第195表, 第155図)

7段階を設定した資料の一つ。杯Aの45%を土師器が占め、黒色土器Aには杯AⅠと杯AⅡがあり、杯AⅡの口径は13cmを中心に分布する。口径と器高の比率も3:1以下に集中し、杯Aの底部調整はすべて回転糸切り未調整である。口径14cm前後の土師器皿A(12・13)があり、口径21.8cmで底部手持ちへら削りの黒色土器A鉢(43)がある。黒色土器Aの椀には大小2法量があり、小形甕にも大小の法量が認められる。長胴形甕は、内彎する長い口縁部を持ち、胴下半はタタキ調整(55)、へら削り後タタキ調整(54・56)が施されている。6個体の灰釉陶器椀はすべて光ヶ丘1号窯式である。9・10は土師器皿Cである。16は類別を見ない器形の土師器盤Aで、鉢形の上に、円形の透かしを伴う脚部がつく。51・52は全面回転ナデ調整の小形甕で、底部は両者とも回転糸切り未調整である。56は胴部中央に穿孔を有する。

## SB383 (図版161~164, PL46・47, 第196表, 第156図)

12段階を設定した資料の一つ。資料数の膨大さには目を見張るものがあり、他の追隨を許さない。食器形態の土師器4550個体、灰釉陶器についても、食器・貯蔵形態を合わせて84個体もの出土があり、傑出した遺物量を誇る住居址である。土師器杯AⅡの口径は9.5cmと12cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1を上回るものも多く見られる(71・72・125等)。また、口縁部が受け口状を呈するものが一定量みられる(60~66等)。口径が18cmを越え、杯AⅠの範疇では括れない杯Aと相似形の鉢(137・138)も一定量認められる(構成表では杯AⅠとしてある)。土師器・黒色土器A・黒色土器Bとも椀は大小2法量あり、小法量は口径10cm前後となる。この内、黒色土器Aについては口径と器高の比率が2:1を上回る腰の強く張った深椀(168等)がある。盤Bは大中小の3法量あり、土師器(150~153)と黒色土器B(179~182)が小法量、黒色土器Aに大(172~174)と中法量(170)が認められる。食器形態の灰釉陶器の内、窯式を同定できたものは27個体あり、丸石2号窯式が19個体で主体を占める。図示したものはすべて丸石2号窯式の灰釉陶器である。その他、虎溪山1号窯式5個体、光ヶ丘1号窯式3個体がある。緑釉陶器(196)が伴う。139~141は口径9.5cm前後の土師器皿Cで、154は有台の土師器耳皿である。162の口縁端部には油煙・煤の付着が観察され、灯明皿として用いられたことが推測される。175は円板状の高台が貼付された深椀で、他にあまり例を見ない。200は胴部以下をへら削り調整する羽釜Aである。貯蔵形態の灰釉陶器については窯式を同定することができなかった。

## SB385

資料数が少なく、土師器杯AⅡが1、黒色土器Aの杯Aが1、椀3、器種不明1、長胴形甕が3、小形甕1の10個体である。

食器						
種類	器種	器高	口径	口径と器高の比率	口径と器高の比率	口径と器高の比率
土師器	杯AⅡ	27				99%
	杯A	4				
	椀	1	67	82%		
	盤	1				
	不明	24				
黒色土器A	椀	7	11	10%		
	不明	4				
黒色土器B	椀	1	1	1%		
	灰釉陶器	椀	1	1%		
貯蔵						
灰釉陶器	不明	1	1	100%	1%	

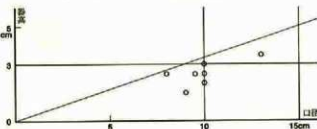
第197表 SB386出土土器構成表

## SB386 (第197表, 第157図)

土師器杯AⅡの口径が10cmと13cmを中心に分布することから11段階の土器様相と把握される。灰釉陶器椀の窯式は不明である。

## SB387

資料数は少ないが、いずれも食器形態の土師器で、杯AⅡが2、杯Aが1、器種不明5の8個体である。



第157図 SB386土師器杯A法量分布

SB388 (図版164・165, PL47, 第198表, 第158図)

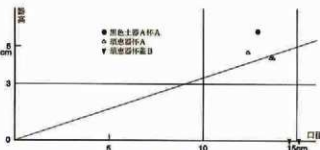
4段階を設定した資料の一つ。須恵器杯A IIはいずれも底部回転糸切り未調整で、黒色土器Aとともに口径と器高の比率が3:1もしくはそれを上回る深めのものが主体となる。黒色土器A杯Aは底部手持ちへら削りである。15は底部回転糸切りの小形甕である。17は外反度の強い口縁部を持つへら削り調整の長胴形甕である。18は緩やかなコ字状口縁の武蔵甕である。

食器						
種類	器種	器体数	口径調整済数	口径調整済率(%)	器高調整済率(%)	口径中%
土師器	杯A II	7	19	41%	71%	1~4
	杯A	3				5
	甕	1				
	甕	3				
	不明	0				
黒色土器	杯A II	1	8	10%	71%	7
	杯A	1				6
	甕	3				
	不明	3				
黒色土器	不明	1	1	2%	71%	8~10
	杯A	4				
須恵器	杯A	1	19	30%	71%	11~13
	杯A II	1				14
	杯B	1				13
	杯C	9				
	杯D	2				11・12
	杯E	1				
灰釉陶器	平形	1	1	2%		
家炊						
土師器	長胴形甕	8	19	100%	20%	16・17
打戻	武蔵甕	5				18・19
	小形甕	6				15
打戻						
須恵器	甕	1	1	100%	1%	20

第198表 SB388出土土器構成表

SB392 (第199表, 第159表)

土師器杯A IIの口径が10cmと13cmを中心に分布することから11段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率が3:1を上回る深めのものが見られ、口径10.5cmの黒色土器A甕がある。灰釉陶器の窯式は不明。



第158図 SB388食器形態量分布

SB394 (第200表, 第160図)

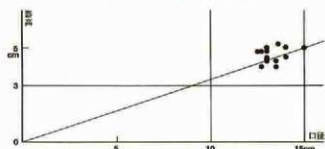
食器形態の96%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの底部調整は88%が回転糸切り未調整である。

SB395 (図版165, 第201表, 第161図)

6段階を設定した資料の一つ。食器形態の87%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1に集

食器						
種類	器種	器体数	口径調整済数	口径調整済率(%)	器高調整済率(%)	口径中%
土師器	杯A	1	5	4%	4%	
	不明	4				
	不明	0				
黒色土器	杯A I	2	114	90%	92%	
	杯A II	18				
	杯A	1				
	甕	3				
	杯	1				
不明	39					
家炊						
土師器	長胴形甕	0	0	100%	3%	
打戻	武蔵甕	3	3	100%	2%	
灰釉陶器	甕	1	1	100%	2%	

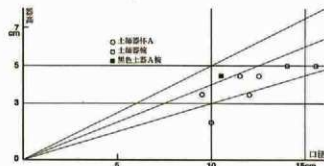
第200表 SB394出土土器構成表



第160図 SB394黒色土器A杯A法量分布

食器						
種類	器種	器体数	口径調整済数	口径調整済率(%)	器高調整済率(%)	口径中%
土師器	杯A I	1	59	72%	92%	
	杯A II	14				
	杯A	12				
	甕	4				
	甕	5				
	不明	23				
黒色土器	甕	10	20	24%	92%	
	不明	10				
	不明	1				
須恵器	杯B	1	2	2%	92%	
	不明	1				
灰釉陶器	甕	1	2	2%	92%	
	甕	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	3	7	100%	8%	
打戻	小形甕	4				

第199表 SB392出土土器構成表



第159図 SB392食器形態量分布

中する。杯Aの底部調整はすべて回転糸切り未調整である。長胴形甕は、直立気味で長い口縁部を持つヘラ削り調整の甕が主体である。

## SB397

資料数が少なく、土師器の杯AⅡ・杯Aが各1、黒色土器Aの杯A・器種不明が各1、須恵器杯が1、長胴形甕2、甕1の8個体である。

## SB398

黒色土器Aの杯AⅡ・杯Aが各1、口径12.5cm、器高3.5cmを測る須恵器杯AⅡが1、須恵器の杯Aが2、杯1、外反度の強い口縁部を持つ長胴形甕が2、小形甕が1の9個体と資料数は少ないが、須恵器杯AⅡ・長胴形甕の口縁部形態から4段階と把握されよう。

## SB408 (第202表, 第162図)

杯Aの中で土師器の占める割合が12%と少ないものの、黒色土器Aに杯AⅠがあり、杯AⅡの口径と器高の比率も3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの底部調整は91%が回転糸切り未調整である。灰釉陶器の窯式は不明。

## SB416 (図版166, 第203表, 第163図)

3段階を設定した資料の一つ。非ロクロ調整の土師器杯D(1)と須恵器杯A・Bが食器形態の主体を占め、須恵器杯Aの底部調整には回転ヘラ切り後ナデ調整(2)、手持ちヘラ削り(3)、回転糸切り未調整(4)があり、口径と器高の比率は3:1に集中する。また、須恵器杯Bに法量分化が認められる(5・6と7)。

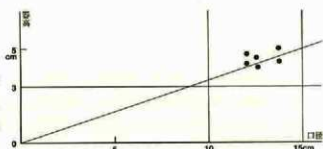
食器						
器種	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
土師器	杯A	2	3	14%	60%	1
	杯D	1				2~4
	杯AⅡ	3				7
	杯AⅠ	1				5-6
	杯AⅢ	1				7
須恵器	杯AⅡ	2	17	91%	93%	5-6
	杯A	2				7
	杯B	6				10
灰釉陶器	杯A	3	1	2%		
窯式	不明	1	1	2%		
窯式						
土師器	長胴形甕	2	7	100%	22%	3-9
須恵器	小形甕	5				
貯蔵						
須恵器	甕	1	2	50%	12%	10
須恵器	甕	1				
灰釉陶器	甕	2	2	50%		

第203表 SB416出土土器構成表

食器						
器種	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
土師器	不明	7	7	12%	93%	1~6
	杯AⅡ	9				7
黒色土器A	杯A	1	47	87%	72%	8
	杯AⅡ	1				9
	杯AⅠ	1				
	不明	25				

窯式						
土師器	長胴形甕	19	19	100%	25%	12~15
貯蔵						
須恵器	長胴甕	2	2	100%	3%	10-11

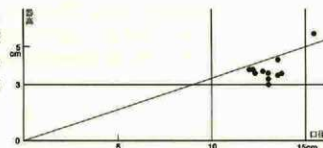
第201表 SB395出土土器構成表



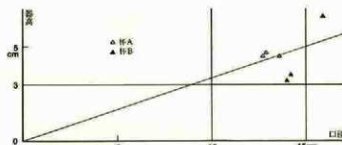
第161図 SB395黒色土器A杯A法量分布

食器						
器種	器種	器高	口径	口径/器高	口径/器高	口径/器高
土師器	杯AⅡ	1	17	32%	93%	
	杯A	1				
	杯AⅠ	1				
	杯AⅢ	3				
	不明	11				
黒色土器A	杯AⅠ	2	34	64%	93%	
	杯AⅡ	13				
	杯A	3				
	不明	15				
黒色土器B	不明	1	1	2%		
灰釉陶器	甕	1	1	2%		
窯式						
土師器	長胴形甕	2	3	100%	8%	
須恵器	小形甕	1				
灰釉陶器	長胴甕	1	1	100%	2%	

第202表 SB408出土土器構成表



第162図 SB408黒色土器A杯A法量分布



第163図 SB416須恵器食器形態法量分布

SB417 (第204表)

土師器杯A IIの口径が10.5cmを中心に分布することから、10段階と把握される。口径11cm、器高4.5cmを測る黒色土器A椀がある。灰軸陶器椀の窯式は不明。

SB418

SB416に接合した窯式不明の灰軸陶器瓶が1個体出土したのみである。

SB419 (第205表)

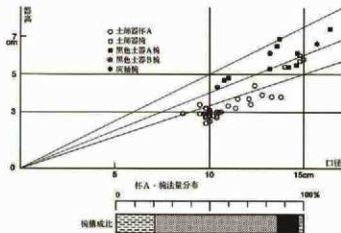
土師器杯A IIの口径が9.5cmを中心に分布することから12段階の土器様相と把握される。口径14.5cm、器高6.5cmを測る土師器盤B、口径11cm、器高5cmを測る黒色土器A椀がある。灰軸陶器の窯式は不明。

SB420 (第206表)

土師器杯A IIの口径が10cmを中心に分布することから11段階の土器様相と把握される。

SB421 (図版166・167, PL48, 第207表, 第164図)

11段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は10cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1を上回るものが認められる。椀は黒色土器A・Bともに大小2法量ある。灰軸陶器はいずれも丸石2号窯式である。小形甕は小法量のみで、短い口縁部が特徴的である。いずれも底部回転糸切りである。特殊なものとして、口径29.5cm、器高13.1cmを測り、体部下半から底部にまで手持ちへら削りが施される浅鉢形甕(58)があり、足釜脚部の破片(59)がある。



第164図 SB421法量分布と椀構成比

器種	器種	個体数	口径別個体数	器高別個体数	口径器高別個体数	口径中心
土師器	杯A I	1	25	615	805	
	杯A II	6				
	杯A	3				
	盤	2				
	鉢	1				
	不明	12				
黒色土器A	杯A II	1	12	365		
	椀	5				
黒色土器B	不明	6	1	25		
	盤	1				
灰軸陶器	杯盤	2	2	65		
	瓶	1				
要次						
土師器	長形形甕	4	7	1005	135	
	小形甕	3				

第204表 SB417出土土器構成表

器種	器種	個体数	口径別個体数	器高別個体数	口径器高別個体数	口径中心
土師器	杯A II	4	20	695	885	
	杯A	1				
	盤	1				
	鉢	1				
	盤	3				
	不明	6				
黒色土器A	杯A	1	6	215		
	椀	5				
黒色土器B	不明	2	1	25		
	盤	1				
要次						
土師器	長形形甕	1	4	1005	125	
	形盤	2				
	盤	1				
行版						
灰軸陶器	盤	1	1	1005	35	

第205表 SB419出土土器構成表

器種	器種	個体数	口径別個体数	器高別個体数	口径器高別個体数	口径中心
土師器	杯A I	1	24	705	895	
	杯A II	7				
	杯A	8				
	鉢	1				
	不明	7				
	不明	7				
黒色土器A	杯A	1	6	195		
	椀	5				
黒色土器B	不明	2	2	65		
	椀	2				
要次						
土師器	長形形甕	3	4	1005	115	
	形盤	1				

第206表 SB420出土土器構成表

器種	器種	個体数	口径別個体数	器高別個体数	口径器高別個体数	口径中心
土師器	杯A I	4	210	725	905	1~20
	杯A II	62				
	杯A	20				
	盤	13				
	不明	101				
	不明	101				
黒色土器A	杯A II	1	66	235	36	31~45
	杯A	4				
	椀	41				
	鉢	1				
黒色土器B	不明	19	7	35		47~51
	盤	1				
灰軸陶器	盤	2	2	6	25	54~55
	形盤	2				
要次						
土師器	長形形甕	1	11	1005	45	58
	浅鉢形甕	1				
	小形甕	5				
	形盤	3				
	足釜	1				

第207表 SB421出土土器構成表

## SB424 (第208表)

杯Aの39%を土師器が占め、杯A IIの口径が、土師器12cm、黒色土器A 13cmをそれぞれ中心に分布することから7段階の土器様相と把握される。黒色土器A碗には大小2法量が認められる。灰軸陶器碗の窯式は不明である。

## SB451

土器の出土は一切無い。

## SB452

土器の出土は一切無い。

## SB501 (第209表)

羽釜A・Bが各1個体認められるものの、法量を計測できる土師器杯A IIの口径が11.5cmを中心に分布することから8段階と捉えておきたい。

## SB502 (第210表)

杯Aの79%を土師器が占め、杯A IIの口径が12cmを中心に分布することから7段階の土器様相と把握される。灰軸陶器の窯式は不明である。

## SB504 (図版167, 第211表)

杯Aが土師器・黒色土器A・須恵器の三者で構成されることなどから7段階と把握されよう。図示した灰軸陶器はいずれも光ヶ丘1号窯式である。

## SB1001

資料数は少なく、黒色土器Aの杯Aが1、須恵器の杯が1、長胴形甕が2、小形甕1の5個体である。

## SB1002 (図版167~169, PL48・49, 第212表, 第165図)

4段階を設定した資料の一つ。須恵器杯Aはすべて底部回転糸切り未調整で、底部手持ちへら削りの黒色土器杯A II (1)とともに口径と器高の比率が3:1以下に集中する。外面へら削りの長胴形甕が主体で、外反度の強い短い口縁部と比較的薄手の器壁が特徴的である。内面は、ほとんどのものにハケ目調整が施されている。球胴形甕・浅鉢形甕にも同様な手法が認められ

全器						
種類	器種	個体数	焼成温度区分	焼成温度区分	焼成温度区分	窯式
土師器	杯A II	8	23	20%	94%	
	杯A	7				
	甕	1				
	羽釜	2				
	不明	15				
黒色土器A	杯A II	1	97	72%		
	杯A	17				
	甕	26				
	不明	48				
	灰軸陶器	3				
不明	1	4	3%			
窯式						
土師器	長胴形甕	3	8	100%	6%	
	小形甕	2				

第208表 SB424出土土器構成表

全器						
種類	器種	個体数	焼成温度区分	焼成温度区分	焼成温度区分	窯式
土師器	杯A II	6	8	62%	77%	
	杯A	1				
	甕	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A	1	5	38%		
	杯A II	1				
	不明	4				
	不明	4				
窯式						
土師器	小形甕	1	4	100%	23%	
	羽釜A	1				
	羽釜B	1				
	羽釜	1				

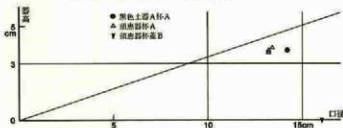
第209表 SB501出土土器構成表

全器						
種類	器種	個体数	焼成温度区分	焼成温度区分	焼成温度区分	窯式
土師器	杯A I	1	25	64%	91%	
	杯A II	9				
	杯A	1				
	甕	2				
	不明	12				
黒色土器A	杯A	3	13	32%		
	甕	4				
	不明	6				
須恵器	不明	1	1	3%		
窯式						
土師器	長胴形甕	1	3	100%	7%	
	小形甕	2				
行蔵						
灰軸陶器	甕	1	1	100%	2%	

第210表 SB502出土土器構成表

全器						
種類	器種	個体数	焼成温度区分	焼成温度区分	焼成温度区分	窯式
土師器	杯A	1	12	48%	69%	
	杯A II	2				
	杯A	2				
	不明	3				
	不明	3				
黒色土器A	杯A II	3	9	36%		
	杯A	2				
	不明	4				
須恵器	杯A II	1	3	12%		
	甕	1				
不明	不明	1				
灰軸陶器	甕	1	1	4%		1
窯式						
土師器	長胴形甕	3	10	100%	28%	
	羽釜	1				
	甕	1				
行蔵						
灰軸陶器	小甕	1	1	100%	2%	2

第211表 SB504出土土器構成表



第165図 SB1002食器形態法量分布



る。小形甕も外面の調整については同様で、底部は襷種を越えていずれも手持ちへら削りである。緩やかなコ字状口縁を呈する武蔵甕がある。

SB1003 (第213表, 第166図)

杯Aが黒色土器Aと須恵器で構成され、前者が30%を占める。黒色土器Aの底部調整は回転系切り後手持ちへら削りと回転系切り未調整があり、須恵器はいずれも回転系切り未調整である。両者とも口径と器高の比率が3:1以下に集中することなどから、5段階の土器様相と把握される。

SB1004 (第214表)

杯Aが土師器・黒色土器A・須恵器で構成され、その内、土師器が50%を占め、口径が13cmを中心に分布することから7段階の土器様相と把握される。

SB1005 (図版169・170, PL49・50, 第215表, 第167図)

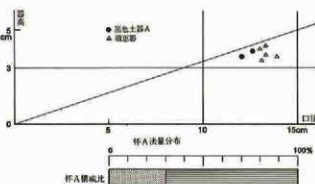
7段階を設定した資料の一つ。杯Aの46%を土師器が占め、杯A IIの口径は土師器が12.5cm、黒色土器Aが13cmを中心に分布する。黒色土器A碗には法量分化

全群						
種類	器種	個体数	法量別個体数	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)
土師器	不明	2	2	100		
	杯A I	1				
黒色土器A	杯A II	1	3	42%		30%
	杯A	1				
	不明	2				
須恵器	杯A	3	5	42%		3~5
	杯A II	1				2
家状						
土師器	長胴形甕	12				6~13
	法量別甕	2	28	100%	70%	16~17
	須恵形甕	1				14
	武蔵甕	1				15
	小形甕	11				18~23

第212表 SB1002出土土器構成表

全群						
種類	器種	個体数	法量別個体数	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)
土師器	不明	2	2	12%		
	杯A I	1				
黒色土器A	杯A II	2	4	33%		
	不明	1				
	杯A	2				
須恵器	杯A	7	11	60%		
	杯A	1				
	杯A II	1				
家状						
土師器	長胴形甕	8	10	100%	31%	
	武蔵甕	1				
	小形甕	1				
評鑑						
須恵器	長胴甕	3				
	甕	1	5	100%	16%	
	甕	1				

第213表 SB1003出土土器構成表



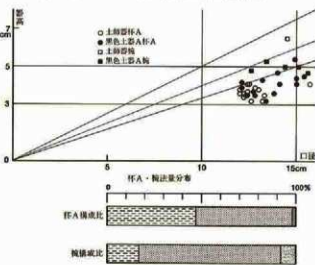
第166図 SB1003法量分布と杯A構成比

全群						
種類	器種	個体数	法量別個体数	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)
土師器	杯A II	3	4	20%		
	不明	1				
黒色土器A	杯A II	2	9	90%		70%
	杯A	4				
	不明	3				
須恵器	杯A II	1	3	19%		
	杯A	1				
	杯A II	1				
家状						
土師器	長胴形甕	4	5	100%	24%	
	小形甕	1				

第214表 SB1004出土土器構成表

全群						
種類	器種	個体数	法量別個体数	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)	法量別個体数(%)
土師器	杯A I	3				14
	杯A II	18				1~12
	杯A	5	30	48%		16~17
	杯A	2				18
	杯A	1				12
	杯A	1				13
	不明	50				
黒色土器A	杯A I	5	80	48%		34~36
	杯A II	18				19~23
	杯A	5				
	杯A	9				37~41
	不明	51				
須恵器	杯A	1	5	3%		
	杯A	2				
武蔵海甕	杯A	1				42
	杯A II	1				
家状						
土師器	長胴形甕	22	29	100%	13%	50~55
	小形甕	7				43~49
評鑑						
須恵器	長胴甕	1	1	100%	1%	56
	甕	1				

第215表 SB1005出土土器構成表



第167図 SB1005法量分布と杯A・碗構成比



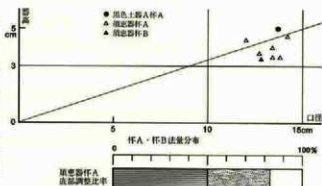
が認められず、口径と器高の比率が5:2以下の浅いものが主体を占める。口径11.2cmを測る土師器皿B(15)があり、耳状の突起を貼付した土師器鉢(18)がある。灰釉陶器碗の窯式は不明。長胴形甕は長く直立気味の口縁部を持ち、外面タタキ調整が主体である。小形甕は器形・法量に相違が認められるものの、胴下半をヘラ削りするものが主体的である。土師器鉢の底部は43・45が回転糸切り、47・49・51が手持ちヘラ削りである。

全部						
種類	器種	数量	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	出現%
土師器	杯A I	1	3	10%	77%	
	不明	2				
	杯A II	1				
黒色土器A	杯A	2	6	20%		
	不明	2				
	杯A II	2				
須恵器	杯A I	7	14	51%		3~8
	杯A II	2				
	杯B	3				
	杯C	2				
	杯D	1				
表次						
土師器	長胴形甕	6	6	100%	20%	11~14
須恵器	長胴甕	1	1	100%	2%	

第216表 SB1006出土土器構成表

## SB1006 (図版171, PL50, 第216表, 第168図)

3段階を設定した資料の一つ。食器形態は須恵器が主体で、杯Aの底部切り離し技法には回転ヘラ削り(3~5)、静止糸切り(6・7)、回転糸切り(8)がある。黒色土器Aの杯Aには大小2法量認められ、口径と器高の比率が3:1を上回る。底部は杯A Iが回転ヘラ削りで、杯A IIが回転糸切りである。長胴形甕は短く外反度の強い口縁部を持ち、外面はヘラ削りとハケ目調整がある。底部は12がナダ、13・14がヘラ削りである。



第168図 SB1006法量分布と底部調整比率

## SB1007 (第217表)

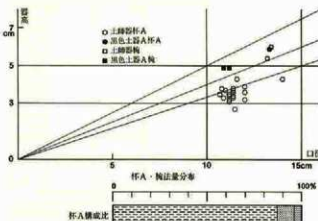
杯Aの64%が須恵器が占め、黒色土器A杯A IIも含めて、口径と器高の比率が3:1以下になることから5段階の土器様相と把握される。底部はいずれも回転糸切り未調整である。

全部						
種類	器種	数量	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	出現%
土師器	杯A II	25	150	70%	92%	1~24
	杯A I	16				
	不明	6				
	不明	74				
黒色土器A	杯A II	1	28	18%		25~26
	杯A	2				
	不明	18				
	不明	1				
須恵器	杯A	2	11	7%		27
	杯B	3				
	杯C	4				
表次	長胴形甕	6	13	100%	8%	32~28
	小形甕	7				
土師器	不明	7	7	100%	8%	33~34

第217表 SB1007出土土器構成表

## SB1008 (図版171・172, PL50・51, 第218表, 第169図)

8段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は11.3cmを中心に集中し、14cm前後のもの(24)が一定量認められる。土師器碗は1法量で、黒色土器A碗には大小2法量がある。長胴形甕は直立気味の長い口縁部を持ち、外面タタキ調整が主体であり、長胴化傾向



第218表 SB1008出土土器構成表

全部						
種類	器種	数量	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	検出回数(検出率)	出現%
土師器	杯A II	2	2	20%	70%	
	杯A I	1				
黒色土器A	杯A	1	10	38%		
	不明	8				
	杯A II	4				
須恵器	杯A	3	14	54%		3~8
	杯B	5				
	杯C	2				
	杯D	2				
表次						
土師器	長胴形甕	4	5	100%	13%	
須恵器	杯A	1	2	100%	8%	

第219表 SB1008法量分布と杯A構成比

が窺える。全面回転ナデ調整の小形甕は、底部回転糸切りで、法量差が認められる。

SB1009 (第219表)

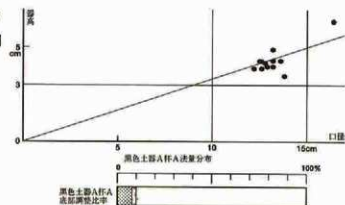
杯Aが土師器・黒色土器A・須恵器で構成され、土師器が47%を占め、土師器碗もあることから7段階の土器様相と把握される。

SB1010 (図版172・173, PL51, 第220表, 第170図)

6段階を設定した資料の一つ。食器形態の76%を黒色土器Aが占める。杯Aには杯A I・IIがあり、口径と器高の比率は3:1に集中する。杯Aの90%が底部回転糸切り未調整である。黒色土器Aの鉢は杯Aと相似形を呈するが片口となり、17は外周も含め底部手持ちヘラ削りで、18は底部回転糸切り未調整である。黒色土器A碗は1法量である。長胴形甕は直立気味に内彎する長い口縁部が特徴的で、胴上半部からヘラ削りされるものが主体を占め、底部についても手持ちヘラ削

食器	種類	器種	器体色	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%
土師器	杯A	杯A I	9	81	10%		
	杯A	杯A II	13				
	碗	1					
	鉢	1					
	不明	66					
黒色土器A	杯A	杯A I	9	422	80%	88%	4~8・27~34
	杯A	杯A II	25				32
	碗	18	30~34				
	鉢	13	35~42				
	鉢	24					
	鉢	19	25~29				
	不明	194					
黒色土器B	碗	3	3	1%		43	
	杯A	杯A I	7			44~46	
須恵器	杯A	杯A	2	18	3%		
	杯	杯	9				
灰釉陶器	碗	3	3	1%		47~48	
量状							
土師器	長胴形甕	76	90	100%	14%		67~71
	直立形甕	1					72
	4角甕	12					49~55
	羽釜形甕	1					73
形量							
須恵器	長胴甕	1	3	100%	1%		
	短胴甕	1					
	甕	1					

第221表 SB1011出土土器構成表



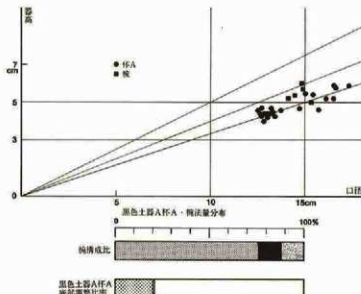
第170図 SB1010法量分布と底部調整比率

食器	種類	器種	器体色	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%
土師器	杯A	杯A I	13	48	42%		
	杯A	杯A II	2				
	碗	1					
	不明	30					
	不明	1					
黒色土器A	杯A	杯A I	1	62	94%	88%	4~8・27~34
	杯A	杯A II	12				32
	碗	1	30~34				
	鉢	1	35~42				
	鉢	1	25~29				
	不明	46					
	不明	46					
須恵器	杯A	杯A	2	5	4%		
	杯	杯	2				
量状							
土師器	長胴形甕	21	22	100%	16%		
	小形甕	1					

第219表 SB1009出土土器構成表

食器	種類	器種	器体色	底部調整比率	底部調整比率	底部調整比率	口径中%	
土師器	杯A	杯A I	14	53	10%		1	
	杯A	杯A II	6					2
	碗	1						
	不明	32						
	不明	4						
黒色土器A	杯A	杯A I	1	297	70%	88%	16	
	杯A	杯A II	14				4~15	
	杯A	杯A III	55				3	
	碗	12	19~23					
	碗	1	24					
	鉢	11						
	鉢	4	17~18					
	不明	159						
	不明	2	24~26					
	不明	7						
須恵器	杯A	杯A	7	23	7%			
	杯	杯	13					
灰釉陶器	杯	杯	1				27	
	碗	2	2	1%				
量状								
土師器	長胴形甕	51	51	100%	12%		28~29	
	小形甕	1						
形量								
須恵器	長胴甕	1	1	50%	1%		38	
	短胴甕	1	1	25%				

第220表 SB1010出土土器構成表



第171図 SB1011法量分布と碗構成比・底部調整比率

りである(31・35~37)。24は口径13cmの黒色土器A皿Bで、25は底部は回転糸切りで、外周を手持ちヘラ削りする須恵器杯Aである。軟質須恵器に相当する。灰釉陶器碗は、いずれも光ヶ丘1号窯式である。

### SB1011 (図版174~176, PL52, 第221表, 第171図)

6段階を設定した資料の一つ。食器形態の80%を黒色土器Aが占める。杯Aには杯A I・IIがあり、口径と器高の比率は3:1に集中する。杯Aの79%が底部回転糸切り未調整である。土師器碗は無く、口径25.5cmを測る盤Aがある。黒色土器Aの鉢は杯Aと相似形を呈し、体部下半から底部まで手持ちヘラ削りするものが主体である。黒色土器Aの碗は1法量で、口径12.3~14cmの皿Bがある。図示した須恵器杯A IIは、48を除いて軟質須恵器に相当する。長胴形甕は直立気味に内彎する長い口縁部が特徴的で、胴上半部からヘラ削りされるものが主体を占め、底部についても手持ちヘラ削りである。小形甕・浅鉢形甕(72)・羽釜形甕(73)についても同様な手法が用いられる。43は黒色土器B碗で、47は光ヶ丘1号窯式の、48は黒笹90号窯式の灰釉陶器碗である。

### SB1012 (第222表, 第172表)

食器形態の55%を須恵器が、30%を黒色土器Aが占める。杯Aは須恵器が底部回転糸切り未調整、黒色土器Aが底部手持ちヘラ削りであり、両者とも口径と器高の比率が3:1とそれ以下のものがある。長胴形甕が短く外反度の強い口縁部であることなどからも5段階の土器様相と把握される。

### SB1013

資料数は少なく、土師器の杯A IIが1、杯A 3、器種不明1、黒色土器Aの器種不明が3、長胴形甕が3の11個体である。

### SB1014 (図版177, 第223表, 第173図)

杯Aの中で土師器の占める割合が23%と少ないものの、土師器杯A IIの口径が12.5cm、黒色土器A杯A IIが13cmを中心に分布し、黒色土器Aの口径と器高の比率が3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの底部調整は98%が回転糸切り未調整である。1はSB1051と接合した光ヶ丘

食器						
器種	器種	個体数	底部調整未調整	底部調整済	器高/口径比率	図版中の
土師器	杯A II	3				59%
	不明	1	4	10%		
黒色土器A	杯A I	2				
	杯A II	1	8	30%		
	杯A	1				
	不明	4				
須恵器	杯A II	2				
	杯A	2				
	盤	3	15	50%		
	杯A II	1				
	杯A	1				

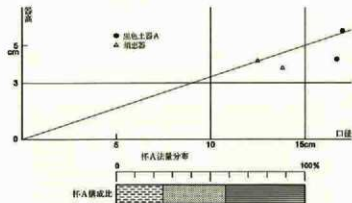
食次						
器種	器種	個体数	調整済	調整未調整	器高/口径比率	図版中の
土師器	長胴形甕	13	18	100%	39%	
	小形甕	5				
計						
須恵器	器	1	3	100%	2%	

第222表 SB1012出土土器構成表

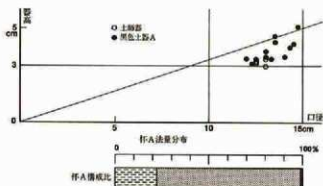
食器						
器種	器種	個体数	底部調整未調整	底部調整済	器高/口径比率	図版中の
土師器	杯A I	1				85%
	杯A II	21				
	杯A	14	100	24%		
	皿	3				
	皿A	1				
黒色土器A	不明	69				
	杯A II	21				
	杯A	100	300	72%		
	碗	17				
	皿B	2				
	鉢	2				
不明	158					
黒色土器B	不明	3	3	1%		
須恵器	杯A	1	1	1%		
灰釉陶器	碗	2				
	皿B	1	9	2%		
	不明	1				

食次						
器種	器種	個体数	調整済	調整未調整	器高/口径比率	図版中の
土師器	長胴形甕	60				14%
	浅鉢形甕	1				
	小形甕	7	71	100%		
	鉢	2				
	牛出形甕	1				
計						
須恵器	器	1	1	100%	1%	

第223表 SB1014出土土器構成表



第172図 SB1012法量分布と杯A構成比



第173図 SB1014法量分布と杯A構成比

表1						
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A	25	181	87%	97%	
	杯B	47				
	不明	100				
黒色土器A	杯A	2	27	12%		
	杯B	8				
	不明	16				
表2						
土師器	長胴形	5	6	100%	3%	
	小形	1				

第224表 SB1015出土土器構成表

1号窯式の椀で、皿Bも光ヶ丘1号窯式である。

SB1015 (第224表)

杯Aの88%を土師器が占め、口径が11.5cmと14cmを中心に分布することから8段階と把握される。

SB1016

資料数が少なく、土師器の杯A IIが1、杯A 2、黒色土器Aの器種不明が2、須恵器杯A IIが1、杯A 4、長胴形甕が2の12個体である。

SB1017 (図版177, PL53, 第225表, 第174図)

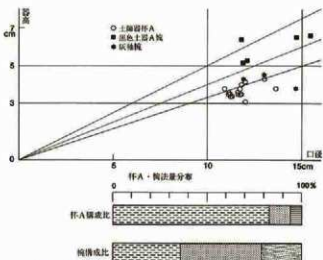
8段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は11.5cmを中心に集中し、口径と器高の比率が3:1をやや上回るもの(15~17)が認められる。土師器椀は1法量で、黒色土器A椀には大小2法量があり、意匠化した暗文風のヘラ磨きが施されるものが多い。長胴形甕は長い口縁部を持ち、外面タキ調整が主体であり、長胴化傾向が窺える。小形甕には、2ないし3の法量差が認められる。24・26は光ヶ丘1号窯式、25は大原2号窯式の灰釉陶器椀である。

SB1018

資料数が少なく、土師器の杯A IIが1、黒色土器A

表1						
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A	17	143	73%	95%	1~17
	杯B	22				
	不明	99				
黒色土器A	杯A	5	39	20%		19~23
	杯B	6				
	不明	28				
須恵器	杯A	3	11	6%		
	杯B	8				
灰釉陶器	杯A	3	3	2%		24~26
	杯B	3				
表2						
土師器	長胴形	8	11	100%	5%	30~31
	小形	6				

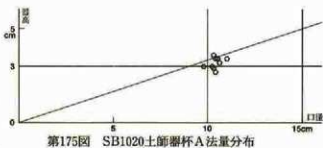
第225表 SB1017出土土器構成表



第174図 SB1017法量分布と杯A・椀構成比

表1						
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A	12	37	86%	92%	1~10
	杯B	7				
	不明	17				
黒色土器A	杯A	3	6	14%		11~12
	不明	3				
表2						
土師器	小形	1	3	100%	7%	13
	須恵A	1				
	須恵B	1				

第226表 SB1020出土土器構成表



第175図 SB1020土師器杯A法量分布

表1						
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
黒色土器A	杯A	1	13	100%	81%	
	杯B	5				
	不明	1				
	不明	2				
表2						
土師器	長胴形	2	3	100%	19%	
	小形	1				

第227表 SB1021出土土器構成表

の器種不明が2、須恵器杯Aが1、長胴形甕が6、小形甕が2の12個体である。須恵器杯Aの底部調整は回転糸切り後手持ちヘラ削りであり、3もしくは4段階の可能性が高い。

### SB1020 (図版177・178, PL53, 第226表, 第175図)

10段階を設定した資料の一つ。杯Aは土師器のみで、杯A IIの口径が10.5cmを中心に分布し、煮炊形態が羽釜Aと小形甕で構成される。黒色土器A椀には大小2法量があり、小形甕の口縁部は受け口状を呈する。

表226						
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
種類	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A II	1	9	38%	73%	
	杯A	1				
	杯	1				
	不明	6				
黒色土器A	杯A II	1	12	50%		
	杯A II	3				
	杯A	4				
	不明	4				
須恵器	杯	1	1	4%		
灰釉陶器	瓶	2	2	8%		1
煮炊						
土師器	長胴形甕	7	8	100%	24%	
	小形甕	1				
打製						
須恵器	釜	1	1	100%	3%	

第226表 SB1022出土土器構成表

### SB1021 (第227表)

法量を計測できる資料は無いが、食器形態が黒色土器Aのみで構成されていることから6または7段階か。

### SB1022 (図版178, 第228表)

杯Aの中で土師器の占める割合が22%と少ないものの、食器形態としては38%を占めることから7段階と捉えておきたい。ただし、資料数は少なく、黒色土器A杯A IIの口径と器高の比率が3:1を中心とする等6段階に類似した様相を示している。灰釉陶器椀はいずれも光ヶ丘1号窯式であり、SB1213と接合関係がある。

表228						
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
種類	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A II	12	48	60%	91%	1~2
	杯A	8				
	杯	3				
	不明	25				
黒色土器A	杯A II	2	10	20%		11
	杯	10				
	不明	9				
	不明	9				
須恵器	杯	2	2	3%		
煮炊						
土師器	長胴形甕	5	7	100%	9%	15
	長胴形甕	1				
	羽釜A	1				
打製						
須恵器	瓶	1	1	100%	3%	17

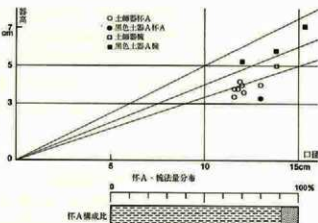
第228表 SB1024出土土器構成表

### SB1023

土師器の長胴形甕が1個体出土したのみである。

### SB1024 (図版178, PL53, 第229表, 第176図)

8段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は11.7cmを中心に集中する。土師器椀は1法量で、黒色土器A椀には大小2法量がある。口縁部内面を横へら磨きする球胴形甕(16)があり、鈿部以下をハケ目調整する羽釜A(17)がある。17の下端欠損部は凹凸が見られるが、ほぼ水平であり、甕として転用されていた可能性がある。



第176図 SB1024法量分布と杯A構成比

### SB1025 (第230表)

杯Aの94%を土師器が占めるが、杯A IIの口径が12 cm、黒色土器A杯A IIの口径が12.5cmを中心に分布することから7段階と捉えておきたい。

表230						
器種	器種	器種	器種	器種	器種	器種
種類	器種	器種	器種	器種	器種	器種
土師器	杯A II	11	31	72%	91%	
	杯A	5				
	不明	8				
	杯A II	1				
黒色土器A	杯	1	8	20%		
	杯	1				
	不明	1				
	不明	5				
煮炊						
土師器	小形甕	2	2	100%	6%	
打製						
灰釉陶器	瓶	1	1	100%	3%	

第230表 SB1025出土土器構成表

### SB1026 (図版178・179, PL54, 第231表, 第177図)

5段階を設定した資料の一つ。杯Aの52%を黒色土器Aが、40%を須恵器が占め、両者とも口径と器高の



比率が3:1を下回る。黒色土器Aには杯A I・IIがあり、底部が回転糸切り未調整のものは皆無である。長胴形甕は短く外反度の強い口縁部が特徴的で、胴上半からヘラ削りされるものが主体を占める。総体的にヘラの単位が大きく、14・17は内面にヘラナデ調整が施されている。小形甕は全面回転ナデ調整で底部回転糸切りのものと、胴部・底部ともヘラ削りのものがある。

SB1027 (第232表)

土師器杯A IIの口径が9.5cmを中心に分布することから12段階と把握されよう。口径14.5cm、器高5.5cmを測る土師器盤Bがあり、灰釉陶器段皿は虎渓山1号窯式もしくは丸石2号窯式である。

SB1028 (第233表)

杯Aの中で土師器の占める割合が33%とやや少ないものの、土師器杯A IIの口径が12.5cm、黒色土器A杯A IIが13cmを中心に分布することから7段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの底部調整は72%が回転糸切り未調整である。

SB1029 (図版179, PL54, 第234表)

食器形態の30%を黒色土器Aが、40%を須恵器が占め、黒色土器A杯Aの底部及びその外周は手持ちヘラ削りで、須恵器はいずれも回転糸切り未調整である。両者とも口径と器高の比率が3:1以下であり、緩やかなコ字状口縁の武蔵薮があることなどから、4段階の土器様相と把握される。

SB1030 (図版179・180, PL54, 第235表)

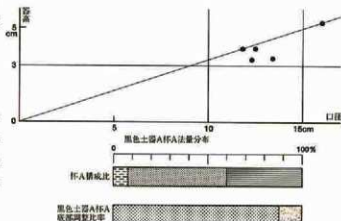
食器形態の88%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階の土器様相と把握される。黒色土器Aの椀は1法量で、口径

食器							
種類	器種	器口径	器高	口径器高比	口径器高比	口径中%	
土師器	杯A II	2	3	27%	60%	1	
	盤B	1	2	19%			
	不明	2	2	19%			
黒色土器A	不明	1	1	9%		3%	2-5
黒色土器B	不明	1	1	9%			
須恵器	杯A	3	4	37%			
灰釉陶器	杯	1	1	9%		7-10	8-9-11-12
	段皿	1	1	9%			
家炊							
土師器	長胴形甕	2	5	100%		31%	13-17
	羽釜	3	5	100%	31%		

第232表 SB1027出土土器構成表

食器							
種類	器種	器口径	器高	口径器高比	口径器高比	口径中%	
土師器	杯A II	1	3	6%	43%	1	
	杯A	1	2	33%			
	不明	1	2	33%			
黒色土器A	杯A II	2	16	43%		43%	2-5
	杯A I	2	5	27%			
	不明	3	2	33%			
須恵器	杯A II	2	19	50%		50%	7-10
	杯A	3	5	33%			
	杯	1	1	9%			
家炊	長胴形甕	2	5	100%		4%	13-17
	羽釜	3	5	100%	4%		
家炊							
土師器	長胴形甕	2	5	100%	53%	13-17	
	段皿	1	1	9%	25		
	小形甕	8	8	18-24			
家炊							
須恵器	盤	2	3	100%	4%	25	
	杯	1	1	9%	25		

第231表 SB1026出土土器構成表



第177図 SB1026法量分布と杯A構成比・底部調整比率

食器							
種類	器種	器口径	器高	口径器高比	口径器高比	口径中%	
土師器	杯A II	3	22	30%	89%	1	
	杯A I	2	2	33%			
	不明	17	1	33%			
黒色土器A	杯A II	4	29	51%		89%	1
	杯A I	5	5	33%			
	不明	6	1	33%			
黒色土器B	不明	12	5	9%		3%	2-5
	灰釉陶器	杯	1	1			
家炊							
土師器	長胴形甕	2	5	100%		8%	13-17
	小形甕	3	3	100%	8%		
家炊							
須恵器	盤	1	1	50%	3%	25	
	灰釉陶器	杯	1	1	50%		3%

第233表 SB1028出土土器構成表

食器							
種類	器種	器口径	器高	口径器高比	口径器高比	口径中%	
土師器	杯A	1	1	10%	41%	6	
	不明	1	1	10%			
黒色土器A	杯A II	1	3	30%		41%	1
	不明	1	2	33%			
黒色土器B	不明	2	2	33%		3%	3
	杯A II	1	4	40%			
須恵器	杯A II	1	4	40%		2%	2
	杯A	1	1	9%			
家炊							
土師器	長胴形甕	5	7	100%		41%	6
	段皿	1	1	9%	4		
	小形甕	1	1	9%			

第232表 SB1027出土土器構成表

食器							
種類	器種	器口径	器高	口径器高比	口径器高比	口径中%	
土師器	杯A	1	1	10%	41%	6	
	不明	1	1	10%			
黒色土器A	杯A II	1	3	30%		41%	1
	不明	1	2	33%			
黒色土器B	不明	2	2	33%		3%	3
	杯A II	1	4	40%			
須恵器	杯A II	1	4	40%		2%	2
	杯A	1	1	9%			
家炊							
土師器	長胴形甕	5	7	100%		41%	6
	段皿	1	1	9%	4		
	小形甕	1	1	9%			

第234表 SB1029出土土器構成表



13cmの皿B(12)があり、鉢は杯Aの相似形を呈するもの(14・15)と口縁部が屈曲するもの(13)とがある。底部調整は13・16とも手持ちへら削りである。長胴形甕は直立気味に内灣する長い口縁部が特徴的で、胴上半からへら削りされるものが主体である。2は回転ナデ調整後、内外面・つまみ部ともへら磨きが施される土師器で、器形から壺蓋とした。

## SB1031 (第236表)

法量を計測できる資料が少ないが、杯Aの63%を黒色土器Aが占め、杯Aの40%が底部回転糸切り未調整であることから6段階と捉えておきたい。灰釉陶器皿Bの窯式は不明である。

## SB1032 (第237表, 第178図)

土師器杯A IIの口径が11cm前後を中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。腕の中で土師器が占める割合が65%と高率である。

## SB1033 (図版180, 第238表, 第179図)

食器形態の69%を黒色土器Aが占め、杯A IIの口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階の土器様相と把握される。杯A IIの底部はいずれも回転糸切り未調整である。1は光ヶ丘1号窯式の腕で、2は大原2号窯式の皿Bである。

表部						
種類	器種	器作数	口径調整済数	口径調整済比率	器高調整済比率	器高調整済比率
土師器	杯A II	26	259	92%	90%	
	杯A	26				
	皿	17				
	不明	2				
黒色土器A	杯A	9	49	10%		
	腕	7				
	皿	2				
	不明	35				
黒色土器B	腕	2	2	1%		
	杯	1				
灰釉陶器	杯	4	5	2%		
窯式						
土師器	長胴形甕	9	9	100%	2%	
	別窯	3				

第237表 SB1032出土土器構成表

表部						
種類	器種	器作数	口径調整済数	口径調整済比率	器高調整済比率	器高調整済比率
土師器	杯A II	1	1	1%		
	皿	2				
黒色土器A	皿	1	13	60%	70%	
	不明	7				
灰釉陶器	腕	3	3	20%		1
	皿	2				
窯式						
土師器	長胴形甕	9	9	100%	20%	
	別窯	3				

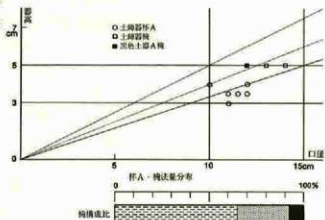
第238表 SB1033出土土器構成表

表部										
種類	器種	器作数	口径調整済数	口径調整済比率	器高調整済比率	器高調整済比率				
土師器	杯A II	1	7	9%		1				
	皿	1								
	鉢	1								
	不明	3								
黒色土器A	杯A I	4	64	90%	69%	7				
	杯A II	14				4+9+13				
	杯A	9				6				
	皿	1				11				
	皿	1				12				
	皿	4								
	鉢	6				12~15				
	不明	25								
	灰釉陶器	杯A				1	2	3%		
	杯B	1								
窯式										
土師器	長胴形甕	6	7	100%	9%	18~19				
	小形甕	1								
貯器										
黒色土器	壺	1	1	50%	2%	20				
土師器	壺	1	1	50%	2%	2				

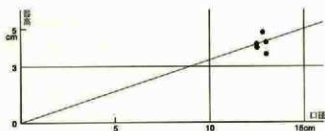
第235表 SB1030出土土器構成表

表部						
種類	器種	器作数	口径調整済数	口径調整済比率	器高調整済比率	器高調整済比率
土師器	杯A II	2	15	22%		
	杯A	2				
	不明	10				
黒色土器A	杯A II	2	31	40%	94%	
	杯A	1				
	不明	18				
	不明	1				
黒色土器B	杯A	1	1	2%		
	杯A II	1				
灰釉陶器	杯A	1	19	26%		
	杯	11				
	不明	6				
灰釉陶器	皿	1	1	2%		
窯式						
土師器	長胴形甕	5	13	100%	16%	
	小形甕	8				

第236表 SB1031出土土器構成表



第178図 SB1032法量分布と腕構成比



第179図 SB1033黒色土器A杯A法量分布

SBI035 (第239表)

黒色土器A杯A IIの口径が13cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。灰釉陶器の窯式はすべて光ヶ丘1号窯式である。

表239						
器種	器種	器数	種類別器数	種類別器数	窯式別器数	窯式別器数
土師器	不明	4	4	17%	605	
	杯A II	4				
	杯A	1	15	60%		
黒色土器A	不明	10				
	杯A	1	2	9%		
	杯B	1	2	9%		
窯式						
土師器	長胴形壺	3	11	100%	315	
	壺	2				
計						
器数	壺	1	1	100%	25	

第239表 SBI035出土土器構成表

SBI036 (第240表)

資料的には少ないが、黒色土器A杯A IIの口径は13cmを測り、口径と器高の比率が3:1であることから6段階と把握される。

表240						
器種	器種	器数	種類別器数	種類別器数	窯式別器数	窯式別器数
土師器	不明	1	1	10%	635	
	杯A II	1				
	杯	1	3	30%		
黒色土器A	不明	1				
	杯A	1	6	60%		
	杯B	3				
項蓋器	不明	2				
	不明	2				
窯式						
土師器	長胴形壺	4	6	100%	375	
	小形壺	2				

第240表 SBI036出土土器構成表

SBI037

法量を計測できる資料も無く、土師器の杯A IIが3、杯A 2、器種不明5、長胴形壺7、小形壺2の19個体が出土した。

SBI038 (図版180・181, PL55, 第241表, 第180図)

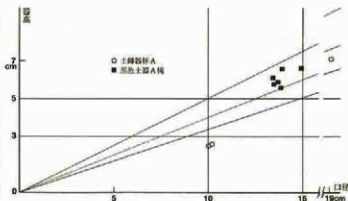
11段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIは口径10cmを測る。破片の状態では杯Aと区別ができなため、土器構成表では杯A Iとしたが、口径19.1cmを測る杯Aと相似形の土師器鉢がある。黒色土器A杯A I・IIは口径と器高の比率が3:1を示し、重複住居址からの混入とも考えられるが、底径が大きく丸みを帯びた器形を呈しており、仮に高台部を付加すると椀と同様な法量を示すため、無台の椀というような意識のもと本段階に使用されていた可能性が考えられる。黒色土器A椀は1法量ながら良好な資料である。12は輪積み痕が観察され、鋸部内面まで回転ナデ調整を残り、外面及び内面をナデ調整する羽釜Aである。13はロクロ(回転)調整を用いずに成形・整形された羽釜Aで、鋸部以下をヘラ削りする。14はロクロ(回転)調整を用いずに成形・整形された羽釜Aで、口径縁部へラ削り、鋸部以下タタキ調整が施される。灰釉陶器皿Bは窯式不明である。

表241						
器種	器種	器数	種類別器数	種類別器数	窯式別器数	窯式別器数
土師器	杯A I	1			42	345
	杯A II	7				
	杯A	2				
	杯B	3				
	壺	3				
	不明	18				
	不明	18				
黒色土器A	杯A I	1			71	57%
	杯A II	3				
	杯A	12				
	杯B	15				
	杯	3				
	不明	3				
	不明	3				
黒色土器B	杯	1	1	1%		39%
	杯A	3				
	壺	3				
項蓋器	杯	3	9	7%		
	不明	3				
	不明	3				
灰釉陶器						
窯式						
土師器	長胴形壺	7			13	100%
	羽釜A	2				
	羽釜	2				
	羽釜形鉢	2				
計						
器数	壺	1	1	50%	25	
灰釉陶器	長胴壺	1	1	50%		

第241表 SBI038出土土器構成表

SBI039 (図版181, PL55, 第242表, 第181図)

7段階を設定した資料の一つ。杯Aの87%を土師器が占める。杯A IIの口径は12cmを中心に分布し、口径14.6cmを測る14とは格差が認められる。椀は土師器が1法量、黒色土器Aが大小2法量である。深碗形の器形を取る黒色土器A鉢がある。小形壺は全面回転ナデ



第180図 SBI038土器形態法量分布

調整、底部回転糸切りが主体で、法量差が窺える。

### SB1040 (第243表, 第182図)

食器形態の96%を黒色土器Aが占めることから6段階と想定したが、杯A IIの口径と器高の比率が3:1以下に集中し、底部回転糸切り未調整が92%を占めることから7段階の土器様相と把握すべきか。

### SB1041 (図版182, 第244表)

資料は少なく、土師器・灰釉陶器の器種不明が各1、白磁碗が1、土師器の長胴形壺1、甕1の13個体である。1は削り出し高台で、白磁碗V類に相当する。

### SB1042 (第245表)

杯Aの中で土師器の占める割合が17%と少ないが、杯A IIの口径が土師器12cm、黒色土器A13cm前後を中心に分布することから7段階と捉えておきたい。黒色土器A杯Aは、すべて底部回転糸切り未調整である。

### SB1043 (第246表)

食器形態の86%を黒色土器Aが占めるが、法量を計測できる資料は無く、土師器碗があり、黒色土器A杯Aがすべて底部回転糸切り未調整であることなどから7段階と捉えておきたい。

表題						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A II	2	6	20%	82%	
	杯A	2				
	甕A	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A I	2	24	90%		
	杯A II	12				
	杯A	4				
	不明	4				
表次						
土師器	長胴形壺	6	6	100%	17%	
計量						
黒色土器	甕	1	1	100%	1%	

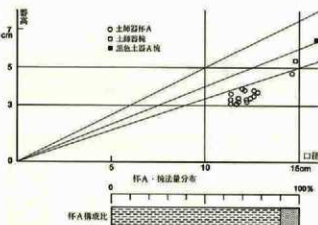
第245表 SB1042出土土器構成表

表題						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	甕	2	3	14%	60%	
	不明	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A I	1	19	80%	82%	
	杯A II	3				
	杯A	4				
	甕	3				
	甕	1				
	不明	7				
表次						
土師器	長胴形壺	6	6	100%	31%	
土師器	甕	1	10	100%	31%	
	小形甕	3				

第246表 SB1043出土土器構成表

表題						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A II	28	47	78%	80%	1~14
	杯A	7				
	甕	2				
	不明	10				
黒色土器A	杯A	4	16	25%		16-18
	甕	1				
	杯	1				
	不明	6				
表次						
土師器	長胴形壺	4	4	100%	14%	25
土師器	小形甕	6	6	100%	14%	20~25
計量						
黒色土器	甕	1	1	100%	1%	27

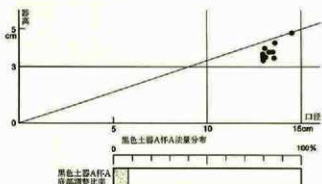
第242表 SB1039出土土器構成表



第181図 SB1039法量分布と杯A構成比

表題						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	甕	1	1	100%	4%	
	杯A I	2	26	96%	82%	
黒色土器A	杯A II	13				
	杯A	1				
表次						
土師器	長胴形壺	6	6	100%	19%	
土師器	小形甕	1	1	100%	1%	

第243表 SB1040出土土器構成表



第182図 SB1040法量分布と底部調整比率

表題						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	不明	9	9	82%		
	灰釉陶器	1	1	8%	80%	
輸入地陶器	白磁碗	1	1	9%		1
表次						
土師器	長胴形壺	1	2	100%	13%	
土師器	甕	1	1	100%	1%	

第244表 SB1041出土土器構成表

SB1044 (第247表)

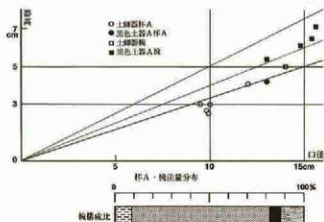
遺構としては焼土のみの検出のため、遺物の一活性が疑問視されようが、杯Aの95%を土師器が占め、土師器杯AⅡの口径が11cmを中心に分布することから、9段階と捉えておきたい。

食器						
種類	器種	器体数	検出器体数	検出器体数割合	検出器体数割合	器体中位
土師器	杯AⅡ	50	337	92%	95%	
	杯A	92				
	筒	11				
	盤	2				
	釜	1				
	不明	180				
黒色土師A	杯AⅡ	7	25	7%		
	筒	1				
黒色土師B	不明	17	1	1%		
	筒	1				
家炊						
土師器	長頸形壺	2	3	100%	1%	
	小形壺	1				
貯蔵						
須恵器	甕	1	1	100%	1%	

第247表 SB1044出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	検出器体数	検出器体数割合	検出器体数割合	器体中位
土師器	杯AⅡ	19	129	35%	91%	
	杯A	42				
	筒	3				
	盤	1				
	釜	1				
	不明	65				
黒色土師A	杯AⅡ	1	197	55%	91%	
	杯A	34				
	筒	25				
	不明	128				
黒色土師B	筒	2	3	1%		
	不明	1				
須恵器	杯AⅡ	2	24	7%		
	杯A	6				
	不明	14				
灰釉陶器	筒	2	7	2%		
	長頸	4				
	不明	1				
家炊						
土師器	長頸形壺	21	37	100%	9%	
	小形壺	2				
	貯蔵	1				
貯蔵	13					

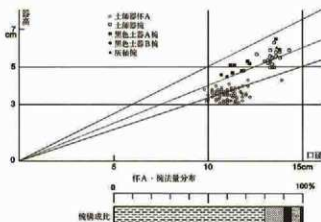
第248表 SB1045出土土器構成表



第183図 SB1045法量分布と焼成比

食器						
種類	器種	器体数	検出器体数	検出器体数割合	検出器体数割合	器体中位
土師器	杯AⅡ	2	5233	92%	95%	1~104
	杯AⅡ	182				
	杯A	1212				
	筒	219				
	釜	9				
	盤	10				
	釜	2				
	釜	1				
	不明	3588				
	不明	9				
黒色土師A	杯AⅡ	27	290	4%	90%	127
	杯A	24				
	筒	28				
	柱	3				
	不明	199				
	不明	10				
黒色土師B	杯AⅡ	1	38	1%	15%	137~143
	瓦器	1				
	不明	28				
須恵器	杯AⅡ	1	3	1%		
	杯A	1				
	貯蔵	1				
灰釉陶器	筒	15	26	1%	15%	145~146
	長頸	8				
	不明	4				
埴輪高目	筒	1	1	1%	15%	147~148
	瓦器	1				
家炊						
土師器	長頸形壺	50	62	90%	1%	
	小形壺	3				
黒色土師A	瓦器	1	1	2%	15%	150
	不明	1				
貯蔵						
須恵器	甕	2	2	100%	1%	151~153
	灰口瓶	2				
灰釉陶器	瓶	11	11	80%	1%	156~157
	瓶	3				

第249表 SB1046出土土器構成表



第184図 SB1046法量分布と焼成比

食器						
種類	器種	器体数	検出器体数	検出器体数割合	検出器体数割合	器体中位
土師器	杯AⅡ	11	226	81%	93%	
	杯A	40				
	筒	3				
	盤	2				
	釜	2				
	不明	162				
黒色土師A	杯A	4	47	17%		
	筒	11				
	不明	33				
	筒	4				
灰釉陶器	貯蔵	1	5	2%	1%	
	不明	1				
家炊						
土師器	長頸形壺	10	15	100%	3%	
	須恵器	5				
貯蔵						
灰釉陶器	須恵器	1	5	100%	2%	
	瓶	4				

第250表 SB1047出土土器構成表

## SB1045 (図版182, 第248表, 第183図)

土師器杯A IIの口径が10cmを中心に分布することから11段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯A Iは口径と器高の比率が3:1を示し、底径が大きく丸みを帯びた器形を呈しており、仮に高台部を付加すると碗と同様な法量を示すため、無台の碗というような意識のもと本段階で使用されていた可能性が考えられる。碗は土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器で構成され、黒色土器Aが74%を占める。1・2は丸石2号窯式の灰釉陶器である。他に、光ヶ丘1号窯式の碗が3個体出土している。

## SB1046 (図版182~184, PL56・57, 第249表, 第184図)

9段階を設定した資料の一つ。資料数は膨大で、土師器の杯Aが1396個体、碗が219個体確認され、食器形態の92%を土師器が占めている。加えて、煮炊形態・貯蔵形態の占める割合が各1%と、特殊な状況を呈していると言える。土師器杯A IIは口径11cmを中心に分布し、口径13.9cmを測る104と格差を認めざるを得ない。口径と器高の比率が3:1を上回るものが多く、概して深い印象を得る。碗は土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器・緑釉陶器で構成され、土師器が219個体で、80%を占める。さらに、土師器・黒色土器A・黒色土器Bは、口径12cm前後を境に大小2法量が認められる。149は内面に磨き・黒色処理があることから黒色土器Aの足釜とした。脚部については接合部から剥落している。150は法量の小さい小形甕で、底部回転未切り、全面回転ナブ調整で、直立気味の短い口縁部を持つ。灰釉陶器は貯蔵形態を初めとして窯式が不明なものが多く、145・146についても不明である。147は光ヶ丘1号窯式もしくは大原2号窯式で、148は虎渓山1号窯式である。

食器						
種類	器種	器体数	焼成不明体数	焼成不明体率	焼成不明体率	区別中法
土師器	杯A	6	29	785	89%	
	杯A	4				
	碗	1				
	不明	14				
黒色土器A	碗	2	8	245		
	不明	6				

煮炊						
種類	器種	器体数	焼成不明体数	焼成不明体率	焼成不明体率	区別中法
土師器	長胴形甕	1	4	100%	11%	
	小形甕	2				
	別釜	1				

第251表 SB1048出土土器構成表

## SB1047 (図版184, 第250表)

法量を計測できる資料が少なく、段階を特定することは困難である。口径14cmを測る土師器盤Bがあり、口径10~11.5cm、器高5cmの黒色土器A碗があり、灰釉陶器碗はすべて光ヶ丘1号窯式、段皿(Ⅰ)は大原2号窯式である。

食器						
種類	器種	器体数	焼成不明体数	焼成不明体率	焼成不明体率	区別中法
土師器	杯A I	1	6	27%	81%	
	杯A II	3				
	杯A	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A	8	15	60%		
	不明	1				
灰釉陶器	碗	1	1	8%		

煮炊						
種類	器種	器体数	焼成不明体数	焼成不明体率	焼成不明体率	区別中法
土師器	長胴形甕	5	13	100%	36%	
	小形甕	8				
別釜	甕	1	1	100%	3%	

第252表 SB1049出土土器構成表

## SB1048 (第251表)

法量を計測できる資料が少なく、段階を特定することは困難である。食器形態の76%を土師器が占める。

## SB1049 (第252表)

黒色土器A杯A IIの口径と器高の比率が3:1に近いものの、杯A IIの口径が土師器12cm、黒色土器Aが12.5cm前後を中心に分布することから7段階と把握しておきたい。黒色土器A杯Aはすべて底部回転未切り未調整である。灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

食器						
種類	器種	器体数	焼成不明体数	焼成不明体率	焼成不明体率	区別中法
土師器	杯A II	3	6	19%		
	杯A	1				
	不明	2				
	不明	2				
黒色土器A	杯A II	9	22	69%	76%	
	杯A	3				
	甕	1				
	皿	1				
	脚	3				
	不明	5				
灰釉陶器	杯A II (焼成)	1	4	12%		
	杯	2				

煮炊						
種類	器種	器体数	焼成不明体数	焼成不明体率	焼成不明体率	区別中法
土師器	長胴形甕	9	9	100%	22%	
	小形甕	1				

第253表 SB1050出土土器構成表

## SB1050 (第253表)

杯A IIの口径が土師器13cm、黒色土器Aが12.4cmを



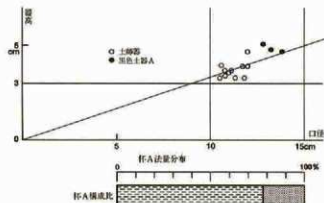
測り、黒色土器Aは口径と器高の比率が3:1で、底部回転糸切り未調整が75%であることから6段階と捉えておきたい。須恵器杯A IIは軟質須恵器に相当する。

SB1051 (図版184・185, PL57, 第254表, 第185図)

土師器杯A IIの口径は11cmを中心に集中し、黒色土器A杯A IIは12.5cmを中心に分布する。口径11.7cm、器高5.3cmを測る土師器盤B(11)や口径10.7cm、器高4.5cmを測る黒色土器B碗(23)もあり、内面にヘラ磨きが施される球形形壺(26)や27のような器形を呈する長胴形壺は、8~9段階に特徴的な土器様相を示している。したがって、複数の段階の混在が考えられるが、ここでは黒色土器A杯Aを主体と見て7段階と捉えておきたい。杯Aがすべて回転糸切り未調整であるのに対して、24は底部回転ヘラ削りの黒色土器B杯A Iで、内面は意匠化した暗文風のヘラ磨きが施される。28は輪横み痕が観察され、胴下半にハケ目調整後、外面・口縁部内外面に回転ナデ調整が施されている。

SB1052 (図版185・186, PL58, 第255表, 第186図)

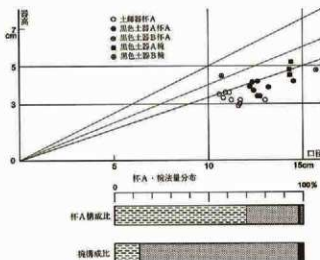
複数の段階が混在する。住居址覆土を中心に出土した口径11cmを中心に集中する土師器杯A IIと土師器碗は9段階の、カマドを中心に出土した黒色土器A杯A II・皿Bや土師器盤A、長胴形壺は6段階の土器様相を呈している。したがって、本址自体の時期については6段階と捉えておきたい。黒色土器A杯A IIは口径と器高の比率が3:1を上回り、底部回転糸切り未調整は67%を占めるに過ぎない(15)。長胴形壺は直立気味の長い口縁部で、胴上半からヘラ削りが施されている。灰胎陶器碗の窯式は不明である。



第186図 SB1052法量分布と杯A構成比

食器	器種	器体の数	口径(法量分布)	器高(法量分布)	高さ(法量分布)	段階(中位)
土師器	杯A I	2	166	615		1~10
	杯A II	42				
	杯A	20				
	碗	4				
	盤B	1				
	盤	5				
	不明	62				
黒色土器	杯A II	8	96	385	88%	12~19
	杯A	17				
	碗	27				
	不明	44				20~22
黒色土器	杯A I	1	4	15		24
	碗	1				
	不明	2				
須恵器	杯A	2	3	15		22
	杯	1				
	不明	1	1	15		
窯式						
土師器	長胴形壺	15	33	100%	105	27
	長胴形壺	1				26
	小形壺	16				25
	壺	1				28
	不明	1				
窯式						
灰胎陶器	長胴壺	1	5	100%	2%	
	灰口壺	1				
	不明	2				

第254表 SB1051出土土器構成表



第185図 SB1051法量分布と杯A・碗構成比

食器	器種	器体の数	口径(法量分布)	器高(法量分布)	高さ(法量分布)	段階(中位)
土師器	杯A II	25	139	71%		1~11
	杯A	40				
	碗	4				
	杯A I	1				
	盤B	1				
	盤	1				
	不明	63				12~13
黒色土器	杯A II	12	54	27%	95%	15~17
	杯A	6				
	碗	2				
	不明	1				19
須恵器	杯	2	1	1%		
	杯	1				
	不明	28				
灰胎陶器	杯	1	1	1%		
	碗	1				
窯式						
土師器	長胴形壺	6	7	100%	3%	10~20
	小形壺	1				
	足浅	1				
窯式						
須恵器	壺	2	2	67%	2%	21~22
	碗	1				
灰胎陶器	碗	1	1	33%		
	碗	1				

第255表 SB1052出土土器構成表



## SB1053 (第256表)

杯Aの中で土師器の占める割合が23%とやや少ないものの、土師器杯A IIの口径が13cm、黒色土器A杯A IIが12.5cmを中心に分布することから7段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aはすべて底部回転糸切り未調整である。

## SB1054 (第257表)

杯Aの54%を土師器が占め、杯A IIの口径は土師器・黒色土器Aとも13cmを中心とし、黒色土器A杯A Iがあることから7段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの口径と器高の比率は3:1以下で、底部回転糸切り未調整が83%を占める。光ヶ丘1号窯式の椀があり、緑釉陶器椀(PL92)が1個体ある。

## SB1055 (第258表)

食器形態の86%、杯Aの89%を黒色土器Aが占め、杯A IIの口径は13~13.5cmを測り、口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階の土器様相と把握される。灰釉陶器椀は光ヶ丘1号窯式である。

## SB1056 (第259表)

資料数は少ないものの、黒色土器A杯A IIの口径が12~13cmを測り、口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階と把握されよう。底部が遺存する2個体の黒色土器A杯A IIは、いずれも底部回転糸切り未調整である。

## SB1057 (第260表)

法量を計測できる資料が少ないため、段階を特定することは困難であるが、土師器杯A IIの口径が11cmと13cmを測ることなどから9段階と捉えておきたい。

## SB1058 (第261表, 第187図)

食器形態の97%を黒色土器Aが占め、杯A IIの口径

食器						
種類	器種	器口径	口径比	口径比	口径比	口径比
土師器	杯A II	2	4	31%	68%	
	不明	2				
	杯A II	3				
黒色土器A	杯A	2	9	69%		
	不明	4				
家炊						
土師器	長頸形壺	8	6	100%	32%	

第259表 SB1056出土土器構成表

食器						
種類	器種	器口径	口径比	口径比	口径比	口径比
土師器	杯A II	3	10	19%	72%	
	杯A	4				
	不明	4				
	杯A I	1				
黒色土器A	杯A II	3	41	77%		
	杯A	1				
	不明	1				
	杯A	2				
	不明	2				
黒色土器B	不明	2	2	4%		
家炊						
土師器	長頸形壺	18	21	100%	28%	
	小形壺	3				

第256表 SB1053出土土器構成表

食器						
種類	器種	器口径	口径比	口径比	口径比	口径比
土師器	杯A II	6	15	44%	77%	
	杯A	2				
	不明	1				
	不明	2				
	不明	2				
	不明	3				
黒色土器A	杯A I	1	17	80%		
	杯A II	2				
	杯A	3				
	不明	1				
	不明	7				
	不明	3				
灰釉陶器	椀	1	1	2%		
緑釉陶器	椀	1	1	2%		
家炊						
土師器	長頸形壺	2	8	100%	18%	
	長頸形壺	1				
	小形壺	5				
貯蔵						
黒色土器	壺	2	2	100%	5%	

第257表 SB1054出土土器構成表

食器						
種類	器種	器口径	口径比	口径比	口径比	口径比
土師器	杯A II	1	30	8%	84%	
	杯A	2				
	不明	2				
	不明	23				
	不明	2				
黒色土器A	杯A II	5	314	80%		
	杯A	81				
	不明	5				
	不明	2				
	不明	25				
	不明	1				
	不明	7				
	不明	158				
	不明	1				
	不明	1				
黒色土器B	杯A	4	20	5%		
	杯A	9				
	杯A II	1				
	不明	2				
	不明	2				
灰釉陶器	椀	1	1	1%		
家炊						
土師器	長頸形壺	65	66	100%	10%	
	壺	1				
貯蔵						
黒色土器	壺	1	1	32%		
灰釉陶器	壺	1	2	50%	1%	
黒色土器B	小瓶	1	1	25%		

第258表 SB1055出土土器構成表

食器						
種類	器種	器口径	口径比	口径比	口径比	口径比
土師器	杯A II	3	62	73%	97%	
	杯A	11				
	不明	2				
	不明	48				
黒色土器A	杯A	5	18	22%		
	不明	13				
黒色土器B	杯A	2	3	3%		
	不明	1				
家炊						
土師器	長頸形壺	2	2	100%	2%	
貯蔵						
灰釉陶器	壺	1	1	100%	1%	

第260表 SB1057出土土器構成表

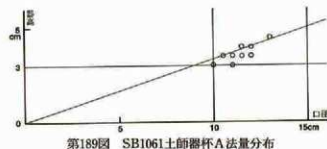
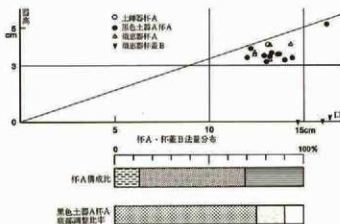
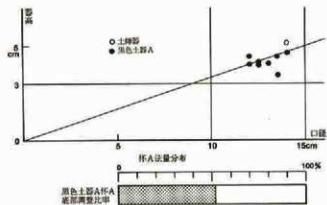
は12~14cmに分布し、口径と器高の比率が3:1に集中することから6段階の土器様相と把握される。黑色土器A杯Aの48%が底部回転糸切り未調整である。

SB1059 (図版186, PL58, 第262表)

法量を計測できる資料が少ないが、食器形態の78%を土師器が占め、杯A IIの口径は10cm(1)と13.1cm(2)を測ることから11段階の土器様相と把握される。

SB1060 (図版186・187, PL58, 第263表, 第188図)

5段階を設定した資料の一つ。杯Aの56%を黑色土器A、31%を須恵器が占め、両者とも口径と器高の比



種類	器種	個体数	口径別個体数	口径別器高比	口径別器高比	器高平均
土師器	杯A II	1	1	15		
	杯A II	12				
	杯A	13				
	瓶	2	72	975	825	
	鉢	2				
	鉢	2				
須恵器	杯	28				
	不明	1	2	25		
状況						
土師器	長頸形優	15	17	100%	185	
	小形優	2				

第261表 SB1058出土土器構成表

種類	器種	個体数	口径別個体数	口径別器高比	口径別器高比	器高平均
土師器	杯A II	9				
	杯A	23				
	瓶	6	133	785	955	
	鉢	2				
	鉢	2				
	不明	89				
黑色土器A	瓶	17	38	225		
	不明	21				
状況						
土師器	長頸形優	2				
	小形優	1	7	100%	45	
	須恵	4				
貯蔵						
灰物貯蔵	口径	1	1	100%	15	

第262表 SB1059出土土器構成表

種類	器種	個体数	口径別個体数	口径別器高比	口径別器高比	器高平均
土師器	杯A I	3				
	杯A II	1	11	85		1
	杯A	1				
	不明	6				
黑色土器A	杯A I	1				9
	杯A II	12				2~9, 10~12
	瓶	9	57	435		13~14
	鉢	2				19~20
	不明	33				21~22
須恵器	杯A II	18				
	杯A	2				
	杯B	2	66	495		23
	杯	38				
	須恵B	2				24~25
	杯蓋	1				
状況						
土師器	長頸形優	63				32~39
	須	3	88	1805	385	40
	次級優	1				
	小形優	19				26~31
貯蔵						
長頸優	2					47~48
須恵B耳優	1	10	1805	45		43
須	4					44~47, 44
杯	2					45~46

第263表 SB1060出土土器構成表

種類	器種	個体数	口径別個体数	口径別器高比	口径別器高比	器高平均
土師器	杯A I	2				
	杯A II	22				
	杯A	20	84	795	965	
	瓶	1				
	不明	39				
黑色土器A	杯A	2				
	瓶	5	21	205		
	不明	13				
黑色土器B	杯A	1	1	15		
状況						
土師器	小形優	2	2	100%	25	
貯蔵						
灰物貯蔵	長頸優	2	2	100%	25	

第264表 SB1061出土土器構成表

率が3:1以下に集中する。黒色土器A杯AにはI(9)・IIの法量差が認められる。黒色土器A杯Aの底部調整は、回転糸切り未調整が10%を占めるに過ぎず(11・12)、手持ちヘラ削りが主体である。13・14は外反度の強い口縁部の黒色土器A鉢である。須恵器杯B・杯蓋Bがあり、22は軟質須恵器に相当する。長胴形甕は外反度が強く短い口縁部で、口縁部内外面のみ回転ナデ調整を残し、口縁部直下からヘラ削りが施され、器壁が薄いという特徴を持つ。底部についても手持ちヘラ削り調整が施されている(39)。コ字状口縁を呈する武蔵甕(40)があり、その形態的特徴の影響等が想定されよう。35はコ字状口縁を模倣したものと考えられる。小形甕は大小の法量差が窺え、全容が明らかな資料はないが、胴下半をヘラ削りするものが主体を占めていたであろう。43の耳部に施された上方からの穿孔は貫通していない。45は小形の須恵器鉢と捉えたが、土師器小形甕に器形・調整技法とも類似する。

## SB1061 (第264表, 第189図)

杯Aの94%を土師器が占め、杯A IIの口径が10~13 cmの間に分布することから8段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率は3:1に近い。

## SB1062 (第265表)

杯Aの86%を土師器が占め、杯A IIの口径が11~12 cmの間に分布することから8段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率は3:1に集中する。灰釉陶器段皿は虎渓山1号窯式で、他は窯式不明である。

器種	器種	法量数	法量割合(%)	法量割合(%)	法量割合(%)	法量割合(%)
土師器	杯A I	43	359	86%	97%	
	杯A II	79				
	鉢	13				
	器A	1				
	不明	222				
黒色土器	杯A I	1	51	12%		
	杯A II	18				
	鉢	3				
	器	2				
	不明	27				
須恵器	杯A	2	8	1%		
灰釉陶器	杯	3	2	1%		
窯式	虎渓山1号	1				
窯式	不明	1				
行徳	土師器	長胴形甕	12	12	100%	2%
行徳	灰釉陶器	段	1	1	100%	1%

第265表 SB1062出土土器構成表

## SB1063 (図版188, PL59, 第266表, 第190図)

8段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIは口径11.5cmを中心に分布し、口径13.7cmを測る10とは格差が生じている。口径と器高の比率は3:1に近い。杯Aの75%を土師器が占める。碗は土師器1法量、黒色土器A大小2法量である。13は意匠化した暗文風のヘラ磨きが施され、口縁端部に煤または油煙状の黒色付着物が観察される。

器種	器種	法量数	法量割合(%)	法量割合(%)	法量割合(%)	法量割合(%)
土師器	杯A I	2	143	79%	94%	11
	杯A II	24				
	杯A	22				
	鉢	5				
	不明	90				
黒色土器	杯A I	2	31	17%		13
	杯A II	12				
	鉢	2				
	器	1				
	不明	13				
須恵器	杯A	2	7	4%		
窯式	杯	5				
窯式	土師器	長胴形甕	6	7	100%	4%
窯式	土師器	小形甕	1			17
行徳	器	2				18・19
行徳	須恵器	鉢	1	3	60%	2%
行徳	灰釉陶器	瓶	2	2	40%	

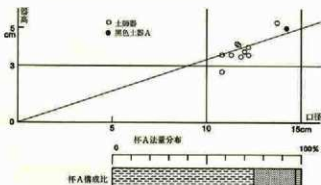
第266表 SB1063出土土器構成表

## SB1064

資料数は少なく、土師器の杯Aが1、器種不明2、黒色土器Aの杯A IIが1、杯A・器種不明各1、窯式不明の灰釉陶器瓶が1の9個体が出土した。

## SB1065 (図版188~191, PL59・60, 第267表, 第191図)

6段階を設定した資料の一つ。杯Aの74%を黒色土器Aが占め、口径と器高の比率が3:1に集中する。杯Aは、便宜的に口径15cmを境にIとIIを分類したが、本址出土の黒色土器Aでは口径14.5cmを境に大小2法



第190図 SB1063法量分布と杯A構成比

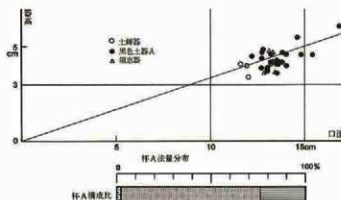
量に分類される。底部調整は杯Aの64%が回転糸切り未調整である。土師器に鉄鉢形の鉢(5)がある。黒色土器Aには口径12.6~13.6cmを測る皿Bがあり、碗は1法量である。黒色土器A鉢は内彎する口縁を持つものと杯Aと相似形のものがあり、底部調整は両者とも手持ちへら削りである。42~45は軟質須恵器に相当し、灰釉陶器碗はいずれも光ヶ丘1号窯式である。長胴形甕は直立気味に内彎する長い口縁部が特徴的で、口縁部内外面に回転ナデ調整を残し、口縁部直下から底部までへら削りが施されるものが主体的である。浅鉢形甕・小形甕も同様な手法で整形され、小形甕には法量差が窺える。

SB1066 (第268表)

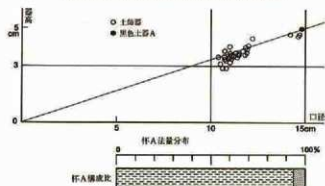
杯Aに法量を計測できる資料が無く、段階を特定することは困難である。

SB1067 (図版191・192, PL61, 第269表, 第192表)

8段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの法量分布は大小の法量差を明確に提示する。口径14.5cmを中心とした一群は、口径15cm以上と設定した杯A Iの



第191図 SB1065法量分布と杯A構成比



第192図 SB1067法量分布と杯A構成比

全器						
種類	器種	個体数	重量計測済個体数	重量計測済割合	法量別個体数	法量平均
土師器	杯A	4	207	12%		1~4
	杯A	1				
	皿B	4				
	鉢	1				
	不明	7				
	不明	183				
黒色土器A	杯A	41	1189	70%	8%	30~21
	杯A	33				6~29
	杯A	113				32~23
	皿	27				34~25
	皿	3				36~41
	不明	999				
黒色土器B	不明	8	8	1%		42~41
	不明	8				49~48
須恵器	杯A	10	108	11%		49
	不明	51				
	不明	1				
	不明	123				
灰釉陶器	皿	6	6	1%		50
	皿	6				

表状						
土師器	長胴形甕	203	231	100%	11%	56~69
	浅鉢形甕	1				70
	小形甕	26				51~55
	甕	1				

貯蔵						
須恵器	皿	1	2	100%	1%	72
	甕	1 <td>71</td>				71

第267表 SB1065出土土器構成表

全器						
種類	器種	個体数	重量計測済個体数	重量計測済割合	法量別個体数	法量平均
土師器	杯A	4	27	66%		
	皿	5				
	不明	18				
	不明	3				
黒色土器A	杯A	1	14	34%	8%	
	皿	2				
	皿	1				
	不明	10				

表状						
土師器	長胴形甕	6	7	100%	1%	19%
	須恵	2				19%

第268表 SB1066出土土器構成表

全器							
種類	器種	個体数	重量計測済個体数	重量計測済割合	法量別個体数	法量平均	
土師器	杯A	38	207	87%		1~23	
	杯A	8					34~36
	皿	6					37
	不明	245					
黒色土器A	杯A	1	38	11%	9%	33~29	
	杯A	2				40	
	皿	5					
	不明	32					
灰釉陶器	皿	4	5	2%		41	
	皿	1					

表状						
土師器	長胴形甕	27 <th rowspan="4">38</th> <th rowspan="4">100%</th> <th rowspan="4">10%</th> <th>42~43</th>	38	100%	10%	42~43
	小形甕	1				44~46
	須恵	2				47
	平出形甕	1				

第269表 SB1067出土土器構成表

全器							
種類	器種	個体数	重量計測済個体数	重量計測済割合	法量別個体数	法量平均	
土師器	不明	2	2	2%			
	杯A I	1					25
黒色土器A	杯A	5	37	9%	7%		
	杯A	2					
	皿	1					
	不明	29					
灰釉陶器	皿	2	2	2%		5%	
	皿	2					

表状						
土師器	長胴形甕	6	11	100%	21%	47
	小形甕	5				

第270表 SB1068出土土器構成表

小型化によるものとも想定され、分量分化の意義・定義付けに問題点を提示しよう。杯Aの口径と器高の比率は3:1に集中し、黒色土器A杯A IIは口径14.5cmを中心とした一群に属す。椀は土師器1法量、黒色土器Aが大小2法量である。40は底部回転糸切り後手持ちへら削りされる黒色土器A鉢で、口径15.9cmと小型化傾向にある。41は大原2号窯式の皿Bで、灰釉陶器椀4個体の内、1個体が光ヶ丘1号窯式である。長胴形壺は直立気味に内彎する口縁部を持ち、口縁部から胴上半に回転ナデ調整を施し、下半にタタキ調整を施す。47は下部を欠損するが、直立する口縁部に回転ナデ調整を残し、以下にタタキ調整を施す牛出形甕である。

## SB1068 (第270表)

食器形態の90%を黒色土器Aが占めるが、杯Aの口径と器高の比率が3:1以下に集中し、いずれも底部回転糸切り未調整であることから7段階と捉えておきたい。灰釉陶器の窯式は不明である。

## SB1069 (第271表)

食器形態の82%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1に近く、底部回転糸切り未調整が78%であることから6段階と捉えておきたい。

## SB1070 (図版192, PL61, 第272表, 第193図)

杯Aの89%を土師器が占め、土師器杯A IIの口径が11.5cmと13.5cmを中心に分布することから8段階の土器様相と把握される。椀は土師器1法量、黒色土器Aが大小2法量ある。口径13cmを測る黒色土器A皿Bがある。17・18は土師器鉢としたが、口縁部に回転ナデ調整を残し、18は以下をタタキ調整していることから牛出形甕の可能性も考えられる。

## SB1071 (図版193, PL61, 第273表, 第194図)

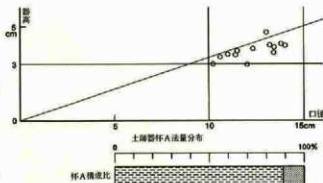
杯Aの67%を黒色土器Aが占め、口径と器高の比率が3:1に近いことから6段階の土器様相と把握される。底部回転糸切り未調整が75%を占める。2は底部回転へら削りである。12は軟質須恵器に相当する。13の天井部は回転糸切り未調整で環状のつまみは付かないが、口縁端部が面取りされていることから杯蓋Cと

食器	器種	器体数	口径別器体数	器高別器体数	口径器高別器体数	器高中心値
土師器	不明	2	3	115		
	杯A I	3				
	杯A II	2				
	不明	1				
黒色土器A	杯A	9	22	825	715	
	皿	2				
	不明	6				
	杯A II	1	2	75		
不明	1					
合計	長胴形壺	11	11	100%	29%	
土師器	長胴形壺	11	11	100%	29%	

第271表 SB1069出土土器構成表

食器	器種	器体数	口径別器体数	器高別器体数	口径器高別器体数	器高中心値
土師器	杯A I	1				1~12
	杯A II	29				
	皿	20				
	不明	7	133	74%		12
	鉢	3				
	不明	73				17-18
黒色土器A	杯A I	1				
	杯A	5				
	皿	13	42	23%	92%	14
	皿B	2				15-16
	皿	2				
	不明	10				
須恵器	杯	6	6	3%		
合計	長胴形壺	11				
土師器	長胴形壺	11	15	100%	8%	19
	小形壺	1				
	回蓋	3				

第272表 SB1070出土土器構成表



第193図 SB1070法量分布と杯A構成比

食器	器種	器体数	口径別器体数	器高別器体数	口径器高別器体数	器高中心値
土師器	杯A	5				1
	皿	1	20	14%		
	不明	14				
	不明	1				
黒色土器A	杯A I	2				7
	杯A II	3				2-8-6
	杯A	21				3-4
	皿	2	55	61%	80%	8
	皿B	2				
	不明	1				
須恵器	不明	49				9
	杯A II	2				11
	杯A	7	32	23%		12
	杯	10				
灰釉陶器	杯蓋C	1				13
	不明	4				
灰釉陶器	皿	2	3	2%		14
合計	長胴形壺	30	31	100%	18%	15-19
野原	長胴形壺	1				
	小形壺	1				
須恵器	皿	2	2	90%		
	不明	1	2	50%	2%	
灰釉陶器	長胴形壺	1				10

第273表 SB1071出土土器構成表



した。長胴形甕は直立気味に内彎する口縁部を持ち、口縁部内外面に回転ナデ調整を残し、口縁部直下からへら削りが施される。内面にはハケ目調整が施される。灰釉陶器碗の窯式は不明であるが、小甕(10)は光ヶ丘1号窯式である。

SB1072 (第274表)

土師器杯A IIの口径が11cmを中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。

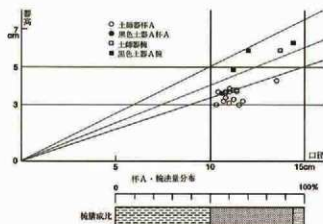
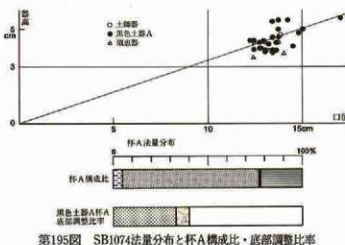
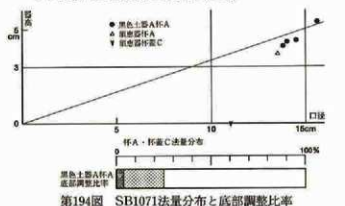


表274					
種類	器種	器体数	焼成温度(℃)	焼成時間(分)	窯式
土師器	杯A I	1	35	70%	90%
	杯A II	2			
	杯B	9			
	碗	3			
	甕	1			
黒色土師A	杯A	2	5	11%	
	甕	2			
黒色土師B	不明	6	0	13%	
遺状					
土師器	片断	5	0	100%	10%

第274表 SB1072出土土器構成表

表275								
種類	器種	器体数	焼成温度(℃)	焼成時間(分)	窯式			
土師器	杯	2	52	9%	1~3			
	不明	47						
黒色土師A	杯A I	3	407	94%	86%			
	杯A II	27						
	杯A	16						
	甕	15						
	碗	7						
	蓋	15						
	甕	19						
	不明	265						
	黒色土師B	杯A				1	1%	46
	灰釉器	杯A				5	32	5%
灰釉陶器	甕	1	1	1%	51			
遺状								
土師器	長胴形甕	56	69	100%	11%			
	浅鉢形甕	1						
灰釉器	小形甕	12			53~67			
片断								
灰釉器	長胴甕	2	3	60%	69~70			
	甕	1						
灰釉陶器	長胴甕	1	2	40%	73			
	広口甕	1						

第275表 SB1074出土土器構成表

表276					
種類	器種	器体数	焼成温度(℃)	焼成時間(分)	窯式
土師器	杯A II	52	145	80%	1~15
	杯A	13			
	甕	8			
	不明	72			
黒色土師A	杯A II	1	23	14%	19
	杯A	1			
	甕	7			
	不明	3			
灰釉陶器	甕	1	2	1%	
	不明	1			
遺状					
土師器	長胴形甕	3	5	8	100%
土師器	小形甕	5			
灰釉陶器	広口甕	1	1	100%	1%

第276表 SB1076出土土器構成表

表277					
種類	器種	器体数	焼成温度(℃)	焼成時間(分)	窯式
土師器	杯A I	2	25	71%	70%
	杯A II	6			
	甕	1			
	不明	16			
黒色土師A	杯A II	1	8	23%	
	杯A	1			
	甕	3			
灰釉器	杯A	1	2	6%	
	不明	1			
遺状					
土師器	長胴形甕	6	11	100%	24%
	小形甕	5			

第277表 SB1077出土土器構成表



## SB1073

土器の出土は一切無い。

## SB1074 (図版193~196, PL62, 第275表, 第195図)

6段階を設定した資料の一つ。食器形態の84%、杯Aの72%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率は3:1に集中し、底部回転糸切り未調整が60%を占める。鉢には、鉄鉢形が想定される土師器鉢(4)、杯Aと相似形の黒色土器A鉢(40~42)、内彎する口縁部を持つ同鉢(43~45)がある。鉢はいずれも底部手持ちヘラ削りである。口径12~14cmを測る黒色土器A皿Bがあり、碗は黒色土器Aの1法量のみである。黒色土器Bに杯があり、47は底部手持ちヘラ削りの須恵器杯AIIである。長胴形甕は直立気味に内彎する口縁部が特徴的で、口縁部内外面に回転ナデ調整を残し、胴上半の胴部最大径付近を基点にヘラ削りが施されるものが主体を占める。内面はハケ目調整が施されるものと回転ナデ・ナデ調整のみの二者がある。浅鉢形甕・小形甕についても同様の手法で製作されている。灰釉陶器皿Bの窯式は不明である。

## SB1075

資料数が少なく、土師器の器種不明が4、黒色土器Aの杯Aが1の5個体である。

## SB1076 (図版197, PL63, 第276表, 第196図)

9段階を設定した資料の一つ。土師器杯AIIは口径11cmを中心に分布し、口径13.5cmを測る15と格差を認めざるを得ない。口径と器高の比率が3:1を上回るものがある。碗は土師器・黒色土器A・灰釉陶器で構成され、土師器が50%を占める。黒色土器Aには大小2法量が認められる。長胴形甕は平底で直径の大きい、これまでとは異なった器形を呈する(25・26)。いずれもログロ(回転)調整の甕で、ハケ状工具を基本原体とした回転ナデ、ナデ、ハケ目調整が施される。底面及び26の底部にはヘラ状工具が用いられ、手持ちヘラ削りが施される。資料数は少ないものの、9段階に特徴的な長胴形甕と言えそうである。小形甕は全面回転ナデ調整で、底部は回転糸切りである。灰釉陶器碗の窯式は不明である。

## SB1077 (第277表)

杯Aは土師器・黒色土器A・須恵器の三者で構成され、土師器が73%を占め、杯AIIの口径が12cmを中心に分布することから7段階と捉えておきたい。

## SB1078

土器の出土は一切無い。

## SB1079 (第278表)

法量を計測できる資料は少ないが、杯Aの70%を土師器が占め、杯AIIの口径が12cmを測ることから7段階と捉えておきたい。

## SB1080 (図版197~199, PL63・64, 第279表, 第197図)

食器形態の89%、杯Aの85%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1に集中することから

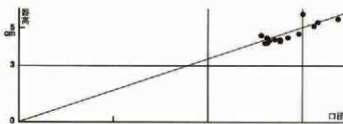
表278						
器種	器種	個体数	口径12cm以上	口径12cm以下	口径12cm	口径12cm
土師器	杯AII	1	15	47%	82%	
	杯A	6				
	不明	8				
	杯AII	1				
	杯A	2				
黒色土器A	杯A	2	12	37%		
	鉢	1				
	平鉢	8				
須恵器	杯	5	5	100%		
合計						
土師器	長胴形甕	4	6	100%	10%	
	小形甕	2				
須恵器	甕	1	1	100%	3%	

第278表 SB1079出土土器構成表

6段階の土器様相と把握される。土師器盤Aがあり、黒色土器A杯Aの底部調整は回転糸切りが83%を占め、椀は1法量で、口径13cm前後の皿Bがある。長胴形甕は直立気味の口縁部を持ち、口縁部の内外面に回転ナデ調整を残し、口縁部直下から、または胴部最大径付近からヘラ削りが施される。浅鉢形甕は内彎する口縁部以外は長胴形甕と同様な手法が用いられている。27は光ヶ丘1号窯式、28は黒笹14号窯式である。

SB1081 (図版199, 第280表)

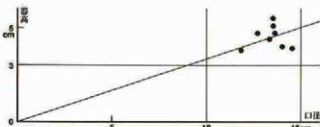
杯Aの90%を土師器が占め、杯A IIの口径が11.5cmを中心に分布することから8段階と把握される。灰軸陶器長頸瓶(1)の窯式は不明である。



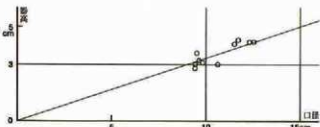
第197図SB1080法量分布と底部調整比率



第198図SB1086土師器食器形態法量分布



第199図 SB1088黒色土器A杯A法量分布



第200図 SB1089土師器杯A法量分布

種類	器種	器法数	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	図版中凡例
土師器	杯A	4	19	75		1~2
	盤A	6				
	椀	3				
	鉢	1				
	不明	5				
黒色土器A	杯A I	4	224	89%	70%	6~17~19
	杯A II	11				7
	杯A	38				4
	不明	1				20~21
	皿	6				22~24
	皿B	3				
	不明	2				
黒色土器B	不明	1	1	1%		
灰軸陶器	杯A	1	6	2%		25
	杯	1				26
灰軸陶器	皿B	1	2	1%		27
	鈴蓋	1				28
窯次						
土師器	長胴形甕	63	60	100%	215	30~47
	浅鉢形甕	1				29
	小形甕	1				

第279表 SB1080出土土器構成表

種類	器種	器法数	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	図版中凡例
土師器	杯A II	5	12	74%	83%	
	杯A	4				
	不明	3				
	杯A II	1				
黒色土器A	不明	4	5	29%		
窯次						
土師器	浅鉢形甕	1	2	100%	10%	
甗						
灰軸陶器	長頸瓶	1	1	100%	0%	1

第280表 SB1081出土土器構成表

種類	器種	器法数	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	図版中凡例
土師器	杯A II	16	45	85%	92%	1~11
	杯A	2				19
	皿	2				12
	盤A	1				12~18
	盤B	6				
	皿	3				
	不明	15				
黒色土器A	杯A	1	6	11%		20
不明	3					
灰軸陶器	杯	1	1	2%		
灰軸陶器	皿	1	1	2%		21
窯次						
土師器	長胴形甕	1	4	100%	7%	22
土師器	杯A	1				
土師器	鈴蓋	2				

第281表 SB1086出土土器構成表

種類	器種	器法数	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	焼成温度分布 (%)	図版中凡例
土師器	不明	2	2	8%		
黒色土器A	杯A II	11	21	89%	62%	1~8
	杯A	2				
	不明	8				
灰軸陶器	皿	1	1	4%		9
窯次						
土師器	長胴形甕	3	13	100%	33%	10~16
土師器	小形甕	4				17~18
甗						
灰軸陶器	長頸瓶	1	2	100%	0%	19
灰軸陶器	瓶	1				

第282表 SB1088出土土器構成表

## SB1082

土器の出土は一切無い。

## SB1083

土師器の杯Aが2、器種不明1、黒色土器A碗が1、器種不明2、須恵器杯A IIが1の7個体である。

## SB1084 (図版200, PL64)

体部にヘラ削りが、内面は丁寧な横ヘラ磨きが施される杯Eに類似したロクロ調整の黒色土器A杯(1)、底部ナデ調整の須恵器杯A II(2)、ハケ目調整の小形甕(4)、く字状口縁の武蔵甕(6)などの存在から、3段階の土器様相と把握される。図示した以外に、黒色土器Aの器種不明・須恵器杯・須恵器甕が各1個体出土している。

## SB1085 (図版200)

器形復元が可能な食器形態は1のみで、段階を特定することは困難であるが、内外面とも口縁部に回転ナデ調整を残すハケ目調整の長胴形甕が主体であることから4段階と捉えておきたい。図示した以外に、黒色土器Aの器種不明・須恵器の杯・杯蓋・白磁碗が各1個体出土している。

## SB1086 (図版201, PL64, 第281表, 第198図)

12段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は9.5cmと12cmを中心に分布する。口径9～10.3cmを測る小法量と22.6cmを測る大法量の土師器盤Bがあり、口径14.6cmの小形の羽釜A(22)がある。21は虎渡山1号窯式の灰釉陶器碗である。

## SB1087

土師器の杯A・器種不明が各2、黒色土器Aの杯Aが1、器種不明1、須恵器杯A 1の8個体である。

## SB1088 (図版201・202, PL65, 第282表, 第199図)

食器形態の88%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1及びそれを上回ることから6段階の土器様相と把握される。長胴形甕は直立気味の口縁部を持ち、口縁部の内外面に回転ナデ調整を残し、口縁部直下からヘラ削りが施される。12・15はヘラ状工具によるナデ調整が施され、17はハケ目調整の小形甕である。灰釉陶器碗の窯式は不明であるが、長頸瓶(19)はヶヶ丘1号窯式である。

## SB1089 (図版202, 第200図)

土師器杯A IIの口径が9.5cmと12cmを中心に分布することから、12段階と把握される。図示した以外に、土師器の杯A・碗が各1、器種不明が11、黒色土器Aの器種不明が2個体出土している。

## SB1090 (図版203, PL65, 第283表, 第201図)

12段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径

表283						
種類	器種	個体数	復元個体数	復元割合(%)	器種不明個体数	器種不明割合(%)
土師器	杯A	20				
	杯A	4				
	杯	7				
	杯A	1	56	60%		
	甕	1				
	甕	2				
	不明	21				91%
黒色土器	杯A	2				
	碗	11	24	20%		
黒色土器	不明	11				
	不明	1				
灰釉陶器	碗	3				
	瓶	2	5	6%		
表284						
土師器	長胴形甕	1				
	羽釜A	1				
	羽釜	6	9	100%	9%	
	羽釜用瓶	1				

第283表 SB1090出土土器構成表

は8.9~9.8cmに集中し、口径と器高の比率が4:1に近づき、皿Aとの区別が曖昧なものが目立つようになる。口径23cmを測る大法量の土師器盤Bがあり、黒色土器A柄は大小2法量で、小法量の16は口径10.4cm、器高4cmを測る。25は口縁部外面のみに回転ナデ調整を残し、鈎部以下はハケ目をナデ消している。26は回転調整が施されず、ハケ目調整後ヘラ削りが施される。両者ともに輪積み痕が確認される。22は丸石2号窯式、23は折戸53号窯式、24は大原2号窯式である。

## SB1091

土器の出土は一切無い。

## SB1092 (図版203・204, PL66, 第284表)

複数の段階の混在が想定されるが、胴下半にタタキ調整が施される長胴形甕(7)、牛出形甕(11)の存在などから、8段階と捉えておきたい。11は胴部タタキ調整後ナデ調整が施され、端部は回転ナデ調整が施され、面取りされる。括れ部上位に円形の穿孔が設けられ、穿孔は単沈線で水平に結ばれる。穿孔の単位については不明であるが、2孔は1対であったと想定される。

## SB1093 (図版204, 第285表)

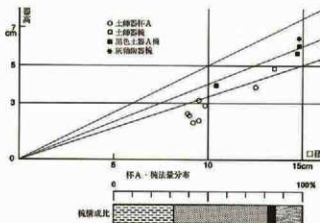
資料数は少ないが、食器形態の94%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1に近いことから6段階と把握される。須恵器円面硯が出土した。

## SB1094

資料数が少なく、黒色土器A杯A II・須恵器杯Aが各1、長胴形甕が4の6個体である。

## SB1095 (図版204・205, PL66, 第286表, 第202図)

土師器は杯Aの10%を占めるに過ぎず、他は黒色土器Aと須恵器で構成されることから6段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの口径と器高の比率は3:1以上が主体で、40%が底部回転ネジ切り未調整である。15~19は軟質須恵器に相当する。長胴形甕は直立気味に内彎する口縁部が特徴的で、浅鉢形甕にはヘラ削りが施される。明確なコ字状口縁の武蔵甕があり、小形甕は全面回転ナデ調整、底部回転ネジ切りである。



第201図 SB1090法量分布と椀構成比

種類	器種	器高比	口径器高比	口径口径比	口径口径比	口径口径比	口径口径比
土師器	杯A II	3	13	325	61%		1
	杯A	4					2
	皿A	1					2
	不明	5					3-4
黒色土器A	杯A II	2	24	61%			3-4
	杯A	9					5-6
	皿	3					
	不明	10					
須恵器	杯	1	1	35			
灰地陶器	皿	1	1	35			

種類	器種	器高比	口径器高比	口径口径比	口径口径比	口径口径比
土師器	長胴形甕	17	24	100%	30%	7
	浅鉢形甕	1				8
	小形甕	3				9
	須恵	2				10
	牛出形甕	1				11
須恵器	杯	1	1	100%	15	12

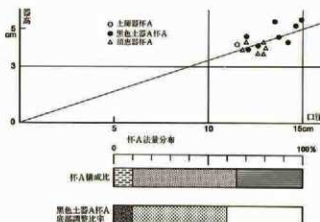
第284表 SB1092出土土器構成表

種類	器種	器高比	口径器高比	口径口径比	口径口径比	口径口径比
黒色土器A	杯A II	8	17	94%	78%	1-3-8
	杯A	5				2
	皿	1				6
	不明	3				
須恵器	杯A	1	1	9%		7

種類	器種	器高比	口径器高比	口径口径比	口径口径比
土師器	長胴形甕	3	4	100%	10%
須恵器	小形甕	1			
灰地陶器	皿	1	1	100%	4%

第285表 SB1093出土土器構成表



第202図 SB1095法量分布と杯A構成比・底部調整比率

## SB1097 (第287表)

杯Aは黒色土器Aと須恵器が主体で、黒色土器Aが40%を占めることから5段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aの口径と器高の比率は3:1を上回るが、底部回転糸切り未調整は確認されない。

## SB1098 (図版205, PL67, 第288表, 第203図)

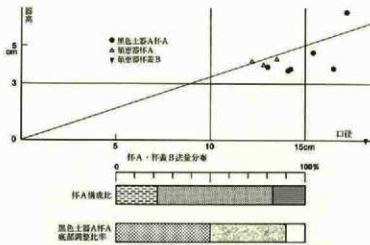
5段階を設定した資料の一つ。杯Aの61%を黒色土器Aが占め、口径と器高の比率は3:1以下で、底部回転糸切り未調整が10%を占める。須恵器杯Aの底部調整はいずれも回転糸切り未調整である。長胴形甕は外反度の強い口縁部が特徴的で、口縁部内外面に回転ナイフ調整を残し、外面ヘラ削り、内面ハケ目調整が主体を占める。ヘラ削りの単位が大振りな点も一つの特徴と言えよう。

## SB1099 (第289表)

杯Aはすべて土師器であり、杯A IIの口径は11cmを中心に分布することから、9段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率は3:1に近く、上回るものもある。灰釉陶器碗・皿の窯式は不明である。

## SB1100 (図版206, 第290表)

杯Aはすべて土師器であり、杯A IIの口径は10.5cmを中心に分布し、また口径13cmを測るものがあることから10段階の土器様相と把握される。小法量の口径と器高の比率は3:1以下で、大法量は3:1を上回る。1は光ヶ丘1号窯式の段皿で、2の窯式は不明である。



第203図 SB1098法量分布と杯A構成比・底部調整比率

表287						
種類	器種	個体数	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布
土師器	杯A II	1				1
	杯A	1	3	145		
	不明	1				
黒色土器A	杯A II	11	12	505	71%	2~12
	杯A	1				13
須恵器	杯A II	7	7	315		14
要注						
土師器	長胴形甕	4				22~24
	浅鉢形甕	1	8	100%	20%	21
	灰釉陶	1				20
	小形甕	2				23~25
行履						
黒色土器A	小形	1	1	100%	3%	27

第286表 SB1095出土土器構成表

表286						
種類	器種	個体数	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布
土師器	杯A II	1	1	45		
	杯A	6	9	385		
	不明	3				
黒色土器A	杯A II	3			50%	
	杯A	5				
須恵器	杯A	3	14	585		
	杯A	6				
要注						
土師器	長胴形甕	15	20	100%	48%	
	小形甕	5				

第287表 SB1097出土土器構成表

表287						
種類	器種	個体数	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布
土師器	杯A II	1	5	135		
	杯A I	3				
	杯A	7	20	80%		5~7
黒色土器A	杯A	4				1~4
	不明	6				
	杯A II	3			83%	
	杯A	1				8~10
須恵器	杯A	3	9	20%		
	杯A	1				
	杯A	2				
	杯A	1				11
要注						
土師器	長胴形甕	5	7	100%	17%	12~13
	小形甕	2				14~15

第288表 SB1098出土土器構成表

表288						
種類	器種	個体数	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布
土師器	杯A I	1				
	杯A II	8				
	杯A	3	32	87%		
	杯A	2				
	杯A	1				
	不明	15				
黒色土器A	杯A	2	2	0%		
	不明	2	3	8%		
灰釉陶器	杯A	1				
	不明	1				
要注						
土師器	長胴形甕	3	4	100%	10%	
	別注	1				

第289表 SB1099出土土器構成表

表289						
種類	器種	個体数	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布	口径(器高)分布
土師器	杯A I	1				
	杯A II	7				
	杯A	2	20	87%		
	杯A	1				
	不明	9				
黒色土器A	杯A	3	6	20%		
	不明	3				
黒色土器B	杯A	2	3	10%		
	不明	1				
灰釉陶器	杯A	1	1	3%		1
要注						
土師器	長胴形甕	4				
	小形甕	2	7	100%	18%	
	別注	1				
行履						
灰釉陶器	杯A	1	1	100%	3%	2

第290表 SB1100出土土器構成表



SB1101 (図版206, PL67, 第291表)

資料数は少ないが、須恵器が食器形態の主体を占め(57%)、須恵器・黒色土器Aとも杯Aの口径と器高の比率がほぼ3:1で、外反度の強い口縁部で胴部に膨らみの少ない寸胴形の長胴形壺がヘラ削り調整を主体とすることから3段階と捉えておきたい。1は底部手持ちヘラ削り、2は底部回転糸切り未調整である。4は腰部以下下半が回転ヘラ削りされる稜椀で、底部は回転糸切り後回転ナズ調整が施されている。く字状口縁を呈する武蔵壺が出土している。

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯	1	1	145		8
	杯A I	1	2	295		1
	杯A	1			445	2
須恵器	杯	1				3
	杯B	1	4	575		4
	壺	1				
煮炊						
土師器	長胴形壺	8	7	100%	445	5~7.9
	武蔵壺	1				
	小形壺	1				10
貯蔵						
須恵器	壺	1	2	100%	125	11
	杯	1				

第291表 SB1101出土土器構成表

SB1193 (第292表)

資料数は少ないが、杯Aの71%を土師器が占め、杯A IIの口径が12~13cmを測ることから7段階と捉えておきたい。

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A II	4				
	杯A	1	10	775		
	壺	1			875	
	不明	4				
黒色土器A	杯A II	1				
	杯A	1	2	325		
煮炊						
土師器	長胴形壺	1	2	100%	125	
	小形壺	1				

第292表 SB1193出土土器構成表

SB1194 (図版206・207, PL67・68, 第293表, 第204図)

食器形態の78%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1を上回ることから6段階の土器様相と把握される。底部回転糸切り未調整が80%を占める。

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A I	1				1
	杯A II	3	7	795	305	2~1
	杯A	2				5
黒色土器A	杯A II	1				
	杯A I	2	2	325		6~7
煮炊						
土師器	長胴形壺	9	14	100%	585	8~9
	小形壺	5				10~14
貯蔵						
須恵器	須恵器耳蓋	1	1	50%	85	15
	灰桶附蓋	1	1	50%		

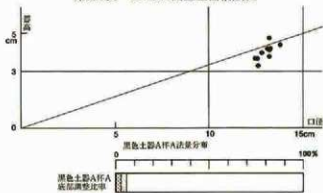
第293表 SB1194出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	不明	15	15	10%		
	杯A I	5				12~14
	杯A II	15				1~12
	杯A	27				
	壺	1	145	80%	77%	15
	壺B	2				
須恵器	杯A	1	2	1%		
	杯B	1				
灰桶附蓋	壺B	1	4	2%		15
	壺B	1				
煮炊						
土師器	長胴形壺	40				21~28
	浅鉢形壺	1	50	100%	22%	29
	小形壺	9				12~20
貯蔵						
灰桶附蓋	壺	1	2	100%	1%	
	不明	1				

第295表 SB1201出土土器構成表



第204図 SB1194杯A法量分布



第205図 SB1201法量分布と底部調整比率

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径別器体数	口径中位
土師器	杯A II	1				
	壺	2				
	壺A	1	10	215		
	壺	1				
	不明	5				
黒色土器A	杯A I	1				
	杯A II	4				
	杯A	13	37	77%	89%	
	壺	1				
	不明	19				
須恵器	杯	1	1	2%		
煮炊						
土師器	長胴形壺	4	8	100%	11%	
	小形壺	2				

第294表 SB1196出土土器構成表



黒色土器B杯A(6・7)があり、口径と器高の比率は同様の傾向を示すが、底部調整はいずれも手持ちヘラ削りである。長胴形甕の口縁部は外反度が弱く、小形甕は底部・底面とも手持ちヘラ削りが施される(13・14)。15の耳部には穿孔が認められない。

## SB1198 (第294表)

杯Aの94%を黒色土器Aが占めるが、口径と器高の比率が3:1以下で、土師器に2個体の椀があることなどから7段階と捉えておきたい。黒色土器A杯Aは底部回転糸切り未調整が91%を占める。

## SB1201 (図版207・208, PL68, 第295表, 第205図)

食器形態の86%を黒色土器Aが占めるが、杯Aの口径と器高の比率が3:1以下となり、底部回転糸切り未調整が94%を占めることから7段階の土器様相と捉えておきたい。長胴形甕の口縁部は外反度が弱く長い。胴部最大径以下にヘラ削り(27・28)・タタキ調整(23~26)、またはその両者(22)が施され、その後ナブ調整が加えられる。浅鉢形甕(29)も同様な手法で整形される。灰釉陶器は16が大原2号窯式の皿Bで、他の2個体は光ヶ丘1号窯式、1個体は窯式不明である。

## SB1202

資料数は少なく、黒色土器Aの杯A II・器種不明が各2、窯式不明の灰釉陶器椀が1、長胴形甕・小形甕が各2、須恵器壺1の10個体である。黒色土器A杯A IIは口径と器高の比率が3:1で、いずれも底部回転糸切り未調整である。

## SB1203 (第296表)

食器形態の86%を黒色土器Aが占めるが、杯Aの口径と器高の比率が3:1以下で底部回転糸切り未調整が82%を占めることなどから7段階と捉えておきたい。

食器						
器種	器種	器高	口径比	口径比	口径比	口径比
土師器	杯A	2				
	椀	1		12	145	
	不明	9				
黒色土器A	杯A I	3				835
	杯A II	14				
	杯A	12		73	805	
	甕	1				
	不明	43				
窯式						
土師器	長胴形甕	12		17	1005	175
	小形甕	5				

第296表 SB1203出土土器構成表

## SB1204 (図版208, 第297表)

資料数は少ないが、杯Aの25%を土師器が占め、器形復元が可能な黒色土器A杯Aの口径と器高の比率は3:1以下で、底部回転糸切り未調整であることから7段階と捉えておきたい。1は光ヶ丘1号窯式である。

食器						
器種	器種	器高	口径比	口径比	口径比	口径比
土師器	杯A I	1				
	不明	6		7	395	
	杯A II	1				785
黒色土器A	杯A	2		10	505	
	不明	7				
	不明	43				
灰釉陶器	皿B	1		1	35	1
窯式						
土師器	長胴形甕	5		6	1005	205
	小形甕	1				

第297表 SB1204出土土器構成表

## SB1205 (図版208, 第298表)

食器形態に土師器・須恵器は無く、82%を黒色土器Aが占め、杯Aの口径と器高の比率が3:1に集中することから、6段階と捉えておきたい。1は光ヶ丘1号窯式、2は黒笹9号窯式で、椀は光ヶ丘1号窯式である。緑釉陶器椀(PL92)が出土している。

食器						
器種	器種	器高	口径比	口径比	口径比	口径比
黒色土器A	杯A II	4				
	杯A	2				
	椀	1		14	825	
	皿B	1				745
	不明	6				
灰釉陶器	椀	1		2	125	
	皿B	1		1	35	1
緑釉陶器	椀	1		1	35	
窯式						
土師器	長胴形甕	2				
	浅鉢形甕	1		5	1005	225
	小形甕	2				
付録						
灰釉陶器	小甕	1		1	1005	35
						2

第298表 SB1205出土土器構成表

## SB1206 (第299表)

分量を計測できる資料が無いものの、杯Aが土師器

のみで構成されることから8段階以降と考えられる。灰釉陶器碗の窯式は不明である。

SB1207 (図版208, PL68, 第300表)

法量を計測できる資料が少ないものの、杯Aの78%を土師器が占め、杯A IIの口径が12.2cmを測ることから7段階と把握される。2は口径13.1cmの土師器皿Aで、4は光ヶ丘1号窯式の皿Bである。3は窯式不明。6は口縁部と胴部の境界が曖昧な浅鉢形甕で、外面へラ削り後ナデ調整を施している。9の欠損部は平滑に擦られており、口頸部欠損後も使用されていたと考えられる。

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数(%)	口径別器体数(%)	口径中点
土師器	杯A II	7	18	81%	71%	
	杯A	1				
	皿	2				
	不明	7				
黒色土師A	不明	1	5%			
黒色土師B	皿	1	2	9%		
灰釉陶器	皿	1	1	5%		
家炊						
土師器	長柄形甕	3	9	100%	20%	
	小形甕	4				
	羽釜	2				

第299表 SB1206出土土器構成表

SB1208 (図版209, PL69, 第301表, 第206図)

11段階を設定した資料の一つ。土師器杯A IIの口径は10cmと13cmを中心に分布する。口径18.8cmの大法量の土師器盤Bがあり、羽釜Aは口縁部及び内面が回転ナデ調整で、外面は胴部直下からへラ削りされる。灰釉陶器碗の窯式は不明である。

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数(%)	口径別器体数(%)	口径中点
土師器	杯A I	1	16	60%	82%	
	杯A II	4				
	杯A	2				
	皿	1				
	不明	6				
黒色土師A	杯A I	1	9	33%	3	
	杯A	1				
	不明	7				
灰釉陶器	皿	1	2	7%		4
	皿	1				5
家炊						
土師器	長柄形甕	1	3	100%	9%	
	小形甕	1				
	羽釜					

第300表 SB1207出土土器構成表

SB1209 (図版209, PL69, 第302表, 第207図)

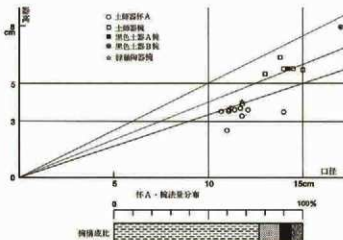
8段階を設定した資料の一つ。杯Aの99%を土師器

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数(%)	口径別器体数(%)	口径中点
土師器	杯A I	12	131	90%	99%	1~10
	杯A II	41				
	杯A	24				
	皿	14				
	不明	1				
	不明	42				
黒色土師A	杯A	1	7	5%	17	
	皿	2				
	不明	4				
黒色土師B	皿	1	1	1%		19
灰釉陶器	皿	1	1	1%		20
家炊						
土師器	小形甕	1	2	100%	1%	
	羽釜	1				

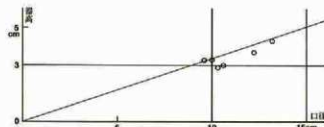
第302表 SB1209出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	口径別器体数	口径別器体数(%)	口径別器体数(%)	口径中点
土師器	杯A II	13	44	70%	94%	1~8
	杯A	6				
	皿	1				
	不明	1				
	不明	21				
黒色土師A	杯A	1	11	19%	7	
	皿	1				
黒色土師B	不明	9				
黒色土師C	不明	1	1	2%		
黒色土師D	杯	1	1	2%		
灰釉陶器	皿	1	1	2%		
家炊						
土師器	長柄形甕	1	4	100%	4%	
	羽釜A	2				
	飯	1				8-9

第301表 SB1208出土土器構成表



第207図 SB1209法量分布と構成比



第206図 SB1208土師器杯A法量分布

が占め、杯A IIの口径は11.5cmと14cmを中心に分布する。土師器碗は1法量であるが、碗の78%を占める。20は底部回転ヘラ削りで、高台貼付後回転ヘラ削りが施される緑釉陶器碗である。

## SB1210 (第303表, 第208図)

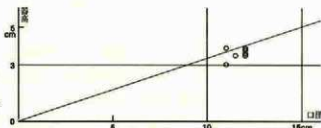
食器形態の86%を土師器が占め、土師器杯A IIの口径が11.5もしくは12cmを中心に分布することから7~8段階と把握される。

食器						
種類	器種	器位数	権量別個体数	権量別個体数	権量別個体数	図版中記号
土師器	杯A II	8	48	805	97%	
	碗	1				
	不明	29				
	杯A II	4				
黒色土器A	杯A II	2	8	14%		
	不明	2				
煮炊						
土師器	長胴形甕	1	2	100%	3%	
	小形甕	1				

第303表 SB1210出土土器構成表

## SB1211 (図版208, 第304表, 第209図)

食器形態の86%を黒色土器Aが占めるが、杯Aの口径と器高の比率が3:1を中心に上下に大きな幅があり、土師器杯A・碗が一定量認められることから7段階と捉えておきたい。1は光ヶ丘1号窯式の碗である。



第208図 SB1210土師器杯A法量分布

## SB1212 (図版210, PL69, 第305表)

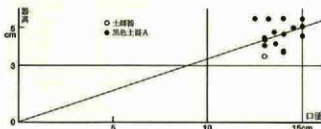
土師器杯A IIの口径が10cmと13cmを中心に分布することから11段階の土器様相と把握される。8~aは釜部から剥落した足釜の脚部で、直線的で断面形は円形を呈し、指ナデ・指頭痕が顕著に残る。中間に下部から粘土をナデあげて底部を意図的に作り出し、端部はつま先状につまみ出されている。

食器						
種類	器種	器位数	権量別個体数	権量別個体数	権量別個体数	図版中記号
土師器	杯A II	2	34	12%		
	杯A	4				
	碗	4				
	不明	24				
	杯A I	6				
黒色土器A	杯A II	23	232	86%		
	杯A	46				
	碗	3				
	器位	2				
	杯	1				
不明	11					
灰釉陶器	碗	5	5	3%		1
煮炊						
土師器	長胴形甕	37	48	100%	14%	
	小形甕	9				
貯蔵						
厚胎器	甕	2	2	67%	1%	
	灰釉陶器	1				

第304表 SB1211出土土器構成表

## SB1213 (図版209)

資料数が少なく、土師器の鉢が1、器種不明2、黒色土器Aの杯A・碗が各1、器種不明3、光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器皿Bが1(1)、長胴形甕が1の10個体である。



第209図 SB1211杯A法量分布

## SB1214 (第306表)

土師器杯A IIの口径が11cmを中心に分布することから9段階と把握される。緑釉陶器碗(PL92)が出土している。

食器						
種類	器種	器位数	権量別個体数	権量別個体数	権量別個体数	図版中記号
土師器	杯A I	1	101	88%	92%	
	杯A II	20				
	杯A	10				
	碗	3				
	不明	59				
黒色土器A	碗	6	13	11%		
	不明	7				
緑釉陶器	碗	1	1	1%		
煮炊						
土師器	長胴形甕	5	8	100%	7%	
	小形甕	2				
	甕	1				

第306表 SB1214出土土器構成表

食器						
種類	器種	器位数	権量別個体数	権量別個体数	権量別個体数	図版中記号
土師器	杯A I	4	53	83%	94%	1~4
	杯A II	13				
	杯A	6				
	碗	4				
	不明	29				
黒色土器A	杯A	2	11	17%	7	
	碗	6				
	不明	3				
煮炊						
土師器	形蓋	3	4	100%	6%	
	形蓋	1				

第305表 SB1212出土土器構成表

SB1215 (第307表, 第210図)

土師器杯A IIの口径が10.5cmと13cmを中心に分布することから、10段階の土器様相と把握される。土師器碗の個体数は比較的多いが、碗の20%を占めるに過ぎない。灰釉陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

SB1216 (図版210・211, PL70, 第308表, 第211図)

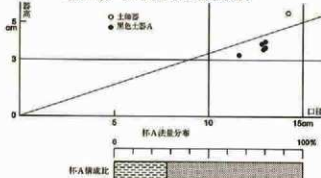
土師器杯A IIの口径が10.5cmと12.2cmを測ることから10段階の土器様相と把握される。黒色土器A碗には大小2法量があり、碗の87%を占めている。意匠化した暗文風のヘラ磨きはどれも類似する。長胴形碗は胴部最大径以下にタタキ後ナダ調整を施す。羽釜Aは口縁部に回転ナダ調整を残し、胴部以下をヘラ削り(12)、タタキ(13)調整するものがあり、11は回転調整を用いず、口縁部ナダ調整、胴部以下及び内面にハケ目調整が施される。底部付近に沈線が1条巡る。9は光ヶ丘1号窯式の碗である。

SB1217 (図版211, PL70, 第309表, 第212図)

杯Aの28%を土師器が占め、黒色土器A杯Aの口径と器高の比率が3:1以下に集中することから7段階

表309表 SB1217出土土器構成表						
分類	器種	個体数	器種別個体数比	器種別器高平均比	器種別口径平均比	器種別口径器高比
土師器	杯A I	6	22	27%	89%	1
	杯A II	4				2
	杯A III	1				3~7
	碗	4				8
	不明	7				9
	不明	7				10
黒色土器A	杯A I	11	59	72%	87%	3~7
	杯A II	7				8
	杯A III	1				9
灰釉陶器	碗	20	1	1	15%	10
	碗	1				11~13
意匠						
土師器	長胴形碗	2	9	100%	105%	9
	羽釜形碗	1				10
	小形碗	4				10~13
	碗	1				14
不明	1	15				
口径器高						
口径	器高	1	1	100%	1%	

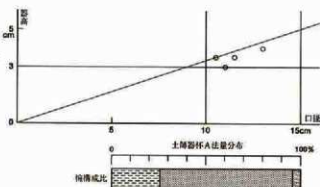
第309表 SB1217出土土器構成表



第212図 SB1217法量分布と杯A構成比

表307表 SB1215出土土器構成表						
分類	器種	個体数	器種別個体数比	器種別口径平均比	器種別口径器高比	器種別口径器高比
土師器	杯A I	1	47	58%	86%	1
	杯A II	11				2
	杯A III	4				3
	碗	6				4
	不明	20				5
黒色土器A	杯A I	1	36	43%	89%	3
	碗	16				4
	不明	19				5
黒色土器B	不明	1	1	1	15%	10
	碗	1				11
意匠						
土師器	長胴形碗	1	13	100%	12%	9
	小形碗	2				10
	羽釜	9				10~13
	杯7	1				14
口径器高						
口径	器高	1	1	100%	1%	

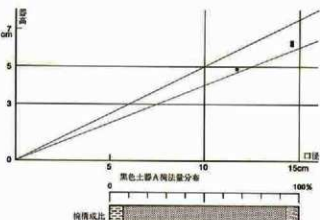
第307表 SB1215出土土器構成表



第210図 SB1215法量分布と碗構成比

表308表 SB1216出土土器構成表						
分類	器種	個体数	器種別個体数比	器種別口径平均比	器種別口径器高比	器種別口径器高比
土師器	杯A I	3	20	43%	89%	1~2
	杯A II	5				3
	碗	1				4
	不明	11				5
黒色土器A	杯A I	1	24	51%	89%	3
	碗	13				4~8
	不明	6				9
灰釉陶器	碗	1	3	6%	9%	10
	段造	1				11
	意	1				12
意匠						
土師器	長胴形碗	1	6	100%	11%	10
	羽釜A	3				11~13
	羽釜	1				14
	碗	1				15
口径器高						
口径	器高	1	1	100%	1%	

第308表 SB1216出土土器構成表



第211図 SB1216法量分布と碗構成比

の土器様相と把握される。口径11.6cmの土師器皿Aがあり、小形甕は底部回転糸切りの全面回転ナデ調整である(13)。14は内外面とも回転ナデ調整が施される。15は橋状の把手を持つ牛出形甕で、開口する端部を除いて外面には回転調整が施されない。胴部はハケ目調整後へら削りが施される。括れ部より上位に円形の穿孔が2個1対で施されている。16はタタキ調整の球形形甕で、貯蔵形態に含まれる可能性がある。灰軸陶器碗は光ヶ丘1号窯式である。

## SB1218 (図版212, 第310表, 第213図)

土師器杯A IIの口径が11cmと14cmを中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。14は内外面とも回転ナデ調整が施される羽釜形甕で、端部が稜線を伴って屈曲する。緑軸陶器碗(PL92)が出土した。

## SB1219 (図版212, PL71, 第311表)

黒色土器A杯Aの口径と器高の比率も3:1以上が多くを占めるが、2のように浅いものがあり、胴部最大径以下をタタキ調整する長胴形甕があることなどから7段階と捉えておきたい。小形甕は底部回転糸切りの全面回転ナデ調整である(5)。6はへら削り後へら磨きが施されていることから土師器鉢としたが、口縁部と胴部の境が曖昧な浅鉢形甕の可能性も考えられる。

## SB1220

土器の出土は一切無い。

## SB1221 (第312表, 第214図)

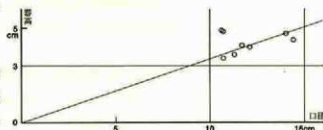
杯Aの91%を土師器が占めるが、杯A IIの口径が12cmを中心に分布することから7段階と捉えておきたい。

## SB1222 (図版213, PL71, 第313表, 第215図)

土師器杯A IIの口径が11cmを中心に分布することから

食器	種類	器高	器口径	口径分布	口径分布比率	口径分布比率	口径分布
土師器	杯A I	2	65	78%	90%		1~8
	杯A II	27					9~10
	杯A	10					
	甕	5					
	不明	21					
黒色土器A	甕	10	17	20%			11~12
	不明	7					
緑軸陶器	碗	2	2	2%			
要注							
土師器	長胴形甕	1	4	100%	3%		13
	羽釜	2					14
	羽釜形甕	1					

第310表 SB1218出土土器構成表



第213図 SB1218土師器杯A法量分布

食器	種類	器高	器口径	口径分布	口径分布比率	口径分布比率	口径分布
土師器	杯A	1	4	30%	83%		6
	杯A	1					
	鉢	1					
	不明	1					
黒色土器A	杯A I	3	10	90%			4
	杯A II	3					1~3
	杯A	2					
	甕	1					
	不明	4					
要注							
土師器	長胴形甕	3	4	100%	17%		7~9
	小形甕	1					8

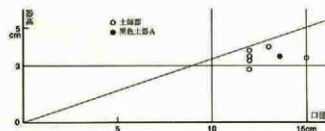
第311表 SB1219出土土器構成表

食器	種類	器高	器口径	口径分布	口径分布比率	口径分布比率	口径分布
土師器	杯A I	1	22	60%	81%		
	杯A II	7					
	杯A	2					
	甕	1					
	不明	11					
	不明	1					
黒色土器A	杯A II	1	12	30%			
	甕	2					
	不明	9					
要注							
土師器	長胴形甕	5	8	100%	19%		
	小形甕	3					

第312表 SB1219出土土器構成表

食器	種類	器高	器口径	口径分布	口径分布比率	口径分布比率	口径分布
土師器	杯A II	25	93	84%	97%		1~16
	杯A	10					
	甕	8					17~21
	杯A	1					
	甕	2					
	不明	6					
黒色土器A	甕	5	12	10%		22~23	
不明	7	24~28					
黒色土器B	甕	4	7	6%			
不明	3						
要注							
土師器	小形甕	1	4	100%	3%		28
	羽釜	2					
	羽釜形甕	1					27

第313表 SB1222出土土器構成表



第214図 SB1221杯A法量分布



ら9段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率は3:1に近く、上回るものもある。これらの一群と口径13.4cmを測る18とは格差が認められよう。椀は土師器1法量、黒色土器A・Bが大小2法量で、土師器が椀の47%を占める。煮炊形態に長胴形甕は無く、27は内外面とも回転ナデ調整の羽釜Aで、28は底部回転糸切りで全面回転ナデ調整の小形甕である。

SB1223 (図版213, 第314表, 第216図)

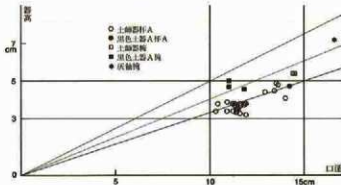
土師器杯A IIの口径は11.5cmを中心に分布することから、8段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率は3:1を上回るものが主体である。黒色土器A椀は大小2法量。1は灰釉陶器長頸瓶で、窯式は不明。

SB1224 (図版213・214, PL71-72, 第315表, 第217図)

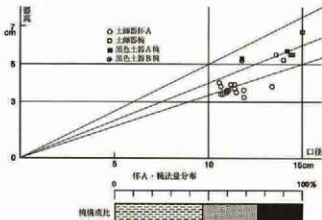
土師器杯A IIの口径は11.5cmと13.5cmを中心に分布することから8段階の土器様相と把握される。小法量(1~21)の口径と器高の比率は3:1以下が主体で、大法量(22~26)は3:1以上が主体である。黒色土器A椀(34~36)は小法量に属す。37は虎渓山1号窯式の椀で、他の灰釉陶器についての窯式は不明。小形甕(38~41)は法量の小さいもので構成され、41を除いて、底部回転糸切りで全面回転ナデ調整である。42は口縁部から胴上半まで回転ナデ調整を残し、下半はタキ調整が施される長胴形甕で、43は底部に手持ちヘラ削りを施す内外面回転ナデ調整の羽釜Aである。

SB1225 (図版214, 第316表)

杯Aの32%を土師器が占め、杯A IIの口径が、土師器12~13cm、黒色土器A 13~14cmを測り、黒色土器Aの口径と器高の比率は3:1以下を示すことから7段



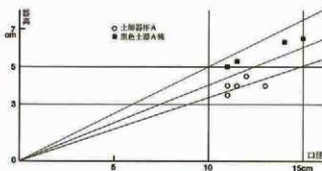
第217図 SB1224食器形態法量分布



第215図 SB1222法量分布と椀構成比

食器	器種	器存在数	口径10cm以下	口径10cm以上	高さ10cm以下	高さ10cm以上	窯式不明
土師器	杯A II	20	61	885	90%		
	杯A	18					
	椀	1					
	不明	16					
	杯A II	1					
黒色土器A	椀	4	8	12%			
	瓶	1					
	不明	2					
煮炊							
土師器	長頸瓶	6	7	100%	9%		
	小形甕	1					
好意							
灰釉陶器	長頸瓶	1	1	100%	1%	1	

第314表 SB1223出土土器構成表



第216図 SB1223食器形態法量分布

食器	器種	器存在数	口径10cm以下	口径10cm以上	高さ10cm以下	高さ10cm以上	窯式不明
土師器	杯A II	2	322	87%	94%		
	杯A	62					
	杯A	39					
	椀	3					
	瓶	1					
	不明	2					
	不明	212					
黒色土器A	杯A II	2	42	11%			
	杯A	6					
	椀	6					
	不明	27					
煮炊器	杯A	1	1	1%			
灰釉陶器	椀	2	2	1%			
煮炊							
土師器	長頸瓶	14					4%
	小形甕	4	19	100%	8%		38~41
好意	羽釜A	1					4%
好意							
煮炊器	椀	1	2	67%	1%		
灰釉陶器	瓶	1	1	33%			

第315表 SB1224出土土器構成表



階の土器様相と把握される。1は光ヶ丘1号窯式の皿Bで、椀については窯式不明である。

### SB1226 (図版214・215, PL72・73, 第317表, 第218図)

土師器杯A IIの口径が11cmと14cmを中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。口径と器高の比率は、黒色土器A杯A IIを含め3:1に集中、または上回る。長胴形甕には丸底(27)と平底(24~26)の二者がある。後者については異系統と捉えられ、いずれもハケ状工具を基本原体とし、内面調整はハケ状工具による横ナデと回転ナデを併用し、外面は口縁部以下ハケ目調整後、口縁部を含めて回転ナデ調整を施している。底部はナデ仕上げであるが、細線が多数付着している。27は口縁部から胴部最大径まで回転ナデ調整を残し、以下にタキ調整を施すもので、これまでの系譜に進なる。28はタキ調整が施される羽釜Aで、28は底部に手持ちヘラ削りが施される内外面回転ナデ調整の羽釜Aである。両者とも調整の初期段階にハケ目調整が施されている。灰釉陶器椀は光ヶ丘1号窯式である。

全器						
種類	器種	器型式	数量	数量割合	数量割合	器高平均
土師器	杯A II	2	32	20%	90%	19~27
	杯A	5				
	皿	2				
	不明	23				
黒色土器	杯A II	2	93	73%	90%	21~22
	杯A	12				
	皿	2				
	不明	76				
灰釉陶器	皿	1	2	2%		1
	皿	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	11	14	100%	10%	24~27
	小形甕	1				
	皿	2				

第316表 SB1225出土土器構成表

全器						
種類	器種	器型式	数量	数量割合	数量割合	器高平均
土師器	杯A II	36	121	88%	80%	1~15
	皿	5				
	皿	1				
	不明	79				
黒色土器	杯A II	2	19	13%	80%	22
	杯A	1				
	皿	2				
	不明	12				
黒色土器	杯A	1	2	1%		
	皿	1				
灰釉陶器	皿	1	1	1%		
	皿	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	17	20	100%	12%	24~27
	羽釜A	2				
	羽釜	1				

第317表 SB1226出土土器構成表

### SB1227 (第318表)

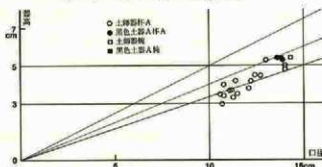
杯Aの87%を土師器が占め、杯A IIの口径が11.5cmを中心に分布することから8段階と捉えておきたい。

### SB1228 (図版214, 第319表)

杯Aは土師器のみで構成され、杯A IIの口径が11.5cmを中心に分布することから8段階の土器様相と把握される。黒色土器A椀は大小2法量あり、灰釉陶器椀(1)は丸石2号窯式である。

### SB1229 (第320表)

杯Aの83%を土師器が占め、杯A IIの口径が12.5cmを中心に分布し、土師器・黒色土器Aとも杯A Iがある。



第218図 SB1226食器形態度量分布

全器						
種類	器種	器型式	数量	数量割合	数量割合	器高平均
土師器	杯A I	1	79	69%	97%	19~27
	杯A II	21				
	杯A	12				
	皿	2				
黒色土器	杯A II	43	9	10%	80%	21~22
	杯A	1				
	皿	4				
	不明	3				
灰釉陶器	杯	1	1	1%		1
	杯	1				
家炊						
土師器	小形甕	2	2	100%	2%	24~27
	羽釜	2				
黒色土器	皿	1	1	100%	1%	
	皿	1				

第318表 SB1227出土土器構成表

全器						
種類	器種	器型式	数量	数量割合	数量割合	器高平均
土師器	杯A II	12	26	67%	88%	19~27
	杯A	3				
	皿	1				
	不明	4				
黒色土器	杯A	6	8	27%	80%	21~22
	不明	2				
黒色土器	皿	1	1	2%		1
	皿	1				
灰釉陶器	皿	1	1	2%		1
	皿	1				
	皿	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	2	4	100%	12%	24~27
	小形甕	1				
	羽釜	1				

第319表 SB1228出土土器構成表

ることから7段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯Aはいずれも底部回転糸切り未調整である。

## SB1230 (図版216, 第321表)

土器器杯A IIの口径が10.5cmと13cmを中心に分布することから10段階の土器様相と把握される。黒色土器A杯A Iの口径と器高の比率は3:1を上回り、椀は大小2法量ある。灰胎陶器椀はすべて虎溪山1号窯式で、長頸瓶は窯式不明である。

## SB1231 (図版216・217, PL74, 第322表, 第219図)

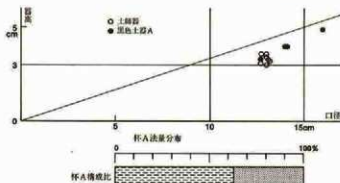
杯Aの58%を土師器が占め、杯A IIの口径が13cmを中心に分布し、口径と器高の比率が黒色土器Aも含めて3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。口径13cm前後の土師器皿Cがあり、黒色土器A杯Aはすべて底部回転糸切り未調整である。長胴形甕は口縁部から胴部最大径まで回転ナデ調整を残し、以下にタタキ調整を施すものが主体を占め、タタキ以前にヘラ削りが施されるものもある。20は平底で、口縁部から胴部最大径まで回転ナデ調整を残し、以下にヘラ削りが施され、内面調整はハケナデと回転ナデが併用される。小形甕は底部回転糸切りで、全面回転ナデ調整が施される。

## SB1232

資料数は少なく、土師器の器種不明が4、黒色土器Aの杯A Iが1、杯A II・杯A各2、器種不明1、長胴形甕4、小形甕1の15個体である。黒色土器A杯Aがすべて底部回転糸切りで、杯A IIの口径と器高の比率が3:1以下であることから7段階と捉えておきたい。

## SB1233

資料数は少なく、土師器の杯Aが1、鉢1、黒色土器Aの杯A IIが3、鉢・器種不明各1、長胴形甕1、



第219図 SB1231法量分布と杯A構成比

土器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別器高比	器高別個体数	器高中%
土師器	杯A I	2	79	80%		
	杯A II	32				
	皿C	14				
	甕	2				
	不明	28				
黒色土器A	杯A I	2	20	20%		97%
	杯A II	2				
	鉢	3				
	鉢	1				
	不明	6				
要注						
土師器	長胴形甕	1	3	100%		3%
	小形甕	2				

第320表 SB1229出土土器構成表

土器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別器高比	器高別個体数	器高中%
土師器	杯A I	4	121	80%		96%
	杯A II	27				
	皿C	19				
	甕	2				
	鉢	1				
	不明	58				
黒色土器A	杯A I	2	16	11%		
	甕	8				
	鉢	1				
	不明	5				
	不明	4				
灰胎陶器	甕	4	4	2%		1~3
要注						
土師器	長胴形甕	2	6	100%		4%
	甕	4				
評議						
灰胎陶器	長頸瓶	1	1	100%	1%	4

第321表 SB1230出土土器構成表

土器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別器高比	器高別個体数	器高中%
土師器	杯A II	14	36	67%		1~7
	杯A I	1				
	皿C	9				
	甕	2				
	不明	10				
黒色土器A	杯A I	3	18	33%		18
	杯A II	5				
	杯A	1				
	甕	4				
	不明	5				
要注						
土師器	長胴形甕	5	7	100%		20~24
	小形甕	2				

第322表 SB1231出土土器構成表

土器						
種類	器種	個体数	種類別個体数	種類別器高比	器高別個体数	器高中%
土師器	杯A II	2	5	62%		73%
	甕	1				
	不明	2				
黒色土器A	甕	1	2	20%		1~2
	杯A II	2				
要注						
土師器	長胴形甕	2	3	100%		3
	小形甕	1				

第323表 SB1235出土土器構成表

甕Iの9個体である。黒色土器A杯Aがすべて底部回転糸切りで、杯A IIの口径と器高の比率が3:1以下であることから7段階と捉えておきたい。

## SB1234

資料数は少なく、土師器の杯A II・皿・器種不明が各1、黒色土器Aの杯A IIが3、長胴形甕1の7個体である。黒色土器A杯Aがすべて底部回転糸切りで、杯A IIの口径と器高の比率が3:1以下であることから7段階と捉えておきたい。

## SB1235 (図版217, PL74, 第323表)

資料数は少ないが、須恵器杯A IIの底部調整がいずれも回転ヘラ切りであることから2段階と捉えておきたい。3は武蔵甕の底部で、4は口縁部から胴部最大径まで回転ナデ調整を残し、以下にヘラ削りを施す小形甕で、底部は不定方向のナデ調整が施される。

## SB1236 (図版217, PL75, 第324表, 第220図)

土師器杯A IIの口径が11cmを中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。椀は黒色土器Aが大小2法量あり、土師器が大量量、黒色土器Bが小法量のみである。灰軸陶器椀は光ヶ丘1号窯式である。長胴形甕は口縁部から胴部最大径まで回転ナデ調整を残し、以下にタタキ調整が施され、羽釜形甕は銅部以下ハケ目調整後回転ナデ調整が加えられる。甕の端部は、内面のヘラ削りによりハ字状に開く。

## SB1237 (図版218, 第325表)

杯Aの58%を土師器が占め、土師器を含め黒色土器A杯A IIの口径は12.5cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。長胴形甕はヘラ削りとヘラ削り+タタキ調整が施されるものがあり、23は銅部以下をハケナデ調整する羽釜Aである。12は大原2号窯式の皿Bで、その他の灰軸陶器については窯式不明である。

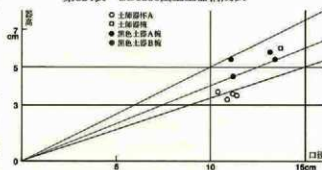
## SB1238 (図版219, 第326表)

杯Aの26%を土師器が占めるものの、椀が無く、黒色土器A杯Aの口径と器高の比率が3:1に集中する

器種	器種	個体数	焼成窯式	焼成窯式比率	焼成窯式比率	口径中%
土師器	杯A II	5	29	58%	83%	1~4
	杯A	4				5
	皿	3				
	不明	14				
黒色土器A	杯A II	5	19	38%	83%	9~8
	不明	9				
黒色土器B	皿	1	1	2%		9
	不明	1				10

表式						
土師器	長胴形甕	0	19	100%	17%	11
	小形甕	1				
	羽釜	1				
	羽釜形甕	2				12-13

第324表 SB1236出土土器構成表



第220図 SB1236食器形態法量分布

器種	器種	個体数	焼成窯式	焼成窯式比率	焼成窯式比率	口径中%
土師器	杯A II	1	69	54%	76%	1
	杯A	13				
	皿	2				
	不明	52				
黒色土器A	杯A II	8	53	42%	76%	3~10
	杯A	2				
	皿	2				
	不明	40				
須恵器	杯	1	2	2%		
	不明	1				
灰軸陶器	椀	1	2	2%		
	不明	1				12

表式						
土師器	長胴形甕	33	37	100%	22%	17~22
	小形甕	3				14~16
	羽釜A	1				22
須恵器	椀	1	1	20%		
	須恵椀	3				2%
	皿	1				12

第325表 SB1237出土土器構成表

器種	器種	個体数	焼成窯式	焼成窯式比率	焼成窯式比率	口径中%
土師器	杯A I	2	13	20%	66%	
	杯A II	2				
	杯A	2				
	皿	2				
	耳皿	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A I	1	49	78%	66%	
	杯A II	21				
	杯A	2				
	皿	3				
	耳皿	1				
灰軸陶器	皿	1	1	2%		
	不明	18				1

表式						
土師器	長胴形甕	29	31	100%	32%	
	小形甕	2				
灰軸陶器	長胴形甕	1	1	100%	1%	2
	不明	1				

第326表 SB1238出土土器構成表

ことから6段階と捉えておきたい。黒色土器A杯Aはすべて回転糸切り未調整である。1は光ヶ丘1号窯式で、2は窯式不明である。

## SB1239 (第327表)

杯Aの40%を土師器が占め、黒色土器A杯Aの口径が13cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。

表題						
種類	器種	器口径	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率
土師器	杯A II	2	11	395	965	
	杯A	6				
	碗	1				
	不明	2				
	不明	2				
黒色土器A	杯A I	1	20	655		
	杯A II	9				
	杯A	2				
	蓋	1				
	不明	7				
要次						
土師器	長頸円蓋	8	16	1005	345	
	小形蓋	8				
	羽釜	2				

第327表 SB1239出土土器構成表

## SB1240 (第328表)

土師器杯A IIの口径が11cmを中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。

表題						
種類	器種	器口径	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率
土師器	杯A II	15	52	995	985	
	杯A	4				
	碗	2				
	不明	30				
	不明	30				
黒色土器A	杯A II	1	8	65		
	碗	1				
	不明	3				
灰釉陶器	不明	1	1	25		
要次						
土師器	長頸円蓋	1	1	1005	25	

第328表 SB1240出土土器構成表

## SB1241 (図版219, 第329表)

杯Aの31%を土師器が占め、黒色土器A杯Aの口径が13cmを中心に分布し、口径と器高の比率が3:1以下に集中することから7段階の土器様相と把握される。灰釉陶器碗は3個体とも光ヶ丘1号窯式である。

表題						
種類	器種	器口径	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率
土師器	杯A I	3	55	515	965	
	杯A II	3				
	杯A	5				
	碗	7				
	蓋	3				
	不明	34				
	不明	34				
黒色土器A	杯A I	4	48	495		
	杯A II	13				
	杯A	7				
	碗	5				
	不明	21				
灰釉陶器	碗	3	4	45		1
不明	不明	1				
要次						
土師器	長頸円蓋	3	11	1005	95	
	小形蓋	8				
	羽釜	1				
計数						
要次	蓋	1	1	1005	15	

第329表 SB1241出土土器構成表

## SB1242 (第330表)

資料数は少ないが、土師器杯A IIの口径が10.5cmと13cmを中心に分布することから10段階と捉えておきたい。灰釉陶器長頸瓶の窯式は不明である。

表題						
種類	器種	器口径	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率
土師器	杯A II	4	12	805	785	
	杯A	1				
	不明	7				
	不明	7				
黒色土器A	杯A II	1	3	205		
	不明	2				
要次						
土師器	長頸円蓋	2	4	1005	295	
	小形蓋	2				
計数						
灰釉陶器	長頸瓶	1	1	1005	85	

第330表 SB1242出土土器構成表

## SB1246 (図版219, PL75・76, 第332表, 第221図)

杯Aの98%を土師器が占め、杯A IIの口径が11.5cmを中心に分布することから8段階の土器様相と把握される。碗は土師器が1法量、黒色土器Aは大小2法量あり、碗の65%を占める。灰釉陶器碗の窯式は不明。長胴形壺・小形壺はヘラ削りが多用され、底部調整・器形とも古い様相を呈している。25は非ロクロ(回転)調整の小形壺である。27は胴部最大径まで回転ナデ調整を残し、以下をタタキ調整する羽釜Aである。

表題						
種類	器種	器口径	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率	口径相対比率
土師器	杯A II	6	7	325	815	
	不明	1				
	不明	1				
黒色土器A	杯A I	1	15	685		
	杯A II	2				
	杯A	3				
	碗	5				
	不明	4				
要次						
土師器	長頸円蓋	5	5	1005	195	

第331表 SB1246出土土器構成表

## SB1270 (第333表)

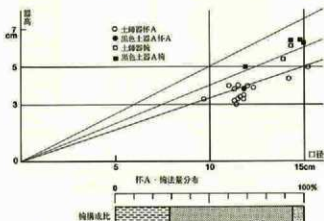
資料数は少ないが、杯Aが土師器のみで構成されることから8段階と捉えておきたい。唯一、法量を計測できる土師器碗は口径13.5cm、器高5.5cmを測り、大法量に属する。

## SB1312 (図版220, PL76, 第334表, 第222図)

土師器杯A IIの口径が11cmを中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。土師器碗には大小2法量が認められ、碗の60%を占める。黒色土器A碗は大法量に属するもののみで、意匠化した暗文風のヘラ磨きが施されている。14は内面と口縁端部に黒色付着物が観察され、灯明皿として用いられていたことが想定される。

## SB1401 (図版220・221, PL77, 第335表, 第223図)

土師器杯A IIの口径が11cmを中心に分布することから9段階の土器様相と把握される。黒色土器A碗は大小2法量ある。19は大原2号窯もしくは虎浜山1号窯式で、20・21は虎浜山1号窯式である。22は口縁部直下からヘラ削りが施される長胴形甕で、底部にヘラ削りが施される小形甕(27)とともに古い様相を呈している。24は胴部最大径以下をタタキ調整する長胴形甕で、



第221図 SB1246法量分布と碗構成比



第222図 SB1312食器形態法量分布

食器						法量中位
種類	器種	器体数	法量別器体数	法量別器体数	法量別器体数	
土師器	杯A I	4	141	845	90%	13
	杯A II	37				1~12
	杯A	15				14~15
	碗	5				16
	不明	79				
黒色土器A	杯A II	1	26	18%		12
	不明	14				18~22
	碗	1				
灰釉陶器	碗	1	1	15		
家炊						
土師器	長胴形甕	3	9	100%	3%	23
	小形甕	4				24~26
	甕	1				27
	甕蓋	1				
	甕	1				

第332表 SB1246出土土器構成表

食器						法量中位
種類	器種	器体数	法量別器体数	法量別器体数	法量別器体数	
土師器	杯A II	3	13	81%	73%	
	杯A	1				
	碗	1				
	不明	8				
黒色土器A	碗	2	3	10%		
	不明	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	1	5	100%	27%	
	小形甕	3				
	甕	1				
	甕	1				

第333表 SB1270出土土器構成表

食器						法量中位
種類	器種	器体数	法量別器体数	法量別器体数	法量別器体数	
土師器	杯A II	15	293	90%	91%	1~18
	杯A	45				19~24
	碗	9				
	不明	221				
黒色土器A	碗	6	33	10%		25~26
	杯	1				27
不明	不明	25				
	家炊					
土師器	長胴形甕	11	11	100%	2%	

第334表 SB1312出土土器構成表

食器						法量中位
種類	器種	器体数	法量別器体数	法量別器体数	法量別器体数	
土師器	杯A II	23	92	71%		1~13
	杯A	7				
	不明	26				
黒色土器A	杯A II	2	22	20%	89%	14
	杯A	4				15~18
	碗	6				
	不明	10				
黒色土器B	不明	1	1	3%		21
	碗	1				19
灰釉陶器	碗	1	2	2%		20
	灯明皿	1				
家炊						
土師器	長胴形甕	5	10	91%	11%	22~24
	小形甕	3				25~27
	甕	1				
	甕蓋	1				
	甕	1				
黒色土器A	長胴形甕	1	1	9%		29

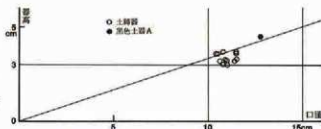
第335表 SB1401出土土器構成表



26は底部回転糸切りで全面回転ナデ調整の小形甕である。29は三脚の足釜で、内面が黒色処理されへら磨きが施されていることから黒色土器Aとした。脚部は口縁部直下に貼付され、湾曲しながら接地する。断面形は長方形を呈し、長辺が脹らみを持つ。各面は、それぞれへら削り及び指ナデにより調整される。端部は指ナデにより、つま先状につまみ出されている。釜部の深さ及び底部の形状については不明である。

**SB1402** (図版221・222, PL77・78, 第336表, 第224図)

土師器杯A IIの口径が9.5cmと12cmを中心に集中することから、12段階の土器様相と把握される。口径15.4cmを測る土師器盤Bがある。黒色土器Aは碗の74%を占めている。大法量のみで、口径と器高の比率が2:1の深碗(32・33)がある。30は底径4.4cmと小さく、体部の形状も碗に類似する黒色土器A杯A IIで、無台の碗という認識が持たれていた可能性を示す。36は碗としたが盤Bの可能性が高い。38は口径16.6cmを測る大形の黒色土器B碗で、39は虎溪山1号窯式の灰釉陶器碗である。43・44は非ロクロ(回転)調整の羽釜Aで、43の口縁端部はへら削りによる面取りがなされ、内面ハケ目調整、鈎部以下へら削りする。44は輪積み痕が顕著に残り、鈎部以下はタキ調整される。45は非ロクロ(回転)調整の羽釜形甕で、鈎部以下はへら削り後ナデ調整が施される。46は口縁部に回転ナデ調整を残し、鈎部以下をナデ調整する羽釜形甕である。



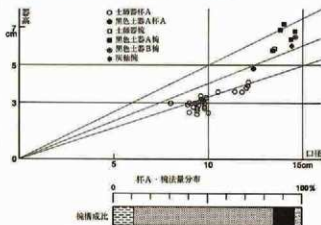
第223図 SB1401杯A法量分布

**SB1403** (図版223, PL78)

資料数は極めて少ないものの、1段階を設定した資料の一つである。1は輪積み痕がそのまま確認できる非ロクロ調整の土師器杯Dで、内外面ともナデ調整が施され、底部は手持ちへら削りされる。2は非ロクロ(回転)調整の長胴形甕で、口縁部にナデ調整を残し、以下へら削りが施される。底部調整については不明である。3は口縁部外面に回転ナデ調整を残し、口縁部直下から内外面ともハケ目調整が施される長胴形甕で、底部はナデ調整される。図示した以外に土師器の器種不明が1個体あるのみで、合計4個体が出土。

器種	器種	器高	口径	底径	口径/器高	口径/底径	器高/口径	口径/底径
土師器	杯A I	3						
	杯A B	50						1~27
	杯A	16						
	盤	3	163	765				28
	甕	1						29
	釜	3						
黒色土器A	杯A	1						40
	杯A	2	46	215				30
	杯A	1						31~35
黒色土器B	杯	3	4	15				37~38
	子甕	1						41
須恵器	杯	1	1	15				42
	杯	1	1	15				39
未定	小形甕	3						43
土師器	羽釜	10	16	1065	75			43~44
	羽釜	1						
	羽釜形甕	2						45~46

第336表 SB1402出土土器構成表



第224図 SB1402法量分布と機構成比

**SB1404** (図版223, PL79)

資料数は少なく、図示した以外に須恵器の甕が1個体あるのみで、合計5個体の出土である。1は口径16cmを測る須恵器杯蓋Bで、つまみ部は上から押圧が加えられ、所謂碗蓋のつまみ部の形状に類似する。4は完形の須恵器長頸壺で、外面は回転へら削り後回転ナデ調整が施されるが、自然釉が掛かり不明瞭な部分もある。底部は回転へら削りである。



## SB1405 (図版223・224, PL79, 第337表, 第225図)

土師器杯A IIの口径が11.5cmと14cmを中心に分布することから8段階の土器様相と把握される。椀は土師器・黒色土器Aとも1法量で、黒色土器Aが椀の58%を占める。18・19は口径に対して底径が小さい底部回転糸切り未調整の黒色土器A杯Aで、口径と器高の比率は3:1を上回る。長胴形甕は胴部最大径まで回転ナデ調整を残し、以下にタタキ調整を施す。24は胴部最大径が42.2cmを測る特大の長胴形甕で、丸底の底部までタタキ調整が施される。26は底部にヘラ削りが施される小形甕である。灰釉陶器は食器形態・貯蔵形態とすべて虎渓山1号窯式である。

食器						
種類	器種	器位数	種類別器位数	種類別器位率	器位中%	器位中%
土師器	杯A I	1	98	94%	95%	1~15
	杯A II	29				16~17
	杯A	11				19
	甕	3				20
	不明	54				21
黒色土器A	杯A I	1	16	14%	16%	19
	杯A II	1				18
	甕	7				20
不明	7					21
灰釉陶器	甕	2	2	2%	2%	21
量取						
土師器	長胴形甕	4	6	100%	2%	24~25
	小形甕	2				26
貯蔵						
甕	甕	1	1	50%	2%	
灰釉陶器	灰口甕	1	1	50%	2%	23

第337表 SB1405出土土器構成表

## イ その他の遺構

竪穴住居址以外の遺構出土土器については、出土量の多寡が著しいため、実測図と出土土器構成表をもって資料提示とした。なお、各遺構の時期については、住居址出土土器の検討結果に基づいて想定した。

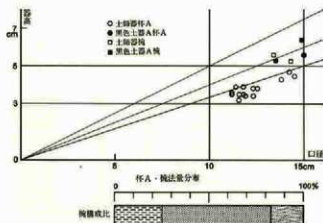
## ①溝址 (図版225~231, PL80~82, 第338~345表)

食器						
種類	器種	器位数	種類別器位数	種類別器位率	器位中%	器位中%
土師器	杯A I	1	4	9%	9%	3
	高杯A	1				
	不明	2				
黒色土器A	杯A I	1	4	9%	9%	2~4
	高杯A	2				
黒色土器B	不明	3	3	6%		
甕	杯A I	2	35	76%	76%	5~8
	杯A II	9				9
	杯A	12				10
	杯B I	2				
	杯B II	1				
	杯C	4				
	杯蓋	3				
	杯蓋	2				
不明	1				13~16	
量取						
土師器	長胴形甕	2	7	100%	12%	17
	小形甕	4				
	古墳甕?	1				
貯蔵						
甕	甕	1	6	100%	10%	
甕	大甕	1				1

第338表 SD3出土土器構成表

食器						
種類	器種	器位数	種類別器位数	種類別器位率	器位中%	器位中%
土師器	杯A I	11	63	94%	94%	1~4
	杯A	16				5~7
	甕	9				8
	不明	29				
	杯A II	1				
黒色土器A	甕	1	4	6%		
不明	2					
量取						
土師器	長胴形甕	2	2	100%	3%	

第339表 SD1021出土土器構成表



第225図 SB1405法量分布と椀構成比

食器						
種類	器種	器位数	種類別器位数	種類別器位率	器位中%	器位中%
土師器	杯A I	20	74	82%	94%	1~2
	杯A	11				6
	甕	4				
	不明	23				
	不明	3				
黒色土器A	甕	7	15	17%		7
不明	8					
灰釉陶器	甕	1	1	2%		
量取						
土師器	長胴形甕	1	4	100%	4%	
	小形甕	2				
	甕	1				
貯蔵						
灰釉陶器	甕	1	2	100%	2%	
	不明	1				

第340表 SD45出土土器構成表

食器						
種類	器種	器位数	種類別器位数	種類別器位率	器位中%	器位中%
土師器	杯A I	15	40	70%	90%	1~2
	杯A	5				
	甕	2				
	甕	2				
	不明	11				
	不明	1				
	不明	4				
黒色土器A	杯A	1	13	23%		6
不明	3					
黒色土器B	不明	1	1	2%		
灰釉陶器	甕	3	3	5%		
量取						
土師器	長胴形甕	2	6	100%	10%	
	長胴形甕	1				
	武蔵甕	1				
	小形甕	1				

第341表 SD58出土土器構成表

第4章 古代の調査

表32 表32 SD2 出土土器構成表						
分類	器種	器目数	種類別器目数	種類別器目数	器目数割合	器目数割合
土師器	杯A	2	45	10%	1-2	
	杯A	10				
	杯D	2				
	杯	3				
	高杯A	1				
黒色土師器	不明	26	49	10%		
	杯A	1				
	杯A	1				
	杯A	7				
	杯D	1				
黒色土師器	杯	5	22			
	高杯A	2				
	不明	1				
	杯	1				
	不明	1				
須恵器	杯A	9	152	63%	19-15 17-14-11 10-2-2	71%
	杯A	23				
	杯A	11				
	杯B	2				
	杯B	2				
	杯B	5				
	杯B	1				
	杯	11				
	杯	23				
	杯	1				
	杯	9				
灰釉陶器	杯	2	2	1%		
	不明	1				
	不明	1				
	不明	1				
	不明	1				
意訳						
土師器	長頸形壺	30	65	100%	10%	41
	壺	9				
	次郎壺	2				
	小形壺	15				
	羽壺	3				
	高壇	7				
須恵器	高壇	3	32	94%	10%	49-54
	壺	4				
	壺	16				
	壺	3				
	壺	1				
灰釉陶器	杯	5	2	5%	37-40	
	壺	2				

表32 表32 SD2 出土土器構成表

表33 表33 SD46 出土土器構成表						
分類	器種	器目数	種類別器目数	種類別器目数	器目数割合	器目数割合
土師器	杯A	1	87	87%	1-5	
	杯A	27				
	杯A	8				
	杯	5				
	杯	1				
黒色土師器	不明	45	10	10%	0	
	不明	9				
	不明	1				
	不明	1				
灰釉陶器	壺	2	2	2%	25	
	不明	1				
意訳						
土師器	小形壺	1	1	100%	1%	33-43
	小形壺	1				

表33 表33 SD46 出土土器構成表

②土坑 (図版235~242, PL85~89, 第346~354表)

表34 表34 SK1733 出土土器構成表						
分類	器種	器目数	種類別器目数	種類別器目数	器目数割合	器目数割合
土師器	杯A	2	5	50%	1-2	
	壺A	2				
	不明	1				
	不明	1				
	不明	1				
黒色土師器	杯A	1	5	50%	5	
	壺	1				
	杯	1				
	不明	2				
意訳						
土師器	長頸形壺	10	13	100%	57%	5-10
	小形壺	3				

表34 表34 SK1733 出土土器構成表

表35 表35 SD1001 出土土器構成表						
分類	器種	器目数	種類別器目数	種類別器目数	器目数割合	器目数割合
土師器	杯A	16	38	60%	1-10	
	杯A	8				
	杯	4				
	壺	1				
	不明	9				
黒色土師器	杯A	1	16	28%	11-13	
	不明	15				
	杯A	1				
灰釉陶器	杯A	2	4	7%		
	不明	1				
意訳						
土師器	長頸形壺	6	6	100%	9%	
	小形壺	1				
意訳						
須恵器	壺	1	1	100%	2%	
	壺	1				

表35 表35 SD1001 出土土器構成表

表36 表36 SD1009 出土土器構成表						
分類	器種	器目数	種類別器目数	種類別器目数	器目数割合	器目数割合
土師器	杯A	8	64	19%		15
	杯A	22				
	壺	5				
	壺	2				
	不明	4				
黒色土師器	杯A	1	121	30%	1-16-20	
	杯A	17				
	杯A	28				
	壺	19				
	壺	2				
	高杯A	2				
	杯	1				
	不明	48				
	杯A	1				
	杯A	28				
須恵器	杯A	39	128	39%	17-22 61%程度	31-32 30
	杯B	2				
	杯B	1				
	杯B	2				
	杯D	7				
	杯	34				
	杯	3				
	不明	11				
	壺	13				
	壺	1				
灰釉陶器	壺	1	15	4%	45	
	壺	1				
輸入陶器	白磁器	2	6	2%	9	
	白磁器	1				
意訳						
土師器	長頸形壺	30	70	100%	16%	12-13 33-43
	壺	1				
	羽壺	1				
	不明	2				
意訳						
須恵器	高壇	1	19	30%	3%	35 26 11-27-30 45 38 44 34
	壺	1				
	壺	2				
	壺	4				
	壺	8				
	壺	1				
	壺	1				
	壺	1				
灰釉陶器	壺	1	1	3%	45	
	壺	1				

表36 表36 SD1009 出土土器構成表

表37 表37 SK1040 出土土器構成表						
分類	器種	器目数	種類別器目数	種類別器目数	器目数割合	器目数割合
土師器	不明	1	1	14%		
	不明	1				
黒色土師器	不明	1	1	14%		1
	不明	1				
須恵器	杯A	1	5	72%	3	2
	杯B	1				
	杯	2				
意訳						
土師器	長頸形壺	2	3	100%	20%	4-5
	小形壺	1				
意訳						
須恵器	壺	2	2	100%	17%	6-7
	壺	2				

表37 表37 SK1040 出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	埋藏回数(%)	検出回数(%)	出土回数(%)	図記中心
土師器	杯AⅠ	1	124	79%	92%	1~9
	杯AⅡ	23				
	杯A	53				
	埴	9				
	不明	32				
黒色土器A	杯A	6	23	14%	92%	
	埴	9				
	杯	1				
黒色土器B	埴	1	1	1%		10
	不明	7				
	杯AⅡ	1				
灰釉陶器	杯AⅡ	1	8	5%		11
	杯A	8				
	杯	1				
灰釉陶器	不明	2	1	1%		
	埴	1				
煮炊						
土師器	長柄煎釜	2	9	100%	2%	
	小形釜	5				
	煎釜	1				
	埴	1				
貯蔵						
灰釉陶器	壺	1	2	67%	2%	12
	埴	1				
灰釉陶器	灰釉壺	1	1	100%		

第348表 SK51出土土器構成表

SK94出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	埋藏回数(%)	検出回数(%)	出土回数(%)	図記中心
土師器	杯AⅡ	22	66	36%	97%	1
	杯A	9				
	埴	6				
	皿A	1				
	皿B	2				
	不明	47				
	不明	11				
黒色土器A	埴	53	149	91%	97%	4~14
	不明	83				
	杯AⅡ	1				
黒色土器B	不明	3	4	1%		15~17
	杯AⅡ	1				
灰釉陶器	埴	2	2	1%		
灰釉陶器	埴	1	1	1%		
煮炊						
土師器	長柄煎釜	1	6	100%	2%	25
	小形釜	5				
貯蔵						
灰釉陶器	瓶	2	2	100%	1%	

第349表 SK94出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	埋藏回数(%)	検出回数(%)	出土回数(%)	図記中心
土師器	杯AⅡ	15	29	43%	96%	1~8
	杯A	4				
	埴	1				
	埴B	2				
	不明	7				
	不明	1				
黒色土器A	杯AⅡ	11	33	51%	96%	11~13
	杯A	2				
	埴	4				
	不明	15				
黒色土器B	不明	1	1	2%		
灰釉陶器	埴	1	1	2%		
煮炊						
土師器	長柄煎釜	1	3	100%	4%	45
	小形釜	1				
	煎釜	1				

第350表 SK113出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	埋藏回数(%)	検出回数(%)	出土回数(%)	図記中心
土師器	杯AⅡ	60	99	87%	98%	1~41
	杯A	9				
	埴	5				
	皿A	1				
	皿B	2				
	皿	1				
	不明	20				
黒色土器A	杯AⅡ	1	13	11%	98%	48
	杯A	1				
	埴	2				
	不明	4				
黒色土器B	埴	1	2	2%		60
	不明	1				
煮炊						
土師器	長柄煎釜	1	1	100%	1%	51
貯蔵						
灰釉陶器	灰釉壺	1	1	100%	1%	52

第351表 SK123出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	埋藏回数(%)	検出回数(%)	出土回数(%)	図記中心
土師器	杯AⅡ	51	178	83%	97%	1~19
	杯A	18				
	埴	14				
	皿B	6				
	皿A	4				
	不明	93				
黒色土器A	杯A	2	30	14%	97%	24~25
	埴	19				
黒色土器B	不明	9	4	2%		26~27
	埴	3				
灰釉陶器	不明	1	1	1%		
灰釉陶器	埴	2	2	1%		
灰釉陶器	埴	1	1	1%		
煮炊						
土師器	長柄煎釜	1	5	100%	2%	25
	小形釜	3				
	煎釜	1				
貯蔵						
灰釉陶器	瓶	3	3	100%	1%	

第352表 SK231出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	埋藏回数(%)	検出回数(%)	出土回数(%)	図記中心
土師器	杯AⅡ	26	141	86%	97%	1~10
	杯A	30				
	埴	3				
	皿B	2				
	皿	1				
	不明	62				
黒色土器A	杯A	3	18	11%	97%	11~12
	不明	2				
	不明	11				
灰釉陶器	埴	1	1	1%		
煮炊						
土師器	長柄煎釜	1	4	100%	2%	15
	小形釜	3				
貯蔵						
灰釉陶器	瓶	1	1	100%	1%	

第353表 SK1028出土土器構成表

食器						
種類	器種	個体数	埋藏回数(%)	検出回数(%)	出土回数(%)	図記中心
黒色土器A	杯AⅠ	1	1	100%	20%	1
煮炊						
土師器	長柄煎釜	2	3	100%	70%	2
	灰釉煎釜	1				

第354表 SK1659出土土器構成表

## ③井戸史 (図版232~235, PL83~85, 第355~357表)

食器						
種類	器種	器体数	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況
土師器	杯A	29	91	83%	93%	1~5
	杯A	23				6
	碗	4				
	不明	25				
黒色土師器	杯A	1	16	14%	93%	7~10-14
	杯A	4				
	碗	9				
	鉢	1				
黒色土師器	不明	1	1	1%	93%	11
	不明	1				
灰釉陶器	碗	1	1	1%	93%	12
	碗	2				2
家炊						
土師器	長頸煎釜	2	7	100%	95	15-19
	小形釜	2				
	煎釜	1				
	煎	1				
軒瓦						
灰釉陶器	表須籠	1	1	100%	15	17

第355表 SK84出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況
土師器	杯A	1	250	88%	98%	1~14
	杯A	49				
	杯A	39				
	碗	10				
	皿	2				
	盤	1				
黒色土師器	不明	106	30	10%	98%	16~20
	碗	15				
黒色土師器	不明	15	1	1%	98%	21
	碗	1				
灰釉陶器	碗	3	2	1%	21	
家炊						
土師器	煎釜A	1	1	100%	15	22
軒瓦						
灰釉陶器	表須籠	1	1	100%	15	

第356表 SK502出土土器構成表

## ④道路跡 (図版231・232, PL82・83, 第358表)

食器						
種類	器種	器体数	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況
土師器	杯A	1	5	2%	77%	1
	杯A	2				
	高杯A	1				
	平明	1				
黒色土師器	杯A	1	23	25%	77%	2
	杯A	3				
	杯A	1				
	碗	2				
黒色土師器	不明	14	1	1%	77%	3
	不明	1				
	不明	1				
	不明	1				
灰釉陶器	杯A	4	19	62	68%	5~8
	杯A	19				
	杯A	1				
	杯A	9				
不明	杯A	19	3	1%	77%	11
	不明	2				
	不明	5				
	不明	3				
灰釉陶器	碗	1	1	1%	14	
家炊						
土師器	長頸煎釜	7	16	100%	12%	19
	灰釉煎釜	1				
	小形釜	7				
	煎	1				
軒瓦						
黒色土師器	高須籠	2	9	75%	10%	19
不明	0					
碗	1					
小形	1					
灰釉陶器	灰口瓶	1	3	25%	10%	20
灰釉陶器	瓶	2				

第358表 SC1出土土器構成表

食器						
種類	器種	器体数	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況
土師器	杯A	1	1100	95%	98%	25
	杯A	63				
	杯A	229				
	碗	46				
	鉢	4				
	盤	3				
	鉢	2				
	不明	792				
	杯A	1				
	杯A	4				
黒色土師器	碗	4	50	2%	98%	34
	鉢	2				
黒色土師器	不明	39	2	4	15%	35
	碗	2				
灰釉陶器	不明	2	4	4	15%	36
	碗	4				
家炊						
土師器	長頸煎釜	5	15	100%	15	37
	長頸煎釜?	1				
	小形釜	1				
	煎釜	6				
	煎	1				
軒瓦						
土師器	煎	1	1	20%		
灰釉陶器	長須籠	1	4	80%	15	
	灰	2				

第357表 SK1034出土土器構成表

## ⑤河川址 (図版242~244, PL89・90, 第359表)

食器						
種類	器種	器体数	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況	器体利用状況
土師器	杯A	2	751	79%	98%	62-63
	杯A	199				
	杯A	136				
	杯A	2				
	杯A	20				
	碗	1				
	碗	1				
	不明	376				
	杯A	61				
	杯A	6				
黒色土師器	杯A	19	172	18%	98%	64-65-66-67
	杯A	8				
	碗	19				
	不明	1				
黒色土師器	不明	68	2	1%	98%	68
	杯A	8				
	杯A	4				
	杯A	1				
黒色土師器	杯A	16	16	15%	98%	69-70-71
	杯A	1				
	杯A	1				
	不明	2				
灰釉陶器	碗	4	6	15%	98%	72-73
	碗	2				
灰釉陶器	白磁瓶	1	1	15%		
家炊						
土師器	長頸煎釜	10	26	100%	9%	77-78-79
	小形釜	10				
軒瓦	煎	1	1			80-81
	煎	1				
家炊						
黒色土師器	長頸煎釜	1	5	45%	1%	80
	煎	1				
	煎	2				
	平明	1				
灰釉陶器	長須籠	4	6	55%	1%	80-80
	煎	2				

第359表 SD102出土土器構成表

## 2 土製品・ミニチュア土器

今回の調査で得られた土製品には、円筒形土製品、土鉢、土製紡錘車及び有孔土製円板、用途不明の土製品がある。ミニチュア土器も含めて、いずれも竪穴住居址を中心として出土している。したがって、各々の遺物の時期については、大方、住居址の時期をもって土製品の時期として考えたい。

## (1) 円筒形土製品 (図版246・247, PL93~95)

円筒形土製品は29点出土した。この内、図示したものは15点で、ほとんどのものが3・4段階の竪穴住居址から出土している。中でも、6・7はカマドの左右の袖芯材として用いられており(図版246)、円筒形土製品の機能を考える上で好材料となる。

1・2はSB105(4段階)の覆土中から出土した。2は輪積み痕が確認されている。内面はハケ目による粗い調整にとどまるのに対して端部及び端部内面についてはハケ目後ナデ調整がなされ、平滑に仕上げるのが意図されている。3はSB374(3段階)のカマド内及び覆土中から出土した接合及び推定復元個体である。下端に段を持ち、段部以下は欠損するが、径をすばめ立ち上がる形態が推測される。段部には横位にハケ目調整がなされ、平滑に仕上げるのが意図されている。段部内面は指頭によるオサエの後、指頭圧痕をそのまま残した状態でハケ目調整が加えられている。4・5はSB168(3段階)の覆土中から出土した。4は輪積み痕が観察され、内面はナデ調整。5は外面に二次焼成痕が観察され、内面にもそれに対応して剥落がある。また、内面は外面と同様にハケ目調整が施されるが、凹凸が著しい。6・7は前記したようにSB100(4段階)のカマドの袖芯材として用いられていた。両者とも端部を上にして据え付けられていた。6は外面がハケ目調整後ヘラ削りが施され、端部に近い位置がより平滑に仕上げられている。内面はハケ目調整のみで、輪積み痕を残している。端部はヘラ削りで成形されている。7は二次焼成による被熱痕が6より著しい。外面はヘラ削り調整で、ところどころに線状の圧痕が観察される。内面は端部付近と上部にハケ目調整が施され、中間部はヘラ削り痕のみが残る。おそらく、成形後、手の届く範囲のみハケ目調整が施されたものと考えられる。8はSB40(4段階)の覆土中から出土した。端部の破片で、端部内面・外面は平滑に仕上げられている。9はSB70(時期不明)の検出面から出土した。端部の破片で、6と同様な仕上げである。10・11はSB149(4段階)の覆土中から出土した。両者とも、二次焼成による被熱が著しい。12はSB1029(4段階)の床面直上から出土した。唯一、ロクロ成形の円筒形土製品である。端部が面取りされ、回転ナデ調整が施されている。外面も回転ナデ調整後、ヘラ削りが施されている。13はSB227(4段階)のカマド燃焼部及び床面・覆土中から出土した接合個体である。円筒形の本体に断面三角形の鈔が貼付されたもので、面取りされた端部と鈔の上端部は平行関係にある。鈔から端部までは器壁が若干薄くなり、端部に向けて緩やかに内湾する器形をとる。14はSB375(4段階)のカマド燃焼部と覆土中から出土した接合及び推定復元個体である。13と同様の器形をとるが、鈔から端部までが短い。また、ロクロ(回転台)を用いたナデ調整が観察される。15はSK36の検出面から出土した。段部を中心とした破片で、二次焼成による被熱痕跡が著しい。段部は3と同様にナデ調整により平滑に仕上げられている。内面の調整痕等から、大小の径を持つ円筒を接合するために、小径側(図中、上方)から指頭による押圧が加えられていることが観察される。また、大径側内面のハケ目調整は、大小接合以前に施されている。外面にはハケ目調整後、沈線が一条はちまき状に周回している。

ここで、本遺跡出土の円筒形土製品についてまとめておく。成形は、輪積み成形とロクロ成形の二者があり、前者がほとんどを占めている。器形は、段部を伴うものに、大径と小径の円筒を接合したものと鈔を貼付するものの二者があり、前者は器壁が厚い。器面の調整については、同時期の土師器甕に準じてい



る。機能については、二次焼成による被熱痕跡が観察され、カマド構築材に代表されるような熱や火に深く関連する機能が想定される。時期は、3ないし4段階に限定される。

円筒形土製品の機能及び属性については、西山克己氏の論考(西山1996)があるが、西山氏が対象としたものは7世紀代に用いられた「円筒形土器」である。それに対して、本遺跡例は、住居址の時期から、9世紀を前後する時期に限定されている。両者は整形・調整技法に共通する特徴を有するが、系譜・系統的には断絶があるとされている。西山氏は両者の関連については言及されていないが、7世紀代の「円筒形土器」はその機能を長胴甕に転嫁し、消失していったとし、長野県では「9世紀代に入り再び円筒形土器が用いられるようになる」とする。本遺跡例はまさに後者に相当する。一方、群馬県の同様な事例を集成した山下氏は、その消長を「現時点では、その派生は埴輪工が県内でのカマド出現期に拘わり、消長は前方後円墳の時期を同じくする7世紀前半と考えられる」としている(山下1998)。本遺跡から出土した円筒形土製品は、内外面とも同時期の甕形土器と同様の調整技法を用いており、したがって、両者の差異は器種・器形のみにとどまっている。器種・器形の差異は、機能・用途の差異として捉えられるが、同一の技法は同時期の土器の製作技法に深く関わるもので、それは土器(土師器)生産の中に明確に位置付けられていることの証左となろう。西山・山下両氏は、7世紀代の円筒形土製品の使用の背景について特殊性を想定されているが、そういう意味では、特殊性が普遍性へと変化したのが9世紀と捉えられないだろうか。では、円筒形土製品は何のために製作されたのか。7世紀代の円筒形土製品については、カマドの構築材として製作された西山氏は言い、その機能を長胴甕で代用することで円筒形土製品の製作自体が終息したとしている。だとすれば、9世紀代に至って何ゆえ円筒形土製品の製作が再開されるのか。この時期の甕形土器は、7世紀代に比べれば、器高が縮まり口径が広まるという器形の変化に加え、器壁も薄くなっている。こうした甕形土器の形態的な変化が円筒形土製品の代用品としてふさわしくないものと判断され、円筒形土製品の製作が再開されたのだろうか。

一方、本遺跡例のような9世紀代の円筒形土製品を暗渠配水に用いられた土管とみる考えが示されている。坂井氏は、「円筒でありながら両端部のつくりがことなり、複数の個体を差し込んで連結することができる」という形態上の特徴を指摘し、飛鳥地域の飛鳥寺などの暗渠土管の事例を提示しながら、「土管はがらみ官衙や寺院などの格式の高い施設において、連結して暗渠用の導水管として使用」されていたとしている(坂井1998)。円筒形土製品が土管だとした場合、供給先が限定され、6・7のようにカマド構築材として用いられたのは、本来の用途からすれば転用ということになる。同時に、供給先が本遺跡周辺に存在していたこととなる。いずれにせよ、円筒形土製品については明確にされていない部分が数多く、今後の資料の増加とそれに基づいた分析・研究に結論は委ねたい。

## (2) 土鍾(図版244・247・248, PL96)

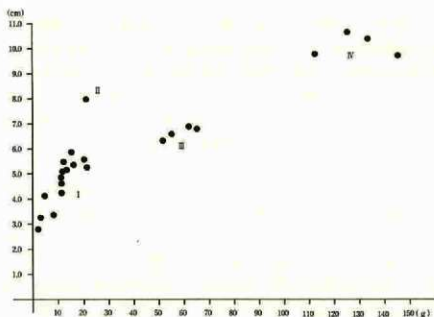
土鍾は41点出土し、すべてを図示した。整穴住居址出土のものが約8割を占める。なお、40は中世の溝址からの出土である。

残存率90%以上の土鍾を対象に、長さ重量をグラフ化したものが第226図である。それによると、以下の4大別が可能である。

- I: 長さが6cm以下で、重さ25g以下のもの…… 6, 19, 20, 22, 27, 29~33, 35~37, 40
- II: 長さが7cm以上で、重さ30g以下のもの……21
- III: 長さが6~8cmで、重さ50~70gのもの……11, 24, 28, 39
- IV: 長さが9cm以上で、重さ110g以上のもの……4, 9, 16, 17

上記の類別を典型として、残存率の低い土鍾についても類別を行った(第360表)。土鍾の製作について





第226図 土鍾の質量と類別の推移

類別	I	II	III	IV
1				
2				
3				
4				
5	2	1		
6			11	1
7	3			6
8				
9	4			
10				
11	1		1	1
12				
13				
計	10	1	12	9

図版NO.	出土地点	長さcm	最大径cm	孔径cm	重量g	残存度	欠損状況	類別	備考
1	SB25	4.4	3.0	(1.20)	10	12.5%	長軸方向	III	
2	SB1012	4.2	2.0	0.30	20	65.0%	短軸方向	I	指頭痕・孔が中心線よりズレる
3	SB56	4.1	2.6	0.40	25	60.0%	短軸方向	III	端面面取り
4	SB111	10.7	3.9	0.80	125	99.0%	短軸方向・接合	IV	握り圧痕(指頭痕)
5	SB111	5.6	3.7	0.80	55	40.0%	短軸方向	IV	凹凸(指頭痕)
6	SB129	5.5	1.4	0.45	12	100.0%	—	I	平滑仕上げ
7	SB185	6.0	3.7	0.30	95	50.0%	短軸方向	IV	
8	SB194	6.4	4.0	0.90	96	60.0%	短軸方向	IV	端面面取り・指頭痕
9	SB211	10.4	3.7	0.90	133	99.0%	指頭痕	IV	
10	SB327	3.6	1.0	2.90	15	25.0%	長軸方向	III	端面面取り
11	SB327	6.6	2.7	0.95	55	95.0%	端面破損	III	端面面取り
12	SB392	7.4	4.3	0.90	134	70.0%	短軸方向	IV	端面面取り
13	SB1010	6.4	3.0	1.10	35	45.0%	長軸方向・接合	III	端面面取り
14	SB1011	6.1	3.2	1.40	50	80.0%	端面破損	III	
15	SB1011	4.5	(3.2)	(1.00)	20	30.0%	長軸方向	III	
16	SB1021	9.8	3.6	0.80	112	99.0%	端面破損	IV	握り圧痕(指頭痕)
17	SB1028	9.7	3.9	1.00	145	90.0%	端面破損	IV	握り圧痕(指頭痕)
18	SB1038	3.2	(3.4)	(1.50)	10	10.0%	長軸方向	III	端面面取り
19	SB1046	5.6	2.1	0.75	20	100.0%	—	I	平滑仕上げ
20	SB1046	5.3	2.1	0.80	21	100.0%	—	I	平滑仕上げ
21	SB1060	8.0	1.9	0.65	21	100.0%	—	II	端面面取り
22	SB1060	4.1	1.3	0.20	5	100.0%	—	I	端面面取り
23	SB1065	7.6	3.4	1.20	65	50.0%	長軸方向	IV	端面面取り
24	SB1065	6.8	3.1	1.10	65	100.0%	長軸方向・接合	III	端面面取り
25	SB1065	4.6	3.4	1.20	25	20.0%	長軸方向	III	端面面取り
26	SB1065	4.6	3.4	1.25	35	25.0%	長軸方向・接合	III	端面面取り
27	SB1066	5.4	2.0	0.45	16	90.0%	短軸方向・接合	I	
28	SB1074	6.9	3.1	0.95	62	100.0%	—	III	端面面取り
29	SB1099	4.2	1.8	0.40	11	100.0%	—	I	握り圧痕
30	SB1099	5.1	1.7	0.50	12	100.0%	—	I	握り圧痕
31	SB1211	3.4	1.6	0.40	8	95.0%	端面破損	I	平滑仕上げ
32	SB1221	3.3	0.9	0.20	3	100.0%	—	I	
33	SB1221	2.8	0.9	0.20	2	99.0%	端面破損	I	
34	SC1	3.3	2.7	1.00	14	17.0%	長軸方向	III	
35	I A19	5.2	1.5	0.30	13	100.0%	—	I	握り圧痕
36	I A20	5.9	1.6	0.40	15	98.0%	端面破損	I	握り圧痕
37	I A20	4.9	1.6	0.30	11	98.0%	端面破損	I	指頭痕
38	I A20	4.0	1.3	0.40	6	67.0%	端面破損	III	握り圧痕(指頭痕)
39	SD1011	6.4	3.1	1.30	51	95.0%	端面破損	III	握り圧痕
40	SD1168	4.7	1.4	0.40	11	98.0%	端面破損	I	平滑仕上げ
244-103	SD102	3.8	2.5	1.30	10	25.0%	長軸方向	III	

第360表 土鍾一覧表

は、丸棒状の有機質の軸に粘土を巻き付け、手で握りながら形を整えた上で、軸を抜き取り、焼成されたことが想定されるが、整形の段階で端部を面取りしたり、器面を平滑に仕上げたりとさらに手を加えられているものがある。端部の面取りはⅢ類に顕著で、器面の平滑仕上げはⅠ類の僅かなものに認められる。

また、破損品は長軸方向で欠損するもの、長軸と直交する方向で欠損するもの、端部を欠損するものがあるが、土鍾の形態と欠損状況の相関関係は、数量的にも少なく現状では見出し難い。ただ、Ⅲ類に長軸方向での欠損が多い傾向が窺え、使用目的・方法を検討する上で興味深い属性の一つとなるのではなかろうか。なお、Ⅰ類については完形率が高い傾向にある。

時期を設定できる住居址出土の土鍾を対象に、数量を第226図にまとめてみた。すべての段階の住居址から出土しているわけではないので、時間的な推移について明確にはなし得ないが、Ⅰ・Ⅳ類については、各段階を通して普遍的な形態であったことが推測される。それに対して、Ⅱ・Ⅲ類は段階（時期）を特徴づけるような形態であったことが予測される。特にⅢ類は、住居址出土の土鍾の1/3以上を占め、そのほとんどが6段階の住居址からの出土である。11段階の住居址（SB1039）も6段階の住居址（SB1055）と重複関係にあることから、支持できよう。むろん、予察に留めざるを得ない状況であるが、一つの傾向として抑えておきたい。

### (3) 土製紡錘車及び有孔土製円板（図版243・249, PL96）

土製紡錘車は1点、SB116（10段階）の覆土中から出土した。同住居址からは石製紡錘車（図版249）が床面付近から出土している。1は断面形が台形で、広径6.0cm、狭径3.9cm、厚さ2.3cm、孔径0.8cmを測る。重量は89gである。中沢氏の分類（中沢1996a）に則せば、薄台形となる。上下両面、及び側面とも摩耗痕が顕著で、光沢を有する部分も観察される。

なお、紡錘車は本資料の他に、石製・鉄製のものが出土している。量的に言えば、鉄製紡錘車の出土例が最も多いという状況である。

2・3及び図版243の53は、いずれも土器の底部（高台部）を再利用したもので、有孔土製円板と称することとする。この内、3は須恵器杯Bの底部を再利用したもので、径が11.7cm、重さ150gと他に比べ大形である。内面と高台が全面摩耗しており、図中上半の縁辺部についても摩耗が著しい。特に後者の摩耗は偏在するという特徴とも捉えられ、単に打ち欠き部を平滑にするための摩耗痕ではなく、薬研の磨り具のような使用方法による使用痕の可能性も指摘できよう。そうした場合、高台の摩耗痕はどう説明するか。明確な答えは導き出せない。このように、有孔土製円板の機能については、紡錘車・弾み車・磨り具等々幾つか考えられるが、いずれも決定的な根拠は見出し難いのが現状である。

### (4) 球状土製品（図版249, PL97）

2点出土した。1は7段階、2は6段階の竪穴住居址からの出土である。いずれも、ナデ調整で球形に成形されている。完形の1は重さ10gで、2についてもほぼ同様な重量が想定される。用途については不明と言わざるを得ない。時代は異なるが、同様な法量を持つ例として「鈴の高杯」と称される弥生時代後期の高杯に用いられた土製小玉がある（森嶋1978）。本資料が、音を奏でる楽器の一部として機能していたのか、手すざびで作られた単に球状の粘土塊か興味深いところである。

### (5) 円柱状土製品（図版249, PL97）

2点出土した。1は7段階の竪穴住居址、2は遺構外からの出土である。いずれも破損品で、全体像は窺い知れない。柱状ではあるが、1はヘラ削りにより多面体となり、2は円形に削られたような円柱状

を呈するという特徴を持つ。機能・用途については不明であり、類例の増加を待ちたい。

(6) 用途不明土製品 (図版249・250, PL97)

1~4は、いずれもロクロ成形及びロクロナデ調整が観察され、1を除いて、ヘラや糸を用いて粗雑に切り離されている。1は2~4よりもやや大振りで、手持ちヘラ削り調整で仕上げられており、同一住居址から出土している土器とは形態が異なるものの、杯として把握しても良いように思える。一方、2~4は開口面を上に向けて置くと安定せず、土器の高台部と同様に下に向け置くと安定する。実測図の向きはそれらのことによる。2~4については、大きさ・内面の調整等極めて類似しており、同一の用途が推測されるが、それについては不明といわざるを得ない。1についても内面の調整は他三者に類似しており、食器形態の杯とするよりも、用途不明土製品として扱っておく。なお、1・2と3・4はそれぞれ同一の住居址 (両者とも4段階) から出土している点に注目しておきたい。

5は上部径12.4cm、下部径15.4cm、高さ4cmを測る低い円筒状を呈していたと予測される。内外面とも粗いナデ調整が施されている。端部は上下とも丸みを帯びており、明確な面取りは施されていない。SB92 (11段階) のカマドから出土した。推測される形状から、器台という用途が推定される。

6は須恵器製の破片を再利用したもので、図中上・右の断面を除くすべての面に摩耗痕が観察され、ゆえに、本資料が破損品であることが理解される。土器製作時に施されたタタキ目や青海波文は、摩耗により痕跡を残すにとどまっている。転用視の可能性も考慮されるが、表裏面・断面とも摩耗が著しいため、砥石と同様な機能が想定される。

7は何等かの機能を持った土製品の破損品で、二次焼成による被熱痕跡が表裏面とも顕著である。輪積み痕が観察されることから、筒状または容器状であったことが推測される。さらに、断面観察から二つの個体が入れ子状態で重なっていたことが予想され、二次焼成により接着してしまったと見てとれる状況を呈している。なお、表面にはタタキ目と思われる調整痕が観察される。

(7) ミニチュア土器 (図版250, 204-10, 242-20, 244-102, PL97)

古代土器の膨大な出土量からすれば、ミニチュア土器の占める割合は極めて少なく、存在自体が特殊事象と捉えられようか。図示した14点がすべてで、成形が手づくねによるもの6点 (1~3・6・7・244-102)、ロクロ成形及び調整によるもの9点である。前者は杯等の食器形態に祖型を求めざるを得ないが、6は器面にハケ目調整が施され、祖型が土師器であったことが理解される。後者の5についても器形及び器面のヘラ削り調整から土師器に祖型を求められる。8・10・11については、大小及び土師器・黒色土器Bという差異はあるものの相似形で、出土住居址が示す段階も12段階と共通している。204-10・242-20は黒色土器B・土師器という差異はあるものの口縁部が「く」字状を呈する。土師器小形器は時期が降りるにしたがって、分量分化が促進され極端に小さい分量のものが出現する。8・10・11・204-10・242-20はそうした小形化した土師器小形器に祖型を求められるのではなかろうか。4・9は全容が明らかではないが、底径が大きく、204-10・242-20と同様に土師器小形器に祖型を求められるよう。12は小瓶の口頸部が欠損する器形で、水滴の可能性も指摘されよう。

このようなミニチュア土器の機能については不明な部分が多い。ミニチュア土器個々が持つ情報を分析することは言うまでもないが、土器全体量に占める割合や時期に共通する器形、祖型となる土器などに注目して、集落・遺跡を越えた観点での分析が必要と思われる。

## 3 石器・石製品

今回の調査で得られた石器・石製品は膨大な数に上る。その内、出土地点及び出土層位から時期を古代に特定できるものの、弥生時代中期に一般的に見られる刃器類などの剥片石器や磨石類等が多くを占めている。これらについて、今回の報告では、遺構出土のもののみ遺構一覽表に器種名を記載するに留めた。しかしながら、そうした石器類が古代においても使用されていたとするならば、大きな発見であり、重要な意義を持つことは確実である。したがって、時代を越えた再吟味の必要性をここに記すとともに、体系的な石器類の整理・分析ができなかったことを反省し、今後に生かしたい。

## (1) 石帯 (図版251, PL98)

巡方と丸柄が1点ずつ窪穴住居址から出土している。巡方(1)は、SB148(7段階)の覆土中から出土した。縦4.15cm、横4.1cm、厚さ0.8cmで、重量は31gを測る。色調は青墨色(347.5PB2/1-小学館『大辞泉』カラーチャート)を呈し、表面及び側面は研磨により光沢が著しい。裏面は1~2mmの線状痕が一定方向(斜位)に観察され、潜り穴が四方に配されている。田中氏の型式分類によれば「石方形B」に相当する(田中1990)。潜り穴からは、錆化した鉄線が検出された。なお、石質については、著しい研磨と礫本来の自然面が無いことから不明と言わざるを得ない。

丸柄(2)は、SB1046(9段階)の覆土中から出土した。最大縦幅2.3cm、最大横幅3.33cm、底辺2.45cm、厚さ0.55cmで、重量10gを測る。色調はミッドナイトブルー(264.5PB1.5/2-小学館『大辞泉』カラーチャート)を呈し、表面及び側面は研磨により光沢が著しい。裏面には1mm以下の線状痕が一定方向(横位)に観察される他、僅かな剥離痕や線状痕に直交する1mm前後の浅い線状の擦痕が確認される。潜り穴が3か所配され、田中氏の型式分類によれば「石半円形f」に相当する(田中1990)。なお、石質については、著しい研磨と礫本来の自然面が無いことから不明と言わざるを得ない。

## (2) 碁石状石製品 (図版251, PL98)

1~9はSK1040の覆土中から出土した扁平な小礫で、形状・大きさ・重量等が似通っており、色調も黒と白に二大別されることから碁石状石製品とした。とはいえ、明確な使用痕・調整痕も確認されず、石質もまちまちで、およそ石製品として製作されたとは考え難い。ただ、一つの土坑の覆土中から大きさの揃った小礫が混入していることは本遺跡では例が無いため、あえて提示した。10についても形状・大きさ・重量等が似通っているため、出土地点は大きく離れ、単独出土ではあるものの碁石状石製品に含めた。

## (3) 石製紡錘車 (図版251, PL98)

石製紡錘車は1点、SB116(10段階)の床面付近から出土した。断面形は台形を呈し、広径4.37cm、狭径2.3cm、厚さ2.35cm、孔径0.6cmで、重量70gを測る。中沢氏の分類に則せば「薄台形」となる(中沢1996 a)。上下両面及び後線上に敲打痕が観察される他、側面に浅い条痕(斜位)が認められる。また、上下両面及び側面には細かな線状の擦痕が観察される。軸孔は、上面に対して垂直では無くやや斜位に穿たれている。石質については、礫本来の自然面が極めて少ないため判然としなが、滑石と推定される。なお、同住居址からは土製紡錘車(図版249)が覆土中から出土している。

本遺跡では、石製紡錘車の他、土製・鉄製の紡錘車があり、量的に言えば、鉄製紡錘車の出土例が最も多いという状況である。



## (4) 用途不明石製品 (図版251, PL98)

1 は円板状の中央部に二つの孔が重複・並列で穿たれているもので、表面の剝落や欠損が著しいが、装飾品であった可能性が高いといえよう。石質は不明である。遺構外 (VP13区) から出土した。

2 は加工痕・使用痕とも観察されず、自然礫に分類されようが、色調・光沢という面から装飾品であった可能性も想定され提示した。SB327 (6段階) の覆土中から出土した。

3 は厚さ0.6cmの板状の小礫であるが、摩耗痕が側面部に観察されたため提示した。SB37 (6段階) の覆土中から出土した。

4 は円礫の剥片で、短軸中央の上下端部に剝離痕が観察される。その状況から石錘の可能性も考えられるが、25gという重量から疑問もあり、用途不明石製品とした。遺構外 (IA23区) から出土した。

## (5) 編み物石 (図版251, PL98)

1～6 はSB1006 (3段階) の床面から出土したもので、その内1と2 (南壁際中央)、3と4 (北西隅) はそれぞれ並んで出土した。6点の平均値を示すと、長さが8.3cm、幅が3.1cm、重量が86.7gと、一般に編み物石として報告されているものに比べ小さいことが理解される。加えて、編み物石を確証づける使用痕は確認されておらず、また、重量についても最も重い2が110gと編み物石として機能したかどうか疑問が残る。しかしながら、出土状況や形状の類似性等から、編み物石と想定し、提示しておく。

## (6) 砥石 (図版252～257, PL98～100)

砥石は古代・中世を合わせて80点出土し、その内、古代の所産と判断した57点を図示した (54は中世)。いずれも窪穴住居址を中心として出土している。したがって、それぞれの時期については、住居址の時期をもって理解することとする。

本遺跡から出土した砥石は、製作方法により以下のように2大別される (第361・362表)。

I類：河原石 (円礫・亜円礫) や露頭からの転石 (角礫) をそのまま用いた砥石。

(1, 4, 8～10, 15, 19, 20, 23, 24, 26～34, 37, 38, 40, 42, 43, 45, 47, 48, 50, 51, 53, 55, 58)

II類：剥片剝離作業を経た整形加工を伴う砥石。凝灰岩と砂岩がある。

(2, 3, 5～7, 11～14, 16～18, 21, 22, 25, 35, 36, 39, 41, 44, 46, 49, 52, 56, 57)

I類は遺跡周辺で入手可能な石材を用いた砥石で、形態・使用面とも多種多様である。定形化したII類を補充する意図で用いられたと考えられる。石質は凝灰岩・砂岩・頁岩・安山岩・閃緑岩がある。素材となる礫からの細分も可能であるが、ここでは特徴的な使用方法が想定されるもののみ挙げるに留める。一つは、素材の側面部を主要な使用面とし、素材の長軸方向の往復運動が認められるもの (24, 26, 31, 32, 37, 40, 50等) で、一つは素材の表面 (平坦面) を使用面とするもので、その大きさにより手持ち (1, 8, 38, 42等)・置き (47, 48, 55等) に想定が可能である。前者のうち、31は後縁部をも使用している点、注意される。その他、30のように使用の結果、II類と同様の形状を呈するものや、9・58のように破片資料のため全体形状が想定できないものもI類とした。

II類は古代遺跡に普遍的に見られる形状の砥石で、表裏面・両側面が使用面となる。石質は凝灰岩と砂岩の二者で、前者が58%を占める。欠損品が多いものの、穿孔を施した例は見られない。砥面に、刃物傷と考えられる断面V字状の線状痕や、円形の断面形を持つものを研いだと考えられる断面U字状の溝痕が観察される例が多い。また、端部や欠損面を使用面とするものも多く、以上掲げた点が、本遺跡出土の砥石II類の特徴と捉えられる。

I・II類は、製作方法のみならず、その背景、即ち生産・流通・消費といった一連のサイクルをも念頭

番号	出土地点	法倉(大穴)			威			断面構成										分層	用途	備考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	断面	重量 (g)	(層)		(側面)		(頂面)		(底面)		欠損部位	石材 (底寸)	新材				用法
							U溝 本型	V溝 本型	面	数	U溝 本型	V溝 本型	面	数							
1382		12.3	5.4	4.0	335	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 13		
2386		(9.4)	(4.4)	(2.6)	(76)	3	1	—	—	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 13		
3381E		(7.2)	(5.0)	(2.2)	(140)	5	1	—	1	(布1)	—	—	(F)	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I (5)	表裏に縦行溝あり 下層部縦行溝のみ	
4382D		(4.7)	(2.0)	(1.6)	(20)	4	1	—	1	(布1)	—	—	—	—	—	上層部	磨	神祇	II 7	上層部大角縁部のみ として使用	
5386F		7.3	5.3	5.15	240	5	4	—	2	(布1)	1	—	(ト)	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 6	上層部大角縁部のみ として使用	
6381F		(5.6)	(4.5)	(2.0)	(4)	1	—	—	2	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 6		
7385E		(16.9)	(6.75)	(6.5)	(620)	5	2	2	3	(布2)	—	—	(F)	9	—	彫刻岩	磨	神祇	II 4	下層部縦行溝のみ	
8387D		(3.4)	(2.5)	(0.9)	(9)	2	1	—	1	(布1)	—	—	(F)	—	—	真骨	磨	神祇	I 13		
9387D		(4.9)	(3.6)	(0.8)	(9)	2	1	—	1	(布1)	—	—	—	—	—	真骨	磨	神祇	I 13		
10387B		(13.4)	(5.4)	(3.4)	(545)	4	1	—	2	(布2)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 13		
11388B		(6.8)	(4.7)	(3.4)	(154)	4	3	—	2	(布2)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 12		
12382E		(4.6)	(3.2)	(1.5)	(35)	4	1	—	1	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 11		
133807		(5.8)	(2.9)	(0.7)	(60)	5	1	—	1	(布1)	—	—	(F)	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 2	下層部縦行溝のみ として使用	
14389B		5.8	6.4	4.8	220	6	1	22	1	(布1)	3	—	(ト)	1	—	彫刻岩	磨	神祇	II 2	上層部大角縁部のみ として使用	
153810L		(6.7)	(6.8)	(0.7)	(70)	3	1	—	—	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 8		
163810E		(5.8)	(2.7)	(2.6)	(30)	4	1	—	1	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 4		
173810E		(17.3)	(7.7)	(4.8)	(620)	5	1	3	10	(布1)	—	—	(F)	3	—	彫刻岩	磨	神祇	II 7	下層部縦行溝のみ	
183812D		(8.0)	(7.3)	(5.9)	(320)	4	1	—	1	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 7		
193817D		(7.2)	(5.8)	(2.1)	(100)	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 7	裏面は石の裏面 から削られている	
203817D		(7.7)	(2.4)	(5.5)	(130)	2	1	—	—	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 7		
213817B		(13.4)	(5.1)	(3.8)	(325)	4	1	—	4	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 10		
223816E		(14.7)	(7.1)	(8.0)	(885)	4	1	—	3	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	II 10		
233818E		(7.6)	(2.0)	(1.7)	(40)	4	1	—	2	(布15)	—	—	—	—	—	真骨	磨	神祇	I 19		
243818A		(6.8)	(3.8)	(0.8)	(22)	4	2	—	1	(布1)	—	—	—	—	—	真骨	磨	神祇	I 19		
253823E		8.4	5.6	3.2	(27)	3	1	4	4	(布1)	—	—	(F)	2	6	彫刻岩	磨	神祇	II (7)	下層部縦行溝あり	
263824D		(14.0)	(1.9)	(5.9)	(160)	1	1	—	—	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 12	右面凹面	
273833A		(5.4)	(10.3)	(1.5)	(65)	2	2	—	2	—	—	—	—	—	—	真骨	磨	神祇	I 不明	断面とも大きい単位 の縦行溝あり	
283838E		(2.8)	(1.2)	(1.2)	(5)	1	—	1	—	(布1)	—	—	(F)	—	—	彫刻岩	磨	神祇	(7)		
293838E		8	6.1	1.8	70	3	2	—	2	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 7		
303838E		(6.0)	(2.8)	(2.1)	(100)	2	1	—	1	—	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 7		
313850E		23.7	7.0	3.4	550	2	—	—	—	(横溝)	—	—	—	—	—	真骨	磨	神祇	I 7	横溝より丸形断面 下層部から裏面に かけて縦行溝	
3238100E		(9.4)	(4.8)	(7.9)	(415)	3	1	—	—	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 7	縦行溝あり	
3338101E		(8.0)	(4.4)	(3.2)	(317)	4	1	—	1	(布1)	—	—	—	—	—	彫刻岩	磨	神祇	I 7		

第361表 古代磁石一覽表(1)





に置く必要がある。I類は、集落（消費地）での素材獲得・製作・使用の所産であり、II類は集落外での生産、流通による獲得・使用の所産である。加えて、II類は金属製品を対象とする砥石と目され、古代の集落遺跡では普遍的に出土する遺物といっても過言ではない。したがって、砥石についても考古学的手順を踏んださらなる研究が必要とされる。近世の砥石については、考古学的資料と文献史料を統合し、生産—流通—消費といった一連のサイクルに対する研究が取り組み始められている（竹内1999）。今後、古代の砥石についても、そうした取り組みが重要視されるべきであろう。

#### (7) 台石・凹石（図版258～260, PL100～101）

摩耗痕や敲打痕、線状痕を有する大形の自然礫（円礫・角礫）を一括し、11点を図示した。石質は2の閃緑岩を除いてすべて安山岩である。

敲打により円形の窪みを呈するものに1, 4, 9, 11があり、4は窪みの縁辺部が高まり、それを中心として摩耗痕が広がっている。11は深さが8cm強の窪みを形成しており、使用頻度の高さを想起させる。稜線部にも3か所、小さな窪みがある他、裏面にも小さな窪みが複数認められる。これらの小さな窪みには、内部及び周辺部に煤状の黒色付着物が確認されている。

摩耗痕と敲打痕を有するものに2, 4, 9があり、9は表裏面で異なった使用方法を示している。表面では敲打痕を取り巻くように摩耗痕が観察されるのに対して、裏面では摩耗痕とは別のエリア、素材の稜線部に敲打痕が観察される。4は9の表面と同様な在り方で、2は9の裏面と同様な使用痕である。

線状痕のみを有するものに3, 5, 7があり、3はSB78（7段階）の石組カマドを構成する袖石として用いられていた。また、摩耗痕のみを有するものに8, 8, 10があり、8, 8はそれぞれ線状痕のみを有する5, 7と同一住址から出土している点、使用方法や使い分けといった点でも注目される。

いずれにせよ、これらの石器類は遺跡周辺で入手可能な石材を用い、11を除いて定形化していないことなどから、大きさ・重量といった点で大きな差異はあるものの、11を除いて前記した砥石I類に含めて考え、機能・対象物等を想定していくことが効果的かと思われる。

#### (8) 軽石製品（図版260・261, PL102）

浮岩すなわち軽石は古代・中世を合わせて130点出土した。その内、面的な摩耗痕・溝状の研磨痕跡・穿孔及び円筒形の孔を有するなど、明らかに使用もしくは加工の痕跡をとどめる26点を図示した。

面的な摩耗痕を有するものは11点（1・4・8・10・14・16・18・20・21・23・24）あり、長径6～7cmを境に、小さいものは1面、大きいものは複数面使用されるという傾向が窺える。

溝状の研磨痕跡を有するものは4点（8・17・25・26）あり、いずれも溝の断面形状はU字形という共通点が見られる。溝幅は最小の8で0.7cm、最大の26で3cmを測る。溝内部には、さらに幅0.1cm弱～0.3cmの線状痕が観察される。17を除く3点は、内容の異なる複数の使用痕を合わせ持っている。

穿孔を有するものは6点（5～7・12・13・22）あり、いずれも楕円形を基調とするが、板状の扁平なものとも厚みをもったものに二分される。13・22は前者に該当し、13は側面とも平坦面となるように整形・調整が加えられている。後者に該当する12にも面的な摩耗痕が観察されるが、それ以外のものについては、円礫に穿孔のみを加えたもの・調整が顕著でないものである。穿孔はいずれも表・裏面から施されており、その位置は中心からやや偏った位置に穿たれている。穿孔があることから紐通しが可能で、装身具や漁具（浮き子）等の機能が想定されようが、判断し難い。

円筒形の穴を有するものは5点（2・3・9・25・26）あり、穴自体が穿孔する途上なのか何等かの使用によるものなのか判断し難い。2については扁平な板状を呈し、各側面とも平坦面になるよう整形・調

整が加えられていることから、穿孔途上において折損した可能性が考えられよう。3は複数の穴を有し、25・26は溝状の研磨痕を有するなど、穿孔を目的としていないと考えられる。

加工された製品として判断したものは2点(11・15)あり、その内15は、一部欠損するが直方体に加工されている。この形態が使用の過程あるいは結果として生じたとは考え難い。11は扁平な三角柱状の形態で、線刻が施されている。線刻の方向は明らかにし得ないが、図中底面中央に描かれた直線を基点に、表・裏面に垂直方向に立ち上げられている。図中頂部は面取りされ、底面の直線と平行する方向に、断面U字形の溝が刻まれている。この溝については、当初穿孔であったことがオーバーハングする断面形状から推測される。明らかに加工された製品として把握されるが、機能や性格、また類例については不明と言わざるを得ない。

なお、19は明らかな使用もしくは加工の痕跡は認められないものの、赤色の付着物が観察されたため、図示した。赤色付着物の原料については不明である。

#### 4 金属製品

##### (1) 鉄製品(図版262~269, PL103~109)

本遺跡から出土した鉄製品は、古墳時代後期・古代・中世以降を合わせて総数477点である。これらは、鉄滓とともに発掘調査の時点では、錆と土で彫れた塊状の遺物として検出される場合が一般的である。したがって、調査記録を取る段階では、器種名すら記録されない。その後、これらの遺物は保存処理対象遺物となり、調査者の手を離れることとなる。さらに、一連の保存処理工程を通過した塊状の遺物は、器種名を持った鉄製品や鉄滓として調査者または報告者に戻ってくる。短期間の内に大量の遺物を処理して、報告しなければならないがゆえの合理的なシステムを当センターも構築している。鉄製品の各器種には、それぞれの顔があり、属性・問題点等は独自であり、かつ様々である。それぞれに応じた判断や問題意識が、保存処理工程の各場面場面で必要であることを痛感する。

##### ア 刀装具(1)

SB1226(9段階)の床面から1点出土したのみである。その形状から、黄金あるいは口金物といった刀装具であった可能性があるため、一応、刀装具とした。

##### イ 鉄鏃(2~28)

鉄鏃と判断したものは28点で、この内27点を図示した。なお、棒状不明鉄製品とした中にも鉄鏃の欠損品等が含まれていることが十分考えられる。また、古墳時代前期の竅穴住居址(SB396)から出土した6や、中世遺構から出土した25~27についてもここで取り扱う。

図版は遺構別・形態別に配列した。古代・中世の鉄鏃を対象とした津野氏の形式分類(津野1990)に則せば、2~5が長三角形式、7~14が柳葉式、15~22が雁又式、25・27は丸根式、26は鑿根式となる。また、23・24については、頭部の長さ及び関部の断面形状から、雁又式と想定されよう。なお、6については柳葉鏃群として、また28は長頸鏃群の系列に連なるものとして把握される(杉山1988)。

竅穴住居址から出土した20点を対象にすると、その3/4が11段階以降の竅穴住居址から出土し、しかも同一の住居址から複数出土している場合が多いことが明らかとなる。12段階のSB93・383、13段階のSB2・6がそれで、いずれも大形の竅穴住居址である。この内、SB93・6はそれぞれ同形式の鉄鏃が出土している。また、土器がほとんど出土していないため時期は特定できないものの、SB75からも同形式の鉄鏃が出土している。集落論を踏まえた上で考慮しなければならないが、こうした在り方は、集落内での武器所有

の在り方の一端を示すものとして捉えられる。次に、少ない資料ではあるが、各形式を時間軸で見ると、長三角形式は4段階以降13段階まで、柳葉式・雁又式は7段階以降13段階までであることが理解され、柳葉式は12段階に、雁又式は13段階にそれぞれピークが認められる。そして、中世に至って、丸根式・鑿根式が登場する。このような流れは、津野氏の論考(津野1990)や塩尻市吉田川西遺跡での指摘(小松1989)とほぼ一致し、特に12段階以降に出土量が増加するという特徴は、本遺跡から程近い長野市屋地遺跡でも同様の傾向が見てとれる。

ここで、本遺跡で主体を占める柳葉式・雁又式鉄鏝について、その特徴について簡略にまとめておく。柳葉式は、12段階にピークが認められ、頸部の短いものから長いものへという変化が見られるものの、鏝身部の長さについて大きな変化は見られず、平均化している。13のみ大形の柳葉式鉄鏝と言えようか。雁又式は、13段階にピークが認められ、刃部の長いもの(15~17・21・22)と短いもの(18~20)に二分される。後者が、時期的にやや先行するのだろうか。なお、21は基部にハート形の透かしが施されており、注目される。また、前記したSB93出土の柳葉式、SB6出土の雁又式は、それぞれ相似形といっても良いぐらい形の揃った鉄鏝で、同一の供給先が予測される。本遺跡では、住居内部に鍛冶炉が構築されている例が多くみられ、SB6もそのうちのひとつ(第31図)で、こうした施設を用いて鍛造・細部調整や再調整等が実施されていたものと考えられる。したがって、一概に供給先といっても、外部との流通を考えるだけでなく、集落内生産というものも視野に入れて考慮する必要があるだろう。

#### ウ 馬具(29・30)

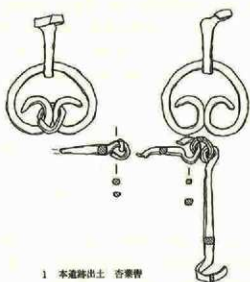
馬具は2点出土した。29は、当センターの紀要ですでに報告した杏葉轡で(上田1999)、4段階と想定されるSK19から出土した。欠損する部位はあるもののその全容が明らかとなる、時代的にも貴重な資料である。30は、所謂兵庫鎖、または賣金具の形状に類似していることから、一応、馬具とした。12段階のSB383からの出土である。ここでは、確実に馬具として捉えられる29についてのみ、記すこととする。

29は、鏡と立間が別造りとなる轡で、鏡板の形状、即ち丸みを帯びた逆ハート形から、杏葉轡と称される轡に相当する(片山1990)。鏡は、素材の先端部がX字状に接するように鍛造されており、断面形状は長方形を呈する。立間は、端部を折り返すことで鏡と連結させ、もう一方の端部をねじ曲げて立間壺を作出している。鏡との連結部(端部の折り返し部)には、鋸打ちなどの痕跡は認められない。立間についても断面形状は長方形を呈している。噴は二連で、噴先に遊金を通して引手と連結させている。鏡との連結については、鏡のX字状の部分に残る遊金の存在から、引手との連結と同様に遊金が介在していたことが予測される。引手の端部は、立間壺と同様な製作技法で引手壺が形成されている。

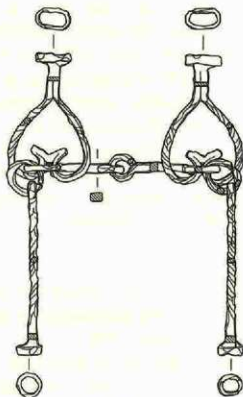
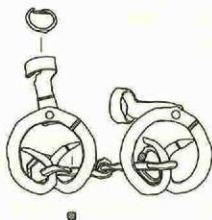
以上、部位ごとに記してきたが、ここで注目しておきたいのは、立間と鏡が別造りになっている点と立間・引手ともそれぞれ立間壺・引手壺と称される面懸・手綱との連結部がある点である。こうした特徴を合わせ持つ資料は、考古学的資料として類例の最も多い古墳時代の轡にはほとんど認められない。逆に、現存する古代・中世の所産とされる轡や絵巻物等に描かれている轡については一般的である。このことは、本資料が古代以降の所産であることを示すこととなる。本資料は、下っても9世紀前半代と考えられる土器片とともに土坑(SK19)から出土しており、本資料の下限は9世紀前半代に位置付けられる。

また、杏葉轡は、片山氏により、鏡板の形状から以下に掲げたように3細分されている(片山1990)。

- (一) 幅広い多頭形をなしたもの。鏡板のやや内側を、稜線の凹凸に沿って切り抜き、底部から中央に張り出した稜線に相似した多頭形に噴先を絡めるもの。
- (二) 三つの山形を持つもの。鏡板の中央に三頭葉状の突起を、鏡の稜線に沿って切り抜き、これに噴先を絡めるもの。



1 本遺跡出土 杏葉轡



0 (1:4) 10cm



2 『日本馬具大鑑』三中被所収  
小諸市積古神社（諏古館）所藏 杏葉轡



3 『小諸市誌』所収 小諸市積古神社（諏古館）所藏 杏葉轡

第227図 杏葉轡



(三) 逆ハート形の下の窪みを大きくX字状に交わせ、これに喰先を絡めるもの。

本資料は、(三)に相当し、参考事例として掲げさせていただいた小諸市懷古神社(微古館)所蔵の轡(第2図2・3)についても(三)に相当する。本資料を杏葉轡としたのも、『日本馬具大鑑』所収資料(第227図2、以下小諸1と称す)と形態的に類似することによる。一方、『小諸市誌』所収資料(第227図3、以下小諸2と称す)とは前二者と様相を若干異にする。本資料と小諸1は棒状の鍛鉄素材を用いて鏡板を作り出し、その両端部を喰先との連結点とするのに対して、小諸2は環状の鍛鉄素材を用いて鏡板を作り出し、一方を内側に結節してそこを喰先との連結点としている。しかも、立間についても、鏡板と同一の鍛鉄素材から作り出している。したがって、片山氏の分類(三)の中に少なくとも二つのタイプが存在することを物語ると言える。こうした差異は、何を意味するのか。片山氏が(二)としたものについても、鏡板の鍛鉄素材という観点からすれば、小諸2と同様であることが指摘されよう。喰先との連結点となる鍛鉄素材の結節部を、板状に加工し、意匠化を可能にしたものが把握される。片山氏の分類(二)が、現存する資料及び文献・絵画史料から鎌倉時代以降に比定されるものが主体であることを考え合わせると、本資料・小諸2→小諸1→分類(二)という型式学的変遷を設定することが可能であろう。分類(一)については、平安時代に同時に存在するとされる鏡轡との折衷的な色合いが強いことが予想されるので、ここでの時間軸からは離して検討する必要があるように思われる。いずれにしても、このような変遷過程の想定等は、机上の資料操作のみによるもので、本来は製造技術・工程や鍛鉄素材のX線写真、騎乗技術等を踏まえた上での論議がなされなければ成立し得ないものである。越えなければならないハードルは幾重にも重なっており、この時代のこの種の遺物に対する研究の難しさが垣間見られるところである。なお、本遺跡資料を含めた杏葉轡を取り上げた風間氏も、片山氏の3細分に、(三)→(一)→(二)という時間的な変遷を想定している(風間1999)。

#### エ 鎌 (31~43)

鎌と判断したものは13点で、基部の折り返しが残存し、装着角度を復元できるものは5点(31~33・37・38)にとどまる。この内、住居址出土資料は4点、時期が想定できる鎌はSB1065(6段階)出土の31、SB6(13段階)出土の37の2点である。

また、図版は、基部の折り返しが表面となるよう実測図を配した。これが右利き用・左利き用という区別に通じるのであれば、思いの外、左利き用の鎌が使用されていたと言えようか。

県内から出土した鎌の形態分類については、中农信地方の資料を集成した吉田川西遺跡での形態分類がある(小松1989)。それに則せば、32・33・35はI類に、31はII類に、38はIX類に、37はX類にそれぞれ対応しようか。ただし、類別ごとの装着角度の許容範囲等、若干様相が異なるため、ただちに吉田川西分類に当てはめるのには躊躇する。本遺跡資料のみでは限界があり、いずれ北信地方を中心とした資料集成をした上で再考したいと考える。

なお、板状不明鉄製品とした中にも鎌の欠損品等が含まれていることが十分考えられる。

#### オ 弓引鉄 (44~50)

弓引鉄と判断したものは図示した7点である。この内、6点が7段階以降の竪穴住居址からの出土である。完存品は皆無であるが、刃部幅に広狭の二者(44~46と47~50)が認められる。この差が使用の過程によって生ずるものか、機能差として存在していたかについては、現時点では不明といわざるを得ない。また、刃部の長さは46・47で確認でき、両者には刃部幅に広狭の差があるものの、いずれも10cm前後と大きな差は見られない。なお、49は鉤の手状に屈曲する端部に木質部が遺存しており、刃部が伸びる方向と



平行した木目が観察され、木質部との装着状況が推察される。以上のことから、本遺跡から出土した苧引鉄に共通する点は、形態は「┌」状で、刃部が直線的であること、鉤の手状の両端部が木質部との装着部であることの2点であり、刃部の長さについては10cm前後と推測される点である。それらの機能については先学が指摘するように、麻の繊維を取り出すための作業に用いられたと考えられる。

また、民俗例との比較の中で刃部の形態の差異が取り沙汰されることが間々ある。それに対して、北信の西山地域を対象に民俗例の調査を進めている徳永哲秀氏は、台形刃と湾曲刃という刃部の形態差は、江戸後期の技術革新を契機として生まれたもので、生成される麻糸、さらには製品に対応していると指摘する。加えて、台形刃は、苧引板と苧引鉄で麻皮を固定し麻皮を引き抜くという作業方法で用いられ、湾曲刃は、苧引板に麻皮を固定し苧引鉄を動かして外皮を掻き取るという作業方法で用いられるとする。このことから、古代遺跡で検出される苧引鉄については、台形刃と同様な用いられ方をしていたことが推測され、系譜上、台形刃に先行する刃部形態として位置付けが可能となるのではなかろうか。

なお、板状不明鉄製品とした中でも、苧引鉄の欠損品等が含まれていることが十分考えられる。

#### カ 紡錘車 (51~67)

輪部・軸部あわせて17点を図示した。この内4点(51~54)は完存品ではないが輪部、軸部とも揃っている。51・53は軸の先端に糸繰部が残っており、紡錘車の上下が理解され、輪部のみのものについても上下を想定することができた。

輪部は、破損しているものも含め15点あり、大きさや断面形で分類が可能である。輪部の直径は、5cm以下、5cm~6cm、6cm以上の三つに分類される。断面形は軸部との接合点に顕著な差が認められ、上面・下面とも上側に湾曲するものと両面とも直線的なものに二分される。なお、輪部の直径と断面形には相関関係は認められない。

軸部の断面形はいずれも円形で、4mm前後のもの(51~53・55)と6mm前後のもの(54・56)とに分類される。輪部の直径と相関関係を想定することが可能であるが、輪部のみ遺存するものの孔径と比較すると、一概に認めることはできない。また、一定方向に振りかかっているもの(54)がある。

糸繰部が完存しているのは56のみだが、軸部の先端を細くし、丸みを保ちながら折り返していることが観察される。51・53にも同様な手法が認められる。

資料が少ないこと、時期を想定できる紡錘車が少ないことなどから、各部の属性や相互の関係について、現時点においては、時間軸の観点からの検討はできない。また、本遺跡からは土製・石製といった別素材の紡錘車が出土しており、それらとの関係についても本遺跡出土資料のみでは限界があり、今後周辺資料を集成するなどして検討していく必要があるだろう。

#### キ 刀子 (68~132)

刀子と判断したものは70点で、図示できた66点の内、56点(9割弱)が1・3段階を除いた各段階の竪穴住居址から出土している。出土例の多寡は、各段階の住居址検出数と相関関係が予測され、7段階の竪穴住居址からの出土例が15点と最も多い。また、各段階とも、1軒の住居址から複数出土している例が多く、集落内における鉄製品の所有形態を類推するに好材料となろう。図版270の刀子柄は、骨角牙製品の項で扱うが、鹿角製の柄がつく刀子で、柄の材質とともに柄の形状がそのまま遺存する稀少な事例として注目される。一方、茎部に木質部が遺存する例が10点あり、柄の材質の相違及びその背景、柄の材質の想定については今後の大きな課題の一つと言える。なお、棒状あるいは板状不明鉄製品とした中でも、刀子の欠損品等が含まれていることが十分考えられる。

形態分類等については、全体形状が明らかなのが少ないため、鎌と同様に、いずれ北信地方を中心とした資料集成をした上で検討したいと考える。ここでは、全体形状が理解されるもの、あるいは予測できるものについて簡単に触れることとする。

68は、切先が緩やかに湾曲する大振りな刀子で、目釘穴が確認された唯一の例である。SB2（13段階）の覆土中から出土した。

69は、棟側が直線的に伸びるのに対して刃側のみ減幅する身幅の細いタイプの刀子である。身幅の細いタイプの刀子には、103のように棟・刃両側から減幅するものがあり、これら二者が本遺跡の刀子形態の主体となる。後者に分類される104は、身・茎部とも大振りで、合わせた全長は本遺跡出土の刀子の中で最も大形の刀子である。SB1046（9段階）の床面から出土した。なお、69はSB6（13段階）の壁際床面直上より出土し、103はSB1045（11段階）の床面から出土した。

83は、身幅の太いタイプの刀子で、棟・刃両側ともほとんど減幅せず、先端付近で急減し切先となる。SB85（6段階）の壁面に近い部分から出土した。

以上掲げた3ないし4タイプが本遺跡出土の刀子の代表的な形態で、これらに身・茎部の長さを加味し、刀子の形態分類の基礎として、今後資料集成等を試みてみたいと考える。

#### ク 鉄斧（133～135）

鉄斧は3点出土した。いずれも袋状鉄斧であるが、形態については三者三様である。全体形状は、133・134が環形を呈するのに対して、135は短冊形である。袋部の断面形状は、133が方形で開放状態であり、134・135は長方形で裏面まで折り曲げられている。刃部先端と基部を結んだ角度は、133はおおよそ20°、134・135は15°と差異が認められる。これらの属性が持つ差異は、機能差に起因すると考えられ、大別して、133と134・135の2グループに分類されよう。133はSB80（13段階・鋳造遺構）出土となっているが、遺構の検出状況からして伴出遺物とは捉えられない部分があるが、居住域からの出土と言うことができよう。それに対して、134・135はSD102（河川址）からの出土である。両者の機能及び対象物については不明といわざるを得ず、今後の検討課題としておきたい。

#### ケ 鎌（136）

1点のみ確認した。ただし、棒状不明鉄製品とした中でも鎌の欠損品等が含まれていることは十分予想される。

136は、ほぼ中央に括れ部が認められ、それが身部・茎部の境界であったことが推測される。身部は、断面形が方形で、先端に向かい細まっていく。基部には木質部が一部遺存しており、この部分については断面方形で、基部に向かい断面円形を呈するようになる。なお、136は調査の不幸で出土地点は不明となってしまったが、東地区のいずれかの竪穴住居から出土したことが把握されている。

#### コ 釘・鏝（137～165）

釘と判断したもの26点、鏝と判断したもの3点で、すべてを図示した。ただし、棒状不明鉄製品とした中でも釘・鏝の欠損品等が含まれていることは十分予想される。

塩尻市吉田川西遺跡では、釘の頭形状から分類を行っているが（小松1990）、本資料では不鮮明な部分が多く明確な分類はできない。150は基部上面に皿を載せたVII類に分類される他、ほとんどの釘は、基部上端を叩き延ばし、その後単に曲げたIV類と、基部上端を鑿を入れて叩き延ばし、その後折り曲げたV類に該当すると考えられる。釘の長さという観点からすると、6cm前後（約2寸）のものが数値的に主体を占め、

次いで9cm前後(約3寸)のものが多く、推定21cm前後(約7寸)の大形品が1点出土している。

錠については、渡り部が3cm前後(約1寸)と3点とも共通するのに対し、爪部の長さが163・165では若干異なっている。

また、釘・錠とも162を除き、すべて整穴住居址からの出土である。この内、SB1207(7段階)は焼失住居と把握されており、炭化した建築部材とともに釘9点(151~159)、錠1点(165)が出土している。中には建材に刺さった状況で出土した釘もあり、上屋構造の建築金物として釘が用いられていたことが容易に推測される。使用されていた釘は6cm前後のものを主体とし、9cm前後のものが含まれる。このことから、釘の長さによる使い分けがあったことが窺える。こうした組成のあり方は、SB371(10段階)でも認められよう(143・144)。また、SB383(12段階)では6cm前後のものと21cm前後の大形品との組成を示している(145~148)。ただし、SB1207以外については、焼失住居とは捉えられないことから、上屋構造の建築金物として用いられていたとは考えにくい。出土状況の解釈にもよろうが、ここでは備蓄品の一部であったと考えておきたい。

### サ 錠(169)

海老錠の錠が1点、SB382(7段階)の床面から出土した。一つの素材(鍛鉄)から造作されており、錠爪部・解錠部は平板な造りで、柄部に至り扱りが施され、紐通し孔は錠爪部の折り返し方向と同一方向に丸められている。全長23.4cmで、解錠部の長さが15.9cm、幅3.35cm、柄部の長さは7.5cm、直径1.0cm、錠爪部の高さは4.1cm、爪部には1.1cm角の方形の穴が3孔穿たれている。

長さという点では、全国的にみても最大級の錠で、この錠によって施錠された錠前についても、その大きさは目を見張るものであったことが想像される。錠前は、物品を管理するための調度品、または建造物に取り付けられたものである。したがって、律令体制下における公的な物品管理、または富裕者層の私的な財産管理などには重要な道具として取り扱われていたことが予想される。実際に、錠前・錠は、都城や地方官衙遺跡に出土頻度が高い他、寺院関連遺跡や荘園などを含む拠点的な大規模集落遺跡からの出土例が中心となっている。したがって、本遺跡から錠が出土したことは、本遺跡が単なる集落遺跡ではなく、それ相応の社会的に有力な集団が生活を営んでいた遺跡であることを示唆するものとして捉えられる。

### シ その他の鉄製品(166~168, 170~228)

用途が明確な鎌番(166~168)・鈴(170)の他、鉄製品の形状で一括りされる用途不明の毛抜き型鉄製品(171~173)・リング状鉄製品(181・182)、棒状鉄製品(184~207)、板状鉄製品(208~228)及び形状では括れない用途不明鉄製品(174~180・183)をここで扱うこととする。

鎌番(166~168)は、いずれもSB1054(7段階)出土であるが、中世の溝址SD1004・SD1019と重複関係があるため、住居址と同時期に比定することには躊躇する。建築金物、あるいは調度品の金具として用いられていたと考えられるが、古代という時期に当たって、存在したか否か。資料の増加を待ちたい。

鈴(170)は、SB383(12段階)から出土した。長さ3.3cm、最大径1.95cm、厚さ2mm弱で、X線写真から、鈕と半球状の上半・下半部で構成されていることが理解される。鈕は頂部の孔から差し込み、「ハ」字状に開き留めている。下半部の透かし孔は、一文字と推測され、鈕と直角方向に開けられている。

毛抜き型鉄製品(171~173)は、いずれも逆「U」字形で、完存品と考えられる171は先端部を内湾させ、幅広となっている。

棒状鉄製品のほとんどは、鉄鎌や刀子の茎部であったり、紡錘車の軸部や鎌・釘の破損品である可能性が十分考えられる。そうした中、異方向に扱りが施されている191・201には注意しておきたい。両者は扱

りが施されていない部分の断面形、全体の太さという点で差異があり、同一の機能を有していたかどうか不明であるが、未製品の可能性も含めて今後の検討課題として留意しておきたい。

板状鉄製品のほとんどは、鎌や刀子などの身部の破損品である可能性が十分考えられる。そうした中、208～211は断面が板状で、端部をほぼ一定の角度で折り曲げており、共通の特徴を有している。また、218・227は厚みのある板状で、鎌・刀子などは様相が異なると言えよう。218は端部に穿孔があり、類例を集成していくことが肝要となろう。

#### ス 鋤物片 (229～239)

鋤物片は古代・中世を合わせて17点出土しており、古代に属する11点を図示した。この内、SB383(12段階)から出土した232～236は、厚さや湾曲の度合いなどから鑄造製煮炊具の破片である可能性が高いのではなかろうか。また、いずれの鋤物片も、竪穴住居址出土で、床面に明確な鍛冶炉を有するSB81(2段階)・383、あるいは床面に被熱痕跡及び焼土堆積を有するSB2(13段階)・1033(6段階)・1046(9段階)から出土している点は注目しておく必要があろう。

### (2) 銅製品 (図版269, PL109)

#### ア 銭貨 (1・2)

「貞観永寶」(1)・「延喜通寶」(2)が各1枚出土した。1は溝址(SD1173)、2は竪穴住居址(SB196-8段階?)からの出土で、いずれも覆土中の遺物として一括して取り上げられた。「延喜通寶」が出土したSB196は、出土遺物が少量で、完形及び完形に近い土器は一切出土していない。したがって、土器による段階設定が困難な住居址で、杯Aの土器組成及び器形復元された土器器杯Aの法量から8段階の可能性が高いと判断されるに過ぎない住居址である。このことは、「延喜通寶」の出土が、土器による段階設定に対して、実年代を比定する資料とはなり得ないことを示している。

なお、「貞観永寶」・「延喜通寶」とも、東・北信地域では初めての検出例である。

	出土地点	重さg	外縁外径mm	外縁内径mm	内郭外径mm	内郭内径mm	外縁厚mm	文字面厚mm
貞観永寶	SD1173	1.09	19.36	15.40	6.45	4.80	1.39	0.49
延喜通寶	SB196	3.18	20.45	15.33	6.42	4.55	1.80	0.59

第363表 皇朝十二銭計測表

#### イ 銅鏡 (3・4)

いずれも口縁部の破片資料で、厚さは1.3～1.5mmである。全体的な形状や法量については不明と言わざるを得ない。両者とも口縁端部の内側を肥厚させ、4は外側にもそれが及び、稜を形成している。3は井戸址からの出土で、4は竪穴住居址(SB1225-7段階)からの出土である。

#### ウ 銅鏡 (6)

すでに当センターで刊行した本遺跡の弥生後期・古墳前期編に詳細が記されているので、ここでは、鏡片自体に関する記載についてのみ再録する。

外区部分の破片で、外側から縁部・鋸歯文・複線波文・鋸歯文・櫛歯文の構成である。内区はまったく残さない。復元径17.6cm、残存部の外周長5.0cm、幅2.2cm、外縁部の厚さ8mm、内縁部の厚さ1.2mm、重量31.74g。櫛歯文はわずかに残るだけであるが、櫛歯の間隔は1.5mm程度のようなものである。外縁部分には小さく欠けた部分が何か所か認められる。断面形状は縁部から内側に向けて外区全体が傾斜し、櫛歯文部分では



かなり薄く、鏡面はわずかに外彎している。文様面の磨上りは全体的にシャープさを欠くが、文様そのものは明瞭である。鋸歯文には気泡による穴、鋸型のヒビと思われるものなどが認められる。鋸歯文・複線波文の角は角ばらずに丸みをおびている。

全体に黒色を呈するが錆は少なく、表面の一部には銀白色の光沢を残す。破断面の状況は場所によってやや差が認められる。図右側の破断面は金属光沢を一部に残し、角も鋭い。左側は緑青が付き、やや摩滅しているように見える。ただ、破断面の表面が前者は平滑で後者は凹凸があり、破断時の力の加わり方が異なっていた可能性がある。この表面状況の違いが腐食に影響を与えた結果、上記のような差をもたらしたとも考えられる。一方、櫛歯文部分（図下方）は摩滅しているように見える。これも破断時の状況とこの部分の器体の薄さが影響した現象である可能性は否定できないが、前二者の状況とは明らかに異なり、伝世の結果の摩滅と見てよいように思われる。鏡縁辺と鏡面は摩滅あるいは研磨されたように見えるが、文様面には研磨や摩滅はない。

以上のように、3か所の破断面はそれぞれ状況が異なる。また、意図的に鏡片を加工したような研磨や穿孔の痕跡はない。腐食による変化を除けば、当初の埋没時に現状の形状であったと思われる。観察された摩滅とも見える状態を伝世の結果とした場合、3辺の破断時期は異なる可能性もあろう。つまり、現状より大きな外区破片が伝世し、埋没以前に複数に分割された可能性である。

#### エ その他の銅製品（5）

5は、板状の素材を折り曲げ、先端部に穿孔が複数存在する青銅製品で、何等かの器種の基部の装着を補強するために用いられた金具と推定される。SB1054（7段階）から出土したが、中世の溝址SD1004・SD1019と重複関係があるため、住居址と同時期に比定することには躊躇する。古代という時期において存在したか否か、資料の増加を待ちたい。

### 5 骨角牙製品

#### (1) 弭（図版270、第228図、PL110）

弭は7点出土した。形状から弭としたが、すべてが器種名通りの機能を有していたかどうかは疑問が残る。むしろ弭形製品とした方が妥当か。なお、5を除きすべて住居址からの出土である。

1は鹿角製で、加工痕等が一部観察されるが、全面平滑に仕上げられている。上端面には、鋭利で直線的な刃物傷が端部の穿孔を中心として多角形状に観察される。側面には、幅1mm前後の溝状の痕跡が水平方向に、断・連続的に観察される他、縦・斜め方向の線状痕が確認される。

2は獣骨製で、鋭利で直線的な刃物傷が各所で確認される。上下端の切り出しについては、1と同様に刃物傷が多角形状に観察されることから、素材に対して周囲から繰り返し繰り返し切断作業を進めたことが推測される。切断後、端部には手を加えた痕跡は見出し難い。

3は獣骨製で、加工痕等の状況は2と同様であるが、穿孔が貫通している。穿孔については上下端部から施されている。また、全体が被熱で収縮していることが予想される。

4は獣骨製で、切断面（上下端）を平滑に仕上げている点、側面を面取りし断面形を多角形に仕上げている点などの特徴を持つ。穿孔は上下端から施され貫通しているが、上端からの穿孔が主で、孔断面も円形で平滑に仕上げられている。それに対し、下端側は素材の組織が遺存しており対照的である。

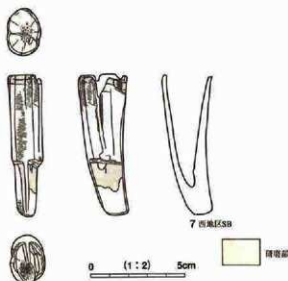
5は鹿角製で、ソケット部が一部欠損し、表面が剥落するなど遺存状況が悪い。上端・穿孔部は、平滑に仕上げられ、下端は、鉛筆を削るのと同様に外縁から中心に向けて削り出し、円錐形を呈している。

6は鹿角製で、一部に素材の凹凸を残すが全面研磨され光沢を帯びている。上端部に鋭利で直線的な刃



物働を周回させ、1条の溝を作り出している。下半部は両側面を削り出し、2mm前後の段差を作り出して鳥帽子状を呈する。末刃か本刃か、実用品に装着したものか、飾り弓（非実用品）に装着したものか、いずれも不明と言わざるを得ないが、「鹿角製鳥帽子形弮」として注目される資料の一つである。

7（第228図）は鹿角製で、6と同様に「鹿角製鳥帽子形弮」である。6と相似形であるが、一回り大きく、断面形も楕円形を呈している。全体は研磨されないが、上端から幅6mm前後の部分が一樣に研磨されており、下半部の段部及び段差以下の部分についても研磨されている。段差以下の研磨については非対称的で、製作者の意図によるものか、使用に伴う摩耗痕なのか不明である。



第228図 弮実測図

これらは形態から、上下端を切り出した円筒形を呈するもの（Ⅰ類）、一方の端部を円錐形に加工したものの（Ⅱ類）に分類される。Ⅰ類はさらに穿孔が貫通するものとししないものとに分けられる。貫通しないⅠ・Ⅱについても貫通を目的としていたことが十分予想される。孔径の最大径（開口部）は、Ⅰ類が1cm前後で、Ⅱ類が1.6cm以上とやや開きがある。本遺跡から出土した木弓の端部径は約1.2cmで、周辺遺跡から出土している丸木弓・漆を塗布した武器弓などの端部径は2cm前後を測ることから、Ⅰ類については木弓（削り弓）に、Ⅱ類については両者に装着が可能と推測される。さらに、Ⅱ類の6・7については飾り弓（非実用品）に装着されていたことも推測される。なお、Ⅰ類については孔が貫通しており、形状も円筒形であることから、その機能を弮に限定せず、何等かの器具のジョイントあるいはソケットといった機能も視野に入れる必要がある。

## (2) 刀子柄（図版 270, PL110）

鹿角製の刀子柄で、刀身は基部で欠損するが、茎が柄に残る。柄についても柄頭が欠損しており、X線写真では、刀身基部にリング状に2条、別素材と考えられる無透過部分が確認され、鏝の痕跡と想定されよう。刀子柄は、長さ14.6cm、幅1.7cm、厚さ1.4cmを測り、柄元に近い部分で曲折する。この曲折は素材自体が持つもので、手を加えたものではない。表面が残存している部分では、研磨によるものかあるいは使用によるためか、平滑で光沢を帯びている。曲折部の柄頭寄り部分は帯状に変色しており、何等かの装飾等が施されていた可能性が指摘される。

木製刀子柄は側面形によって3型式に大別されており（上原 1984）、本資料は素材の違いはあるものの、その内の「柄の中央部分で刀背方向に曲折する」Ⅰ型式に相当する。Ⅰ型式には精製・粗製があり、鏝を伴うものがあり、書刀にあてても差し支えないものもあるとされている（上原 1984）。本資料がこうしたⅠ型式の刀子柄を範形として意識していたのか、使い勝手により鹿角の分岐部分を用いたのかは判断し兼ねる。前者であれば、中央の情報を得ることのできる集団なり個人なりが本遺跡に存在していたことの証左の一つとなろう。また、「Ⅰ型式のように曲折する木製の柄は、鹿角製刀子柄を模倣しており、Ⅱ型式もその簡略形とすれば、古代に至るまで刀子柄の主流は鹿角製品を原型としたことになる」（上原 1993）という見解があり、本資料が単に伝統に則った産物である可能性も考えられる。本資料については河川址（SDI02）出土遺物ということもあって、年代を限定することが困難である。河川址から出土した土器群か

らは、7～10世紀代という年代幅で捉えざるを得ない状況である。7世紀代の鹿角製刀子柄としては、奈良県山田寺下層例や大阪府亀井遺跡例などが知られるが（上原 1993）、県内においては古墳時代の小泉郡丸子町鳥羽山洞穴遺跡例（永峯 1982）・更埴市生仁遺跡例（中村 1989）などが知られるのみで、7世紀以降の鹿角製刀子柄については出土例を知らない。したがって、本資料は年代幅があるものの、7世紀以降の鹿角製刀子柄の稀有な事例として注目に値する資料と言えよう。

### (3) 刺突具（図版 270, PL110）

鹿角製で、鋭利で直線的な刃物傷を残す切断部以外は平滑に仕上げられている。僅かに先端部を欠損する。切断は、周囲から中心へ向けて何度となく繰り返され、素材が細くなったところで折り取ったことが観察される。切断部の刃物傷を整形しようと削り出しが加えられるが、全うされていない。横断面形は円を基本とするが、基部に近いほど稜が明瞭で、先端部に近づくほど丸みを帯びている。先端から8mm程で、先端部へ向かう角度が変換しており、断面形とも合わせれば、錐として使用されていた可能性がある。

### (4) 装飾品（図版271・272, PL110）

1は第2角又部から第4枝までを含む鹿角製の腰飾と推定される。鹿角本体からの切り出しは、上下端とも周囲から中心へ向けて何度となく繰り返され、素材が細くなったところで折り取ったことが観察される。第3枝と第2枝の先端部についても同様に切断されている。穿孔は表裏面から施されており、孔の上端部は両面とも摩耗が著しく、光沢を帯びている。彫刻的な装飾等は一切見られないが、唯一、角又部に削り痕と鋭利で直線的な刃物傷が磨蝕状に残る。この部分に装飾の意味を持たせていたのか、あるいは単に第2枝の切断を試みたのか判断し兼ねるところではあるが注意しておきたい。さらに目を引くのは、全体の摩耗光沢である。ほとんどの部分で鹿角特有の表面の凹凸が磨り減り、残存する部分についても稜は丸みを帯びる。切断部にまでも摩耗光沢は及ぶ。摩耗光沢が意識的な研磨によるものか、使用に伴うものかは判断に躊躇するところであるが、切断部にまで及ぶことからおそらく後者であると考えられる。

2は素材不明ながら、一方の端部に穿孔が施され、裏面に一部海綿状の組織痕跡が観察されることから骨角製装飾品とした。穿孔は表裏面から施されており、孔の端部は一樣に光沢を帯びている。全体は著しい研磨により、平滑で光沢を帯びている。研磨に伴う細かい線状痕が観察される。下部は欠損すると思われるが、切断部は鋭利で、剝離痕が観察され刃部状を呈している。

3は素材不明ながら、切断部の状況から骨角牙製装飾品とした。5の先端部に形状が類似し、簪の可能性が推測される。著しい研磨により、平滑で光沢を帯びている。なお、2・3は同一の壱穴住居址（SB327-6段階）からの出土である。

4は鹿角の角幹を素材としたもので、一部に鹿角特有の表面の凹凸が残存する。穿孔が施され、孔の端部が一樣に光沢を帯びていることや全長32cm、重さ194gという大きさから、腰飾と推定される。全体は細い刃幅で縦方向に削られ、上下端部には稜を残す。製作意図か使用に伴うものかは判断し兼ねるが、平滑で光沢を帯びている。また、至るところに縦方向の溝状の線状痕が観察される。上端部は一部欠損するが、下端には深さ5mm前後の断面V字状の切れ込みを入れている。穿孔の下部、即ち全体の中央部には被熱の痕跡があり、煤状の黒色附着物が観察される。黒色附着物は3ヶ所確認され、7.5×3cmという広範囲に及ぶ部分と、2.5×1.6cm、径1.3cmという小範囲のものがある。広範囲の部分については鹿角本体も白色化しており、それに対して小範囲のものは鹿角本体に目立った変化は及んでいない。小範囲のものは黒色附着物のみで、卜骨特有の灸状の灼痕を想像させる。本遺跡では卜骨が2点出土しており、同様な使用方法・目的が本資料についても付随していた可能性も考えられよう。

5は骨製で、簪と思われる。表面には断面U字状の溝を2条彫刻し、裏面は骨内面のカーブを利用し幅広い溝として仕上げる他、短いU字状の溝を1条彫刻する。全体に著しい研磨が施され、平滑で光沢を帯びた仕上げとなっている。研磨に伴う細かい線状痕が観察される。井戸址(SK1039)から出土した。

(5) サイコロ (図版273, PL111)

1~4はいずれも鹿角製で、一辺5mm前後の立方体のサイコロである。欠損部を有するものもあるが、「目」は表裏合わせて「7」になる。面はいずれも平滑で光沢を帯び、「目」は単なる刺突ではなく回転を加え円を意識した仕上げとなっている。

- 1は黒褐色を呈し、「目」が本体に比して大きく、稜線はシャープである。
- 2は黒褐色を呈し、「目」が小さく、稜線は丸みを帯び、面よりも平滑・光沢の度合いが高い。
- 3は黄褐色を呈し、「目」の大きさは面と均整が取れており、稜線は一部面取りされている。
- 4は黄褐色を呈し、「目」の大きさは面と均整が取れており、稜線は丸みを帯びる。

1~4はすべて同一の竪穴住居址(SB76-13段階)からの出土である。SB76からは、平坦面を持つ細い鹿角の破片が数多く出土しており、それらの一部を鹿角製製品素材として図示した(図版273-製品素材4~8)。これらの鹿角破片は、石器製作に置き換えれば剝片・砕片に相当すると考えられ、SB76において鹿角製品の製作が行われたことが推測される。その製品の一つがサイコロであった可能性を否定することはできないであろう。サイコロ自体の出土例が全国的に見ても少ない中、地方の集落内で製作されていたとすれば、内在する問題は多岐にわたり、より注目の度合いが高まる資料と位置付けられよう。

なお、90年代以降のサイコロの出土例を管見に触れた中から、報告書等の年代順に列記しておく。

緒立C遺跡	(新潟県黒埼町)	立方体 (表裏合わせて7)	骨角製	8世紀末~9世紀初頭
草戸千軒町遺跡	(広島県福山市)	立方体 (表裏合わせて7)	獣骨製	中世
平城京	(奈良県奈良市)	八角柱	木製	奈良時代
		立方体	木製	奈良時代
		六角柱 (両端角錐状)	木製	奈良時代
牛岡遺跡	(静岡県掛川市)	立方体	石製	12~14世紀
宇田野(2)遺跡	(青森県弘前市)	立方体	土製	平安時代

(6) ト骨 (図版273, PL111)

2点出土した。両者とも神澤氏の型式分類(神澤1976)に則せば、第V型式の「素材を主に切削によって整形し、片面に平面が長方形の鎖を彫りこみ、その内面に灼を加えたもの」に相当する。1の鎖は長方形で、長さ8mm、幅3~4mm、深さ1~2mmを測り、2~3mm間隔で一列に彫りこまれる。破損品のため全体像は不明であるが、6か所以上の鎖が彫りこまれていたことが想定される。また、鎖には焼灼が観察されず、それぞれの鎖で貫通が確認される。2は破損品で全体像が不明確であるが、鎖の配列は不規則であったことが推測される。測定可能な鎖の大きさは長さ8mm、幅4mm、深さ1mm前後で、大きさについても不揃いであったことが予想される。鎖それぞれに焼灼が確認され、裏面にまで及んでいる。

なお、1は河川址(SD102)からの出土で時期の特定は困難である。出土している土器などから、7~10世紀代の所産と考えられる。2は4段階の竪穴住居址(SB66)からの出土で、およそ9世紀前半代の所産と考えられる。本資料と同型式の類別として更埴市生仁遺跡例が挙げられる。生仁遺跡は、主として古墳時代に相当するト骨・刻骨が数多く出土した遺跡として知られ、古代の竪穴住居址からも第V型式のト骨が出土している。とはいえ、ト骨自体が全国的に見ても稀有な資料であり、注目すべき資料である。

## (7) 製品素材 (図版273・274, PL111)

ここで製品素材として一括したものは、骨角牙製品製作に伴って生じた破片類やその母材であり、また製作過程の一素材と考えられるものである。それらは同時に、未製品と想定されるものでもあり、両者の判別は極めて困難なのが現状と言えよう。

1は脊椎動物の四肢骨骨端部で、端部を切断し、側面が面取り加工される。鋭利で直線的な刃物傷が側面に観察される。未製品か母材かの区別は判断できない。

2は脊椎動物の四肢骨で、長軸方向に切断後、端部を面取りし、内面に幅3mm、深さ1mm前後の断面U字状の溝が彫られている。欠損品のため全体像が不明確であるが、何等かの機能を持った骨製品の破損品である可能性も考えられる。

3は鹿角で、上下端部に切断目的の刃物傷が観察される。加工痕は実測した一面のみで、長軸方向に切断されている。切断に伴う刃物痕が短軸方向に数か所確認される。破砕した鹿角を加工したものか、切断した鹿角を加工したものかの判断はできない。

4～8は前述のようにサイコロが出土した住居址から出土したもので、サイコロ製作をも視野に入れた製品素材として注目されよう。4は薄板状を呈し、上部は折損する。表面では上部を除く三方の稜線が斜めに削られ、下端部は刃部状を呈している。また、縦位に2mm幅、横位に3mm幅の平行する直線の刃物傷があり、両者は直角に交差する。裏面にも横位に4mm幅で平行する刃物傷が認められ、サイコロ製作を目的に直方体の素材を切り出していた可能性も考えられよう。5は鹿角特有の表面の凹凸を残しており、鋭利で直線的な刃部を有する道具により、端部及び側面に切断・切削が確認される。切断・切削面が接する部分はほぼ90°の角度を有している。6も鹿角特有の表面の凹凸を残しており、切断により平坦面が形成されている。7も鹿角特有の表面の凹凸を残している。切断により形成された平坦面の上には、3mm幅で平行する刃物傷が確認される。平坦面に対して刃部が垂直方向に作用したか、斜位かは判断しかねるところであるが、前者の場合、4と同様な点が指摘できよう。8については微小であるが、3面、平坦面が確認される。以上記したように、4～8は目的がサイコロではなかったとしても、鹿角製品製作に関わって生じた破片または母材と捉えることができ、いずれにしても注目に値する資料として位置付けられよう。

9～15は切断痕を伴う鹿角で、石器製作に置き換えれば石核・残核に相当するものである。このうち、10～13は同一の竪穴住居址 (SB102-13段階) からの出土である。

9は角座を含む第1角又部で、角座骨・角幹・第1枝がそれぞれ切断されている。鹿角特有の表面の凹凸は、一部凸部が摩耗している。また、第1枝下部から角座に向けて斜位に切れ込みを伴う。この切れ込みは6cm以上に及び、鋭利かつ直線的であることから、金属製品が用いられたことが判断される。他の切断断面も平滑かつ平坦であることから、切断に際して金属製品が用いられたことが想定できよう。このことは、同様な切断面を有する本資料以外の製品素材または骨角牙製品の加工・切断においても、金属製品が用いられたとする根拠の一つとなるだろう。

10は第2角又部で、上下の角幹・第2枝がそれぞれ切断されている。鹿角特有の表面の凹凸は、実測した片面のみ凸部が摩耗し、部分的に凹部と同一面になるほど摩滅している。

11は第1角又部で、角座・第1枝が切断されている。角幹については破損しており、切断されていたかどうかは不明である。鹿角特有の表面の凹凸は、一部凸部が摩耗している。また、端部側面に切削面が認められ、何等かの未製品であった可能性も考えられる。

12は太さからいって第1角又部と仮定する。角座・角幹・第1枝がそれぞれ切断されている。鹿角特有の表面の凹凸は一樣に摩耗し、部分的に凹部と同一面になるほど摩滅して光沢を帯びている。

13は角又部で、上下の角幹・枝角がそれぞれ切断されている。鹿角特有の表面の凹凸は一樣に摩耗して



いる。鋭利で直線的な刃物傷が枝角基部に確認される。また、図中裏面は下端部が破損しており不鮮明であるが穿孔が施されていた可能性がある。

14は角又部で、上下の角幹・枝角がそれぞれ切断されている。鹿角特有の表面の凹凸は一様に摩耗しており、部分的（枝角側）に凹部と同一面になるほど摩滅している。この摩滅部には、長さ3mm前後の鋭利で直線的な刃物傷が一定方向に無数に確認される。同様の刃物傷は、角幹上端部にも認められる。これらの刃物傷をもって刻骨とすかどうかは現状では判断できない。

15は第1角又部を含む角座骨で、第1枝は中途まで切れ込みを入れ、折り取られている。角座及び角幹については切断痕が認められない。第1枝基部の切れ込みについては、長軸5cm以上の平滑な平坦面を形成しており、9と同様に切断に際して金属製品が用いられていたことを確認づける資料となるだろう。

本遺跡においては、これまで記してきた骨角牙製品の他に、大量の人骨・獣骨が保存状況が良好な状態で、縄文時代から中世に至る各遺物包含層から検出されている（縄文時代に相当する人骨は無い）。一般に、この種の遺物または自然遺物は残りにくいとされ、出土する例は低湿地遺跡や貝塚・洞穴遺跡などに限られていたのが通例である。これに対し、本遺跡は所謂オープンサイトで、この種の遺物の出土地点も壑穴住居が主体を占めている。このことは、本遺跡が骨等を腐食させない土壌環境・埋没状況等に恵まれていたことを示していると言えよう。したがって、本遺跡の場合、無いものは実際に存在しないという前提に立った資料の分析が可能な遺跡と把握され、同様に人骨・獣骨・骨角牙製品を出土した長野市屋地遺跡や更埴市生仁遺跡などとともに、各時代について様々な問題を提起し得る遺跡として注目される。

弭は、弓と別素材の弭が装着されていたか否か、装着されていたとすれば弓の用途に規制されるのかといった問題や、鹿角製品帽子形弭としたものについては金属製品との対比が注意される。

鹿角製刀子柄の存在は、刀子の範型というのが存在したかどうか、存在したとすれば、中央とのつながりに基づいた情報を拠り所とするのか古墳時代以来の伝統に根ざすものなのか、地方への情報の普及といった観点からも興味深い事象である。

装飾品は、本遺跡の場合、墓址からの出土は一切無く、副葬のための装飾品ではなく、実用品としての装飾品であったことが指摘できる。服飾史の一端を担うものとして注目されよう。

サイコロについては前述の通りで、存在自体が特殊であり、集落内での製作をも考慮すれば、内在する問題は多岐にわたるのは自明である。

卜骨の存在は、農耕儀礼または狩猟儀礼が集落単位で行われたのか、あるいは拠点とも言うべき集落においてのみ実施されたのかどうか、遺跡の性格や骨卜法の変遷も含めて地域単位・圃単位へと視野を発展・拡大する必要性が生じている。

製品素材については、製品・未製品という枠組みだけでなく、石器製作と同様な研究方法が導入されるべきで、同一個体の認識も含めて新たな分析手法を用意する必要があるだろう。本遺跡では、製品素材が複数出土した住居があり、それらを骨角牙製品製作に関わる施設とする見解も指摘されようが、施設(工房)・工人または自給的集落内生産・公的管理生産といった社会構造にまで迫り得る問題の一つである。

それぞれ列記してきたが、こうした骨角牙製品は、本来どの集落でも普遍的に所有していたのか、集落(遺跡)の性格・特殊性に基づいて出土しているのかどうか、最も基本的な問題が解決されなければならない。本遺跡の資料が、様々な場面で議論を活発化させる契機となれば幸いである。



## 6 木製品・編物

## (1) 出土状況と分類

## ア 木製品

木製品は全て旧河道SD102の出土で、調査段階において古代の所属と判断された木製品である。出土土器を見ると7～10世紀の年代幅を有するが、築が構築された地点は9世紀以前、その他の地点は9世紀以後の可能性があり、それに伴ない木製品の時期が大きく2分される可能性もある(第4章を参照)。しかしながら、形態的特徴から、弥生後期～古墳前期の所産と想定される曲柄鍬・鍬柄が古代に含まれる等不明確な点が残る為、個々の木製品に対する厳密な時期区分は控えた。「弥生後期・古墳前期篇」ではこうした農具を2点報告したが、今回も同様の農具が抽出されており、他にも弥生後期～古墳前期所属の木製品が存在する可能性は否定できない。

以上の事情から、本稿では時期毎・地点毎といった記載は避け、木製品を一括して分類項目を設定した上で、器種毎に説明を行いたい。その、分類項目及び該当器種を以下に示す。

## 分類 ア 農具：曲柄平鍬・又鍬(弥生後期～古墳前期)

えぶり・堅杵・編台

イ 武器：弓

ウ 容器：朝物・曲物・箱物・匙状木製品

エ 木筒：付札状木製品

オ 祭祀具：斎串・人形・刀形

カ 用途不明：用途不明部材・柄状木製品・建築部材

キ 土木材：杭

農具の内、鍬・鋤類の2点は弥生後期～古墳前期の所属である。用途不明木製品は各項目に含まれるべきだが、用途の推定が困難な木製品を一括し、用途不明部材・柄状木製品・建築部材に該当しそうな木製品に分けて報告する。建築部材・杭には築の骨組みとして機能した例、建築部材には先端を杭状に加工した例が見受けられる。建築部材の骨組みや杭状の加工は、築部材・杭への転用であろう。

木製品の名称に関しては、主に『木器集成図録 近畿原始篇』(上原1993)・『同 近畿古代篇』(上原1984)に従った。出土状況の詳細は遺構の章を、法量・樹種等の木製品個別の情報については観察表を参照されたい。なお、「弥生総論 8 総論・科学分析」では、松原遺跡出土木製品の樹種同定結果を掲載している。

## イ 編物

籠等の容器と網代等の敷物を一括して編物に分類した。松原遺跡では5点の編物があり、この内SK166出土の古墳前期の籠については、「弥生後期・古墳前期篇」で報告済みである。本報告では、SD102の築状遺構より出土した網代2点及び中世の所属だがSK1542出土の籠2点を報告する。

## (2) 出土木製品の概要

## ア 農具(図版275 1～5、PL112)

1はナスビ形を呈する曲柄平鍬である。笠形の頭部が発達していない「曲柄平鍬C」(上原1993)に該当し、刃部先端及び棒状に伸びる着柄軸の軸頭が欠損する。2は曲柄又鍬の可能性があるが、一方の鍬身側面が残存するのみで詳細は不明である。以上の2点は弥生後期～古墳前期の所属と考えられ、当該期の可能性のある鍬・鋤類は「弥生総論 5 石器・その他」で報告する曲柄平鍬、「弥生総論 6 弥生後期・古墳前期」で報告済みの曲柄又鍬・鍬反柄を合計すると5点を数える。SD102では、弥生後期～古墳前期の土器

類が一定量出土したが、SD102の位置する東地区では当該期の竪穴住居址は1軒(SB1406)のみである。集落の主体は西地区でSD102とは距離を保ち、その中で獸・禽類が出土したのは現状では根拠を示せないものの、使用の場である生産域との関連を推測したい。

3はえぶりで「木器集成図録」では横楕円式に分類されたが、刃部長より刃部幅が広い・泥除けがない・着柄角度が鈍角との特徴から、本報告では「えぶり」の名称を用いる(白居1997)。身の上部及び刃部先端を欠損するが、形態は長方形であろう。円形の柄孔が中央にあり、柄孔付近に若干の隆起が認められる。柄孔は斜め方向から穿孔され、柄は引き手から向かって右側に傾いて装着される。

4は竪杵の搦き部で、先端は丸状を呈する。搦き部は一定幅を維持するため、中央の握り部のみが括れる形態を呈していたことが窺われる。上端の欠損部が被熱し、黒く炭化する。

5は編台の目盛板である。断面は二等辺三角形で、頂点部の両端に緩やかな削りが入り、目盛りの刻みが7ヵ所まで確認できる。なお、編台を支える脚及び木鏝は出土していない。

#### イ 武器 (図版275-6、PL112)

6は太枝の幹を削り出して素材とする木弓で、弦を張らない状態において弓幹がまっすぐに伸びる直弓であろう。両端が欠損のため、弓の形態は不明である。弓幹の断面は楕円形を呈し、背には櫛が刻まれ、一部に桜皮が巻かれている。本遺跡では骨角製の弦が7点存在し、形態からI・II類に分類され、孔径の最大径がI類は1cm前後、II類は1.6cm以上であることが指摘されている(第4章2節5)。弦ではないが、本例の弓幹端を計測すると径は1.2cm前後で、I類の径と近い数値を示している。

#### ウ 容器 (図版275~277-7~28、PL113~116)

7は刳物容器の槽で、1辺の角のみが残存する。平面形態は隅丸方形または長方形と推定され、口唇部の器厚が厚い側が短辺となり、そこに円柱状の突起が付く。

8~25は曲物である。8・9は隅丸長方形、10~21は円形を呈する底板で、12は中央に円形孔が認められるが穿孔された孔であるかは不明確である。8・10~12がカキゾコ、9・13~21がクレゾコで、8~12が榧皮結合、それ以外は木釘結合によって側板を固定する。この点から円形曲物のカキゾコは榧皮結合、クレゾコは木釘結合で側板を固定し、隅丸長方形の曲物はカキゾコ・クレゾコを問わず榧皮結合を採用した状況が窺われる。隅丸長方形の曲物は円形曲物より大形で、また、円形曲物はほとんどが推定径だが13.5~23.4cmの範囲に集中し、その中で50.0cmを上回る大形の12が存在している。22~24は円形のクレゾコだが、木釘による結合が無理である程度器厚が薄い点、有孔の点が10~21とは異なる。確認できる孔は1孔で、形状は22・24が方形、23が円形を呈する。穿孔位置は22・23の中央に対して24は周縁に偏り、24は推定径が正確であれば2孔の可能性もあろう。孔の大きさは22・24がそれぞれ1辺1.5cm・2.1cm、23は径2.1cmを測る。蓋あるいは曲物筐としての機能が推定され、前者とすれば孔は把手の装着部、後者なら傾底板であろう。25は多角形の底板で、側面には木釘痕が巡る。

26・27は組み合わせ箱の側板である。2点はVD5グリッドにおいて重なりながら出土した為、同一個体であろう。27は組み合わせ部が良好な状態を保っており、L字状の端部を組み合わせ、直行する2方向から木釘で側板を固定した状況が窺われる。

28は形態から匙状木製品としたが、遺存状態が悪く詳細は不明である。上端から柄が垂直に伸び、身は窪みが浅く、先端に向かって徐々にすぼまるものと思われる。

#### エ 木筒 (図版278-29・30、PL116)

29・30は形態が付札木筒に類似する点から木筒に含めたが、墨痕が認められない等不明確な点が残りの付札状木製品として扱う。板目あるいは斜め材の薄板に括れを持たせて頸部とし、そこに紐の緊縛痕の可能性を持つアタリ痕が観察される。また、29の下部には2次的な切断痕が見受けられる。

## オ 祭祀具 (図版278-31~41, PL117)

31~37は斎串、あるいは斎串状の形態を呈する木製品である。頭部の形態は、主頸状の31~33・35・37、側面から鋭く斜めに切り落とした34が見受けられる。32・35は全体の状況が窺われ、「木器集成図録 古代篇」(上原1985)の分類を援用すれば下端を剣先状に作るC型式となり、また、36は頭部が欠損するものの両側面に切り込みを有する点からD型式とすることができよう。しかしながら、この36及び37は、他とは厚さ・断面形態・木取りが異なり、斎串ではなく用途不明木製品として扱うのが妥当かもしれない。

38~40は短冊状の薄板を素材とする扁平の人形で、正面全身人形の38・39と側面全身人形の40が見受けられる。山形の頭部を持つ38・39は、頸部を切り欠いてで肩を呈し、V字状の切り込みで足を作出する。両腕は欠損するが、両側面から切り込みを入れて表現した事が推測される。また、38の顔面には、眉毛・目・口・鼻が表現される。側面全身人形の40は頭部に被り物が見受けられ、頸部及び手・足は切り込みで表現する。

41は刀形と推測した。刀身の先端が切先状を呈するが、断面の厚さが均一となり刃縁は表現していない。

## カ 用途不明木製品 (図版279~284 42~76, PL117~122)

## ① 用途不明・部材

42~45はそれぞれ孔を有するが、孔の位置・大きさ・数・形状等が異なり木製品の形態も様々で、多様な種類の部材が含まれていることが窺われる。柾目材、あるいは斜め材を素材とする。

46~49は孔を持たない部材・用途不明木製品である。46は柾目材の両側を緩やかに削り、短い柄部を作出する。47・48は板目材で、上端あるいは側面を切り込む。49は板目材の中央が浅く窪むが、遺存状態が悪く詳細は不明である。

## ② 柄状木製品

50~56は柄状を呈する点から、柄状木製品とした。断面形は方形あるいは円形で、木取りは全て削り出しである。欠損部が多く詳細は不明だが、楸・鐏類の柄や部材等、多様な木製品を含んでいよう。

## ③ 建築部材

建築部材と推測される木製品を一括したが、欠損や2次加工が施されて原形を留めず、更に部材の組み合わせが不明である等、部位・機能を特定するのが困難で不明確な点が多い。このため、細かな分類は避け、取り敢えず丸木芯もち材と板材に分けた上で個々の特徴を述べる。なお、板材には建築部材以外の板材も含むと考えられようが、建築部材との分離はできなかった。

## 〔丸木芯もち材〕

57は径9.0cm、全長162.0cm以上を測り、丸木芯もち材の枝分かれ部がY字状に切り落とされる。垂直材で柱としての可能性が考えられよう。

58は所謂有頭棒状木製品で径7.2cm、全長は274cmを超え、屋根材・垂木としての機能を想定したいが、石川糸里遺跡で指摘された(白居1997)有頭部下への「片面一部の湾曲する削り痕」は認められない。この他に、垂木と想定されるものに62・63があり、63は丸木芯もち材ではないが垂木と想定される木製品としてここで報告する。62・63は石川糸里遺跡で示された分類の、「III類…棟木と接する仕口を木口先端に削りだした材。削り出し面は湾曲形状となる。頭部が尖るもの、角状に削りだしたものがある」に該当し、頭部の形態は62が尖り、63が角状に削り出される。63は下端に、杭状の2次加工が施される。

59・61は上端に柄を持つ。59は下端杭状の2次加工が見受けられるが、幹の全長が短く、転用時に適宜な長さに切断されたとの見方もできよう。

60は全体に粗い加工痕が観察され、幹の太さを整えた状況が見受けられる。上端を斜めに削って三角形に処理しており、その下部には幅6.0cmを有する凹状の削り込みを持つ。下端に見受けられる杭状の加工

は、杭への転用であろう。

〔板材〕

64～68は柎孔を有する木製品である。64は丸木芯もち材だが、柎孔を持つ為併せて報告する。丸木芯もち材及び板材があり、板材の木取りに板目材・柎目材の差異が指摘できる状況から、機能する部材の位置がそれぞれ異なる想定される。

64は上端に5.6×8.0cm以上の方形を呈する柎孔を持つが、柎孔は全長2.7m以上中で1ヵ所である。板材の65～68は65～67が板目材、68が柎目材となり、板目材には芯部を残した65が存在する。柎孔は欠損が多いが方形・長方形の形状を呈し、65は4.8×3.6cm以上、66は3.3cm以上×6.6cm以上、67は9.0×8.4cm以上、68は3.6cm以上×3.0cm以上を測る。67・68は2ヶ所以上に柎孔があり、その距離は67が55.2cm、68が105.6cmとなる。また、65は残存部の全長1.45m中、柎孔は1ヵ所のみである。

69～76は板材で、69～71・76の板目材、72～74の割り材、75の柎目材が存在する。70・71・75の幅は、ほぼ一定幅を維持している。72は上端に段差があり、柄状に突出した可能性がある。75は木芯側の側面に粗い加工痕が顕著で、分割された扇形の素材の樹皮側をほぼそのまま生かし、木芯側を削り込んで断面方形の板材を作り出した状況が窺われる。

キ 土木材 (図版285～290-77～122、PL123～128)

杭としての機能を示した状態、すなわち地面に突き刺さって出土した例の他に、先端を杭状に加工する木製品及び築の骨組が含まれる。量的には丸木芯もち材を利用した杭が92～109・112～115と最も多く見受けられ、板目材あるいは割り材の110・111・116～122を遙かに上回る。丸木芯もち材は素材として樹木の幹を選択した例がほとんどだが、115は径が細く湾曲して枝分かれが見受けられる等枝の部分を選択している。

杭の径は94の2.3cmから20cmを超える88まで、長さはほぼ完存する例に限れば、87は85.0cm、90は317.0cm、91は265.0cm、94は44.0cmとそれぞれ幅を持っている。丸木芯もち材における先端部の作り出しは、1方向から斜めに削る77・85他、表面は2方向から深い削りを、裏面は幅が短く浅い削りを入れる78、表裏面から削りを入れてV字状を呈する81～84・86・87他、他方向から削りを入れる104～109他が見受けられ、杭状の加工の及ぶ範囲も狭い～広い例があり多様である。板目材を素材とする110は、杭というよりは矢板の名称が適切であろう。両側面に斜めから削りを入れて、V字状の先端部を作出する。また、割り材には樹皮側や芯側を削って断面形が角状を呈する例が存在し、先端部は両側面から削りを入れてV字状を呈する111・119・121他、細かな削りを施す116～118他、表裏・側面の4面を加工する122等が認められる。111は上端に段差を持ち、他の部材から転用した可能性がある。

ク 纏物 (図版291-1～4、PL000)

1・2は籠で、同一個体と推測される。口縁部付近の破片で、上端より約2cm下位の内外面に、輪が椀皮で固定される。輪は、1周するの部分的であるのかは不明である。2の1方の面には存在しないが、ここに固定されていたと考えられる破片が調査時に取り上げられている。全体の形状は推察できないが、編目が斜め方向に交差する点から、方形を呈する底部から立ち上げた可能性がある。素材幅は1cm前後で、「2越2漕り1送り」の網代編みとなり、口縁部上端を矢羽状に処理して折り返している。

3・4は網代である。観察結果から双方に異なる編目を想定したが、上部が割がれて下部の素材が露出する等、残存状態が悪く明確ではない。素材は7本前後で1単位となり、幅は約2.7cmを測る。



第364表 古代木製品観察表

No	項目	器種	遺構	グリッド	取上No	法量(cm)	木取り	NAG	樹種	整理No
1	農具	曲柄平鍬	SD102	ⅧX 9 (弥~古)	259	$29.2 + \alpha$ (全長) $\times 6.1$ (幅) $\times 1.9$ (厚)	榎目材	965	アサダ	1274
2	農具	曲柄又鍬	SD102	ⅧX 4 (弥~古)	360	$22.8 + \alpha$ (全長) $\times 4.2$ (幅) $\times 1.1$ (厚)	榎目材	964	コナラ クスギ節	1369
3	農具	えぶり	SD102	ⅧX 10	44	$35.5$ (全長) $\times 6.9 + \alpha$ (幅)	榎目材	919	コナラ コナラ節	1079
4	農具	整件	SD102	ⅧY 11	204	$24.8 + \alpha$ (全長) $\times 6.9$ (幅) $\times 2.7$ (厚)	丸木削り出し	918	コナラ クスギ節	1220
5	農具	目盛板	SD102	ⅧX 10	19	$48.8 + \alpha$ (全長) $\times 5.7$ (幅) $\times 3.3$ (厚)	榎目材	991	モミ属	1058
6	武器	弓	SD102	ⅤE 22	3	$80.3 + \alpha$ (全長) $\times 2.2$ (幅) $\times 1.8$ (厚)	丸木削り出し	951	カヤ	936
7	容器	刺物	SD102	位置不明 (ヤナ内)	4	$55.6 + \alpha$ (全長) $\times 25.8$ (幅) $\times 11.4$ (器高)	榎目材	977	ケヤキ	876
8	容器	曲物	SD102	ⅧY 16	27	$24.2 + \alpha$ (全長) $\times 17.3$ (幅) $\times 0.95$ (厚)	榎目材	879	ヒノキ	1086
9	容器	曲物	SD102	ⅧY 11	28	$36.8 + \alpha$ (全長) $\times 17.7$ (幅) $\times 0.6$ (厚)	榎目材	854	ヒノキ	1087
10	容器	曲物	SD102	ⅧY 11	331	$16.0$ (推定径) $\times 0.5$ (厚)	榎目材	877	サワラ	1342
11	容器	曲物	SD102	位置不明 (ヤナ内)	不明	$18.1$ (推定径) $\times 1.0$ (厚)	榎目材	990	ヒノキ	806
12	容器	曲物	SD102	ⅧX 5	115	$51.6$ (推定径) $\times 1.0$ (厚)	榎目材	947	ヒノキ	1144
13	容器	曲物	SD102	ⅧY 16	2	$13.5$ (推定径) $\times 0.6$ (厚)	榎目材	868	不明	797
14	容器	曲物	SD102	位置不明	31	$13.8$ (推定径) $\times 0.7$ (厚)	榎目材	869	スギ	798
15	容器	曲物	SD102	ⅧY 11	334	$15.3$ (推定径) $\times 0.8$ (厚)	榎目材	878	ヒノキ	1344
16	容器	曲物	SD102	ⅧX 25	19	$15.0$ (径) $\times 1.1$ (厚)	斜め材	880	ヒノキ	804
17	容器	曲物	SD102	ⅧX 20	18	$15.7$ (径) $\times 0.6$ (厚)	榎目材	980	不明	803
18	容器	曲物	SD102	ⅧX 5	134	$13.5$ (推定径) $\times 0.4$ (厚)	榎目材	900	ケヤキ	1161
19	容器	曲物	SD102	ⅧX 4	3	$17.4$ (推定径) $\times 0.9$ (厚)	榎目材	875	ヒノキ	1042
20	容器	曲物	SD102	ⅤD 5	105	$21.0$ (推定径) $\times 0.3$ (厚)	榎目材	904	サワラ	793
21	容器	曲物	SD102	ⅤD 10	55	$23.4$ (推定径) $\times 1.0$ (厚)	斜め材	956	サワラ	780
22	容器	曲物	SD102	ⅧX 5	110	$14.5$ (推定径) $\times 0.6$ (厚)	榎目材	876	ヒノキ	1139
23	容器	曲物	SD102	ⅧX 20	1	$15.4$ (径) $\times 0.7$ (厚)	斜め材	883	不明	796
24	容器	曲物	SD102	ⅧX 4	146	$18.3$ (径) $\times 0.3$ (厚)	榎目材	939	ケヤキ	1172
25	容器	曲物	SD102	ⅧY 16	325	$14.7 + \alpha$ (全長) $\times 3.6 + \alpha$ (幅) $\times 0.8$ (厚)	榎目材	884	サワラ	1337
26	容器	箱物	SD102	ⅤD 15	98	$43.8 + \alpha$ (全長) $\times 9.8$ (幅) $\times 1.5$ (厚)	榎目材	946	サワラ	730 b
27	容器	箱物	SD102	ⅤD 15	98	$51.7 + \alpha$ (全長) $\times 10.4$ (幅) $\times 1.8$ (厚)	斜め材	945	サワラ	730 a
28	容器	鳥伏木製品	SD102	ⅤD 10	11	$27.5 + \alpha$ (全長) $\times 9.0$ (器幅) $\times 3.8$ (柄幅) $\times 1.4$ (柄厚)	榎目材	995	トチノキ	801
29	木簡?	付札状木製品	SD102	位置不明	23	$7.0$ (全長) $\times 2.6$ (幅) $\times 0.3$ (厚)	榎目材	815	サワラ	754
30	木簡?	付札状木製品	SD102	ⅧX 20	21	$10.3$ (全長) $\times 1.9$ (幅) $\times 0.5$ (厚)	斜め材	819	サワラ	741
31	祭祀具	甞串	SD102	ⅧX 4	6	$6.9 + \alpha \times 1.9$ (幅) $\times 0.5$ (厚)	榎目材	863	モミ属	1045
32	祭祀具	甞串	SD102	ⅧX 20	26	$13.8 + \alpha$ (全長) $\times 1.6$ (幅) $\times 0.3$ (厚)	榎目材	816	サワラ	742
33	祭祀具	甞串	SD102	ⅧX 10	245	$7.8 + \alpha$ (全長) $\times 1.3$ (幅) $\times 0.2$ (厚)	榎目材	860	サワラ	1261
34	祭祀具	甞串	SD102	位置不明	9	$9.1 + \alpha$ (全長) $\times 1.1$ (幅) $\times 0.2$ (厚)	斜め材	905	サワラ	736 a



No.	項目	器種	遺構	グリッド	取上No.	法量 (cm)	木取り	NAQ	樹種	処理No.
35	祭祀具	斎串	SD102	WX 25	6	12.4(全長)×3.0(幅)×0.1(厚)	柱目材	814	サワラ	732
36	祭祀具	斎串	SD102	WX 25	2	12.4+α(全長)×2.9(幅)×1.1(厚)	板目材	817	サワラ	805
37	祭祀具	斎串	SD102	VD 10	38	36.3+α(全長)×2.8(幅)×0.9(厚)	板目材	950	サワラ	774
38	祭祀具	人形	SD102	WY 11	25	13.5(全長)×2.6(幅)×0.6(厚)	柱目材	818	サワラ	1084
39	祭祀具	人形	SD102	WX 25	40	15.5+α(全長)×2.3(幅)×0.4(厚)	柱目材	1783	不明	737
40	祭祀具	人形	SD102	WX 5	5	14.0+α(全長)×3.2(幅)×0.5(厚)	斜め材	813	ヒノキ	740
41	祭祀具	刀形	SD102	VD 5	37	17.7+α(全長)×2.4(幅)×0.3(厚)	斜め材	967	サワラ	784
42	用途不明	用途不明・部材	SD102	WX 25	3	27.8+α(全長)×7.3(幅)×2.4(厚)	斜め材	987	サワラ	745
43	用途不明	用途不明・部材	SD102	WY 16 WX 20	不明	19.6+α(全長)×5.5(幅)×1.1(厚)	斜め材	981	モミ属	765
44	用途不明	用途不明・部材	SD102	WX 5	57	32.4(全長)×8.3(幅)×2.7(厚)	柱目材	852	コナラ属 クスノキ	1089
45	用途不明	用途不明・部材	SD102	位置不明	不明	18.5+α(全長)×7.2(幅)×1.2(厚)	柱目材	988	サワラ	331
46	用途不明	用途不明・部材	SD102	位置不明	4	11.2+α(全長)×6.0(幅)×0.5(厚)	柱目材	935	ヒノキ	731
47	用途不明	用途不明・部材	SD102	WY 16	373②	12.7+α(全長)×1.7(厚)	板目材	963	モミ属	1381
48	用途不明	用途不明・部材	SD102	位置不明	不明	26.1+α(全長)×3.6(幅)×2.3(厚)	板目材	867	サワラ	807
49	用途不明	用途不明・部材	SD102	WX 10	244	50.5+α(全長)×11.2(幅)×3.0(厚)	板目材	992	フジキ	1280
50	用途不明	柄伏木製品	SD102	WX 20	33	16.5+α(全長)×1.1(幅)×1.0(厚)	丸木削り出し	968	サワラ	783
51	用途不明	柄伏木製品	SD102	WX 5	132	19.2+α(全長)×1.2(幅)×1.1(厚)	丸木削り出し	1021	コナラ属 コナラ筋	1159
52	用途不明	柄伏木製品	SD102	WX 5	7	25.7+α(全長)×1.4(径)	丸木削り出し	934	サワラ	735
53	用途不明	柄伏木製品	SD102	WX 25	22	29.2+α(全長)×2.0(幅)×1.4(厚)	丸木削り出し	888	サワラ	738
54	用途不明	柄伏木製品	SD102	位置不明	不明	31.0+α(全長)×2.0(径)	丸木削り出し	998	モミ属	840
55	用途不明	柄伏木製品	SD102	WX 10	22	65.9+α(全長)×3.3(幅)×2.8(厚)	丸木削り出し	1010	モミ属	1061
56	用途不明	柄伏木製品	SD102	WX 9	209	97.8+α(全長)×3.6(幅)×1.8(厚)	丸木削り出し	1899	モミ属	1225
57	用途不明	建築部材?	SD102	WY 11	328	162.0+α(全長)×9.0(径)	丸木芯もち材	1909	クリ	1339
58	用途不明	建築部材?	SD102	VJ 2	16	274.8+α(全長)×7.2(径)	丸木芯もち材	1286	コナラ属 コナラ筋	240
59	用途不明	建築部材?	SD102	WX 4	108	37.2(全長)×12.0(径)	丸木芯もち材	938	不明	1137
60	用途不明	建築部材?	SD102	IVY 16	339	195.6(全長)×12.0(径)	丸木芯もち材	1912	トネノキ	1349
61	用途不明	建築部材?	SD102	WX 20 ヤナ骨組	532	136.5+α(全長)×16.5(径)	丸木芯もち材	1599	ケヤキ	425
62	用途不明	建築部材?	SD102	VD 10 ヤナ枕列	140	137.0+α(全長)×6.0(径)	丸木芯もち材	1283	不明	829
63	用途不明	建築部材?	SD102	WX 4	292	189.0(全長)×8.0(径)	割り材	1287	クリ	1307
64	用途不明	建築部材?	SD102	位置不明	481	207.0+α(全長)×18.0(径)	丸木芯もち材	1835	モミ属	966
65	用途不明	建築部材?	SD102	WX 20 ヤナ骨組	450	94.0+α(全長)×13.0(幅)×8.8(厚)	板目材	—	—	923
66	用途不明	建築部材?	SD102	WY 16	335	27.3+α(全長)×8.5(幅)×4.5(厚)	板目材	973	モミ属	1345
67	用途不明	建築部材?	SD102	WX 5	81	100.7+α(全長)×15.3(幅)×3.0(厚)	板目材	1288	クリ	718
68	用途不明	建築部材?	SD102	WX 4	250	138.0+α(全長)×14.0(幅)×2.4(厚)	柱目材	1284	ケンボナシ属	1286
69	用途不明	建築部材?	SD102	WX 5	59	53.0+α(全長)×10.0(幅)×1.5(厚)	板目材	1001	ケヤキ	1091

No.	項目	器種	遺構	グリッド	取上No.	法量(cm)	木取り	NAG	器種	取上No.
70	用途不明	建築部材?	SD102	WX 9	11	60.8+ $\alpha$ (全長) $\times$ 10.0(幅) $\times$ 3.2(厚)	板目材	1012	ケヤキ	1050
71	用途不明	建築部材?	SD102	VJ 2	18	167.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 9.0(幅) $\times$ 5.6(厚)	板目材	1593	コナラ属 クスギ節	389
72	用途不明	建築部材?	SD102	WY 16	400	253.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 9.7(幅) $\times$ 6.1(厚)	割り材	1922	フジキ	1406
73	用途不明	建築部材?	SD102	位置不明	不明	234.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 14.0(幅) $\times$ 6.5(厚)	割り材	1569	コナラ属 クスギ節	191
74	用途不明	建築部材?	SD102	WX 10	264	280.0(全長) $\times$ 18.0(幅) $\times$ 4.8(厚)	割り材	1905	コナラ属 コナラ節	1280
75	用途不明	建築部材?	SD102	VJ 2	61	42.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 8.0(幅) $\times$ 4.6(厚)	板目材	916	コナラ属 クスギ節	253
76	用途不明	建築部材?	SD102	WX 20 ヤナ骨組	480	72.7+ $\alpha$ (全長) $\times$ 17.6(幅) $\times$ 3.8(厚)	板目材	1025	ケヤキ	666
77	土木材	杭	SD102	WX 9	323	51.5+ $\alpha$ (全長) $\times$ 6.1(径)	丸木芯もち材	1908	不明	1335
78	土木材	杭	SD102	WY 1	94	53.5+ $\alpha$ (全長) $\times$ 5.2(径)	丸木芯もち材	1884	エノキ属	1124
79	土木材	杭	SD102	WY 16	377	55.2+ $\alpha$ (全長) $\times$ 5.0(径)	丸木芯もち材	1915	コナラ属 クスギ節	1385
80	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	463	54.1+ $\alpha$ (全長) $\times$ 4.2(径)	丸木芯もち材	1690	コナラ属 クスギ節	553
81	土木材	杭	SD102	VD 10 ヤナ	270	131.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 3.0(径)	丸木芯もち材	1636	ヤナギ属	490
82	土木材	杭	SD102	WX 20 ヤナ	433	114.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 6.0(径)	丸木芯もち材	1753	コナラ属 クスギ節	960
83	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	535	125.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 10.0(径)	丸木芯もち材	1670	コナラ属 クスギ節	529
84	土木材	杭	SD102	WX 5	155	154.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 12.0(径)	丸木芯もち材	1893	コナラ属 クスギ節	1179
85	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	500	183.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 8.0(径)	丸木芯もち材	1659	コナラ属 クスギ節	514
86	土木材	杭	SD102	位置不明	330	74.9+ $\alpha$ (全長) $\times$ 8.8(径)	丸木芯もち材	1910	不明	1341
87	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	539	85.0(全長) $\times$ 12.8(径)	丸木芯もち材	1668	モモ	525
88	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	522	85.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 21.0(径)	丸木芯もち材	1666	モモ	523
89	土木材	杭	SD102	WY 16 ヤナ骨組	315	168.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 4.0(径)	丸木芯もち材	1731	ヤナギ属	632
90	土木材	杭	SD102	WX 4	146	317.0(全長) $\times$ 8.8(径)	丸木芯もち材	1892	コナラ属 クスギ節	1174
91	土木材	杭	SD102	WX 10	137	265.0(全長) $\times$ 9.0(径)	丸木芯もち材	1890	コナラ属 クスギ節	1164
92	土木材	杭	SD102	WX 4	34	33.8+ $\alpha$ (全長) $\times$ 3.1(径)	丸木芯もち材	1880	ウツギ属	1070
93	土木材	杭	SD102	WX 4	33	39.1+ $\alpha$ (全長) $\times$ 2.6(径)	丸木芯もち材	1679	ウコギ属	1069
94	土木材	杭	SD102	WY 11	53	44.0(全長) $\times$ 2.3(径)	丸木芯もち材	949	ウツギ属	1085
95	土木材	杭	SD102	VD 5 ヤナ杭列	279	56.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 4.0(径)	丸木芯もち材	1652	コナラ属 コナラ節	504
96	土木材	杭	SD102	VD 10 ヤナ杭列	132	58.8+ $\alpha$ (全長) $\times$ 5.0(径)	丸木芯もち材	1641	ヌルデ	493
97	土木材	杭	SD102	WX 20 ヤナ骨組	528	91.5+ $\alpha$ (全長) $\times$ 13.5(径)	丸木芯もち材	1635	ヤナギ属	484
98	土木材	杭	SD102	位置不明	不明	92.5+ $\alpha$ (全長) $\times$ 10.4(径)	丸木芯もち材	1815	カヤ	676
99	土木材	杭	SD102	WX 4	7	131.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 4.0(径)	丸木芯もち材	1875	クリ	1046
100	土木材	杭	SD102	WX 20 ヤナ骨組	476	145.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 4.5(径)	丸木芯もち材	1602	カヤ	431
101	土木材	杭	SD102	VD 10 ヤナ杭列	135	175.0+ $\alpha$ (全長) $\times$ 5.0(径)	丸木芯もち材	1605	クマシデ属 イヌシデ節	438
102	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	504	22.3+ $\alpha$ (全長) $\times$ 3.2(径)	丸木芯もち材	1693	不明	557
103	土木材	杭	SD102	WX 5	62	50.2+ $\alpha$ (全長) $\times$ 8.2(径)	丸木芯もち材	1882	カヤ	1094
104	土木材	杭	SD102	VD 15	112	53.2+ $\alpha$ (全長) $\times$ 9.1(径)	丸木芯もち材	1792	マツ属 複種管束葉風	827

## 第4章 古代の調査

No.	項目	器種	通橋	グリッド	取上No.	法 量 (cm)	木取り	NAG	俗稱	整理No.
105	土木材	杭	SD102	VD 15	113	$88.8 + \alpha$ (全長) $\times 10.0$ (径)	丸木芯もち材	1793	マツ属 檜科管束重属	828
108	土木材	杭	SD102	WX 5	95	$86.0 + \alpha$ (全長) $\times 5.4$ (径)	丸木芯もち材	1885	カヤ	1125
107	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	436	$96.0 + \alpha$ (全長) $\times 6.5$ (径)	丸木芯もち材	1615	コナラ属 クスギ節	458
108	土木材	杭	SD102	位置不明	不明	$120.0 + \alpha$ (全長) $\times 7.5$ (径)	丸木芯もち材	1790	カヤ	821
109	土木材	杭	SD102	VJ 1	20	$120.0 + \alpha$ (全長) $\times 7.0$ (径)	丸木芯もち材	1566	カヤ	173
110	土木材	杭	SD102	VD 10	119	$94.0 + \alpha$ (全長) $\times 20.0$ (幅) $\times 5.4$ (厚)	板目材	1289	ケヤキ	718
111	土木材	杭	SD102	位置不明	不明	$92.0 + \alpha$ (全長) $\times 10.0$ (幅) $\times 4.3$ (厚)	割り材	1573	コナラ属 クスギ節	220
112	土木材	杭	SD102	位置不明 ヤナ骨組	501	$118.0 + \alpha$ (全長) $\times 12.6$ (径)	丸木芯もち材	1632	モモ	481
113	土木材	杭	SD102	WVY 11	403	$141.0 + \alpha$ (全長) $\times 12.0$ (径)	丸木芯もち材	1923	コナラ属 コナラ節	1409
114	土木材	杭	SD102	位置不明	503	$147.0 + \alpha$ (全長) $\times 12.0$ (径)	丸木芯もち材	1832	コナラ属 クスギ節	990
115	土木材	杭	SD102	WVY 16	300	$195.0$ (全長) $\times 4.5$ (径)	丸木芯もち材	1609	コナラ属 クスギ節	444
116	土木材	杭	SD102	VJ 2	45	$111.0 + \alpha$ (全長) $\times 8.0$ (幅) $\times 6.6$ (厚)	割り材	1567	コナラ属 クスギ節	174
117	土木材	杭	SD102	VJ 2	101	$115.5 + \alpha$ (全長) $\times 10.0$ (幅) $\times 8.2$ (厚)	割り材	1575	コナラ属 クスギ節	228
118	土木材	杭	SD102	VE 22	23	$136.0 + \alpha$ (全長) $\times 7.0$ (幅) $\times 6.0$ (厚)	割り材	1571	コナラ属 クスギ節	196
119	土木材	杭	SD102	WX 4	106	$134.0 + \alpha$ (全長) $\times 4.5$ (幅) $\times 3.8$ (厚)	割り材	1888	カエデ属	1136
120	土木材	杭	SD102	WX 10	265	$157.0 + \alpha$ (全長) $\times 11.0$ (幅) $\times 7.5$ (厚)	割り材	1906	コナラ属 クスギ節	1281
121	土木材	杭	SD102	WX 20 ヤナ骨組	529	$161.0 + \alpha$ (全長) $\times 12.5$ (幅) $\times 12.2$ (厚)	割り材	1601	コナラ属 クスギ節	429
122	土木材	杭	SD102	WX 20 ヤナ骨組	530	$130.0 + \alpha$ (全長) $\times 9.0$ (幅) $\times 7.2$ (厚)	割り材	1631	コナラ属 クスギ節	959

## 7 鍛冶・鑄造関連遺物

## (1) 概要

松原遺跡の古代集落は、8世紀から12世紀に及び、その中核は9世紀～10世紀である。鍛冶、鑄造関連遺構および遺物では、8世紀に位置づけられる鍛冶遺構、11世紀に位置づけられる仏具の鑄造遺構および遺物が注目されるが、金属に関連する手工業生産関連遺物はコンテナ16箱分相当が検出された。その主体は鉾滓および、羽口、炉壁、鋳型である。諸々の事情で科学的分析が実施できなかったため、鍛冶関連遺物と鑄造関連遺物の分離はできていない。報告は、鉾滓、羽口、炉壁、鋳型に別けて遺物を説明し、次に遺構毎の遺物内容を提示する。

## (2) 鍛冶・鑄造関連遺物

## ア 鉾滓

鉾滓は、鉄塊、流動滓、椀型滓、滓付着不純物が認められる。磁着力および肉眼による観察によれば、そのほとんどが鉄に関連する遺物と考えて良い。鉾滓は総重量約5kgを計る。その主体は鍛錬鍛冶に関連する遺物と想定され、椀型滓が目につくところである。

## ① 鉄塊系遺物 (図版292)

肉眼観察により、椀型滓や不純物等とは異なった形状をなし、磁力反応が強かったものを鉄塊系遺物として選別して4点を図示した。図版292-鉄塊系遺物1は扁平な滓で磁力は強い。85gを計り重量感がある。2面の破面をもち、気泡はほとんどもない。椀型滓の可能性もある。2はゴツゴツした滓で、230gを計り重量感がある。非常に強い磁力をもつ。気泡はなく、サビによるヒビ割れが認められる。3はサビとヒビ割れをもつたまりで、外見上は鉄塊系遺物に見えるが10gと軽い。磁力は強い。4は扁平な破片で5gを計る。磁力は非常に強い。鉄片の可能性もある。

## ② 流動滓 (図版292)

形状、サビの有無等で判断した。磁力反応はない。SB93出土の図版292-流動滓1は330gを計り、重量感がある。5面の破面をもつ大形滓の破片で、厚さは5cm以上ある。気泡は、破面で観察できる内面には認められるが、外面ではまったく観察できない。表面には幅1cmほどの流動状の筋が一定方向に流れている。内面は鉛色を呈し、表面は青紫がかかる。製鉄遺跡で認められる流動滓に最も似た様相を呈す。

2は幅2cmほどの流動滓で、流動部分の先端付近と考えられる。流れに対して前後が欠損する。30gを計り、ずっしりと重い。気泡はない。青灰色を呈し、上位はつるつるし、下位はゴツゴツしている。

3は幅1cmほどの流動滓で、流動部分の最先端である。15gを計る。上位はつるつるして青紫色を呈し、下位の接触部は小石を巻き込んでおり、色調は鉛色を呈する。4は3面の破面をもつ滓の破片で、厚さ4cmを計る。1と同様に大形滓の一部と考えられる。破面を観察すると内面には2mmほどの気泡が認められ、上面に気泡はなく流動状の筋が認められる。100gを計る。5は幅5cmほどの流動滓で、流れに対して前後および側面の一部が欠損する。断面は下位がゆるやかなU字状を呈し、下面に粘土を巻き込んでいる。上面は水平で凹凸があり、やや流動性に欠けるように観察される。断面には小さな気泡が認められるが、表面にはみられない。青灰色を呈し、重量は180gを計る。

## ③ 椀型滓 (図版292～295)

椀型滓は、松原遺跡古代集落面の鉾滓で主体となる。45点について図示を行った。

椀型滓の形状は、平面形が楕円形状を呈するもの(図版293-10,18)と、円形状を呈するもの(13,14)とがあり、後者がやや小さく、楕円形状のものが多。この形状は炉底の構造と送風に関連して生まれる



ものとする。椀型滓の大きさは、S、M、Lサイズに分類することができる。Sサイズは長さ8cm前後、Mサイズは10cm前後、Lサイズは13cm前後となり、S、Mサイズが主要となり、Lサイズは多くない。図示した椀型滓は、形状を残し、打ち欠き面をもつ例が多い。椀型滓の観察表は第365表で示した。

図版No.	出土遺構名	法量 cm			重量 (g)	磁着力	破面の有無	備考
		長さ	幅	厚さ				
図版292-1	SB1	10.0	8.2	3.2	200	—	無	気泡少ない
	SB6	10.2	(6.6)	3.0	240	△	有1箇所	気泡有り、2段、上段円形状、上部弱い磁力
	SB70	8.3	(6.2)	3.2	180	△	有1箇所	気泡有り、2段、上段円形状、上部弱い磁力
	SB97	9.4	(6.2)	5.0	255	△	有2箇所	気泡少ない
	SB111	7.0	6.0	2.6	210	—	無	気泡少ない
	SB147	10.0	7.6	3.5	325	○	有2箇所	炭痕跡有り
	SB173	(5.2)	(5.0)	2.2	110	—	有3箇所	気泡少なく、表面がつるんとしている
	SB178	5.8	(4.2)	2.2	50	—	有2箇所	
	SB191	(6.6)	6.2	3.2	165	—	有1箇所	気泡少なく、表面がつるんとしている
	SB192	13.0	(10.4)	5.4	770	—	有1箇所	2段、炭痕有り
	SB192	(12.4)	8.4	3.4	320	—	有1箇所	表面気泡少なく、つるんとする 炭痕有り、扁平状
	SB210	8.4	7.1	3.4	250	△	無	上段長さ7.2、幅6.4 上段円形状
	SB210	8.9	8.0	3.6	285	△	有1箇所	気泡少ない
	SB408	6.4	6.6	2.2	130	◎	無	扁平状、気泡少なく、つるんとしている
	SB1014	10.2	8.4	2.4	295	○	無	気泡少なく、つるんとしている
	SB1028	8.2	(6.2)	2.6	130	—	有1箇所	炭痕有り
	SB1047	10.0	(5.6)	3.6	230	—	有2箇所	内面の気泡多く、表面はつるんとしている
	SB1067	12.7	9.4	5.0	740	△	無	気泡有り
	SB1068	13.3	10.0	6.0	765	△	無	2段以上 表面気泡少なく、つるんとしている
	SB1068	11.4	7.8	4.2	310	◎	無	2段 上段円形状 上段楕円状 炭痕有り
	SB1208	(8.8)	8.0	3.8	260	△	有1箇所	表面の窪みが深い
	SB1236	8.0	(4.4)	3.4	105	△	有1箇所	気泡有り
	SB1401	9.5	(7.6)	6.0	350	—	無	表面がつるんとしている
	SD2	9.0	7.0	2.4	215	—	有1箇所	表面気泡多くガサガサする 炭痕有り
	SD2	(6.8)	(5.8)	2.2	110	△	有3箇所	表面がつるんとしている
	SK3	11.2	(10.0)	4.3	485	△	有1箇所	表面気泡有り
	SK51	11.4	8.0	3.0	740	—	有1箇所	表面気泡少なく、つるんとしている
	SK1034	9.0	(7.0)	4.4	310	○	有2箇所	2段 上段円形状部のみ磁力有り
	SK1733	6.6	(4.4)	2.8	90	—	有2箇所	表面気泡多くガサガサする
	I A15区	8.4	(7.0)	3.4	210	—	有	2段
	I A15区	11.0	7.8	3.0	410	○	無	気泡少なく、表面がつるんとしている
	I C11区	(5.4)	(5.4)	4.0	160	—	有1箇所	気泡有り 炭痕有り
	I F区	(6.2)	6.0	2.0	150	△	無	表面がつるんとしている
	I F12区	12.0	10.0	5.4	665	◎	有1箇所	2段 表面がつるんとしている
	I F14区	(4.0)	(5.0)	1.5	45	—	有3箇所	破片
	I G2	(6.8)	(4.8)	2.8	140	—	有2箇所	気泡有り
	I G12	(6.0)	(4.4)	3.2	70	—	有2箇所	表面の気泡多く、ガサガサする
	I J区	7.8	(4.0)	2.2	60	—	有1箇所	表面の気泡多い
	IIV区	(4.8)	(3.8)	3.4	80	—	有2箇所	破片
	IIV10区	8.2	(6.6)	3.2	85	—	有1箇所	気泡非常に多く、ガサガサする
	IIX6	(6.4)	(4.2)	2.2	120	○	有1箇所	気泡少なく、つるんとしている
	出土地不明	(3.0)	(5.6)	1.0	25	—	有1箇所	炭痕有り 破片
	43西地区	15.4	12.0	4.0	765	—	無	表面の気泡多く、ガサガサする 炭痕有り
	44出土地不明	6.8	(4.2)	2.8	90	—	有1箇所	気泡有り 表面はつるんとしている
	45東地区	5.4	(3.2)	2.4	60	—	有1箇所	気泡有り

磁力 △有り ○やや有る ◎強い

第365表 椀型滓観察表

## イ 羽口 (図版296)

羽口の出土量は非常に限られている。図版296で1～10の10点を図示した。形状が理解できるのはSB190出土の6、7の2点のみで、他はすべて細片である。外径が細いもの(1～5)と太いもの(6～10)とがあり、前者は器壁が薄く、孔部が後者より太くなる傾向にある。羽口細片が出土した遺構、地点は以下の通りである。(SB70, 81, 97, 98, 347, 1014, SK1, 307, SD2, 3, SC1, I A20区, I F17, 18区, I K4区, IIV4区, VP14区)

## ウ 炉壁 (図版297, PL129)

1はSB80(12段階)から鋳型片とともに出土したもので、口径29.2cmを測る。鋳造に関わる溶解炉の上端部と想定される。輪積み成形で、胎土に細礫・小礫とともにスサが多量に含まれる。内面は発泡状態を



呈し、暗青灰色化している。

2は遺構外から出土したもので、推定内径23cmを測る。精練炉あるいは溶解炉の炉壁と考えられる。胎土には細礫・小礫とともにスサが多量に含まれる。炉壁本体は内側が還元・発泡状態で、表面に溶解状態の鉱滓が付着する。

3は遺構外から出土したもので、精練炉あるいは溶解炉の送風口の破片と想定される。胎土には細礫・小礫とともにスサが多量に含まれる。送風部は付着物や発泡が見られず平滑であることから、外径10cmほどの羽口が挿入されていたと考えられる。

#### エ 壘体 (図版297, PL129)

精練炉あるいは溶解炉の形状や部位の想定が不可能なものを便宜上、壘体とした。1～3はいずれも直線的で円筒形の炉を想定し難いという特徴を持つ。

1は外面が剥落するが、内面は発泡状態を呈しており、その状況から上部の破片と想定できようか。胎土には細礫・小礫とともにスサが多量に含まれる。竪穴住居址 (SB50-1段階不明) からの出土である。

2は僅かに本体の発泡部を残し、ほとんどが鉱滓等の付着物である。溶解状態の付着物にはスサの圧痕が数多く確認される。竪穴住居址 (SB115-7段階?) からの出土である。

3は外面が剥落するが、内部は還元・発泡状態で、表面に溶解状態の鉱滓が付着する。胎土には細礫・小礫とともにスサが多量に含まれる。床面に鍛冶炉が構築されている竪穴住居址 (SB383-12段階) からの出土である。

#### オ 鋳型 (図版297・298, PL130)

本遺跡から出土した鋳型は、いずれも粘土で成形し焼成されたものである。鋳型は、仏具のうち梵音具に一括される梵鐘・磬と形状から扉金具と想定されるものであり、仏教等との関連が極めて高いことが指摘されよう。すべてSB80 (12段階) から出土しており、図示した以外にも多数の鋳型片がピット内から出土している。加えて、炉壁の出土や高熱が用いられたと考えられる炉を伴うことから、SB80は鋳造に関わる施設として把握される。

1は、形状から扉金具の鋳型 (中型) と考えられる。上部径5.0cm、下部径7.8cm、高さ4.5cmを測り、途中段が設けられている。外面の色調は暗青灰色を呈し、還元状態だったことを示す。それに対し内面の色調は橙色を呈しており、本来の色調を保っている。輪積み成形で、器面は内外面とも粗く、胎土には細礫・小礫が相当量含まれる。上面の穿孔部は鋳込み口か？

2は形状から梵鐘の鋳型 (外型) 片と考えられる。推定される口径は56cmを測り、梵鐘としての大きさを備える。遺存状況が悪く、樹脂侵食を施した。輪積み成形で、胎土に細礫・小礫を相当量含む。遺存状況にも関連しようが、器面は内外面とも粗く、下端部は2.5cm幅の段帯状となり、遺存する内面中央には沈線が一条巡り、上端は段帯状になることが予想される。梵鐘の下帯及び駒の爪に相当する部分と考えられるが、文様等の彫り込みは認められない。いずれにせよ、断片資料のため全体像がつかめず、鉄製羽釜等の容器の鋳型である可能性も否定し切れないので現状である。なお、端部に棒状工具による沈線が一条施されており、外型・中型を合わせる際の目印とした可能性が指摘されよう。

3は撞座のみの無文磬の鋳型片で、右半部が欠損し、左側縁が剥落している。推定される幅は18.6cmほどで小型の部類に入ろうか。中央には繊細な蓮華文の撞座が彫り込まれ、紐に接する縁が内側に湾曲するという特徴を持つ。蓮華文は、京都峰定寺例の撞座に鋳出されている蓮華文に酷似する。鋳型本体は、厚さ4.3cmほどの煉瓦状で、鋳出される磬と類似した形状を呈する。胎土には細礫とともに珉米が多数含まれている。表面及び側面は平滑に仕上げられているのに対して、裏面は粗雑である。表面から厚さ0.9cmのところまで層状に被熱による硬化が認められる。磬の彫り込み部分が暗青灰色を呈する以外は橙色を呈す

る。側面部に幅2mm前後、深さ1mm弱の断面V字状の沈線が、鋳面に対してほぼ垂直に、一定間隔に施されている。型を合わせる際の目印とした可能性が指摘できよう。これは、本例が両面髷の鋳型であったことを示唆するものと考えられる。なお、京都峰定寺例には仁平四年(1154年)の記年銘があり、本例が無文髷であることから、本例の製作年代は平安時代に納まるものと考えられる。このことは、SB80から出土した土器の様相(12段階-11世紀後半代)からも支持され、平安時代の中でも11世紀後半代という製作年代を与えることができると考える。

4は撞座部分が欠損しており不明確ではあるが、3と同様に無文髷の鋳型と考えられる。側縁の内彎する度合いと銃の角度が3とは異なるため、別個体の髷の鋳型と把握される。鋳型本体は、厚さ4.4cmほどの煉瓦状で、鋳出される髷と類似した形状を呈する。胎土には細礫とともに粗米が多数含まれている。表面及び側面は平滑に仕上げられているのに対して、裏面は粗雑である。表面から厚さ1.4cmのところまで層状に被熱による硬化が認められる。髷の彫り込み部分が暗青灰色を呈する以外は橙色を呈する。側面部に幅3mm前後、深さ2mm弱の丸みを帯びた断面V字状の沈線が、鋳面に対してほぼ垂直に施されている。型を合わせる際の目印とした可能性が指摘できよう。これは、本例が両面髷の鋳型であったことを示唆するものと考えられる。

5は縁の彫り込みが見られないことから両面髷の裏面にあたる鋳型と考えられる。遺存状況悪いため樹脂含浸を施したが、他の彫り込みについても確認されなかった。鋳型本体は、厚さ3.2cmほどの煉瓦状で、鋳出される髷と類似した形状を呈する。胎土には細礫・小礫とともに粗米が多数含まれている。表面及び側面は平滑に仕上げられているのに対して、裏面は粗雑である。表面から厚さ1.1cmのところまで層状に被熱による硬化が認められる。髷に相当する部分が暗青灰色を呈する以外は橙色を呈する。側面部に幅3～4mm前後、深さ2mm弱の丸みを帯びた断面V字状の沈線が、鋳型に対してほぼ垂直に、一定間隔に施されている。型を合わせる際の目印とした可能性が指摘できるとともに、沈線の状況から4とセット関係にあったことが推測される。したがって、本遺跡においては、最低2面、最大3面の髷の鋳型が出土したと捉えられる。

### (3) 鍛冶・鋳造遺物と遺構

鍛冶・鋳造関連遺物は主に堅穴住居址および土坑から出土している。遺構と遺物の関連を明らかにするために、萍の遺構別出土内容を示し(第366表 遺構別鉦澤出土内容)、特徴ある遺構について詳説する。

#### ア 遺構出土鍛冶・鋳造関連遺物

該当する遺物が出土した遺構は、堅穴住居址73軒、土坑16基、溝4基の97遺構である。そのほとんどが1000g以下の出土であり、遺構に直接ともなう萍は多くない。鍛冶あるいは鋳造を行っていた遺構は限られていたようである。以下観察表(第366表)に示す。

#### イ 遺構別鍛冶・鋳造遺物

鉦澤の出土内容から、萍が遺構と直接結びつく遺構の出土内容を提示する。

##### ① SB6

SB6は12世紀に位置づけられる大型建物で、床面南東コーナー部分に被熱面があり、鍛冶関連施設が想定されている。埋土からは鉄塊10g、椀型萍1個体240gが検出されているが、他に小さな萍を含む土壌が34kgとりあげられている。諸々の事情でセパレーションが実施できなかったため詳細は不明であるが、大型建物内での鍛錬鍛冶行為が充分想定されよう。土壌は遺物とともに収蔵されている。

##### ② SB54

SB54からは1095gの鉦澤が出土している。肉眼観察によれば、3mm～1cm大の萍で占められており、鉄塊

単位 g

遺構名	鉄塊 重量	銅型滓 数	銅型滓 重量	銅型滓片 数	銅型滓片 重量	不純物 重量	他 重量	総重量	遺構名	鉄塊 重量	銅型滓 数	銅型滓 重量	銅型滓片 数	銅型滓片 重量	不純物 重量	他 重量	総重量
SB1		1	200		200			200	SB1236		1	105		105			105
SB2		4	600	7	40	640		640	SB1236		1	105		105			105
SB6	10	1	240		240			250	SB1312				3	50			50
SB12				1	35	35		35	SB1401		1	350		350			350
SB16				1	30	30		30	SB2		80						80
SB19	16							15	SB3		1	485		485			485
SB20			70	1	5	75		75	SB51		1	740		740			740
SB21				7	66	65		65	SB94		40						40
SB25				1	10	10		10	SB113						10		10
SB28							10	10	SB126		55						55
SB42		1	25	1	10	35		35	SB347				3	60	60		60
SB43		5	290	1	35	295		295	SB349		40						40
SB44		1	35		35			35	SK1018							5	5
SB49							25	25	SK1034		1	310	1	65	375		375
SB52				1	20	20		20	SK1099				1	100	100		100
SB54							1095	1095	SK1114						10		10
SB65				1	10	10		10	SK1539						50		50
SB67				1	50	50		50	SK1644		70						70
SB70		1	180		180			180	SK1695							5	5
SB71							5	5	SK1733		25	1	90			90	115
SB72				1	20	20		20	SD2		3	366	10	196	560	15	575
SB78				3	60	60		60	SD3							35	35
SB81	265		470	29	590	470		5185	SD58							5	5
SB85	30							30	SD1007				4	65	65		65
SB97		1	255	1	35	290	35	325	SD1009		2	680		680			680
SB98			3	60	60			60	SD1116				1	40	40		40
SB99			1	40	40			40	SC01		1	950		950	40		990
SB100			1	25	25			25	I A15		2	620		620			620
SB101		3	185		185			185	I C11		1	160		160			160
SB110						20		20	I F		1	150		150			150
SB111		1	210		210			210	I F12		1	665		665			665
SB116			1	25	25			25	I F14		1	45		45			45
SB124			2	20	20			20	I G2		1	140		140			140
SB126			1	70	70			70	I G8				1	15	15		15
SB129				2	20	20		20	I G10				1	15	15		15
SB136			610	8	115	725		725	I G12		1	70		70			70
SB147		1	325		325			325	I G18			2	45	45			45
SB149				1	25	25		25	I G21							5	5
SB168							55	55	I G22							40	40
SB173		1	110		110			110	I G23							5	5
SB178		1	50		50			50	I K			1	15		15		15
SB191		1	165		165			165	I K3		10		1	10	10		20
SB192	115	6	1215	52	1290	2505	50	5	2675	I K30			12	205	205		205
SB210		2	535		535	10		545	I K8		15						15
SB219				1	90	90		90	I P							5	5
SB253		2	35		35			35	I T		1	60		60			60
SB255				1	10	10		10	IR22			6	90	90			90
SB327			2	25	25			25	I V		1	80		80			80
SB336		1	320		320			320	IV21B			1	38	38			35
SB382		1	100		100			100	IV10		1	85		85			85
SB383	240	1	35	1	10	45		285	IX6		1	120		120			120
SB392							5	5	VH21							10	10
SB406		1	130		130			130	VH6							5	5
SB1006				1	130	130		130	VY3		15						15
SB1008	80							80	東		1	60	1	20	80		80
SB1014		2	380		380			380	西		1	765		765			765
SB1027						205		205	乙			1	56	56	25		80
SB1028		1	130		130			130	乙西			1	5	5			5
SB1035		1	90	1	5	95		95	乙西			1	25	25			25
SB1044									KZ		10						10
SB1046			1	35	35			35	YCZ							10	10
SB1047		1	230	1	60	290		290									
SB1051		2	115		115			115	總計	1115	17165	4515	21680	710	6305	51490	
SB1052				1	45	45		45									
SB1062				3	120	120		120									
SB1065				2	70	70		70									
SB1067		1	740		740			740									
SB1088		2	1075		1075			1075									
SB1206		1	260		260			260									
SB1210		參見	585	6	100	685	15	700									

第366表 遺構別鉄滓出土内容

や椀型滓が確認できない。滓は3～5mm大の円形状の塊と、5mm～1cm大の小枝状の塊とがあり、いずれも小さな気泡があり軽い。磁力がある例も若干認められるが多くない。灰色を呈し、茶褐色系のサビは認めることができない。鉄滓とともに1～2cm大の青灰色粘土塊が混合する。スサが混入しており、炉壁か鋳型の可能性がある。

SB54出土の鉄滓は、椀型滓類を含まず、非常に細かな滓という特徴がある。このことは、同遺構の滓が鋳造に関連する滓ではないかと予想させる。

### ③ SB81

SB81は8世紀前半に位置づけられる竪穴住居地で、床面中央部に2基の精錬あるいは鍛錬鍛冶炉が検出された。鍛冶炉周辺からは6510gの鉄滓類が採集されている。鉄滓は1～3cm大の鉄塊系遺物、3～4cm大の椀型滓の破片、発泡したガラス質の不純物が認められる外に1cm以下の細片が多量に採集されている。鍛造剥片および粒状滓も認められるが主体とはならない。滓の状況から、同建物内で行われていた鍛冶行為は、最終段階の鍛錬鍛冶というよりは、むしろ、精錬鍛冶工程の最終段階の可能性もある。

### ④ SB192

SB192は10世紀後半に位置づけられる竪穴住居地で、カマドの前に位置するピット周辺から細かな滓が多量に検出され、周辺床面直上から2点の椀型滓が出土している。滓を含んだ土壌は49.6kgとりあげられているが、諸々の事情でセパレーションが行えず、その内容は明らかでない。

カマド前のピットは遺構割付図(図版43)で土坑(SK545)として提示したが、同住居地ともなうピットと考えたい。ピットは特に被熱することはないが、埋土に炭化粒、焼土粒、鉄滓片、土器片が含まれていた。鍛錬鍛冶にかかわるピットであると思われるが、結果的に滓類が廃棄されていた。

### ⑤ SB1216

竪穴住居地の床面中央部に鍛錬鍛冶炉が検出されている。鉄滓は700gのみ採集されただけである。鍛冶炉の横には鍛冶台と想定されるフラットな面をもつ石が設定され、その前に楕円状の土壌が認められる。滓と炉の周辺の様子から簡単な鍛錬鍛冶を行っていたことが想定される。

## (4) 若干のまとめ

松原遺跡の古代集落面から採集された鉄滓を提示した。8世紀から12世紀に及ぶ当集落から出土した鉄滓の総重量は約5kgで、あまりにも少ない。その主体となる滓は椀型滓で、形状を残す例と打ち割られた例が存在し、流動滓に至ってはごくわずかであった。肉眼観察によるため確実ではないが、精錬鍛冶から鍛錬鍛冶に関連する滓が主体となろう。遺構と鉄滓の出土状況から、竪穴住居地内(工房)での鍛冶・鋳造に関連する行為の様相がつかめるのはSB81, SB192, SB1216等である。その多くが鍛錬鍛冶に関する施設であったに違いない。

松原遺跡は古代埴科郡英多郷(荘)に位置する。同じく埴科郡倉科郷に比定される現更埴市森、岡地地籍の清水製鉄遺跡は、製錬工程から鍛錬鍛冶工程に至るまで一貫して鉄生産を担った小規模な製鉄遺跡である。操業の時期は10世紀後半を前後する。当遺跡出土の鉄滓は約2t400kgで、長い間置かれた松原のムラから採集された約5kgの滓と比較すると、その量は比較にならない。同じく、埴科郡に位置する小規模な製鉄遺跡と集落の鉄滓を比べた場合、松原のムラの鉄関連遺物があまりにも少ないことが理解できる。松原遺跡のムラは9～10世紀を核とする。同じく埴科郡に位置する10世紀代の小規模な製鉄遺跡は、更埴市清水製鉄遺跡のほかに坂城町小山製鉄遺跡がある。小山製鉄遺跡では精錬鍛冶から鍛錬鍛冶工程が行われているが清水製鉄遺跡と同様に規模の小さな製鉄遺跡である。松原遺跡のムラにおける椀型滓を主体とする少量の鉄滓は、小規模な製鉄遺跡で生産された鉄素材あるいは製品が流通していたことを充分に察さ

せる。松原集落では必要最小限の加工を行っていたのであろう。

古代の長野盆地4郡内には、規模の大きな製鉄遺跡は明らかにされていない。郡内の当該期の集落では、鍛冶関連遺物、遺構が必ずしも多くはない。このことは、古代北信濃の鉄生産と流通という問題を考える際に重要である。現段階では長野盆地の古代鉄生産に関しては越後の鉄生産と関連づけて追究する必要もあろう。一方、10世紀に至ると、清水・小山製鉄遺跡のような小規模な製錬あるいは精錬鍛冶工程を行う製鉄遺跡が明らかとなってきた。律令体制の変換期における在来の鉄生産と流通に関しては今後、埴科郡内における松原や屋代のムラ、在来の小規模製鉄遺跡との関連を追究しなくてはなるまい。10世紀を前後するころの長野盆地における鉄生産あるいは鉄製品の生産と流通という問題に関しては、精錬鍛冶から鍛錬鍛冶に至るまで一貫して操業を行う小規模な製鉄遺跡と比較的規模の大きな集落内に位置づいている製鉄・鍛冶遺構の位置づけ、関連を複眼的な視点で読みとっていかなくてはならない。



## 8 文字関係資料

## (1) 墨書土器・筥書土器・刻書土器・刻印土器

本稿では、次のように4つに分類する。

墨書土器……文字・記号・絵画などを墨書きした土器。朱書のものもふくまれるが、本遺跡では確認できなかった。墨痕のあるものも、本稿では広義の意味でこれに含めた。

筥書土器……土器焼成前に、筥状工具もしくは釘状工具などにより、文字・記号・絵画などを器面に刻み記したものの。

刻書土器……土器焼成後に、釘状工具などにより、文字・記号・絵画などを器面に刻み記したものの。

刻印土器……土器焼成前に、印体を用いて、文字・記号などを器面に押印したものの。

以上のように分類した場合、本遺跡では、墨書土器145点・筥書土器24点（内2点は墨書と同一個体）・刻書土器3点（内1点は筥書と、1点は墨書と同一個体）・刻印土器1点が出土している。それらを第367～370表・図版299～310に示した。写真図版（PL131～136）にはおもなものを載せた。墨書土器については、焼物の種類・器種・墨書される部位・文字の向きなどを検討し、さらに遺構の時期（段階）や他の文字関係資料との関連を検討したい。次におもなものを取り上げる。

## SB56（図版299 PL131）

墨書土器2点。11は体部外面に記されているが、欠損部が多く文字は判読できない。12は灰軸陶器碗の底部外面に記されている。おそらく「天」の則天文字の「𠂔」の異体字「𠂔」の一部と思われる。内面は摩滅しており、転用碗として使用したと思われる。

## SB58（図版299 PL131）

墨書土器5点。いずれも黒色土器A杯Aの体部外面に記されている。14は「𠂔」と正位に記されており、15も小片であるが同じ文字の一部分と思われる。16と17は、文字は判読できない。13は「干」と記されている。干支の「干」とも考えられる。なお干支の「干」は「幹」のことを示すといわれている。

## SB87（図版310 PL137）

刻印土器1点。黒色土器A杯Aの底部外面に「𠂔」と押印されている。細い中空の丸棒で押印している。

## SB327（図版301・302 PL132）

本遺跡で確認された住居址のなかでもっとも多く33点の墨書土器が出土した。土器の種類は黒色土器A杯Aが30点・皿2点、灰軸陶器1点。墨書されている文字をみると、「𠂔」と記されているもの、あるいはそれと判読できるものが6点、「豊」が12点出土している。「𠂔」は「爲」という文字と考えられる。「爲」は「おこなう・つくる・成就する・実を結ぶ等」の意味があるが、ここでは何を意味するか不明である。習書文字と分類する場合もある。「豊」は吉祥を意味する文字であり、他の遺跡でもその出土が報告されている。ほかに「干」と判読できるものが1点。あとのものは小片や墨書が欠損しているため判読不能である。

## SB382（図版303 PL133）

墨書土器8点。土師器皿Aの2点(86・87)と黒色土器A杯Aの2点(83・84)には「中」と墨書されている。書き方は異なる。ほかに、85・88は欠損のため、89・90は墨痕の確認できる範囲を図示したが、判読できない。88は体部外面に筥書もみられる。

## SB395（図版302・309 PL132・137）

墨書土器1点、筥書土器1点。墨書は、黒色土器A杯Aの体部外面に2ヶ所、文字の大小はあるが同一文字を記している。一部形は異なるが、「主」という文字かと思われる。また、「正」の則天文字「𠂔」の異体字「𠂔」とも考えられる。筥書は土師器長胴形甕の胴部外面に記されているが、文字ではない。

## SB1060 (図版304・309 PL133・136)

墨書土器5点出土。そのうち1点には窠書も認められる。墨書土器4点(102~105)が同一文字「里」である。「里」はSB1003・SB1007・SB1026でも出土しており、いずれも同時期(5段階)の住居址である。須恵器杯A(106)の底部外面には「×」の窠書の上に「上」の墨書が記されている。その他に窠書土器が1点出土している。須恵器鉢(157)の体部外面に記されているが、文字というより記号かと思われる。

## SB1238 (図版306 PL134)

墨書土器1点出土。土師器耳皿の体部外面に正位で「ナ」とごく細く墨書されている。片仮名の「ナ」と思われる。なお、片仮名は平安初期に出現している。この耳皿は底部中央が穿孔されており、特別な用途があったと思われる。

## SD102 (図版307 PL134)

墨書土器7点出土。135は黒色土器A盤の体部外面に「里」と墨書されている。高台内には黒墨痕が認められる。138は土師器の杯Aで、体部外面に「大」と記されている。内面には黒墨の付着が認められる。140も土師器杯Aで、墨書が薄く確認できるが、文字は判読できない。内面には朱墨痕がみられる。138・137は黒色土器A杯A、139・141は土師器杯A。ともに墨痕の確認できる範囲を図示したが、一部あるいは大部分欠損しており判読不能である。

## 遺構外 (図版306・309 PL137)

墨書土器8点、窠書土器1点。128・129は灰釉陶器で、底部外面に墨書が認められるが判読できない。128は内面が転用硯として使われている。181はごく小さな破片で、先の尖った工具で窠書されている。文字は一部分のみで詳細は不明である。

## (2) 陶硯

SB1093の床面近くに円面硯が出土している(図版310 PL138)。硯部のうち縁部は一部欠損しているが、陸・海の部分は残存しており、陸は非常によく使用されていて鏡面のように光沢があり滑らかに摩滅している。脚部は大部分欠損しているが、上半分がわずかに残存している。櫛状沈線がぐるりと回り、透かしも3ヶ所確認できるが、その全容は不明である。在地産である。

## (3) 転用硯

ここでは、土器・陶器の一部分に明らかに使用による摩滅痕が認められるか、黒墨・朱墨が付着しているものを転用硯として一括した。摩滅の程度は[A:鏡面のように光沢があり非常に滑らかに摩滅している A:非常に滑らかな摩滅 B:滑らかな摩滅 C:摩滅の痕跡が認められるが、使用度はあまり高くはないと思われる D:摩滅の痕跡なし]に分類した。本遺跡で出土した転用硯は104点、うち摩滅痕が認められ恩として使用したものは80点、摩滅痕はないが墨が付着しているものは24点あり、第370表に示した。図版310~315・PL138・139にはおもなものを載せた。

転用硯として使用されている焼物の種類は、ほとんどが灰釉陶器で、おもに碗・皿が転用されている。瓶の体部片を使用している場合もある。ほかに須恵器の杯や壺・壺の破片も硯として転用している。碗の転用硯は体部を打ち欠いて形を整えて使用しているものが多い。瓶や壺などは使い易いように形を整え、座りを良くして使用している。土師器・黒色土器Aには摩滅痕はなく、墨の付着がみられ、墨溜めとして使用されたと考えられる。次におもなものを取り上げる。

## SB122 (図版312)

灰釉陶器の碗。底部内面は非常に滑らかに摩滅している。高台内には薄く黒墨の痕跡がみられる。また、

口縁部内外面には煤の付着が認められ、灯明皿としても使用されたと思われる。2/3近く欠損している。

**SB191 (図版312)**

灰釉陶器の皿および椀を転用したものが出土した。皿は、底部内面が滑らかに摩滅しており、外面高台内には朱墨の付着がみられる。約1/2を欠損する。椀は、底部内面に非常に滑らかな摩滅痕がみられる。また黒墨の痕跡が内面から割れ口の一部にも認められ、周囲を打ち欠いて形を整えて使用したと思われる。

**SB383 (図版310・311・313 PL138)**

11点出土。灰釉陶器の椀を転用したものが2点。ともに底部内面に滑らかな摩滅痕が認められ、黒墨の痕跡が残る。ほかに段皿と椀の小片には朱墨の付着がみられるが、摩滅痕は認められない。

須恵器を転用したものが7点出土している。174は壺の底部片。外面高台内に非常に滑らかな摩滅痕がみられ、黒墨の痕跡も認められる。体部を打ち欠いて座りを良くしている。大甕の体部片を利用したものが5点あり、同一個体の破片と思われる。内面が広範囲にわたって滑らかに摩滅している。177は、丸底の部分を利用しており、内面に摩滅痕が認められる。

**SB1207 (図版310 PL138)**

須恵器壺の胴部下半から底部にかけての破片を利用して。内面に滑らかな摩滅痕が認められる。

**井戸SK1034**

墨痕が認められるものが5点出土した。1点は灰釉陶器椀の体部小片で内面に朱墨が付着している。4点は灰釉陶器長頸瓶の体部小片で同一個体と思われる。内面と割れ口断面に朱墨が付着しており、1つには黒墨も認められる。

**SK26 (図版310)**

須恵器短頸壺の体部～底部の破片。内面および割れ口断面に朱墨が付着している。一時的な墨溜めか筆先を整えるために使用したと思われる。

**SK33 (図版315 PL139)**

灰釉陶器皿の底部内面と外面高台内が非常に滑らかに摩滅しており、高台内には薄く朱墨が付着している。口唇部が摩滅しており、完形の状態で使用したと思われる。約1/2が欠損している。

**SK44 (図版313)**

灰釉陶器椀。底部内外面に摩滅痕と黒墨痕が残っている。特に、外面は底部から体部下半にまで濃く黒墨の付着が認められ、割れ口にも付着している。焼成時に生じた高台のひび割れから染み出たと思われる。

**SK47 (図版311・312 PL138)**

2点出土。186は土師器杯Aで内外面に黒墨痕が認められる。内面の墨痕は墨溜めか筆先を整えるために使用した痕跡と思われる。外面の墨痕も墨書ではなく、筆先を整えるためか、あるいは不用意に付いてしまったものと思われる。188は灰釉陶器の肩部に耳の付いた短頸瓶の口縁部から体部にかけての破片を利用して。内面が滑らかに摩滅しており、黒墨の痕跡が残る。

**SK231 (図版312 PL138)**

2点とも土師器の小形の杯Aで、内面にべったりと濃く朱墨が付着しており、朱墨溜めとして使用されたと思われる。約1/2～1/3を欠損する。

**SD102 (図版307・313・315 PL134・139)**

7点出土している。229は灰釉陶器皿の底部片。内面に摩滅痕が認められる。また、底部の割れ口の段面も滑らかに摩滅しており、硯もしくは荒砥に再利用したものと思われる。201は灰釉陶器椀で底部内外面に摩滅痕が認められる。また、外面では底部全面にわたって高台部分および割れ口断面にまで濃く黒墨の付着がみられる。体部にも薄く黒墨の痕跡が認められる。墨溜めとしても利用したと思われる。体部を打ち

欠いて形を整え転用碗として使用したと思われるが、約半分近く欠損している。135は黒色土器Aの盤。脚内面に黒墨が濃く付着している。墨溜めか筆先を整えるために使用したと思われる。体部外面には「里」の墨書がある。138は土師器杯A。底部内面に黒墨の痕跡が認められる。一時的な墨溜めか筆先を整えるために使用したと思われる。体部外面に「大」の墨書がある。140は土師器杯Aで、内面の一部に朱墨の付着が認められ、体部外面には判読不能の墨書がある。その他2点は図版に載せなかったが、1点は灰釉陶器皿の底部片。内面に朱墨・黒墨が付着している。摩滅の痕跡は認められるが使用度は低い。もう1点は土師器杯A。内面全面に黒墨が付着している。まだら状に濃淡があり、欠損部も多く墨溜めかどうかはっきりしない。

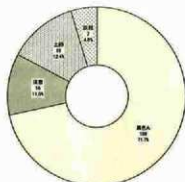
#### (4) 墨書土器について

松原遺跡では墨書土器が145点出土している。その内訳は住居址60軒127点、井戸址1基1点、土坑1基1点、溝址2条8点、遺構外8点である。本遺跡出土の墨書土器を土器の種類・器種・墨書される部位・文字の向きについてそれぞれまとめたものが第229～231図である。墨書される土器の種類は7割以上を黒色土器Aが占める。須恵器・土師器はそれぞれ1割近くで、灰釉陶器はわずかである。器種についてみると、杯Aが80%近くを占め、皿および碗が約8%、残り約5%は蓋やその他の器種である。また、杯Aのうち約76%が黒色土器Aである。墨書が記される部位は体部・外面がほとんどで、底部・外面が約5%、内面に記されているものは見つからなかった。底部・外面に記されている土器の種類は、灰釉陶器・須恵器杯Aである。体部・外面に記した土器のうち文字の方向がわかったもの88点についてみていくと、正位が63点約72%、右横位が19点約22%、左横位が3点3.4%、倒位が3点3.4%であった。

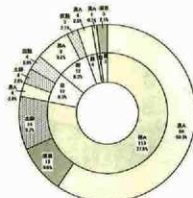
住居址出土の墨書土器の種類と器種について段階による推移をみていくと、4～5段階は須恵器に墨書したものが他段階に比して多く、6～7段階は圧倒的に黒色土器Aが多い。6段階では土師器も出てくるが、7段階になって多くみられるようになる(第233図)。この墨書土器の種類・量的推移は、食器の段階による構成比の推移とほぼ一致する。

次に住居址出土の墨書土器の段階別分布をみてみたい。(第232図)

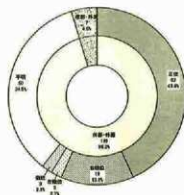
松原遺跡では3段階に墨書土器が出現し、6段階で最も多く63点出土し、7段階においても32点と出土数の多い傾向が見られるが、8段階以降、墨書土器出土量は減少する。また6～7段階では、墨書土器を出土する住居址数も多い。各段階の住居址軒数に占める墨書土器出土住居址軒数の割合をみていくと、6段階が50軒中19軒(38.0%)と最も多く、次いで5段階の14軒中5軒(35.7%)であった。7段階は住居址軒数が106軒と段階別の住居址軒数の中で最も多いため16軒、15.1%であった。なお、6段階ではSB327の33点、7段階ではSB382の8点など、複数の墨書土器を出土する住居址も出現する。すなわち本遺跡では、8



第229図 墨書が施される焼き物の種類

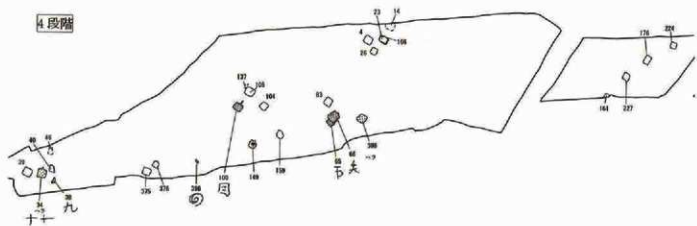


第230図 墨書が施される器種

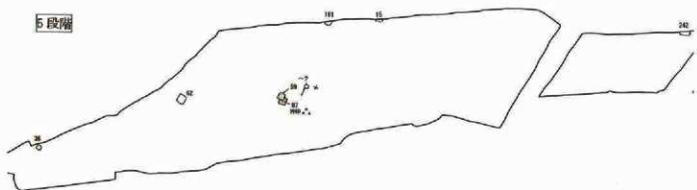


第231図 墨書が施される部位・墨書の向き

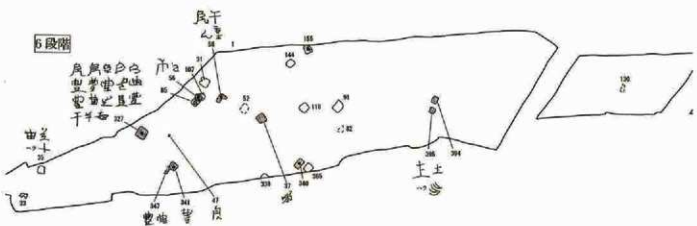
4段階



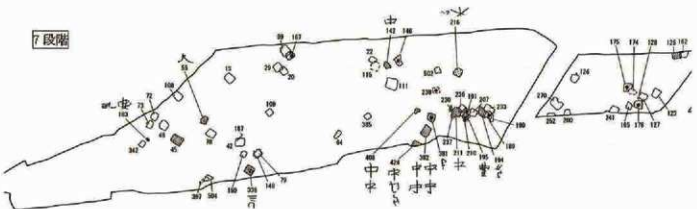
5段階



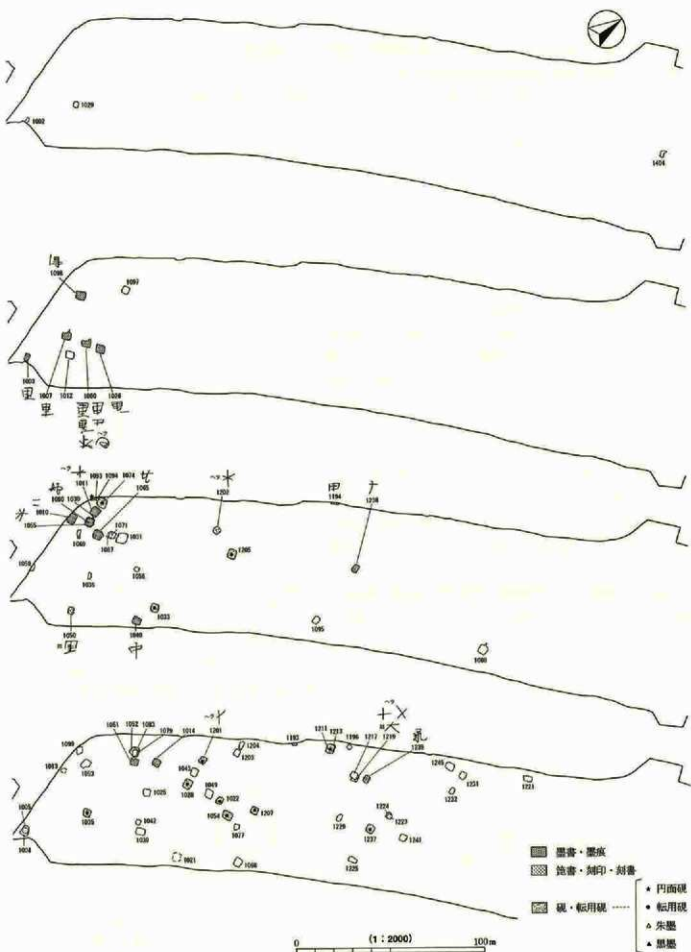
6段階



7段階







第232図 文字関係資料出土住居址分布図

世紀後半に墨書土器が出現し、9世紀中頃～10世紀前半に盛行しその後急速に減少していくといえる。この傾向は篠ノ井遺跡や松本平の吉田川西遺跡などにもみられる。

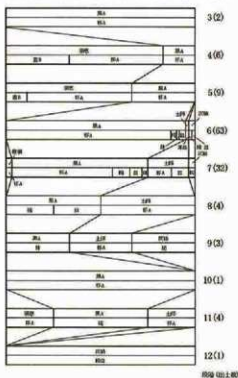
さらに墨書される字句と墨書土器の分布についてみていく。本遺跡出土の墨書土器に記された字句は、判読できたもので19種類あった。また、「豊」・「夙」・「中」・「里」のようにひとつの住居址から同一文字が複数体出土するものもある。墨書の字句はほとんどが一個体に対し一文字であるが、SB395のように同一文字を2ヶ所記したもののや、あるいはSB1051のように文字は判読できなかったがおそらく異なる字を3ヶ所以上体部に記したのものもある。

墨書土器は3段階から出現するが、1軒の住居址で覆土からの出土であった。4段階では5軒の住居址から6点出土した。それぞれ異なる文字が記されている。

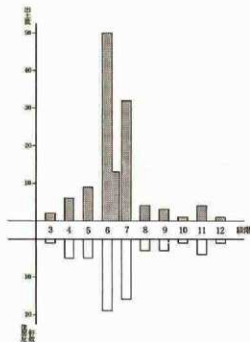
5段階では5軒の住居址から9点出土している。墨書の文字は7点が同一文字「里」で、SB1060からは4点出土している。また「里」を出土した住居址は4軒で、調査区の中央部に集中している。「里」の字をみると、画数が一つ多いものや細部は違うが文字全体の形が同じといったものが多い。SB1098からは「得」と記された須恵器の蓋が出土している。「得」は吉祥語と思われる。「里」は習書文字と捉えるのか、集中して出土していることから特別な意味(たとえば「やしき」など)をもっているのか、不明である。

6段階になると墨書土器が急増し、出土住居址数も最多となる。特にSB327からは33点も出土している。墨書される文字は「夙」・「豊」が多数、しかも出土住居址も調査区北西部に集中している。「夙」は「爲」という文字と考えられ、「夙」・「豊」は吉祥を意味すると思われる。なお、「夙」は他の遺跡では類例がなく(「為」は出土例がある)、文献にもないが、「爲」の篆書体の影響を受けていると思われる。

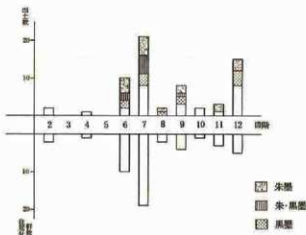
7段階は6段階に次いで墨書出土数及び出土住居址数も多い。墨書される文字は「中」が複数出土している。また出土住居址



第233図 墨書が施される焼物と器種の推移



第234図 墨書土器出土数と出土住居址数の推移



第235図 転用瓦出土数と出土住居址数の推移

も6段階より調査区中央寄りに集中している。「中」の字は大きさをあらわすものとして考えられるが、この場合、同段階に「中」が集中出土し、かつ出土住居址も集中していることから違った意味がある(たとえば、「まんなか」の意)と思われるが詳細は不明である。

8段階以降、墨書土器出土数は急激に減少していく。

墨書される文字のうち、「豊」・「中」や先に述べた「里」のように、詳細に見ていくと画数が多いものや、細部が違っているが文字全体の雰囲気と同じであるものがいくつか見られる。文字というより集団の中で記号・符号として使ったとも考えられる。6段階の住居址、SB56から出土した灰軸陶器碗の墨書文字は先に述べたように則天文字の異体字として捉えた。文献によると、「則天文字は中国唐の時代に689年第一次制定がなされ、その後数回追加制定され、705年廃止された。日本には8世紀初頭の大宝遣唐使の帰朝によりもたらされ、中国で廃止された後も日本では使われている。則天文字の墨書はほとんどが本州東部・北部に見られ、概ね8～9世紀の土器に墨書されており、土器に墨書された則天文字はいわゆる文字としてではなく、識別記号としての意味を持つ」と述べられている。SB56は9世紀半ばに比定され、出土した灰軸陶器は光ヶ丘1号窯式の碗である。時期的にみても則天文字が出現している。この灰軸陶器に書かれた墨書も吉祥句・呪句として、記号の意味を持っていると考えられる。

墨書土器と筧書土器・刻書土器との関連については筧書土器・刻書土器の出土量が少なく、特にこれといったことは言えない。段階別にみていった場合、筧書土器・刻書土器は6段階を境にそれ以前は須恵器にみられ、以降は土師器に多くみられる。筧書は「+」・「×」などの記号が半分以上で、文字は「中」・「生」と不明文字2点であった。筧書は焼成前に記したものであり、「+」・「×」は窯印とみてよいと思われる。他の文字は何か意図があったかと思われるが、詳細は不明である。刻書の「里」・「大」は墨書と同じに捉えてみた。「里」は6段階の住居址の覆土から、「大」は7段階の住居址の床面及び覆土から出土している。

墨書土器と転用硯との関連を見ていく。住居址出土の転用硯個体数を段階別に示したものが第235図である。転用硯は2段階に出現するがごくわずかで、須恵器を転用したものである。6段階から灰軸陶器を転用したものが出現し、後の段階までこの傾向は続く。墨書土器を出土した住居址のうち、転用硯を伴する住居址は墨書土器の出土数が多い6・7段階で、それぞれ10軒中4軒、19軒中3軒である。

墨書土器が盛行する段階に転用硯も広範囲に分布するということが言えるが、それ以上の関連は特にない。なお、朱墨の転用硯が6段階から出現してくるが、前述したように本道跡では朱墨による墨書は見つからなかった。

#### 参考文献

- 岡田正彦 1978 「信濃の墨書・刻書土器」『中部高地の考古学』長野県考古学会  
 玉口時雄 1980 「転用硯考」『古代探観』早稲田大学出版部  
 斎藤忠・玉口時雄・佐藤次男ほか 1987 「特集考古学出土文字」『季刊考古学』18 雄山閣  
 小山岳夫 1987 「墨書土器について」『高師町・西久久保』佐久市教育委員会  
 (財)長野県埋蔵文化財センター 1989 「中央自動車道長野緑線埋蔵文化財発掘調査報告書3一塩尻市内の2一古田川西遺跡」  
 平川南・天野努・黒田正典 1989 「古代集落と墨書土器―千葉頭八千代市村上込の内遺跡の場合―」『国立歴史民俗博物館研究報告』22  
 平川南 1991 「墨書土器とその字形―古代村落における文字の真相―」『国立歴史民俗博物館研究報告』35  
 藏中達 1995 「則天文字の研究」翰林書房  
 (財)長野県埋蔵文化財センター 1997 「中央自動車道長野緑線埋蔵文化財発掘調査報告書16篠ノ井遺跡群」  
 望月静雄 1999 「古代村落における文字の使用―飯山地方の墨書土器―」『高井』122

第367表 墨書土器一覽表

出土遺構	段階	土器の種類	器種	部位	向き	記載内容	備考	図版No.	写真Pt.No.
SB11	不明	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	□	「曲」あるいは「虚」か?	299-1	
SB17	10	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	299-4	
SB35	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	豆	「豆」の「豆」の部分か?	299-2 (2)	
SB35	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	側位	甘	「豊」の一部	299-3	
SB37	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	粥	SB327-63と同じ文字か?	299-5	131
SB38	4	須恵器	杯A	体部・外面	右横位	九	「九」	299-6 (11)	131
SB45	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	299-8	
SB45	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	299-7	
SB47	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	□	文字不明	299-9	
SB47	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	頁	「頁」か?	299-10	131
SB55	7	土師器	杯A	体部・外面	正位	大	「大」	300-18	131
SB56	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位?	□	文字不明	299-11 (4)	131
SB56	6	灰輪陶器	椀	底部・外面	—	示	別天文字の「示」か? 転用説	299-12 (14)	131
SB58	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	凡	「凡」 「爲」か?	299-14	131
SB58	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	□	文字不明	299-16	
SB58	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	干	「干」	299-13	131
SB58	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	299-17	
SB58	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	凡	「凡」の一部	299-15	
SB65	4	須恵器	蓋B	体部・外面	右横位	下	文字不明	300-19 (8)	
SB66	4	須恵器	蓋B	体部・外面	左横位	失	「失」か? 「矢」の異体字か?	300-20	131
SB100	4	須恵器	杯A	底部・外面	—	目	「目」	300-21	131
SB100	4	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	300-22 (1)	
SB101	8	土師器	杯A	体部・外面	正位?	白	文字不明	300-23 (22)	
SB101	8	黒色土器A	鉢	体部・外面	?	?	墨痕	300-24 (40)	
SB114	8	土師器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	300-25 (11)	
SB125	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	300-26 (14)	
SB129	(11)	黒色土器A	椀	体部・外面	?	?	墨痕	300-30	
SB142	7	軟質須恵器	杯A	体部・外面	正位	中	「中」	300-28 (12)	
SB142	7	黒色土器A	皿A	体部・外面	正位?	山	文字不明	300-29 (4)	
SB179	11	土師器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	300-31	
SB183	7	灰輪陶器	椀	底部・外面	—	示	文字不明	301-36	131
SB183	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	豊	「豊」の一部か?	301-34	131
SB183	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	□	文字不明	301-35	
SB194	7	黒色土器A	椀	体部・外面	?	?	文字不明	300-27	
SB195	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	豊	「豊」	300-32	
SB211	7	黒色土器A	皿B	体部・外面	正位	中	「中」	300-33	
SB327	6	灰輪陶器	皿	底部・外面	—	示	文字不明	301-58 (38)	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	凡	「凡」	301-38 (3)	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	凡	「凡」	301-41 (8)	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	豊	「豊」の一部か?	301-46 (11)	
SB327	6	黒色土器A	皿	体部・外面	?	?	墨痕	301-55	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	中	「豊」の一部	301-47	132
SB327	6	黒色土器A	椀	体部・外面	右横位	豊	「豊」	301-42 (29)	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	凡	「凡」の一部	301-39	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-69	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位?	豊	「豊」の一部か?	301-49	

出土遺構	段階	土器の種類	器種	部位	向き	記載内容	備考	図版No.	写真P.No.
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	白	「内」の一部か?	301-37	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	黒	「豊」	301-43	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-60	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	白	「豊」	301-44	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位?	白	「豊」の一部か?	301-48	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-61	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	白	「内」の一部	301-40	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	黒	「豊」の一部	301-53	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-67	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	倒位	中	「豊」の一部	301-51	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	白	「豊」の一部か?	301-52	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	干	「干」	301-56	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	豊	「豊」	301-54	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-64	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-65	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位?	ノ	「内」の一部か?	301-45	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	干	SB37と同じ文字か?	301-57	132
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-68	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-69	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-63	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	中	「豊」か?	301-50	
SB327	6	黒色土器A	皿	体部・外面	?	?	墨痕	302-66	
SB327	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	?	墨痕	302-62	
SB334	不明	土師器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-70	
SB336	7	土師器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-72 (5)	
SB336	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位?	白	文字不明	302-71 (8)	132
SB341	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	豊	「豊」の一部	302-74	
SB343	12	灰輪陶器	段皿	体部・外面	?	?	墨痕	302-73 (1)	
SB347	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	中	「豊」の一部	302-77	132
SB347	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	豊	「豊」	302-78	
SB347	6	黒色土器A	施	体部・外面	右横位	□	文字不明(「豊」か?)	302-76	
SB347	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	□	文字不明	302-75	
SB374	3	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	豊	「豊」か?	302-79	
SB374	3	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	302-80	
SB381	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	左横位	中	「内」の一部	303-91	
SB382	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	中	「中」	303-84 (26)	
SB382	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位	中	「中」	303-83 (31)	133
SB382	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	□	文字不明 施書あり	303-88	
SB382	7	黒色土器A	片口鉢	体部・外面	右横位	□	文字不明	303-89 (43)	
SB382	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位?	□	文字不明	303-85 (17)	
SB382	7	土師器	皿A	体部・外面	正位	中	「中」	303-86 (12)	133
SB382	7	土師器	皿A	体部・外面	正位	中	「中」	303-87 (13)	133
SB382	7	土師器	杯A	体部・外面	左横位?	□	文字不明	303-90 (4)	
SB394	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	□	文字不明	303-92	
SB395	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位/正位	主/主	同一文字大小2つ「主」か?	302-81 (2)	132
SB398	4	須恵器	杯A	体部・外面	正位?	中	文字というより記号か?	302-82	132
SB408	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位/?	中/?	「中」/墨痕	304-93	133



## 第4章 古代の調査

出土遺構	段階	土器の種類	器種	部位	向き	記載内容	備考	図版No.	写真No.
SB408	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	304-95	
SB408	7	黒色土器A	椀	体部・外面	右横位	中	「中」	304-94	133
SB424	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	中	「中」	304-97	133
SB424	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	304-96	
SB424	7	黒色土器A	椀	体部・外面	?	?	墨痕	304-98	
SB1003	5	須恵器	杯A	体部・外面	正位	里	「里」か?	304-100	133
SB1007	5	須恵器	杯A	体部・外面	正位	里	「里」か?	304-101	
SB1010	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位?	二	文字不明	305-108 (4)	134
SB1011	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	右横位?	□	文字不明	305-107	
SB1014	7	土師器	皿A	体部・外面	右横位?	□	文字不明	305-110	
SB1026	5	須恵器	杯A	体部・外面	正位	里	「里」か?	304-99 (7)	133
SB1038	11	須恵器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	305-119	
SB1040	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	中	「中」	305-111	
SB1046	9	灰輪陶器	椀	体部・外面	?	?	墨痕	305-118	
SB1047	9	土師器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	305-120	
SB1050	6	黒色土器A	片口鉢	体部・外面	?	?	墨痕	305-116	
SB1050	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕 「里」の刻書あり		
SB1051	7	土師器	杯A	体部・外面	正位	□/□/□	3ヶ所あり 文字不明	305-112 (8)	
SB1056	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	才	文字不明	305-109	
SB1060	5	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	里	「里」か?	304-105 (12)	133
SB1060	5	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	里	「里」か?	304-104 (11)	133
SB1060	5	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	里	「里」の一部か?	304-102	133
SB1060	5	須恵器	杯A	体部・外面	正位	里	「里」か?	304-103	133
SB1060	5	須恵器	杯A	底部・外面	—	上	墨書の下に「×」の陰書あり	304-106 (18)	133
SB1066	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位?	女	文字不明	305-114 (8)	
SB1066	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	305-113	
SB1076	9	黒色土器A	鉢	体部・外面	?	?	墨痕	305-117	
SB1080	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	好	文字不明 (「好」か?)	306-122 (9)	134
SB1098	5	須恵器	蓋B	体部・外面	正位	得	「得」	305-115 (11)	134
SB1194	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	里	「里」の一部か?	306-121 (4)	
SB1212	11	黒色土器A	椀	体部・外面	?	?	墨痕	306-126	
SB1223	8	黒色土器A	椀	体部・外面	倒位	解	「解」(「解」の俗字)	306-124	134
SB1238	6	土師器	耳皿	体部・外面	正位	ナ	「ナ」	306-123	134
SB1239	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	花	文字不明	306-125	
井戸SK84		黒色土器A	椀	体部・外面	正位	忠	「忠」か?	306-127 (7)	134
SK47		土師器	杯A	体・底・外面	?	?	墨痕 内面墨痕めか?	312-186 (5)	
SD102-V E		土師器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	307-141	
SD102-V D		土師器	杯A	体部・外面	正位?	□	文字不明	307-139 (4)	134
SD102-V J		土師器	杯A	体部・外面	正位	大	「大」 内面黒墨付着	307-138 (67)	134
SD102-V J		土師器	杯A	体部・外面	?	□	文字不明 内面生墨付着	307-140 (65)	
SD102-V X		黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	307-137 (80)	
SD102-V D		黒色土器A	盤	体部・外面	正位	里	「里」 高台内黒墨付着	307-135 (32)	134
SD102-V E		黒色土器A	杯A	体部・外面	?	□	文字不明	307-136 (57)	
SD1009-I 層		須恵器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	307-142 (4)	
遺構外 I K4		黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	306-132	
遺構外 I K4		須恵器	杯A	体部・外面	正位	?	墨痕	306-133	
遺構外 I K4		灰輪陶器	皿	底部・外面	—	□	文字不明 内面転用痕・墨墨	306-128	

出土遺構	段階	土器の種類	器種	部位	向き	記載内容	備考	図版No.	写真PLNo.
遺構外 I K8		黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	306-134	
遺構外 I E3		黒色土器A	杯A	体部・外面	?	?	墨痕	306-131	
遺構外 II N6		灰釉陶器	段皿	底部・外面	—	?	墨痕	306-129	
遺構外西Z		黒色土器A	杯A	体部・外面	正位	中	「中」	306-130	
遺構外Z		須恵器	杯A	体部・外面	?	?	墨痕		

第368表 甕書土器一覧表

出土遺構	段階	土器の種類	器種	部位	向き	記載内容	記載方法	備考	図版No.	写真PLNo.
SB34	4	須恵器	蓋B	体部・外面	正位	十	線		308-145 (17)	135
SB34	4	須恵器	壺	体部・外面	正位	十	線		308-144 (33)	135
SB35	6	須恵器	甕	口縁部・外面	正位?	十	細ヘラ		307-143 (29)	
SB59	5	須恵器	杯A	底部・内面/外面	—/—	メ/P	線	外面「戸」	308-146 (4)	135
SB124	8	灰釉陶器	段皿	底部・外面	—	1	ヘラ		309-164 (1)	137
SB143	8	土師器	長胴形甕	体部・外面	正位	十	細ヘラ	一部欠損	309-156	136
SB216	7	土師器	小形壺	体部・外面	倒位	十	線	一部欠損	308-150 (18)	136
SB382	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	?	—	細ヘラ	墨書(文字不明)あり	303-88	
SB388	4	土師器	杯A	体部・外面	正位	1	細ヘラ		309-163 (2)	136
SB395	6	土師器	長胴形甕	体部・外面	正位	十	細ヘラ	一部欠損	309-158	137
SB1011	6	須恵器	短頸壺	体部・外面	?	水	線		309-154	136
SB1060	5	須恵器	鉢	体部・外面	正位	10	細ヘラ		309-157 (46)	136
SB1060	5	須恵器	杯A	底部・外面	—	十	細ヘラ	造書の上に墨書「上」あり	304-106 (18)	133
SB1099	9	黒色土器A	壺	体部・外面	正位	十	細ヘラ	「生」一部欠損	309-162	137
SB1201	7	土師器	長胴形甕	体部・外面	正位	十	細ヘラ	一部欠損	308-148 (21)	135
SB1202	6	土師器	長胴形甕	体部・外面	正位	十	細ヘラ	一部欠損	308-149	135
SB1219	7	黒色土器A	杯A	底部・外面	—	十	細ヘラ	体部に刻書「大」あり	308-153 (3)	136
SB1219	7	土師器	長胴形甕	口縁部・内面	横位	十	細ヘラ		308-147 (8)	135
SB1226	9	土師器	長胴形甕	体部・外面	?	十	細ヘラ	一部欠損	309-155 (25)	
SB1246	8	土師器	小形壺	体部・外面	倒位?	十	細ヘラ	2文字か? 一部欠損	309-159 (26)	137
SK52		黒色土器A	鉢	底部・外面	—	中	線	「中」	309-160	137
SD02②-A		須恵器	杯A	底部・外面	—	十	ヘラ	一部欠損	308-152	136
SD02②-1		須恵器	杯A	体部・外面	横位	十	細ヘラ	内面転用現	308-151 (19)	135
遺構外 II X6		黒色土器A	杯Aか壺	体部・外面	正位?	十	線	一部欠損	309-161	137

第369表 刻書・刻印土器一覧表

出土遺構	段階	土器の種類	器種	部位	向き	記載内容	記載方法	備考	図版No.	写真PLNo.
SB87	5	黒色土器A	杯A	底部・外面	—	十	押印		310-167 (4)	137
SB1050	6	黒色土器A	杯A	体部・外面	倒位	大	線刻	「里」 墨痕あり	310-165	137
SB1219	7	黒色土器A	杯A	体部・外面	倒位	大	線刻	「大」 底部に甕書あり	308-153 (3)	136
SK26		須恵器	杯A	底部・内面	—	十	線刻		310-166	137

## 凡例

- ・段階区分は出土遺構の時期区分(段階)である。
- ・文字の向きは、土器が使用される状態で置いた場合
  - 文字が正位になるもの……………「正位」
  - 文字が逆さになるもの……………「倒位」
  - 文字が右横に傾いているもの……………「右横位」
  - 文字が左横に傾いているもの……………「左横位」

とした。蓋の場合は中心に向かう方向を正位として考えた。

- ・記載内容は、文字と推定できるが判読できないもの……「□」

墨痕……「?」

と記した。

- ・図版No.の( )内数字は「図版古代土器実測図」の図に付されたNo.である。

第370表 陶器・灰用磁一覽表

出土遺構	調査	陶器の種類	器種	灰用等種類	使用部分	採掘位置	製作部分	土質の性質	備考	形式	図紙No.	写真No.
SB1093	6	須恵器	円蓋	—	A	A	底面	黒	胴部に横割・透かしあり	丸蓋	310-168	(9)
SB56	6	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・外面	朱	底面・外面に墨書あり	光ヶ丘1	299-12	(14)
SB58	6	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面/外面	B/A	底面・内面	朱	底面・内面に墨書あり	黒蓋14	312-190	138
SB85	6	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	D	底面・内面	朱	底面・内面に墨書あり	光ヶ丘1		
SB95	12	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		光ヶ丘1	314-207	(78)
SB116	10	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	A	底面・内面	黒		成瀬山	314-208	(77)
SB116	10	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		成瀬山	310-175	(7)
SB121	2	須恵器	杯	碗	底面・内面/外面	C/B	底面・外面	黒	打明皿	大原2	312-192	(40)
SB122	8	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	D	底面・内面	朱		光ヶ丘1		(1)
SB145	11	灰釉陶器	皿	碗	底面・内面	A	底面・内面	黒	体部～胴部片	大原2か成瀬山		(2)
SB146	7	灰釉陶器	皿	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		光ヶ丘1	310-171	(7)
SB149	4	須恵器	蓋	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		光ヶ丘1	314-203	(1)
SB165	6	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	D	底面・内面	朱		光ヶ丘1	313-193	
SB167	7	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		光ヶ丘1		(1)
SB175	7	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	朱		光ヶ丘1		(2)
SB178	7	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	A	底面・内面	黒		黒蓋90	312-227	(3)
SB183	7	灰釉陶器	皿	碗	底面・内面	B	底面・内面	朱		光ヶ丘1		(2)
SB183	7	灰釉陶器	皿	碗	底面・内面	B	底面・内面	朱		光ヶ丘1		(6)
SB189	7	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	C	底面・内面	朱		光ヶ丘1		(1)
SB191	7	灰釉陶器	皿	碗	底面・内面	A	底面・内面	黒		光ヶ丘1	312-191	(17)
SB191	7	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	A	底面・内面	黒		光ヶ丘1		(21)
SB210	7	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	朱		大原2	312-189	(39)
SB217	12	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	D	底面・内面	朱		光ヶ丘1	314-217	
SB238	(7)	灰釉陶器	飯皿	碗	底面・内面	A	底面・内面	朱		大原2	315-223	
SB327	5	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	A	底面・内面	朱	配属品としては定形不明	不明	314-204	(36)
SB327	5	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	D	底面・内面	朱		不明		(16)
SB336	7	黒土器	碗	碗	底面・内面	C	底面・内面	黒		不明	314-218	
SB340	6	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	A	底面・内面	朱		光ヶ丘1	315-219	(2)
SB341	6	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	朱		光ヶ丘1	314-218	(1)
SB343	12	灰釉陶器	飯皿	碗	底面・内面	B	底面・内面	朱	住居劣形	光ヶ丘1	315-218	(2)
SB381	7	灰釉陶器	皿	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		成瀬山	313-194	(188)
SB383	12	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		丸石2		(186)
SB383	12	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	B	底面・内面	黒		丸石2		(193)
SB383	12	灰釉陶器	碗	碗	底面・内面	D	底面・内面	朱		丸石2		
SB383	12	須恵器	蓋	碗	底面・外面	A	底面・外面	黒			310-174	138
SB383	12	須恵器	蓋	碗	底面・内面	A	底面・内面	黒	体部片		311-176	138

出土遺構	段階	土器の種類	器種	転用や専用	使用部分	跡風速	懸け位置部分	土の種類	備考	型式	図版No.	写真No.
SB383	12	須恵器	甕	破	底部・内面	B			体部片		311-178	
SB383	12	須恵器	甕	破	底部・内面	B			体部片		311-179	
SB383	12	須恵器	甕	破	底部・内面	C			体部片			
SB383	12	須恵器	甕	破	底部・内面	C			体部片			
SB383	12	須恵器	甕	破	底部・内面	B			丸底部の破片		311-177	
SB421	11	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	A				丸石2		
SB1017	8	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	C	底部・外面/蓋部・内面	朱		光ヶ丘1		(28)
SB1022	7	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	B				丸石か焼原山	315-220	139
SB1027	12	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	B			ほぼ完整	光ヶ丘1	315-209	
SB1028	7	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	B				光ヶ丘1か大塚2	314-212	
SB1033	6	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	C	底部・内面	朱		光ヶ丘1	314-205	139
SB1035	7	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	B	底部・内面	黒		鹿嶋山	315-225 (148)	
SB1046	9	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	A				光ヶ丘1か大塚2	315-224 (147)	139
SB1046	9	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	A				不明		
SB1046	9	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	A				不明		
SB1046	9	土師器	杯A	破	底部・内面	D			体部～底部片		312-187	
SB1047	9	灰輪陶器	甕	破	内面	B				光ヶ丘1	314-211	
SB1054	7	灰輪陶器	甕	破	底部・外面/外面	A/B	底部・内面/外周	黒/朱		光ヶ丘1	313-196	
SB1054	7	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	C				不明		(51)
SB1074	6	灰輪陶器	甕	破	内面	B				大塚2	315-226 (16)	
SB1201	7	灰輪陶器	甕	破	内面	B				光ヶ丘1	313-197	
SB1205	6	灰輪陶器	甕	破	底部・内面/外面	B	底部・内面/外面	黒/朱			312-173 (8)	138
SB1207	7	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	A					312-184 (7)	
SB1209	11	土師器	杯A	朱塗器?	底部・内面	D				光ヶ丘1	313-199	
SB1211	7	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	B	底部・内面/外面	黒/朱			310-169 (2)	
SB1235	2	須恵器	杯A	破	底部・内面	B				光ヶ丘1?	314-205 (10)	139
SB1236	9	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	B					315-222 (12)	139
SB1237	7	灰輪陶器	甕	破	底部・内面	A	底部・内面～割れ口	朱・黒		大塚か焼原山	315-230 (19)	
SB1401	9	灰輪陶器	甕	破	内面	B				光ヶ丘1		
井戸SK1034		灰輪陶器	長頸甕	破	内面・割れ口	D			体部片4コ	不明		
井戸SK1034		灰輪陶器	甕	破	内面	D			体部片			
SK03		灰輪陶器	甕	破	底部・内面	B				鹿嶋山		(7)
SK026		須恵器	短頸甕	朱塗器?	底部・内面	D	内面～割れ口	朱			310-172 (1)	
SK33		灰輪陶器	甕	破	底部・内面/外面	A/A'	内面/外面(高台内)	朱		光ヶ丘1	315-221 (3)	139
SK44		灰輪陶器	甕	破	底部・内面/外面	B/A	底部・内面/外面	黒/黒		大塚2	313-198 (1)	
SK47		灰輪陶器	短頸甕	破	体部・内面	A	体部・内面	黒		不明	311-180 (11)	138
SK47		土師器	杯A	破	内面	D			体部～底部外面面痕あり		312-186 (5)	







## 第5章 中世以降の調査

### 第1節 平坦面に展開する遺構群

#### 1 溝址

中世以降に相当する溝址は10条検出・調査された。なお、図版中、遺構番号に下線が引かれているものが中世以降の所産と判断された遺構である。溝址については、時期判断が困難で、機能・性格についても情報量が少ないため判然としないものが多い。ここでは、機能・性格等についてある程度推測可能な溝址について取り上げ、説明を加えることとする。

#### SD15 (図版8・49・51)

L字状に折れ曲がる溝址で、検出面での幅3m、深さ1.05mを測り、薬研状の断面形を呈している。多くを調査区外に包蔵すると推測されるが、規模・形状から居館址の周囲を取り囲む溝である可能性が指摘されよう。古代の土器等に混じって、量的には少ないものの、13世紀後半から15世紀に相当すると考えられる珠洲産掘り鉢・在産須恵質掘り鉢・カワラケ・内耳鍋・白磁皿などが出土している。

#### SD1019・1168及びSX1001 (図版9～12・58・59・62・80等)

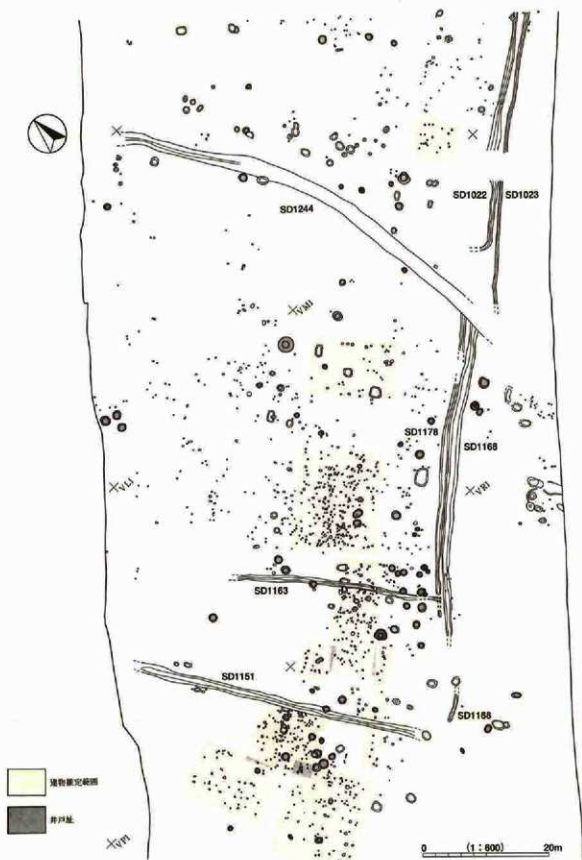
SD1019及びSD1168は調査年度・地区が異なっていたため一貫した調査とはならなかったが、本来は同一の溝址である。SX1001についてはSD1019上面の集石帯に付した遺構番号で、遺構図版作成に際してはSD1019に一本化しているため表記されていない。

本址は、途中断続はあるものの、東地区のほぼ全域を北東-南西方向に縦断する溝址であり、上面に集石を伴う部分が検出されることから、道路址と把握される。ただし、掘り方部(=溝)が道路の側溝に相当するののか整地址と見るのかについては検討の余地があり、現状では判断しかねる。調査以前には長野電鉄河東線を横断し、鳥内峠方向に延びる農道があり、本址はこの農道と位置的に見ても重複する。したがって、この農道は本址が時代を重ね、脈々と利用されてきた所謂古道とすることができる。

また、東地区における遺構の分布状況は本址を基軸とした遺構配置を推測させる。それは多数検出されたピット群であり、墓址群であり、直交または平行する溝址である。ピット群については掘立柱建物址として明確に把握できなかったが、本址と直交または平行する軸で列状の分布が捉えられることから、柱間や規模等については不明ながらも複数の建物址が存在していたことが指摘できよう(第236図)。これらについては居住域と把握され、複数の井戸址を伴っている。墓址群については、本址を中心として3群が確認される(図版58, 第238・241図)。時期的な先後関係が認められるものもあるが、群単位で考えた場合には何等かの意識が働いていたことが十分推測される。本址と直交または平行する溝址については、それらの組み合わせによって村落景観が形成されていたことが理解される。なお、本址と直交する溝址及び平行する溝址には以下のものがある。

#### 〈直交〉

SD1004:白磁口はげ皿(IX類)



第236図 推定される掘立柱建物址の位置とその他の遺構分布図

SD1151：内耳鍋（16世紀），唐津碗，伊万里皿

SD1163：内耳鍋（15～16世紀）

〈平行〉

SD1003：龍泉窯系青磁碗（I-1類），古瀬戸瓶類（灰釉）

SD1007：珠洲播り鉢（珠洲Ⅲ・Ⅳ期）

SD1022：龍泉窯系青磁碗（I-5b類）

SD1023：出土焼物なし

SD1178：珠洲播り鉢（珠洲Ⅲ・Ⅳ期），常滑捏ね鉢（常滑5・6期）

出土した焼物は、14世紀から17世紀後半に相当すると考えられる珠洲産播り鉢、在地産須恵質播り鉢、在地産瓦質播り鉢、内耳鍋、常滑産壺、天目茶碗、唐津産碗などである。こうした遺物の他、ウマの骨が1頭分出土している（PL20）。遺棄されたものか、埋葬されたものか判断としないが、出土状況から判断されるウマの姿勢は埋葬されたもの（第243図）とほぼ同様であり、埋葬行為が伴っていたことが推測される。本址と重複する可能性も考えられるSK1944（第242図）についても同様で、単独か、本址覆土中か慎重に検討する必要がある。

## SD1244（図版12等）

現在の市道松代東63号線と重複及び平行する溝址で、SD1019と同様に道路址と想定される。出土した焼物は18～19世紀に相当するものが主体で、伊万里、瀬戸美濃新築焼、松代焼に混じって、15世紀代の珠洲産播り鉢、在地産土師質播り鉢、内耳鍋が出土している。なお、市道松代東63号線の改良事業に伴う発掘調査が長野市教育委員会により実施されたが、本址と繋がる溝址は確認されていない。

## 2 墓址（第237～243図，第371表）

本遺跡は全時代を通じて骨等の遺存状況が良好であり、したがって、人骨の遺存する土坑を墓址と把握し、墓址としての属性を備えるもの人骨が出土しないものについては土坑と判断した。

平坦面に構築された中世以降の墓址は26基で、土葬墓を主体とし、改葬墓・火葬墓が確認される。その他、火葬施設、イヌ・ウマの埋葬施設が検出されている。

23基検出された土葬墓の埋葬姿勢は、SK1032の伸展葬を除きすべて屈葬で、遺体上に巨礫を乗せる例や遺体上を集石で被覆する例が認められる。これらの石が墓の上部表象に相当するものか、葬送儀礼に伴うものかの判断は困難であり、頭位方向や鑑定された被葬者の年齢・性別等との相関関係も見出せない。また、墓壇掘削後、石を用いて空間を確保して遺体を安置する例や、敷石上に遺体を安置する例が僅かに認められる。前者については、被葬者が乳幼児に限定されることが想定される。

本遺跡で唯一の伸展葬（SK1032）は、被葬者の身長をはるかに上回る長軸316cmという大形の墓址で、五輪塔空風輪が2点、鉄銭・銭貨を各1点伴っており、その他の墓址とは格段の差が窺える。13歳前後の女性と鑑定されており、被葬者が有していた様々な背景に興味を持たれるところである。

同じく本遺跡で唯一の改葬墓（SK1014）は、四肢骨で方形またはコ字状の区画を作り、頭蓋骨やその他の骨を区画内に配置するものである。これに伴う副葬品は検出されず、葬法のみが際立っている。熟年の女性と鑑定されており（SK1014-1号）、被葬者が有していた様々な背景に興味を持たれるところである。また、重複関係等明確に成し得なかったが、同一の墓壇内からもう1体人骨が出土しており、こちらについては、銭貨と青磁片が伴っており、被葬者については3歳前後の幼児と鑑定されている（SK1014-2号）。両者の関係についても同様に興味深い。

図番	位置	土軸	規模 (cm)	形 状	埋土の状況	構造	埋葬姿勢	埋葬方向	副葬品	備 考	図例	
56	I 822	N 丁 西	31 22	—	—	土葬	屈曲	北方			37	
57	II 118	N 15° E	82 89	11	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬			38	
58	I 828	N 30° E	119 69	—	土葬埋土	—	土葬	屈曲	北方	西向き	39	
59	I 812	N 15° W	119 67	—	土葬埋土	—	土葬	屈曲	北方	西向き	39	
58A	II 118	N 15° E	107 69	14	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	東方	西向き	38
3902	II 118	N 30° E	66 54	15	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬			36	
3904	II 118	N 25° W	143 126	24	土葬埋土	—	—	—			36	
3909	II 118	N 丁 西	120 75	25	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
3911	VI 16・7	N 30° W	136 111	21	土葬	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
3912	VI 16	N 30° W	82 63	28	土葬	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
3913	VI 17	N 30° W	127 83	22	土葬	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
3914	VI 16・7	N 30° E	106 100	21	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
3915	VI 18	N 丁 西	143 76	20	土葬	屈曲	第一層	土葬	不明	不明	38	
3916											38	
3927	VI 16	N 30° W	96 65	5	土葬	屈曲	第一層	土葬	不明	不明	38	
3929	II 12・8	N 丁 西	218 95	43	土葬	屈曲	第一層	土葬	—	—	38	
3932	II 8・11	N 50° E	218 102	47	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
3937	I 828	N 30° W	80 57	26	土葬	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
3940	VI 16・7	N 120° W	80 60	30	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	南方	西向き	38
1160	VI 16	N 30° W	142 67	30	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
1227	VI 17	N 60° W	87 76	—	土葬	—	—	土葬	屈曲?	不明	37	
1228	VI 16	N 60° W	76 69	16	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲?	不明	37	
1315	VI 15	N 10° E	80 58	9	土葬	屈曲	第一層	土葬	不明	不明	38	
1316	VI 19	N 30° W	119 74	24	土葬	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
1317	VI 19	N 5° E	76 70	16	土葬	屈曲	第一層	土葬	—	—	38	
1343	VI 16・7・11	N 30° W	119 92	13	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
1344	VI 12	N 30° W	161 110	16	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
1351	VI 11・12	N 100° W	185 120	34	土葬	屈曲	第一層	土葬	—	—	38	
1361	VI 17	N 30° W	80 57	28	土葬埋土	屈曲	第一層	土葬	屈曲	北方	西向き	38
1369	VI 9	N 45° W	81 53	8	土葬	屈曲	第一層	土葬	不明	不明	38	
1369	VI 16	N 40° W	116 111	22	土葬	屈曲	第一層	土葬	不明	不明	38	
1381	VI 13	N 120° W	136 116	21	土葬	屈曲	第一層	土葬	—	—	38	
2008	VI 12	N 45° W	178 126	26	土葬	屈曲	第一層	土葬	—	—	38	

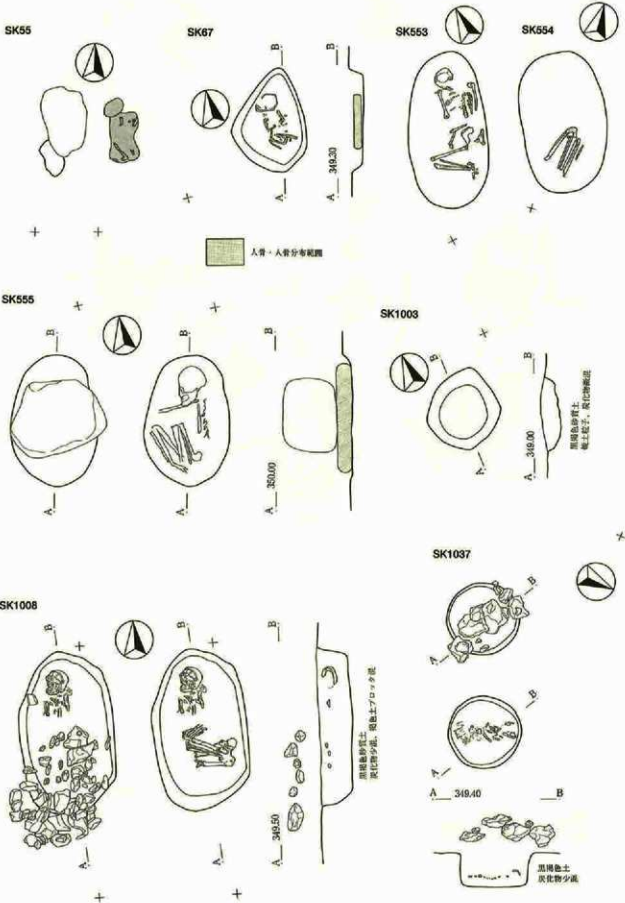
第371表 中世墓址一覧表

火葬墓については特徴を見出すことが困難であるが、SK1003については火葬施設 (SK1004) と近い位置に構築されており、両者の関連を想定しておきたい。SK1031については火葬骨とウマの骨が同時に存在しており、主体性の問題や遺構の重複等判然としない部分が多い。単に、ウマの埋葬施設に火葬骨が混入した可能性も否定できない。

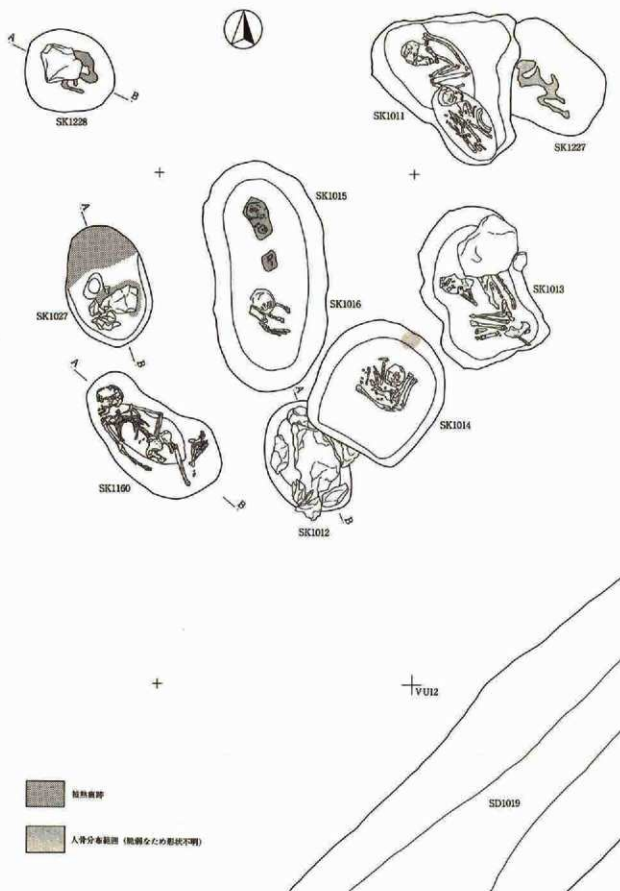
火葬施設については、底部に溝状の掘り込みを伴うもの (SK1004・SK1693) と伴わないもの (SK1027) がある。前者のSK1693は溝が短軸方向に張り出すもので、周辺地域においても類例は豊富で、中世における定形化した火葬施設とすることが可能である。

イヌの埋葬施設 (SK1537) としたものからは、イヌの全身骨格が出土しているわけではなく、歯のみが出土しているに過ぎないため、明確に墓と判断することには躊躇する。ただ、被葬者が熟年女性と推定される土葬墓 (SK1525) が隣接することや、報告事例自体が少ないことなどから積極的にイヌの墓と捉え、今後の研究に問題提起しておきたい。

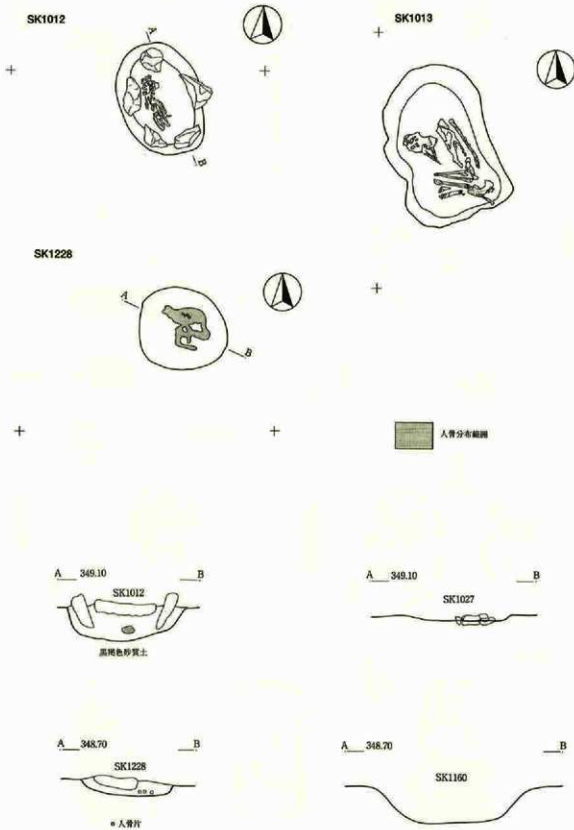
ウマの埋葬施設と考えられるものは4例検出されており、古代の同様な施設を合わせれば6例となる。埋葬姿勢の明らかなものは、いずれも穏やかに眠るような姿勢を保っており、窮屈さや乱雑さは感じられない。したがって、これらの遺構についてはウマの墓と判断しておきたい。ただし、埋葬姿勢が不明で、火葬骨と混在するSK1031のウマの寛骨には解体痕が認められ、他とは区別される可能性があるだろう。



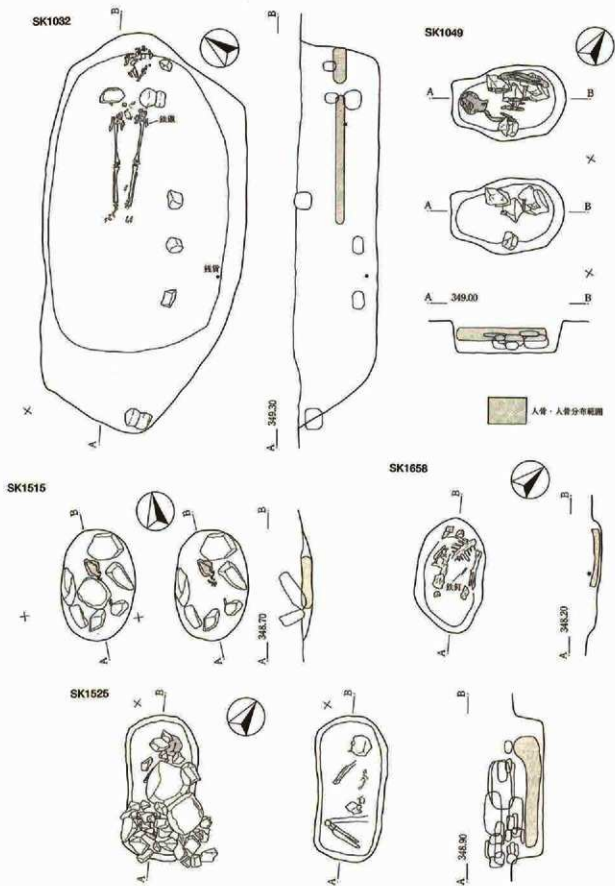




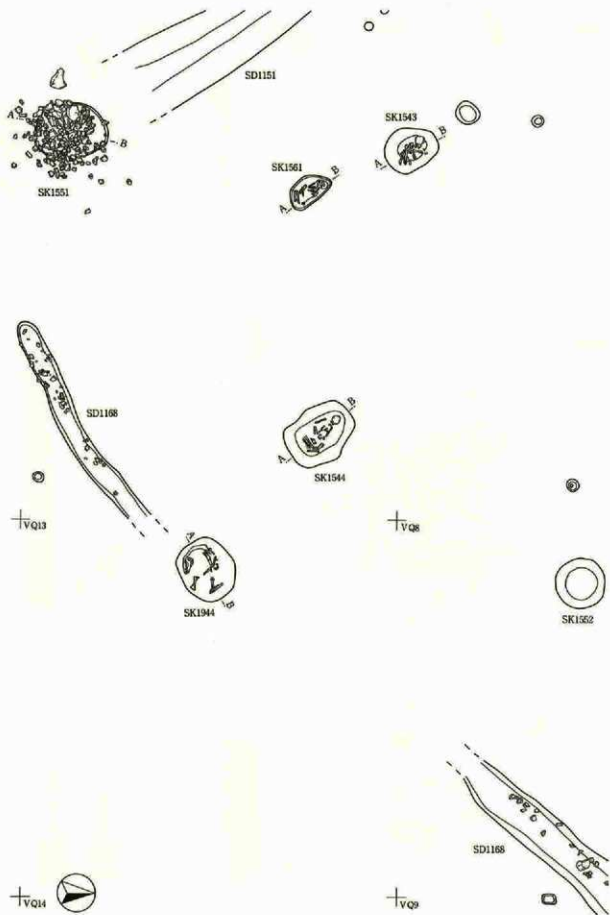
第238図 中世墓址遺構図2 (1:30)



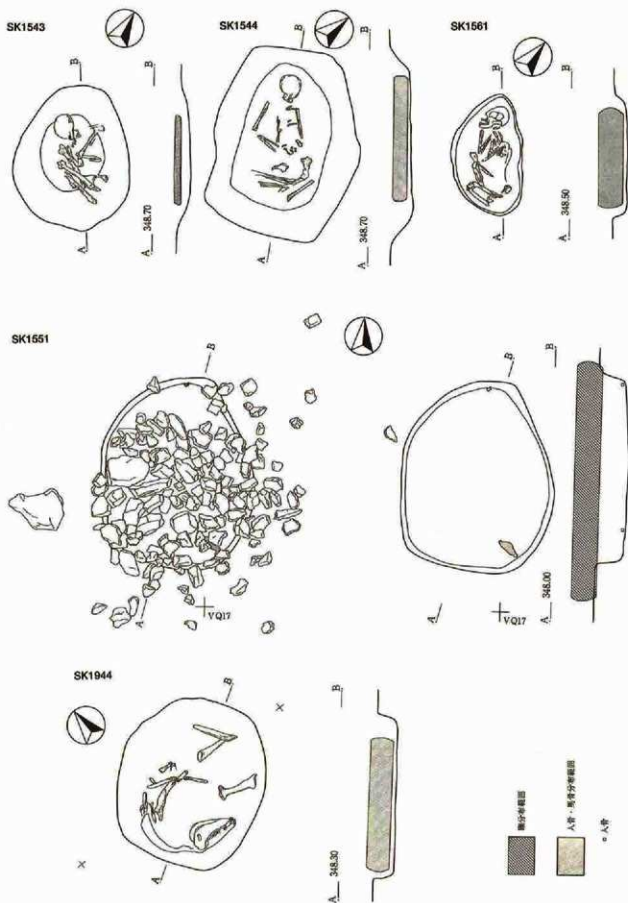
第239図 中世墓址遺構図3 (1:30)



第240図 中世墓址遺構図4 (1:30)



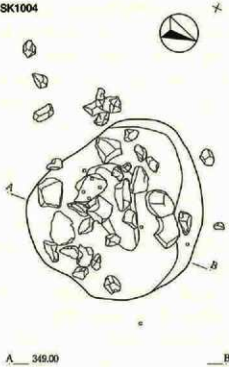
第241図 中世墓址遺構5及び遺構分布図 (1:80)



第242図 中世基址遺構図6 (1:30)

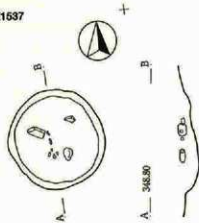


SK1004

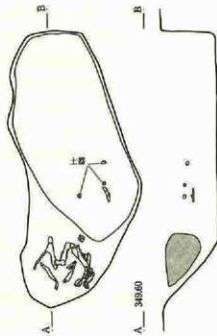


- 1: 黒色土 燒骨片・炭化物多量・焼土粒子混  
 2: 暗褐色土 燒骨片多量・焼土粒子・炭化物混  
 3: 黒褐色土 焼土粒子少量・炭化物混

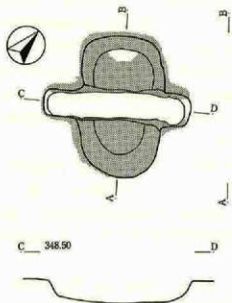
SK1537



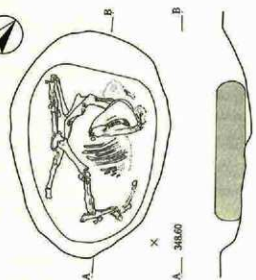
SK1031



SK1693



SK2008



- 1: 炭化物混 燒骨片多量  
 2: 焼土混 燒骨片多量



第243圖 中世墓址遺構圖7 (1:30)

上記した墓址の分布状況には粗密があり、また、幾つかのグルーピングが可能である。西地区の墓址は散在する傾向を示す。西地区で検出された該期の遺構は、L字状の区画溝と井戸と墓のみで、景観を復元するのは極めて困難な状況である。強いて言えば、井戸址がそれぞれ分布するエリアと一定の距離を保っていることが指摘されよう。それに対して、東地区で検出された墓址は、東地区西端部・中央部・東部といった一定のまとまりを持って構築されている。中でも、中央部の墓址群は道路址と想定されるSD1019の脇に密に集中している（第238図）。土葬墓・改葬墓・火葬施設で構成されており、被葬者の年齢構成及び性別についても多様である。墓墳の重複も複数認められ、墓墳内に複数の遺体（人骨）が検出されており、血縁的な家族墓を想起させる。東部の墓址群は道路址と想定されるSD1168（SD1019）及びそれに直交すると考えられるSD1151との辻部分を中心に散在する（第241図、図版79・81）。土葬墓・ウマの埋葬施設で構成され、SK1515を除いて被葬者は高齢で、墓墳の重複関係を持たないという特徴を持つことが指摘される。しかも、この区域は掘立柱建物址の存在が想定される区域でもあり、そうした面も含めて、中央部の墓址群とは対比され興味深い。こうした墓址群が内包する属性には差異が見られるものの、墓址群の占地という観点からは、西端部の墓址群も含め、道路が深く関わっていたことが推測される。

以上のように、平坦部に展開する中世墓址群については、それぞれ異なった内容・背景を持つことが明らかで、そうした多様性に富む問題の一つ一つ解決していくことが今後に残された大きな課題である。また、直接対比することは困難と考えられるが、火葬墓群で構成される斜面部との関係についても遺跡を越えた視野・問題意識を用意し、究明していくことが、さらなる課題といえよう。今回提示した資料はその出発点であり、着実な研究成果を積み上げていきたいと考える。

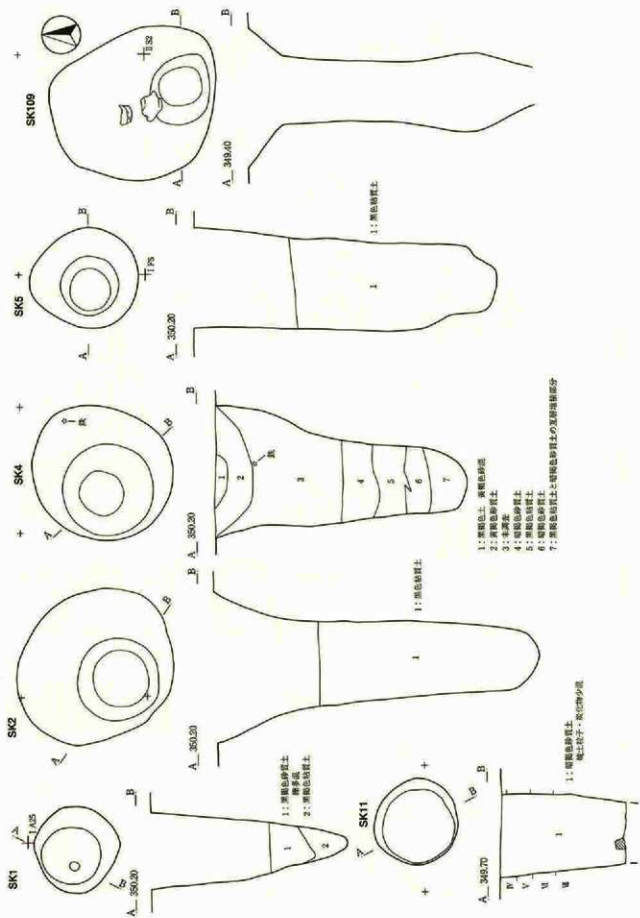
### 3 井戸址（第244～249図、第372表）

井戸址から出土する遺物は極めて少ない、または全く無いという資料的な制約があって、時期判定は極めて困難な状況にある。数少ない遺物が出土した井戸址をもとに、覆土の質及び堆積状況や位置関係などから井戸址の時期を判定した。したがって、今回判定した時期について、全く問題が無いわけではない。そうした経緯を踏まえて中世以降の井戸址と判断した遺構は116基あり、その内3基が石井で、3基が水溜めを目的にしたと想定される円形の大形土坑である。これらを除く110基が素掘りの井戸である。

本遺跡の調査は複数の集落面を対象に実施され、さらに調査区の分割調査という問題が加わり、井戸址のように深い遺構については、一貫した調査をすることが困難であった。したがって、井戸址の調査で最も重要な断面観察及び底面の調査が欠落してしまった遺構も多数に及んでしまい、統計的な処理についても十分な検討ができなかった。そうした中、SK1065・SK1308・SK1541・SK1550・SK2517では底面及びそれ以下の断面でグライ化土壌・酸化鉄の集積が観察され（第245・246図）、地下水が湧出していた痕跡が明確な事例として注目される。これら以外については、明確な土の変化は認められず、水の湧出環境や使用期間の違いといったような解釈を用意する必要が生じている。

素掘りの井戸は、規模や平面形・断面形から幾つかの形態分類が可能である。また、覆土の堆積状況や覆土内の礫の在り方にも特徴が認められ、廃棄・廃絶に関わる幾つかのパターンが予測される。加えて、出土遺物の種類や内容及び出土状況も重要な属性であり、これらを総合化した分析が必要であることは言うまでもない。ここでは、資料提示に留めざるを得ないが、今後集落構成等を分析していく上で重要な位置を占めることとなるだろう。

石井と想定されるのはSK1114・SK1406・SK1541の3基である（第246・249図）。前二者は石積みのためと考えられる掘り方が確認された。SK1114は、上部の石積みの遺存状況が比較的良好である。用いられた礫は扁平な角礫が主体で、礫の長辺を井戸内面に配するものが多くを占めている。SK1541は、掘り方

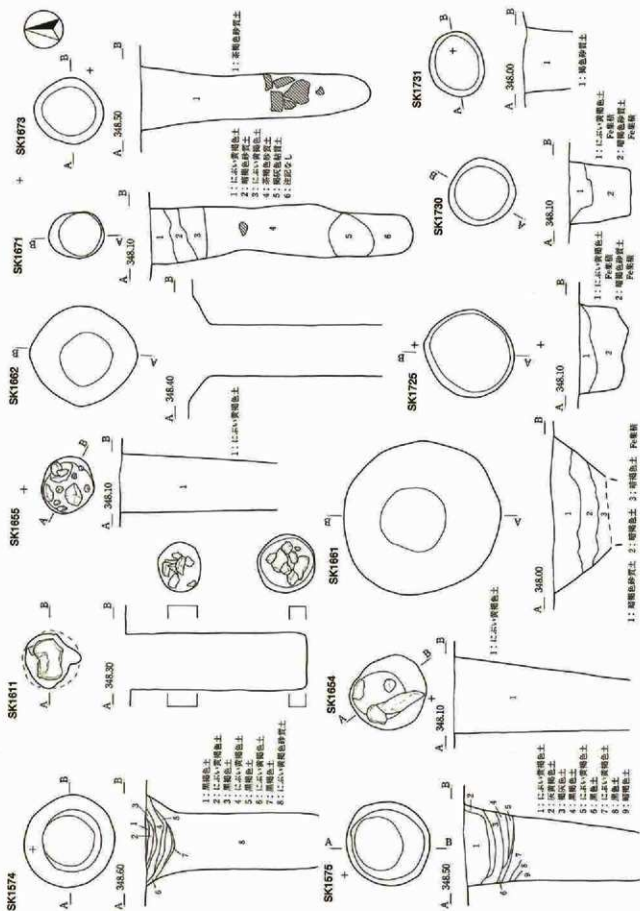


第244図 中世井戸址遺構図1 (1:60)

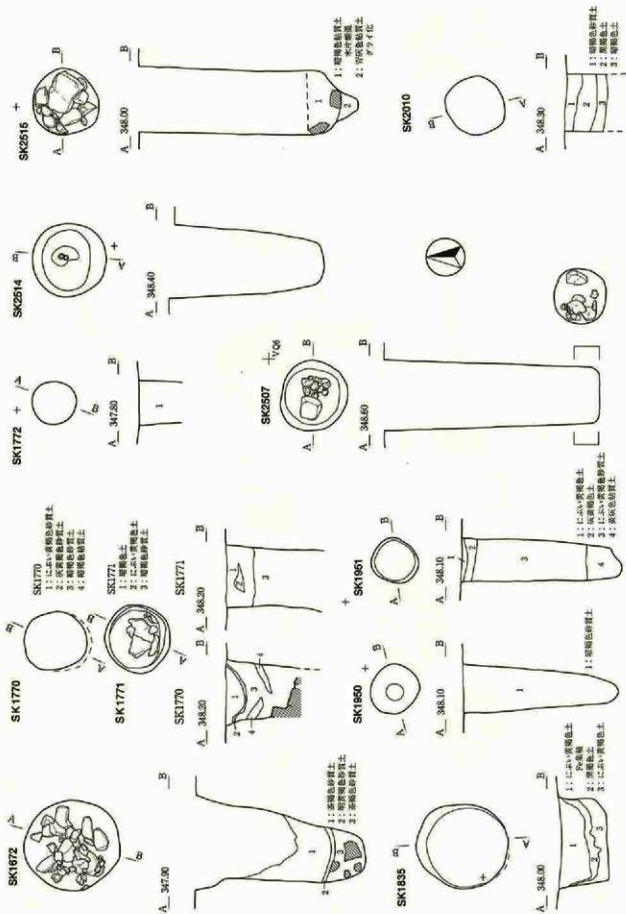








第247図 中世井戸址遺構図4 (1:60)



第248図 中世井戸址遺構図5 (1:60)



SK No	位置	規模(cm)			最大深さ 絶対高m	平面形	備考	図版 NO.
		長軸cm	短軸cm	深さcm				
1	I A24.25	140	136	314	346.84	円形	鉄鍬, 鋤物片, 羽口, 骨(鹿)	31
2	I A19.24	268	232	518	344.78	楕円形	鉄鍬	31
4	I A24.25	232	212	402	345.91	円形		31
5	I A24.25	175	160	481	345.12	楕円形	骨(鹿)	31
11	I F24	134	130	(200)	(347.50)	円形	骨(鹿)	24
78	I K4	152	128	(134)	(348.32)	楕円形		24
109	II N21.22 II S1.2	280	232	453	344.60	不整形		47
310	II W18	214	195	(86)	(348.40)	楕円形		40
517	II V13	100	98	235	346.55	円形	石臼	41
523	I A20	(76)	(70)	—	(348.34)	不整形		31
533	I G10	(122)	(116)	(42)	(348.46)	円形		30
534	I G10.15	128	124	(43)	(348.36)	円形		30
1009	III A7	98	78	318	345.76	楕円形		60
1018	IV Y17	146	132	374	345.36	不整形	藍澤不純物, 鉄鍬/鏝集中	65
1020	IV Y17	175	150	(282)	(346.36)	楕円形		65
1023	IV Y17	204	200	296	346.16	不整形	鏝集中	65
1033	IV Y16	120	90	(240)	(346.70)	不整形	検出面に扁平大礫	65
1085	IV Y10	144	131	258	345.92	円形	骨(馬)	69
1079	V U3	102	98	(228)	(346.52)	円形		70
1080	IV Y3.8	190	180	(242)	(346.48)	円形		69
1086	IV Y17	140	128	286	346.02	楕円形	大礫	65
1111	V U3	130	116	331	345.43	楕円形		70
1114	IV Y7.8	140	122	(255)	(346.40)	楕円形	藍澤不純物, 骨(馬) 大礫集中, 石井, 掘り方	69
1145	V Q18	146	96	66	347.42	楕円形		72
1255	V U1	85	74	196	346.44	楕円形	鏝集中	70
1260	V U6	88	84	28	348.22	円形		70
1308	V U3	130	127	366	344.82	円形	底面以下にグライ化土塊とFeの集積	70
1310	IV Y8	140	130	243	346.03	不整形	鏝集中	70
1406	IV Y2.3,7.8	238	200	(170)	(346.66)	楕円形	石井, 掘り方	69
1502	IV T23 IV Y3.4	107	98	180	346.82	円形	曲物(2)	74
1510	V P17	102	85	(220)	(346.40)	楕円形		75
1511	V P4.9	84	78	(211)	(346.40)	円形	台石	78
1512	V P9	124	124	(204)	(346.40)	円形		78
1513	V P10	110	102	(196)	(346.40)	円形	薄板状木製品	78
1518	V P10	143	130	(194)	(346.40)	楕円形		78
1519	V P10	82	72	(26)	(348.00)	楕円形		78
1526	V P13	84	70	(53)	(347.87)	楕円形		78
1527	V P13.14	112	98	(72)	(347.75)	隅丸方形		75
1528	V P18	126	94	(54)	(347.80)	楕円形		75
1533	V P9.10	136	130	(200)	(346.40)	円形		78
1534	V P10	114	95	(86)	(347.56)	楕円形		78
1539	V F5	109	100	(74)	(347.68)	円形	藍澤不純物	78
1541	V Q6	168	132	385	344.85	楕円形	鉄鍬, 石臼, 石鉢, 砥石 上半部に鏝, 遺物集中, 石井?	79
1542	V Q6	108	94	420	344.04	楕円形	鏝, 直柄鍬	79
1549	IV Y4	74	72	170	346.69	円形	曲物, 円形木製品	69
1550	V P17	140	132	346	344.80	円形	底面以下及び側面にグライ化土塊とFeの集積	75
1552	V Q7.8	112	104	(48)	(348.01)	円形		79
1553	V Q3	122	111	(32)	(348.09)	楕円形		80
1564	V Q3	130	124	(30)	(348.16)	円形		80
1565	V Q2	194	174	(118)	(347.22)	不整形		79
1566	V Q4	104	98	392	344.55	円形		80
1567	V Q8	90	90	(96)	(347.52)	円形		80
1568	V Q4	106	96	(86)	(347.62)	楕円形		80
1560	V Q3.8	136	134	(108)	(347.34)	円形	鉄鍬, 砥石	80
1562	V P23	86	86	(50)	(347.80)	円形		70
1574	V L17	149	140	(274)	(345.52)	円形		86
1575	V L17	133	132	(279)	(345.51)	円形		86
1576	V Q2.3	138	128	(76)	(347.56)	円形		80
1577	V Q3	112	112	(16)	(348.10)	円形		80
1578	V Q3	85	85	(67)	(347.53)	円形		80
1611	V H8	86	70	288	345.23	楕円形	鏝集中	98
1614	V Q3	116	106	(120)	(347.28)	楕円形		80
1630	V H7	103	(84)	(68)	(347.36)	楕円形		98
1653	V L9	90	88	(86)	(347.20)	円形		87
1654	V L4	121	114	(278)	(345.18)	楕円形	残物	90

第372表 中世井戸地一覧表(1)

SK No	位置	規模(cm)		最大深度 絶対高m	平面形	備考	図版 NO.	
		長軸cm	短軸cm					
1655	V L4	94	82	(249)	(345.49)	楕円形	曲物/礎集中	90
1661	V L5	248	242	(94)	(347.94)	円形		90
1662	V M1	170	160	(308)	(345.11)	円形	鉄貨、釧、曲物、板材、(骨馬)	90
1663	V H25	98	88	(280)	(344.24)	楕円形		90
1670	V H1	96	94	148	0.00	円形	曲物	95
1671	V L20	88	72	420	343.90	楕円形	釜蓋下駄、曲物	83
1672	V L20	152	142	268	344.78	円形	底部礎集中	83
1673	V M16	110	105	367	344.57	円形	曲物(3)/大礎集中	83
1674	V H15	146	142	0	0.00	不整円形	板花草蓆? (2)、棒状木製品	96
1675	V H10	132	120	100	—	楕円形		99
1677	V H24	80	80	(120)	(346.83)	円形		91
1678	V H24	182	182	(145)	(346.56)	不整楕円形	鉄鏝	91
1679	V H23.24 V M3	121	101	(107)	(346.93)	不整楕円形		91
1686	V L10	84	76	(120)	(346.98)	円形		87
1722	V L18.19	130	118	72	347.10	楕円形		83
1723	V L18.19	172	120	86	346.98	楕円形		83
1725	V M17	124	120	80	347.10	円形	水溜め?	84
1730	V G9	108	100	98	346.86	円形	水溜め?	97
1731	V M17.22	104	86	(78)	(347.10)	楕円形		84
1770	V Q3	104	104	(116)	(346.72)	円形	中位礎集中	80
1771	V L23 V Q3	96	96	(155)	(346.32)	円形		83
1772	V Q4	72	68	(72)	(346.78)	円形		83
1806	V B	94	80	(164)	(346.18)	楕円形		99
1835	V G16.21	146	134	82	347.20	円形	水溜め?	85
1894	V Q17.18	136	110	(58)	(347.76)	楕円形		71
1949	V L24	150	138	92	347.88	楕円形		83
1950	V L24	80	72	246	345.36	楕円形		83
1951	V L24	74	72	255	345.31	円形		83
2009	V H18	78	76	(46)	(347.56)	円形		94
2010	V M3	92	90	(66)	(347.32)	円形		91
2011	V M17	186	160	(110)	(347.18)	不整円形		84
2014	V H12	(134)	(132)	(250)	(345.50)	円形		94
2016	V M3	(89)	(82)	(22)	(347.80)	円形		91
2503	V P7	82	78	(175)	(346.40)	円形		78
2504	V P10	(145)	(143)	(56)	(347.84)	円形		78
2505	III A2	(83)	(68)	(250)	(345.55)	楕円形		60
2506	III A6	(93)	(80)	285	345.75	楕円形		60
2507	V P10	112	104	342	344.95	楕円形	曲物/底部礎集中	79
2508	V P5 V Q1	80	72	(73)	(347.67)	円形		79
2509	V K20	(114)	(105)	(162)	(346.04)	不整円形	刀子柄	82
2512	V G16.17.21.22	(134)	(110)	172	345.94	不整楕円形		85
2513	V G21.22	(122)	(120)	(162)	(345.94)	円形		85
2514	V L22	(116)	(116)	246	345.74	円形		82
2515	V Q17	(105)	(103)	349	344.37	円形	底部礎集中	71
2517	V P23 V U3	84	70	268	343.95	楕円形	扁平大礎、底面以下にセラミク土塊とFeの集積	70
2520	V B13	198	188	294	344.86	不整円形	板材	99
2521	V L14	94	92	(80)	(347.30)	円形	石臼、曲物、有頭棒状木製品	87
2549	II E1	(84)	(76)	(124)	(347.46)	方形		58
2552	V M2	76	72	(58)	(347.52)	円形		91
2553	IV Y7	212	—	(60)	(347.64)	楕円形		69
2554	IV Y7	—	—	(70)	(347.76)	不明		69

第373表 中世井戸址一覧表(2)

を捉えることができなかったが、上部の礫の出土状況から積極的に石井と想定した。

SK1725・SK1730・SK1835(第247・248図)については、覆土中に酸化鉄の集積が顕著で、覆土の堆積状況と合わせて水溜め目的の貯水施設と想定し、機能的に井戸と類似することが予想されるので、井戸址の範疇に位置付けた。

上記した井戸址の分布状況を見ると群在する傾向が指摘できる。古代の井戸址が2～3基単位で散在・一定間隔を保った直線的な配列という2種類の分布パターンを持っていたのとは大きく異なり興味深い。こうした分布状況の差異は、井戸構築に至る占地や計画性、掘削方法などの相違に深く関わるものと考えられ、古代と中世では、集落構成及び社会構造に大きな変革があったことが推測される。



以上、井戸址個々について十分な検討を加えることができなかったが、今後、群在する個々の井戸址の属性分析を踏まえた上で、グループ相互の比較や他遺構との関連を追究し、さらには古代と中世の井戸址の比較検討を試みていきたいと考える。

#### 4 土坑 (第250～254図, 第374・375表)

本遺跡では数多くのSK (土坑) を検出・調査した。その内、調査の結果、基址や井戸址のように機能・用途が明確になったものを除いて、不明確なものを土坑として一括し、ここで扱うこととする。

中世以降に相当すると判断された土坑は117基に上る。これらは様々な属性から、竪穴状遺構、掘立柱建物址を構成していたと考えられる柱穴、集石を伴う土坑、坑内で火が使用された土坑、墓塚としての属性を有するが人骨の出土が確認されない土坑、その他の土坑の五つに分類が可能である。

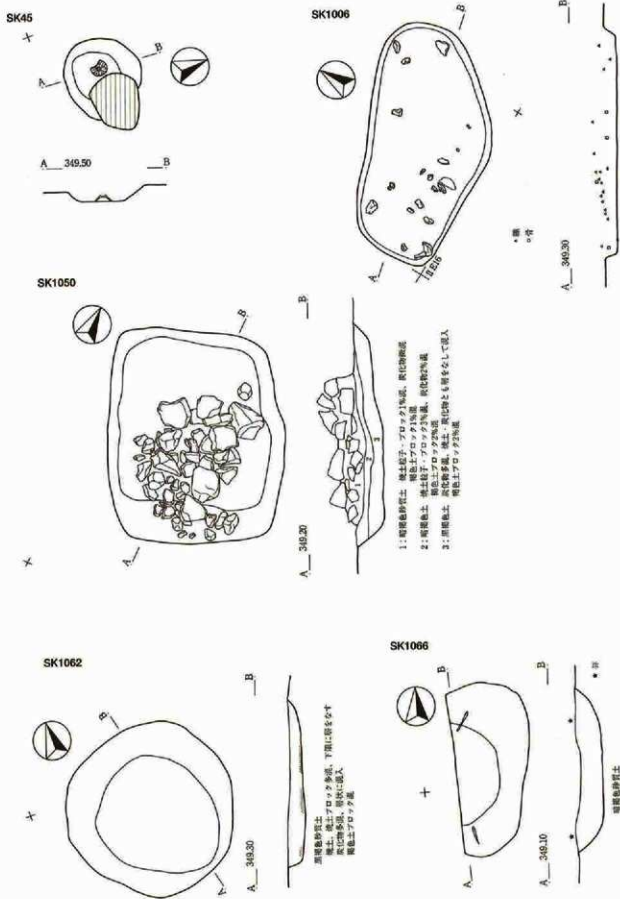
竪穴状遺構と把握したものは、SK1221・SK1613・SK2526の3基である。SK2526の規模が若干小さいものの、いずれも比較的平坦かつ堅緻な底面を有している。遺構内での起居あるいは遺構内への頻繁な出入りが推測される。ただし、SK1221からは人骨 (頭蓋骨片2点) が出土しており、隣接するSK2526とともに一帯に土坑が開口状態で機能していたとは言い切れない。

掘立柱建物址を構成していたと考えられる柱穴址としたものは、SK1010とSK1041～1048・1051・1052・1055・1056・1081～1084・1202とSK1592・1616である。これらの中には柱痕跡が認められるものもあり、柱間や規模等については不明確ながらも、建物址を構成していたと見て良いと考える。

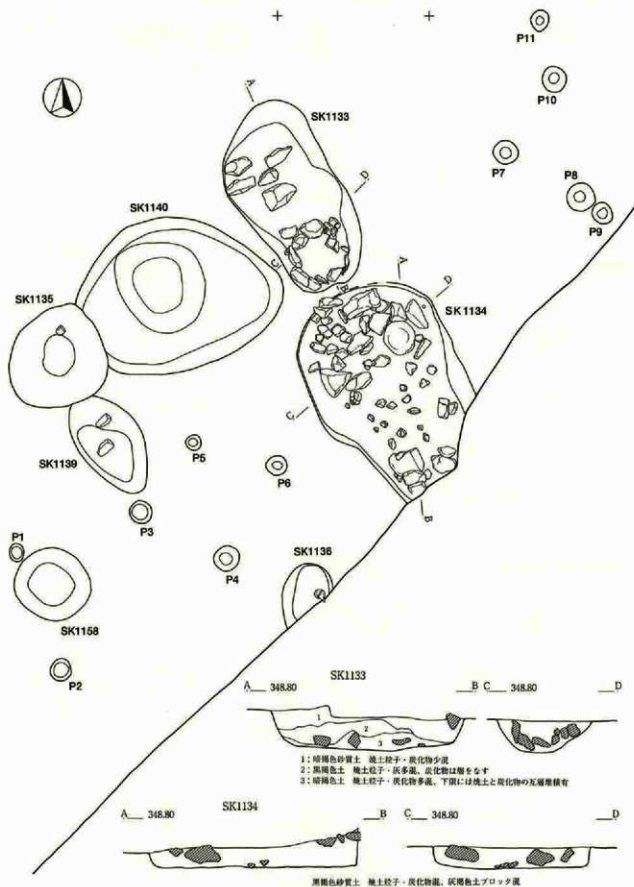
集石を伴う土坑としたものは、SK1050とSK1530とSK1801・1817の4基である。これらは隙の在り方や遺構の分布状況などから、さらに3細分される。SK1050は長方形の土坑で、拳大～人頭大の礫が土坑の上面ないし上部に集中する。SK1530は不整形の土坑でありながら、土坑内に人頭大の礫が充満する。SK1801・1817は重複関係にあり、いずれも楕円形の土坑で、拳大～人頭大の礫が土坑内に集中する。こうした差異は機能の相違に結びつくと考えられ、これについては今後の検討課題である。

坑内で火が使用された土坑としたものは、SK1062・SK1133・1134・SK1223・SK1583・SK1593・SK1599・SK1684の8基である。この内、SK1133・1134は土坑内部に円筒形の石組みを伴う一連の施設と考えられ、隣接する土坑を含めた捉え方が可能な土坑である。機能については不明と言わざるを得ないが、何等かの焼成施設または工房址と考えたい。また、SK1593は全面被熱痕跡で、ほぼ中央に炭化物と骨片を多量に含む部分があり、骨片の鑑定は実施していないが、火葬施設あるいは火葬墓の可能性が極めて高い。SK1599についても壁面に被熱痕跡が巡り、火葬骨は確認されないものの、火葬施設と同様な使用方法が推測される。その他については、土坑の形態・焼土 (被熱痕跡) の在り方がそれぞれで、同質には捉えられない。SK1062は断面が皿状の円形土坑で、底面に焼土が検出される。SK1223も同じく皿状の円形土坑だが、焼土は炭化物とともに検出面 (遺構上部及び上面) に広がり、SK1583は炭化物層を複数含み、SK1684は焼土のみで構成される。

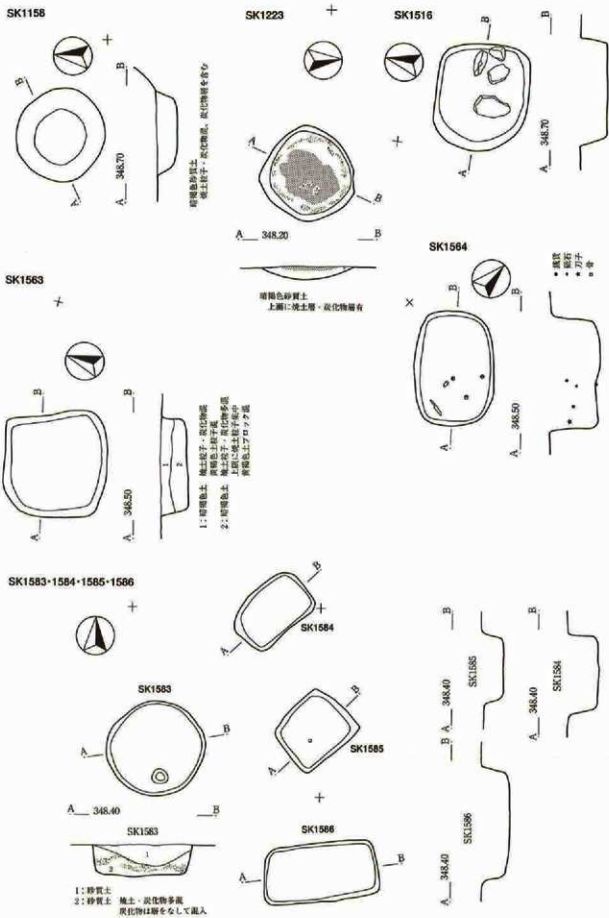
墓塚としての属性を有するが人骨の出土が確認されない土坑としたものは、SK45・SK1066・SK1158・SK1564・SK1584・1585・1587・SK1600・SK1617・SK1619・SK1637・SK1644・SK1657・SK1895の13基である。これらの中で、SK1585・1619からは骨片が出土している。両者とも出土骨についての記録が十分でなく、人骨が獣骨、あるいは焼骨か、いずれの判断もできないことから、ここに含めた。また、SK1564・1584・1600・1617・1637・1644・1657・1895は断面扁底状の長方形土坑で、刀子・銭貨・釘といった墓址から出土する場合が多い遺物を単独または組み合わせで出土している。これらの土坑は長軸・短軸とも屈葬あるいは伸葬葬での遺体の安置が可能な規模を有している。本遺跡の場合、人骨等の遺存状況が良好で無いものは無かったという前提に立っているため墓址とは認定しないが、墓址としての属性・



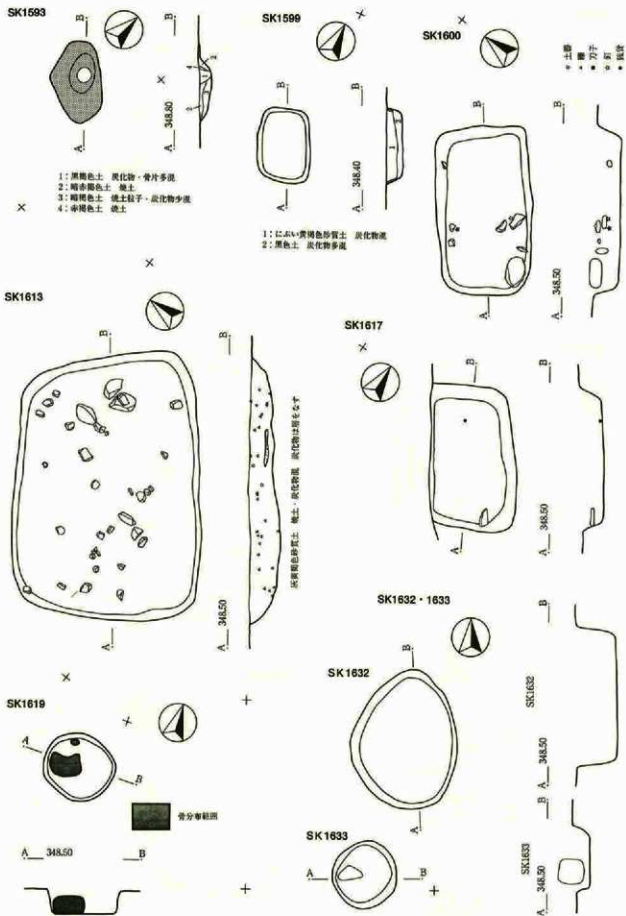
第250図 中世土坑遺構図1 (1:40)



第251図 中世土坑遺構図2 (1:50)



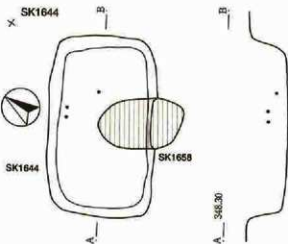
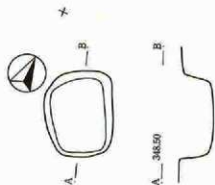
第252図 中世土坑遺構図3 (1:40)



第253図 中世土坑遺構図4 (1:40)

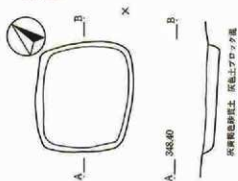


SK1637

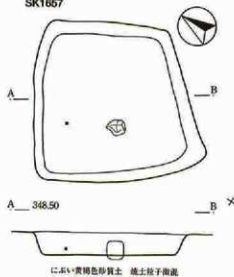


・横貫

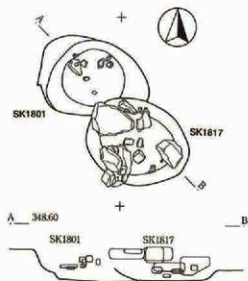
SK1645



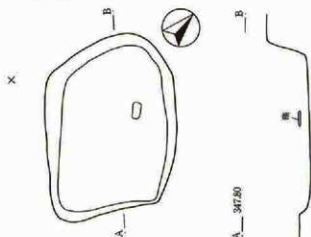
SK1657



SK1801・1817



SK1895



第254図 中世土坑遺構図5 (1:40)

図番	位置	規模(m)		形状		覆土の状況	特記遺物	番号	図例No.	
		長軸	短軸	平面形	断面形					
26	R N7	45	36	24	円形	焼盛状	埴物		49	
43	R N6	144	129	—	楕円形	—	シカ角		42	
45	R N23	97	82	18	楕円形	焼盛状	青銅鏡		49	
100	R N2-Ⅱ(27)	117	115	82	楕円形	焼盛状	(陶器、銅片、小型銅片)		56	
1005	R N11	259	122	15	不整形	壺状	クシ骨	鳥居遺構、S0419(埋蔵小)	50	
1027	R D20	51	41	24	楕円形	柱状	クシ骨		56	
1010	R D10	25	20	48	楕円形	柱状	第一層		58	
1041	R Y11	48	44	22	円形	焼盛状	第一層、焼土粒子・炭化物質		65	
1042	R Y11	38	35	18	楕円形	焼盛状	第一層、焼土粒子・炭化物質		65	
1043	R Y11	22	20	22	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		65	
1044	R Y12	48	48	27	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1045	R Y11	40	34	19	楕円形	柱状	残層、焼土粒子・炭化物質		77	
1046	R Y11	34	20	48	円形	柱状	第一層、焼土粒子		77	
1047	R Y11	24	24	20	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1048	R Y11	30	26	42	楕円形	柱状	第一層、炭化物質		77	
1050	R Y7	220	180	58	長方形	焼盛状	残層、焼土粒子・炭化物質	灰白	焼土埋埋	77
1051	R Y7	24	24	18	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1052	R Y7	16	12	24	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1053	R Y11	88	84	42	円形	柱状	残層、2層に炭化物質	柱痕跡	65	
1054	R Y16	144	132	36	不整形	焼盛状	残層、炭化物質		65	
1055	R Y6	22	22	18	不整形	焼盛状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1056	R Y16	110	100	12	楕円形	柱状	残層、焼土粒子・炭化物質	柱痕跡	65	
1057	R Y11	80	76	14	不整形	焼盛状	第一層		65	
1058	R Y11	100	98	24	円形	焼盛状	第一層、炭化物質		65	
1060	R Y8	188	177	19	不整形	瓦状	第一層 焼土粒子・炭化物・焼土ブロック状		77	
1066	R U11	185	78	38	楕円形	焼盛状	第一層	釘、箸	67	
1068	R Y12	218	200	20	円形	瓦状	残層、炭化物質		65	
1091	R Y7-12	22	20	8	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1092	R Y7	26	20	11	楕円形	柱状	第一層、焼土粒子		77	
1093	R Y7	22	22	12	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1094	R Y7	17	17	14	円形	柱状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1095	R Y7-12	104	92	31	楕円形	焼盛状(二段)	残層		77	
1121	R R1-6	274	202	52	長楕円形	焼盛状(二段)	残層、上層に焼土粒子	硝石	73	
1133	R R1-2	200	120	55	長楕円形	焼盛状	残層、焼土粒子・炭化物・灰白	円筒状に瓦葺	73	
1124	R R2-7	280	201	50	長楕円形	焼盛状	第一層、焼土粒子・炭化物質	第一層に硝石	73	
1135	R R1-6	145	120	72	円形	すり鉢状	第一層、焼土粒子・炭化物質		73	
1136	R R7	130	74	66	長楕円形	焼盛状	第一層、焼土粒子・炭化物質		73	
1139	R R6	147	84	34	楕円形	瓦状	第一層、焼土粒子・炭化物質	大塚遺	73	
1138	R R6	100	95	22	円形	焼盛状	第一層、焼土粒子・炭化物質	成平遺	73	
1159	R M22	105	112	58	楕円形	焼盛状	上下2層、上層に焼土粒子・炭化物質		84	
1161	R J6	32	48	29	楕円形	柱状	第一層		65	
1202	R Y16	100	92	21	楕円形	柱状	残層	柱痕跡	65	
1221	R M22-23	266	61	60	不整形	壺状	残層、炭化物質	人骨	84	
1223	R J31	101	101	14	不整形	瓦状	第一層、焼土粒子・炭化物質	焼土・炭化物が面に分布	67	
1208	R U7	42	22	26	長楕円形	瓦状	第一層、焼土粒子・炭化物質		52	
1209	R Y6	18	14	2	楕円形	瓦状	第一層、焼土粒子・炭化物質		77	
1246	R J21	84	61	8	楕円形	瓦状			92	
1316	R P19	118	97	39	方形	焼盛状		鳥居遺	76	
1317	R P19	82	90	26	楕円形	焼盛状			76	
1329	R P29	164	145	34	楕円形	焼盛状		埋蔵遺物土埋	76	
1320	R P29	176	175	50	不整形	焼盛状	不明な銅製品	大塚遺	76	
1549	R T24	140	90	18	長方形	焼盛状			74	
1363	R P4-5	112	108	28	方形	焼盛状	上下2層、上層に焼土粒子・炭化物質 下層に炭化物ブロック状		76	
1364	R P5	122	84	52	長方形	焼盛状		刀子、銅製元寶、五輪通寶 成徳元寶	78	
1370	R L22-VQ2	184	10	20	楕円形	焼盛状	第一層、焼土粒子・炭化物質		79	
1372	R L17	96	49	20	円形	焼盛状			82	
1372	R L17	48	48	22	円形	焼盛状			82	
1381	R C19	216	181	10	不整形	瓦状	第一層、炭化物質		100	
1383	R H2	184	101	24	円形	焼盛状	上下2層、焼土粒子・炭化物ブロック状		98	
1384	R H2	80	56	30	長方形	焼盛状		釘	98	
1385	R H2	77	62	24	方形	焼盛状		青銅土	98	

第374表 中世土坑一覧表(1)

第5章 中世以降の調査

No.	位置	規模(m)		形		層土の状況	特記遺物	備考	図説No.
		長径	短径	平面形	断面形				
1586	V H2	120	91	24	東方形	焼成状			98
1587	V H2	84	58	12	横四角	焼成状			98
1588	V Q2	118	100	20	長方形	焼成状			80
1590	V L22	199	84	30	長方形	焼成状			79
1591	V Q2	76	72	21	長方形	焼成状		瓦葺部	79
1592	V L22	30	54	10	不整形四角	瓦葺	埋層、粘土粒子・炭化物塊、粘土塊埋層	赤片粘土、火群層 火群層段の瓦葺部	87
1594	V L12	100	36	6	横四角	焼成状			82
1595	V L12	88	88	20	円形	瓦葺			82
1599	V L12	80	86	18	長方形	焼成状	上下2層、壁面に粘土粒子・炭化物塊	埋層に壁面埋層	87
1600	V L3-10	178	182	26	長方形	焼成状		釘、刀子	87
1601	V C23	162	120	19	長方形	焼成状			100
1604	V C20	71	50	20	横四角	瓦葺			100
1605	V C20	50	77	14	長径四角	瓦葺			101
1606	V C20	111	100	20	不整形	焼成状			101
1607	V C20	58	75	14	不整形	瓦葺			101
1609	V H7	90	74	41	横四角	焼成状			98
1610	V H7	120	90	28	横四角	焼成状		六瓣透	98
1612	V H4	136	109	141	横四角	焼成状			98
1613	V L20-25	284	199	20	長方形	瓦葺	第一層、粘土粒子・炭化物ブロック層	瓦葺	埋層中
1616	V L22	116	100	21	長方形	瓦葺			79
1617	V L22-22	154	87	10	長方形	焼成状		瓦葺片	79
1618	V L22	198	168	10	長方形	焼成状		瓦葺片	79
1619	V Q2	77	71	20	円形	焼成状			82
1622	V H12	56	48	20	横四角	焼成状			98
1625	V H12	71	72	24	円形	焼成状			98
1624	V H12	141	118	20	横四角	焼成状			98
1625	V H12	90	82	24	横四角	焼成状			98
1626	V H4	108	74	10	横四角	焼成状			98
1627	V H18-19	152	118	85	不整形	焼成状(二股透)			98
1632	V H18-19	140	112	40	横四角	焼成状		焼成金属製品、陶器片	98
1633	V H18	73	60	18	円形	焼成状			98
1634	V H18	100	106	26	円形	焼成状			98
1635	V H12-18	140	30	27	長方形	焼成状			98
1637	V L19	91	72	28	長方形	焼成状		瓦葺片	83
1638	V L19	84	80	12	横四角	焼成状	第一層、粘土粒子層		83
1644	V L9	192	110	41	長方形	焼成状		鉄塊、瓦葺片、瓦葺片	87
1645	V L9	116	102	14	方形	焼成状	第一層	瓦葺片	87
1646	V H18-19	114	100	20	不整形	焼成状		瓦葺片、(壁面埋層)	87
1647	V H19	104	68	27	不整形	焼成状			84
1650	V H19	112	80	60	横四角	焼成状(二股透)			84
1651	V H22-24	142	60	40	長方形	焼成状			81
1656	V L10-VM5	130	126	20	長方形	焼成状			87
1657	V L15-VM11	170	164	24	長方形	焼成状	第一層、粘土粒子層	大平透葺、埋層片	87
1662	V D22	50	40	20	横四角	焼成状			101
		86	84						
1694	V C20	50	24	8	不整形	瓦葺	第一層、粘土塊埋層		101
1694	V L6	60	58	18	横四角	焼成状			95
1800	V L12	100	88	16	長方形	焼成状			95
1801	VM4	120	84	20	横四角	焼成状		瓦葺	91
1802	VM4	112	100	22	長方形	焼成状			91
1817	VM4	100	90	12	横四角	焼成状		瓦葺	91
1896	V Q18	134	120	62	長方形	焼成状		釘、瓦葺片	71
1923	V Q18	90	70	24	長方形	焼成状			71
2012	V H1-8	136	100	90	横四角	焼成状	第一層		92
2020	VM22	160	110	40	長方形	焼成状	第一層、粘土ブロック・炭化物塊		94
2020	VM5	66	52	11	横四角	焼成状			94
2552	VM2	86	84	16	横四角	焼成状			81

第375表 中世土坑一覧表(2)

条件は十分満たしている遺構と把握される。これらの土坑の機能については不明と言わざるを得ないが、これらの存在は人骨の出土を除いた属性のみで墓址と判断することへの警鐘として特記しておきたい。その他、SK45は完形に近い青磁碗が伏せた状態で出土し、SK1066は斧2点と釘1点が、SK1158は銭貨が1点出土している。SK1066から出土した斧は、信濃との関係が極めて深い小笠原氏の代表家紋である松皮菱が施されているもので、小笠原氏との関連を考える上でも興味深く、また、歴史的にも重要な資料と成り得るのではないかと期待されるところである。

その他の土坑とした中にも、上記の分類に準ずる属性を有するものがあり、遺構配置や土坑の形態分類を加味した分析が今後必要であり、それによって集落内の空間利用を補完する資料として、また、集落形成の一翼を担う資料としての位置付けが可能となることだろう。

## 第2節 斜面部に形成された墳墓群

### 1 概要

河川址(SD102)右岸に僅かに広がる平坦面を含めた金井山山麓斜面部には、五輪塔を伴う火葬墓群、及び火葬施設が主体的に分布し、中世墳墓群を形成している。また、平坦部の最奥部山際には意図的な配石が広範囲から検出され、何等かの目的を持った整地の痕跡と認識される。これらの施設は、斜面をある程度掘削し、平坦面を形成した後構築されている。こうした平坦面は、近現代において桑畑を造成する際に基本構造として利用され、加えて、五輪塔等の各部分は、畑の石垣の石として用いられていた。こうした造成により、古墳時代に造営された古墳群は墳丘等が破壊され、その存在を不鮮明にし、一方、石垣から覗く多数の五輪塔は、中世墳墓群の存在を容易に想起させることとなったといえよう。

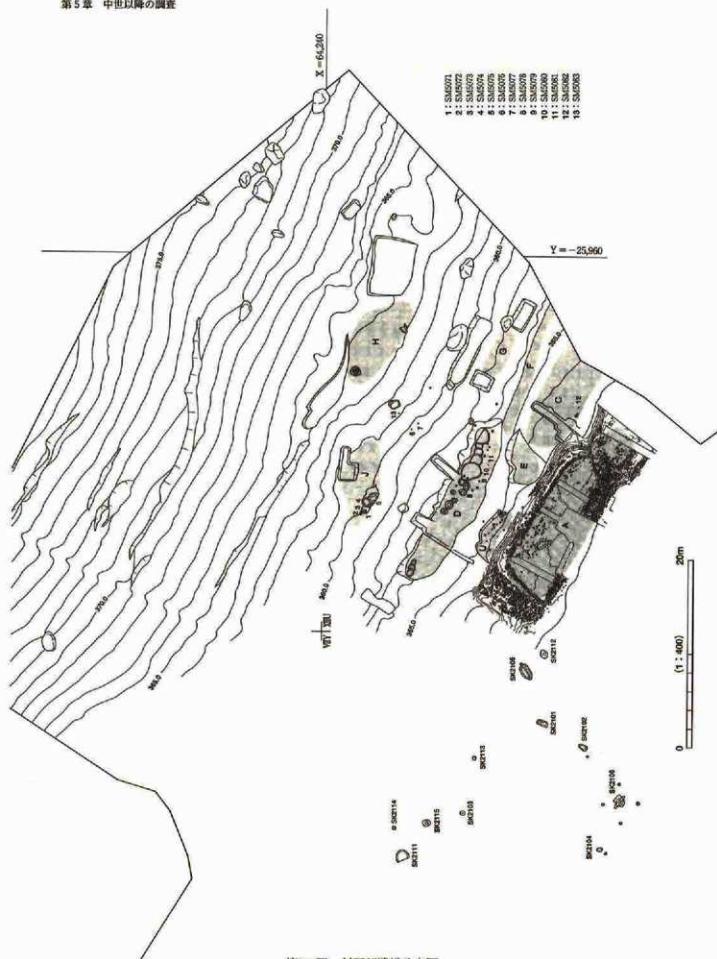
なお、本地区一帯は「八幡前」という小字名で、信仰に関わる施設が近隣に所在していたことが推測される。今回の調査で明らかとなった中世墳墓群または整地跡は、背後の斜面部に展開しており、字名の由来となる施設に相当する可能性も十分考えられる。この点については、今後の課題としておきたい。

### 2 河川址右岸平坦面(第256・257図)

火葬墓5基(SK2111~2115)、火葬施設1基(SK2106)と数基の土坑が分布する。河川址(SD102)は埋蔵分析の結果、中世以降の河道内は沼沢地化していたことが想定されており、火葬墓等が構築された時期にはすでに陸地化(凹地)していたことも推定される。したがって、後述する山麓斜面部テラスの最下段といった位置付けが成されていたことも推測し得る。いずれにせよ、最も山際の平坦面に、上記した施設で構成される墓域が展開していたことが明確で、居住域と隔絶する墓域として捉えられる。

火葬墓は、火葬骨の出土状況から2種に分類が可能である。一つは限定された狭い範囲内に火葬骨が集中するもの(SK2111・2113・2114)で、一つは墓域内全体に比較的散漫に火葬骨が分布するもの(SK2112・2115)である。前者は、有機質の蔵骨器に火葬骨を拾・取骨したものを埋納する火葬墓と考えられ、斜面部に展開する火葬墓と共通するものである。後者は、拾・取骨した火葬骨を墓域内に直接埋納する火葬墓と考えられる。両者の分布は、それ自体偏在性を示さないが、火葬施設(SK2106)との関係から言えばおよそ15mの間隔を置いて火葬墓が視角的に列状に分布することが指摘されよう。

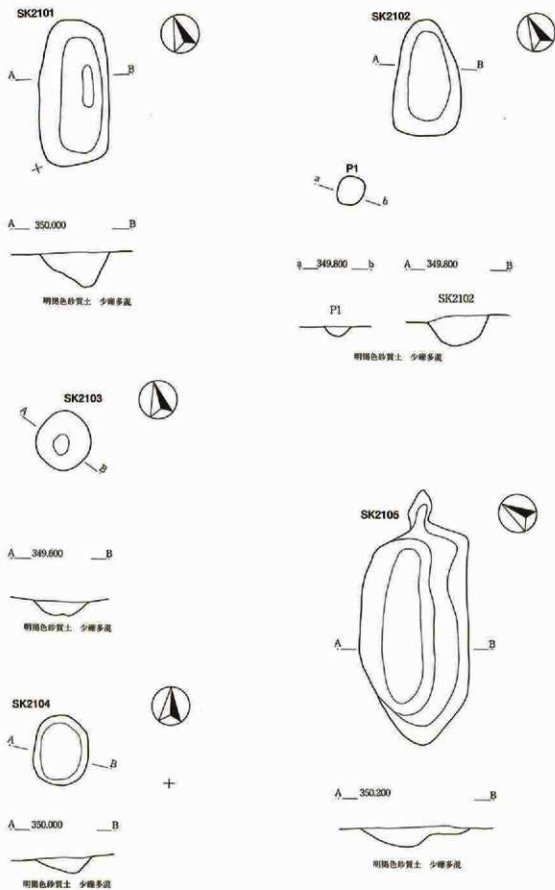
火葬施設(SK2106)は、底部に短軸方向に張り出す溝状の掘り込みを有するもので、中世における定形化した火葬施設と言える。この溝状の掘り込み及び張り出し部は被熱痕跡が著しく、燃焼効果を高めるための通気孔と考えられる。多数の焼土や炭化物とともに、火葬骨・釘・銭貨が出土しており、



第255図 斜面部遺構分布図







第257図 河川址右岸平坦面遺構図2 (1:30)

遺体を木棺ごと茶黒に付したことが推測される。また、周囲にはほぼ等間隔に配されたピットが検出された。これらピットを構築物とすれば、その軸線と火葬施設の軸線が同様ことから、茶黒行為・状況を視角的に遮断するなどというような有機的な関連が両者にあったことが想定される。同様な事例として、三重県鈴鹿市東庄内B遺跡例が知られる(森1984)。ここでは屋根懸けの建物が想定されている。なお、火葬施設を取り囲むピットから唐津碗(肥前1期, 1580~1600年)が出土しており、火葬施設さらには河川址右岸平坦面に展開する墓域の造営時期について、一定の目安となる。

### 3 山麓斜面部

#### (1) Aテラス (第258図)

平坦面の標高が351.2~352.0mで、山麓斜面部の事実上最下段のテラスである。テラス全面には意図的な長方形区画の配石が敷かれ、区画の配置及び等高線の配列から二つの整地跡と把握した。整地跡は、斜面に対して直角方向に長軸を持ち、整地跡1と整地跡2は一辺を共有または接している。

整地跡1は斜面下部にあたる南西方向に張り出す台形を呈しており、面積は、配石の内郭で計測するとおよそ72㎡である。配石は、傾斜の変換点に50cm前後の幅で、周囲に配されている。配石に用いられた礫は拳大~人頭大の角礫で、斜面掘削の際に掘り出された礫が利用されたものと推測する。また、配石と捉えて良いかどうか判断しかねるが、下方の傾斜部に葺き石状に配石と同様の礫が出土している。配石内部の平坦面には、礎石ともとれる礫が点在しており、何かの建物の存在が推定される。なお、整地跡1のほぼ中央部にあたる斜面上部には、破壊された松原3号墳の石室奥壁が位置しており、両者を有機的に結び付けて堂宇の存在を考えたこともあり、「八幡前」という小字名との関連で今後の検討課題の一つとなるだろう。

整地跡2については、多くが調査区外に含まれることが予想され判断としないが、整地跡1と一辺を共有または接していることから、整地跡1と関連が極めて深いと判断される。

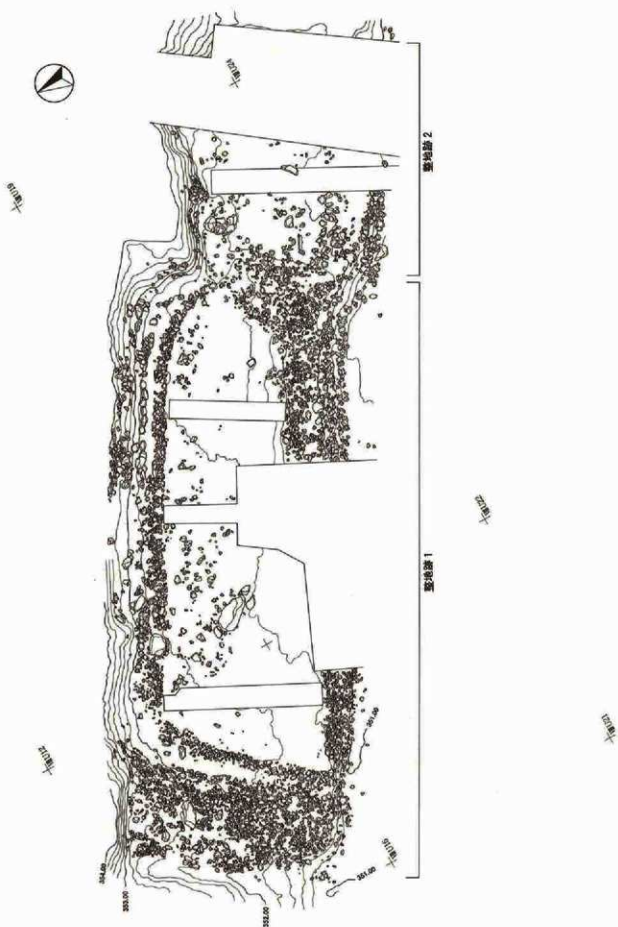
なお、Aテラスからは19世紀を中心とした焼物等が出土しており、14~17世紀に相当する焼き物も出土している。したがって、整地跡に伴う造営が行われた時期については19世紀、後述する整地跡に破壊された火葬施設並びに関連する斜面部に展開する火葬墓群の造営時期は14~17世紀と推論できよう。

#### (2) Dテラス (第259図)

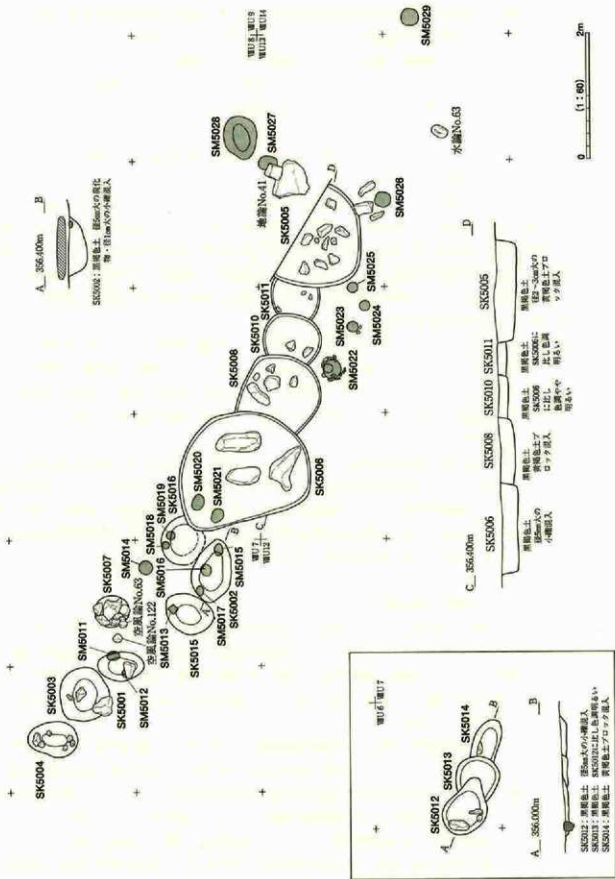
平坦面の標高が356~357mで、山麓斜面部の中段に相当するテラスである。火葬墓が23基分布する(第255・259図)。SK番号を付したものが列状に分布するが、これらはテラス造成に伴う掘り方状の掘削痕であり、火葬墓等に伴うものではない。なお、第259図に掲載したSM5027~5029は、Dテラスより上位の斜面部に位置するが、分布状況からDテラスに含めて考えている。

Dテラスに分布する火葬墓は、いずれも限定された狭い範囲内に火葬骨が充満するもので、有機質の蔵骨器に火葬骨を拾・収骨したものを埋納する火葬墓と判断される。平面形状は円形を主体とし、僅かに1例、SM5013が方形を呈している。蔵骨器として、木製の曲物及び箱物が利用されたと推測する。どの火葬墓も火葬骨の出土量が多く、1体分に近い量・部位の拾骨が行われたことが推察される(第6章参照)。

火葬墓の分布状況は東西の2群に分れ、箱物を蔵骨器とした火葬墓が西群の中央に位置している。これらが意味する背景を今後検討していく必要がある。また、五輪塔空風輪が2点、水輪1点、地輪1点が出土している。この内、地輪はSM5027の上部から出土しており、原位置に近い出土状況が予想され、両者の関係が目玉される。他の五輪塔各部についてもDテラスに伴うかどうかの検討を、合わせて進めていく必要があるだろう。



第258図 斜面部Aテラス整地跡実測図 (1 : 120)



第259図 斜面部Dテラス遺構図



## (3) Uテラス (第260図)

平坦面の標高が354~355mで、山麓斜面部の下段に相当するテラスである。火葬墓が最も多く分布するテラスで、37基を数える。平坦面の断面観察により、テラスが3次にわたって利用されていることが明らかとなった。それぞれの面は火葬墓群を構成しており、墓地としての長期間利用のみならず、Uテラスの被葬者群が、斜面部に形成された墓址群の中で中心的存在・役割を担っていたことが理解されよう。このことは、本遺跡最大で、しかも梵字の墨書が施された地輪（地輪№55）の存在からも、容易に推測される。この地輪は原位置を保っていたと考えられ、墓域全体の供養塔的な存在であった可能性がある。ただし、Uテラス最終面での造塔であることから、斜面部全体の造墓経過の復原や墓域成立の背景など、さらなる分析・検討を重ねて、慎重に位置付けていく必要がある。

火葬墓は、Dテラスと同様に、有機質の蔵骨器に火葬骨を拾・取骨したものを埋納する火葬墓と判断される。平面形状も円形を主体とし、僅かに1例、SM5044が方形を呈している。蔵骨器として、木製の曲物及び箱物を利用されたと推測する。また、火葬墓の断面観察によれば、墓域内に蔵骨器を埋納する火葬墓と、地表面等に現れている窆みや罫などを利用して蔵骨器を設置する火葬墓の二者がある可能性が考えられる。ただし、後者については、当時の地表面の復原が困難であるため、掘り方（墓墳）が確認されなかったに過ぎないことも十分考えられる。

火葬墓が多数造墓されたテラスに1例ずつ箱物を蔵骨器とした火葬墓が存在することは注目されよう。しかも、Uテラスにおいては、先に記した地輪の前面に位置しており、この形態の火葬墓の特殊性あるいは優越性が指摘できるのではなかろうか。また、SM5048は本遺跡最大の火輪を利用し、石囲いを構築している。SM5049との先後関係も明らかで、一つの面においても数次にわたる造墓活動が営まれていたことを理解する好例ともなっている。

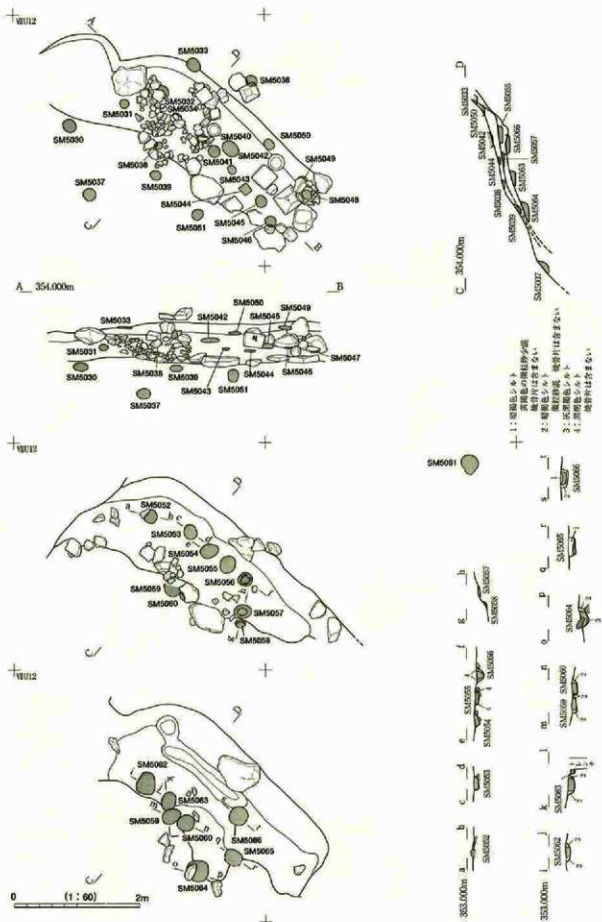
五輪塔の出土が確認されたのは最終面のみで、空風輪3点、火輪2点、水輪2点、地輪2点の他に、宝篋印塔の塔身1点が出土した。本遺跡最大の地輪が原位置を保っていたと考えられることから、五輪塔が1基造立されていたことは確実視される。この地輪を中心として、近接して本遺跡最大の火輪と水輪・空風輪が出土していることから、これらが組み合わせる可能性が推測されよう。他の五輪塔各部及び宝篋印塔についても、Uテラスに伴うかどうかの検討を、合わせて進めていく必要があるだろう。

## (4) その他のテラス・遺構 (第261図)

第255図に示したとおり、前項までのテラスを除くと遺構分布は散漫で、Cテラス・Hテラス・Jテラスに火葬墓・火葬施設が分布する他、E・F・Gテラスでは遺構が検出されなかった。また、SM5076・5077・5083が分布する範囲については、松原1号墳の墳丘を改変した部分であり、地形改変という意味ではテラスと同等に扱って良いものとする。なお、SK5017はAテラスに位置するが、整地に伴って破壊されていることから、ここで扱うこととする。

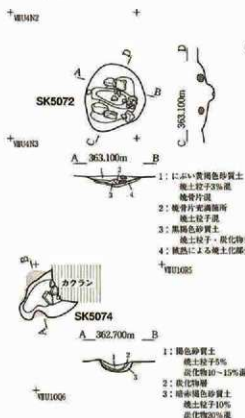
Hテラスは平坦面の標高が363~364mで、山麓斜面部最上段に位置する。火葬施設2基（SK5072・SK5074）が間隔をおいて分布する。JテラスのSK5071やSK5073を含めて、斜面上部に火葬施設が分布していることが指摘される。茶屋に伴う臭気や排煙等の問題を合理的に解決する手段として、標高の高い位置及び風上という条件を満たす土地があった可能性が推測される。また散骨の存在、その方法については全く不明であるが、斜面部下方では火葬骨が散在しており、高位置からの投下は合理的と考えられる。

SK5072は、底面に溝状の掘り込みを伴った燃焼効果を高める造作を施した火葬施設で、細部に相違点は見られるが、本遺跡の平坦面や河川右岸平坦面に構築されている火葬施設と同様である。なお、相違する点は、遺構の平面形が楕円形であること、通気孔が遺構外に張り出さないこと、通気孔脇に配石して通

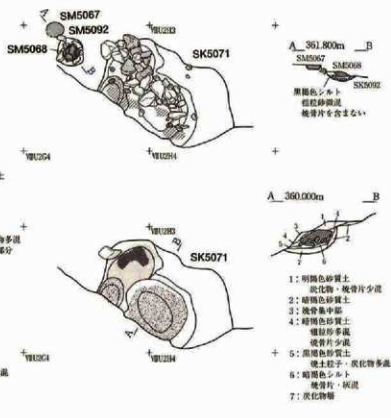


第260図 斜面部Uテラス遺構図

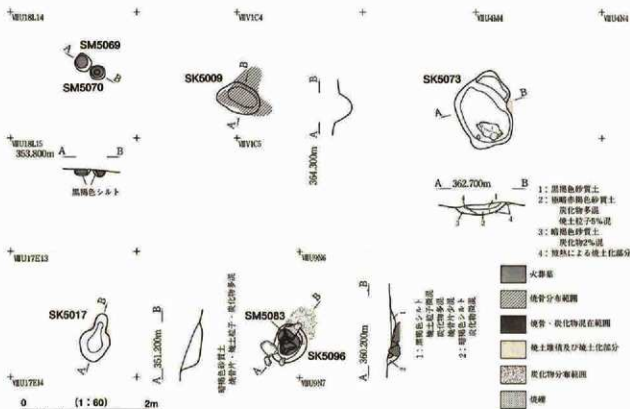
Hテラス



Jテラス



Cテラス



第261図 斜面部個別構造図 (1:60)

気孔の深さまたは空間の増長を図っていることの3点である。

Jテラスは平坦面の標高が360～361mで、山麓斜面部上段に位置する。火葬墓（SM5067・5068）・火葬施設（SK5071）が平坦面端部に分布する。

隣接して検出された2基の火葬墓の内、SM5068はSK5092とした墓墳（掘り方）内に安置されたものである。SK5092は断面皿状を呈する浅いものだが、底面・壁面とも平石が配されている。

SK5071は、これまで検出された火葬施設とは規模・形態の面からも格段の差が認められる。遺構内に遺存する炭化物の量や底部の被熱痕跡及び焼土堆積の状況から、結論付けることはできないが、長期間・複数遺体の茶昆という機能的側面が想像される。

Cテラスは平坦面の標高が353～355mで、山麓斜面部下段に位置する。火葬墓2基（SM5069・5070）は隣接して平坦面端部に分布する。曲物等の有機質の蔵骨器を用いたと考えられる火葬墓である。

SM5076・5077・5083及びSK5073・5096は、松原1号墳の墳丘が改変された標高359～362mの範囲に位置し、山麓斜面部の上段に相当する。3基検出された火葬墓の内、SM5083は松原1号墳玄室内に位置し、SK5096とした墓墳（掘り方）を伴っている。火葬骨の分布状況からして、有機質の蔵骨器を用いたかどうかの判断は困難である。SK5073は火葬施設であるが、JテラスのSK5071と同様に、形態的に見て他の火葬施設とは区別される。

SK5009は標高364mの等高線状で検出された。土坑上面に火葬骨散布が確認された遺構で、斜面部で確認されている火葬墓とは様相が異なっており、土坑についての機能は不明確である。

SK5017はAテラスに所属する火葬施設である。整地址1の造成に伴って、上部が破壊されているため全容はつかめないものの、火葬施設の通気孔に相当する底面に設けられた溝状の掘り込みのみが遺存する遺構と考えられる。

#### (5) 若干のまとめ

山麓斜面部で検出された火葬墓は73基で、そのほとんどが有機質の蔵骨器を用いていたと考えられる。火葬墓は、南西向きの斜面をテラス状に掘削・造成した墓域に造墓され、墓域には五輪塔が伴う。五輪塔は原位置を留めるものはほとんど確認されなかったが、空風輪134点、火輪53点、水輪71点、地輪55点と宝篋印塔や層塔などの破損品が出土している。五輪塔については、空風輪の出土数から最低134組の五輪塔が墓域内に造立していたことが想定される。火葬施設も墓域内に設置されているが、火葬墓が造墓される区域とは隔離される傾向が窺え、斜面の上部及び下部に位置付いている。

斜面部に造成されたテラスの内、下段に相当するUテラスでは造墓活動が3次にわたっていることが確認され、墓域としての空間が長期にわたって保持されていたことが理解される。同時に、Uテラスでは本遺跡最大の地輪・火輪が出土しており、地輪については四面に梵字の墨書を伴い、原位置を保っていたことが想定されることから、Uテラスの被葬者は墓域を形成した集団内でも有力または中心的な役割を担っていた存在と推測される。また、各テラスの火葬墓には、有機質の蔵骨器の形態や墓墳の在り方などの格差がそれぞれのテラスごとに窺え、各テラスは、一定の集団内にあっても、それぞれに独立性のある集団の墓地であったことが予想される。

また、火葬骨の分析・鑑定から、軟組織のついたままの状態即ち遺体を火葬し、その際、均一な火力が得られなかったことが報告されている。拾骨については、特定部位や拾骨量に一定の規範があったわけではなく、火葬墓個々に多様性が認められる。被葬者の性別・年齢層にも、今回鑑定・分析した火葬墓において、一定の制約は認められない（第6章参照）。

造墓時期については、主体となる19世紀前後の焼物に混じって、僅かに出土した14～17世紀に相当する

焼物の存在から、14～17世紀という時期をあてたい。大まかで年代幅の広い時期設定であるが、今後、五輪塔の諸属性の分析等から年代を絞り込んでいきたいと考える。

### 第3節 中世以降の遺物

#### 1 焼物・土製品

本遺跡では、中世に帰属する遺構、中世墓址群が立地する斜面部、遺構外、古代の遺構、近世以降の暗渠などから、器形の推定が不可能な小破片を含めて837個体の焼物が出土した。中世以降の焼物については、実測が不可能な小破片であっても時期や産地が特定できることが多くあり、それらをすべて報告することが正道であるのは言うまでも無いが、全資料について体系的な分析・検討が実施できなかったこともあり、ここでは、実測が可能な焼物を中心として記述を行うこととする。

##### (1) 遺構出土遺物 (図版316～321)

###### A 溝址

###### SD15 (1～4)

1～3はロクロ成形によるカワラケで、2は見込みに横ナデが施される。4は在地産土師質の内耳鍋(15世紀)で、口縁部外面は回転ナデ、胴部はナデ、内面は回転ナデ調整が施される。図示した以外に破片資料で、珠洲産摺り鉢(13世紀後半)、在地産須恵質摺り鉢(14世紀)などが出土している。

###### SD1003 (5)

5はロクロ成形によるカワラケである。図示した以外に破片資料で、龍泉窯系の青磁碗(龍泉窯系青磁I-1類, 12世紀後半)、灰釉が施軸された古瀬戸の瓶類(13世紀?)などが出土している。

###### SD1004 (6)

6は白磁口はげ皿(白磁I類, 13世紀後半～14世紀)で、軸は底面にまで及ぶ。

###### SD1151 (7)

7は在地産土師質の内耳鍋(16世紀)で、口縁部外面は回転ナデ、胴部はナデ、内面は回転ナデ調整が施される。図示した以外に破片資料で、唐津の碗(17世紀後半～18世紀)、伊万里の皿(近世)などが出土している。

###### SD1178 (8・9)

8は珠洲の摺り鉢(珠洲III・IV期, 13世紀後半～14世紀前半)で、9は常滑の捏ね鉢(常滑5・6期, 13世紀中葉～後葉)である。

###### SD1187 (10)

10は唐津の丸碗(肥前III期具器系, 1650～1690年)で、高台の面取り部のみ軸がふき取られている。

###### SD1244 (11・12)

11は在地産の摺り鉢(15世紀)で、節目が細く密である。12は珠洲の摺り鉢(珠洲V期, 15世紀前半)である。図示した以外に15世紀代から近世に至る破片資料が出土している。

###### I 道路址

###### SD1019・SX1001 (13～21)

中世以降の道路址と把握される遺構で、SX1001は検出面、SD1019は掘り込みにそれぞれ相当する。また次項のSD1168についても、調査区・年度が異なったために別の遺構番号が付されたもので、本来は一つの



遺構として認識されるべきものである。

13は在地産の香炉（15～16世紀）で、見込みに横ナデが施される。14・15は珠洲の播り鉢（14：珠洲IV期，14世紀後半，15：珠洲V期，15世紀前半）で、16は畿内系の瓦質播り鉢（13世紀後半？）である。17は在地産土師質の内耳鍋（近世）で、口縁部外面のみ回転ナデが施される。18～20は同じく在地産土師質の内耳鍋（16世紀）の口縁部破片で、口縁部外面のみ回転ナデが施される。21は近世のホウロクである。図示した以外には、古瀬戸の皿や天目茶碗など14世紀代から17世紀に至る破片資料が出土している。

SD1168（22～25）

22は龍泉窯系の青磁碗（13・14世紀）で、削り出し高台・見込みスタンプが特記される。23は同安窯系の青磁皿（12世紀後半）で、底部回転ヘラ削り・見込み櫛目が特記される。24・25は在地産瓦質の播り鉢（14世紀末葉～15世紀初頭）である。図示した以外には、在地須恵質の播り鉢、常滑の甕、唐津の碗など13世紀代から19世紀に至る破片資料が出土している。

#### ウ 平垣部の中世墓址

SK1014（26）

26は龍泉窯系の青磁碗（龍泉窯系青磁Ⅲ4類，13世紀後半～14世紀前半）である。

#### エ 斜面部の中世墓址群及びその周辺

遺物番号に併記した出土地点の内、SM5001は松原1号墳の調査中に得られた資料を意味する。27はロクロ成形のカワラケで、28は珠洲の播り鉢（13世紀末葉）である。31は古瀬戸の仏華瓶（14世紀）、32は古瀬戸の香炉（15世紀）で、両者とも灰釉が施釉されている。35は青磁鉢（13世紀）で、36は常滑の大甕で胴部に押印が施されている。

30・33は整地（Aテラス）から出土した。30は珠洲の大甕（珠洲IV期，14世紀）である。33は古瀬戸の瓶子（中・後期様式，14世紀後半～15世紀前半）で、灰釉が施釉されている。

34は火葬施設SK2106を方形に取り囲むピットから出土した唐津の碗（肥前I期，1580～1600年）で、削り出し高台・鉄釉が特記される。

29は⑧-3区から出土した珠洲の播り鉢（珠洲V期前，15世紀）である。

#### オ 井戸址

SK2（39）

39は龍泉窯系の青磁碗（龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類，13世紀）である。

SK523（37）

37は在地産土師質の内耳鍋で、口縁部外面は回転ナデ、胴部はナデ、内面は回転ナデ調整が施される。

SK533（40）

40は手ずくね成形によるカワラケ（13世紀）で、内外面ナデ調整、底面指ナデ調整が施されている。

SK1033（52）

52は珠洲の水注（珠洲Ⅱ・Ⅲ期，13世紀）と考えられる。注口部はヘラ削りによって面取りが意識され、注口基部には列点文が巡る。列点文は単位性が認められないことから、歯状工具ではなく棒状工具による刺突と考えられる。ただし、結束の弱い歯状工具（簾状工具）であった可能性も否定し切れないところである。

SK1080（59）

59は珠洲の壺と考えられる。底部付近に、棒状工具による刺突が確認される。図示した以外に、龍泉窯系の青磁碗（龍泉窯系青磁Ⅰ-1類orⅣ類，13～14世紀）、在地産瓦質の播り鉢（14世紀末葉～15世紀前葉）などが破片資料として出土している。

SK1255 (38)

38は在地産須恵質の擂り鉢（14世紀）で、底部は砂底である。

SK1533 (59)

59は中津川の壺（13世紀後半～14世紀前半）で、内面には施釉前に「キ」という線刻が施されている。

SK1541 (53・54)

53は在地産土師質の内耳鍋（15世紀）で、内外面ともナデ調整が施される。54は在地産須恵質の擂り鉢（14世紀）である。

SK1550 (43～51)

43～51はロクロ成形によるカワラケ（15世紀前半～16世紀）で、43～49・51は見込みナデなし、50は見込みオサエの横ナデが施されている。44は内面中央部に、51は内外面に煤が付着している。また、51は精製カワラケである。図示した以外に、古瀬戸の天目茶碗（14～15世紀）、在地産土師質内耳鍋（15～16世紀）が破片資料で出土している。

SK1560 (41)

41はロクロ成形によるカワラケ（15世紀前半）で、見込みにナデ調整はなく、底面に細板状の疋痕が観察される。図示した以外に、精製カワラケ（15世紀）、外反口縁の在地産土師質内耳鍋（15世紀）が破片資料で出土している。

SK1562 (55)

55は珠洲の擂り鉢（珠洲Ⅰ・Ⅱ期，12世紀後半～13世紀前半）で、底部切り離しは静止糸切りである。

SK1574 (56)

56は珠洲の擂り鉢（珠洲Ⅲ・Ⅳ期，13世紀後半～14世紀前半）である。

SK1655 (42)

42はロクロ成形によるカワラケ（14世紀前半？）で、見込みオサエの横ナデが施され、内面には煤が付着する。底面に細板状の疋痕が観察される。図示した以外に、中津川の壺あるいは壺（13世紀後半～14世紀前半？）が破片資料で出土している。

SK2513 (57)

57は珠洲の擂り鉢（珠洲Ⅰ・Ⅱ期，12世紀後半～13世紀前半）で、底部切り離しは静止糸切りである。

カ 土坑

SK45 (60)

60は龍泉窯系の青磁碗（龍泉窯系青磁Ⅰ-5b類，13世紀）である。完形に近い形状を保ち、坑内に伏せた状態で出土した。

SK1004 (62)

62は珠洲の擂り鉢（珠洲Ⅱ・Ⅲ期，13世紀）で、底部切り離しは静止糸切りである。

SK1053 (61)

61は同安窯系の青磁碗（12世紀後半）で、削り出し高台・髷目文が特記される。

SK1133 (63)

63は珠洲の四耳壺（珠洲Ⅱ期，13世紀前半）で、特徴的な髷目文が施されている。図示した以外に、在地産瓦質の擂り鉢（14世紀末葉～15世紀初頭）が破片資料で出土している。

SK1221 (64)

64は在地産瓦質の擂り鉢（14世紀末葉～15世紀初頭）である。

## SK1581 (65)

65は珠洲の播り鉢（珠洲Ⅲ期，13世紀後半）である。図示した以外に、龍泉窯系の青磁碗（龍泉窯系Ⅰ-5b類，13世紀）が破片資料で出土している。

## SK1807 (67)

67は珠洲の播り鉢（珠洲Ⅲ期，13世紀後半）である。図示した以外に、在地産須恵質の播り鉢（14世紀）が破片資料で出土している。

## SK1813 (68)

68は古瀬戸の香炉（後Ⅱ・Ⅲ期，1380～1440年）で、灰釉が施軸される。図示した以外に、在地産瓦質の播り鉢（15世紀前半）、土師質の内耳鍋が破片資料で出土している。

## SK1837 (69)

69はロクロ成形による大形のカワラケ（15世紀前半？）である。

## SK1844 (70・71)

70・71はロクロ成形によるカワラケ（14世紀後半～15世紀前半）で、70の底面には細板状の圧痕が観察される。71の口唇部には煤が付着しており、灯明皿として用いられていたことが想定される。

## SK1848 (66)

66は在地産瓦質の播り鉢（13世紀？）である。図示した以外に、龍泉窯系の青磁小皿（13世紀）が破片資料で出土している。

## SK1850 (72)

72はロクロ成形によるカワラケ（14世紀？）で、底部は回転糸切り後ナデ調整を施している。

## (2) 遺構外出土遺物（図版319～321）

## ア カワラケ（73～77）

いずれもロクロ成形によるカワラケで、73・75を除いて、見込みにナデ調整が施され、底面に細板状の圧痕が観察される。時期については特定が困難で、中世という大まかな判断にとどまざるを得ない。

## イ 内耳鍋（78～84）

瓦質の84を除いて、他は土師質である。耳部は破片資料として本遺跡でも検出されているが、器形復元が可能な個体及びそれぞれの接合関係は無く、口縁部形態との関係や貼付位置などについては不明確である。78～81が15～16世紀、82・83が15世紀、84が14世紀末葉～15世紀前半と想定される。

## ウ 在地産播り鉢（85～92）

在地産播り鉢については、珠洲産播り鉢をモデルとしながら須恵質土器（14世紀）→瓦質土器（14世紀末葉～15世紀初頭）→土師質土器（15世紀）という変遷観が提示されている（市川1997）。十分な検討はできなかったが、本遺跡では在地産・珠洲産の播り鉢が出土しており、今後の編年研究に良好な資料となるだろう。85～87が須恵質土器、88が土師質土器、89～92が瓦質土器である。

## エ 珠洲播り鉢（93～101）

93・95・97が珠洲Ⅱ期、96が珠洲Ⅲ期、90・98・100・101が珠洲Ⅳ期、99が珠洲Ⅴ期に相当する。

## オ 古瀬戸（102～106）

102・103は天目茶碗で鉄釉が施軸される。102は底部付近から錆釉が施軸され、103は削り出し高台である。104は緑釉小皿で、灰釉が施軸される。105は平碗で、灰釉が施軸される。106は香炉で内外面とも鉄釉が施軸される。

カ 山茶碗系捏ね鉢 (107)

東海地方南部の窯産と考えられる。内外面ともナデ調整が施される。13世紀後半か？

キ 常滑捏ね鉢 (108・109)

108は外面に指頭痕が残り、口縁部外面のみ回転ナデ調整が施される。常滑6期(14世紀前半)に相当しよう。109は内面の使用痕が顕著である。貼り付け高台で、高台部に釉薬が部分的に認められる。常滑5・6期(13世紀)に相当しようか。

ク 越中瀬戸 (117~119)

117・118は摺り鉢で、内外面とも錆釉が施される。117が16世紀末葉、118が17世紀前半と考えられる。119は削り出し高台の鉄釉が施される皿で、見込みは釉薬が拭き取られている。17世紀前~中葉と考えられる。

ケ 信楽 (120)

無釉の壺で、時期については特定が困難で、中世という大まかな判断にとどまざるを得ない。

コ 中国陶磁器 (110~116)

110~113は龍泉窯系の青磁碗で、110はIV類(14世紀)、111はI-5b類(13世紀)、112はIII-2類(13世紀後半~14世紀前半)にそれぞれ相当し、113は削り出し高台で14世紀前半~15世紀前半の碗底部である。114は龍泉窯系の青磁小皿で、I-1類(12世紀後半)に相当し、底部は回転へら削りである。115は白磁四耳壺の底部で、削り出し高台である(13世紀後半~14世紀前半)。116は13世紀の青白磁壺形合子で、口唇部は施釉されない。

(3) 土製品 (図版321-1~5)

形態に統一性はないものの、いずれも所謂土製平板の範疇で捉えられるもので、破損した焼物や瓦を二次利用したものである。1は龍泉窯系の青磁碗底部(龍泉窯系青磁I-5b類, 13世紀)、2は瓦(19世紀)、3は瀬戸美濃本業焼の皿(19世紀)、4は唐津の皿(肥前II期, 1600~1630年)、5は内耳鍋(15-16世紀)をそれぞれ素材としたものである。

1は側面部の全周の1/3ほどが摩滅あるいは研磨されており、その部分を挟んで両側に打ち欠き部が接している。研磨部が使用の結果によるものか、円を形成するための調整・形成痕なのか判断しかねる。

側面部の状況は、2・3は研磨部のみ、4は打ち欠き部のみで構成されている。2は側面部全周の7割弱が、3は5割が摩滅あるいは研磨されており、それに対して4は側面部のほぼ全周が打ち欠き部となっている。1と同様に研磨部や打ち欠き部が何に起因するか今後の検討課題の一つである。

5の側面部は同様に研磨部となっているが、表面に敲打によるものか、掘り窪みが生じている点、特徴的である。これら土製品の機能等については不明な部分が多く、類例の集成と多方面からの分析が重要である。今後に期待したい。

2 石器・石製品

(1) 砥石 (図版322・257-54, PL152)

砥石は古代・中世を合わせて80点出土し、その内、中世以降の所産と判断した7点を図示した。なお、それらの諸属性については第362表古代砥石一覧表(2)に掲載した。

古代の砥石と同様に、製作方法により以下のように2大別される。

I類: 河原石(円礫・亜円礫)や露頭からの転石(角礫)をそのまま用いた砥石……2

II類: 剥片剥離作業を経た整形加工を伴う砥石……………1, 3~6, 54

これらの中で注目されるのは、表裏面及び端部に櫛目状の使用痕あるいは工具痕が観察される4・6である。こうした痕跡を伴う砥石と同様な事例として、松本市の松本城下町跡本町地点の調査報告で取り上げられた「10条で一単位をなす沈線状の工具痕が認められる」砥石があげられる。ここでは出土した4,859点の砥石すべてにこうした痕跡が認められ、これらは「製作工程の最終段階に施された」とし、「石質の特徴、さらに製作工程時につけられた櫛目状の模様などの特徴から群馬県甘楽郡南牧村砥沢産の砥石の可能性が非常に高い」ことを指摘している(竹内1999)。さらに、竹内氏は、砥石の属性・石質鑑定・文献史料等を総合化させ、近世における物資(砥石)流通について考察を加えている。本遺跡資料については、斜面部から近世以降の焼物とともに出土しているものの時代の特定は困難で、また使用・未使用の違いや使用により条の単位が読めないなど、安直に比較または答を出すことには躊躇するが、報文中の写真を見る限り、本遺跡資料と極めて類似していることも重大な関心事である。今後、竹内氏の分析手法等を継承・発展させながら、類型等の集成及び分析が期待されるところである。

## (2) 台石・凹石(図版322, PL152)

摩耗痕や敲打痕を有する大形の自然礫(円礫・角礫)を一括し、6点を図示した。石質は1の砂岩を除いてすべて安山岩である。

1~4は断面長方形の礫を素材とし、平坦面の一部が使用されるという点で共通する。1は表面の両端部に摩耗痕・敲打痕がそれぞれ観察される。2は破損礫のため部位については不明瞭であるが、表面の端部(または中央部)に摩耗痕のみが観察される。また、成分分析は実施していないが、黒色の付着物が摩耗痕中及び側面部で観察される。3は表面中央部に敲打による円形の窪みが形成されている。4は表裏面及び両側面の端部に摩耗痕が観察される。また、下端部が茎(柄)状に突出しているが、加工痕等は観察されず素材本来の形状であったと考えられる。

いずれについても機能・用途については不明と言わざるを得ないが、4については、摩耗痕に見られる線状痕の方向がそれぞれの面で比較的一定しており、作業面も一定の幅(最大で礫素材の長軸)を有することが可能という特徴を指摘できよう。このことから、推測の域を脱し得ないが、「皮剥し」のような、平坦な台の上に対象物を置き、その上から礫の角を利用して押し引くような作業が想定できまいか。

5・6については円礫を素材とし、中央部に敲打及び摩耗による円形で断面楕円状の窪みが形成されるという共通点が見られる。両者は他に断面U字形の溝状の研磨痕が表裏面及び側面などに観察され、内容の異なる複数の使用痕跡を合わせ持つという特徴を有している。

## (3) 軽石製品(図版323, PL152)

浮岩すなわち軽石は古代・中世を合わせて130点出土した。その内、面的な摩耗痕・溝状の研磨痕跡・穿孔及び円筒形の孔を有するなど、明らかに使用もしくは加工の痕跡をとどめる5点を中世以降の軽石製品として図示した。なお、2・5については、2が一方の端部に敲打痕があり、5は表面中央部に敲打痕がある。また、2の表面には鋭利で直線的な刃物等による切削痕が観察される。石質も前項の5・6と同様に安山岩で、敲打痕を主とした使用痕を持つことから前項で扱うべき遺物である。

1・3は面的な摩耗痕を有し、4は穿孔・円筒形の孔・溝状の研磨痕跡と内容の異なる複数の使用痕跡を合わせ持つ。これら三者は、古代において把握された軽石製品と全く同様であり、中世遺構及び検出面から出土したことのみを以て時代を特定することの問題点を示唆する好例である。仮に中世以降の所産とすれば、一定の機能・用途に時代を越えた素材の共通性が求められていたと言えることができよう。いずれにしても、類型の集成を試み、今後の分析に多くを委ねなければならない資料群の一つである。



## (4) 石臼・茶臼 (図版323~325, PL153)

1は粉挽き臼の上臼の破片で、挽き手穴とすり合わせ面を残す。挽き手穴は隅丸の長方形もしくは多角形であったことが推測され、開口端部には黒色付着物が観察される。臼の目は6分画あるいは8分画で、副溝は主溝に平行かつ等間隔に刻まれている。すり合わせ面の中央寄りには凹凸が著しく、溝のアウトラインが乱れることから、ものくぼりの痕跡と想定されよう。また、すり合わせ面の縁辺部には、挽き手穴開口部と同様な黒色付着物が観察される。なお、すり合わせ面と引手穴の下辺部が平行関係に無いことから、片減り・器形の歪みが想定される。

3は粉挽き臼の上臼の破損品で、上縁・凹み面・挽き手穴・すり合わせ面を残す。上縁は凹み面からほぼ垂直に立ち上がり、高さ(深さ)は3.2cmを測る。上縁の端部と凹み面はともに平坦である。挽き手穴は隅丸の長方形で、開口端部は使用に伴って丸みを帯びている。臼の目は6分画と想定され、副溝は主溝に平行かつ等間隔に刻まれている。ただし、溝が刻まれる間隔については分画によって相違するという特徴を持つ点、注目される。片減り・器形の歪みが顕著で、それに伴いすり合わせ面では溝が消失する部分が生じている。

4は粉挽き臼の上臼で、本遺跡中最も遺存状況が良好な資料である。上縁は凹み面から緩やかな角度で立ち上がり、高さ(深さ)は2.5cmを測る。上縁の端部と凹み面はともに平坦である。凹み面には隅丸方形の供給口が垂直ではなく、芯棒受けに向けて傾斜する角度で穿孔されている。挽き手穴は隅丸の長方形で、開口端部は使用に伴って丸みを帯びている。臼の目は8分画と想定され、副溝は主溝に平行かつ等間隔に刻まれている。片減り・器形の歪みが顕著で、それに伴いすり合わせ面では溝が消失する部分が生じている。芯棒受けは推定径2.7cmの円形で、2段底を呈する。二つの底面は同心円ではなく、径2.0cmの深い方の底が一方に偏在する。深さは1段目までが3.1cm、最深部で4.0cmを測る。芯棒受け側面及び2段の底面は摩擦により平滑であるが、その度合いは側面が最も顕著である。なお、被熱による赤色化及び黒色付着物が器面のみならず破損面でも観察される。

5は粉挽き臼の上臼の破片で、上縁・凹み面・供給口・すり合わせ面を残す。上縁は凹み面から緩やかな角度で立ち上がり、高さ(深さ)は2.9cmを測る。上縁の端部と凹み面はともに平坦である。供給口が上縁に近い部分に穿孔されている。破損品のため不明な部分が多いが、穿孔の形状及び角度については、漏斗状もしくは垂直ではなく内側にやや傾斜していたと把握される。臼の目については不明である。

2は形態から茶臼下臼の受皿と判断した破片資料である。茶臼の受皿の内面加工は丁寧な仕上げが一般的であるのに対して、本資料を茶臼受皿片とした場合、その内面加工は本遺跡出土の粉挽き臼の凹み部とほぼ同様で、粗野な仕上げと判断されよう。なお、内外面とも黒色の付着物が器面にしみ込むような状況が観察される。

6~10は搗き臼と考えられるものである。いずれも、内外面及び底面とも敲打による粗仕上げで成形され、内面において摩擦痕は一切観察されなかった。9については内面に明らかなノミ痕が認められるが、全体として使用痕と加工痕の区別は曖昧なものとなっている。したがって、7や10については製品か未製品かの区別も困難である。また、6・8については内面に凹凸は認められるものの、面的な調整が施されていると考えられ、全容が不明瞭な資料群の中においては、搗き臼として注目される資料となろう。

## 3 石塔類

## (1) 五輪塔

本遺跡出土の五輪塔は、空風輪が一体で、したがって四石五輪で造られている。ただし、造立されているものは一切なく、原位置を保っていたと推測される地輪についても僅か1点（地輪55）のみである。また、紀年銘を有するものはなく、梵字を墨書する地輪が1点（地輪55）出土している。

五輪塔の各部位は、空風輪136点、火輪53点、水輪71点、地輪55点で、総数315点を数える。このうち空風輪の2点が平坦面に位置する基址（SK1032）から出土しただけで、それ以外はいずれも火葬墓群で構成される斜面部からの出土である。したがって、斜面部においては134組以上の五輪塔が造立されていたことが理解される。斜面部での出土状況は、近・現代に至って桑畑を営むための石垣を構成する一石材として用いられていたものが多く、造墓時に造成されたテラス上から出土したものについても、ほとんどが人為・自然営力により移動している。そうした中、前記した原位置を保っていたと推測される地輪55や火葬骨を埋納する際に石組みとして用いられた火輪54などは、いろいろな意味で注目される。

五輪塔の石材は、いずれも普通輝石紫蘇安山岩である。本遺跡の東方に位置する奇妙山（1099.5m）周辺からその北西麓にかけてと、松代町東寺尾・大室付近に分布するとされる奇妙山火山岩に相当する。奇妙山火山岩には紫石火山岩と奇妙山火山岩があり、五輪塔の石材は見かけ上、紫石火山岩と考えられる。今後の研究の進展如何では、顕微鏡観察も必要となると思われる。また、五輪塔は個体によって色調に違いがあり、「あざ」と称される局所的（レンズ～長楕円形状）に色調の変化する部分が認められる。

五輪塔の各部位については、五輪塔が大量に出土した遺跡において様々な形態分類が示されている（石川1998、中島1998、若林1999等）。現状においては、それらの基準となるものは遺跡個々であるため比較という側面から足枷となる場面も想定される。もちろん、各地域で製作され、使用されていることからそうした経緯・帰結点は至極当然のことと思われる。しかしながら、それらの多くが相対的変遷の究明にとどまらざるを得ない状況にあり、それは紀年銘を有することが稀という資料的な制約があるからに他ならない。今後、発掘資料の限界を認識し、同様の方法論を用いてその地域に現存する資料との比較検討する必要性が指摘されよう。そうした意味においても、中島氏による豊田村対面所遺跡（中島1998）や若林氏による坂城町観音平経塚（若林1999）で実践された研究成果は特筆されるものと考えられる。五輪塔は五輪揃って一つの石塔であり、発掘資料においては、その組み合わせを究明することも年代を想定することと同様に重要であることは言うまでもない。

なお、空風輪・火輪・水輪・地輪ともNa1～5については、各部位の調和・見栄え等を意識して組み合わせ、長野県立歴史館の屋外展示物として開館当初（平成5年11月）から展示されている（PL154）。

## ア 空風輪（図版326、第376・377表）

136点が出土し、その内、完形及び完形に近いものや代表的な形態を示すものを中心として30点を図示した。大きさや形態から分類が可能であるが、今回は資料提示にとどめた。一覧表の計測値・数値は以下のことを示す。

A：空風輪の高さ	c：風輪の高さ	a/A：空輪の高さ÷空風輪の高さ
a：空輪の高さ	d：ホゾの長さ	a2/A：空輪底面から空輪最大径までの高さ÷空風輪の高さ
a1：空輪最大径から頂部までの高さ	e：空輪最大径	a/e：空輪の高さ÷空輪最大径
a2：空輪底面から空輪最大径までの高さ	f：風輪最大径	f/e：風輪最大径÷空輪最大径
b：空輪と風輪の境界部の高さ	g：ホゾ最大径	c/a：風輪の高さ÷空輪の高さ

空輪の形態は丸みを帯びるものではなく、いずれも稜線があり、稜線部が空輪最大径(e)となる。したがって、稜線の位置( $a_2/A$ )及び空輪最大径の指数( $a/e$ ,  $f/e$ )が空風輪の形態分類を行う上で一つの目安となり、さらに空輪と風輪の高さの比率( $c/a$ )が関連する。また、数値に表れないものとして、風輪側面の形態が挙げられる。9・57のように丸みを帯びたものが確実に存在し、9は風輪の側面形態を除けば、97などとほぼ同様な数値を示している。この点については、分類基準の設定を含めて今後の検討課題の一つである。なお、石塔としての五輪塔の大きさの相違は様々な背景が考慮されるが、単純に空風輪の大きさという点では、それぞれの形態の相似形という関係で捉えることが可能である。

#### イ 火輪 (図版327, 第378表)

53点が出土し、その内、完形及び完形に近いものや代表的な形態を示すものを中心として20点を図示した。大きさや形態から分類が可能であるが、今回は資料提示にとどめた。一覧表の計測値・数値は以下のことを示す。なお、火輪の正面観については不明と言わざるを得ず、上から見て正方形を呈する個体がないことから、便宜的に最大幅と直交する面を正面として実測・計測等を実施した。

B: 火輪の高さ	m: 火輪上面最大幅
h: 火輪の高さ—火輪底面から軒上端までの高さ	o: 火輪最大幅
i: 軒の高さ(中央部)	p: 火輪底面最大幅
j: 火輪底面から軒下(i計測点)までの高さ	k/i: 軒端部の高さ軒中央部の高さ
k: 軒の高さ(端部)	i/B: 軒中央部の高さ÷火輪の高さ
l: 火輪底面から軒下(k計測点)までの高さ	k/B: 軒端部の高さ÷火輪の高さ

火輪の形態は、軒が高く直線的なもの( $28 \cdot 50$ 等— $i/B$ )とそうでないものにと大きく二分される。後者は、軒が低いもの・高いもの( $k$ ,  $k/B$ )、軒の湾曲が強いもの・弱いもの( $k/i$ )などに細分が可能である。さらに、一覧表に数値化できなかったが、軒の立ち上がり角度についても先の属性と相関性が認められる可能性があり、今後の検討課題の一つである。いずれにしても、火輪においては軒の在り方が形態分類の目安となることは言うを待たない。また、単純に火輪の大きさと言う点では、空風輪と同様に、それぞれの形態の相似形という関係で捉えることが可能である。

#### ウ 水輪 (図版328, 第379表)

71点が出土し、その内、完形及び完形に近いものや代表的な形態を示すものを中心として26点を図示した。納骨孔とも考えられる凹みを有するもの(40)が1点見られ、その他についても大きさや形態から分類が可能であるが、今回は資料提示にとどめた。一覧表の計測値・数値は以下のことを示す。なお、水輪の天地及び正面観については不明と言わざるを得ず、便宜的に径が大きい面を下面とし、さらに火輪と同様に、最大幅と直交する面を正面として実測・計測等を実施した。

t: 水輪上面径	t/v: 水輪上面径÷水輪最大径
v: 水輪最大径	w/v: 水輪下面径÷水輪最大径
w: 水輪下面径	w/t: 水輪下面径÷水輪上面径
y: 水輪の高さ	v/y: 水輪最大径÷水輪の高さ

水輪の形態については、納骨孔とも考えられる凹みを有するものと持たないものとに二分される。とはいえ、前者は40のみで、しかも上下面に凹みを有しているため、納骨孔と規定できるかどうか即断は避けたい。後者については、単純なプロポーションであるがゆえに、形態分類は扁平率( $v/y$ )や側面形態に収束せざるを得ない。しかしながら、本遺跡の場合、目立った偏位は認められないことから、石塔としてのバランスという点では、水輪の高さ(y)や最大径(v)が最も重要な属性と考える。

## エ 地輪 (図版329, 第380表)

55点が出土し、その内、完形及び完形に近いものや代表的な形態を示すものを中心として22点を図示した。梵字が墨書されているもの(55)が1点見られ、その他についても大きさや形態から分類が可能であるが、今回は資料提示にとどめた。一覧表の計測値・数値は以下のことを示す。なお、地輪の天地については墨書が施された55を参考に、工具痕等が残る面を下面とした。正面観については不明と言わざるを得ず、火輪と同様に、最大幅と直交する面を正面として実測・計測等を実施した。

x : 地輪最大幅	工具痕1 : 側縁に平行する工具痕
z : 地輪の高さ	工具痕2 : 側縁に斜行する工具痕
x/z : 地輪最大幅÷地輪の高さ	

地輪の形態については、水輪と同様に単純なプロポーションであるがゆえに、形態分類は扁平率(x/z)に収束せざるを得ない。しかしながら、本遺跡の場合、目立った偏位は認められないことから、石塔としてのバランスという点では、地輪の高さ(z)や最大幅(x)が最も重要な属性と考える。ただし、下面に残る工具痕については上記の二者があり、製作という観点からの分類が可能である。

また、墨書が観察された55は、本遺跡中最大の地輪で、原位置を保っていたことが推測される唯一の事例である。墨書は遺存状況に差はあるものの四面に施される。最も遺存状況が良好だったのが、正面(南西方向)に施された梵字(図版329, PL161)である。五輪塔を大日如来の三昧耶形とする教理に基づいた地輪に刻まれるべき梵字であることには間違いないが、四門(四面)に墨書されていることから、正面に記された梵字が何であるか、また四門ともそれぞれに対応する梵字が記されていたかどうか注目すべき点である。赤外線やスーパーアイなどを用いたが、正面以外については判読が不能で、正面についても東方発心門「𑖀𑖃」か西方菩提門「𑖀𑖃」かの判別が困難である。今回は前者の可能性が強いものとして、東方発心門「𑖀𑖃」を想定して実測に及んだ。なお、梵字の墨書以外に右上隅に何等かの墨書痕が観察された。紀年銘あるいは戒名・称号・施主名などが記されていたことが推測される。

### (2) その他の石塔類

1~12及び13は相輪の破損資料で、九輪の幅や太さが多様である。1~3・12のように上部及び下部の蓮花が省略されるという形態的特徴を有する。これが時代的特性なのか地域的な特性に基づくものか、あるいは石塔の種類によるものなのかといった判断は現状では成し得ない。また、4は細い丸棒状のホゾ孔が開けられており、宝珠と九輪が組み合わせ・連結式であったことが想定される。13については、宝珠の下に、四辺が内湾する方形の蓮花あるいは水烟が付き、他の相輪とは異なっている。なお、10は蓮花の形状から逆に実測図を作成してしまった可能性がある。

14・15は宝篋印塔の笠・塔身の破損資料である。14は副飾が僅かに残存し、相輪との連結部はホゾ孔状を呈している。15は月輪や四方仏の種子等は刻まれず無文である。したがって、全く別の石造物である可能性もあり、また、層塔の塔身初軸の可能性もある。

16は底面に段が形成されることから五輪塔火輪とは区別される。層塔あるいは多宝塔の塔身の笠と想定される。

17は五輪塔水輪として把握していたが、上面の孔・側面の方形台状の高まりを有することから水輪と区別した。あるいは石塔を構成する石造物ではなく、茶臼上臼の未製品とも考えられよう。

18については、単品なのか組み合わせ品なのか、おそらく後者と考えられるが、判然としない。



第5章 中世以降の調査

No.	調査地点	調査 No.	A	B	h1	h2	b	v	d	w	f	k	a/A	a2/A	a3/A	f/a	c/a	石質	備考	
1			21.0	13.9				7.5	14.4	13.8			0.84		0.94	0.90	0.88	普通雑石 登山層		
2			16.9	9.9				6.2	13.1	13.2			0.90		0.76	0.90	0.87	上段石質 以下同土		
3	D111区		29.9	12.8				6.2	15.0	13.7			0.80		0.92	0.93	0.77			
4	A111区		21.4	16.9				6.9	12.4	15.2			0.80		0.80	0.80	0.80			
5	V-19A地区中層 北東部階段内		22.0	14.8				7.2	17.2	16.1			0.87		0.80	0.87	0.89	中		
6	A111区																	中		
7	D111区		43.0					6.7												
8	D111区		43.1	13.4	16.1			6.7	10.4	11.7			0.80		0.91	1.13	0.80			
9	A111区		46.7	23.0	18.2	8.2	3.1	1.1	6.2	20.2			0.80	0.24	0.62	0.84	0.88	大	遺跡跡入り5m	
10	A111区		7.2	21.0	19.8	6.0	5.0	6.9	6.2	20.4	12.8		0.80	0.16	0.88	0.80	0.48	中		
11			16.0	24.0	14.7	6.0	6.7	6.1	9.1	21.4	196.0		0.80	0.23	0.69	0.84	0.82	中		
12			4.8	19.0	11.0	4.0	6.3	6.6	7.7	16.6	14.6		0.87	0.24	0.89	0.85	0.70	小		
13			49.0																	
14			21.2	12.2	7.0	3.4	6.5	7.0	19.4	18.1			0.80	0.27	0.72	0.80	0.71	中		
15	D111区		43.1	124.1	124.0	16.2	10.4	10.4	10.0	106.0	111.1		0.87	10.24	11.37	11.00	0.71	中		
16	遺跡入り込み内		6.4	19.2	11.4	4.0	6.4	6.9	7.0	17.2	16.2		0.81	0.10	0.64	0.94	0.50	中		
17	A111区		14.0	14.1	14.1	17.0	16.0		17.6				1.00	10.47	10.81					
18	遺跡入り込み内		13.4																	
19	D111区		11.0	12.4																
20	遺跡入り込み内		11.0	19.4				6.0	7.1		10.2									
21			6.4	19.4	11.7	6.0	5.2	6.9	7.2	16.2	16.4		0.80	0.20	0.64	0.90	0.62	中		
22	A111区		6.4	16.4	13.1	5.9	7.0	6.0	11.7	19.2	12.1		0.91	0.20	0.68	0.80	0.80	中		
23	V-12区大塚資料 庭石付跡		12.1	17.1	15.0	6.0	5.2	6.3	16.7	13.1	11.0		0.80	0.30	0.47	0.70	0.67	中		
24			13.0	18.1	11.0	6.0	5.4	6.9	7.1	14.9	12.4		0.80	0.23	0.69	0.80	0.87	小		
25			16.2	23.4	13.7	6.9	6.6	6.5	6.5	21.1	19.4		0.87	0.20	0.64	0.80	0.70	中		
26	A111区		11.4	11.4	12.4	6.4	6.4	6.9	6.9	13.0	11.4		0.87	0.20	0.60	1.10	0.60	中		
27	中層区		11.4	19.9	11.9	5.9	5.6	6.7	7.2	17.0	16.0		0.80	0.30	0.67	0.10	0.60	中		
28	A111区		14.3	22.4	13.1	1.1	6.1	5.9	6.2	16.2	19.4		0.80	0.27	0.83	0.64	0.67	中		
29	A111区		6.0	13.9	11.7	6.4	5.2	5.1	9.1	1.2	16.4	2.4	0.82	0.24	0.64	0.89	0.70	中		
30			6.2	15.0	12.0	6.1	6.4	6.4	6.4	20.4	16.2		0.80	0.30	0.64	0.61	0.60	中		
31	A111区		11.0	19.9	11.0	6.0	5.2	6.4	6.4	15.2	17.1		0.87	0.27	0.60	0.80	0.80	中		
32			11.4	16.1				6.4	6.4		15.4									
33			11.0	19.1	11.2	5.0	5.4	6.4	6.4	16.4	14.9		0.81	0.34	0.70	0.90	0.60	中		
34			11.7																	
35	遺跡入り込み内		11.0	19.9				6.2		15.2										
36	遺跡入り込み内		11.0	19.1	11.1	6.0	5.7	6.4	6.4	14.9	11.4		0.87	0.30	0.61	0.77	0.80	中		
37	1F-1D		11.0	19.2	12.1	14.2	5.9	6.5	6.5	13.4	12.0		0.87	0.30	0.60	0.70	0.80	中		
38	A111区		7.4	18.4	14.4	7.4	7.2	6.7	6.4	13.1	16.7		0.80	0.20	0.60	1.20	0.60	中		
39	A111区		6.2	21.4	14.0	7.2	6.2	7.1	7.2	16.4	16.0		0.81	0.20	0.74	0.80	0.60	中	前後部に短芝あり?	
40			14.2	12.0				5.2	10.0		19.2								中	
41	遺跡入り込み		3.0	16.0	11.0	5.7	5.4	6.9	6.9	14.7	13.2		0.80	0.20	0.77	0.80	0.61	中		
42	遺跡入り込み		11.0	17.0	9.4	4.8	4.8	5.9	6.7	15.1	13.0		0.80	0.20	0.63	0.80	0.71	中		
43	遺跡入り(石室)																			
44			11.0																	
45	遺跡入り込み		11.0	11.0				6.4	7.4		11.0									
46	A111区		14.7	124.2	116.0	17.0	7.4	6.4	6.4	10.4	170.0		0.87	10.11	11.00	11.00	0.80	大		
47	A111区		12.7	19.0				5.4	7.4		16.9									
48	A111区		14.4	123.0	112.0	7.4	4.9	1.7	19.0	16.2	16.4		0.87	10.11	7.74	9.10	0.77	中		
49	A111区		12.2	17.0	9.4	4.7	4.9	6.4	5.2	14.0	12.4		0.80	0.20	0.60	0.80	0.80	中		
50			11.0	16.7				6.4	6.4		16.2									
51			11.4																	
52			11.4																	
53			11.0																	
54			16.0	120.0	112.0	17.0	6.4	6.4	6.4	12.1			0.87	10.11	11.07			0.80	中	
55	A111区		16.0	125.1	14.2	6.4	7.4	6.7	16.2	114.0	114.0		0.87	10.11	11.02	10.70	0.71	中		
56	A111区		16.0	124.0	122.4	17.2	6.2	6.6	6.7	111.4	112.0		0.87	10.20	11.10	11.07	0.70	大		
57	中層区		110.0	19.0	19.4	19.0	3.0	1.0	9.4	14.2	13.0		0.81	0.11	0.70	0.80	0.80	中		
58	A111区		16.0	20.7	19.9	9.7	10.2	6.4	10.4	114.0	114.0		0.80	0.10	1.24	10.80	0.82	雑草		
59	A111区		16.0	20.1	15.0	8.1	7.7	6.7	9.0	21.1	114.9		0.81	0.30	0.75	0.70	0.60	中		
60			6.4	25.4	16.0	6.4	7.1	6.7	9.4	16.0	27.1		0.80	0.27	0.70	0.84	0.62	大		
61	1F-1D		11.0	17.7	11.0	5.4	6.7	6.7	7.0	15.7	13.7		0.80	0.31	0.74	0.80	0.60	中		
62	A111区		1.7	19.0				6.4	6.4		13.0									
63	V-12区中央部2		11.4	12.2	11.0	7.4	5.4	6.7	6.4	17.4	16.4		0.80	0.20	0.70	0.80	0.64	中		
64			11.0	19.0	11.9	6.4	5.0			16.4			1.00	10.10	7.74			中		
65	遺跡入り(穴室)																			
66	遺跡入り(穴室)		11.0	11.1				6.4	16.4		19.0									
67	A111区		11.0	19.0	11.4	6.2	4.7	6.4	6.0	112.0	17.0		0.80	10.20	11.02	10.80	0.77	中		
68	遺跡入り(穴室)																			
69	遺跡入り(穴室)																			
70			7.1	22.0	13.0	7.4	6.4	6.7	6.0	16.0	16.0		0.81	0.26	0.72	0.80	0.80	中		
71	遺跡入り		6.4	21.4	11.2	6.4	5.1	6.7	6.0	16.0	115.4		0.87	0.26	0.60	0.80	0.80	中		
72	A111区		11.0	21.4	11.4	6.4	6.0	1.4	6.4	16.0	16.4		0.81	0.26	0.60	0.70	0.70	中		
73	A111区		7.4	17.7	10.2	4.9	5.2	6.4	7.1	14.0	13.9		0.80	0.26	0.60	0.80	0.71	中		
74	A111区		11.4	19.1						16.1										
75	A111区		16.7					6.4	6.4											
76	A111区		4.4	17.4	10.4	6.4	5.0	6.4	6.4	11.0	11.0		0.80	0.26	0.60	0.60	0.80	中		
77	A111区		11.2	11.0																
78	A111区		6.4	21.1	13.4	7.0	6.4	6.4	7.2	19.9	16.9		0.60	0.26	0.60	0.84	0.84	中		
79	遺跡入り(穴室)		7.2	21.0	12.0	7.0	5.1	6.4	6.4	18.1	11.0		0.80	0.26	0.60	0.80	0.80	中		

第376表 五輪塔 空風輪一覽表 (1)





## 第5章 中世以降の調査

№	出土地点	重量 (kg)	B	h	k	i	j	l	m	o	p	q/p	k/l	i/B	石質	備考	
1			14.0		8.4	6.1			12.4	26.0	21.9	1.20	1.28	0.42			
2			13.1	3.4	8.7	6.0	0.9	1.0	16.8	23.2	20.8	1.12	1.45	0.46			
3	I U-12輪区		15.4		14.0	8.3			13.0	25.0	19.0	1.32	1.78	0.54			
4			14.0		8.9	6.5			12.1	24.2	21.4	1.13	1.37	0.45	あざ		
5			15.4	0.1	14.2	6.2	0.0	1.0	15.5	29.0	27.2	1.07	2.31	0.40			
6																あざ	
7	Aテラスa区	(6.4)															
8	Aテラスd区	(5.6)			(7.2)			0.6								中	
9	Aテラスf区	(8.0)			(5.7)	6.0	0.4	0.6		24.5	21.8	1.12	(0.80)			中	
10	Aテラスg区	(9.2)	13.5	5.7	7.6	(8.8)	0.2	0.2	14.0	27.5	25.9	1.06	(1.31)	0.45		大	
11	Aテラスi区	(8.8)	18.3	6.0	8.9	8.3	0.3	0.4	14.0	(23.9)			1.41	0.41	赤	中	
12	ハレガキ	(8.0)	15.2	10.2	4.1	8.2	0.0	0.9	12.0	22.0	17.1	1.29	0.50	0.54		中	
13	Aテラス北壁リコ	(5.1)														中	
14	Aテラスe区	(7.0)	11.8	(5.3)	(5.7)	6.3	0.4	0.8	12.0	22.7	20.9	1.09	(0.90)	0.53		中	
15	U-13A地区	(7.7)	11.9	4.6	6.0	8.0	0.2	1.3	11.0	23.0	21.5	1.07	1.20	0.42		中	
16			8.9	12.5	8.9	3.9	4.5	0.0	0.6	11.7	25.5	24.1	1.06	0.87	0.36		中
17	D-I I区	(4.0)	(8.9)			4.2	0.5	0.9		21.3	21.0	1.01			0.49	小	
18		(2.0)	12.4					0.4									
19	石壇うら込み	(13.3)	15.0			7.0	0.0		13.0	29.2	22.5	1.30			0.47	大	
20		9.5	15.0	7.5	7.5	6.4	0.3	0.0	10.5	23.0	18.0	1.31	1.17	0.43		中	
21	U-12区火葬骨付石 (テラス付石)	(6.8)	13.3						11.5	(22.8)						中	
22	Aテラスd区	(6.2)	15.9			8.1	0.6		(9.3)	(16.0)					0.51	中	
23		(5.0)			7.7	6.0	0.3	1.0					1.28			中	
24	I U-12E	11.5	13.1	3.8	8.1	6.2	0.4	1.2	14.3	24.8	23.2	1.07	1.31	0.47	あざ	中	
25		20.9	18.1	5.4	11.2	8.0	0.2	0.5	15.0	29.0	25.9	1.12	1.38	0.48	あざ	大	
26		11.8	15.0	(6.0)	(8.3)	6.4	0.3	1.1	14.0	26.4			(1.33)	0.41		大	
27	I U-12E3No. 11	15.8	16.4	8.2	7.0	6.1	0.9	1.2	12.3	29.2	29.2	1.00	1.14	0.37		大	
28	最上階トレンチ	12.0	15.9	5.4	10.2	9.3	1.0	0.3	10.5	22.9	17.7	1.29	1.19	0.58	あざ	中	
29	ハレガキNo. 1内		13.0	4.0	8.4	6.2	0.3	0.0	12.5	(24.5)	22.7	(1.00)	1.35	0.46		中	
30		9.3	15.0	7.0	6.5	7.0	0.4	1.5	16.9	23.5	18.3	1.28	0.96	0.51		中	
31		(11.8)	15.9			5.5	0.3		12.5	(24.9)					0.33	大	
32		(6.5)	14.0			5.3	0.5		66.9	(17.8)					0.38	中	
33		8.8	13.2	0.0	5.3	3.9	0.9	2.1	12.9	24.0	23.4	1.03	1.31	0.20	赤あざ	中	
34	I U-12E3No. 9	12.0	15.9	(6.9)	(8.0)	7.2	0.5	(1.0)	13.2	24.1	23.2	1.04	(1.11)	0.45	赤あざ	中	
35		(9.4)	14.8	(3.9)	(10.0)	8.9	0.0	0.0	13.0	25.1	24.1	1.19	(1.36)	0.54		中	
36		9.9	13.4	5.4	6.6	4.9	0.3	1.4	12.9	23.4	23.0	1.02	1.39	0.36		中	
37	Aテラスf区	14.2	15.5	5.5	9.2	8.0	0.0	0.8	13.0	24.7	22.5	1.10	1.18	0.52	白あざ	中	
38		(12.2)	15.2	5.2	9.7	6.5	0.2	0.3	13.0	25.2	23.8	1.07	1.49	0.43		中	
39		19.8	19.9	9.1	10.2	8.0	0.3	0.0	16.9	28.7	25.0	1.12	1.28	0.40		大	
40	9-3地区	8.7	12.9	6.2	5.8	5.4	0.4	0.8	10.8	23.9	23.2	1.03	1.06	0.42	あざ	中	
41		(6.0)	14.4			8.0	0.0		54.0	(17.5)					0.56	中	
42		(8.0)	15.0	5.7	9.0	8.0	0.0	0.3	11.0	21.0	17.0	1.24	1.90	0.57		中 No.45・52と組み合わせる No.40の重量は(5.3)	
43		10.5	15.0	5.0	9.0	8.0	0.3	0.5	(7.5)	(23.0)	21.5	(1.11)	1.10	0.55		中	
44		(4.9)	12.4	4.5	7.5	5.2	0.4	0.7	8.5	19.7	17.7	1.11	1.48	0.42		小	
45		(1.9)														中 No.42・52と組み合わせる 各数値はNo.42へ	
46	I U-12E3No. 6	19.4	18.1	7.0	9.4	8.5	0.0	1.1	17.5	29.5	25.4	1.12	1.11	0.47		大	
47		(11.1)	17.5		(6.2)	(4.0)			8.9	26.9			(1.50)	0.23		大	
48		(1.7)														赤	
49		9.0	14.9	7.1	8.0	4.0	2.0	2.8	8.9	24.2	23.8	1.02	1.25	0.27		中	
50		11.1	15.0	5.5	9.1	10.0	0.7	0.4	11.9	23.3	20.0	1.17	0.91	0.67		中	
51		29.8	17.1	6.1	9.8	8.4	0.4	1.2	14.0	31.9	26.7	1.16	1.17	0.49		大	
52		(0.8)														中 No.42・52と組み合わせる 各数値はNo.42へ	
53	9-3 E				7.0			0.3								定形No.15	
54		36.0	22.9	11.4	11.0	7.7	0.8	0.5	17.0	35.3	34.7	1.02	1.42	0.34		特大	

第378表 五輪塔 火輪一覽表

№	出土地点	重量 (kg)	l	w	w	l/v	w/v	w/l	v/y	石質	備 考
1		18.0	26.4	18.9	17.0	0.70	0.70	0.99	1.55		
2		17.0	24.7	17.9	14.9	0.73	0.72	0.98	1.63		あざ
3	アサヌマヒ区	17.0	23.6	16.9	16.3	0.80	0.80	0.99	1.50		
4		18.4	23.2	16.1	14.5	0.71	0.69	0.98	1.60		
5		29.0	17.5	19.9	17.8	0.73	0.72	0.98	1.50		
6	アサヌマヒ区	21.2	19.5	16.8	20.5	0.63	0.67	1.03	1.45		あ
7	アサヌマヒ区付添	14.6	18.0	17.6	18.8	0.67	0.70	1.04	1.44		甲
8	磐城No.4の石内	(11.8)	19.0	17.5	20.9	0.69	0.73	1.03	1.60		甲
9	アサヌマヒ区	(7.4)									甲
10	磐城No.3の石内トレンテ	(4.3)		20.2	17.2	11.9		0.98		1.70	小
11	アサヌマヒ区	(6.6)		23.7	(13.0)			(0.63)			甲
12	アサヌマヒ区	(8.8)		23.6	(18.0)	(12.8)		(0.68)		(1.83)	甲
13	アサヌマヒ区	(6.7)	66.6)		58.0)	16.4			(1.28)		小
14	磐城No.4の石内トレンテ	(4.6)	14.80		(14.0)	14.1			(3.50)		
15	アサヌマヒ区	(4.1)	68.5)		(11.5)	13.9			(1.25)		
16	アサヌマヒ区	(7.3)	16.9	22.2	(18.0)	15.6	0.72	(0.99)	68.81)	1.48	小
17	磐城No.2の石内	66.3)	69.5)	24.6)	(25.5)	13.7	0.69	(0.52)	(3.23)	1.74	甲
18	磐城No.4の石内	(8.3)	(13.5)	22.6)	16.2)	14.9	0.60	0.71	(3.04)	(1.90)	小
19	アサヌマヒ区	(11.4)		26.7	18.9			0.99			甲
20	アサヌマヒ区	(2.9)	(14.8)	23.0)	(16.3)	13.7	0.63	(0.70)	(3.13)	(1.21)	小
21	磐城No.5の石内	(4.2)		19.5)	22.5)			0.64			小
22	磐城No.5の石内	(4.8)				(18.0)					小
23	磐城No.4のトレンテの石内	(2.5)	13.6)	24.1)	18.5)	17.0	0.62	0.64	1.80	1.28	甲
24		(8.2)	18.9)	25.6)	19.9)	14.0	0.73	0.75	1.80	1.74	甲
25	D-I 区	(3.3)									甲
26		(11.4)	13.4)	24.9)	(13.5)	16.6	0.63	(0.43)	(0.87)	1.69	甲
27	B	(7.6)	17.6)	25.0)	(17.4)	15.4	0.68	(0.63)	(1.00)		甲
28		(7.2)				(11.7)					甲
29		7.9	13.9)	21.2)	17.5)	14.7	0.78	0.83	1.18	1.44	小
30		12.8	19.6)	26.5)	19.6)	15.5)	0.78	0.75	1.98	1.23	甲
31	SK107	(3.4)				12.3)					小
32	磐城	66.80	(15.0)	22.7)	(15.0)	14.0	(0.80)	(0.60)	(1.00)	1.62	小
33	Dアサヌマヒ区	14.2)	20.6)	26.3)	20.3)	15.9)	0.78	0.76	1.60	1.69	甲
34		11.9)	18.2)	25.5)	18.6)	14.0)	0.72	0.70	1.64	1.73	甲
35	アサヌマヒ区	(8.4)	(17.0)	26.1)	(18.0)	15.0)	(0.68)	(0.72)	(1.00)	(1.63)	甲
36		(1.4)									大
37		(6.1)				(20.0)					大
38		(2.4)		24.9)	18.6)			0.72			甲
39	アサヌマヒ区	18.6)	21.0)	29.2)	21.4)	17.6)	0.77	0.75	1.57	1.64	あざ
40	アサヌマヒ区	18.4)	13.4)	26.1)	13.8)	26.2)	0.59	0.52	1.04	1.32	甲
41	アサヌマヒ区	(12.4)	18.8)	26.9)	(14.0)	19.4)	0.70	(0.62)	(0.74)	1.39	あざ
42		11.2)	17.9)	25.2)	18.0)	15.1)	0.71	0.71	1.01	1.67	あざ
43		9.7)	16.5)	24.8)	16.5)	15.9)	0.64	0.66	1.06	1.64	小
44		(2.6)	(18.0)	22.6)	17.8)	17.1)	(0.65)	0.75	(1.13)	1.87	小
45	磐城	6.9)	15.4)	21.8)	15.6)	14.6)	0.72	0.75	1.01	1.54	小
46	アサヌマヒ区	(2.0)	18.4)	21.8)	(14.3)	13.5)	0.74	(0.67)	(0.69)	1.58	あざ
47	Dアサヌマヒ区	(2.9)									あざ
48		18.4)	(12.5)		(15.0)	15.7)			(1.20)		甲
49		22.8)	21.9)	26.8)	21.7)	18.8)	0.70	0.76	1.51	1.64	あざ
50	Dアサヌマヒ区	(2.5)				(8.9)			(1.80)		小
51	アサヌマヒ区	(4.7)	68.80		(15.0)	15.5)			(1.80)		小
52	D-I 区	66.2)	13.7)	21.3)	14.0)	14.4)	0.64	0.68	1.52	1.48	あざ
53		(8.0)	16.9)	24.6)	17.0)	14.8)	0.62	0.71	1.66	1.62	小
54		(8.0)	16.6)	22.9)	16.2)	14.0)	0.75	0.82	1.76	1.71	小
55	アサヌマヒ区	8.0)	12.8)	21.8)	18.3)	15.4)	0.69	0.62	1.60	1.42	小
56		13.5)	18.4)	27.7)	18.2)	16.6)	0.63	0.69	1.66	1.65	甲
57	D-I 区	11.8)	17.5)	27.0)	17.1)	17.0)	0.65	0.65	1.68	1.58	甲
58		8.6)	16.4)	23.4)	16.2)	12.0)	0.66	0.71	1.82	1.76	小
59		(1.7)									小
60	アサヌマヒ区	8.0)	16.9)	24.7)	17.8)	14.7)	0.67	0.69	1.83	1.68	あざ
61		(7.0)	15.3)	22.5)	(13.4)	12.5)	0.78	(0.63)	(0.67)	1.74	あざ
62	アサヌマヒ区	(13.8)	(12.5)	26.8)	19.8)	16.5)	(0.47)	0.71	(1.52)	1.65	あざ
63	D-I 区	(18.7)	(14.5)	24.4)	17.1)	15.1)	(0.58)	0.72	(1.21)	1.62	あざ
64		66.1)				14.1)					小
65		(2.6)									あざ
66		13.6)	18.6)	26.5)	19.2)	18.4)	0.68	0.74	1.67	1.62	甲
67		66.4)	14.2)	21.5)	16.8)	14.5)	0.67	(0.59)	(0.43)	1.59	小
68	磐城No.4トレンテの石内	(3.4)									甲
69	アサヌマヒ区中央部	(1.8)									甲
70	アサヌマヒ区中央部	66.80									甲
71	アサヌマヒ区	(1.7)									小

第379表 五輪塔 水輪一覧表

## 第5章 中世以降の調査

No.	出土地点	重量(kg)	x	y	x/y	工具痕	石質	備考
1	Aテラスf区		26.6	29.6	1.29		安山岩 あざ	
2			23.7	15.0	1.58		安山岩	
3	I U12区		26.2	17.8	1.47			
4	I U12区		22.9	16.9	1.36		あざ	
5	最上部トレンチ		27.6	16.3	1.69			
6							安山岩 あざ	遺物なし
7	石垣	18.4	24.2	18.5	1.31	2	あざ	大
8	I P-23	13.2	24.2	14.6	1.66	1	あざ	中
9		(2.0)	(12.5)	15.6	(0.80)	2		
10	石垣うら込め内	(12.4)	23.7	16.8	1.41		赤 あざ	中
11		10.5	22.9	14.1	1.62	2		中
12		13.7	24.0	16.3	1.47	2		中
13		11.7	22.2	15.0	1.48	2		小
14		(7.5)	(23.5)	(13.0)	(1.81)			
15	No.4石垣	10.4	21.0	15.2	1.38	2		小
16		(12.6)	(29.8)	(12.2)	(2.44)			
17	D-f f区	(8.5)	18.2	19.5	0.93			
18	石垣うら込め	(5.5)	(17.4)	15.3	(1.14)	2		
19		16.1	23.9	17.3	1.38	1		中
20		13.9	23.5	16.0	1.47	1		中
21		13.2	24.0	16.7	1.44	2		中
22		15.8	24.9	15.7	1.59	2		大
23	石垣うら込め	9.8	21.5	15.3	1.41	2	あざ	小
24		18.1	25.8	16.5	1.56	2	あざ	大
25	I U12区	15.6	23.1	16.2	1.43	2	赤 あざ	中
26		(8.9)	(27.0)	21.0	(1.29)	2	白 あざ	
27	石垣No.2	9.9	20.8	16.1	1.29	2		小
28	石垣No.4	8.6	20.0	13.8	1.45	2		小
29	AテラスS No.11	13.8	23.6	14.6	1.62	2	あざ	中
30	D-f f区	13.9	23.0	15.3	1.50	1		中
31	石垣No.1内	12.8	23.4	13.7	1.71	2		中
32	D-f f区	(13.3)	25.4	18.5	1.54	2		
33	v-14D区石垣No.4	20.0	24.8	17.9	1.39	2		大
34		12.9	23.3	14.8	1.57	2		小
35	I U-12地区S No.3	16.1	23.2	17.5	1.33	2		中
36		(12.6)	23.8	15.7	1.52	2		
37		13.0	23.2	14.0	1.66	1	あざ	中
38	Aテラスf区	(17.6)	26.0	16.3	1.60	ノミ痕なし	あざ	大
39	8-3地区	(13.2)	23.3	15.7	1.48	2		中
40		(12.5)	23.4	15.6	1.50	2		中
41	U-13 火葬骨3号の上	14.2	24.1	15.2	1.59	2		中
42		(6.1)	(11.0)	21.2	(0.52)	1		
43		11.6	21.8	16.8	1.30	2		小
44		(8.7)	(22.0)	20.5	(1.07)	1		
45		13.2	23.1	16.0	1.44	1		中
46		22.0	26.3	19.2	1.37	2		大
47		(11.6)	24.1	(15.2)	(1.59)	1		中
48	D-f f区	(3.1)	(16.6)	12.8	(1.30)	2		
49	遺物なし(欠番)							
50	I U-12地区S No.15	11.2	22.3	13.3	1.68	1	あざ	小
51	石垣うら込め	(4.6)	(18.0)	(13.7)	(1.31)			
52	D-f f区	4.4	21.0	12.7	1.65	2		
53	遺物なし(欠番)							石垣うら込め(遺物なし)
54	U-14 古代	(2.9)	(15.4)	13.8	(1.12)			
55		37.1	30.7	24.2	1.27	2		特大 墨書

第380表 五輪塔 地輪一覧表

## 4 金属製品

## (1) 鉄製品 (図版331, PL166)

本遺跡では、中世及び近世以降に相当する遺構・暗渠または斜面部を含めた遺構外から、鉄鑄先(1)、鎌(2)、刀子または小刀(3~5)、釘(6~18)、鋸(19)、鋸鉄(22)、灯火具(23)、鋏(24)、棒状鉄製品(25・26)、板状鉄製品(27~31)、リング状鉄製品(32)と鋳物片(20・21)が出土している。

鉄鑄先(1)は近世以降の暗渠から、鎌(2)は松原2号墳が築造されていたCテラスから出土したものである。このうち鎌が出土した斜面部は近現代に至り桑畑となっていた部分であり、それに伴っていた可能性も十分考えられる。鎌の形態から、草刈り鎌あるいは桑刈り鎌という機能が想定されるが、出土地点の状況とあいまって、鎌の機能についても十分首肯されよう。

刀子または小刀は、いずれも土坑内から出土したもので、3は釘とともにSK1600から、4は銭貨とともにSK1564から、5も遺構番号は不明となってしまうが東地区の土坑内から出土したものである。前二者については人骨の出土は確認されないものの、土坑の属性から墓址と判断することも可能な遺構である。ただし、本遺跡の場合、骨等の遺存状況が良好で「無いものは無かった」という前提に立っているため、墓からは除外したが、副葬品的な性格をも有していたのではないかと考えたい。

釘とした内、17は断面形が扁平な長方形を呈することから、楔として捉えた方が適切かと考えられる。12~15は火葬施設から出土したもので、遺体を茶毘に付す際、遺体は木棺内に安置されていたことを想定する資料となり得る。大きさ・形態とも類似しており、一括性の極めて高い資料群と言えよう。

## (2) 銅製品 (図版332・333, PL167・168)

本遺跡では、古代・中世及び近世以降に相当する遺構・暗渠または斜面部を含めた遺構外から、銭貨と筭が出土している。

本遺跡からは、中世以降に流通していたと考えられる銭貨が、判読不明のものや10銭銅貨を含めて85枚出土した(第381・382表)。その内、渡来銭が約80%(66枚)を占める。内訳は、唐銭4点・北宋銭56点・南宋銭3点・明銭3点、北宋銭が85%と圧倒的に多いことが指摘される。また、祥符通寶の模鑄銭と考えられるもの(13~15)や、宣和通寶の折二銭(62)・咸淳元寶の折二銭(66)が出土しており注目される。なお、一覧表中の外径は文字配列の垂直方向で、内径は同様の方向で孔径を、厚さは外縁部の厚さをそれぞれ計測したものである。

筭は、SK1066から2点出土した。いずれも刀装具の三所物と称される中の筭である。2点とも大きさや基本的な形状は類似するが、耳掻き・貝の内部分の大きさに差異があり、胴の文様意匠も1は魚子地に二本線、2は魚子地に家紋と考えられる松皮菱紋が装填される、というように違いが認められる。家紋が刀剣やその付属品に盛んにつけられるようになるのは戦国時代以降とされ(沼田1968)、松皮菱は、信濃と極めて関わり深い小笠原氏の代表家紋の一つであり、関連が想起される。また、1・2とも鍍金により、文様部分の漆塗布や箔押しなどといった色彩的な装飾については不明である。



## 第5章 中世以降の調査

図版No.	整理No.	出土地点	貨幣名	ふりがな	種類	形状	発行時代	直径 (mm)	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	917	SK1004	開元通寶	かえげん	真	武周(唐)	621	23.4	6.1	1.4	2.98		
2	940	SK1014	開元通寶	かえげん	真	武周(唐)	621	24.3	7.1	1.2	2.72	彫りが深い	
3	947-②	SK1015	開元通寶	かえげん	真	武周(唐)	621	24.7	6.7	1.4	3.05	彫りが深い (背文)	
4	967	9-12 30313(近江)	開元通寶	かえげん	真	武周(唐)	621	24.8	7.6	0.9	2.45	薄い	
5	916	SK1004	太平興寧	たいへい	真	北宋(開元)	978	24.4	5.8	1.0	2.45		
6	950	SK1077	太平興寧	たいへい	真	北宋(開元)	978	24.1	6.0	0.8	2.61		
7	985	SK1062	聖徳元寶	しやうとく	真	聖徳元寶(聖徳)	995	24.5	6.0	1.1	3.76		
8	958	SK1017	聖徳元寶	しやうとく	真	聖徳元寶(聖徳)	995	24.6	6.0	1.2	2.37		
9	991	SK1108	咸平元寶	かんへい	真	咸平元寶(咸平)	999	24.7	5.8	1.1	3.94		
10	988	SK1062	景德元寶	げいとく	真	景德元寶(景德)	1004	24.5	5.8	1.2	4.31		
11	104	SK1009 207	景德元寶	げいとく	真	景德元寶(景德)	1004	24.0	6.1	1.1	3.91		
12	904	P-5	祥符通寶	しょうふ	真	大中祥符元寶(祥符)	1009	25.2	6.2	1.2	3.41		
13	932-②	1号棟 古道具屋土内	祥符通寶	しょうふ	模倣銭?	真	中世～近世初期		23.0	6.4	1.2	3.19	お片の上に磨っていた
14	947-③	SK1015	祥符通寶	しょうふ	模倣銭?	真	中世～近世初期		22.1	6.0	1.2	2.58	
15	987	SK1062	祥符通寶	しょうふ	模倣銭?	真	中世～近世初期		24.0	6.5	1.2	3.28	
16	948	SK1015	天禧通寶	てんき	真	天禧元寶(天禧)	1017	24.9	6.4	—	8.97	三分割になっている	
17	960	2号棟 古道具屋土内	天禧通寶	てんき	真	天禧元寶(天禧)	1017	25.0	6.1	1.2	3.87		
18	965-②	SK1044	天禧元寶	てんき	真	天禧元寶(天禧)	1022	24.9	7.1	1.2	3.92		
19	973	2号棟 古道具屋土内	明徳元寶	めいとく	真	明徳元寶(明徳)	1032	24.9	6.4	1.0	2.96		
20	912	PV-20	景祐元寶	げいゆう	真	景祐元寶(景祐)	1034	25.1	6.0	1.0	3.42	(背文)	
21	978	SK1062	景祐元寶	げいゆう	真	景祐元寶(景祐)	1034	25.0	6.9	1.0	3.46		
22	919	SK1016	皇祐通寶	こうすう	真	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.8	7.0	1.3	3.49		
23	932-①	1号棟 古道具屋土内	皇祐通寶	こうすう	真	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.2	6.4	1.3	2.85	お片の上に磨っていた	
24	979	SK1062	皇祐通寶	こうすう	真	皇祐元寶(皇祐)	1038	23.8	6.2	1.0	2.93		
25	1010	PV-20	皇祐通寶	こうすう	分撚	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.8	7.9	1.2	3.29		
26	969	1-21	皇祐通寶	こうすう	分撚	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.6	6.6	1.3	3.75		
27	980	SK1062	皇祐通寶	こうすう	分撚	皇祐元寶(皇祐)	1038	25.1	6.9	1.1	3.97		
28	981	SK1062	皇祐通寶	こうすう	分撚	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.4	6.2	1.4	4.19		
29	982	SK1062	皇祐通寶	こうすう	分撚	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.9	7.1	1.2	4.00		
30	955-①	SK1044	皇祐通寶	こうすう	真	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.7	6.6	1.2	3.31		
31	983	SK1062	皇祐通寶	こうすう	真	皇祐元寶(皇祐)	1038	24.1	6.9	1.1	3.22		
32	947-①	SK1015	壽徳通寶	じゆうとく	真	壽徳元寶(壽徳)	1056	24.7	7.4	1.2	3.46		
33	988	PV-16	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1059	24.0	6.8	1.6	4.07	彫りが深い 裏の輪郭がぼけている	
34	957	SK1044	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1059	23.7	6.1	1.2	3.11	彫りが深い	
35	959	SK1077	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1071	24.4	6.5	1.1	3.17	彫りが深い	
36	961	SK1108	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1072	24.0	7.0	1.2	3.27	彫りが深い 厚い	
37	997	SK1032	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1070	24.1	7.5	1.3	3.28	彫りが深い	
38	972	2号棟	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1070	23.9	5.4	1.3	3.40		
39	976	SK1062	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1074	23.6	6.5	1.0	2.74		
40	977	SK1062	熙寧元寶	せいねい	真	熙寧元寶(熙寧)	1075	23.7	6.7	1.1	3.00		
41	911	PV-20	元豊通寶	げんぷう	行	元豊元寶(元豊)	1078	23.9	6.0	1.3	3.35		
42	956	SK1044	元豊通寶	げんぷう	行	元豊元寶(元豊)	1078	24.8	6.3	1.1	3.32		
43	979	2号棟	元豊通寶	げんぷう	行	元豊元寶(元豊)	1078	23.4	6.7	1.0	2.59	厚い	
44	996	SK1095	元豊通寶	げんぷう	行	元豊元寶(元豊)	1078	24.2	5.6	1.2	3.12		
45	113	Z	元豊通寶	げんぷう	行	元豊元寶(元豊)	1078	24.5	7.5	1.0	1.65		
46	989	東地庄	元豊通寶	げんぷう	行	元豊元寶(元豊)	1079	24.6	6.1	1.1	2.51	上方向側	
47	914	SK1091 VP-25	元豊通寶	げんぷう	真	元豊元寶(元豊)	1078	25.2	6.9	1.2	3.45		
48	994	SK1062	元豊通寶	げんぷう	真	元豊元寶(元豊)	1078	24.1	7.0	1.1	3.23		
49	110	P-3 (品)	元豊通寶	げんぷう	真	元豊元寶(元豊)	1079	24.5	7.1	1.4	2.46		

第381表 銭貨一覧表(1)

図種別	整理No.	出土地点	貨幣名	ふりがな	種類	素材	本宮知持年代	西暦	外径 mm	内径 mm	厚さ mm	重さ g	備考	
50	043	PN-20	元徳通寶	げんゆう	流通銭?	銅	元徳元年 (北条)	1090	24.4	6.6	1.2	3.77	穿孔が特異より45度ずれている	
51	004	SD1024	元徳通寶	げんゆう	流通銭?	銅	元徳元年 (北条)	1090	23.0	5.7	1.4	3.52	裏の字が中国銭と同じことから 流通銭?	
52	004	SH1027	元徳通寶	げんゆう	流通銭?	銅	元徳元年 (北条)	1090	24.7	6.3	1.2	3.94	裏の字が中国銭と同じことから 流通銭?	
53	006	SH1602	元徳通寶	げんゆう	流通銭?	銅	元徳元年 (北条)	1090	24.1	7.1	1.1	3.36	裏の字が中国銭と同じことから 流通銭?	
54	009	SH1014	源隆元寶	しょうげい		行	源隆元年 (北条)	1094	22.0	6.0	1.2	2.36	知られている	
55	003	SH1664	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1094	24.1	5.6	1.1	2.11		
56	003	SH1008	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1094	23.7	6.2	1.2	3.33		
57	009	SH1602	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1094	24.0	6.3	1.2	3.07		
58	002	SH1602	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1094	23.7	6.2	1.2	3.33		
59	092	SH1602	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1094	24.0	6.3	1.2	3.07		
58	092	SH1602	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1094	23.7	6.2	1.2	3.33		
59	111	2-0924	源隆元寶	しょうげい		行	源隆元年 (北条)	1101	24.7	6.8	1.1	3.55	形が深い	
60	111	SH1602	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1101	24.5	6.3	1.3	1.78	右下欠損	
60	091	SH1602	源隆元寶	しょうげい		銅	源隆元年 (北条)	1101	24.7	5.9	1.1	2.70		
61	000	SH1602	源隆通寶	げんりゅう	分銅	銅	源隆元年 (北条)	1111	24.0	7.2	1.1	2.35		
62	002	SH1604	寛和通寶	かんわ	折二銭	銅	寛和元年 (北条)	1119	27.5	6.8	1.2	3.63	裏に磨痕がない	
63	100	Z	寛和通寶	かんわ		銅	寛和元年 (北条)	1119	22.1	5.6	1.3	2.10		
64	006	不明	寛和通寶	かんわ		真	(南朝)	1200	24.2	6.1	1.1	2.34	裏の上部欠損一 部文字が不明「ヒ」?	
65	107	Z	源定通寶	げんてい		真	(南朝)	1220	23.8	6.5	1.4	2.82	背文「田」	
66	001	SH1604	成祥元寶	せいしょう	折二銭	真	成祥元年 (南朝)	1260	27.2	8.1	1.2	3.39	磨痕	
67	042	SK2106	永樂通寶	えいらく		真	永樂6年 (明)	1400	24.7	5.7	1.4	3.24		
68	049	SH1941	永樂通寶	えいらく		真	永樂6年 (明)	1400	24.9	5.4	1.5	3.25		
69	050	SH1609	永樂通寶	えいらく		真	永樂6年 (明)	1400	25.5	5.5	1.3	3.75	形が深い	
70	109	SH20	寛永通寶	かんえい	古貨物		寛永13年- 1500?	1630- 1650?	—	—	1.2	1.57	1/3弱残存	
71	000	SH-2 (Y)型	寛永通寶	かんえい	新貨物		定始6年- 1697?	1697?	22.6	5.8	1.1	2.14		
72	000	V10 B区	文久金貨	ぶんきゅう			文久3年	1863	20.9	6.4	0.9	2.94		
73	045		十銭				昭和6年	1941	22.0	—	—	1.5	1.20	
74	000	SH-2 P11型中	判読不可能						23.7	6.1	1.2	2.91	磨痕 溝痕が浅く磨損	
75	041	SK5073	判読不可能						—	—	—	1.1	0.55	溝だけ残存
76	043	SK2106	判読不可能						—	—	—	1.5	0.81	裏(下)・裏(左)がぼろで出土
77	044-①	SK2106	判読不可能						25.5	5.8	—	3.19	二位重なっている 44-②と重なる	
78	044-②	SK2106	判読不可能						25.6	6.1	1.5	2.53	44-①と重なる	
79	044-③	SK2106	判読不可能						24.1	5.2	1.5	3.42	跡の裏が変形している	
80	044-④	SK2106	判読不可能						—	—	—	1.7	0.80	右上残存 2・溝上磨める
81	000	SH-2	判読不可能						—	5.8	—	0.75	磨痕? 裏がない、溝い	
82	001	SH-2	判読不可能						—	—	—	1.07	磨痕? 半分ずつの残存——一枚?	
83	004	SH-2	判読不可能						24.2	6.2	1.2	2.33	磨痕、溝い (内周縁磨痕あり?)	

第382表 銭貨一覧表(2)

## 5 木製品

## (1) 出土状況と分類

中世の木製品は工具・農具・服飾具・容器が確認され、この他に用途不明木製品が存在する。不明確な2点を除いて全て井戸址と想定される土坑からの出土で、数点の同一あるいは他器種が供伴して出土する場合と単独出土の場合が見受けられる。供伴例を示すと、SK26では箱物・用途不明木製品・板材（図版336-23、図版337-26・31）、SK1662では鋸・曲物・杭（図版334-1、図版335-9、図版337-33）、SK1671では下駄・曲物・用途不明木製品（図版335-5・12、図版337-27・29）、SK2521では曲物・有頭棒状木製品（図版336-19、図版337-30）、SK1673では3点の曲物（図版336-17・20・21）がそれぞれ出土している。

事実記載にあたり本稿では、出土遺構ごとの記載は避け木製品を一括して扱い、工具・農具等の項目に分類した上で器種ごとに特徴を述べる。用途不明は、本来ならば各項目に含まれるべきだが、用途の推定が困難な木製品を一括した。出土状況に関する情報は遺構の章を、また、法量等の木製品個別の情報は観察表を参照されたい。名称については第4章第2節6と同様、主に奈良国立文化財研究所刊行の「木器集成図録 近畿原始篇」（上原1993）・「同 近畿古代篇」（上原1984）を参考にした。

本遺跡出土の中世に該当する木製品の項目及び器種は、次の通りである。

- ア 工具：鋸・刀子・作業台
- イ 農具：直柄鋸
- ウ 服飾具：下駄・板草履
- エ 容器：挽物・曲物・箱物
- オ 用途不明：円形状木製品・棒状木製品・杭状木製品・薄板状木製品・有頭棒状木製品・  
板材・部材
- カ 土木材：杭

## (2) 木製品の概要

## ア 工具（図版334-1・2・4、PL169・170）

1は片歯の鋸である。鋸身及び木製の柄が残存しており、柄部の溝に鋸身をはめ込み2ヶ所を目釘で固定する。柄部は斜め材を選択し、握り先端に突起を有する。鋸身は残存状態が悪く、歯道等の観察はできないが、レントゲン写真の結果から形態は茎を持たない短冊状を呈する事が判明している（PL169）。

丹下昌之氏は、鋸身の分類から鋸の検討を行っているが（丹下1995）、その分類に従えば本資料はI Aa類となる。I Aa類は大形の20cmを超えるものと、小形の10cm前後のものがあり、36.6cmを測る本資料は大形に属する。時期的には古墳時代中期への集中傾向が指摘されているが、本資料の位置とはずれており、本資料の時期が正しければ機能に対応した鋸の使い分けが推測される。

2は刀子の柄で、先端に刀身の一部が残存する。柄の形態は直線的で、断面は楕円形を呈する。上部に刀身を固定する目釘が残り、また、両側面は細長い加工痕が顕著である。

4は作業台と思われ、上面の窪みに多数の刃物痕が観察される。

## イ 農具（図版334-3、PL169）

3は直柄鋸の鋸身で、形態は長方形を呈する。下部に向かって徐々に幅を減じ、先端にU字形鋸歯先を装着したと思われる。中央上部には、握り先端に曲がりを持つあるいは突起状となる直柄を挿入する為の、長方形の柄孔（角孔）を穿孔している。

泉下では類例が佐久市栗毛坂遺跡・更埴市本誓寺遺跡で見受けられ、栗毛坂遺跡例は柄のみだが、本誓

寺遺跡例では全体を窺い知る事ができる。本誓寺遺跡例と本例を比較すると、鍬身の柄孔が角孔である点は共通するが、鍬身やU字形鍬先部の装着部の形態に差違が指摘される。

#### ウ 服飾具 (図版335-5~7, PL170)

5は台と歯を別の素材で作製した差歯下駄の台で、歯を差し込む溝に腓孔を有する露甲下駄であろう。前歯の位置は台のほぼ中央で、前・後歯は歯の前方にそれぞれ穿孔される。また、溝の形状から、歯は台に対して直立する事が考えられる。

6・7は板芯草履の芯材と思われ、同一個体の可能性があり、7の下方に6が接合するものと推定される。左右に組み合わせて芯材となり、本資料はその右側に該当しよう。7には先端に前歯となる小孔が穿孔され、後歯には方形の切り込みが入る。いずれも器厚がかなり薄く、表面は多数の加工痕が顕著である。

#### エ 容器 (図版335・336-8~23, PL170~172)

8は挽物で、高台以外の器面内外に黒漆を塗布した漆器碗である。木取りは横木取りとなり、器厚は全体的に薄く均一で、高台中央に臍輪の爪痕を止めている。

9~22は曲物の底板で、長方形の9を除けば全て円形を呈する。9は折敷の底板を想定した。クレゾコを呈するが部分的に緩い段を持ち、裏面には刃物キズが観察される。10~22は底板が側板の内側に入るクレゾコで、21・22には側板を固定した木釘が残存する。また、刃物キズを持つものがあり、特に17・20が顕著である。法量的には10の推定径11.5cmを最小、13の推定径22.0cmを最大とするが、10以外は径19~22cmの範囲に集中する。木取りは10・14が板目材、その他は柁目材となる。

23は箱物で、組み合わせ箱の側板であろう。両端にそれぞれ4ヶ所の釘孔が残り、また、一方の面には多数の刃物キズが観察される。

#### オ 用途不明品 (図版336・337-24~32, PL173)

24は円形状木製品で、側面に加工痕が残存する。

25は多角形状に削り出された棒状木製品で、下端を斜めに切断する。

26は杭状木製品である。丸木芯持ち材の枝別れを選択し、下端を1方向から斜めに切断して杭状に処理する。上端は丸状で、多数の粗い加工痕が観察される。

27は板状で、板目材両端を斜めに切断し、中央には括れ部を有する。

28は薄板状の木製品である。上辺中央と左側の2ヶ所に円形の小孔が穿孔されるが、上辺の小孔には植物繊維質の紐が残存している。

29は楕円形状だが、左側面は欠損面の可能性がある。上・下部及び中央部に孔が見受けられ、上下はそれぞれ対応する標に3ヶ所で穿孔される。

30は有頭棒状木製品で、丸木削り出し材の両端に有頭部を作出する。幹(基部)中央に削りが入り、若干の括れ部を作出する。

31・32は板材である。31は両側面及び下端が欠損して詳細不明だが、上端に小孔が穿孔され表裏から斜め方向の粗い加工が入る。また、粗い加工痕が随所に残存する。32は左側面が欠損するが、長方形を呈する板目取りの板材であろう。右側面及び上端は、整然と面取りがなされる。

#### カ 土木材 (図版337-33, PL173)

33は杭で、多方向から幅の短い加工を施して先端を作出する。

第383表 中世木製品観察表

No	項目	器種	出土遺構	法量(cm)	木取り	NAG	樹種	整理No
1	工具	鋸	SK1662	36.6(全長)×2.4(幅)×1.7(厚)	斜め材	1957	ケヤキ	413
2	工具	刀子	SK2509	12.2(柄全長)×2.1(幅)×1.2(厚)	椴目材	955	トウヒ属	951
3	農具	直柄鍬	SK1542	28.3(全長)×10.4(幅)×1.7(厚)	椴目材	844	不明	1429
4	工具	作業台?		21.6(全長)×25.3(幅)×12.9(厚)	丸木芯もち材	1017	エノキ属	417
5	服飾具	下駄	SK1671	12.9+ $\alpha$ (全長)×7.8+ $\alpha$ (幅)×2.4(厚)	斜め材	982	キハダ	946
6	服飾具	板草履?	SK1674	14.7+ $\alpha$ (全長)×5.2(幅)×0.4(厚)	不明	986	不明	908
7	服飾具	板草履?	SK1674	6.4+ $\alpha$ (全長)×4.2(幅)×0.4(厚)	不明	984	不明	911
8	容器	掬物	SK1654	15.3(推定径)×4.8(筒高)×7.0(底径)	椴木取り	931	ケヤキ	940
9	容器	曲物	SK1662	18.8(全長)×11.4+ $\alpha$ (幅)×1.0(厚)	椴目材	882	サワラ	928
10	容器	曲物	不明	11.5(推定径)×0.6(厚)	椴目材	849	サワラ	520
11	容器	曲物	SK1549	19.6(推定径)×0.7(厚)	椴目材	895	不明	972
12	容器	曲物	SK1671	20.0(推定径)×1.2(厚)	椴目材	936 937	サワラ(底板) 不明(側板)	935
13	容器	曲物	SK2807	22.0(推定径)×1.1(厚)	椴目材	845	不明	1431
14	容器	曲物	SK1601	20.0(推定径)×1.7(厚)	椴目材	848	サワラ	1430
15	容器	曲物	SK1670	20.0(推定径)×1.2(厚)	椴目材	960 961	ヒノキ(底板) サワラ(側板)	912
16	容器	曲物	SK1502	20.1(径)×1.1(厚)	椴目材	1006 1008	不明(底板) 不明(側板)	973①
17	容器	曲物	SK1673	20.8(径)×1.0(厚)	椴目材	942 943	サワラ(底板) ヒノキ(側板)	414
18	容器	曲物	SK1502	19.2(径)×0.7(厚)	椴目材	1007	サワラ(底板)	973②
19	容器	曲物	SK2521	19.0(径)×1.2(厚)	椴目材	881	サワラ	943
20	容器	曲物	SK1673	21.8(径)×0.8(厚)	椴目材	957 958	ヒノキ(底板) ヒノキ(側板)	947
21	容器	曲物	SK1673	19.0(径)×0.9(厚)	椴目材	870~ 872	ヒノキ(底板)、不明 (側板)、サワラ(釘)	415
22	容器	曲物	SK1655	20.3(推定径)×0.8(厚)	椴目材	940	ヒノキ	416
23	容器	箱物	SK26	31.5(全長)×7.3(幅)×0.5(厚)	椴目材	898	サワラ	934
24	用途不明	円形状 木製品	SK1549	1.5(径)×0.6(厚)	椴目材	894	不明	972
25	用途不明	棒状 木製品	SK1674	6.9+ $\alpha$ (全長)×0.75(幅)×0.5(厚)	丸木削り出し	859	サワラ	903
26	用途不明	梳状 木製品	SK26	7.3(全長)×1.6(径)	丸木芯もち材	892	ニシキギ	931
27	用途不明	用途不明 部材	SK1671	16.3(全長)×2.5(幅)×1.1(厚)	椴目材	910	不明	936
28	用途不明	薄板状 木製品	SK1513	7.2+ $\alpha$ (全長)×14.7(幅)×0.15(厚)	椴目材	890	サワラ	975
29	用途不明	用途不明 部材	SK1671	15.2(全長)×4.5(幅)×0.9(厚)	椴目材	965	サワラ	937
30	用途不明	有頭棒状 木製品	SK2521	21.4+ $\alpha$ (全長)×1.9(幅)×1.2(厚)	丸木削り出し	887	タラノキ	944
31	用途不明	板材	SK26	20.0+ $\alpha$ (全長)×9.8+ $\alpha$ (幅)×1.6(厚)	椴目材	909	フジキ	933
32	用途不明	板材	SK2520	119.4+ $\alpha$ (全長)×16.2(幅)×2.7(厚)	椴目材	1285	ヒノキ	926
33	土木	杭	SK1662	23.1+ $\alpha$ (全長)×2.4(径)	丸木芯もち材	968	ケンボナシ属	929



## 第6章 松原遺跡出土の人骨・脊椎動物遺存体

京都大学霊長類研究所

茂原 信生

## 第1節 人骨

## 1 はじめに

松原遺跡は長野県長野市松代町にある遺跡で、上信越自動車道の建設工事に伴って（財）長野県埋蔵文化財センターによって平成元年から平成3年にかけて発掘調査された。本遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。今回報告するのはこのうちの古代から中世に属する人骨に関するものである。保存状態のよい人骨がいくつか出土しているが、火葬骨の量も多い。

人骨の計測に関してはマルチン法（馬場；1991）にしたがい、歯の計測方法に関しては藤田（1949）にしたがった。

## 2 出土状況

出土状況に関しては、本書の考古学の項を参照していただきたい。全体に、保存状態のよい骨が多いが、復元が困難なものもかなり多い。また、火葬骨の割合も高い。火葬骨の場合には、温度による収縮などのゆがみが生じ、また細片化するので形態的な特徴を抽出することはできないものが多い。

## 3 出土人骨の特徴

出土した個体が多いので、時代を分けて記載することにする。なお、( )内の番号は松原遺跡出土骨の整理番号である。出土量のごく少ない場合には記載を省略したものもある。

## A 古墳時代後期

## 1) 1号墳

歯が出土している。下顎右第3大臼歯歯冠と順位不明の下顎大臼歯片の2点である。第3大臼歯歯冠は咬耗しておらず萌出前の状態である。咬頭と溝の型は、変形していて定型ではない。この個体の年齢は高くとも18歳程度ということになる。両者が同一個体かどうかは不明である。

## 2) SM 5001-1 (481) 1号墳石室

歯が2本（下顎右犬歯、下顎左第2大臼歯）残っている。咬耗は中等度である。性別・年齢は不明である。

## 3) SM 5001-2 (3302) 1号墳石室

焼かれていない人骨である。上腕骨の骨幹、大腿骨の骨幹などである。上腕骨はやや太い。大腿骨は非常に扁平である。詳細は不明である。

4) SM 5001-3 (No.3299) 1号墳石室

石室内には中世の火葬墓が構築されており、火葬骨は中世のものとして焼かれていない歯が3本混入している。特記することはない。

5) SM 5001-4 (No.3305) 1号墳石室覆土

やはり中世の火葬墓が構築されている。焼かれていない歯が16本のこっている。

歯 おもに永久歯であるが、下顎の左・右第2乳臼歯が出土している。かなり咬耗は進んでいる。永久歯は下顎だけで、左の中切歯、犬歯、第1小臼歯、および3本の大臼歯、右は中切歯から第3大臼歯までである。第1大臼歯はやや咬耗しているが、第2大臼歯は咬耗していない。したがって、この個体は6歳以上で第2大臼歯の萌出する12歳以前である。第3大臼歯の歯冠がかなり形成されているのでこの年齢の間では12歳に近い年齢、すなわち10歳前後であろう。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯がY5型、第2大臼歯が右は+5型で左が+4型、第3大臼歯の右はX4型、左は+4型である。左第3大臼歯は遠心半が退縮しておりかなり小型である。大きさは現代日本人の女性の平均値(権田;1959)と比べても小さめであるので、この個体は女性の可能性が高い。

古墳時代後期についてのまとめ

5例について記載した。出土量は、石室内に構築された火葬墓から出土した火葬骨以外はごく少数の歯で、時代的な特徴は抽出できなかった。性別は1例が女性と判断されたが他はすべて不明である。

B 古代

1) SB 0012 (No.115)

四肢骨片が1点出土しているだけである。同定できない。詳細は不明である。

2) SB 0042 (No.118)

部位不明の1点だけが出土している。詳細は不明である。

3) SB 0076

ヒトの上顎左第2大臼歯が出土している。遠心面は齶触で大きく浸食されており、頬側面、ならびに近心面の隣接面摩擦の下方にも小さな齶触がある。性別は不明である。

4) SB 0080 (No.3412)

頭蓋骨が出土している。顔面は左に向けている。頭蓋底部、後頭部は失われている。

頭蓋骨 眉弓はほとんど目立たない。乳様突起の大きさは普通である。鼻根部はさほど窪んでおらず、平坦な顔面であったと思われる。外後頭隆起はあまり発達していないようである。下顎骨はきしゃで、筋突起の内面の内突起はあまり発達しておらず厚くない。矢状縫合の後部は癒合している。冠状縫合は癒合していないが外板の縫合は単純化している。

右下顎にはすべての歯が残っているが、左の下顎の第2小臼歯より遠心の歯は生前に脱落している。左の上顎第2大臼歯と思われる歯根は、セメント質が厚く沈着しており、咬合する対抗歯を早い時期に失ったため挺出していたものと思われる。切歯は咬耗が進んでいる。

この個体は女性と思われる。年齢はかなり進んでいたものと思われる。熟年であろう。

5) SB0085 (No.140)

四肢骨だけが残っている。

四肢骨 腓骨の骨幹である。比較的太い。性別・年齢などは不明である。

## 6) SB0371 (No.3427)

上腕骨の骨幹遠位部だけが残っている。骨質の厚さは普通であり、太さも普通である。

## 7) SB1212 (No.735)

四肢骨片であるが部位は不明である。

## 8) SC0001 (No.585)

ヒトの右第IV中足骨の近位半が出土している。子供ではないが詳細は不明である。散乱人骨のひとつであろう。

## 9) SD0015 (No.2060)

焼かれたヒトの側頭骨片である。側頭骨の下顎窩の部分である。詳細は不明である。

## 10) SD0042 (No.2253)

大腿骨骨幹が残っている。太さはやや太く、骨質は厚い。後面の粗線はあまり発達していないようである。詳細は不明である。

## 11) SD0102 (No.388)

頭蓋骨片、腕骨片(細片)、脛骨などが残っている。

**頭蓋骨** 後頭骨ならびに部位不明の小さな破片である。後頭部はあまり張り出しておらず、プロカのII型である。人字縫合も外板の齧歯状が明瞭でかなり若い個体であろう。

四肢骨で残っているのは、細いがしっかりした右脛骨骨幹である。後面の鉛直線はよく発達しており、中央付近までのびている。中央付近の断面はヘリチカのV型である。栄養孔付近の大きさは、矢状径が28.4ミリ、横径17.3ミリで、扁平示数は60.9と扁平脛骨である。性別は不明である。

## 12) SD1009 (No.105-7)

四肢骨片であるが、ヒトかどうか判定できない。

## 13) SD1035 (No.263)

一握りほどの四肢骨片である。同定できるのは腕骨の骨幹ぐらいである。この腕骨の骨間線はよく発達しており、成人のものであろうが詳細は不明である。

歯が1本残っているが歯冠だけである。上顎右の第2大臼歯と思われる。歯冠の表面にも歯石が沈着しているので、対応して咬合する下顎の大臼歯は早期に脱落していた可能性がある。

## 14) SK1117 (No.2582)

頭蓋骨が残っている。骨の保存状態は比較的よい。

**頭蓋骨** 骨質は厚い。保存状態はよいが欠損する部分も多く、顔面は失われている。眉弓はやや発達している。前額部は緩やかに傾斜しているようである。乳棟突起の大きさは普通である。後外頭隆起はほとんど目立たずプロカのII型程度である。下顎骨は普通程度の厚さである。角前切痕がある。

**歯** 上顎では右は側切歯をのぞく7本が、左は第1・第2大臼歯が出土している。下顎では右は犬歯、2本の小白歯と第1・第3大臼歯が、左は第2小白歯から第2大臼歯までの3本が残っている。右は第2大臼歯の歯槽は閉鎖しており生前に脱落していた。左の第3大臼歯も生前に脱落していたものである。合計17本が残っている。前歯部の歯槽は残っている。咬耗は比較的進んでおり、大臼歯は平坦化している。咬耗度はモルナーの3～4度である。全体に小さい歯である。下顎の小白歯の舌側に歯石の沈着がみられる。下顎右第3大臼歯の歯根にはセメント質の沈着があり、たぶん対応する上顎の第3大臼歯が早期に脱落して挺出していただであろう。

**四肢骨** 左・右大腿骨の骨幹上部が残っている。後面の粗線は比較的よく発達している。骨は細い。外側の殿筋隆起はやや発達しており、大腿骨は非常に扁平である。上横径は29.9ミリ、上矢状径は20.3ミリ

で扁平示数は67.9となり、超扁平大腿骨に属する。

この個体は、四肢骨の細さから考えて女性であろう。年齢は壮年程度である。

15) SK1228-1 (No193,196,202,206,216,2586) (PL1)

かなり保存状態がよい頭蓋骨、四肢骨が出土している。後述のように3体分が出土している。

**頭蓋骨** 頭蓋底部はやや失われているもののほぼ完全な頭蓋骨である。保存状態は非常によい。

全体の形はややひしゃげている。眉弓はあまり発達していない。鼻根部の窪みはごく小さく顔面は平坦である。乳様突起はかなり小さく女性的である。外後頭隆起はあまり発達しておらず、後頭隆起のように後頭部が全体として後方に張り出している形である。下顎骨は頑丈で、下顎体も厚い。筋突起は比較的大きく厚い。角前切痕はごく軽度でほぼ直線的である。オトガイ隆起は大きく発達している。頭蓋の縫合は鋸歯状の縫合が明瞭で、この個体がまだ若いことを示している。

**歯** 上顎歯は左右とも中切歯から第1大臼歯までが残っている。左側の第2・第3大臼歯は生前に脱落したか、あるいは未萌出で、左側は破損していて定かではないが後部の歯槽の形態からして第1大臼歯しか残っていないと思われる。第1大臼歯の遠心面には第2大臼歯との隣接面摩耗がみられない。先天的な欠如かあるいは12歳頃に第2大臼歯が萌出した直後に何らかの理由で脱落したものであろう。下顎は左右ともに第2大臼歯までが植立しており、第3大臼歯は未萌出であったと推測される。なぜなら、第2大臼歯の遠心には第3大臼歯の萌出するだけのスペースがなく、第2大臼歯の遠心面に第3大臼歯との隣接面摩耗がみられないからである。

**四肢骨** 肩甲骨、左右上腕骨骨幹、右橈骨骨幹、左右寛骨、胫骨などが出土している。上腕骨はあまり太くなく、三角筋粗面の発達状態は普通である。橈骨の近位骨端は骨幹と癒合していない。この骨端が骨幹と癒合を完了するのは14歳～18歳ぐらいであるから、この個体はそれより若いことになる。寛骨の大坐骨切痕はほぼ直角で女性的である。耳状面はやや高く、耳状面傍溝（前溝）は深くえぐれており妊娠した経験があることを示している。女性の骨盤である。胫骨は細く、中央付近の断面はヘリチカのV型である。栄養孔最大径は32.3ミリ、横径は22.2ミリで、扁平示数は68.7となり中脛脛に属している。右胫骨（近位部が欠けている）の内側面には骨膜炎を起した痕がみられる。胫骨の推定の最大長は260ミリをやや下回る程度で、これに基づいて藤井（1960）の式で計算したこの個体の身長は138.2センチであり、平本（1977）による中世の女性の平均値144.9センチよりも低めである。腓骨は骨幹の中央付近は大きくえぐれており筋のよく発達した縄文時代人骨によく見られる櫛状腓骨である。距骨には踵面がみられ、内側踵面が前方に伸展する森本（1981）のC型である。

**体幹骨** 肋骨が数本と椎骨（仙骨を含む）がいくつか出土しているが、椎体にリッピングのような加齢変化はみられない。

この個体は、寛骨の形態や乳様突起が小さいことなどから女性と考えられる。年齢は第1大臼歯の咬耗がさほど進んでいないことや上顎の第3大臼歯が未萌出であることなどから10歳代後半と考えられる。

16) SK1226-2 (No208,2578)

頭蓋骨、歯、椎骨や肋骨などの体幹骨、ならびに四肢骨が残っている。前と同じ墓坑番号であるが、重複部分があるので別個体である。

**頭蓋骨** 若い個体である。下顎骨は形成途中であり保存状態は悪い。形態の観察は難しく特記すべきことはない。

**歯** 永久歯の一部が萌出している混合歯列である。第1大臼歯は萌出しているが第2大臼歯はまだ歯槽内にあり未萌出である。上・下顎の切歯はすでに萌出を完了したか、あるいは萌出中である。下顎切歯には咬耗がある。乳犬歯が残っている。上顎の中切歯は軽度のシャベル型で、側切歯はやや深いシャベル型

である。この側切歯の近心縁には斜切痕様の溝がある。下顎大白歯の咬頭と溝の型は、第1大白歯は左右ともY5型である。切歯の歯頸からやや上、ならびに下顎犬歯の歯冠中央付近に線状のエナメル質減形成がみられる。エナメル質減形成は、歯の形成時期に栄養不良や病気などの何らかのストレスによって引き起こされる歯冠の石灰化不全である。これらはそれぞれ3歳前後、ならびに5歳前後に形成されたものである。この個体の年齢は、永久歯歯冠の形成の状態から判断して7歳前後と思われる。

**四肢骨** 大腿骨の骨幹が出土している。この大腿骨はまだ細く、全長を推定しても200ミリには達しない程度である。

**体幹骨** 椎骨は椎体とその他の咬合がまだ癒合しておらず、かなり若い個体であることを示している。肋骨は細い。

この個体はまだ若く7歳前後であろう。性別は不明である。

#### 17) SK1226-3 (No2584)

頭蓋骨と歯、および四肢骨が出土している。後述のように若い個体であるため保存状態はさほどよくない。とくに四肢骨の保存状態は悪い。No2578の幼児（7歳程度）とは重複する歯があるので別個体である。この墓壇には幼児が2体埋葬されていたことになる。

**頭蓋骨** 左右の側頭骨錐体や頭蓋冠の一部、下顎骨体などが残っている。下顎骨は第2乳臼歯まで萌出しており、永久歯列は歯槽内で形成中である。

**歯** 乳歯列である。上顎では、左右の乳中切歯はないが、それより遠心の歯は植立している。下顎歯は失われたものが多く、左右の第2乳臼歯しか残っていない。乳歯は合計10本が残っている。乳歯の咬耗は少ない。永久歯は上顎の中切歯、左第1大白歯歯冠、下顎は左第1大白歯歯冠、切歯および犬歯で合計7本である。下顎第1大白歯の咬頭と溝の型はY5型である。形成状態から判断して、この個体の年齢は3歳程度と推測される。

#### 18) SK1598 (No2600)

歯と頭蓋骨片が1点出土している。頭蓋骨片は右側頭骨錐体部である。

**歯** 乳歯列である。永久歯の歯冠は下顎第1大白歯が形成途中である。乳歯はほとんど咬耗しておらず、切歯にわずかに咬耗がみられる程度である。したがって、かなり若い個体であり、生後1年以内の乳児と思われる。永久歯の下顎第1大白歯の咬頭と溝の型は右が+5型、左がY5型である。

性別は不明である。

#### 19) SK1687 (No2593)

子供の頭蓋骨と歯が出土している。保存状態は悪くないが若いので頭蓋骨はバラバラになっている。頭蓋冠の骨質は非常に薄い。

**頭蓋骨** 癒合はまったく癒合しておらず、幼児であろう。

**歯** 乳歯列であり、永久歯が歯槽内で形成途中にある。乳歯では上顎は左右の乳中切歯を除いた8本、下顎では乳歯切歯・乳犬歯をのぞいた6本が残っている。永久歯は上顎の中切歯や犬歯が歯冠の半分ほどまで形成されている。3～4歳程度であろう。永久歯の下顎第1大白歯の咬頭と溝の型は+5型である。形成途中の永久歯歯冠にエナメル質減形成はみられない。咬耗は少ない。

この個体は3～4歳程度の幼児である。性別は不明である。

#### 20) SK1769 (古代土坑墓)

頭蓋骨片と四肢骨片ならびに歯が出土している。頭蓋骨片は頭蓋冠の一部であると判定されるが部位を特定は出来ない。骨質は薄い。

**歯** 上顎右の第2・第3大白歯と下顎の右犬歯、第1および第2小白歯である。上顎の第2大白歯の歯



根には顕著なセメント質の沈着があるので、この歯と咬合する下顎大臼歯は早期に脱落しており、その結果この歯は挺出していたものと思われる。

**四肢骨** 大腿骨の上部骨幹が残っている。後面の粗線は普通の発達状態である。上部では著しい扁平性が見られ扁平大腿骨である。

この個体は性別不明である。比較的高齢であろうが詳細は不明である。

21) VU11 (No771)

歯とわずかな下顎骨片が残っている。永久歯は萌出しておらず形成途中であったと考えられる。乳歯列である。永久歯はいずれも小さく女性的である。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第1大臼歯がY5型で第6咬頭がある。第2大臼歯は+4型である。永久歯の形成状態から判断すると6歳前後と推測される。

この個体は歯しか残っていないが、かなり小さいので女性の可能性が高いと思われ、年齢は6歳前後の幼児であろう。

22) Z-1 (No509,510)

180グラムほどの頭蓋骨片、四肢骨片が残っている。

**頭蓋骨** 左側頭骨椎体、頭蓋冠の一部と思われるものが残っている。

**四肢骨** 大腿骨の骨幹の一部、胫骨の一部が残っている。後面の粗線が観察されるがさほど発達しているようではない。骨質は薄い。扁平大腿骨であろう。

23) Z-2 (No759,2519)

遺構が不明のものである。大腿骨骨幹が残っている。後面の粗線は非常に発達しており、幅を持った稜状で、柱状大腿骨である。他に焼けた数点の骨が出土しているが特記することはない。

古代のまとめ

23例について記載した。若い個体が比較的多く残っている。ただし、それらはほとんどが歯によって識別されるだけである。上顎の中切歯にはシャベル型が観察される。一例で計算された身長は平本(1977)の報告する鎌倉時代の女性の平均値より年齢が低いぶんだけ低い。時としてエナメル質減形成が観察されるが、例数は少ない。縄文時代人にみられたような踵陥面をもつものや、骨膜炎がみられた。

C 中世

1) SD1019 (No760,3221)

400グラムほどの焼骨である。一握りほどの四肢骨片である。頭蓋骨と四肢骨である。左右の側頭骨椎体が確認される。

2) SK0523 (No578)

歯が1本出土している。下顎右犬歯である。現生のものの可能性も考えら得るほど新しいという印象である。咬耗は軽度で先端に小さく象牙質が露出するだけである。

3) SK0553 (No523,3358) (PL3-6)

頭蓋骨と歯、ならびに四肢骨が出土している。

**頭蓋骨** おもに頭蓋冠であり、顔面は破損している。頭蓋冠の骨は薄い。眉弓は発達していないようである。乳様突起は基部だけが残っているが小さい。下顎骨は左半分がよく残っている。きゃしゃで、筋突起の高さは低く、内側の内突起後も発達していない。左の第3大臼歯は萌出していないか、あるいは生前に脱落したものと推測される。

**歯** 上顎は右中切歯、右第1小臼歯、左第2大臼歯、下顎は左中・側切歯、犬歯、第1小臼歯、第1大

臼歯、右が側切歯、犬歯の合計10本である。どれも咬耗は進んでいない。上顎小臼歯はかなり小さめである。

**四肢骨** 左右の上腕骨、尺骨、大腿骨、胫骨、腓骨と右の橈骨が出土している。上腕骨はほぼ完全な形で残っている。骨幹は細く、三角筋粗面も発達していない。最大長は243ミリでこの値から藤井の式(1960)を用いて計算された推定身長は139.1センチとかなり小さい。大腿骨はさほど太くなく、後面の粗線も発達していない。稜状になっていない部分もあるほどである。ただし、上部外側の殿筋隆起はやや発達しており、転子下窩は浅いが溝状になっている。大腿骨は骨頭が残っているので長さを復元してみると長く見積もっても325ミリ程度である。この値から計算される推定身長は149センチ程度である。先の上腕骨の結果との平均値はほぼ144センチである。胫骨の後面の鉛直線は発達していない。中央付近の断面はヘリチカのV型である。

この個体は女性である可能性が高い。年齢は歯の咬耗があまり進んでいないこと、ならびに上腕骨の近位骨端が癒合していることを考えると成人になった程度であろう。身長は144センチほどであろう。

#### 4) SK0555

頭蓋骨、四肢の長骨が残っている。保存状態はさほどよくなく、骨端は失われている。

**頭蓋骨** 頭蓋骨の顔面の一部と頭蓋冠がでている。骨が薄いためなどいくつかの要素が絡まって頭蓋冠がひずんでいる。眉弓はほとんど発達していない。鼻根部はくびれておらず平坦である。左右の鼻骨の合わさる縫合部で明瞭な稜を形成している。いわゆる「狭み鼻」の可能性はある。矢状縫合は齧歯状の縫合が明瞭である。また、人字縫合や冠状縫合の内板も癒合を完了していない。比較的若い個体であろう。頭蓋冠の骨質は薄い。下顎骨はきゃしゃで、角前切痕はごく弱い。筋突起は小さくきゃしゃで内側の内突起稜はほとんど発達していない。

**歯** 上顎は右の第2小臼歯、左の犬歯、第2および第3大臼歯が残っている。下顎は右の第2小臼歯から遠心の歯と左の第2小臼歯から遠心の歯の合計13本が残っている。上顎の左第2小臼歯と第1大臼歯は生前に脱落し歯槽が閉鎖している。咬耗は進んでおらず、象牙質の露出する歯は第1および第2大臼歯ぐらいで、それもごく小さな象牙質の露出である。第3大臼歯が萌出しており、軽微だが咬耗がみられるので成人には達していたであろうが、青年程度であろう。小臼歯歯冠の中央付近に弱い線状のエナメル質減形成がみられる。これは5歳前後に形成されたものであろう。

**四肢骨** 左右の上腕骨、左の橈骨・尺骨の骨幹、大腿骨、胫骨、腓骨が残っている。上腕骨は非常に細く直線的である。三角筋粗面はほとんど発達していない。大腿骨も細く、後面の粗線は中央付近でやや高まりを見せるもののほとんど目立たないほどである。上部外側の殿筋隆起は発達しており、転子下溝が形成されている。胫骨の後面の鉛直線もほとんど目立たない。中央付近の断面はヘリチカのIV型に近い。

この個体は、下顎骨、四肢骨などが非常にきゃしゃであり、前額部も垂直に近く女性的である。女性である可能性が高い。女性にしてもかなりきゃしゃであったと推測される。年齢は青年程度と推測される。

#### 5) SK1008 (No.2579) (PL2)

保存の良い一体である。頭蓋骨はかなり原形をとどめて出土している。四肢骨も骨幹はよくのこっているが骨端は失われているものが多い。

**頭蓋骨** 下顎骨は左右とも下顎角の部分が失われている。きゃしゃな下顎骨で、筋突起は小さい。オトガイ隆起はやや発達しているがオトガイ結節は小さく、したがってオトガイ三角は目立たない。乳突突起は小さい。前額部は緩やかに後方へ傾斜している。頭蓋骨最大長は眉間(グラベラ部)がやや破損している。正確ではないが、推定で180ミリ、頭蓋最大幅は132ミリであり、頭蓋長幅示数は73.3となり、長頭に属している。鼻根部は平坦で、縄文時代人のような立体的な顔立ちではない。頭蓋の縫合は外板では癒

合消失している部分はなく、むしろ齧歯状の縫合が明瞭である。

**歯** 上顎は、左は第3大臼歯までが直立しているが、右は第2第3大臼歯の部分が破損して失われている。下顎では左右とも第3大臼歯まで萌出しているが、左右とも第1大臼歯は歯根だけしか残っていない。どちらの第1大臼歯の歯槽も大きくえぐれて頬側面の吸収が進んでいるので、何らかの病気、あるいは齧蝕によって生前にかなりの部分が失われたものであろう。上・下顎に抜歯はない。咬耗は比較的進んでおり、いずれもモルナーの3度程度で、第1大臼歯は咬合面が平坦化しており近心舌側咬頭はすり減って大きな象牙質が露出している。下顎の第2・第3大臼歯は象牙質は露出していない。

**四肢骨** 上腕骨の太さは普通で、三角筋粗面はさほど発達していない。橈骨の骨間線はよく発達している。大腿骨の後面の粗線は比較的発達しており、あまり高くないが稜状である。この粗線には骨の増殖が随所に見られ、加齢変化と思われる。殿筋隆起は発達していない。胫骨では後面の鉛直線は発達していないが、中央付近でやや高まりを見せており、中央付近（推定）の断面はヘリチカのIV型である。腓骨はさほど太くないが槌状である。

この個体は四肢骨は比較的発達しているが、頭蓋骨の形態は女性的な面が多い。成人であろう。顔は平坦である。

#### 6) SK1011B (No48)

保存状態は非常に悪い。残っているのは一握りほどの四肢骨片である。鎖骨片、左大腿骨遠位部、左右胫骨近位部、腓骨骨幹片、指骨片などがみられる。腓骨は細いという以外に特記すべきことはない。

性別・年齢ともに不明である。

#### 7) SK1011A (No470)

**四肢骨** 上腕骨は太くて頑丈である。三角筋粗面も非常によく発達している。尺骨の骨間線は大きく張り出している。大腿骨も太いが骨質はさほど厚くない。後面の粗線はあまり発達しておらずほとんど稜状になっていない。推定した中央の横径は29.1ミリ、矢状径は30.4ミリであり、柱状示数は104.5である。胫骨も太い。後面の鉛直線は発達しておらず、中央付近の断面はヘリチカのI型に近い三角形である。ヒラメ筋線などは発達している。

この個体は四肢骨の太さなどから考えると男性であろう。少なくとも成人には達していたがそれ以上は不明である。

#### 8) SK1012 (No566)

頭蓋骨と歯、四肢骨片が出土している。後述のようにこの個体は若い個体であるので、頭蓋骨に関しては保存が悪く残っておらず、特記することはない。

**歯** 乳歯列であり、永久歯の歯冠は歯槽内で形成中である。乳歯列では上顎が左右乳中・側切歯、左乳犬歯、左右の第1・第2乳臼歯、下顎が右乳側切歯、左右の乳犬歯、左右の第1・第2乳臼歯の合計16本が残っており、永久歯は上下顎の左右の第1大臼歯と、上顎左中・側切歯、下顎の左側切歯と犬歯の8本が残っている。

上顎中切歯、側切歯はシャベル型である。下顎の第1大臼歯の咬頭と溝の型はどちらも+5型である。エナメル質減形成や齧蝕はみられない。永久歯の形成過程から判断して3歳前後であろう。

歯は非常に小さく、現代人女性の平均値（権田；1959）を下回り、項目の多くは縄文時代人の女性の平均値（松村；1989）を下回る。

この個体は、若い個体で3歳前後と推測される。歯が非常に小さいことから女性の可能性が高い。

#### 9) SK1013 (No32)

頭蓋骨と四肢骨が残っている。

**頭蓋骨** 頭蓋骨は前頭骨とそれ以外の側頭骨錐体などと頭蓋冠の破片、ならびに下顎骨右半が残っている。頭蓋冠は形は残っているが取り上げるのは困難であった。前頭骨の眉弓はさほど発達しておらず、平坦である。オトガイ隆起は発達しており、オトガイ結節も発達しているのでオトガイ三角は明瞭である。冠状縫合は明瞭な鋸歯状の縫合が残っている。下顎骨は比較的頑丈で筋突起は厚い。下顎枝は幅が広くて低い。

**歯** 下顎歯は右側の第2小白歯から近心の歯が植立しており、第1および第2大臼歯は歯槽が閉鎖し生前に脱落していた。第3大臼歯は鈍な歯槽があり、植立していた可能性はあるが、脱落寸前であったろう。

上顎第1大臼歯、下顎の左犬歯、第1・第2小白歯、および第1・第2大臼歯の合計6本と歯根1本が残っている。咬耗は進んでおり、上顎第1大臼歯は咬合面のエナメル質がほとんど失われている。下顎の左大臼歯(第2?)は齶蝕によって歯冠の近心半が消失している。小白歯の歯冠中央付近にエナメル質減形成が認められる。

**四肢骨** 上腕骨の遠位部骨幹は太く、外側縁もよく張り出していたと思われる。橈骨の骨間縁は大きく発達している。左右の大腿骨が残っている。右は大腿骨近位半である。保存状態はよいが、骨端は失われている。後面の粗線はよく発達しており、幅を持った稜状で、いわゆる柱状大腿骨である。上部外側の殿筋隆起もやや発達しているので転子下窩は溝状に発達している。骨質は非常に厚く男性的な大腿骨である。

上横径は34.2ミリ、上矢状径は26.5ミリで扁平示数は77.5で、いわゆる扁平大腿骨である。左大腿骨の中央(推定)付近の横径は29.1ミリ、矢状径は30.5ミリで断面示数は95.4である。胫骨は太く、後面の鉛直線はよく発達しており、上部は鋭い縁となっており、中央付近までのびている。いわゆる扁平胫骨である。

この個体は下顎骨の頑丈さや四肢骨の太さなどから男性と判断される。歯の咬耗は非常に進んでおり、脱落もあるのでさほど若い個体ではなかろう。

#### 10) SK1014-1号

頭蓋骨片と椎骨、四肢骨が出土している。

**頭蓋骨** 左側頭骨、後頭骨、下顎骨ならびに頭蓋冠の破片が残っている。後頭骨の外後頭隆起は発達しておらず、プロカのII型程度である。頭蓋冠の骨の厚さは普通である。頭蓋の矢状縫合は外板では鋸歯状の縫合が明瞭であるが、内板は癒合して消失している。下顎骨は前方部分が残っている。大臼歯部の歯槽はすべて閉鎖しており、左右の犬歯や右第1小白歯の歯槽も吸収がかなり進んでいる。オトガイ隆起はよく発達している。下顎そのものは厚くない。

**体幹骨** 椎骨は下位胸椎、腰椎が出土している。胸椎体、腰椎体の辺縁には加齢変化の小さなリッピングがみられる。さほど若い個体ではなかろう。

**四肢骨** 右上腕骨遠位半、左上腕骨骨幹、寛骨片、左右大腿骨、距骨片などがみられる。上腕骨の三角筋粗面は比較的発達しているが骨は細い。大腿骨はさほど太くない。後面の粗線は幅を持った稜状であるがさほど発達していない。中央付近(推定)は横径27.1ミリ、矢状径25.3ミリで柱状示数は93.4である。上部外側の殿筋隆起もさほど張り出していない。距骨(距骨長:42.8ミリ)には蹄露面があり、森本(1981)のB型である。

この個体は、四肢骨も細く、骨盤は耳状面の辺縁に骨増殖がみられ、耳状面前溝が比較的強くえぐれている。これは妊娠痕と思われ女性の可能性が高い。椎体に軽度のリッピングがみられることや、歯の脱落も多いので比較的高齢(熟年)であろう。



11) SK1014-2号 (No102)

頭蓋骨片、四肢骨片などが残っている。後述のようにこの個体は非常に若い個体であるので、頭蓋骨は細片化して残りが悪い。

**頭蓋骨** 細片化している。左側頭骨叢体があるが、破損がひどく特記すべきことはない。

**歯** 乳歯列である。永久歯は上下の第1大臼歯と下顎切歯の歯冠が形成され歯根が形成途中の段階であり、3歳前後と考えられる。永久歯の下顎第1大臼歯の咬頭と溝の型は右がY5型、左が+5型である。上顎の右第1乳臼歯の咬合面に大きな齧蝕が観察される。

性別は不明である。

12) SK1015 (No236)

全体の保存状態は悪く、頭蓋骨片と歯が残っているだけである。

**頭蓋骨** 細片化した頭蓋骨片だけである。頭蓋冠の骨は非常に薄い。後述のようにこの個体は若い個体であるので保存が悪いのであろう。特記すべきことはない。

**歯** 乳歯列である。上顎は左右の乳中切歯・乳犬歯と左の第1乳臼歯が、下顎は右の犬歯から第2乳臼歯まで、合計8本が残っている。これらの咬耗はごくわずかで、切歯の切縁に細い象牙質が露出している程度である。永久歯は上顎右の第1大臼歯、下顎は左右の第1大臼歯の歯冠が残っている。これらは形成過程であり、歯根は形成されていない。この形成状態と乳歯の咬耗状態を考えると、この個体は3歳前後と考えられる。下顎第一大臼歯の咬頭と溝の型は右がY5型、左が+5型である。

この個体は3歳程度の幼児である。性別は不明である。

13) SK1016 (No238,239)

おもに頭蓋骨と歯が残っている。四肢骨は失われている。

**頭蓋骨** 保存状態が悪く形態の観察は出来ない。

**歯** 乳歯列である。永久歯は第1大臼歯が形成途中である。上顎では右は側切歯から第2乳臼歯まで、左は乳中切歯と乳犬歯から第2乳臼歯まで、下顎は右が乳側切歯から第2乳臼歯まで、左は側切歯と第2乳臼歯が残っている。咬耗はほとんどなく、かなり若い個体である。永久歯は、上顎の左右の中切歯と左側切歯、下顎の右側切歯と左右の犬歯、ならびに上下顎の第1大臼歯の歯冠が残っている。上顎の切歯は顕著なシャベル型であり、新モンゴロイドの影響を感じさせる。左右の上顎第1大臼歯の近心舌側には付加結節であるカラベリ結節がある。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は右第1大臼歯がY5型である。

年齢は2歳前後と推測される。性別は不明である。

14) SK1027 (No240)

全量が105グラムほどの焼骨である。頭蓋骨と四肢骨の細片で灰化するまで焼かれている。

15) SK1031 (No256)

全量が820グラムほどの焼骨である。頭蓋骨の部分比較的よく残っている。左の眼窩外側部、上顎骨などで、下顎骨はほぼ全体が確認できる。四肢骨は部分的で、大腿骨や寛骨などである。上顎骨は右は犬歯から左の第1小臼歯までの歯槽が残っている。この部分に抜歯はない。下顎骨は右側下顎体後部が2つ出土しており、2体が混入していることを示している。一方は第3大臼歯を除き臼歯はすべて生前に脱落している。もう一方も第2大臼歯付近の歯槽は退縮している。いずれにしても比較的高齢であろう。どちらも下顎体はさほど頑丈ではない。大腿骨後部の粗線は幅を持った稜状に発達している。

16) SK1032 (No278,291,292,295)

頭蓋骨、歯、四肢骨などが出土している。

**頭蓋骨** 歯の植立した左右の上顎骨、左側頭骨、後頭骨などが残っている。乳様突起の基部が残ってい



るがさほど大きくない。ただし、これが年齢が若いためあるいは女性であるためかは不明である。外後頭隆起はほとんど発達しておらず、プロカのI型程度である。人字縫合の鋸歯状の縫合は明瞭で、この個体が若いことを示している。下顎骨はがっしりしている。

**歯** 第3大臼歯は未萌出であり、第2大臼歯の咬耗も少ないので萌出間もないものと推測される。歯槽内で形成途中の第3大臼歯はまだ歯冠が完成した段階なので、この個体は15歳前後であろう。上顎の中切歯ならびに側切歯は顕著なシャベル型である。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は、第1大臼歯が左右とも+5型、第2大臼歯は右が+5型で左が+4型である。犬歯や切歯歯冠の中央付近とやや咬頭より線状のエナメル質減形成が観察される。これらが形成されたのは5歳前後である。

**四肢骨** 腕骨右骨幹、寛骨、左右大腿骨の近位大転子と遠位骨端、左右の脛骨骨幹ならびに脛骨の遠位骨端、左右の腓骨骨幹、中手骨などが出土している。寛骨の大坐骨切痕は直角に近く女性的である。大腿骨や脛骨の骨端が未化骨である。この部分はほぼ同じ時期に化骨し、男性で17~20歳、女性で15~19歳程度に骨端線が閉鎖する。出土した骨端はまだ骨幹との間隔が大きく化骨には間があるように思われるので15歳よりは若い個体であろう。他に特記すべきことはない。性別は女性であろう。大腿骨の推定最大長は363ミリほどでこの値をもとに藤井の式によって計算した推定身長は157.7センチである。成長途中でこの身長であるから成長すると160センチを越える大きさになるであろう。腓骨の骨端は未化骨であり、形は種状ではない。

他に頸椎体などが残っている。

この個体はまだ若い女性で、13歳前後と思われる少年である。

#### 17) SK1040 (No2581)

頭蓋骨と歯、ならびに四肢骨の一部が出土している。骨の保存状態はよい。

**頭蓋骨** 頭蓋冠を中心とする頭蓋骨である。他に左右側頭骨錐体や下顎骨も出土している。外耳孔の上の耳道上縁は比較的発達している。下顎骨は正中部から右の下顎体の部分が残っているが本来歯が植立していた歯槽は線状の痕のようになっており歯はすべて生前に脱落している。

**歯** 歯は下顎左中切歯・犬歯と上顎左犬歯・右小臼歯（歯種不明）の4本が残っているだけである。咬耗はやや進んでいるが大きく象牙質が露出するような段階には達していない。他の歯に比べて小臼歯だけはやや咬耗が進んでいる。

**四肢骨** 四肢骨は細片化しており、脛骨片などが確認できるが形態の詳細は不明である。

この個体は歯の脱落状況から判断すると、比較的高齢の可能性はある。性別は不明である。

#### 18) SK1118 (No574)

膝蓋骨、指骨などが出土しているが特記することはない。

#### 19) SK1180-1号 (No151) (PL3; 1~5)

頭蓋骨、鎖骨、左右の上腕骨、左の腕骨・尺骨の近位半、中手骨片、肋骨片、椎骨などが残っている。

**頭蓋骨** 保存状態は悪く、形態を観察するのは難しいので特記することはない。

**四肢骨** 鎖骨（中央垂直径8.8ミリ、中央矢状径10.8ミリ）は細くしゃちである。上腕骨の三角筋粗面の発達程度は普通である。普通の太さである。この右上腕骨は近位骨頭が失われているが、推定で最大長は264ミリである。この値から藤井の式を用いて計算した推定身長は144.1センチである。この値は縄文時代女性の平均値よりもやや小さめである。脛骨の後面の鉛直線は非常によく発達しており、遠位部にまで伸びており森本(1981)のA型に属する。したがって、中央付近の断面は四角形でヘリチカのIV型の扁平脛骨である。距骨は踵面を持つ。内側踵面が前方に伸展する森本(1981)のC型である。距骨長は45.4ミリである。

**体幹骨** 椎骨の椎体の辺縁には棘状の張り出しがあり、鈴木（1978）のいうリッピングで加齢変化であろう。程度は軽度である。

この個体は骨の細さなどから推測して女性と思われる。年齢は加齢変化が見られるのでさほど若くはない成人であろう。

**20) SK1160-2号 (No2580,556,559,150)**

**頭蓋骨**、四肢骨が残っている、保存状態は非常によい。ほぼ一体分の全体に近い量が残っている。ただし、右大腿骨が2本含まれており、混入か合葬か不明である。

**頭蓋骨** 外後頭隆起は発達しておらず、むしろ後頭隆起のように後方に全体的に張り出している。乳様突起は小さく女性的である。

**四肢骨** 尺骨の最大長は225ミリである。これをもとにして計算した推定身長は148.1センチである。寛骨は左右が残っている。耳状面はやや高くなっており、大坐骨切痕は直角に近く女性的である。大腿骨はさほど太くない。後面の粗線は張り出しておらず、稜も目立たない。上部外側の殿筋隆起はよく発達しており、転子下窩が溝状になっている。この最大長は378ミリで、この値を用いて計算した推定身長は161.0センチであり高身長と言える。尺骨や脛骨（後述）で計算した推定身長とは大きさが違いすぎる。したがって、この大腿骨は、別個体のものである可能性もある。No150（No9）の大腿骨は左右のセットになっている大腿骨よりも短い。脛骨は後面の鉛直線は中央までは達していない。したがって中央付近の断面はヘリチカのV型である。脛骨最大長（303ミリ）から計算された推定身長は148.8センチである。この脛骨の内側面には骨膜炎の痕跡が伺われる。

他に指骨、足根骨などが出土している。

（参考：SK1226の脛骨にも同じ骨膜炎の痕跡があり、混ざった可能性もある）

この個体は女性で、やや大柄である。年齢は成人であろうが詳細は不明である。

**21) SK1221 (No477)**

若い個体の頭蓋骨片が2点残っているが、形態の観察は出来ず詳細は不明である。

**22) SK1227 (No563)**

ヒトの四肢骨と思われる細片が出土しているが、詳細は不明である。

**23) SK1228 (No215)**

若い個体である。四肢骨・体幹骨の一部や頭蓋骨の一部が残っているがどれも断片的である。

大腿骨の骨幹と思われるものがでていますがまだ新生児か乳児程度の大きさである。椎骨はまだ椎体と椎弓が癒合していない。

**24) SK1515 (No2475)**

歯だけが出土している。乳歯列である。残っているのは、上顎は左の乳中切歯、左右とも犬歯から第2乳臼歯まで、下顎は左の第2乳臼歯で、合計8本である。これらはまったく咬耗していない。乳切歯がないのでわからないが、少なくとも2本の乳切歯に次いで萌出する第1乳臼歯に咬耗がなく、しかも第1乳臼歯の歯根も形成されていないので誕生から間もない、すなわち生後9ヶ月前後ということになる。性別は不明である。

**25) SK1525 (No2596)**

頭蓋骨、四肢骨が残っているが顔面は失われている。

**頭蓋骨** 土圧でややひしゃげている。頭頂部から顔面にかけては失われている。矢状縫合、冠状縫合、人字縫合ともに内板はほとんど癒合しており、外板でもかなり癒合が進んでいるので比較的高齢であろう。乳様突起はやや大きめである。耳道上稜はよく発達している。後頭部は突出せず、プロカのII型程度であ

る。骨質の厚さは普通である。下顎骨は頑丈であるが、筋突起は細く内突起稜はさほど発達していない。顎舌骨筋線は鋭い。オトガイ隆起は普通である。オトガイ三角はやや膨隆している。

**歯** 出土したのは7本である。下顎右犬歯、右第1小白歯、および上顎の左右の切歯と小白歯と思われるものである。上顎の切歯は、どちらもシャベル型である。大きさはさほど大きくはない。小白歯は歯頸部に大きな齧蝕(虫歯)がみられる。下顎の大臼歯部は左の第3大臼歯と思われるものをのぞいて生前に脱落していたため、歯の植立すべき歯槽の退縮が著しい。残っている歯の咬耗は顕著で、小白歯では咬合面のエナメル質は消失している。

**体幹骨** 頸椎が2個残っている。第1頸椎と下位頸椎(順位不明)である。第2頸椎の歯突起が関節する歯突起窩の関節面の辺縁には骨増殖がみられる。加齢変化であろう。下位頸椎の関節突起部はかなりつぶれているようであり、やはり加齢変化であろう。

**四肢骨** 橈骨の骨幹は細い。寛骨の大坐骨切痕は直角に近い特徴を示し女性的である。大腿骨の骨幹が残っている。細く前後に扁平である。後面の粗線は発達しておらず、稜状になっていない。上部外側の殿筋隆起はよく発達しており外側に張り出している。従って転子下窩は溝状になっている。上横径は28.0ミリ、上矢状径は18.3ミリで、扁平指数は65.4の超扁平大腿骨である。

この個体はかなりの高齢で熟年程度であろう。男性と女性の中間的な形態で性別を判定するのは難しいが、寛骨などの形態を考えると女性の可能性が高いと考える。

#### 26) SK1543 (No220,2594)

頭蓋骨、四肢骨が残っている。保存状態はよい。

**頭蓋骨** かなりの部分が出土しているが顔面は破損している。頭蓋冠は大きい。眉弓は発達しており、男性的である。乳様突起は大きい。頭蓋の縫合は、内板は単純化し癒合している部分もあるが、外板は癒合していない。下顎骨は頑丈である。オトガイ隆起は普通であり、オトガイ結節もやや発達している。筋突起は長いが内側の内突起稜はさほど発達していない。外後頭隆起はよく発達しプロカのIII~IV型である。軽度の角前切痕がある。

**歯** 下顎歯では右の大臼歯はほとんど失われており、第1大臼歯の歯根だけが残っている。左の大臼歯は残っている。ただし、切歯部の歯槽はかなり吸収が進んでいる。咬耗はかなり進んでおり、犬歯や切歯は歯冠の半分程度まで摩耗している。

**四肢骨** 上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、胫骨などが残っている。上腕骨遠位部は太く頑丈である。遠位部の外側縁も大きく張り出しており、筋がよく発達していたことを示している。尺骨も太く、骨間縁もよく発達している。大腿骨はさほど太くはないが、後面の粗線は稜の高さはさほどではないがやや発達している。上部外側の殿筋隆起は小さい。胫骨の中央付近の断面はほぼ三角形で、ヘリチカのI型に属している。

この個体は男性であろう。年齢はやや高齢で、壮年から熟年程度と思われる。

#### 27) SK1544-1号 (No2032,2031,2595) (PL4: 1~3)

頭蓋骨、四肢骨がかなり残っている。骨の保存状態は比較的良好である。

**頭蓋骨** かなりの部分が残っている。眉弓はあまり発達していない。前頭結節が発達しておりやや目立つ。乳様突起の大きさは普通であり、あまり大きいとは言えない。下顎骨は比較的頑丈で下顎体も厚い。角前切痕はごく軽度で、下顎角部が外側に張り出している。筋突起は大きくないが厚く、内面の内突起稜は発達している。筋突起から続く下顎体の外側結節はやや膨隆している。オトガイ隆起はやや発達している。頭蓋の縫合は内板も癒合していないのでさほど高齢ではない。

**歯** 歯の保存状態はあまりよくない。上顎歯は右の切歯部が破損していて不明だが、右の第3大臼歯を

除いてすべて残っている。下顎骨は左の第3大臼歯以外はすべて残っている。第3大臼歯の歯槽は閉鎖しており、生前に脱落したものであろう。咬耗は進んでおり、第1および第2大臼歯は上・下ともモルナー(1971)の4度である。上顎の中切歯はごく軽度のシャベル型であり、側切歯もシャベル型である。歯は大きめで、現代人男性の平均値(権田:1959)を上回るものが多い。

**四肢骨** 左上腕骨骨幹、左右の大腿骨の骨幹、および左右脛骨・腓骨骨幹が出土している。上腕骨は細めである。大腿骨の太さは普通であるが、後面の粗線はよく発達して幅は狭いが稜状に発達している。上部外側の殿筋隆起はほとんど目立たない。脛骨の中央付近の断面はヘリチカのV型に近い三角形である。後面の鉛直線の発達はさほどではない。この構造には骨増殖が見られ、ある程度の年齢に達していたことを感じさせる。すくなくとも成人であらう。

この個体は男性と女性の中間的な形態を示しており、断定はできない。年齢は、歯の摩耗は一部で進んでいるが頭蓋の縫合などを総合すると壮年程度であらう。

#### 28) SK1544-2号 (No2595) (PL4; 4~5)

保存の良い頭蓋骨が残っている。

**頭蓋骨** 眉弓は比較的発達している。乳様突起は大きい。外後頭隆起部は破損しているが周囲の構造から比較的大きそうである。頭蓋冠の骨質は厚く、男性的な頭蓋骨である。頭蓋最大長は198ミリと非常に大きい。下顎骨は大きく頑丈であるがオトガイ隆起はさほど発達していない。軽度の角前切痕がある。筋突起は大きく内側の内突起後も発達している。縫合は内板はほとんど閉鎖しているので比較的高齢であらう。

**歯** 上顎は第2大臼歯まで(第3大臼歯部は破損している)、下顎も第2大臼歯部までで第3大臼歯の歯槽は閉鎖している。咬耗は進んでおり切歯部は歯冠の半分ほどが摩耗している。大臼歯は平坦化しており、咬耗度はモルナーの4~5度である。

この個体は男性と考えられる。年齢は熟年には達していたであらう。

#### 29) SK1561 (No22,515,512)

頭蓋骨、四肢骨などが出土している。

**頭蓋骨** 乳様突起の大きさは普通である。外後頭隆起はさほど発達しておらず、プロカのII型程度である。頭蓋冠の骨は薄めである。顎関節が外側方にやや開いており、下顎がずれる(顎がはずれる)関節であった可能性がある。下顎骨は歯が脱落して歯槽の吸収が進んでいる。下顎の左犬歯から後方の右下顎体、および下顎枝が残っている。筋突起は高くはないが内突起後はよく発達している。右は大歯あるいは第1小臼歯に相当する部分に歯槽が確認できるだけで残りの歯槽は閉鎖している。前歯部の歯槽も閉鎖している。比較的高齢であらうと推測される。

**歯** 下顎右の第1小臼歯が残っている。咬耗はやや進んでおり、歯頸部に大きな齧蝕がみられる。

**四肢骨** 鎖骨、肩甲骨肩峰部、上腕骨、右大腿骨、左右脛骨骨幹、足根骨などが残っている。肩甲骨の肩峰には骨増殖がみられる。加齢変化であらう。鎖骨は中央垂直径10.4ミリ、中央矢状径は12.0ミリである。太さはやや細めである。上腕骨は、左の骨幹と右の遠位部が残っている。それぞれの太さは普通であるが、三角筋筋面はやや発達している。大腿骨後面の粗線の発達は普通で、低い稜状になっている。粗線には骨の増殖などの加齢変化がみられる。上部外側の殿筋隆起はやや発達している。上横径は30.6ミリ、上矢状径は20.9ミリで扁平示数は68.3となり、超扁平大腿骨に属している。右大腿骨の推定最大長は390~395ミリ程度の範囲内で、これに基づいて計算した推定身長は163.7~164.8センチ(女性として)、あるいは151.2~152.5センチ(男性として)である。

脛骨は後面の鉛直線は栄養孔付近にまでのびている。中央付近の断面はヘリチカのV型に近い。距骨の



踵跡面は森本のC型であろうがさほど前方へ伸展していない。脛骨の栄養孔位の矢状径は29.3ミリ、横径は21.8ミリで扁平指数は74.4となり、扁平脛骨には属していないことになる。他に尺骨近位部、中手骨などが残っているが、詳細は不明である。

この個体は男性と女性の中間的な形態を示す部分が多いが、頭蓋骨や四肢骨の特徴から判断して女性の可能性が高い。歯の脱落や大腿骨の粗線にみられる加齢変化などを考えると比較的高齢（熟年）の可能性がある。

30) SK1858 (No2974)

四肢骨片が10点ほど残っている。左右不明の上腕骨近位端、上腕骨骨幹が同定できる。上腕骨は細い。他は不明である。子供ではなからう。

31) SK1893 (No2169)

指骨（中節骨）の破片であるが、詳細は不明である。

32) SK2106 (No2567)

62グラムほどの焼骨である。おもに頭蓋骨片であるが細片化しており、詳細は不明である。

33) SK2113 (No2501, 2502, 2503)

合計570グラムほどの焼骨である。炭と一緒に集められている。灰化するまで焼けている。頭蓋骨片が少ない。細片化しており詳細は不明である。

34) SK2114 (No2509)

わずかな焼骨の細片である。特記することはない。

35) SK5008 (No3269)

20グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片が主だが細片で詳細は不明である。

36) SK5071 (No2351, 2352)

1055グラムほどの焼骨である。頭蓋骨や四肢骨であるが細片化している。特記することはない。

37) SK5098

焼骨で、頭蓋骨片が数点と四肢骨片である。全量で150グラムほどである。頭蓋骨では側頭骨錐体の一部、上顎骨片、頭蓋冠の一部などがみられる。四肢骨では、膝蓋骨、大腿骨遠位端片などがみられるが、詳細は不明である。主な四肢骨は含まれていない。火葬された跡の取り残しの可能性がある。

38) SM5001-2 (No3299) 1号墳石室内の焼骨

石室内には中世の火葬墓が構築されており、火葬骨は中世のものとしてされている。453グラムほどの火葬骨である。頭蓋骨と四肢骨片である。頭蓋骨は外後頭隆起がかなり発達しているが、乳様突起はあまり大きくないようである。頭蓋冠の骨質は厚い。大腿骨後面の粗線はよく発達している。骨幹には波形の亀裂が無数に見られる。

39) SM5001-3 (No3305) 1号墳石室内の火葬骨

248グラムほどの焼骨である。おもに四肢骨片であるが部位を特定できるような部位はない。

40) SM5012 (No2362)

1069グラムほどの焼骨である。頭蓋骨では側頭骨の錐体が見られる。四肢骨の骨のうちに骨端がまだ骨幹と癒合していないものがあるので比較的若い個体であろう。細片がかなり多量にある。

41) SM5013

全量で1744グラムの焼骨である。頭蓋骨や四肢骨であるが頭蓋骨の量がやや少ない目である。外後頭隆起はさほど発達していない。重量的には1体分の火葬骨にはやや足りないが、ほとんどを集めている可能性がある。



## 42) SM5014 (No2373,2374)

1095グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片、四肢骨片が出土している。頭蓋骨片は非常に薄く、縫合は鋸歯状の縫合が明瞭である。したがって、かなり若い個体である可能性が高い。下顎骨の右前方部ではすべての歯の歯槽が確認できる。オトガイ高は高くない。

## 43) SM5017, 5015 (No2364,3295)

全量で1495グラムほどの焼骨である。頭蓋骨と四肢骨片である。頭蓋骨では後頭骨、側頭骨錐体や下顎窩などが確認できる。ただし、左側頭骨錐体が2つ出土しているため、ここには少なくとも2体分が混在している可能性がある。大腿骨の後面の粗線はよく発達しており、幅を持った稜状である。下顎骨の左右大歯までの歯槽には抜歯の跡は見られない。他に細片が多数ある。成人には達していたであろう。

## 44) SM5019 (No2370)

1244グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片と四肢骨片である。頭蓋骨片は比較的多く頬骨などの顔面の骨も見られる。上顎骨と下顎骨の左側臼歯部では第3大臼歯の歯根が確認できるので、子供ではない。頭蓋冠の骨質は非常に薄い。四肢骨は細片化しており詳細は不明である。

## 45) SM5024, 5025, 5026 (No2383,2384,2385)

全量で1829グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片が比較的多い。おもに頭蓋冠の骨で、他に下顎骨や上顎骨がある。外後頭隆起はよく発達している。下顎骨はオトガイ結節も発達しており、他の特徴とあわせると男性の可能性が高いと思われる。頭蓋の縫合は鋸歯状が明瞭で比較的若い個体であろう。大腿骨の近位の骨頭は骨幹と癒合しておらず分離している。この部分が化石するのは20歳前後と考えられているのでこの個体は20歳前の可能性が高い。また、下顎骨の左側では第3大臼歯は未萌出のようであり、この点でもかなり若かったことがわかる。前歯部に抜歯は見られない。

左上腕骨遠位骨幹、頭蓋骨片などが確認できるが小片であり、観察はできない。

## 46) SM5027 (No2427,2428)

1110グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片の他に中手骨、指骨、大腿骨などの四肢骨も残っている。下顎骨の正中部では左右の犬歯から前が残っておりそこではすべての歯の歯槽が確認できるのでこの部分に抜歯はない。下顎骨の左下顎枝の筋突起はあまり発達しておらず内外的にも薄い。第3大臼歯の歯根が確認できるので、成人には達していたであろう。大腿骨は骨質が非常に厚く、後面の粗線もかなりの幅のある稜状に発達している。男性的な四肢骨である。四肢骨にはやはり波形の亀裂がある。部分的にやや黒ずんだ色の部分もあり、均一な火力でなかったことを示している。

## 47) SM5029 (No2426)

40グラムほどの焼骨である。おもに四肢骨片であるが特記することはない。

## 48) SM5030 (No2543)

65グラムほどの焼骨である。ほとんどが四肢骨片であり、細片である。詳細は不明である。

## 49) SM5031 (No2033)

486グラムほどの焼骨である。頭蓋骨と四肢骨片である。頭蓋骨が約1/3を占めている。頭蓋骨では左頬骨、左上顎骨などが確認できる。上顎骨は第2大臼歯の歯槽までがある。頭蓋冠の骨は薄い。頬骨の前頭突起もきしゃである。

## 50) SM5032 (No2546)

592グラムほどの焼骨である。頭蓋骨では側頭骨錐体・乳様突起部、頭蓋冠、下顎骨下顎枝などが残っている。乳様突起はさほど大きくない。下顎骨の筋突起は長いが内側の筋稜は発達していない。頭蓋の縫合は鋸歯状が明瞭で若い個体であることを示している。大腿骨の後面の粗線は比較的発達している。四肢骨

の多くは細片化している。頭蓋冠の骨も薄く女性的な骨である。

51) SM5033 (No2544)

28グラムほどの焼骨である。四肢骨の細片であり、詳細は不明である。

52) SM5034 (No2547)

490グラムほどの焼骨である。頭蓋骨と四肢骨であるが頭蓋骨片は比較的少ない。頭蓋骨片では左側頭骨の錐体部や後頭骨の外後頭隆起付近、下顎骨正中部が確認できる。頭蓋冠の骨は薄い。下顎骨の二腹筋窩は確認できるが下顎体はきしゃである。四肢骨は多いが細片で、大腿骨の後面の粗線は発達していない。女性的な印象を受ける。

53) SM5035 (No2550, 2551, 2552, 2557, 2566)

1539グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片と四肢骨片であるが、頭蓋骨片が比較的多い。頭蓋骨では上顎切歯部、乳様突起部、側頭骨錐体と下顎窩、頬骨、下顎骨の正中部や筋突起などが認められる。筋突起は大きくなく内外的にも薄い。四肢骨では肩甲骨の肩甲棘や、大腿骨の遠位関節、骨頭などが確認できる。大腿骨頭は大きく、いろいろな特徴から男性の可能性が高い。年齢は不明である。

54) SM5036 (No2545)

571グラムほどの焼骨である。頭蓋骨では後頭骨の外後頭隆起部があり、やや発達している。四肢骨では肩甲棘基部、骨盤の坐骨などがみられる。

55) SM5037 (No2542)

316グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片と四肢骨片が含まれるが、いずれも細片で詳細は不明である。

56) SM5039 (No2541)

400グラムほどの焼骨である。大腿骨の後面の粗線が確認できるが幅を持った稜状に発達している。成人には達していたであろう。

前頭骨の左右の頬骨突起、頭蓋冠の破片などが確認できる。やはり波形の亀裂が多数認められるので軟組織がついた状態で焼かれたものである。

57) SM5040 (No2558, 2559)

901グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片の量が比較的多く、右側頭骨錐体部、内後頭隆起部、下顎骨正中部、四肢骨片が残っている。他に距骨片、腰椎片などが認められる。縫合は鋸歯状が比較的明瞭である。オトガイ隆起は比較的発達している。四肢骨には波形の亀裂が見られる。

58) SM5041 (No2548)

頭蓋骨片、四肢骨片の焼骨である。四肢骨には波形の亀裂が見られる。全量は670グラムほどで一体分にはほど遠い。大腿骨の後面の粗線が明瞭な稜状に発達しているが、幅は狭い。上腕骨あるいは大腿骨の骨端があるが、骨幹とは離れており、比較的若い個体であることを示している。

59) SM5042 (No2536, 2537)

全量で682グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片と四肢骨片である。頭蓋骨では頭蓋冠と左側頭骨錐体、前頭骨の一部が見られる。前頭骨の眉弓はほとんど発達しておらず、骨質も非常に薄い。若い個体か女性であろう。

60) SM5043 (No2535)

128グラムほどの焼骨である。頭蓋骨と四肢骨片である。頭蓋骨では、右側頭骨下顎窩、側頭骨錐体、下顎骨の近位の顎底部や頭蓋冠の一部が残っている。下顎骨のオトガイ結節は比較的発達しており、オトガイ三角は明瞭であったと思われる。

61) SM5046 (No2553)

100グラムほどの焼骨である。主に四肢骨片である。大腿骨片らしい部分が確認できるが詳細は不明である。

62) SM5051 (No2540)

155グラムほどの焼骨である。詳細は不明である。

63) SM5053 (No2435, 2436, 2437, 2438)

789グラムほどの焼骨である。頭蓋骨や四肢骨片であるが、細片化している。頭蓋骨の側頭骨錐体部、肩甲棘基部などが見られる。四肢骨では左膝蓋骨などが確認できる。

64) SM5055 (No754, 755, 2350, 2431, 2432, 2434, 2539, 2554)

全量で2107グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片の割合が多いが顔面の骨はない。側頭骨錐体、頭蓋冠などである。頭蓋冠の骨は薄い。頭蓋冠の縫合は鋸歯状が明瞭であり癒合していないのでかなり若い個体であろう。歯冠が2個残っており、下顎右第2小臼歯と下顎左第3大臼歯である。第3大臼歯は咬耗していないので未萌出か萌出直後である。第2小臼歯の咬耗も軽度なので第3大臼歯は未萌出であった可能性が高く、10歳代前半と思われる。性別は不明である。

四肢骨の骨幹の骨片はごく少量で、上腕骨遠位端、大腿骨などがある。大腿骨後面の粗線は、低い稜状である。

65) SM5056 (No2347, 2439, 2440)

833グラムほどの焼骨である。頭蓋骨や四肢骨片である。頭蓋骨の量が少ない。大腿骨上部はかなり扁平だったようである。また、大腿骨小転子の部分に加齢変化と思われる骨増殖が見られるので、若い個体ではなからう。

66) SM5057 (No2430)

799グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片と四肢骨片である。頭蓋骨では後頭骨の鱗部、側頭骨錐体、上顎骨、下顎骨などが残っている。外後頭隆起はさほど発達していない。上顎骨では右の第3大臼歯の歯槽が確認され、成人には達していたものと推測される。下顎骨はオトガイ隆起、オトガイ結節が発達しており、したがってオトガイ三角がよく発達していたようである。距骨の一部が残っており、内側踴躍面が前方に伸展する森本(1881)のC型の踴躍面が確認できる。

67) SM5058 (No2346)

440グラムほどの焼骨である。四肢骨の細片と頭蓋骨片である。下顎骨の左の第3大臼歯に相当する歯槽は非常に浅くなっており、歯槽膿漏を思わせる。第2大臼歯部も退縮が著しい。下顎骨の筋突起は小さく、内外的にも薄い。四肢骨では距骨が残っているが特記することはない。

68) SM5060 (No2441, 2442)

910グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片や上腕骨骨頭などが確認できる。頭蓋骨の量はやや少ない目である。小臼歯より近心の上顎骨の右側が残っており、歯は失われているが歯槽は確認できるので抜歯はない。

69) SM5061 (No2429)

1005グラムほどの焼骨である。頭蓋骨や四肢骨片である。頭蓋骨の縫合は、鋸歯状が明瞭である。下顎骨には大臼歯の歯槽があり、少なくとも成人に達していたと思われる。筋突起の内突起はよく発達していたようである。大腿骨後面の粗線はあまり発達しておらず低い稜状である。骨質は薄い。

70) SM5062 (No2447, 2448, 2449)

793グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片と四肢骨片が含まれるがすべてが細片で、主な部分ではない。火葬され主な骨が取り上げられた後の取り残しなどであろう。いずれも灰化するまで焼かれている。詳細は

不明である。

71) SM5063 (No2443)

1135グラムほどの焼骨である。成人一体分の火葬骨重量は、男性で2100～2500g、女性で1800～2000gほどである（茂原・松島：1996）。したがって、後述のようにこの個体が女性とすると、成人一体分の火葬骨重量の1/2ほどの量である。頭蓋骨片や四肢骨片である。前頭骨、側頭骨錐体部などが含まれる。四肢骨では上腕骨、距骨や橈骨近位端などが見られる。上腕骨は遠位骨幹で細い。大腿骨頭などは完全に灰化しておらず黒色が強い。熱が行き渡らなかった可能性がある。寛骨の耳状面付近が出土しているが、耳状面傍溝が確認できるのでこの個体は妊娠経験のある女性と判断される。成人であろう。

72) SM5064 (No2348,2444,2445,2446)

焼骨である。四肢骨には波形の亀裂が無数に入っているため軟組織がついたままで火葬されたものであろう。全体で1669グラムほどの量である。

頭蓋骨では、左頬骨、頭蓋冠の破片、下顎骨などが認められる。下顎骨左下顎体には3本の大臼歯の歯根が見られる。少なくとも成人にはなっていたものと考えられる。他に下顎骨の正中部が残っている。切歯部に抜歯はない。オトガイ隆起はやや発達している。四肢骨では大腿骨の骨幹、胫骨などがみられる。大腿骨は頑丈で後面の粗線はよく発達しており幅のある稜状である。骨質も厚い。形態から判断して成人には達していると考えられる。四肢骨が頑丈であるなどの特徴を考えるとこの個体は男性の可能性が高い。

この個体は成人であり、性別は男性と思われる。特記すべきことはない。

73) SM5065 (No2483)

63グラムほどの焼骨である。細片であり詳細は不明である。

74) SM5066 (No2549)

123グラムほどの焼骨である。ごく小さな破片だけで詳細は不明である。

75) SM5067 (No2345,2476,2480,2481)

430グラムほどの焼骨である。頭蓋冠の骨は比較的厚く、縫合はやや単純化している。さほど若い個体ではなからう。下顎骨歯槽部や上腕骨遠位部などが残っている。

76) SM5068 (No2355,2356,2477)

1351グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片、四肢骨片が含まれるがすべて細片である。頭蓋骨の側頭骨錐体や下顎窩が確認できる。四肢骨の量がやや少な目である。頭蓋冠の骨は薄い。詳細は不明である。

77) SM5070 (No2041,2565)

425グラムほどの焼骨である。頭蓋のごく一部の骨と四肢骨片である。左側頭骨錐体が確認できる。他に特記することはない。

78) SM5071 (No2034)

100グラムほどの焼骨である。右上顎骨、右側頭骨錐体などが確認できる。右上顎骨には第1および第2の大臼歯の歯槽があるが、第3大臼歯の歯槽はなく、萌出するスペースもないので、すでに脱落したかあるいは先天欠如であろう。

79) SM5072 (No2035)

19グラムほどの焼骨である。後頭骨や四肢骨である。外後頭隆起はやや発達している。

80) SM5073 (No2036)

全量で16グラムほどの焼骨である。下顎骨左・右下顎枝が見られる。筋突起はあまり大きくなく、内外的にも薄い。他に軸椎片がある。

81) SMS077 (No2560)

全量で171グラムほどの焼骨である。半分ほどが頭蓋骨片である。外後頭隆起はやや発達している。しかし、人字縫合は鋸歯状の縫合が明瞭であるので、さほど高齢ではなからう。

82) SM5078 (No2038, 2039, 2561, 2562)

頭蓋骨片や指骨片、四肢骨片が出土している。一部にやや黒色に近い部分もあるがほとんどは灰化するまで焼かれている。頭蓋骨では左右側頭骨峯体、頭蓋冠、上顎骨などがみられる。上顎骨では第2大臼歯の歯槽までが明瞭に確認できる。第3大臼歯については破損して不明である。1580グラムほどの焼骨である。少くとも第2大臼歯の萌出した少年の骨とすると、ほぼ一体分の火葬骨重量に近い量である。詳細は不明である。

焼かれていない下顎の大臼歯歯冠が混在している。咬耗のない右第1大臼歯歯冠であるので、幼児のものであると思われ、火葬骨とは別個体である。

83) SM5079 (No2040)

10グラムほどの焼骨である。詳細は不明である。

84) SM5080 (No2563)

104グラムほどの焼骨である。頭蓋骨や四肢骨片であるが細片で、詳細は不明である。

85) SM5084 (No123)

940グラムほどの焼骨である。頭蓋骨片と四肢骨である。四肢骨に波形の亀裂がみられるので軟組織がついたまま火葬されたものであろう。すべてが灰化するまで焼かれている。細片化しており詳細は不明である。

86) VIII 2 (No2571)

95グラムほどの焼骨である。少量の頭蓋骨片と四肢骨片である。特記すべきことはない。

87) VIII 18 (No3297)

453グラムほどの焼骨である。いずれも細片で特記することはない。

88) A テラス石垣 (No2255)

150グラムほどの焼骨である。四肢骨片が主だが、頭蓋骨片も少数混じっている。詳細は不明である。

89) D テラス I 層中 (No3290)

307グラムほどの焼骨である。四肢骨片が主である。大腿骨後面の粗線は非常に強く発達し幅が1センチほどの稜をなしている。

### 中世人骨のまとめ

89例について記載した。上顎中切歯や側切歯が典型的なシャベル型であり、中世になれば当然、渡来系の人々の影響を受けていた結果であろうと予想される。また、出土した人骨の多くは焼かれた骨である。多くは完全に灰化するまで焼かれているので意図的な火葬骨である。その残り方は多様で、ほぼ一体分が残っていたり、火葬後の取り残しのようなものもある。これらも軟組織が付いた状態で焼かれたものであろう。身長はやや高めのものもみられるが基本的にはこの時代の平均値（平本：1977）と大差ない。

### D 近世以降

1) SK1692 (No496)

ごく小さな骨の破片のみである。骨端が未化骨の小さな四肢骨がみられるのでかなり若い個体であろう。詳細は不明である。



#### 4 出土人骨の特徴

ここでは118例の人骨について報告している。これ以外にも多く出土しているが火葬骨で少量のものは省いた。それぞれの時代別人骨の出土例は、古墳時代中期の人骨5例、古代の人骨22例、中世の人骨89例、近世以降の人骨1例である。

出土する人骨の全体の特徴をまとめることは難しいが、いくつかの特徴を挙げるると以下のようなものである。いずれの人骨も、縄文時代人骨に見られるような彫りの深い（鼻根部が大きいくびれている）顔貌ではなく、鼻根部の平坦な古代から中世にかけて一般的な顔立ちである。下顎骨は比較的頑丈であるが、下顎底が丸みを帯びたローカージョウは一例もみられず、下顎体も後方で高さを減じており、これらの点でも縄文時代人骨とは異なっている。角前切痕のあることなどを含めて、これらの形質は食物の軟化に伴って下顎骨に出現する形質とされている。この時代にはすでに縄文時代とははっきりと区別される食糧事情であったことを示しており、弥生時代よりもその傾向は強まっている。

四肢骨では、弥生時代人骨とさほど変わった傾向は示しておらず、大腿骨の殿筋隆起の発達には女性に多い。また、やはり縄文時代人とは異なり脛骨の断面は扁平ではない。

身長はそれぞれの個体の長骨の長さから推定されるが、今回の例では骨端が破損もしくは欠損している例がほとんどで、大まかな推定しかできなかったが、一部の個体で推定身長が求められた。それらはいずれも女性人骨で、古代では144センチ、中世では3例からそれぞれ144センチ、148センチ、158センチと推定された。平本（1977）が報告している日本人の推定身長の前平均値は、鎌倉時代の女性で144.9センチ、室町時代の女性で146.6センチであり、これらと比較して大差ない大きさである。1例は高身長であった。

歯の形成時に何らかのストレスで形成されるエナメル質減形成は、松原遺跡では高率ではなく、むしろ、観察される割合は少なかった。エナメル質減形成がかなりの高率で観察された縄文時代後期の北村遺跡人（明科町）とさほど変わらない環境であったと想像されるにもかかわらず、成長時のストレスは緩やかであったと考えられる。ただし、歯石が沈着したり、齶触が見られるものもあり、時代を経るにしたがって食生活が縄文時代とは別の様相を呈していたと思われる。

中世人骨では焼骨が圧倒的に多く、形態的な観察は難しいものであった。焼骨ではほとんどの個体の四肢骨に波形の亀裂がみられ、軟組織が付着したままで焼かれたことを示していた。中世にはこのような火葬の習慣が定着していたものであろう。これらの焼かれた人骨は残りやすい。しかし、土坑によって出土量に大きな差が見られたのは、火葬後の処理の違いによるものと思われる。たとえば、火葬したそのまま埋葬されていたり、あるいは主な部分を別の場所に埋葬したりというような可能性も考えられる。また、火葬後の取り残しが出土した場合もあろう。ともかく、生骨が残りにくい環境にあったことを割り引いても、中世には火葬が盛んであったと推測される。

#### 5 おわりに

古墳時代から近世以降までの層位で出土した合計118例の人骨を調査した。保存状態がよくないものが多い。それぞれの時代のわかっている人骨の出土例は、古墳時代中期の人骨5例、古代の人骨23例、中世の人骨90例、近世以降の人骨1例である。中世人骨では火葬骨が多く性別など細かな情報は得られていない。人骨は縄文時代人とは異なり、平坦な顔面を持つなどの一般的な中世人骨の特徴を備えていると言える。女性の大腿骨が扁平であるなど生業を反映したと思われる形質もみられた。

このような貴重な資料を観察する機会を与えてくださった長野県埋蔵文化財センターの方々には心から感謝いたします。特に、上田典男氏には時代のチェックに始まり多くのご迷惑をおかけしてしまいました。

氏のご尽力がなければこの報告はできあがらなかったと思います。厚く御礼申し上げます。また、写真撮影は霊長類研究所の木下実氏にお願いした。厚く感謝いたします。

## 参考文献

- 馬場悠男 (1991) : 人骨計測法, 人類学講座別巻1「人体計測法」, 江藤盛治編集 : 159-358.
- 能名忠次郎 (1951) : 日本人前腕骨の人類学的研究 其一 桡骨, 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 5 : 1-28
- 能名忠次郎 (1951) : 日本人前腕骨の人類学的研究 其二 尺骨, 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 5 : 1-30
- 藤井明 (1960) : 四肢長骨の長さとし長との関係に就て, 順天堂体育学部紀要 3 : 49-61
- 藤田恒太郎 (1949) : 歯の計測規準について, 人類学雑誌 61 : 1-6,
- 福田佐 (1961) : 関東地方人脚骨の人類学的研究 (計測編), 東京慈恵会医科大学雑誌 76 : 1-21
- 権田和良 (1959) : 歯の大きさの性差について, 人類学雑誌 43(1) : 151-163
- 平本高助 (1977) : 日本人身長の時代的変化, 自然科学と博物館 44(4) : 169-172
- 城一郎 (1938) : 古墳時代日本人人骨の人類学的研究, 第一部、頭蓋骨。人類学輯報, 1 : 1-172
- 城一郎 (1938) : 古墳時代日本人人骨の人類学的研究, 第二部、上肢骨の研究。人類学輯報, 1 : 173-333
- 清野謙次・宮本博人 (1925) : 津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第二部、頭蓋骨の研究 : 人類学雑誌 41(3,4) : 1-104
- 清野謙次・平井隆 (1928) : 津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第三部、上肢骨の研究 : 人類学雑誌 43(3,附) : 177-301
- 清野謙次・平井隆 (1928) : 津雲貝塚人骨の人類学的研究, 第四部、下肢骨の研究 其1。大腿骨・膝蓋骨・脛骨及腓骨に就て : 人類

グリッド	時代	通し 番号	性 別	年 齢	備 考
1 1号墳	古墳時代中期		不明	1 8歳未満	歯2本のみ
2 SB 5001-1	古墳時代中期	481	不明	不明	歯が2本
3 SB 5001-2	古墳時代中期	3302	不明	不明	大腸骨
4 SB 5001-3	古墳時代中期	3290	不明	不明	歯が3本のみ
5 SB 5001-4	古墳時代中期	3305	女性	1 0歳前後	歯は焼けていない
1 SB 0012	古代	115	不明	不明	1点のみ
2 SB 0042	古代	118	不明	不明	1点のみ
3 SB 0076	古代		不明	不明	歯1本のみ
4 SB 0080	古代	3412	女性	胎年	頭蓋骨
5 SB 0085	古代	140	不明	不明	脚骨のみ
6 SB 0371	古代	3427	不明	不明	上腕骨遠位部のみ
7 SB 1212	古代	736	不明	不明	四肢骨片
8 SC 0001	古代	585	不明	子供ではない	四肢骨片
9 SD 0042	古代	2253	不明	不明	大腸骨骨幹
10 SD 0102	古代		不明	不明 (若い)	
11 SD 1009	古代	105	不明	不明	判定できず
1 SD 1015	古代	2060	不明	不明	腕骨、頭蓋骨片
12 SD 1035	古代	263	不明	成人	歯に歯石沈着
13 SK 1117	古代	2582	女性	幼年	歯の脱落・扁平大腸骨
14 SK 1226	古代	2586 No.1	女性	少年?	踵骨
15 SK 1226	古代	2578 No.2	幼児 (7歳前後)	幼児 (7歳前後)	別個体
16 SK 1226	古代	2584 No.3	不明	幼児 (3歳前後)	別個体?
17 SK 1509	古代	2600	不明	乳児 (1歳以下)	乳歯列
31 SK 1687	古代	2593	不明	幼児 (3-4歳)	乳歯列
18 SK 1769	古代		不明	高齢	下顎大臼歯歯根
21 V U11	古代	771	女性	幼児 (6歳前後)	
22 Z1	古代	509他	不明	不明	
23 Z2	古代	759	不明	成人	大腸骨・膝蓋骨
2 SD 1019	中世	760他	不明	不明	歯骨、少量
3 SK 0523	中世	578	不明	不明	
4 SK 0553	中世	3359他	女性	青年	推定身長144センチ、きゃしゃ
62 SK 0565	中世		女性	青年	
5 SK 1008	中世	2579	女性	成人	顔面平坦
6 SK 1018	中世	48	不明	不明	四肢骨片
7 SK 1011A	中世	470	男性	成人	
8 SK 1012	中世	566	女性	幼児 (3歳前後)	
9 SK 1027	中世	32	男性	成人	柱状大腸骨
10 SK 1014	中世	No.1	女性	胎年	妊娠痕あり
11 SK 1014	中世	102 No.2	不明	3歳前後	乳歯列
12 SK 1015	中世	236	不明	3歳前後	乳歯列
13 SK 1016	中世	239他	不明	2歳前後	乳歯列
14 SK 1027	中世	240	不明	不明	歯骨
15 SK 1031	中世	256	不明	高齢	2体混入

第384表 松原遺跡出土の古代・中世・近世以降の人骨の概要 (1)

グリッド	時代	通し 番号	種番	性別	年齢	備考
16 SK	1632	中世	296	女性	少年 (13歳前後)	エナメル質減形成、高身長 (157.7センチ) 歯の脱落多し
17 SK	1649	中世	261	不明	高齢	不明
18 SK	1118	中世	574	不明	不明	不明
19 SK	1160	中世	151	女性	やや高齢	リッピング、144センチ
20 SK	1160	中世	150他	女性	成人	骨髄炎、約148センチ
21 SK	1221	中世	477	不明	不明	不明
22 SK	1227	中世	563	不明	不明	四肢骨片
23 SK	1228	中世	562	不明	乳児?	不明
24 SK	1515	中世	2475	不明	生後9ヶ月程度	乳歯列
25 SK	1525	中世	2596	女性	熟年	歯蓋骨、超扁平大脳骨
26 SK	1543	中世	220	男性	壮年~熟年	歯槽膿腫
27 SK	1544	中世	2031	不明?	壮年	咬料顆、性別再検
28 SK	1544	中世	2595	男性	熟年	不明
29 SK	1561	中世	515	不明	熟年	踵関節
30 SK	1658	中世	2974	不明	子供ではない	不明
32 SK	1693	中世	2169	不明	不明	不明
33 SK	2108	中世	2567	不明	不明	腕骨
34 SK	2113	中世	2501	不明	不明	腕骨
19 SK	2114	中世	2509	不明	不明	腕骨
37 SK	5008	中世	3269	不明	不明	腕骨
62 SK	5071	中世	2351他	不明	不明	腕骨
92 SK	5098	中世	不明	不明	不明	腕骨 (少量)
83 SM	5001-2	中世	3299	不明	不明	腕骨、1号墳石室
84 SM	5001-3	中世	3305	女性	10歳前後	腕骨、石室出土
35 SM	5012	中世	2362	不明	若い個体	腕骨、骨髄未化石
38 SM	5013	中世	101他	不明	若い	腕骨、歯蓋骨やや少ない
85 SM	5014	中世	2364他	不明	若い	腕骨
39 SM	5015・5017	中世	2370	不明	不明	腕骨
39 SM	5019	中世	2370	不明	不明	腕骨
87 SM	5024・5025・5026	中世	2383他	男性?	20歳前後	腕骨
64 SM	5027	中世	2427他	男性?	成人	腕骨
63 SM	5029	中世	2426	不明	不明	腕骨 (少量)
45 SM	5030	中世	2543	不明	不明	腕骨 (少量)
50 SM	5031	中世	2033	不明	不明	腕骨、きゃしゃ
52 SM	5032	中世	2546	女性?	若い個体	腕骨
46 SM	5033	中世	2544	不明	不明	腕骨 (少量)
53 SM	5034	中世	2547	不明	不明	腕骨
91 SM	5035	中世	2550他	女性?	不明	腕骨
51 SM	5036	中世	2545	不明	不明	腕骨
49 SM	5037	中世	2542	不明	不明	腕骨
48 SM	5038	中世	2541	不明	成人	腕骨
55 SM	5040	中世	2558他	不明	不明	腕骨、四肢骨やや少ない
54 SM	5041	中世	2548	不明	比較的若い	腕骨
47 SM	5042	中世	2536他	女性?	若い	腕骨
57 SM	5043	中世	2535	不明	不明	腕骨
56 SM	5046	中世	2650	不明	不明	腕骨
58 SM	5051	中世	2540	不明	不明	腕骨
68 SM	5053	中世	2435他	不明	不明	腕骨
67 SM	5055	中世	754他	不明	10歳代前半	腕骨
70 SM	5058	中世	2347他	不明	若くない	腕骨、扁平大脳骨
66 SM	5057	中世	2430	不明	成人	腕骨、踵関節
69 SM	5059	中世	2346他	不明	不明	腕骨
71 SM	5060	中世	2441他	不明	不明	腕骨
65 SM	5061	中世	2429	不明	成人	腕骨
73 SM	5062	中世	2447他	不明	不明	腕骨
72 SM	5063	中世	2443	不明	成人	腕骨
74 SM	5064	中世	2444他	女性	成人	腕骨、妊婦産
79 SM	5065	中世	2483	不明	不明	腕骨
77 SM	5066	中世	2549	不明	不明	腕骨
78 SM	5067	中世	2345他	不明	不明	腕骨
76 SM	5068	中世	2355他	不明	不明	腕骨
61 SM	5070	中世	2041他	不明	不明	腕骨
40 SM	5071	中世	2034	不明	不明	腕骨
41 SM	5072	中世	2035	不明	不明	腕骨 (少量)
42 SM	5073	中世	2036	不明	不明	腕骨 (少量)
44 SM	5077	中世	2560	不明	高齢ではない	腕骨
43 SM	5078	中世	2038他	不明	不明	腕骨、1体分、焼けていない歯1本
59 SM	5079	中世	2040	不明	不明	腕骨 (少量)
60 SM	5080	中世	2563	不明	不明	腕骨 (少量)
80 SM	5084	中世	123	不明	不明	腕骨
85 Ⅷ U2		中世	2571	不明	不明	腕骨 (少量)
88 Ⅷ U18		中世	3297	不明	不明	腕骨
89 Aテラス 石道No.1		中世	2265	不明	不明	腕骨
90 B テラス 1層中		中世	3290	不明	不明	腕骨
1 SK	1692	近世以降	496	不明	若い個体	骨端未化石

第385表 松原遺跡出土の古代・中世・近世以降の人骨の概要 (2)

## 第6章 松原遺跡出土の骨・脊椎動物遺存体

	時代	性別	左右	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3		備考					
				m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l						
	SK0076	古代	不明	左																					
	SK1035	古代	不明	右																					
	SK1117	古代	女性	右	8.2				8.1	7.7	7.2	8.4	6.2	8.6	10.8	12.0			9.4	11.5	8.8	10.5	7.9	10.8	
	SK1226-1	古代	女性	右	8.4	7.3			7.8	8.5	7.0	8.8	6.7	8.8	9.9	10.7									
	SK1226-2	古代	不明	右	8.1	7.3	6.4	6.4	8.0	8.5	7.0	10.0	6.8	9.3	9.4	11.0									
	SK1226-3	古代	不明	右	8.0	7.1	7.1	6.2																幼児	
	SK1687	古代	不明	右	8.4	6.8	7.3	6.6	7.8	8.5	7.4	9.7			10.9	12.0									
	SK1769	古代	不明	右	7.8				7.4						11.0	12.1									
	SK1769	古代	不明	左											9.9	10.9									
	SK1769	古代	不明	右											10.0	11.4	9.4	10.5							
	SK0553	中世	女性	右	8.4	7.1	6.9	6.4	7.8	8.3	7.2	9.7	6.6	8.9	10.4	11.6									
	SK0553	中世	女性	左	8.6	6.4							8.2												
	SK0555	中世	女性	右					7.6	8.1															
	SK1008	中世	女性	右								7.1	9.5												
	SK1012	中世	女性	右					7.8	8.4	7.3	9.9	7.1	9.8	10.5	11.5									
	SK1014-1	中世	女性	右					6.1	8.8	7.2	9.7	7.0	9.9	10.4	11.5									
	SK1015	中世	不明	右	7.5		6.4																		
	SK1016	中世	不明	右																					
	SK1027	中世	男性	右	8.3																				
	SK1032	中世	女性	右	8.2		6.6																		
	SK1049	中世	不明	右	8.1		6.9	7.0	7.9	9.0	7.1	9.7	6.7	9.4	10.4	12.0									
	SK1543	中世	不明	右	8.0				6.8	7.1															
	SK1544	中世	不明	右					6.0	6.3															
	SK1544	中世	不明	左																					
	SK1544	中世	不明	右																					
	SK1544	中世	不明	左																					
	SK1544	中世	不明	右	8.8				7.8			8.5	7.4	10.0											
	SK1544	中世	不明	左					7.9	8.8	7.2	9.9	6.9	9.7											
	SK1544	中世	不明	右											12.0										
	SK1544	中世	不明	左																					
	SK1544	中世	不明	右	8.2	6.4	6.7	7.1	7.9	8.7	7.2	9.5	7.0	9.7	11.1	11.6	9.4	11.3	9.1	11.2					
	SK1544	中世	不明	左																					
	SK1544	中世	不明	右	8.6	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.86	11.75	9.91	11.85	8.94	10.76					
	SK1544	中世	不明	左	8.35	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50					
	SK1544	中世	不明	右	8.46	7.41	7.18	6.83	7.64	8.19	6.97	8.40	6.52	9.17	10.16	11.71	9.22	11.58	8.23	10.88					
	SK1544	中世	不明	左	8.25	7.09	6.70	6.41	7.40	7.89	6.77	9.16	6.24	8.89	9.92	11.40	8.94	11.20	8.09	10.43					

第386表 松原遺跡(古代・中世)出土人骨の上顎歯の計測値と比較資料(単位mm)

	時代	性別	左右	I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3		備考				
				m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l	m-d	b-l					
	SK1117	古代	女性	右					7.0	7.7			8.6	12.2	11.4									
	SK1226-1	古代	女性	右	4.8	5.9	5.5	6.2	6.1	7.3	7.0	7.9	7.1	8.0	12.3	11.2	11.2	10.3						
	SK1226-2	古代	不明	右	4.7	6.2	5.1	6.7	6.3	7.4	7.0	8.1	6.7	8.3	10.8	11.0	11.1	10.2						
	SK1226-3	古代	不明	右	5.7	5.5	5.9	6.0	6.6	7.9					11.6	11.0							幼児1	
	SK1687	古代	不明	右					6.3	6.9					11.6	10.9								
	SK1687	古代	不明	左	5.3				6.4															
	SK1687	古代	不明	右	5.2				6.5															
	SK1769	古代	不明	右					7.4															
	SK1769	古代	不明	左																				
	SK1769	古代	不明	右																				
	SK1769	古代	不明	左																				
	SK0553	中世	女性	右	5.1	5.9	5.8	6.3	6.6	7.5	7.0	7.9	6.9	8.4	11.5	11.0	11.2	10.3	11.0	10.1				
	SK0555	中世	女性	右	5.2	4.8	6.3	5.8			6.9	6.5	7.6											
	SK0555	中世	女性	左							6.4	7.7			6.8	7.9	11.1	10.5	10.9	10.0	10.0	9.4		
	SK1008	中世	女性	右											7.2	8.1	11.2	10.5	10.7	10.1	9.7	9.5		
	SK1012	中世	女性	右																				
	SK1014-1	中世	女性	右																				
	SK1015	中世	不明	右	5.1				6.0	5.6	6.8													
	SK1016	中世	不明	右	5.1																			
	SK1027	中世	男性	右																				
	SK1032	中世	女性	右	5.0	5.5	5.2	6.2	6.5	8.0	6.6	7.9	6.9	8.3	10.9	10.5	10.7	10.4	10.3	9.9	9.6			
	SK1049	中世	不明	右	5.2	5.6	5.9	6.5	6.4	7.8	6.9	8.2	6.6	8.5	10.8	10.7	10.4	9.9	9.9	9.9				
	SK1543	中世	不明	右	5.8	6.4					6.5	7.6												
	SK1543	中世	不明	左																				
	SK1544	中世	不明	右	6.2	5.8	7.0	6.3	7.2	8.0	7.0	8.7												
	SK1544	中世	不明	左	6.1						7.4	8.3												
	SK1544	中世	不明	右																				
	SK1544	中世	不明	左																				
	SK1544	中世	不明	右	5.4	5.7	6.1	6.2	5.9	7.9	6.8	8.0	7.0	8.3	10.9	10.4	10.8	10.1	10.1	9.6				
	SK1544	中世	不明	左	5.3						6.7	8.3	7.0	9.3										
	SK1544	中世	不明	右	5.2	6.1																		
	SK1544	中世	不明	左																				
	SK1544	中世	不明	右	5.48																			

Metric	計測項目	計測点	松原遺跡人骨				縄文時代		弥生時代		古墳時代		現代	
			SK1027	SK1220	SK1008	SK1544	津島貝塚(1926)		三津遺跡(1924)		古日本(1936)		関東地方人骨団(1950)	
							♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀
1	頭蓋最大長	i-p	170	180	180	186.4	175.0	164.7	175.80	181.7	173.1	178.9	170.80	
3	グラベロウズ長	i-l	167	170		181.3		179.29	172.67			174.8	166.30	
8	頭蓋最大幅	eu-eu	136			144.4	141.9	145.60	142.33	140.8	136.6	140.3	135.90	
9	長椀示数(L/W)	(3/1)	77.3			77.7	80.8	78.46	80.70	78.1	78.1	78.5	79.70	
10	最小前額幅	fr-t	82		91	96.8	93.8	93.14	96.90			93.2	91.00	
11	耳耳幅	au-au	118			125.2	117.4	130.80	127.25			124.9	118.80	
12	最大後頭幅	ast-ast	113			114.0	108.8	111.25	108.25			108.4	104.20	
23	顔骨水平幅	i-pp-e	493			532.3	506.0	536.70	517.00	521.0	501.3	513.7	493.70	
24	顔骨高	po-p-po	292			310.3	298.4	321.27	304.75	308.7	296.9	324.4	313.20	
26	正中矢状線頭頂長	(n-b)	122		132	121.9	118.5	128.88	124.72	126.3	120.6	127.4	122.10	
27	正中矢状線額頂長	(o-1)	115		120	130.9	124.1	127.53	126.17	126.5	124.0	125.1	121.00	
28(1)	正中矢状上顔頂長	(1-1)	68			65.8	78.6	70.67	70.60			71.3	68.80	
29	正中矢状前額頂長	n-b	107.1		118.9			112.88	108.29			111.8	106.50	
30	正中矢状額頂長	b-1	113.4		109.3			113.87	112.17			111.8	106.60	
31(1)	正中矢状上顔頂長	i-1	65.6			77.5	71.9	65.90	64.60			67.5	64.10	
43	上顔幅	frt-frt	90.1	97		108.0	103.8	108.77	103.80			103.8	100.10	
44	高眉幅	sk-sk	84.8	88.5		102.0	97.6	102.50	97.00			97.2	94.10	
46	中顔幅	zm-zm	100.1			103.6	100.8	104.30	98.33	102.6	98.4	98.8	93.50	
47	額高	n-gn	110	107		115.8	103.3	125.00	117.00	118.2	112.4	123.8	115.00	
48	上顔高	n-pr	66	65		67.0	63.1	74.54	72.00	68.7	65.1	70.7	67.10	
47/48	フィルヒョウ断乗数	(47/48)	109.89					121.58	119.47			125.4	123.30	
48/49	フィルヒョウ上断乗数	(48/49)	65.9			67.7	62.8	71.86	73.78	68.7	67.0	71.8	62.00	
50	前額高断乗	mf-mf	16.2			18.2	18.2	20.13	19.00	20.0	17.7	17.8	17.40	
51	前額高断乗数(50/44)	(50/44)	19.1			18.7	18.8	20.07	18.12	18.5	18.1	18.3	18.50	
51	眼窩高	mf-ek	35.8	37.8		43.5	41.6	42.93	40.67	43.0	41.5	42.7	41.10	
52	眼窩高		30.4	31.4		33.8	33.0	35.28	35.75	34.7	33.6	34.3	33.80	
53	眼窩断乗数(52/51)	(52/51)	94.9			78.5	81.0	82.48	88.45	80.6	81.5	80.4	82.40	
57	鼻骨最大幅		4.2			8.2	8.8	8.53	8.75	7.9	7.2	7.0	7.10	
下顎骨														
	オトガイ高		34	32	30.2	43								
	下顎枝幅		41.6	36.3		41.2								
	下顎長			79										
	下顎枝角			117										
	下顎枝高			60										

第388表 松原遺跡(古代・中世)出土人骨の頭蓋骨の計測値と比較資料(単位mm)

頭蓋骨	項目	松原遺跡人骨				縄文(津島)		古墳(西日本)		現代(関東地方)	
		中世				清野村(1928)		城(1936)		高野(1950)	
		SK1226	SK0953	SK0554	SK1160	♂	♀	♂	♀	♂	♀
1	最大長				152.1	132.0	154		139.60	130.00	
6	中央高		37		33.8	33.5	36.2	35.0	38.20	33.20	
5	中央矢状径	11	9.9	12.4	13.2	11.3	13.2	11.6	12.20	10.80	
4	中央前後径	8.3	8.7	8.3	10.1	8.5	10.7	9.5	10.00	8.40	
4/5	中央顔断乗数	84.5	87.9	75.0	76.6	75.1	80.9	84.9	83.40	79.30	
上顔骨									(西原:1953)		
1	最大長	243	277		291.5	296.2	285.7	255	295.93	272.38	
4	下顔幅	54.1	54.1		58.2	50.7			58.97	49.91	
6	中央最大径	18.3	22.2		23.9	20.4	22.6	21.5	22.41	19.71	
5	中央最小径	15.2	16.3		17.5	14.1	17.6	14.8	17.74	14.70	
7	骨幹最小周	54	63		65.2	55.3	59.3	58.3	62.27	54.11	
7a	中央周径	84	85								
7/1	長椀示数	22.2	23.5		22.8	20.5	20.3	20.8	21.14	19.89	
構骨									(徳名:1951)		
1	最大長		209		235.2	209.0	229	208	225.09	202.11	
3	最小周		43		44.5	38.5	38.6	34.8	40.45	34.69	
4	骨体横径		15.8								
4a	骨体中央横径		15.7			17.2	14.8	17.6	15.5	16.45	
5	骨体矢状径		11.4								
5/4	骨体断乗数		72.1519								
5(4)	額周径		42								
5(5)	中央周		45						43.34	37.56	
5(6)	下顔幅		31.8			32.5	27.3		32.89	28.86	
5a	骨体中央矢状径		11.9			11.8	10.3	11.3	11.81	9.84	
5a/4a	骨幹断乗数		75.7962			69.2	70.3	68.64	67.67	71.75	
尺骨					(NO.194)				(徳名:1951)		
1	最大長		227	225	252.5	226.0			241.52	218.69	
2	生理長		200	200	222.3	201.4			210.67	181.11	
3	骨幹最小周		40	35	38.3	33.9	34.7	31.3	36.55	32.16	
6	肘関節		21.5								
11	骨幹背距径		12.3	11	14.2	11.7	15.5	11.8	13.20	10.71	
12	骨幹横径		16.4	13.9	16.3	14.0	16.8	13.8	16.29	13.91	
11/12	骨幹断乗数		75.0		87.3	84.5	93.4	86.9	80.94	70.94	
13	上横径		18.6			21.2	17.2		20.52	17.16	

第389表 松原遺跡出土人骨の上肢骨の計測値と比較資料(単位mm)



Martin	計測項目	松原遺跡			津雲貴理(縄文)		西日本(古墳)		現代関東地方人	
		古代	中世		清野徳(1928)		城(1938)		(大塚:1950)	
		SK1226	SK1160	SK1561	♂	♀	♂	♀	♂	♀
大腿骨	1 最大長		376	**395	418.2	382.9	444.0	384.0	412.05	382.10
	2 自然位全長		372	**393	414.2	377.8	422.0	401.0	408.05	378.20
	6 中央矢状径		24.2	26.9	29.3	25.0	27.1	24.2	27.61	24.66
	7 中央横径		24.4	23.8	25.5	24.0	26.6	23.7	26.23	23.06
	8/7 中央横断面示数		99.2	113.0	114.6	103.9	102.3	101.9	105.72	107.56
	8/2 長厚示数		80	80	86.8	77.4	85.3	77.5	83.60	74.40
	9 骨体上横径		21.5		21.1	20.6	20.1	20.6	20.42	19.61
	10 骨体上矢状径		28.8	30.6	30.5	28.3			30.86	27.96
	10/9 上骨体横断面示数		20.4	20.9	24.2	21.8			25.35	22.45
			70.6		79.5	76.6			82.18	81.24
趾骨	1 全長		296		345.9	318.1	338.0	291.0	(鈴木:1961)	298.25
1a	最大長		303		349.5	322.7	342.0	295.0	320.38	302.40
	6 下幅		41.4		50.2	45.3			51.3	45.84
	9 中央矢状径		27.2		32.1	28.8	29.2	25.5	28.73	25.71
	9 中央横径		18.9		19.6	17.7	20.8	19.0	22.79	20.31
	9/9 中央横断面示数		69.5		61.5	65.4	71.7	74.3	78.66	78.88
8a	栄養孔部矢状径		31.8	29.3	35.4	30.2			31.77	28.95
9a	栄養孔部横径		22.8	21.8	21.9	19.0			25.10	22.51
9a/8a	栄養孔位断面示数		71.7		62.2	62.8			78.26	77.28
10b	最小周		68		77.4	67.1	72.1	65.5	72.25	65.28
10b/1	長厚示数		22.7		22.4	21.0	21.6	22.3	22.68	22.06
趾骨	2 中央最大径	14.4			17.7	15.1	15.7	13.7	(福田:1961)	13.61
	3 中央最小径	8.6			12.1	9.9	11.1	9.0	10.94	9.54

第390表 松原遺跡出土人骨の下肢骨計測値と比較資料(単位mm \*\*推定値)

学報誌 43(4附): 303-390

Matsumura, H. (1989): Geographical Variation of Dental Measurements in the Jomon Population. J. Anthrop. Soc. Nippon, 97

(4): 493-512.

森本岩太郎 (1981): 日本古人骨の形態学的変異 —— 扁平胫骨と踵跡面 —— 人類学講座 5 「日本人 (1)」 雄山閣; 157-188

森田茂 (1950): 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究. 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 3: 1-59

西原四良 (1953): 関東地方人上腕骨の人類学的研究. 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 9: 1-63

大塚博次 (1950): 関東地方人大腿骨の人類学的研究 (計測編). 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集 3: 1-44

茂原信生・松島和己 (1996): 中村中平遺跡(長野県飯田市) から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片. 飯田市美術博物館研究紀要, 6: 137-151

Stewart, T.D. (1979): Burned Bones. in "Essentials of Forensic Anthropology" Charles C. Thomas, Springfield; 59-68.

鈴木誠・酒井唯朗 (1957): 現代標本アイヌ歯牙および口腔の形態学的研究. 人類学報, 18: 303-346.

鈴木信夫 (1961): 関東地方人胫骨の人類学的研究 (計測編). 東京慈恵会医科大学報誌 75: 2638-2678

鈴木隆雄 (1978): 縄文時代より江戸時代に至る日本人脊椎骨の古病理学的研究. 人類学報誌86: 321-336.

高野元昭 (1958): 関東地方人鎖骨の人類学的研究. 東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集, 18: 1-24+写真.

牛島剛一 (1954): 佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究. 人類学研究, 1(3・4): 273-303.

## 第2節 脊椎動物遺存体

### 1 はじめに

松原遺跡は長野県長野市にある遺跡で、上信越自動車道の建設工事に伴って(財)長野県埋蔵文化財センターによって平成元年から平成3年にかけて発掘調査された。本遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。今回報告するのはこのうちの古代・中世・近世以降に属する脊椎動物遺存体に関するもの

のである。保存状態のよい脊椎動物骨が多く出土しているが、低湿地遺跡の常として、時としてビビアナイトが沈着し、表面が剥離している場合もある。

一般的な獣骨の計測に関してはDriesch(1976)にしたがい、イヌの計測に関しては斉藤(1963)にしたがった。

## 2 出土状況

それぞれの脊椎動物骨の出土状況に関しては、考古学の項を参照していただきたい。

## 3 出土動物リスト (第391~408表)

出土した動物は以下の通りで、同定していないサカナ、トリ、ならびにネズミ以外に、哺乳類が5目9科14種出土している(種名の右にある数字は同定された点数である。ただし、古代・中世・近世以降という時代を区別していない)。イノシシとブタとの識別は部分的に出土した場合には難しいため、ここではイノシシとして数えてある。この内の一部、あるいは全部がブタである可能性もないわけではない。ここで示した動物種のうち、ネコ、ウシ、ウマ、イヌは明らかに家畜であろう。

同定できたのは合計で969点であるが、この点数は必ずしも同一のレベルにはなっていない。なぜなら、比較的散乱しているシカやウマの歯も1点であるし、歯の植立したイヌの頭蓋骨も1点と数えているからである。この点数のほかに同定できなかった細片がある。

魚綱		ネコ科 Felidae	
	サカナの一種 2点(椎骨を含む)	ネコ <i>Felis domestica</i>	3点
トリ綱 Aves		偶蹄目 Artiodactyla	
	トリの一種 3点	イノシシ科 Suidae	
哺乳綱 Mammalia		イノシシ <i>Sus scrofa</i>	29点
食肉目 Carnivora		シカ科 Cervidae	
イタチ科 Mustelidae		シカ <i>Cervus nippon</i>	179点
アナグマ <i>Meles meles</i>	1点	ウシ科 Bovidae	
カワウソ <i>Lutra lutra</i>	1点	ウシ <i>Bos taurus</i>	125点
テン? <i>Martes sp.</i>	1点	カモシカ <i>Capricornis crispus</i>	4点
クマ科 Selenarctidae		奇蹄目 Perissodactyla	
クマ <i>Selenarctos thibetanus</i>	2点	ウマ科 Equidae	
イヌ科 Canidae		ウマ <i>Equus caballus</i>	514点
キツネ <i>Vulpes vulpes</i>	1点	ウサギ目 Lagomorpha	
タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>	3点	ウサギ科	
		ノウサギ <i>Lepus brachyurus</i>	10点
イヌ <i>Canis familiaris</i>	88点	齧歯目 Rodentia	
		ネズミの一種	3点

## 4 出土脊椎動物の特徴

保存状態は比較的良好で、多くの動物骨は完全ではないにしろ、かなりよく保存されている。それぞれの種類別、ならびに時代別の出土点数を表に示している。合計の同定点数は988点である。この点数は(もちろん発掘面積にもよるが)、一つの遺跡の堆積物としてはさほど多い量ではない。

## A 時代別の特徴 (第391表)

出土した時代別の点数は、古墳時代後期5点、古代746点、中世137点、近世以降81点である。これらの時代の中では、古代が圧倒的に多く出土しており、中世がそれに次いでおり、他はごく少ない。

この遺跡周辺に生活する人口が、中世にいたって減少したのか、あるいは、別の場所にこのような脊椎動物骨が遺棄されるようになったのかは獣骨からは判定のしようがない。ウマやウシは、シカやイノシシのように各骨が破損を受けていないのが特徴である。

## B 種類別の特徴

この遺跡からはかなりの種類数が出土している。古代の遺跡から出土するほとんどの哺乳動物を含んでいると言えよう。しかし、全量はさして多いとは言えず、それぞれの点数は少ない。またほとんどはイノシシ、イヌ、シカ、ウシ、ウマで占められている。とくにウマが多い。また、山間部の遺跡としての特徴としてカモシカが出土している。カモシカの骨はシカの骨と区別が付きにくい部位もあり、実際の出土点数はこの4点より多い可能性がある。

食肉目の種類は7種である。現在この地方では絶滅しているカワウソの骨が出土しているのは興味深い。

## 1) アナグマ

右下顎骨片が出土している。出土したのは古代の層で、全時代を通じてこれ1点である。アナグマの肉は臭くて食用には適さないと聞く。そのため古代遺跡からの出土はごく少ない動物である。

## 2) テン

左大腿骨だけが残っている。

## 3) カワウソ

右上腕骨の遠位部が古代の地層から出土している。カワウソは現在長野県内には生息しておらず、日本国内でも絶滅したものと考えられているものである。古代には長野県内にも生息していたことが確認された点で貴重な標本である。同じ長野県内では、縄文時代早期の折原岩陰遺跡から下顎骨が出土しており(宮尾・他:1980)、折原遺跡とさほど変わらない環境がこの地域でも維持されていたことを示している。

## 4) クマ

クマは、大腿骨の近位骨幹と上腕骨の遠位半が残っていた。頭蓋骨や歯は出土していない。

## 5) キツネ

キツネは、一般的にタヌキやイヌなどに比べて遺跡から出土する量は非常に少ない。この遺跡でも古代の地層から2点(歯と橈骨)が出土しているだけである。ただし、歯は上顎の右犬歯と第2小臼歯より遠位の5本の臼歯、下顎は右の第三小臼歯から第1大臼歯まで、ならびに左が第1小臼歯から第4小臼歯までの7本、合計13本が出土している。これらは同一個体であり、利用された個体数は少なかったであろう。

## 6) タヌキ

タヌキも古代の遺跡からはさほど多く出土する種類ではない。本遺跡では弥生時代の中期の地層から2点(頭蓋骨と椎骨)、古代の地層から左の脛骨が2本出土している。脛骨の一方は完形である。

## 7) イヌ

イヌの出土点数はウマ、シカ、ウシに次いでいる(88点;古代27点、中世1点、近世以降60点)。弥生時代編で報告した出土量とさほど変わらない点数が出土しているが古代の方がやや多い。完形で出土している頭蓋骨はなくバラバラなものがあるが、人為的な切断痕があるわけではなく、食用に供されたとは考えにくい。大きめのものと小さめの二つのタイプが出土している。日本古来の在来犬(縄文時代犬)の系統を引くものと思われる。縄文時代犬は肩の高さが40センチ前後のものであり、長谷部(1952)の型区分では小級(メス)と中小級(オス)に属するもので、これより大きい個体は出土していないのが一般的であった。しかし、時代を追うにしたがって次第に大きくなってきており、この遺跡でもやはり同様に、縄文時代犬よりやや大型のものが存在していた。指骨はほとんど出土していないが、おもな出土部位に関するばらつきは特には認められない。

## 8) ネコ

ネコは、3点が出土している(中世:1点、近世以降:2点)。大きさから判断してヤマネコではなくイエネコであろう。奈良時代には日本にネコが移入されていたという(金子・他:1992)。そうだとすると、出土したのは中世の層であり、比較的早い時期に長野県にも移入されていたことが想像される。

## 9) イノシシ

出土点数は、ウマ、シカ、ウシ、イヌに次いでいる(29点)が、むしろ古代遺跡としては非常に少ないと言える。イノシシは先にも述べたように、家畜のブタと区別を付けるのは難しく、ここでイノシシとしているもののブタである可能性も否定できない。出土点数の時代的な変遷を見てみると、古代には26点であるのに対し、中世には2点、近世以降1点だけに減少している。このことは、この遺跡の利用のされ方も考える必要があるが、単純に考えると古代にはイノシシの利用が減少したと考えられる。さらに弥生時代のイノシシの利用は古代の4倍に達している(茂原;別巻「弥生時代編」)。形態的な精査を必要とするが、現時点であえて言えばここでイノシシとしているものはやはりほとんどが野生のイノシシであり、ブタはほとんど含まれていなかった可能性が指摘される。家畜のブタが浸透していれば、出土点数のこのような減少は見られなかった可能性があるからである。ただし、長野県には現在イノシシの生息は非常に少ない。短い四肢を持つイノシシは雪が苦手であり、積雪地帯には分布がさほど拡大しないので、単純に利用が減少しただけでなく、生息数が減少した可能性も否定は出来ない。

また、下顎骨を除く頭蓋骨の出土点数が極端に少ないのが特徴である。非常に特殊な出土状況で、頭蓋骨は脳を食べるために細かく割られ、他に廃棄された可能性を示唆している。なぜなら、遊離歯は上顎歯が多いわけではなく、むしろ下顎歯の方が多く出土しているからである。もしこの遺跡で破壊されたとするなら、上顎歯が植立する上顎骨が出土していないので上顎の遊離歯が下顎歯よりもずっと多いはずだからである。

## 10) ウシ

出土点数はウマ、シカに次いでいる(125点)。ウシが日本へ持ち込まれたのは、弥生時代とされており(金子:1981、松井;私信)、長野県内にもかなり早くからウシが持ち込まれた可能性がある。ともあれ、長野県内でも古代にはかなりの頻度でウシが利用されており、一般的な家畜であったと思われる。松原遺跡出土のウシに関しては、西中川他(1991)が、上腕骨、大腿骨などを計測し、体高がオスで121~124センチ、メスで約116センチと推定している。この大きさは日本在来牛の口之島牛(鹿児島県)とほぼ等しいことを報告している。

## 11) カモシカ

山間部の遺跡からはしばしば出土する哺乳類である。カモシカの方がシカよりも多い場合もある。本遺

跡の近辺には現在でもカモシカが生息しており比較的一般的な哺乳類であるという。しかし、出土したのは弥生時代の地層から4点だけである。シカとの識別が難しい部位もあり、シカに含まれている可能性も否定できない。出土したのは四肢骨である。

#### 12) シカ

この遺跡ではウマに次いで多い出土点数(179点)である。古代の出土点数は弥生時代の出土点数と比べると2/3程の出土量である。このような出土点数の減少傾向は、いろいろの要素があるので単純には結論できないが、先のイノシシの項でも述べたように、動物の利用が家畜に偏ってきたことを示している可能性が高い。イノシシと異なり頭蓋骨片の出土が多く、利用のされ方の違いが示唆される。シカの出土のうち、角は21点で弥生時代はシカの点数の21%、古代・中世・近世以降では約12%である。シカの角は、小さくても同定が可能であり、実際の利用割合も多く計算されているはずであるが、さほど多い量ではない。個体数に比して椎骨の量は非常に少ない。

#### 13) ウマ

この遺跡の古代・中世・近世以降の時代でもっとも多い出土点数(514点)であり、ほぼ半数である。ウマは大型獣であるから量的には80%程に達するであろう。弥生時代にすでにこの地方にウマがいたとすれば、ウシと同じでやはりかなり急速に西日本から伝搬してきたことになる。やはり、他の出土品や出土状況を詳細に検討する必要がある。松井(1992)は発掘では認識できない掘り込みによるウマの中手骨が縄文時代に混入していたことを報告し、縄文時代はもちろん弥生時代のウマについても注意を喚起している。

ウマは古代に非常に多く出土しているが、下顎骨の割に頭蓋の残りは悪い。ウマの脳を動物の皮なめしに使用したりする例があるので(松井;1987)、細かく割られた可能性がある。これ以外ではとくに偏った出土状況ではない。西中川・他(1991)は松原遺跡出土のウマについてもふれており、推定体高が116~120センチと129~134センチのものがおり、小型馬と中型馬が存在していたことを示唆している。

長野県内では他に、野火付遺跡(宮崎;1985)、池畑遺跡(宮崎;1986)などから中型馬や小型馬が出土していることが報告されている。

#### 14) ネズミ

ネズミは3点が古代の地層から出土している。同定していない。現生のものである可能性もある。

#### 15) ウサギ

弥生時代の層から上腕骨1点、古代の地層から頭蓋骨が2個体分出土している。合計10点である。頭蓋骨は破損している。全体の中ではごくわずかな量である。

#### 16) トリ

鳥口骨を含め3点出土している。いずれも大きなトリではない。骨種は同定していない。

### 5 県内の他の遺跡との比較

この遺跡からは、トリ以外に、5目9科13種(ネズミは目には含めている)が出土している。比較的多様であるが、かなり偏った出土状況で、イノシシやシカの利用が減少し、ウマやウシなどの家畜の重要さが高まってきたことを示す出土状況となっている。重量的には大型獣であるウシとウマでほぼ90%程度を占めている。このような利用状況の変化を遺跡単位で確認した報告は長野県内では見あたらず、今後の検討も含めて松原遺跡はかなり詳細な研究を必要とする重要な遺跡であろう。

県内ではウマやウシの出土が見られるが、弥生時代に出たとすると最も早い時期のものである。ウシやウマの日本への流入がいつであるかは、長い間議論がなされており、現在でもそれは続いている。今のと



ころ最も古いウシやウマでも弥生時代後期程度と考えられている。したがって、長野県の遺跡から出土したのも今後年代測定などを行う必要がある。その際、松原遺跡のウシやウマは重要な役割を果たすことになる。

ウマでは、長野県内の遺跡からトカラ馬程度の大きさの小型馬と、御崎馬や木曾馬程度の中型馬が報告されている。松原遺跡でもこの両者が確認されており、県内の他の遺跡と同様である。ウシに関しては、今のところ松原遺跡を含めて7ヶ所、ウマに関しては松原遺跡を含めて21ヶ所が知られている(西中川・他：1991)。

## 6 おわりに

松原遺跡の古代以後の層からは、トリ以外に、5日9科13種(ネズミは目には含めている)が出土しているが、多くはウマ、シカ、ウシ、イヌであり、重量的にはウシとウマで90%を越える。シカ以外は家畜が多くを占めている。イノシシの利用法は特殊で頭蓋骨がほとんど残っていない。別の場所で解体された可能性を示唆している。現在日本では絶滅しているとされるカワウソウが出土している。

### 参考文献

Driesch, A. von den (1976): A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Mus. Bull. 1: 1-137

長谷部晋人(1952): 犬骨、埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」文化財保護委員会: 146-150

金子浩昌(1981): 第2号方形周溝墓西溝出土の寒牛(*Bos taurus*)頭骨, 「伊皿子貝塚遺跡」: 476-478

金子浩昌・小西正泰・佐々木清光・千葉徳爾(1992): 日本史の中の動物事典, 東京堂出版

松井章(1987): 養老版枚令の考古学的考察——養馬牛の地理をめぐって, 信濃, 39(4): 231-256

松井章(1992): 動物遺存体から見た馬の起源と普及, 「日本馬具大鑑1: 古代上」日本馬具大鑑編集委員会編, 日本中央競馬会: 33-44

宮尾敏雄・西沢寿晃・鈴木茂忠(1980): 早期縄文時代長野県飯原岩館遺跡出土の哺乳動物, 第1報, 出土動物相, 哺乳動物学雑誌 8(5): 181-188.

宮崎重雄(1985): 野火付遺跡出土の馬骨について, 「野火付遺跡」御代田町教育委員会 付録3-5

宮崎重雄(1986): 長野県佐久市池畑遺跡出土の馬と牛の骨について, 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第2集「池畑・西御堂」佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター: 50-61

西中川敏・本田道輝・松元光善(1991): 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究, 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告p.197

斎藤弘吉(1963): 犬科動物骨格計測法, 私家版(東京): 1-138

時代	時期	アナグマ	テン	カワウソウ	キツネ	クマ	タヌキ	ネコ	イヌ	イノシシ	ウシ	カモシカ	シカ	ウマ	ネズミ	ウサギ	トリ	魚	合計
古墳時代	後期									2			2	1					5
古代		1	1	1	1	2	3		27	26	120		167	389	3	1	2	2	248
中世								1	1	2	3		5	124			1		137
近世以降								2	80	1		4	5	0		9			81
	合計	1	1	1	1	2	3	3	88	29	125	4	179	514	3	10	3	2	969

第391表 松原遺跡出土脊椎動物骨の時代別の出土点数







































第6章 松原遺跡出土の人骨・脊椎動物遺存体

時代	No.	時期	出土地点	目録	種名	種別名	歯の		歯根	測定						備考		
							長さ	上下		冠長	冠径	冠厚	冠幅	冠深	冠傾			
中世	340		SK133	ウマ	胎骨	中胎骨	不明			F								
中世	344	1	SK134	ウマ	胎骨	中胎骨	不明			F								
中世	345		SK208	ウマ	胎骨	中胎骨	不明			F								胎骨
古代	327		SK032	ウマギ	胎骨		左			F								
近世以降	483	4-22-22	SK182	ウマギ	胎骨		右			F								1
近世以降	483	4-22-22	SK182	ウマギ	下顎骨＋歯		右	下	SK204	F								1
近世以降	484	3	SK182	ウマギ	下顎骨＋歯		左			F								
近世以降	485	1	SK182	ウマギ	下顎骨＋歯		左			F								
近世以降	485	4-22-22	SK182	ウマギ	胎骨	冠径約、長さ冠径約 左側骨片、胎骨、右側骨片	左			F								
近世以降	484	4	SK182	ウマギ	胎		不明	不明		F								口本
近世以降	484	3	SK182	ウマギ	上顎骨＋歯		右	上		F								
近世以降	485		SK182	ウマギ	上顎骨＋歯		右	不明		F								
近世以降	363	1	SK182	ウマギ	胎骨		右			F								1
古代	337		SK036	ホズシ	幼体、胎骨		不明	不明		F								
古代	482		SK238	ホズシ	不明					F								
古代	337a		SK239	ホズシ	不明					F								
古代	639		SK008	ヒツ	不明					F								
古代	640		SK007	ヒツ	不明					F								
中世	338		SK011	ヒツ	胎骨	胎骨				F								
古代	2392		SK004	魚	不明					F								
古代	2393		SK004	魚	胎骨					F								

第408表 松原遺跡（古墳後期～近世以降）出土の獣骨 00

## 第7章 成果と課題

### 第1節 松原遺跡における古代土器の変容

#### 1 はじめに

長野県における古代の土器編年については、塩尻市吉田川西遺跡の資料に基づいた原氏の業績(原1989)や中央自動車道長野線に関わる松本平の遺跡群の資料に基づいた小平氏の業績(小平1990)があり、その後の原氏の一連の業績(原1990・1994・1996・1997)も加わり、一定の到達点を見たと言えるだろう。しかしながら、岡氏の土器編年は長野県でも中信地域の資料に基づいたものであり、県内を網羅していたわけではなく、また、信濃国とはいえそれぞれの盆地・平に固有の地域性が存在することはすでに指摘されているところである。ただ、岡氏が指摘した土器群の変化の方向性は、県内を通じて多少の振幅があるにせよ一貫していることが立証されつつある(寺島1991・西山1997a・鳥羽1999)。ここでは、北信地域に所在する松原遺跡の資料に基づいて、古代土器の変容を把握し、合わせて北信地域の持つ地域性を浮き彫りにしたいと考える。

#### 2 時間軸の設定

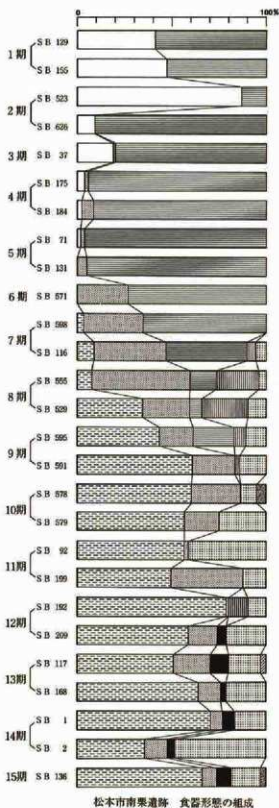
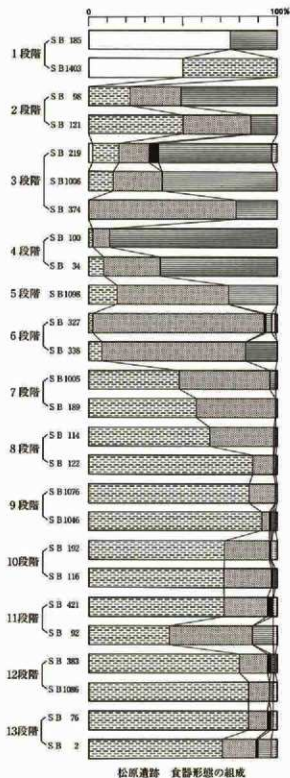
今回、古代土器の段階区分をするにあたって、以下の5項目を分析視点とした。

- ①食器形態の構成比
- ②杯Aの構成比
- ③須恵器杯Aの底部切り離し技法を含めた底部調整の比率
- ④黒色土器A杯Aの底部切り離し技法を含めた底部調整の比率と法量、及び口径と器高の比率
- ⑤土師器杯Aの法量

これらの視点は、これまでの土器研究において重要視され、変化の方向性を示す指針、または時間軸設定のメルクマールとなっている。即ち、②杯Aは須恵器主体から黒色土器A主体へ、さらに土師器主体へという変化、③須恵器杯Aの底部切り離し技法はヘラ切りから糸切りへという変化、④土師器主体の段階では杯Aの法量の縮小化、といった事象が、吉田川西遺跡や松本平の遺跡群を初めとして、北信地域に所在する篠ノ井遺跡群においても追認されている(西山1997a)。本遺跡でもこれらの諸事象が住居址の重複関係と矛盾なく符合しており、先の5項目に基づいて古代土器の段階区分を以下のように設定した。

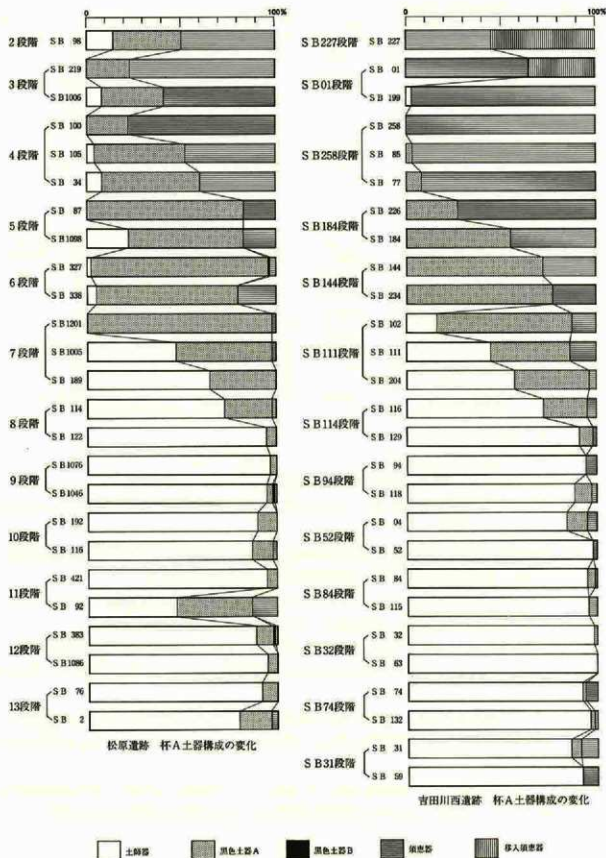
- 1段階：食器形態の中では、非クロコ調整の土師器・黒色土器Aの杯D・Fが主体の段階
- 2段階：杯Aは須恵器が主体で、その底部調整は回転ヘラ切り・手持ちヘラ削りの段階
- 3段階：杯Aは須恵器が主体で、その底部調整は回転ヘラ切り・回転糸切り未調整が併存する段階
- 4段階：杯Aは須恵器が主体で、その底部調整は回転糸切り未調整がほとんどを占める段階
- 5段階：杯Aは黒色土器Aと須恵器で構成され、黒色土器Aが30～60%を占める段階

黒色土器A杯Aの底部調整は75%以上が手持ちヘラ削りで、口径と器高の比率が3：1以下に集中する。



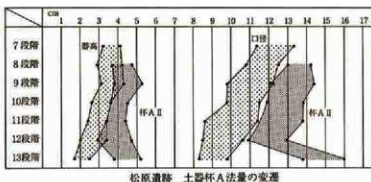
第262図 食器形態の構成比





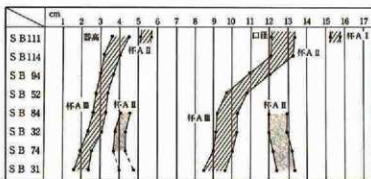
第263図 杯Aの構成比

6段階：杯Aは黒色土器Aが主体で、その底部調整は回転糸切り未調整が60%以上を占める段階  
 黒色土器A杯Aは、口径と器高の比率が3：1もしくはそれを上回る。土師器盤Aが出現し、黒色土器A碗が定着する。灰釉陶器を伴う。



松原遺跡 土器杯A法量の変遷

7段階：杯Aは土師器と黒色土器Aと須恵器で構成され、土師器が40～70%を占める段階  
 黒色土器A杯Aの底部調整は回転糸切り未調整が90%以上を占め、口径と器高の比率が3：1以下に集中する。土師器碗が出現し、黒色土器A碗は大小2法量に分化する。灰釉陶器を伴う。



吉田川西遺跡 土器杯A法量の変遷

第264図 土師器杯Aの法量の変遷

- 8段階：杯Aは土師器と黒色土器Aで構成され、土師器が70～80%を占める段階  
 土師器杯A IIは、口径が11.5cmと14cmに集中し、法量分化の傾向が窺える。土師器の盤Bが出現する。灰釉陶器を伴う。
- 9段階：杯Aは土師器が主体で、口径が11cmと14cmに集中し、杯A IIに法量分化の傾向が窺える段階  
 土師器・黒色土器Bの碗は大小2法量に分化する。灰釉陶器を伴う。
- 10段階：杯Aは土師器が主体で、口径が10.5cmと13cmに集中し、杯A IIに法量分化が認められる段階  
 黒色土器A碗は、意匠化した暗文風のヘラ磨きが顕著。灰釉陶器を伴う。
- 11段階：杯Aは土師器が主体で、口径が10cmと13cmに集中し、杯A IIに法量分化が認められる段階  
 黒色土器A碗は、腰の強く張る深碗が出現し、土師器盤Bは大小2法量に分化する。灰釉陶器を伴う。
- 12段階：杯Aは土師器が主体で、口径が9.5cmと12cmに集中し、杯A IIに法量分化が認められる段階  
 黒色土器A・黒色土器Bの盤Bが出現し、黒色土器A盤Bは大小2法量がある。灰釉陶器を伴う。
- 13段階：杯Aは土師器が主体で、口径が8.5cmと13～14cmもしくは15cm以上に集中し、杯Aの法量分化が確実視され、杯A I・IIという分類基準が崩壊し、新たな枠組みが必要とされる段階

### 3 食器形態

#### (1) 杯A

##### ア 須恵器

本遺跡においては、須恵器自体の出土量が少なく、それ故に松本平編年で提示されたような杯Aの底部調整の比率による段階区分は不可能であった。松本平3～5期の区分がそれで、3期一回転ヘラ切り主体、4期一回転糸切り未調整主体で回転ヘラ切り有り、5期一回転糸切り未調整のみという変化・時期区分が提示されている。本遺跡の場合、須恵器杯Aの在り方から言えば、3・4段階が松本平3～5期に相当すると考えられるが、4段階に至っても回転糸切り未調整のみという住居址はごく稀というのが実状である。しかしながら、北信地域においても、篠ノ井遺跡群（西山1997a）や屋代遺跡群（鳥羽1999）では、松本平と同様な在り方を示しており、それが時期区分に反映されている。こうした差異については、須恵器の出土量を含め、本遺跡の特性として理解しておきたい。

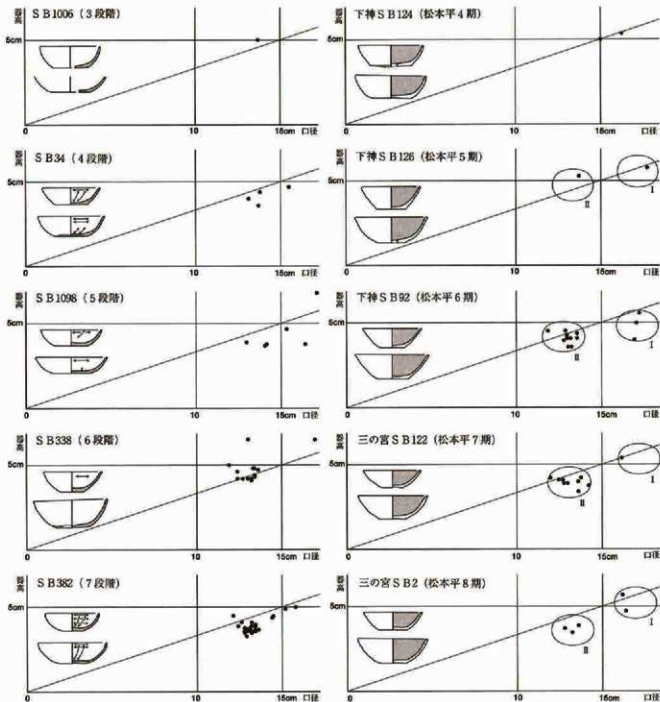
また、吉田川西編年・松本平編年において提示された軟質須恵器についても、本遺跡の資料からは明確な識別が困難であった。本遺跡の場合、軟質須恵器と目される土器の完形品または大形破片の出土が少ないという資料的制約もあり、焼成や色調という判断基準のみでは軟質須恵器を抽出し難い。これらは漸移的に軟質化・灰色化する傾向が杯Aのみならず杯Bにおいても窺えるのが現状である。屋代遺跡群では、軟質的な須恵器から軟質須恵器へとという変化が捉えられ（沢谷1998）、また須恵器杯A全体を焼成・胎土から4タイプに大別し質的变化として捉えている（鳥羽1999）。こうした現状は、土器の種類というレベルで須恵器と軟質須恵器を差別化せず、須恵器の系列の中の変化として捉えることの妥当性を示していると言えよう。ここでも、中信地域と北信地域の差異が垣間見えるわけだが、道具としての土器の問題だけでなく、背後にある須恵器生産をも射程に入れた研究が期待されるところである。

近年、須恵器杯Aの時期的変化を捉えるために有効な手段として内面底径の測定が提唱され、実践されている（沢谷1998・鳥羽1999）。本遺跡では実施できなかったが、今回試みた段階区分を検証する意味でも機会を改めて実施したいと考えている。

##### イ 黒色土器A

1・2段階は古墳時代以降の系譜の中で捉えられ、3段階を経て、4段階で杯Aが定着すると考えられる。4段階では杯Aの主体は須恵器であるが、黒色土器Aは量的には少ないものの、定着の段階から大小2法量で出現する。4段階の杯Aの底部・底面調整は手持ちヘラ削りである。5段階になると底部・底面調整は手持ちヘラ削り主体で、口径と器高の比率が3：1以下に集中する。6段階では、杯Aのみならず食器形態の中で黒色土器Aが圧倒する。底部調整は回転糸切り未調整が60%以上を占め、口径と器高の比率は3：1もしくはそれ以上となる。7段階になると、底部調整のほとんどが回転糸切り未調整となり（90%以上）、口径と器高の比率が5段階と同じく3：1以下に集中する。8段階以降、黒色土器A杯Aは量的に減少の一途をたどるが、10及び11段階に再び増加傾向が見える。8段階以降の黒色土器A杯Aは底径が小さく、口径と器高の比率が3：1を上回り、同時期の椀の高台をはずした法量と一致することが多く見られ、高台の付かない椀という認識を黒色土器A杯Aが新たに担っていた可能性が考えられる。

このような変遷過程を中信地域と対比すると、法量の漸移的な縮小化という点では一致を見るが、北信地域では底部・底面調整に手持ちヘラ削り手法が卓越していること、口径と器高の比率変化が一方向ではないことなどが相違点として浮上してくる（第265図）。底部・底面調整は手持ちヘラ削りから回転糸切り未調整へとという変化の方向性は一致するものの、北信地域では手持ちヘラ削りが6段階に至っても一定量認められ、7段階でも残存することが指摘できる。口径と器高の比率については、中信地域が3：1から



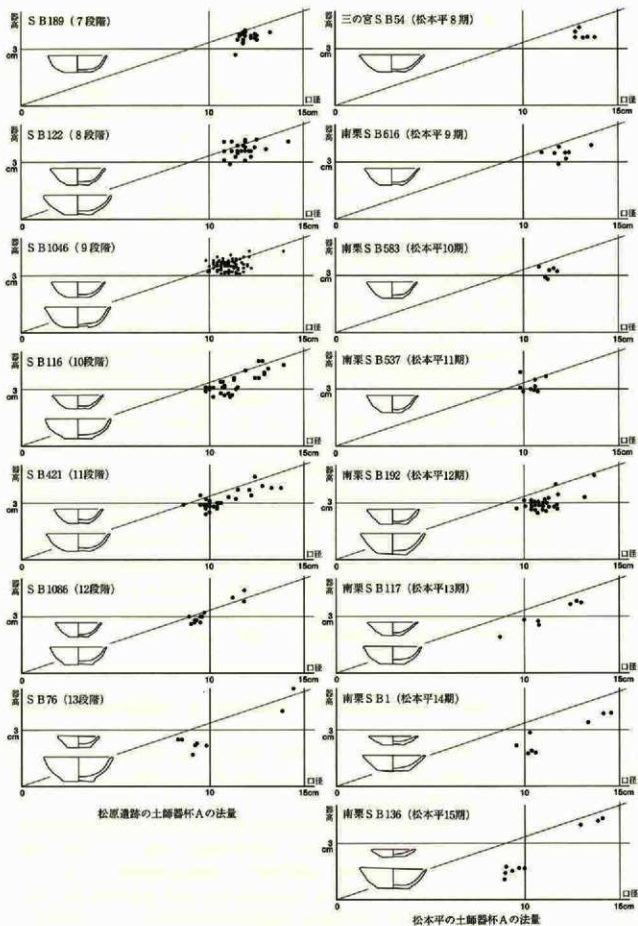
松原遺跡の黒色土器A杯Aの法量

松本平の黒色土器A杯Aの法量

第265図 黒色土器A杯Aの法量の変遷

徐々に3:1以下を目指して器高が低くなるのに対して、北信地域では黒色土器A主体の6段階に一旦3:1もしくはそれ以上となり、7段階に再び3:1以下となる。また、黒色土器A杯Aが8段階以降も食器形態の中に一定量残ることも大きな相違点の一つである。こうした相違点をそのまま、北信地域の地域性として把握・提示したい。

また、黒色土器Aを特徴づける内面のへら磨きは、古墳時代からの伝統と捉えられ、新段階に至っても残される。中信地域では、松本平8期にへら磨きが省略され、放射状の磨きのみになってくるが、本遺跡では横へら磨きをした上で、放射状のへら磨きが施されている。11段階で黒色土器A碗に見られる意匠化



松原遺跡の土師器杯Aの法量

松本平の土師器杯Aの法量

第266図 土師器杯Aの法量の変遷



した暗文風のヘラ磨きに際しても、事前の工程として横ヘラ磨きが施されている。このことは北信地域の特質として指摘されよう。

#### ウ 土師器

6段階から僅かではあるが見られるようになり、7段階に至って一定量をもって杯Aを構成し、定着を見る。口径15cm未満の杯AⅡが主体を占めるが、杯AⅠも僅かに認められる。杯AⅡの口径は12～13cmが主体で、口径と器高の比率は黒色土器Aと同様に3：1以下に集中する。8段階に至ると、杯AⅡの口径が11.5cmを中心とする一群と口径14cmを中心とする一群が認められる。後者は量的には少ないものの、時として杯AⅠとした口径15cmを超えるものをも包括する場合があります。杯AⅡの法量分化と捉えるのか、杯AⅠの小形化として捉えるべきか、7段階における杯AⅠの量的に不安定な実態からして判断に躊躇する。ただし、定着の段階で杯AⅡは口径12cmが中心であることから、大小の分化を想定するよりも総体的な小形化傾向の中で、小法量は杯AⅡの、大法量は杯AⅠの小形化と捉えた方がスムーズではある。なお、小法量の一群では、口径と器高の比率が3：1を上回るものが認められ、このことは9段階以降12段階まで継承される。口径が小さくなっているだけに、深淺の見掛け上の格差が著しく、深淺の法量分化という視点でも注目しておきたい。9段階以後、主体となる小法量では、分布の中心となる口径が0.5cmごとに小さくなっていく。12段階では、小法量の一群に、口縁部が受け口状を呈する器形を有するものが一定量認められ、土師器皿Cにおいても同様な変化が認められる。13段階の小法量の一群は、口径と器高の比率が4.5：1に近づき、皿Aとの区別が曖昧なものになってくる。一方、大法量の一群は、口径が13～14cmもしくは15cmを超えるものをも包括する場合があります。これまでの大法量の一群の変遷過程に逆向する。このことは、小法量の一群を含め、新たな法量の枠組み、または新たな器種の導入といった環境を用意する必要が生じていることを意味していよう。まさに、中世への胎動期と認識されよう。

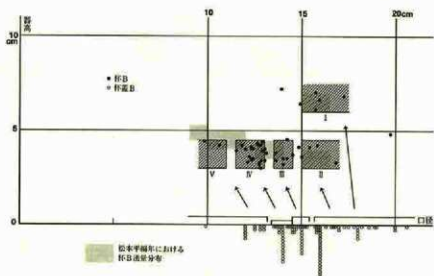
このような変遷過程を中信地域と対比すると、法量の漸移的な縮小化という点では一致を見るが、北信地域では、定着の段階から口径が小さいこと、各段階に口径と器高の比率が3：1を上回る深いものが認められ、総じて深い印象を得ることなどが相違点として浮上する（第266図）。中信地域では、土師器定着の段階は土師器・黒色土器A・須恵器の法量が一致しているのに対して、北信地域では土師器が黒色土器Aより小振りであり、若干の法量差をもって定着している。この差異は、土器生産にまで波及するものでもあり、北信地域の地域性として把握・提示したい。また、小法量の一群の深淺の格差は、中信地域においては認められないものであり、そのまま北信地域の特質として指摘しておきたい。

#### (2) 杯B

杯Bは須恵器が専有する器種で、箱形の体部に高台を付した形態の杯である。本遺跡では以下のように法量による細分を実施した。

杯BⅠ：口径15cm以上、器高6cm上	杯BⅣ：口径11.5～13cm、器高3～4.5cm
杯BⅡ：口径15cm以上、器高4.5cm以下	杯BⅤ：口径11cm以下、器高3～4.5cm
杯BⅢ：口径13.5～14.5cm、器高3～4.5cm	

第267図は本遺跡出土のすべての須恵器杯Bの法量分布図である。報告書によって、法量の細分及びその呼称に差異があり、それぞれ対比することは煩雑であるが、中信地域で口径12～14cmとした一群が、北信地域では杯BⅢ・Ⅳに二分されることが指摘できる。口径が確認された杯蓋Bの個体数のピークからも、この細分を支持できると考える。こうした法量の差異は、須恵器生産にまで波及するものでもあり、北信地域の地域性として把握・提示したい。また、黒色土器Aに須恵器杯Bの器形を模倣したもの（図版154）があり、特記しておきたい。

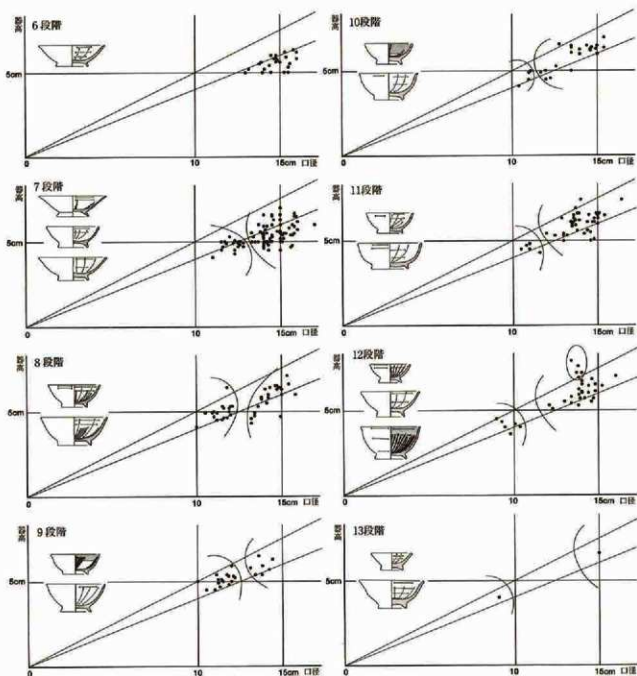


第267図 須臾器杯Bの法量分布

## (3) 椀

ここでは、土師器・黒色土器Aについて時間軸に沿って概要を記すこととする（第268・269図）。

- 5段階：黒色土器Aが僅かに見られる。
- 6段階：黒色土器Aが一定量をもって定着する。口径と器高の比率が5：2を下回る浅い椀が主体。
- 7段階：土師器が一定量をもって定着する。口径と器高の比率が5：2を下回る浅い椀が主体。  
 黒色土器Aは口径13cmを境に大小2法量に分化する。大法量の一群には、体部が直線的に開くものと内彎するものの二者がある。口径と器高の比率は5：2を中心とする。
- 8段階：土師器は1法量で、器形に体部が直線的に開くものと内彎するものの二者がある。口径と器高の比率は5：2を中心とする。  
 黒色土器Aは口径12.5cmを境に大小2法量で、大法量の一群の体部が直線的に開くものが欠落する。口径と器高の比率は5：2から2：1の間に納まるものが主体となる。
- 9段階：土師器は口径12.3cmを境に大小2法量に分化する。大法量の一群には、体部が直線的に開くものと内彎するものの二者がある。口径と器高の比率は5：2を中心とする。  
 黒色土器Aは口径12.5cmを境に大小2法量で、大法量の一群の体部が直線的に開くものが欠落する。口径と器高の比率は5：2から2：1の間に納まる。内面の意匠化した暗文風のへら磨きが顕著となり、10段階以降継承される。
- 10段階：土師器は口径12.5cmを境に大小2法量で、大法量の一群の体部が直線的に開くものが欠落する。口径と器高の比率は5：2から2：1の間に納まるものが主体となる。  
 黒色土器Aは口径11.3cmを境に大小2法量となるが、大法量の一群の中に口径12.3cmを中心とする中間形態の一群が認められる。これらについては口径と器高の比率が5：2を中心とするもので、法量差にとどまらず、器形の相違として把握される可能性がある。
- 11段階：土師器は口径11cmを境に大小2法量で、口径と器高の比率は5：2を中心とする。高台が高くなり、盤Bとの区別が曖昧なものが多い。  
 黒色土器Aは10段階の特徴を継承するが、口径と器高の比率が2：1を上回る深椀や口径16cmを越える大形の椀が出現する。
- 12段階：土師器は11段階の特徴を継承するが、小法量の一群の口径は10cm以下と小形化傾向が著しい。  
 黒色土器Aも11段階の特徴を継承するが、口径と器高の比率が2：1を上回る深椀は、腰の強く

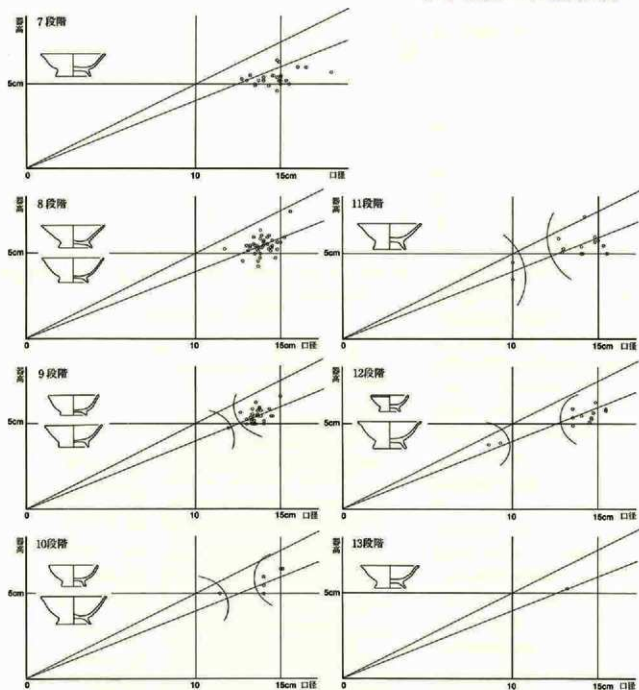


第268図 黒色土器A碗の法量的変遷

張る器形となり、一定量を占めるようになる。

13段階：土師器・黒色土器Aとも減少する。

以上記してきたように、土師器と黒色土器Aとは定着・器形分化・法量分化の点において1段階のずれがあり、先行する黒色土器Aを土師器が追隨していることが明らかである。土器の生産・消費を検討する上で興味深い事象である。また、碗には土師器・黒色土器A・黒色土器B・灰釉陶器・緑釉陶器があり、その構成比においては9段階に土師器が主体となる他は、すべて黒色土器Aが主体である。なお、量的に不安定なため明確ではないが、黒色土器B碗は8段階に出現し、9段階に大小2法量に分化することが本遺跡では確認されている。これまで、碗についてはあまり検討されたことがなく、これらが北信地域の地域性として認識できるかどうかは不明瞭であるが、注目すべき事象が捉えられたと考える。



第269図 土師器碗の法量の変遷

#### (4) 盤B

これまで盤Bは、土師器の専有器種として考えられてきたが、本遺跡では黒色土器A・黒色土器Bにも認められ、このこと自体を北信地域の地域性として把握・提示したい。第270図は盤Bの法量分布であるが、大中小の三つに法量分化していることが明白である。口径10cmを中心とする小法量の一群は土師器と黒色土器Bで、口径15cmを中心とする中法量の一群は土師器と黒色土器Aで構成されている。量的には少ないが、口径20cmを中心とするものは黒色土器Aのみで構成されている。このことは、法量による土器の種類の規制といったものがあつたことを推測させる。時期的には、9段階に土師器が定着し、11段階で土師器が法量分化し、黒色土器Aが出現する。12段階に至って、すべての種類が出揃い、土師器においては柱状高台を呈するものが出現するという経過がたどることができる。碗とは異なり、盤Bでは土師器が変容の主体として位置付けられる。盤Bの先行器種として盤Aがあげられるが、盤Aは土師器の専有器種で

あり、そうした伝統の所産とも言えようか。

(5) 灰釉陶器

県内、特に北信地域の古代土器において、時期的な意味において唯一固有名詞を付けることが可能なものは灰釉陶器である。したがって、時間軸の設定に当たっては恣意的な資料操作を招きかねないこともあり、敢えて一切無視して取り組むこととした。第262図に示したように本遺跡では灰釉陶器の出土量が極めて少ない。松本市南栗遺跡の食器形態の組成と比較すれば、その差は歴然としている。とはいえ、少ないながらも中信地域と同様な窯式=生産地の灰釉陶器が出土している。第271図は住居址から出土した食器形態の灰釉陶器を段階別に提示したもので、ばらつきはあるものの、6段階以降の灰釉陶器窯式の変遷は、中信地域のそれとほぼ同様と言える。資料的に不備な点は否めないが、このことにより、本遺跡で試みた段階区分と中信地域を代表する吉田川西編年・松本平編年との対比が可能となる。当然、相互に時間幅の差異はあるだろうが、相対的に見て整合性のあるものとする。

6段階（黒笹14・90号窯式、

光ヶ丘1号窯式が伴う）-----吉田川西SB144段階・松本平7期

7段階（黒笹90号窯式、光ヶ丘1号窯式が伴う）---吉田川西SB111段階・松本平8期

8段階（光ヶ丘1号窯式、大原2号窯式が伴う）---吉田川西SB114段階・松本平9期

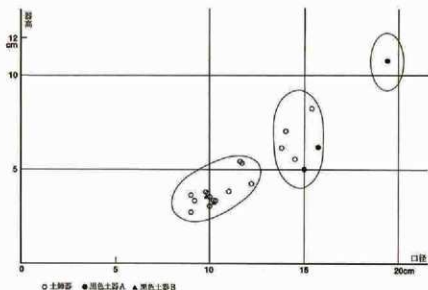
9段階（大原2号窯式、虎渓山1号窯式が伴う）---吉田川西SB94段階・松本平10期

10段階（虎渓山1号窯式が伴う）-----吉田川西SB52段階・松本平11期

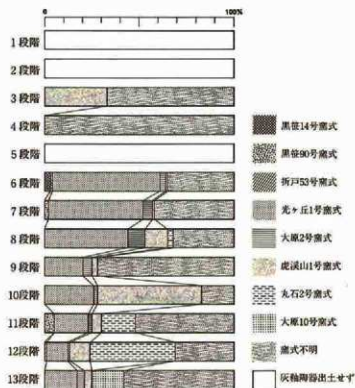
11段階（虎渓山1号窯式、丸石2号窯式が伴う）---吉田川西SB84段階・松本平12期

12段階（丸石2号窯式が伴う）-----吉田川西SB32段階・松本平13期

13段階（大原10号窯式が伴う）-----吉田川西SB74・31段階・松本平14・15期



第270図 釜Bの法量分布



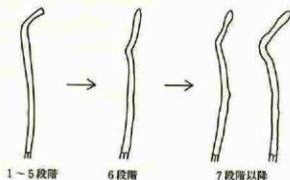
第271図 住居址出土の灰釉陶器（食器形態）窯式の構成



## 4 煮炊形態

ここでは長胴形甕の変容を基軸に、煮炊形態の推移について概要を記すこととする。

1・2段階の長胴形甕は古墳時代以来の伝統を色濃く残しており、器形も口径・胴部最大径とも20cmを越えないものが主体的で、細長い円筒形を呈している。1段階ではハケ巻・ケズリ甕の区別が明確で、2段階に至って一つの個体にハケ目・ヘラ削り調整が施される折衷的な長胴形甕が出現



第272図 長胴形甕 口縁部形態の変化

する。また、輪積み痕や底部に木葉痕が観察される個体も見られるが、1段階から、口縁部に回転ナデ調整を施すものが確認されている。なお、2段階から浅鉢形甕が認められ、僅かずつではあるが8段階まで煮炊形態の1組成を担っている。調整技法は、それぞれの段階で主体となる長胴形甕に準じている。小形甕については、1段階から13段階まで一貫して煮炊形態の1組成を担う。調整技法は、6段階までそれぞれの段階で主体となる長胴形甕に準ずるが、7段階以降、底部回転糸切りで全面回転ナデ調整のものが主体を占める。段階を追って、口縁部形態や法量に変化が認められるが、資料化するに至っていない。

3段階では、2段階から出現した武蔵甕が一定量をもって定着するが、主体となるのは回転ナデ調整が施された口縁部直下から底部までヘラ削りを施す長胴形甕で、ヘラ削りをハケ目に置換した長胴形甕が次ぐ。器形も口径・胴部最大径とも20cmを越え、丸みを帯びてくる。

4段階も3段階と同様に、ヘラ削りを施す長胴形甕が主体で、ヘラ削りをハケ目に置換した長胴形甕がそれに次ぐ。この段階は最も武蔵甕の出土が多い段階で、その影響からか、ヘラ削りが施される長胴形甕の器壁は薄く削り出され、器形も砲弾形を呈するようになる。一方、ハケ目調整の長胴形甕は3段階と同様な器形を保持しており、この段階で系譜は途絶えることとなる。なお、円筒形土製品が出土するのは3・4段階である。

5段階は、主体となるヘラ削りを施す長胴形甕に、武蔵甕の器形への追求が最も具現化する段階とも言える。器壁の薄さだけでなく、コ字状を呈する口縁部の形態までも模倣したと考えられる個体も確認されており、武蔵甕への憧憬の念の強さを物語っている。

6段階は、口縁部に回転ナデ調整を残し、口縁部直下からヘラ削りが施される長胴形甕が主体で、新たにタタキ調整を用いるものが加わる。6段階に至ると、武蔵甕の器形への追求は放棄される。胴部の器形は砲弾形を維持するが、これまで短く外反度の強かった口縁部形態が、長く直立気味に内彎する口縁部形態へと変化する(第272図)。したがって、長胴形甕を段階区分する際のメルクマールに、口縁部形態が重要な位置を占めることが明らかとなった。この段階から明確となる羽釜形甕の出現・存在が、こうした変化の背景にあるのではと考える。なお、羽釜形甕は6段階以降13段階まで認められる。

7段階は、回転ナデ調整を口縁部から胴部最大径付近まで残し、それ以下をタタキ調整する長胴形甕が主体を占める。あくまでも調整技法の主体はタタキ調整であるが、ヘラ削り・ナデ・ハケ目など複数の調整技法が一つの個体に重ねて施される場合が多い。また、6段階からの長い口縁部は外反度を強めるものも見られる。なお、7段階以降についても同様の長胴形甕が用いられる。

長胴形甕の終局は明確にできないが、8段階までは煮炊形態の主体を占めていることは明らかで、10段階までその存在が認められる。8・9段階は煮炊形態に新たな器種が導入される段階で、羽釜A・足釜・牛出形甕が加わり、これまでの器種を含め淘汰され、10段階以降、羽釜A主体の新たな枠組がスタートす

ることとなる。羽釜Bは13段階に定着を見る。羽釜主体の段階においても、口径の極端に小さい羽釜や浅い法量の羽釜が確認されており、長胴形甕に対する小形甕・浅鉢形甕と同様な関係が、新器種の羽釜においても必要とされていたことが理解される。なお、8・9段階にハケ状工具を基本原体とした平底の長胴形甕が、また、口縁部内面を横へら磨きする球形形甕が出現する。前者についてはこれまでの長胴形甕の系譜からは追えないもので、類例を含め、今後注目しておきたい資料の一つである。

## 5 おわりに

これまで、中信地域の資料に基づいた古代の土器編年をそのまま用いることが多かったという研究の状況にあって、今回は、在地の資料を積み上げた上で、それと対比・比較検討することができたものと考えられる。その結果、両者の相違点も指摘することができ、地域性の確立・理解へと発展する足がかりを提示することができたと考える。とは言え、北信地域を持つ地域性や特徴を提示することが目的の一つであったがゆえに、松原遺跡を北信地域という総体に置き換えただけの感は否めず、今後、周辺地域の資料を加えて分析することによって、問題解決を図りたいと考える。

また、今回取り上げることができなかった土器の種類や器種についても、避けて通ることはできず、資料の少ない部分は補い、北信地域総体としての新たな枠組み作りが今後必要となってくることは言うを待たない。幸い、更埴市屋代遺跡群や長野市南宮遺跡など、北信地域の古代集落を代表する遺跡の報告書が刊行され始めており、淘汰された土器編年の構築が今後期待されるところである。

## 第2節 松原遺跡出土の人骨と獣骨

京都大学霊長類研究所

茂原 信生

松原遺跡は長野県長野市松代町にある遺跡で、上信越自動車道の建設工事に伴って平成元年度から平成3年度にかけて長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。本遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。この報告は、縄文時代から近世以降にかけての人骨及び獣骨に関するまとめである。

### 1 人骨

人骨は144例について調査した。時代別の人骨の出土例数は、弥生時代27例、古墳時代中期の人骨4例、古代の人骨23例、中世の人骨89例、近世以降の人骨1例である。

全体に、保存状態のよい骨が多いが、復元が困難なものもかなり多い。また、後代になるほど焼骨の割合も高くなる。焼骨の場合には、温度による収縮などのゆがみが生じ、また細片化するので形態的な特徴を抽出することは出来ないものが多い。

#### (1) 時代別の特徴

##### a 弥生時代中期

27例を観察した。焼かれた人骨も含まれるが、その率は低い。それらの四肢骨の多くは波形の角裂を示しており、軟組織が付いたままで焼かれたことを示している(Stewart, 1979)。縄文時代人骨に見られるような彫りの深い(鼻根部が大きいくびれている)顔貌ではなく、鼻根部の平坦な顔立ちである。下顎骨は比較的頑丈であるが、下顎底が丸みを帯びたロッカージョウは一例も見られない。また、これと関連した形質として下顎角の底部にある角前切痕が観察される個体が多い。この形質は下顎骨が食物の軟化に伴って出現する形質とされており、この時代にはすでに縄文時代とははっきりと区別される食糧事情であったことを示している。縄文時代の北村遺跡(明科町)人骨などと比べると明瞭な違いである(茂原; 1993)。大腿骨の殿筋隆起は女性に多いのが特徴で、縄文時代の北村遺跡でもこの傾向が確認されている。したがって、女性の方が大腿骨の上部が扁平な扁平大腿骨が多い結果となる。この形質は、下肢を挙げる運動と強く関係しているものと思われ、木の実などの採集の際に山へ登ったりする女性に多く出現する可能性が考えられる。しかし、大腿骨と違って、胫骨の断面は扁平ではない。この点は縄文時代人と大きく異なる点である。全体としてみると、弥生時代の松原遺跡の人骨は縄文時代のこの地方で見られる人骨とは異なり、ダブルシャベル型切歯がみられるなど、すでに渡来系の人々の影響が及んでいることを伺わせるものである。

##### b 古墳時代後期

4例について観察した。出土量は、石室内に構築された火葬墓からの焼骨以外はごく少数の歯で、時代的な形態特徴は抽出できなかった。性別は1例が女性と判断されたが他はすべて不明である。

##### c 古代

23例について観察した。ただし、それらはほとんどが歯によって識別されるだけである。上顎の中切歯には新モンゴロイド(渡来系)の特徴であるシャベル型がしばしば観察される。身長は平本(1977)の報

告している鎌倉時代の女性の平均値と同大である。時としてエナメル質減形成が観察されるが例数は少ない。縄文時代人にみられたような踏歯面をもつものや、胫骨の骨膜炎がみられた。

#### d 中世

89例について観察した。上顎中切歯や側切歯が典型的なシャベル型であり、渡来系の人々の影響を受けていた結果であろうと予想される。また、出土した人骨の多くは焼かれた骨である。多くは完全に灰化するまで焼かれているので意図的な火葬骨であると推測される。その残りは多様で、ほぼ一体分が残っていたり、火葬後の取り残しのようなものもある。これらも軟組織が付いた状態で焼かれたものである。身長はやや高めのものもみられるが基本的にはこの時代の平均値（平本：1977）と大差ない。

#### e 近世以降

出土個体数は1例だけで、若い個体であり、特徴は抽出出来ない。

### (2) 全時代を通しての特徴

弥生時代以降の人骨は、縄文時代人骨に見られるような彫りの深い（鼻根部が大きいくびれている）顔貌ではなく、鼻根部の平坦な古代から中世にかけて一般的な顔立ちである。下顎骨は比較的頑丈であるが、下顎底が丸みを帯びたロッカージョウは一例もみられず、下顎体も後方で高さを減じており、これらの点でも縄文時代人骨とは異なっている。角前切痕のあることなどを含めて、これらの形質は食物の軟化に伴って下顎骨に出現する形質とされており、この時代にはすでに縄文時代とははっきりと区別される食糧事情であったことを示しており、弥生時代よりもその傾向は強まっている。四肢骨では、時代を経ても弥生時代人骨とさほど変わった傾向は示しておらず、大腿骨の筋筋隆起の発達は女性に多い。また、やはり縄文時代人骨とは異なり胫骨の断面は扁平ではない。身長はそれぞれの個体の長骨の長さから推定されるが、今回の例では骨端が破損もしくは欠損している例がほとんどで、大まかな推定しかできなかった。一部の個体で推定身長が求められたが、それらはいずれも女性人骨で、古代では144センチ、中世では3例からそれぞれ144センチ、148センチ、158センチと推定された。平本（1977）が報告している日本人の推定身長の平均値は、鎌倉時代の女性で144.9センチ、室町時代の女性で146.6センチであり、これらと比較して大差ない大きさである。1例が高身長であった。歯の形成時に何らかのストレスで形成されるエナメル質減形成は、松原遺跡群では高率ではなく、むしろ、観察される割合は少なかった。エナメル質減形成がかなりの高率で観察された縄文時代後期の北村遺跡人（明科町）とさほど変わらない環境であったと想像されるにもかかわらず、成長時のストレスは緩やかであったと考えられる。ただし、歯石が沈着したり、齧蝕が見られるものもあり、時代を経るにしたがって食生活が別の様相を呈していたと思われる。

中世人骨では焼骨が圧倒的に多く、形態的な観察は難しいものであった。焼骨ではほとんどの個体の四肢骨に波形の亀裂がみられ、軟組織が付着したままで焼かれたことを示していた。中世にはこのような火葬の習慣が定着していたものであろう。土坑によって出土量に大きな差が見られたのは、火葬後の処理の違いによるものと思われる。たとえば、火葬したそのまま埋葬されていたり、あるいはおもな部分を別の場所に埋葬したりというような可能性も考えられる。また、火葬後の取り残しが出土した場合もあろう。ともかく、生骨が残りにくい環境にあったことを割り引いても、中世には火葬が盛んであったと推測される。

松原遺跡の弥生時代中期とほぼ同じ時代に、近隣の長野市の伊勢宮遺跡や篠ノ井遺跡から、渡来系の影響を受けたと思われる人骨が出土している（茂原・松村；1997、茂原・西沢・松村；1997）。しかし、松原遺跡の弥生時代人骨は量的にはさほど多いわけではなく、弥生時代の人骨における渡来系の影響などに関

しては今後の検討課題であろうが、後代にはシャベル型切歯の頻度が高くなるなど、間違いなく渡来系の影響を受けた人々が見られるようになっている。

## 参考文献

- 平本嘉助(1977):日本人身長の時代的变化, 自然科学と博物館, 44(4): 169-172  
 茂原信生(1993):北村遺跡出土の人骨の形質, 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書, 14「北村遺跡」, 259-402.  
 茂原信生・松村博文(1997) 篠ノ井遺跡(長野市)出土の人骨(弥生時代~平安時代)「篠ノ井遺跡」成果と課題編, 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書(日本道路公団名古屋建設局, 長野県教育委員会, 長野県埋蔵文化財センター), 16: 218-245  
 茂原信生・西澤寿晃・松村博文(1997) 伊勢宮遺跡(塩崎遺跡群:長野市)出土の弥生時代人骨 長野市立博物館紀要(長野市立博物館), 4: 1-26  
 Stewart, T.D.(1979): Burned Bones. in "Essentials of Forensic Anthropology" Charles C.Thomas, Springfield;59-68,

## 2 獣骨

## (1) 出土獣骨リスト

出土した動物は以下の通りで、同定していないサカナ、トリ、ならびにネズミ以外に、哺乳類が5目9科14種出土している(第409表)。イノシシとブタとの識別は部分的に出土した場合には難しいため、ここではイノシシとして数えてある。この内の一部、あるいは全部がブタである可能性もないわけではない。ここで示した動物種のうち、イヌ、ネコ、ウシ、ウマは明らかに家畜である。なお、表1の各出土点数は必ずしも同一のレベルにはなっていない。なぜなら、比較的散乱しているシカやウマの歯も1点であるし、歯の植立したイヌの頭蓋骨も1点と数えているからである。ただし、出土状況をかなり反映していることは論を待たない。

## 魚綱

サカナの一種 2点(椎骨を含む)

## トリ綱

Aves

トリの一種 3点

## 哺乳綱

Mammalia

## 食肉目 Carnivora

イタチ科 Mustelidae

アナグマ *Meles meles*

カワウソ *Lutra lutra*

テン? *Martes sp.*

クマ科 Selenarctidae

クマ *Selenarctos thibetanus*

イヌ科 Canidae

キツネ *Vulpes vulpes*

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*



- イヌ *Canis familiaris*  
 ネコ科 Felidae  
 ネコ *Felis domestica*  
 偶蹄目 Artiodactyla  
 イノシシ科 Suidae  
 イノシシ *Sus scrofa*  
 シカ科 Cervidae  
 シカ *Cervus nippon*  
 ウシ科 Bovidae  
 ウシ *Bos taurus*  
 カモシカ *Capricornis crispus*  
 奇蹄目 Perissodactyla  
 ウマ科 Equidae  
 ウマ *Equus caballus*  
 ウサギ目 Lagomorpha  
 ウサギ科  
 ノウサギ *Lepus brachyurus*  
 齧歯目 Rodentia  
 ネズミの一種

時代	時期	アナグマ	テン	カワウソ	キツネ	クマ	タヌキ	ネコ	イヌ	イノシシ	ウシ	カモシカ	ニホンジカ	ウマ	ネズミ	ウサギ	トリ	魚	合計
縄文時代	前期中葉								5				3						8
	前期末葉～中期初葉								272				127						399
弥生時代	中期				1	2		33	115	5			263	8					430
	後期								2				5	2					9
古墳時代	前期								1										1
	後期										2		7	1					5
古代		1	1	1	1	2	3	27	26	120			167	389	3	1	2	3	748
中世								1	1	2	3		5	124					137
近世以降								2	60	1		4	5	0			9		81
種別合計出土点数		1	1	1	1	3	6	3	121	424	130	4	577	524	3	10	6	2	1016

第409表 松原遺跡出土脊椎動物骨の出土点数

## (2) 出土獣骨の時代別の特徴

## a 縄文時代

縄文時代の動物遺存体は、さほど多くない量であり、同定された骨は、考古遺跡からはもっとも一般的に出土するイノシシとシカの2種類にすぎない。いずれも焼けており、熱を受けて変形している骨や表面の剥落しているものも多い。点数では、イノシシがニホンジカの2倍を越える出土量である。細片がほとんどであり、大きめの破片はごくわずかである。解体痕や咬痕は確認できなかった。一般に、ニホンジカやイノシシが出土している遺跡からは四肢骨の破片とみられる骨質の厚い大小の破片が少なからず確認されるが、本遺跡の縄文層ではわずかに数点だけである。出土骨の保存状態は良好であることから化学的浸食によって消失したことは考えにくい。加工利用や他の場所での利用後の廃棄も推察されるが、全ての骨が焼けていることを考慮すると、食されたあとに、あるいは解体されたあとに炉に放り込まれた可能性も考えられる。

## b 弥生時代

保存状態は非常によいが、低湿地からの出土物によく見られるようにピビアナイトが付着していたり、乾燥による表面の剝離が見られるものがある。哺乳類が3目6科7種が出土している。出土した動物は考古遺跡から出土する一般的な動物を含んでいるが、種類数は7種と少ない。出土した全量はさして多いとは言えず、またほとんどはシカ、イノシシで占められている。傾向としては縄文時代と大差ない。食肉目はクマ、タヌキ、イヌの3種である。古代・中世の食肉類の種類が多さ(8種)と比較するとかなり少ない。イノシシの利用法は特殊で、頭蓋骨がほとんど残っていない。別の場所で解体された可能性を示唆している。また、種類は後代の古代・中世よりも少なく、どちらかといえば貧弱な動物層である。イヌは日本在来の縄文時代犬の系統を引くものであるが、縄文時代犬よりはやや大きめになっている。ウマとウシは出土点数も少なく(ウマ10点、ウシ5点)、全量の3.4%にすぎず、年代測定は行っていない。弥生時代のウマやウシの存在は疑問視する人もおり、化学的年代測定を待たねばならないが、今のところ後代からの混入の可能性が大きいと考えている。

## c 古墳時代

出土量は非常に少なく、同定されたのはイノシシ、シカ、ウシおよびウマの4種にすぎず、点数も前期と後期を合わせても6点である。資料が少なく、特徴を云々する程の出土量ではない。

## d 古代

保存状態は比較的良好で、多くの動物骨は完全ではないにしろ、かなりよく保存されている。食肉類が出土点数はごく少ないが、7種も出土している。もっとも多く出土したのはウマで、家畜のウシなども急激な増加を見せている。ウマは小型馬と中型馬が混在しているようである。この時代には、稲作農耕は定着し、野生のイノシシやシカの利用から家畜のウマやウシの利用に転換してきたことを示している。

## e 中世

ネコはこの時代に初めて出現している。全量はごく少なくなっている。その中でほとんどがウマである。ウシの利用が減少しているのが目につく。

## f 近世以降

さらに出土量は減少している。イヌがもっとも多く出土しており、ウサギも出土している。この遺跡のある場所の利用のされ方が変化してきた可能性がある。イヌは、縄文時代犬よりはやや大きいものの、日本在来犬の大きさの範囲を出ていない。

## (3) 出土獣骨の種別の特徴

おもな出土獣骨に関しての種別の特徴をまとめる。点数は1点であったが、日本では現在絶滅していると考えられているカワウソが出土していることは注目に値する。

## a イヌ

日本古来の在来犬(縄文時代犬)の系統を引くものと思われる。縄文時代犬は肩の高さが40センチ前後のものであり、長谷部(1952)の型区分では小級(メス)と中小級(オス)に属するものでこれより大きい個体は出土していないのが一般的であった。しかし、時代を追うにしたがった次第に大きくなってきており、この遺跡でもやはり同様な傾向が認められ、やや大型のものが存在していた。

イヌの出土点数は各時代を通じてきほど多くはないが、安定した出土量であると言える。各時代を通じて、四肢骨や頭蓋骨に人為的な切断痕はないので、食用に供されてはいないと思われる。大きめのものと小さめの両方のタイプが出土しているので、それらはオスとメスと考えるのが妥当であろう。

## b イノシシ

弥生時代の出土点数は、シカに次いでいる。この時代にはまだシカと並んでイノシシの利用が盛んであったことを示している。しかし、古墳時代から古代にかけてはニホンジカがやや減少したにすぎないのに対し、イノシシの出土は激減し、縄文時代の9分の1程度までになっている。さらに中世、近世以降と減少傾向を引き継いでいる(出土点数が少ないのでここまで言うのは危険かもしれないが)。これが狩猟圧によるイノシシの個体数の減少によるものか、あるいは利用そのものがされなくなってきたのかは現在のところ解析する方法がない。短い四肢を持つイノシシは雪が苦手であり、積雪地帯には分布がさほど拡大しないので、長野県には現在イノシシの生息は非常に少ないという。このことを考えると、単純に利用が減少しただけでなく、寒冷化に伴って絶対的な生息数が減少した可能性も否定は出来ない。先にも述べたが、野生のイノシシと家畜のブタは破片では識別することが難しく、後代のものには家畜のブタが混入している可能性も否定は出来ない。ブタを飼育する文化がいつ長野県へに入ってきたのかに関しての文化的な、あるいは文献的な方面からの研究が必要であろう。なお、弥生時代のイノシシ(あるいはブタ)の利用方法はかなり特殊で、頭蓋骨がほとんど出土していない。イノシシの頭蓋骨は脳を食べるために細かく割られて失われたか、あるいは別のところで解体されて遺棄された可能性がある。

## c ニホンジカ

全体の出土点数が少ないにもかかわらず、弥生時代の出土点数の方が古代の約2倍である。このような減少傾向は、いろいろの要素があるので単純には結論できないが、先のイノシシの項でも述べたように、動物の利用が家畜に偏ってきたことを示している可能性が高い。ニホンジカがイノシシほどの減少を見せないのは、角や中手骨・中足骨などが道具として利用され続けたためであろう。しかし、中世以降はやはり極端に少なくなっている。

## d ウシ

弥生時代の地層からの出土点数は5点とごく少ない。ウシが日本へ持ち込まれたのは弥生時代とされており(金子;1981、松井;私信)、もし弥生時代中期にすでに長野県内にウシが存在したとすれば興味深い。しかし、点数も少なく混入の可能性も否定できない。むしろ、日本の全体的なウシの出土状況などを考えればそう考える方が妥当であろう。松原遺跡出土のウシに関しては、西中川他(1991)が、上腕骨、大腿骨などを計測し、体高がオスで121~124センチ、メスで約116センチと推定している。この大きさは日本在来牛の口之島牛(鹿児島県)とほぼ等しいことを報告している。ウマに比べて、出土点数は少ない。特に中世には3点しか出土しておらず、ウマの出土点数(124点)を大きく下回る。ウシの利用のされ方がウマとははっきり異なっていた可能性を示唆するものとして興味深い。

## e ウマ

弥生時代のウマの出土点数は10点である。松井(1992)は発掘では認識できない掘り込みによるウマの中手骨が縄文時代の地層に混入していたことを報告しており、縄文時代はもちろん弥生時代のウマについても年代測定をするなどの慎重な対応が必要であることを指摘している。

古墳時代以降は、どの時代ももっとも多い出土比率である。ウマは大型獣であるから量的にはさらに多くなる。古代がもっとも多く出土しているが、下顎骨の割に頭蓋の残りは少ない。ウマの脳を動物の皮なめしに使用したりする例があるので(松井;1987)、細かく割られた可能性がある。西中川・他(1991)は松原遺跡出土のウマについてもふれており、推定体高が116~120センチと129~134センチのものがあり、小型馬と中型馬が存在していたことを示唆している。

## 参考文献

- 長谷部晋人 (1952) : 犬骨, 埋蔵文化財発掘調査報告第一号「吉胡貝塚」, 文化財保護委員会, 146-150
- 金子浩昌 (1981) : 第2号方形周溝墓西溝出土の家牛(*Bos taurus*)頭骨, 『伊皿子貝塚遺跡』: 476-478
- 松井章 (1987) : 養老殿牧令の考古学的考察——髷れ馬牛の処理をめぐって。信濃, 39 (4) : 231-256
- 松井章 (1992) : 動物遺存体から見た馬の起源と普及。『日本馬具大鑑1: 古代(上)』, 日本馬具大鑑編集委員会編, 日本中央競馬会: 33-44.
- 西中川駿 (1991) : 古代遺跡出土骨から見たわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究, 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書: p.197.

## 第8章 結語

上越自動車道建設に関わる松原遺跡は、調査から報告書刊行に至るまで12年の歳月を費やした。当初、高速道路交通網の開通は東民の悲願であり、それは長野冬季五輪開催の決定とともに国際公約へと飛躍した。この間、発掘調査は急ピッチで進められ、異例の冬期発掘作業や最大時調査研究員20数名、作業員400名に及び、掘削や排土処理を行う重機・ダンプが至るところで稼働し、排土運搬のダンプが10数台列をなしている場面もあり、まさに大規模な発掘作業が展開されていた。3年間の発掘調査面積は、延べ約158,000㎡となり、その調査成果はそれぞれの報告書に記されている通りで、どの時代をとっても学問的に重要な問題を提示することとなった。

本書が取り扱った時代においては、北信地域屈指の副葬品を伴う後期古墳群、400軒に上る古代の竪穴住居址、古代の河川址で検出された築状遺構、中世の土葬墓群と斜面部に形成された五輪塔を伴う火葬墓群などがあり、同時に多種多様な遺物が出土している。以下、時代別に概要を記してみる。

古墳時代後期の居住域（集落）は今回の調査区では検出されておらず、金井山山麓斜面部に松原古墳群と称した古墳が3基検出・調査されたにとどまる。古墳群の内、7体の追葬が確認された松原1号墳からは、「金の大刀・銀の大刀」を初めとする武器・馬具、耳環・勾玉と千を越える数のガラス玉などの装身具等、その質・量は北信地域でも屈指の副葬品として評価される。加えて、石室下に排水施設を構築し、斜面の傾斜と直交する方向に横穴石室の主軸をもつなど、今まで本遺跡周辺で確認・調査されている古墳とは異なった構造的特質を持っている。これらのことから、極めて独自性の強い有力な集団が、松原古墳群を造営したと理解されよう。松原古墳群は未周知の古墳群であり、当時の社会状況を検討する上で、まさに新たな資料の提示ができたものと考えられる。

古代においては、400余軒という竪穴住居址の検出数に関心が集まりがちであるが、遺跡を直線的に、またはL字に屈曲して走る溝址に集落の性格等が見え隠れする。古墳時代後期に松原古墳群を造営した集団の延長上に属するのか、新たな政治勢力等の介入によるものかは明らかにし得なかったが、今回の調査区では、古代集落の初期段階で、長大な溝址が構築され、住居址の軸線も合致する言わば都市計画に基づいた集落が形成されていることが明らかとなった。その後、溝址で区画された内側に掘立柱建物址を伴う集落内で中心的な役割を担っていたことが推測される区画が地点を換えて出現し、それらは一定の墨書土器で象徴される住居址群によって形成される集落の出現によって崩壊を見る。こうした遺跡内の変動は、それぞれの時期の集落が保持する社会・歴史的背景の具現化でもあり、集落変遷の要因・必然性等を解明することが今後に残された大きな課題である。

古代の遺物については、膨大な量に上る土器、京城や地方官衙遺跡等から出土することが多い鉄製鍔・鹿角製サイコロ、髻・梵鐘・屏金具の鋳型、杏葉髹、卜骨といった全国的に見ても検出例の稀有な遺物群などが住居址を中心として出土している。土器は、古代における変遷をたどり得る好資料で、その概要と同時に、塩尻市吉田川西遺跡や一連の松本平の古代遺跡群で代表される中信地区との地域性の相違を提示することができた。稀少品とされる遺物群は、それらの出土をもって遺跡あるいは集落の性格付けに大きく寄与するところであるが、特に髻などの鋳型は鋳造遺構とともに検出されており、注目を集めることとなるだろう。また、それぞれの遺物に対する研究状況は、稀少品であるがゆえに集作作業の段階を脱していないものがほとんどと言える。杏葉髹などがその好例で、今後、古代における馬具の変遷等を検討して



いく上で、重要な位置を占めることとなるだろう。ト骨については、周辺地域に以前から注目を集めている更埴市生仁遺跡があり、最近でも同市の風代遺跡群土口バイパス地点から多数出土していることもあって、停滞していた研究に新たな展望が開けるものとする。

中世においては、平坦面及び山麓斜面に造営された墓址群が最も注目される。平坦面では当時の道路脇に集団墓が形成されており、遺存する人骨から導き出された被葬者の年齢・性別は多彩で、葬法についても多様である。それに対し、斜面部に形成された五輪塔を伴う火葬墓群は葬法という点では等質で、集団墓の成因が対比され、興味深い。それぞれの時期について明確にすることはできなかったが、同時存在であっても、新旧と時期を違えていたとしても興味はつきない。加えて、斜面部では、個々のテラス及びテラス内に格差が認められた。Uテラスとした斜面下段部では、3時期にわたる地表面の造り換えが認められ、長期にわたる使用が想定されるだけでなく、梵字が墨書された本遺跡最大の五輪塔地輪が設置されており、斜面部全体＝墓域内での優位性が窺える。また、火葬墓は有機質の蔵骨器が用いられたことが想定されるが、個々のテラスにおいて蔵骨器の形態や埋納に際しての墓壇の造作に格差が認められる。これらのことは、斜面部が一定の集団の墓域として選定され、その中の小集団が個々のテラスを墓地として使用していたことを示唆するものとする。今後、遺跡周辺に造塔されている五輪塔を中心とした石造物の調査を踏まえて、さらに研究が深まることを期待したい。

また、松原遺跡では本書で報告した遺物の他に、実に多種多様な動植物の遺存体が出土している。種実・木葉・茸・昆虫・貝などがそれで、これらのほとんどは遺跡内を流れていた河川址から出土している。これらは皆、偶然の発見によるもので、目的意識を持った計画的・体系的な調査・サンプリングの結果によるものではなかった。大いに反省するとともに、この教訓を今後の調査に活かしたい。

松原遺跡は、長野市教育委員会及び当センターで刊行した報告書により、遺跡範囲のみならず遺跡内容・時代的特性がほぼ明らかとなってきた。縄文時代から中近世に至る松原遺跡は、さしづめ遺跡一つで歴史博物館の様相を呈していると言える。現在、長野市松代町域では、松代城や大室古墳群の整備・調査が計画的かつ継続的に実施されている。地中に眠る松原遺跡に対しても、そうした地域的な取り組みが望まれるとともに、郷土の文化遺産として、資料が史料として有効に活用されることを強く期待したい。

松原遺跡の発掘調査は多くの人々の努力と協力によって終了することができた。中でも、報告書作成スタッフの創意工夫には何度も助けられ、また光明を見出した。土器の拓本採拓、土器復元などはその1例で、それらのマニュアルは当センターの整理作業の中で今なお踏襲されている。この場を借りて謝意を表したい。本書の刊行をもってすべての時代に対する遺跡の記録保存が終了したことになるが、本当に終了したといえるのは、本書を含め、報告書が評価を受けた段階と思っている。また、評価に十分に耐えうる内容と自負もしている。長期にわたってこれまでご協力いただいた関係各位、諸団体に深い感謝の意を表し、本書の内容が地域の歴史を組み立てる上で、少しでも活用されることを念願して結語としたい。

## 引用・参考文献

- 赤羽直幸 1995 「最終氷期以降における長野盆地の古墳域」『第四紀』27
- 浅野研樹 1986 「(3)羽釜」『シンボジウム古代末期～中世における在来土器の諸問題』神奈川県考古第21号
- 安志津津 1997 「北陸における袴帯・石帯」『富山市考古資料館報』No.31 富山市考古資料館
- 飯塚忠二 1982 「SI2出土の羽釜状底部穿孔土器について」『北新渡遺跡』高崎市教育委員会
- 飯塚武司 1993 「古墳時代から古代の武蔵・相模国を中心とした工具・農具の変遷」『法政考古学』第20集
- 猪狩みち子他 1988 「薄磯貝塚」(財)いわき市教育文化事業団
- 石井進・萩原三男編 1993 「中世社会と墳墓」帝京大学山梨文化財研究所シンボジウム報告集 名著出版
- 石上周蔵 1990 「古代の屋立柱建物址」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4 総論編
- 石川智紀他 1998 「旧得法寺跡」(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石田茂作編 1972 「塔一塔婆・スツーパー」日本の美術 No.77 至文堂
- 井関弘太郎 1983 「沖積平野」東京大学出版会
- 五十川伸矢 1992 「古代・中世の銚鉄鋤物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 国立歴史民俗博物館
- 市川聡之 1997 「中世在地産物の変遷」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』15 石川糸里遺跡
- 伊藤 実 1993 「日本古代の銅」『潮見浩先生追善記念論文集 考古論集』
- 市田京子 1994 「麗物の変遷」『よみがえる中世』8 平凡社
- 井原今朝男 1989 「第四章第四節 糸里と荘園」『長野県史通史編』第1巻原始・古代 長野県史刊行会
- 岩崎卓也 1982 「舞鶴山1・2号墳」『長野県史 考古資料編』全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会
- 岩崎敏夫 1973 「八葉寺木製五輪塔の研究」八葉寺五輪塔調査委員会
- 上田典男 1993 「長野県における中世の『火葬施設』をめぐって」『帝京大学山梨文化財研究所報』第16号
- 上田典男 1999 「長野市松原遺跡出土の「杏葉樽」について」『長野県埋蔵文化財センター紀要』7
- 上原真人 1984 「木器集成図録—近畿古代篇」奈良国立文化財研究所史料第27冊 奈良国立文化財研究所
- 上原真人 1993 「木器集成図録—近畿原始篇」奈良国立文化財研究所史料第36冊 奈良国立文化財研究所
- 白居直之 1994 「中部の概要」『古代における農具の変遷』東日本埋蔵文化財研究会他
- 白居直之 1997 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書」15 石川糸里遺跡 第3分冊
- 遠藤元男 1985 『建築・金工職人史話』日本職人史の研究V 雄山閣
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 1996 『金の大刀と銀の大刀』大阪府立近つ飛鳥博物館図録9
- 大塚初重 1990 「観音山古墳をめぐる二つの話題」『群馬県史・通史編1しおり』  
(『やっ、どもね！大塚初重先生頌寿記念思い出文集』1997 明治大学考古学研究室 再録)
- 大野安生他 1998 「富の原遺跡・大村館基地・下荒瀬山下墓地」長崎県大村市教育委員会
- 大矢雅彦編 1983 『地形分類の手法と展開』古今書院
- 岡安光彦 1984 「いわゆる『素瓿の樽』について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 岡安光彦 1986 「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵」『考古学雑誌』第71巻第4号 日本考古学会
- 風間春芳 1999 「長野県内の杏葉樽3例について」『長野県考古学会誌』90号 長野県考古学会
- 榎村友延他 1988 「小中横穴群」(財)いわき市教育文化事業団
- 片山寛明 1987 「日本の樽」『馬の博物館研究紀要』1号 根岸鏡馬記念公苑
- 片山寛明 1990 「和式樽の展開」『日本馬具大鑑』第三巻中世 日本中央競馬会
- 片山寛明 1992 「樽の構造からみた武士の馬術の特色」『馬の博物館研究紀要』5号 根岸鏡馬記念公苑
- 加藤碩一・赤羽直幸 1986 「長野県の地質」『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質研究所
- 香取忠彦 1984 「梵音具」『新版仏教考古学講座』第5巻仏具
- 香取忠彦 1985 「梵音具」『特別展図録日本の金工』東京国立博物館
- 神澤勇一 1976 「弥生時代、古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『畿古史学』38 畿古史学会
- 北佐久郡志願委員会 1956 『北佐久郡志』第二巻歴史篇
- 木村幾多郎・神澤勇一 1987 「銚骨・卜骨」『弥生文化の研究』8 雄山閣
- 木村泰彦 1992 「長岡京の銚骨」『長岡京古文化論叢II』中山修一先生喜寿記念事業会
- 榎原功一 1999 「五輪塔にみる製作法の変化」『帝京大学山梨文化財研究所報』第36号
- 楠 正勝 1986 「弓について」『金沢市新保本町チカモリ遺跡』金沢市教育委員会

- 久保禎子 1997 「漁網籠の製作技術と漁網復元への一試論」『民具研究』第116号 日本民具学会
- 黒崎 直 1996 『古代の農具』日本の美術 No.357 至文堂
- 黒崎町教育委員会 1994 「緒立C遺跡発掘調査報告書」
- 建設省北陸地方建設局 1979 「第6章漁業」『信濃川百年史』
- 建設省北陸地方建設局千曲川工事事務所 1993 「信濃の巨流 千曲川」
- 合田芳正 1998 『古代の礎』考古学ライブラリー66 ニューサイエンス社
- 小平和夫 1990 『古代の土器』『中央自動車道長野緑埋蔵文化財発掘調査報告書』4 総論編
- 小林秀夫 1982 「竹原塚古墳・菅間王塚古墳・桑根井空塚古墳」『長野県史 考古資料編』主要遺跡 北・東 信
- 小林正史 1999 「煮炊き用土器の作り分けと使い分け」『食の復元』帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集 2
- 小林真寿 1987 「上小地方における様相」『長野県考古学会誌』55・56 長野県考古学会
- 小松 望 1990 「金属製品と鍛冶資料」『中央自動車道長野緑埋蔵文化財発掘調査報告書』3 吉田川西遺跡
- 小諸市誌編集委員会 1974 『小諸市誌 考古篇』
- 小山岳夫 1984 「古墳時代後期～奈良時代の土器について」『若宮遺跡』佐久市教育委員会
- (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「午岡遺跡1・頭地遺跡」
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1989 『中央自動車道長野緑埋蔵文化財発掘調査報告書』3 吉田川西遺跡
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野緑埋蔵文化財発掘調査報告書』4 総論編
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野緑埋蔵文化財発掘調査報告書』15 石川糸里遺跡
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野緑埋蔵文化財発掘調査報告書』16 籠ノ井遺跡群
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』3 大室古墳群
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1997 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』7 大星山古墳群 他
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1997 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』13 牛出古墳群 他
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』4 松原遺跡―縄文時代―
- (財) 長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』14 牛出遺跡・対面所遺跡他
- (財) 福島県文化センター 1989 『相馬開発関連遺跡調査報告1』
- 坂井秀弥 1998 『古代の土管』『新潟考古学談話会会報』第19号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥他 1989 『山三賀II遺跡』新潟県教育委員会
- 坂詰秀一編 1986 『出土渡来銭』考古学ライブラリー45 ニューサイエンス社
- 坂本美夫 1985 『馬具』考古学ライブラリー34 ニューサイエンス社
- 佐々木長生 1997 「只見川上流域における論議について」『民具研究』第115号 日本民具学会
- 佐々木宗昭 1986 「5石白・6石榑、搦き白」『大井城跡(黒岩城跡)』佐久市教育委員会
- 菅沢 浩 1987 「信濃における奈良時代を中心とした土器編年」『長野県考古学会誌』55・56 長野県考古学会
- 佐藤信之 1987 「北信地方における様相」『長野県考古学会誌』55・56 長野県考古学会
- 更級埴科地方誌刊行会 1978 『更級埴科地方誌』第2巻原始古代中世
- 更級埴科地方誌刊行会 1986 『更級埴科地方誌』自然編
- 沢谷昌英 1998 「更級埴科遺跡・屋代遺跡群の土器」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』3
- 清水俊明 1984 『奈良県史 7石造美術』奈良県史編集委員会
- 那都麻呂 1984 「日本各地の墳墓―中部・北陸」『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓 雄山閣
- 水藤 真 1991 『中世の葬送・墓制』吉川弘文館
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鏡について」『権原考古学研究所論集 第八』
- 鈴木信・白居直之 1994 「狩猟のための道具」『季刊考古学』47 雄山閣
- 高村博文 1988 「佐久地方の平安時代土器編年試論」『新沢・葛石』佐久市教育委員会
- 竹内靖長 1999 「松本城下における砥石流通の事例」『松本市史研究』第9号 松本市
- 竹原 学 1989 「古墳時代後期～平安時代土器の編年」『前田遺跡(第I・II・III次)』佐久市教育委員会
- 田中広明 1990 「律令時代の身分表象(Ⅰ)」『土曜考古』第15号 土曜考古学研究会
- 田中広明 1991 「律令時代の身分表象(Ⅱ)」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 田中広明 1993 「服帯の一考察」『研究紀要』第10号 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 丹下昌之 1995 『古代遺跡出土物の研究』『民具研究』110 日本民具学会
- 千種 浩 1992 「袋状鉄弁の断面形態の検討とその障害」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
- 堀 隆 1987 「佐久地方における様相」『長野県考古学会誌』55・56 長野県考古学会

- 堤 隆 1987 「前田遺跡における奈良・平安時代の土器様相」『前田遺跡』 御代田町教育委員会
- 堤 隆 1988 「十二遺跡における土器様相」『十二遺跡』 御代田町教育委員会
- 堤 隆 1989 「根岸遺跡における土器様相」『根岸遺跡』 御代田町教育委員会
- 津野 仁 1990 「古代・中世の鉄鏡」『物質文化』54 物質文化研究会
- 鶴間正昭 1985 「武蔵国における鉄鏡の型式分類とその編年の予察」『法政考古学』第10集 法政考古学会
- 帝京大学山梨文化財研究所編 1992 「村の墓・都市の墓」第3回「考古学」と中世史研究 シンポジウム資料集
- 寺島俊郎 1991 「古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』2
- 樽田伊史 1997 「地域における古代史研究をめぐる」『歴史学研究』第703号
- 東国歴史考古学研究所編 1995 「シンポジウム中世の火葬—その展開と地域性—資料集」
- 徳永哲秀 1995 「土器復元改良の試み」『長野県埋蔵文化財センター紀要』4 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 島羽英雄 1999 「埋蔵遺跡群における古代の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』26
- 外山政子 1986 「平安時代の土器について」『下佐野遺跡』II地区(2) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1987 「甗について」『研究紀要』4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 外山政子 1989 「群馬県地域の土器甗について」『研究紀要』6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- とよさか誌編集委員会 1987 「とよさか誌」長野市松代町豊栄とよさか誌編集実行委員会
- 内藤和美 1986 「2. 石帯について」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会
- 直井雅尚・原明芳 1987 「松本平における様相」『長野県考古学会誌』55・56 長野県考古学会
- 中沢 悟 1996a 「紡錘車の基礎研究(1)」『研究紀要』13 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢 悟 1996b 「紡錘車の基礎研究(2)」『専修考古学』第6号 専修大学考古学会
- 中沢 悟 1997 「群馬県内出土紡錘車の編年」『矢田遺跡VII』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢悟・春山秀幸・関口功一 1988 「古代布生産と在地社会」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中島英子 1998 「対面所遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』14
- 長野県史刊行会 1989 「長野県史通史編」第1巻原始・古代
- 長野県史刊行会 1990 「長野県史美術建築資料編」建築
- 長野県史刊行会 1992 「長野県史美術建築資料編」美術工芸
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」5 松原遺跡 弥生後期・古墳前期
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」8 村東山手遺跡
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」9 小滝遺跡・北之脇遺跡 他
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」12 榎田遺跡
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」21 陣馬塚古墳・観音平塚塚 他
- 中野市教育委員会 1994 「清水山古窯址(古窯址)(中世基群)発掘調査報告書」
- 中野市教育委員会 1994 「がまん湖遺跡(西山中世基址)・上の山遺跡発掘調査報告書」
- 長野市教育委員会 1980 「四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塚崎遺跡群」『長野市の埋蔵文化財』第9集
- 長野市教育委員会 1987 「三輪遺跡(2)」『長野市の埋蔵文化財』第20集
- 長野市教育委員会 1989 「中条遺跡」『長野市の埋蔵文化財』第32集
- 長野市教育委員会 1990 「麻地遺跡II」『長野市の埋蔵文化財』第36集
- 長野市教育委員会 1991 「松原遺跡」『長野市の埋蔵文化財』第40集
- 長野市教育委員会 1992 「南宮遺跡」『長野市の埋蔵文化財』第43集
- 長野市教育委員会 1993a 「松原遺跡II」『長野市の埋蔵文化財』第51集
- 長野市教育委員会 1993b 「松原遺跡III」『長野市の埋蔵文化財』第58集
- 長野市教育委員会 1994 「松原遺跡IV」『長野市の埋蔵文化財』第63集
- 仲田茂司 1993 「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌』第79巻第3号 日本考古学会
- 長津宗重他 1984 「山内石塔群」宮崎県教育委員会
- 永峯光一 1982 「鳥羽山洞穴遺跡」『長野県史 考古資料編』全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会
- 中村由克 1989 「生仁遺跡出土の骨角器と動物遺体」『生仁遺跡III』更埴市教育委員会
- 中山正典 1992 「熊刈り鎌についての民具学的検討」『民具研究』99 日本民具学会
- 奈良県教育委員会 1995 「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告」
- 奈良国立文化財研究所 1975 「平城宮発掘調査報告VI」
- 西村 歩 1994 「曲物の細部技法」『文化財学論集』文化財学論集刊行会



- 西山克己 1996 『7世紀代に用いられた円筒形土器』『長野県考古学会誌』79 長野県考古学会
- 西山克己 1997a 『古代の土器と時期区分』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』16 篠ノ井遺跡群
- 西山克己 1997b 『長野県出土の皇朝十二銭』『長野県埋蔵文化財センター紀要』6 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 新田栄治 1977 『日本出土土骨への視角』『古代文化』29-12 (財)古代学協会
- 日本馬具大鑑編集委員会 1990 『日本馬具大鑑』第三巻中世 日本中央競馬会
- 日本馬具大鑑編集委員会 1990 『日本馬具大鑑』第一巻古代上 日本中央競馬会
- 日本馬具大鑑編集委員会 1991 『日本馬具大鑑』第一巻古代下 日本中央競馬会
- 日本道路公団名古屋建設局長野工事務所 1984 『中央自動車道長野線更増～須坂間第1次土質調査報告書』
- 日本の地質「中部地方I」編集委員会 1988 『中部地方I』 共立出版
- 日本民具学会 1997 『日本民具辞典』ぎょうせい
- 日本家業史研究所 1977 『長野市松代屋地遺跡』
- 沼田頼輔 1968 『日本紋章学』人物往来社
- 野澤剛幸 1995 『横地城跡出土の石塔について』『横地城南遺跡群発掘調査報告書』静岡県菊川町教育委員会
- 花岡弘・西山克己 1995 『信州の6世紀・7世紀の土器様相』『東国土器研究』第4号
- 春山浩幸 1990 『矢田遺跡出土の紡錘車から』『矢田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 花谷 浩 1986 『東洋銅板付櫛の編年とその性格』『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』
- 原 明芳 1987 『松本平における平安時代の食器具』『信濃』第39巻4号 信濃史学会
- 原 明芳 1989 『吉田川西遺跡における食器の容容』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3』
- 原 明芳 1990 『長野県の9世紀後半から12世紀の食器具の様相』『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 原 明芳 1990 『信濃における平安時代の黒色土器』『東国土器研究』第3号
- 原 明芳 1990 『信濃における中世の土器様相の成立』『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』
- 原 明芳 1994 『松本平における食器様式の変化と窯業生産』『中部高地の考古学』IV 長野県考古学会
- 原 明芳 1996 『甲信地域での8・9世紀の煮炊具』『古代の土器研究会』
- 原 明芳 1997 『古代末期の信濃の土器様相』『北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会
- 原 明芳 1998 『信濃の古代墳墓』『長野県考古学会誌』86 長野県考古学会
- 東日本埋蔵文化財研究会他 1994 『古代における農具の変遷』
- 平野 修 1997 『字引金』から何が読みとれるか』『研究所報』第31号 帝京大学山梨文化財研究所
- 平野吾郎 1994 『稻刈り鎌の出現』『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告1』
- 廣田和徳 1999 『土器—古墳時代中期～後期』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』12 榎田遺跡
- 佛教藝術学会 1989 『佛教藝術』182号 特集 中世の墳墓 毎日新聞社
- 古庄浩明 1994 『古代における鉄製農具の所有形態』『考古学雑誌』第79巻第3号 日本考古学会
- 堀江正作・柴田豊久 1980 『栃木県の刀剣』栃木県教育委員会
- 埋蔵文化財研究会 1996 『古代の木製食器』
- 増田精一 1965 『古墳出土鞍の構造』『考古学雑誌』第50巻第4号 日本考古学会
- 町田勝則 1996 『石甕の研究法』『長野県の考古学』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 松尾昌彦 1987 『善光寺平南部の飾り馬具』『比較考古学試論』増田精一編
- 松平定信編 寛政12年(1800)『集古十種』(国書刊行会本)
- 松本市教育委員会 1990 『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡』
- 三浦京子・黒沢はるみ 1989 『平安時代の煮沸土器について』『研究紀要』6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 水口由紀子 1991 『武蔵国における中世成立期の煮炊土器小考』『埼玉考古学論集』
- 南 博史 1991 『遺跡出土の曲物製コシキ』『朱雀』京都文化博物館
- 南 博史 1991 『曲物研究と課題』『考古学ジャーナル』No.335
- 三輪茂雄 1978 『白(うす)ものと人間の文化史25 法政大学出版局』
- 村上由美子 1996 『杵と臼の変遷について』『滋賀考古』15 滋賀考古学研究会
- 望月 映 1990 『古代の堅穴住居址』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4 総論編
- 望月由佳子 1996 『瀬名遺跡』V 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 森 徳夫 1984 『日本各地の墳墓—近畿』『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓 雄山閣
- 森 浩一 1974 『考古学と馬』『日本古代文化の探究 馬』社会思想社



- 森嶋 稔 1978 『更級埴科地方誌』第2巻原始古代中世
- 矢口忠良 1982 「長礼山2号墳」『長野県史 考古資料編』全1巻(2)主要遺跡(北・東信)長野県史刊行会
- 山内 実 1997 「宇田野(2)遺跡」『宇田野(2)遺跡・宇田野(3)遺跡・草薙(3)遺跡』青森県教育委員会
- 山口耕一 1998 「古墳時代後期の円筒形土製品」『研究紀要』第6号 榑柳木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 山下孝司 1992 「[字引金] 寛書」『山梨県考古学協会誌』第5号 山梨県考古学協会
- 山下歳信 1998 『稲荷窪B地点遺跡』群馬県大胡町教育委員会
- 山田光洋 1998 『楽器の考古学』 同成社
- 吉岡郁夫 1999 「人骨の所見と考察」『善光寺沢遺跡発掘調査報告書』愛知県幡豆郡吉良町教育委員会
- 若林 卓 1999 「観音平塚塚」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』21
- 渡辺一雄 1985 「6 弓・矢」『弥生文化の研究』5 雄山閣
- 渡辺 誠 1981 「もじり編み用木製織の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻第4号 日本考古学会
- 渡辺 誠 1985 「ヨコズナの考古民具的研究」『考古学雑誌』第70巻第3号日本考古学会
- 渡辺 誠 1991 「木製品の民具学的研究」『考古学ジャーナル』No.335

# 写 真 图 版

写真説明

PL 1 : 松原遺跡SK1226-1出土の人骨 (古代)

1 : 正面観 2 : 左側面観 3 : 上面観 4 : 下顎骨上面観 5 : 下顎骨左側面観

PL 2 : 松原遺跡SK1008出土の人骨 (中世)

1 : 正面観 2 : 左側面観 3 : 上腕骨遠位半 4 : 尺骨近位部骨幹 5 : 右橈骨 6 : 左橈骨  
7 : 左大腿骨後面 8 : 右大腿骨後面 9 : 右胫骨後面 10 : 左胫骨後面

PL 3 : 松原遺跡SK1160出土の人骨 (中世; 1~5) SK0555出土の人骨 (中世; 6~9)

1 : 尺骨 2 : 右大腿骨 (別個体) 3 : 右大腿骨 4 : 左大腿骨 5 : 右胫骨  
6 : 左上腕骨 7 : 頭蓋骨上面観 8 : 上顎歯咬合面観 9 : 下顎上面

PL 4 : 松原遺跡SK1544出土の人骨 (中世)

1 : No 1 の正面観 2 : No 1 の左側面観 3 : No 1 の下顎骨上面観  
4 : No 2 の上顎骨と頬骨前面観 5 : No 2 の下顎骨上面観

PL 5 : 松原遺跡出土のウマ

1 : 右下顎骨と下顎歯 (SD1082) 2 : 左下顎骨外側面と下顎歯 (SD0102)  
3 : 左上腕骨 (SD0020) 4 : 右大腿骨後面 (SK1031) 5 : 左上腕骨 (SD1009)

PL 6 : 松原遺跡出土のウマ

1 : 中手骨 (SD1009) 2 : 左胫骨 (SD1009) 3 : 右胫骨 (SD1009)  
4 : 左胫骨 (Z) 5 : 左寛骨 (SD0102) 6 : 頭蓋骨 (左方が前 SD0102)

PL 7 : 松原遺跡出土のウシ

1 : 前頭骨左角坐部 (SD0102) 2 : 前頭骨左角坐部 (SD0102)  
3 : 左下顎骨外側面 (SD0102) 4 : 左下顎骨後部外側面 (SD0002)  
5 : 下顎骨右後部外側面 (SD0002) 6 : 左中足骨 (SD0102)

PL 8 : 松原遺跡出土の哺乳動物骨

ウサギ (SK1692)

1 : 大腿骨遠位端 2 : 橈骨近位部 3 : 橈骨遠位部 4 : 上腕骨遠位部  
5 : 上腕骨近位部 6 : 上腕骨遠位部

ネコ (SK1692)

7 : 上腕骨近位部 8 : 上腕骨遠位部 9 : 左・右下顎骨

カワウソ (SB0094)

10 : 上腕骨遠位部

タヌキ

11 : 左胫骨遠位部 (SB0055) 12 : 左尺骨 (SD0102)

PL 9 : 松原遺跡出土の哺乳動物骨

シカ

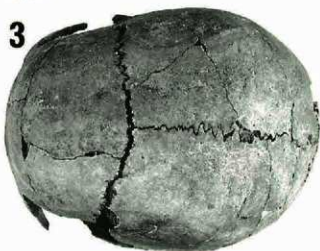
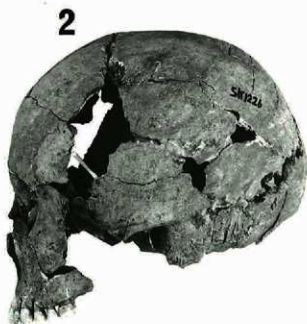
1 : 頭蓋骨上面 (左方が前 SK1034) 2 : 角 (SB0077)

イヌ

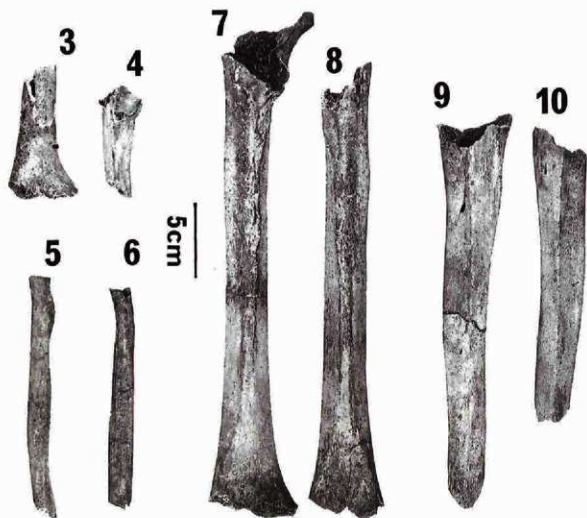
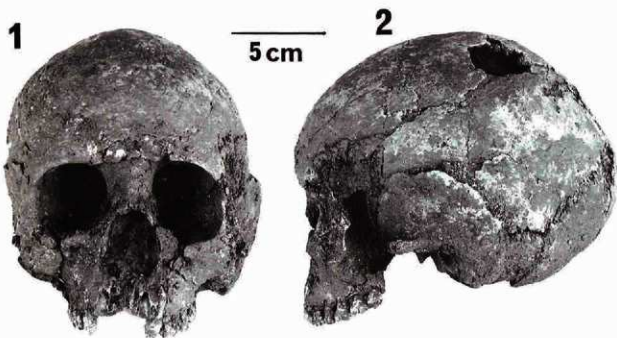
3 : 左下顎骨外側面 (SB0174) 4 : 左・右下顎骨 (SB1072)

5 : 左・右下顎骨 (SK1692) 小型のイヌ 6 : 左・右下顎骨 (SK1692) 中型のイヌ

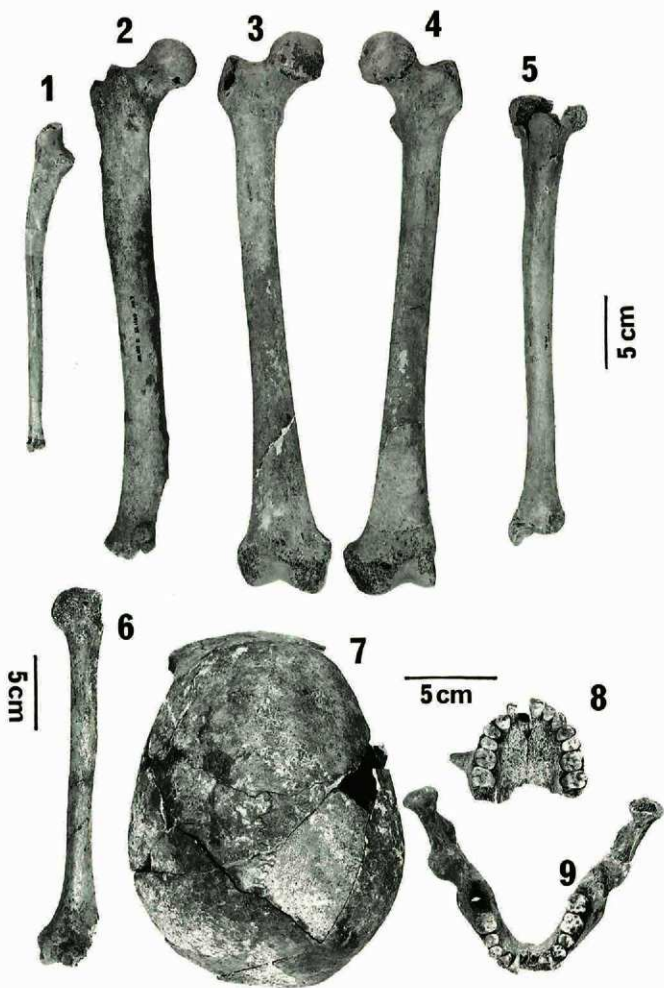
7 : 左・右下顎骨 (SK1692)

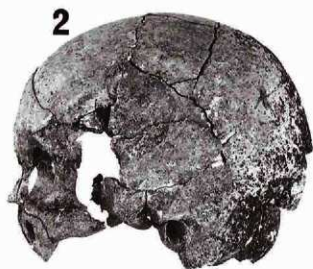
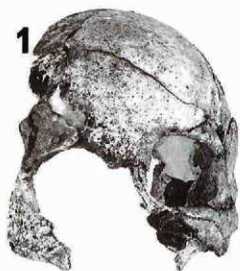


5cm



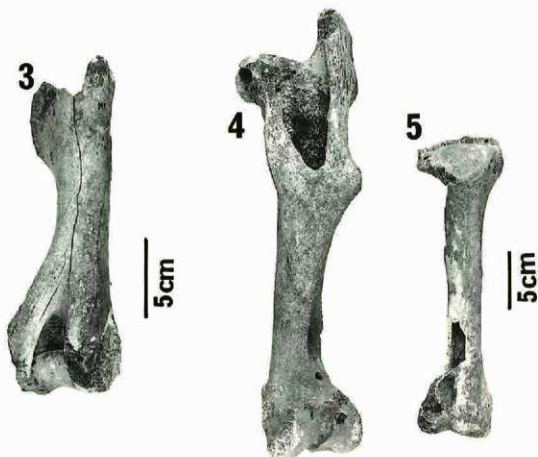
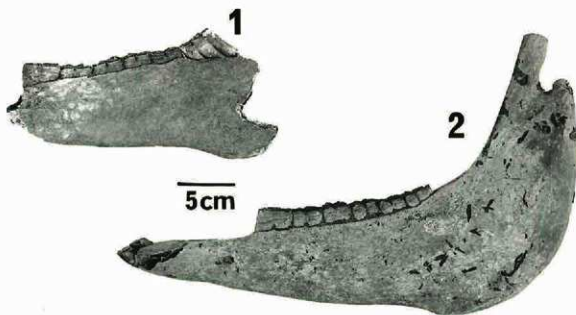


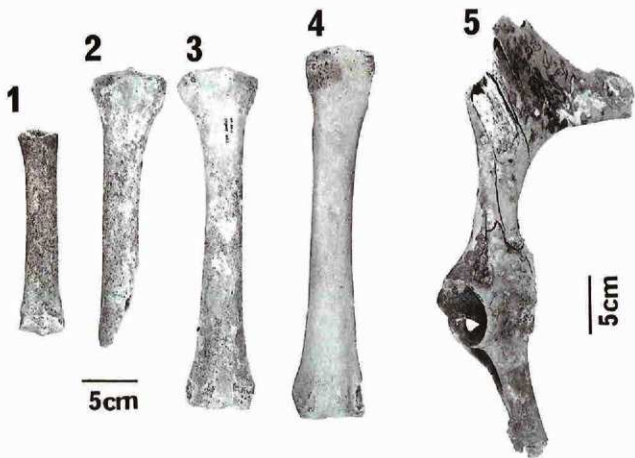


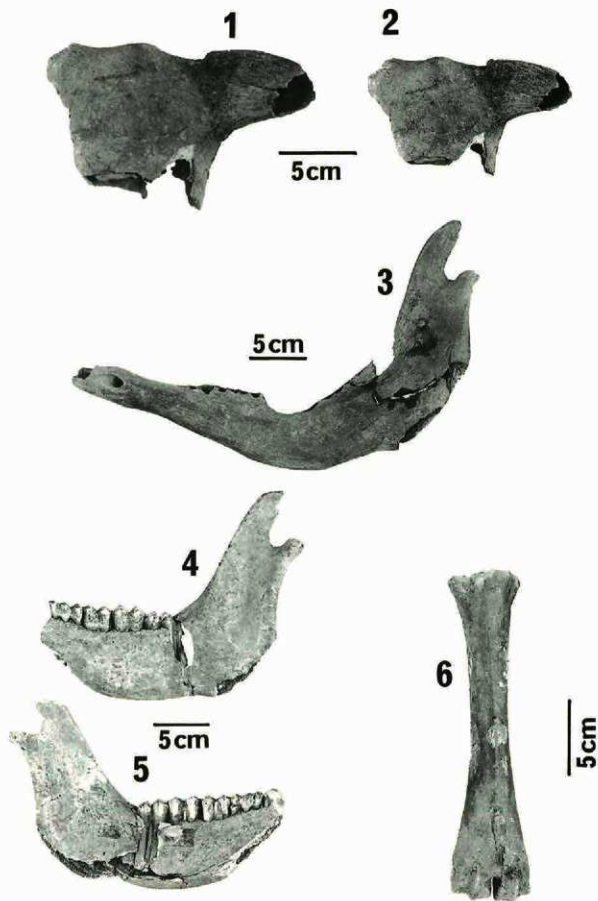


5 cm

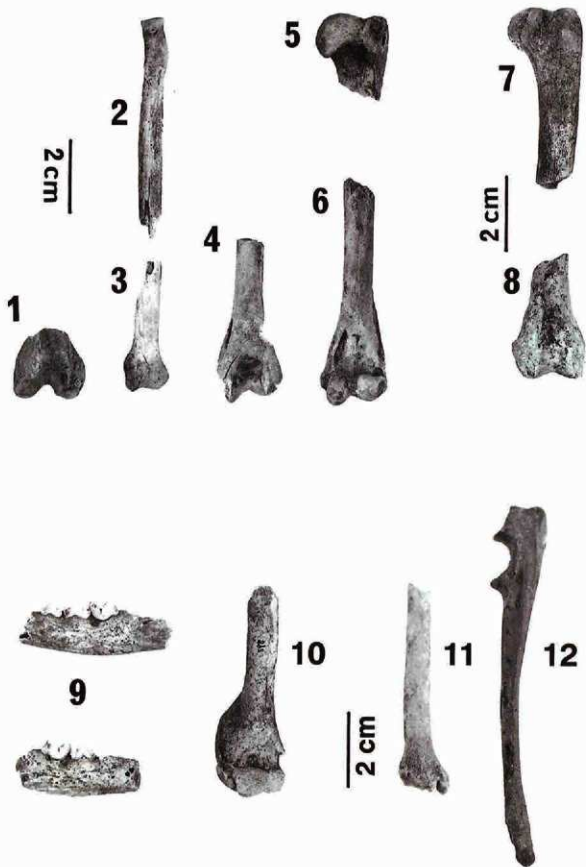


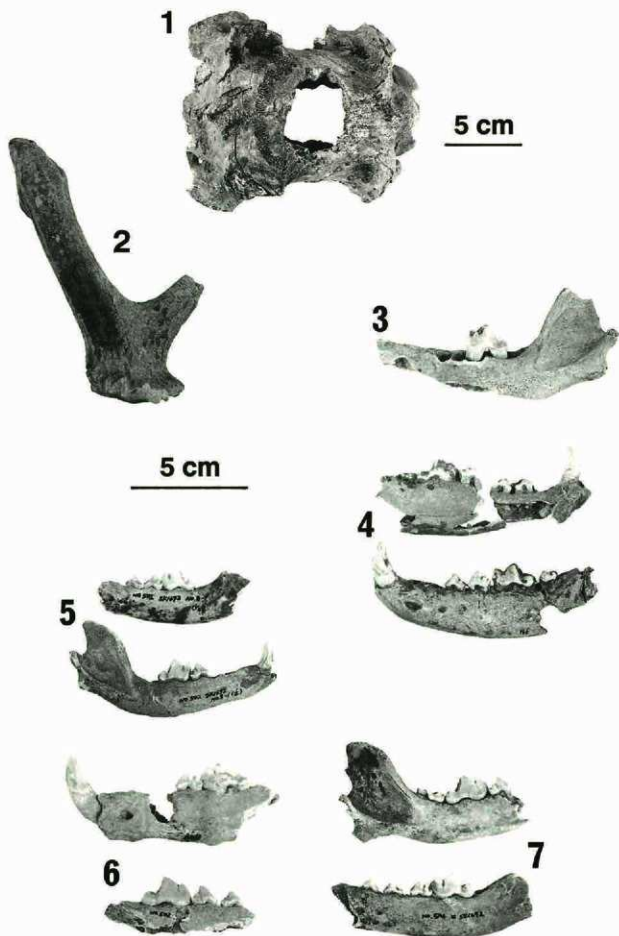












## 報告書抄録

ふりがな	じょうしんえつじどうしゃどうまいぞうふんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名	松原遺跡 古代・中世							
巻次	6							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	53							
編著者名	上田典男・青木一男・市川桂子・賛田明・西嶋洋子							
編集機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒387-0007 長野県更埴市屋代清水260-60 TEL.026-274-3891							
発行年月日	西暦 2000年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松原	長野県 長野市 松代町	20201	6177	36度 34分 40秒	138度 12分 25秒	19890401 ～ 19911003	46,000	道路 (上信越自動車道)建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松原	古墳	古墳時代後期	円墳3基	大刀・鉄鍬・馬具・ 勾玉・ガラス玉・土器		礎床下に石組排水溝7 体の人骨(追葬)		
	集落	古代 中世	竪穴式住居址 掘立柱建物址 道路址 溝址 井戸址 梁状遺構	土器 金属製品 土製品 骨角牙製品 木製品 石器・石製品		400余軒の竪穴住居址 鍵・サイコロ・鋤型 杏葉書・延喜通寶 貞観永寶の出土		
	墓	古代 中世	火葬墓 土坑墓 改葬墓 火葬施設	人骨 銭貨 五輪塔		斜面に立地する五輪塔 を伴う中世墳墓群		

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 53

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 6

—長野市内 その4—

松原 遺跡

古代・中世

本文編

発行 平成 12 年 3 月 30 日 発行

発行者 日 本 道 路 公 団

長 野 県 教 育 委 員 会

(財)長野県文化振興事業団

長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

TEL 026-274-3891 FAX 274-3892

印刷 信 毎 書 籍 印 刷 株 式 会 社